

## 流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書 7

一流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡（上層）・  
市野谷向山遺跡（上層）・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・  
西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第Ⅰ遺跡（上層）・  
十太夫第Ⅰ遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡—  
（第2分冊）

平成27年3月

独立行政法人 都市再生機構  
公益財団法人 千葉県教育振興財団

# 流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書 7

ながれやま いちの やいちくぼ いちの やなかじま  
一流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡（上層）・  
いちの やむこうやま いちの やたての おおくぼ  
市野谷向山遺跡（上層）・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・  
にしはつしし ごちようめ ひがしはつししろくちようめ だいいち  
西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第I遺跡（上層）・  
じゅうだ じゅうだいいち じゅうだ じゅうだいさん  
十太夫第I遺跡・十太夫第III遺跡一

（第2分冊）



## 第2分冊本文目次

第4章 市野谷向山遺跡	367
第1節 遺跡の概要	367
第2節 縄文時代	367
第3節 古墳時代	400
第4節 平安時代	414
第5節 中世～近世	416
第6節 旧石器時代(補遺)	420
第7節 まとめ	426
第5章 市野谷立野遺跡	428
第1節 遺跡の概要	428
第2節 旧石器時代	428
第3節 縄文時代	433
第4節 近世	495
第5節 まとめ	502
第6章 大久保遺跡	504
第1節 遺跡の概要	504
第2節 縄文時代	507
第3節 奈良時代	539
第4節 近世	540
第5節 まとめ	547
第7章 西初石五丁目遺跡	551
第1節 遺跡の概要	551
第2節 旧石器時代	551
第3節 縄文時代	561
第4節 近世	570
第5節 まとめ	578
第8章 東初石六丁目第1遺跡	580
第1節 遺跡の概要	580
第2節 縄文時代	582
第3節 近世	584
第4節 まとめ	584
第9章 十太夫第I遺跡	585
第1節 遺跡の概要	585
第2節 縄文時代	585
第3節 近世	590
第4節 まとめ	593
第10章 十太夫第III遺跡	594
第1節 遺跡の概要	594
第2節 旧石器時代	594
第3節 縄文時代	597
第4節 近世	612
第5節 まとめ	615
報告書抄録	巻末

# 挿図目次

## 第4章 市野谷向山遺跡

第4-1図	市野谷向山遺跡確認トレンチ配置図	368
第4-2図	市野谷向山遺跡遺構配置図	368
第4-3図	(3)SI001①	370
第4-4図	(3)SI001②	371
第4-5図	(3)SI001③	372
第4-6図	(3)SI001④	373
第4-7図	(3)SI002①	374
第4-8図	(5)SI002②	375
第4-9図	(5)SI002③	376
第4-10図	(6)SI002	377
第4-11図	土坑(縄文時代)	379
第4-12図	土坑出土遺物①	380
第4-13図	土坑出土遺物②	381
第4-14図	グリッド出土縄文土器①	385
第4-15図	グリッド出土縄文土器②	386
第4-16図	グリッド出土縄文土器③	387
第4-17図	グリッド出土縄文土器④	388
第4-18図	グリッド出土縄文土器⑤	389
第4-19図	グリッド出土縄文土器⑥	390
第4-20図	グリッド出土縄文土器⑦	391
第4-21図	グリッド出土縄文土器⑧	392
第4-22図	グリッド出土縄文土器⑨	393
第4-23図	グリッド出土縄文土器⑩	394
第4-24図	グリッド出土縄文土器⑪	395
第4-25図	グリッド出土縄文土器⑫・土製品	396
第4-26図	グリッド出土縄文土器⑬	398
第4-27図	グリッド出土縄文土器⑭	399
第4-28図	(1)SI001①	401
第4-29図	(1)SI001②	402
第4-30図	(1)SI002①	404
第4-31図	(1)SI002②	405
第4-32図	(2)SI001①	407
第4-33図	(2)SI001②	408
第4-34図	(4)SI001①	409
第4-35図	(4)SI001②	410
第4-36図	(5)SI001	411
第4-37図	(7)SI001	411
第4-38図	(7)SI002	412
第4-39図	(7)SI003	413

第4-40図	(6)SI001	415
第4-41図	土坑(平安時代以降)	416
第4-42図	溝状遺構	417
第4-43図	第3文化層第20ブロック器種別分布	422
第4-44図	第3文化層第20ブロック母岩別分布	423
第4-45図	第3文化層第20ブロック出土石器	424
第4-46図	単独出土石器	425

## 第5章 市野谷立野遺跡

第5-1図	市野谷立野遺跡調査状況	429
第5-2図	市野谷立野遺跡旧石器出土分布	430
第5-3図	旧石器時代出土石器(1)	431
第5-4図	旧石器時代出土石器(2)	432
第5-5図	市野谷立野遺跡上層確認トレンチと本調査区	434
第5-6図	市野谷立野遺跡上層遺構配置図	435
第5-7図	市野谷立野遺跡北東側遺構集中地点	436
第5-8図	市野谷立野遺跡南西側遺構集中地点	437
第5-9図	(4)SI011・(4)SP012①	438
第5-10図	(4)SI011・(4)SP012②	439
第5-11図	(16)SI001	440
第5-12図	(17)SI001	442
第5-13図	(3)SI001	443
第5-14図	(3)SI004①	444
第5-15図	(3)SI004②	445
第5-16図	(4)SI028A	446
第5-17図	(4)SI028B	447
第5-18図	(4)SI039	448
第5-19図	焼土遺構・炬穴	450
第5-20図	陥穴①	453
第5-21図	陥穴②	454
第5-22図	土坑①	456
第5-23図	土坑②	458
第5-24図	土坑③	459
第5-25図	その他遺構出土縄文土器・石器	460
第5-26図	縄群分布位置と立地状況	462
第5-27図	縄群分布(1) [縄分布・縄群ブロック位置図]	463
第5-28図	縄群分布(2) [燃系文系土器・条痕文系土器ブロック位置図]	463
第5-29図	縄群分布(3) [黒浜式・浮島式土器ブロック位置図]	464

第5-30回	磯群分布(4) [称名寺～堀之内式土器・加曾利B～安行式土器ブロック位置図] .....	464
第5-31回	磯群分布(5) [継接合状況・石器出土位置図] .....	465
第5-32回	磯群分布(6) [遺構分布・調査次区域] .....	465
第5-33回	磯群内出土縄文土器① .....	477
第5-34回	磯群内出土縄文土器② .....	478
第5-35回	磯群内出土縄文土器③ .....	479
第5-36回	磯群内出土縄文土器④ .....	480
第5-37回	磯群内出土縄文土器⑤ .....	481
第5-38回	磯群内出土縄文土器⑥ .....	482
第5-39回	磯群内出土縄文土器⑦ .....	483
第5-40回	磯群内出土縄文土器⑧・土製品 .....	484
第5-41回	磯群内出土縄文石器 .....	485
第5-42回	グリッド出土縄文土器① .....	490
第5-43回	グリッド出土縄文土器② .....	491
第5-44回	グリッド出土縄文土器③ .....	492
第5-45回	グリッド出土縄文土器④ .....	493
第5-46回	グリッド出土縄文石器 .....	494
第5-47回	(13)SD003・(1)SD001 .....	496
第5-48回	(13)SD001・(7)SD001 .....	497
第5-49回	(6)SD045 .....	497
第5-50回	シシバ .....	499
第5-51回	土坑・道路状遺構 .....	501
<b>第6章 大久保遺跡</b>		
第6-1回	大久保遺跡調査範囲と遺構の位置 .....	504
第6-2回	大久保遺跡遺構配置(西側) .....	505
第6-3回	大久保遺跡遺構配置(東側) .....	506
第6-4回	縄文時代住居跡(1) .....	508
第6-5回	縄文時代住居跡(2) .....	509
第6-6回	炉跡・焼土遺構・貯蔵穴 .....	511
第6-7回	陥穴(1) .....	513
第6-8回	陥穴(2) .....	515
第6-9回	土坑(1) .....	516
第6-10回	土坑(2) .....	517
第6-11回	土坑(3) .....	518
第6-12回	縄文土器(1) .....	521
第6-13回	縄文土器(2) .....	522
第6-14回	縄文土器(3) .....	524
第6-15回	縄文土器(4) .....	525
第6-16回	縄文土器(5) .....	526
第6-17回	縄文土器(6) .....	527
第6-18回	石器分布状況 .....	529

第6-19回	有掘石器出土状況 .....	530
第6-20回	グリッド出土石器(1) .....	532
第6-21回	グリッド出土石器(2) .....	534
第6-22回	グリッド出土石器(3) .....	535
第6-23回	グリッド出土石器(4) .....	537
第6-24回	奈良時代住居跡 .....	539
第6-25回	井戸 .....	541
第6-26回	野馬堀全体図 .....	542
第6-27回	野馬土手・堀(1) .....	543
第6-28回	野馬土手・堀(2) .....	545
第6-29回	野馬土手・堀(3) .....	546
第6-30回	近世の遺物 .....	547
第6-31回	野馬土手・堀の概略図 .....	549

## 第7章 西初石五丁目遺跡

第7-1回	西初石五丁目遺跡調査状況 .....	552
第7-2回	西初石五丁目遺跡調査範囲と遺構の位置 .....	553
第7-3回	第6地点器種別分布 .....	554
第7-4回	第6地点母若別分布 .....	555
第7-5回	第6地点出土石器(1) .....	556
第7-6回	第6地点出土石器(2) .....	557
第7-7回	旧石器時代の単独出土石器分布 .....	558
第7-8回	単独出土石器 .....	559
第7-9回	土坑 .....	561
第7-10回	縄文土器時期別分布状況 .....	562
第7-11回	第19次調査地点出土遺物(1) .....	564
第7-12回	第19次調査地点出土遺物(2) .....	565
第7-13回	第20次調査地点出土遺物 .....	566
第7-14回	縄文時代の石器分布 .....	568
第7-15回	縄文時代の石器 .....	569
第7-16回	野馬土手・野馬堀(1) .....	571
第7-17回	野馬土手・野馬堀(2) .....	574
第7-18回	野馬土手・野馬堀(3) .....	575
第7-19回	溝(20)SD003 .....	576
第7-20回	近世の出土遺物 .....	577

## 第8章 東初石六丁目第1遺跡

第8-1回	東初石六丁目第1遺跡調査状況 .....	580
第8-2回	東初石六丁目第1遺跡調査範囲と遺構の位置 .....	581
第8-3回	(1)SK001 .....	582
第8-4回	グリッド出土遺物分布 .....	583
第8-5回	グリッド出土遺物 .....	583

<b>第9章 十太夫第I遺跡</b>	
第9-1図 十太夫第I遺跡調査状況	586
第9-2図 十太夫第I遺跡調査範囲と遺構の位置	587
第9-3図 SK001・SK002	588
第9-4図 縄文時代の土器	589
第9-5図 縄文時代の石器	589
第9-6図 SD001	591
第9-7図 SD002・SD003・SD004	592
<b>第10章 十太夫第Ⅲ遺跡</b>	
第10-1図 十太夫第Ⅲ遺跡調査状況	595
第10-2図 十太夫第Ⅲ遺跡調査範囲と遺構の位置	596
第10-3図 旧石器時代の出土石器	597
第10-4図 (1)SI001検出状況・出土遺物(1)	598
第10-5図 (1)SI001出土遺物(2)	599
第10-6図 土坑検出状況・出土土器	601
第10-7図 糞集中出土土器	602
第10-8図 糞集中遺物分布	604
第10-9図 糞集中出土石器	605
第10-10図 グリッド出土土器 東側	607
第10-11図 グリッド出土土器 西側(1)	609
第10-12図 グリッド出土土器 西側(2)	610
第10-13図 縄文土器時期別分布	611
第10-14図 単独出土石器	612
第10-15図 (1)SD001・(1)SD002	613
第10-16図 (3)SD001・(5)SD001・(7)SD001	614

## 目 次

<b>第4章 市野谷向山遺跡</b>	
第4-1表 古墳～平安時代 出土土器観察表	418・419
第4-2表 第3文化層第20ブロック(今回報告分)	421
第4-3表 第3文化層第20ブロック(今回報告分+報告書5掲載分)	421
<b>第5章 市野谷立野遺跡</b>	
第5-1表 雑群1～8遺物組成表	468
第5-2表 雑群1遺物組成表	469
第5-3表 雑群2遺物組成表	470
第5-4表 雑群3遺物組成表	471
第5-5表 雑群4遺物組成表	472
第5-6表 雑群5遺物組成表	473
第5-7表 雑群6遺物組成表	474
第5-8表 雑群7遺物組成表	474
第5-9表 雑群8遺物組成表	475
<b>第6章 大久保遺跡</b>	
第6-1表 層序別貝殻個体数	519
第6-2表 マガキの層序別平均長さ	519
第6-3表 大グリッド別縄文土器の出土点数と概要	528
第6-4表 縄文土器	528
第6-5表 出土石器属性表	538
第6-6表 奈良時代の土師器・須恵器	540
<b>第7章 西初石五丁目遺跡</b>	
第7-1表 旧石器時代の石器組成表	559
第7-2表 旧石器時代の石器属性表	560
第7-3表 縄文土器時期別出土量	567
第7-4表 縄文時代の石器組成表	569
<b>第9章 十太夫第I遺跡</b>	
第9-1表 遺構一覧	588
第9-2表 石器組成表	590
<b>第10章 十太夫第Ⅲ遺跡</b>	
第10-1表 糞集中石器組成表	606
第10-2表 縄文土器時期別出土量	611

# 図版目次

## 第1章 はじめに

- 図版1-1 遺跡周辺航空写真(昭和22年撮影)  
図版1-2 遺跡周辺航空写真[北西側] (昭和48年撮影)  
図版1-3 遺跡周辺航空写真[南西側] (昭和48年撮影)

## 第2章 市野谷芋久保遺跡

- 図版2-1 第1文化層環状ブロック群西側北から  
第1文化層環状ブロック群東側北北東から  
図版2-2 第1文化層第1～3・6・9・10ブロック北西から  
第1文化層第2・3・6・9・10・13～15ブロック西から  
第1文化層第9・13～18ブロック南西から  
第1文化層第15ブロック南西から  
第1文化層第4～7・11～13・19ブロック東から  
第1文化層第6・7・11・12・19ブロック北西から  
第1文化層環状ブロック群(中央南北セクション)北東から  
図版2-3 第2文化層第20・21ブロック(下部)第3文化層第30・31  
ブロック(上部)北東から  
第2文化層第20・21ブロック(下部)第3文化層第30・31  
ブロック(上部)南南東から  
第2文化層第20ブロック(下部)第3文化層第30ブロック  
(上部)東から  
第2文化層第21ブロック(下部)第3文化層第31ブロック  
(上部)南東から  
第2文化層第22ブロック西側南西から  
第2文化層第22ブロック東側南から  
第2文化層第23ブロック南から  
第2文化層第24ブロック北から  
図版2-4 第3文化層第25～29ブロック南東から  
第3文化層第25ブロック南西から  
第3文化層第26ブロック北から  
第3文化層第26ブロック北東から  
第3文化層第26ブロック北西から  
第3文化層第27ブロック北東から  
第3文化層第28・29ブロック北北西から  
第3文化層第29ブロック北西から  
図版2-5 第2文化層第20・21ブロック(下部)第3文化層第30・31  
ブロック(上部)北から  
第3文化層第33ブロック北から  
第3文化層第34・35ブロック西から

- 第3文化層第34ブロック南から  
第3文化層第37・38ブロック南東から  
第3文化層第41ブロック西から  
第3文化層第42ブロック南東から  
第4文化層第43ブロック南東から  
図版2-6 (3)SI008北から、(3)SI009バルトセクション北東から、  
(20)SI001東から、(12)SI001出土状況南から、(13)SI001西  
から、(3)SK007東から、(1)SK002、(1)SK001東から  
図版2-7 (8)SK001、(18)SK002北から、(10)SK002南東から、  
(10)SK001東から、(20)SK002、(12)SK009東から、  
(12)SK004南東から、(12)SK003北西から  
図版2-8 (12)SK005北西から、(12)SK005南から、(12)SK013確認  
状況、(12)SK006西北西から、(12)SK002北西から、  
(12)SK007北西から、(10)SK003南西から、(10)SK005  
南から  
図版2-9 (10)SK004南から、(13)SK020東から、(13)SK025北から、  
(13)SK024西から、(3)SK017セクション面南西から、  
(3)SK016東から、(3)SK018セクション面南東から、  
(3)SK010北から  
図版2-10 (3)SK011セクション面南から、(3)SK013北から、  
(3)SK012北から、(3)SK015東から、(3)SK014東から、  
(18)SK003南西から、(18)SK004東から、(18)SK005西か  
ら  
図版2-11 (18)SK001東から、(12)SK001南東から、(12)SK020セク  
ション南から、(12)SK021セクション南から、(12)SK012  
北から、(12)SK011セクション東から、(12)SK022北から、  
(12)SK010北から  
図版2-12 (12)SK008北から、(13)SK028南西から、(13)SK009北から、  
(13)SK005・SK008北北西から、(13)SK005・SK008セクシ  
ョン西から、(13)SK021遺物出土状況北東から、(13)SK006  
東から、(13)SK002・SK003西から  
図版2-13 (13)SK004南から、(13)SK026東から、(13)SK001西から、  
(1)SL006第8トレンチ内焼土遺構西から、(1)SD004第1  
トレンチ東から、(8)SD001第12トレンチ、(12)SD001第2  
トレンチ南東から、(10)SD001第20トレンチ南東から  
図版2-14 (10)SD002東から、(16)SD001・002西側南から、  
(16)SD002東側西から、(1)SK003南から、(16)SK001シ  
穴列北から、(12)SX001南東から、(12)SX001北西から、  
(12)SX001(g)セクション北から

図版2-15 (12)SX001・SD001切り合い関係セクション東から、  
(20)SK001、(12)SK017西から、(12)SK019東から、  
(12)SK018北から、(12)SK016北から、(12)SK014北から、  
(12)SK015北から

図版2-16 第1文化層環状ブロック群出土石器(1)

図版2-17 第1文化層環状ブロック群出土石器(2)

図版2-18 第1文化層環状ブロック群出土石器(3)

図版2-19 第1文化層環状ブロック群出土石器(4)

図版2-20 第1文化層環状ブロック群出土石器(5)

図版2-21 第1文化層環状ブロック群出土石器(6)

図版2-22 第1文化層環状ブロック群出土石器(7)

図版2-23 第1文化層環状ブロック群出土石器(8)

図版2-24 第2文化層出土石器

図版2-25 第3文化層出土石器(1)

図版2-26 第3文化層出土石器(2)

図版2-27 第3文化層出土石器(3)

図版2-28 第3文化層(4)・第4文化層・第5文化層出土石器

図版2-29 旧石器時代単独出土石器 縄文時代遺構出土石器

図版2-30 グリッド出土石器

図版2-31 市野谷芋久保遺跡グリッド出土縄文石器

市野谷中島遺跡遺構・グリッド出土縄文石器

図版2-32 縄文土器1

図版2-33 縄文土器2

図版2-34 縄文土器3

図版2-35 縄文土器4

図版2-36 縄文土器5

図版2-37 縄文土器6

図版2-38 縄文土器7

### 第3章 市野谷中島遺跡

図版3-1 (2)SP005南から、(7)SK002東から、(1)SI001北東から、  
(7)SK001南から、(3)SI001東から、(1)SI001カマド右袖部  
北から、(1)SI001カマド左袖部南から、(1)SI002遺物出土  
状況北から

図版3-2 (1)SI002カマド遺物出土状況北西から、(1)SI002カマド遺  
物出土状況北西から、(2)SI003南西から、(2)SI003カマド  
南西から、(2)SK004東から、(2)SD002西から、(4)SD001  
セクション、(7)SD004トレンチ4溝掘方南から

図版3-3 遺構・グリッド出土縄文土器

図版3-4 遺構出土土器

### 第4章 市野谷向山遺跡

図版4-1 (3)SI001南東から、(5)SI002東から、(6)SI002南から、

(5)SI002遺物出土状況東から、(7)SK002北東から、

(7)SK001遺物出土状況西から、(7)SK001西から、

(1)SK003南から

図版4-2 (1)SK007西から、(2)SK003北西から、(6)SK002南西から、  
(6)SK003南東から、(7)縄文遺物集中地点(47U・72・73・  
82・83)出土状況南から、(1)SI001北西から、(1)SI002南  
東から、(2)SI002北西から

図版4-3 (4)SI001西から、(5)SI001南西から、(7)SI001南南西から、  
(7)SI002西から、(7)SI003西から、(6)SI001南西から、  
(6)SI001カマド西から、(6)SK001南から

図版4-4 (6)SK004南から、(1)SK004南西から、(1)SK005西から、  
(1)SK006南から、(2)SD002 2ブロック地点北西から、  
(2)SD002 3ブロック地点南東から、(2)SD002セクショ  
ン北西から、(6)SD001北西から

図版4-5 旧石器時代(第20ブロック・単独出土石器)

縄文時代遺構出土石器

図版4-6 縄文時代グリッド出土石器

図版4-7 古墳時代・平安時代遺構出土石器

図版4-8 縄文土器1・土製品

図版4-9 縄文土器2

図版4-10 縄文土器3

図版4-11 縄文土器4

図版4-12 縄文土器5

図版4-13 縄文土器6

図版4-14 古墳時代 竪穴住居跡出土遺物1

図版4-15 古墳時代 竪穴住居跡出土遺物2

図版4-16 古墳時代 竪穴住居跡出土遺物3

### 第5章 市野谷立野遺跡

図版5-1 40BB-13尖頭器出土状況北東から、40Y-66付近南東から、  
40Z-66付近東から、44Z-54付近南から、40Y-98付近北  
西から、45BB-20付近西から、セクション(44A-80)南か  
ら、セクション(45BB-20付近)西から

図版5-2 (4)SI011・SP012北東から、(16)SI001北東から、(17)SI001  
西から、(3)SI001北から、(3)SI004東から、(4)SI028・039  
北から、(5)SK024焼土西から、(4)SK036南から

図版5-3 (4)SK016東から、(4)SK026B東から、(4)SK026D南から、  
(4)SK026A北から、(4)SK027・SK037・SK038西から、  
(4)SK042西から、(15)SK001北西から、(9)SK001東から

図版5-4 (2)SK002北西から、(13)SK003北東から、(9)SK002南から、  
(4)SK010西から、(12)SK002南西から、(12)SK001南東から、  
(3)SK002東から、(3)SK003東から

図版5-5 (15)SK002東から、(8)SK001北西から、(13)SK001南から、

- (13)SK002西から、(13)SK004～SK006・SD002北西から、  
 (13)SK007南東から、(13)SK011南から、(13)SK008～SK010  
 南から  
 図版5-6 (4)SK013南西から、(4)SK014・SK015南西から、  
 (4)SK016・SK017西から、(4)SK023南西から、(4)SK022  
 南西から、(4)SK018・SK023南西から、(4)SK019南西から、  
 (4)SK021南西から  
 図版5-7 (4)SK020南西から、(15)縄文後期遺物集中地点南東から、  
 4次調査空中写真(41X・41Y付近)磯群南西から、4次調  
 査空中写真(41Y付近)磯群南から、4次空中写真(41X・  
 41Y付近)磯群北西から、  
 図版5-8 坂川方面から8次調査(40X・40Y付近)磯群を望む 南西  
 から、8次調査(40X・40Y付近)磯群から坂川を望む 北  
 から、8次調査(40X・40Y付近)磯群から坂川を望む 北  
 東から、8次調査(40X・40Y付近)磯群から坂川を望む  
 北東から、8次調査(41Y-93を中心)磯群南東から  
 図版5-9 (13)SD003南東から、(7)SD001野馬場境界線、(1)SD001南  
 東から、(13)SD001野馬場3南東から、(6)SK046東から、  
 (6)SD045サブトレB北西から、(6)SK047南から、  
 (6)SK048南東から  
 図版5-10 (6)SK055北から、(6)SK054北から、(6)SK050セクシ  
 ョン南から、(6)SK049東から、(6)SK051南から、(6)SK052  
 北から、(6)SP053A～SP053G東から、(4)SD009西から  
 図版5-11 旧石器時代単独出土石器、縄文時代遺構出土石器  
 図版5-12 縄文時代磯群出土石器・グリッド出土石器  
 図版5-13 遺構出土縄文土器1  
 図版5-14 遺構出土縄文土器2  
 図版5-15 遺構出土縄文土器3・磯群内出土縄文土器1  
 図版5-16 磯群内出土縄文土器2・土製品  
 図版5-17 グリッド出土縄文土器

## 第6章 大久保遺跡

- 図版6-1 調査前風景、(4)SI018 北から、(2)SI013 西から、  
 (2)SI013-1埋裏出土土状況  
 図版6-2 (4)SK023、(4)SK019、(4)SK021、(4)SK031、(4)SK022、  
 (4)SK030、(3)SK016、(1)SK002  
 図版6-3 (4)SK037、(4)SK036、(1)SK011、(1)SK009、(1)SK004、  
 (1)SK003、(6)SK001、(4)SK038、有掘石器 (4)SK038付近  
 図版6-4 (1)SK008、(1)SK007、(1)SK005、(1)SK006、(4)SI020 西  
 から、(4)SK025、(4)SE017 北から  
 図版6-5 (4)SD015B 角部分 南から、(4)SD015B 角部分 北か  
 ら、(4)SD015B A-A'北西から、(4)SD015B C-C'

- 南東から  
 図版6-6 (2)SA015A D-D'北西から、(2)SA015A E-E'北西  
 から、(2)SA015B 陶器出土状況、(1)SD014 南西から  
 図版6-7 遺構出土遺物1  
 図版6-8 遺構出土遺物2、グリッド出土縄文土器1  
 図版6-9 グリッド出土縄文土器2  
 図版6-10 グリッド出土縄文土器3  
 図版6-11 グリッド出土縄文土器4  
 図版6-12 グリッド出土縄文土器5  
 図版6-13 グリッド出土石器1  
 図版6-14 グリッド出土石器2  
 図版6-15 (4)SK029出土具・奈良時代・近世遺物

## 第7章 西初石五丁目遺跡

- 図版7-1 (18)調査前風景 北東から(平成18年6月)、(20)調査前風景  
 南東から(平成23年4月)、土層断面 23F-44グリッド、  
 第6地点 北から、第6地点 東から、(19)SK001 西か  
 ら、(19)SK002 北から、(20)SK001 南西から  
 図版7-2 トレンチ0 (20)SD001・(20)SD002 南西から、  
 トレンチ3 (20)SD002 北から、(20)SD003 南から、  
 トレンチ0 (20)SD001 南東から、トレンチ3  
 (20)SD002 南東から、トレンチ6 (20)SD002 北西から、  
 トレンチ6 (20)SD001 北東から  
 図版7-3 第6地点出土石器、単独出土石器  
 図版7-4 縄文土器(1)  
 図版7-5 縄文土器(2)、縄文時代の石器、近世の出土遺物

## 第8章 東初石六丁目第1遺跡

- 図版8-1 (1)調査前風景、(1)SK001 北から、  
 (1)SD001 北東から、(1)SD001 北東から、  
 (3)SD001 第2地点 南東から、  
 (3)SD001 第3地点 北西から、(5)SD001 南から  
 図版8-2 東初石六丁目第1遺跡出土遺物  
 十太夫第1遺跡出土遺物

## 第9章 十太夫第1遺跡

- 図版9-1 SK001 南西から、SD001・SK002 北東から、  
 SD001 北東から、SD002 19GGグリッド 東から、  
 SD002 20HH-00グリッド付近 南東から、  
 SD002 B-B'東壁、SD002・SD003・SD004 北西から、  
 SD003・SD004 南西から

## 第10章 十太夫第Ⅲ遺跡

図版10-1 (1)調査前風景、(7)SK001 東から、(5)SD001 南西から、  
(7)SD001 西から、(7)SD001 東から

図版10-2 旧石器時代 単独出土石器、  
縄文時代 (1)SI001 出土遺物

図版10-3 (3)SK001、(7)SK001、縄集中出土石器、縄集中出土縄

図版10-4 縄集中出土石器、単独出土石器

図版10-5 グリッド出土石器 東側

図版10-6 グリッド出土石器 西側

## 第4章 市野谷向山遺跡

### 第1節 遺跡の概要 (第4-1・2図)

市野谷向山遺跡の下層については既に報告済みである<sup>1)</sup>。今回は第1次～第7次調査の上層について報告を行う。遺構・トレンチ配置図は第4-1・2図のとおりである。なお、市野谷向山遺跡は遺跡全体の3/4程が本事業の調査範囲となる。西側1/4程は運動公園周辺地区土地区画整理事業として一部発掘調査が行われている。

市野谷向山遺跡は流山市のほぼ中央、つくばエクスプレス線の流山おおたかの森駅から南西方向へ900m程の距離にあり、江戸川の支流、坂川によって開析された小支谷をのぞむ標高16m～18mの台地上に立地する。調査区北東端の標高が最も高く、南西端で比高2m程の浅い谷を挟み、更に南西へと台地が続いていく。本遺跡から検出された遺構は、谷以東に集中している。その内訳は、縄文時代の竪穴住居跡3軒(小竪穴を含む)、土坑7基、古墳時代中期の竪穴住居跡8軒、平安時代の竪穴住居跡1軒、土坑2基、中世の焼土遺構1基、土坑1基、近世の溝状遺構1条、時期の特定できない土坑1基である。

坂川の源流域にあたる本遺跡周辺には、旧石器時代及び縄文時代から近世に至る遺跡が多く所在している。旧石器時代については既に報告されているため<sup>1)</sup>、縄文時代以降の周辺環境を概略する。本遺跡の北東に隣接する市野谷立野遺跡からは縄文時代の礫群が、坂川を挟んで本遺跡の北に立地する市野谷二反田遺跡からは縄文時代後期の遺構・遺物が検出されている。縄文時代晩期中頃までは、増減を繰り返しながらも、途切れることなく遺跡が見つかったが、それ以降弥生時代にかけての遺構は非常に希薄であり、本遺跡からも見つからない。古墳時代前期になると、市野谷二反田遺跡の北側の台地で大規模な集落が営まれ始める。市野谷宮尻遺跡はその中心的な集落と思われ、集落は徐々に東側へと広がっていく。古墳時代中期には市野谷入台遺跡の東側に拠点を移し、その後台地上から姿を消してしまう。本遺跡の古墳時代中期の竪穴住居跡は、市野谷入台遺跡により近い北側の台地平坦部に集中する傾向がある。古墳時代後期以降、奈良・平安時代の集落拠点は、本遺跡の西方にある加遺跡群に置かれるようである。

注1 新田浩三・落合章雄 2011『流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書5—流山市大久保遺跡(下層)・市野谷向山遺跡(下層)・東初石六丁目第1遺跡(下層)・東初石六丁目第2遺跡・十太夫第II遺跡』  
新田浩三 2013『流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書6—流山市市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡— 旧石器時代編』

### 第2節 縄文時代

#### 1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は小竪穴も含め、3軒検出された。調査区の中央、台地平坦面に点在している。

#### (3)SI001 (第4-3～6図、図版4-1・8・9)

48S-10グリッド周辺に位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-46°-Wである。規模は長軸5.90m、短軸3.92m、確認面からの深さ8cm～16cmを測る。床面は平坦で、硬化面は見られない。炬は北西と中央やや南の2か所から検出された。北西の炬は0.80m×0.56m、深さ6cm、中央の炬は0.67m×



第4-1図 市野谷向山遺跡確認トレンチ配置図



第4-2図 市野谷向山遺跡遺構配置図

0.50m、深さ11cmである。ピットは5基確認され、住居の主軸上に位置するP1とP4が柱柱穴と思われる。深さはP1が35cm、P4が32cmである。P2の深さは46cm、P3は57cm、P5は42cmとP1、P4に比べてやや深く、何らかの施設と思われる。覆土は暗褐色土を主体とする。本住居跡の時期は出土遺物から縄文時代前期、黒浜期と思われる。

**出土遺物** 66点を図示した。1は関山Ⅱ式土器か。半截竹管による鋸歯文を描く。

2～6は「有尾系土器」である。2は平縁深鉢で、口縁下に2列の爪形文を廻らし、その下に爪形文による菱形文を施す。3は波状口縁深鉢で、口縁下と頸部に爪形文を廻らせ、その間に爪形文による菱形文を描く。4・5は爪形文による菱形文を施文するもの、6はくびれ部に鈎状の隆線を貼付したものである。

7～13は同一個体で、大木系土器と脈絡を通じるものと考えられる。波状口縁深鉢で、波底部に突起を有し、地文縄文2段LRを施文後、くびれ部に6本一組の沈線を廻らせている。

14～66は黒浜式土器である。14・15は同一個体で、口縁下に環状末端によるループ文を3段ないし4段重畳施文し、口縁以下は地文縄文2段RLを施す。16～24・39・40は地文として無節縄文を施したものである。使用原体は16～19・21～24・39・40がL、20のみがRを用いる。25～38・41は地文として単節縄文を施したものである。使用原体は26・27・31・34～37がRL、30・32・38・41がLR、25・28・29・33はLRとRLを用いた羽状施文である。42は地文として複節縄文RLRを施したものである。43～65は附加条縄文を地文とする。使用原体は51が（軸不明+L1本・R1本）、45・52・53・60・65が（軸不明+R2本）、43・46～50・54・56・57・59が（軸不明+L2本）、44・58・61が（軸LR+r2本）もしくは直前段台然か。63が附加条第3種を用いる。55は原体を明らかにできなかった。66は台付土器の台部で、残存高3.7cm、裾部径6.5cm、台部より上の器形は不明である。

(5)SI002 (第4-7～9図、図版4-1・5・8・9)

47R-38グリッド周辺に位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-27°-Eである。規模は長軸4.42m、短軸4.12m、確認面からの深さ21cm～24cmである。床面は中央がやや窪みが、硬化面は見られない。炬は中央に設置される。平面形は0.73m×0.60mの楕円形で、深さは19cmである。ピットは壁際から7基、炬に寄った位置から2基、計9基が検出された。深さは、最も浅いP5で19cm、最も深いP1で30cmである。覆土は暗褐色土を主体とする。

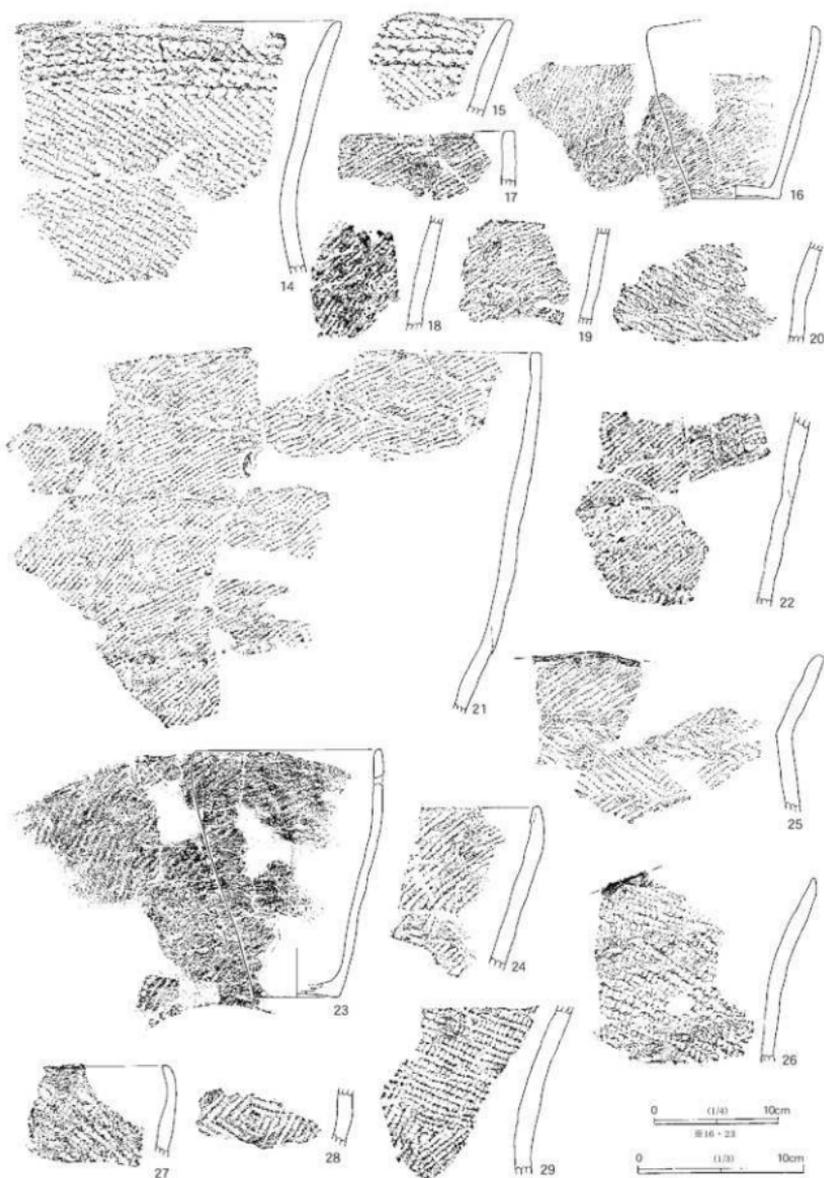
**出土遺物** 21点を図示した。1～14は加曽利EⅢ式古段階に位置づけられる。1～5は「意匠充填系土器」で、1は浮文系、それ以外は沈文系である。器形的にはいずれも瓢形深鉢となる。1は口径24.8cm、残存高18.6cmを測る。口縁は小波状4単位を呈する。口縁下に第一次区画文の隆線を貼付し、主文様は隆線で大柄渦巻文を描く。各主文様間には副文様の略短冊状文を隆線で描く。意匠内には2段RLを充填する。

2～5は同一個体となる。口縁は波状4単位を呈し、口縁下に第一次区画文の効果をなす沈線を引くが、波頂部で途切れ、全周はしない。主文様に右巻きの大柄渦巻文、副文様にU字状文を描く。意匠内には2段RLを充填し、磨消縄文を構成するが、口縁部は無文帯とせず、地文縄文となる。

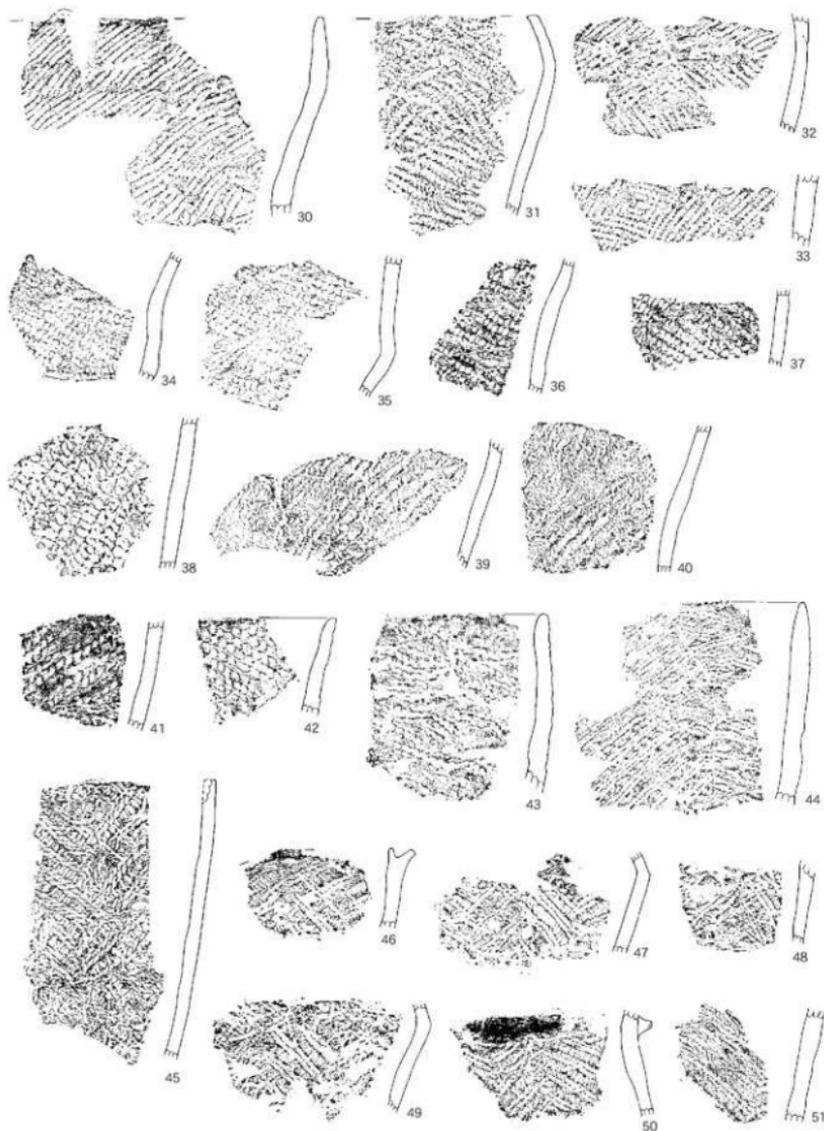
6も波状口縁で、口縁下に第一次区画文の沈線を引き、主文様が大柄渦巻文である点や、2段RLを充填して磨消縄文を構成する点など共通点が多い。ただし、6は口縁部は無文帯とする点が異なっている。

7は「横位連携縹線土器」である。波状口縁を呈し、口縁下に第一次区画文としての沈線を引くが、波頂部で途切れ、全周はしない。U字状文を施し、磨消縄文を構成する。縄文は2段LRを羽状施文する。



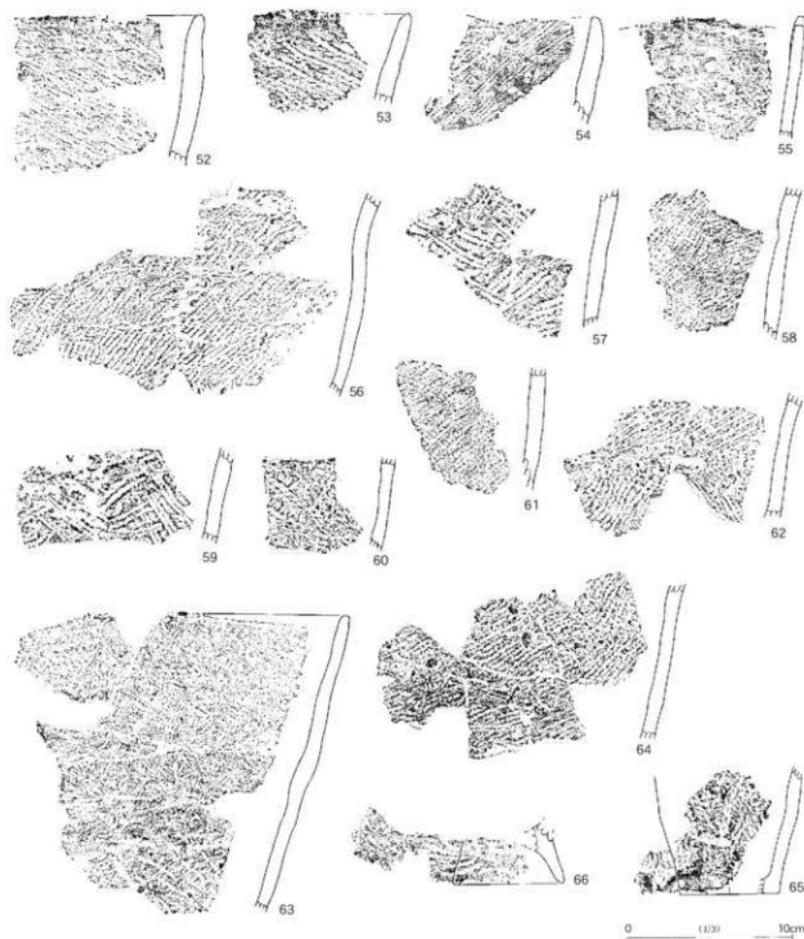


第4-4図 (3)SI001②



第4-5図 (3)SI001③

0 (1/30) 10m

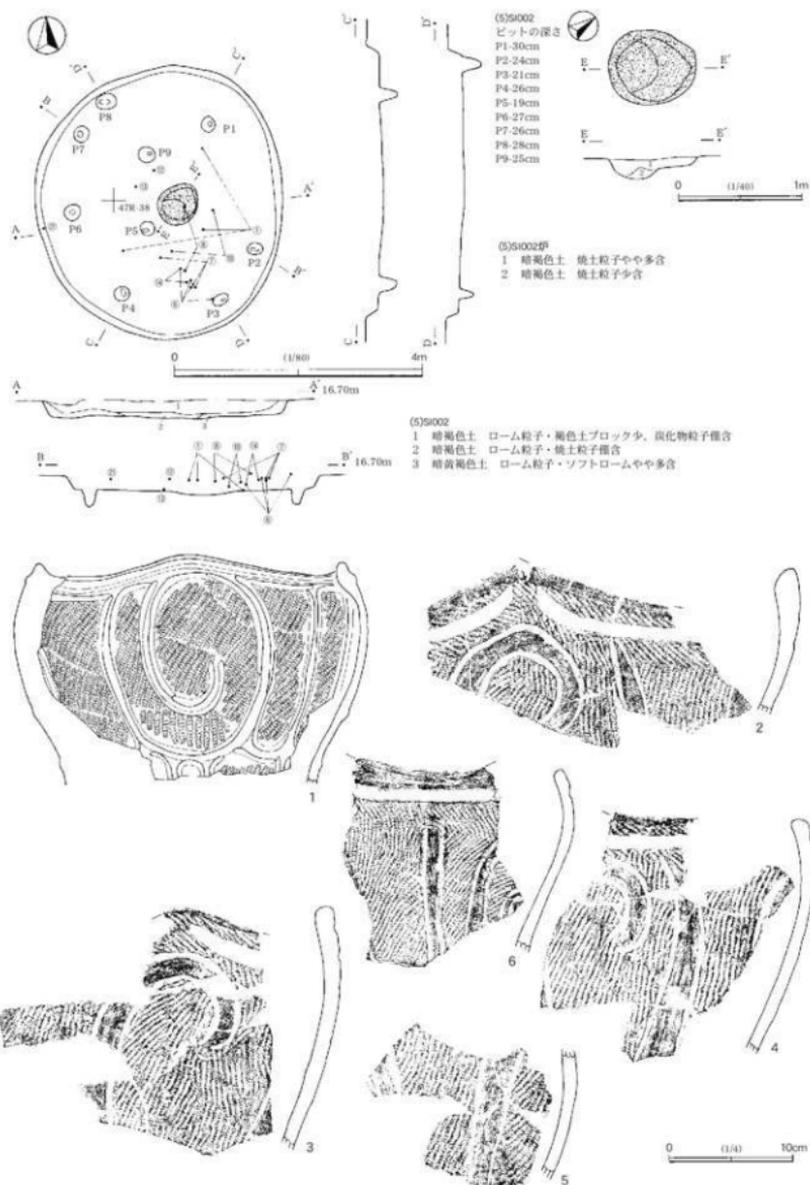


第4-6図 (3)SI001④

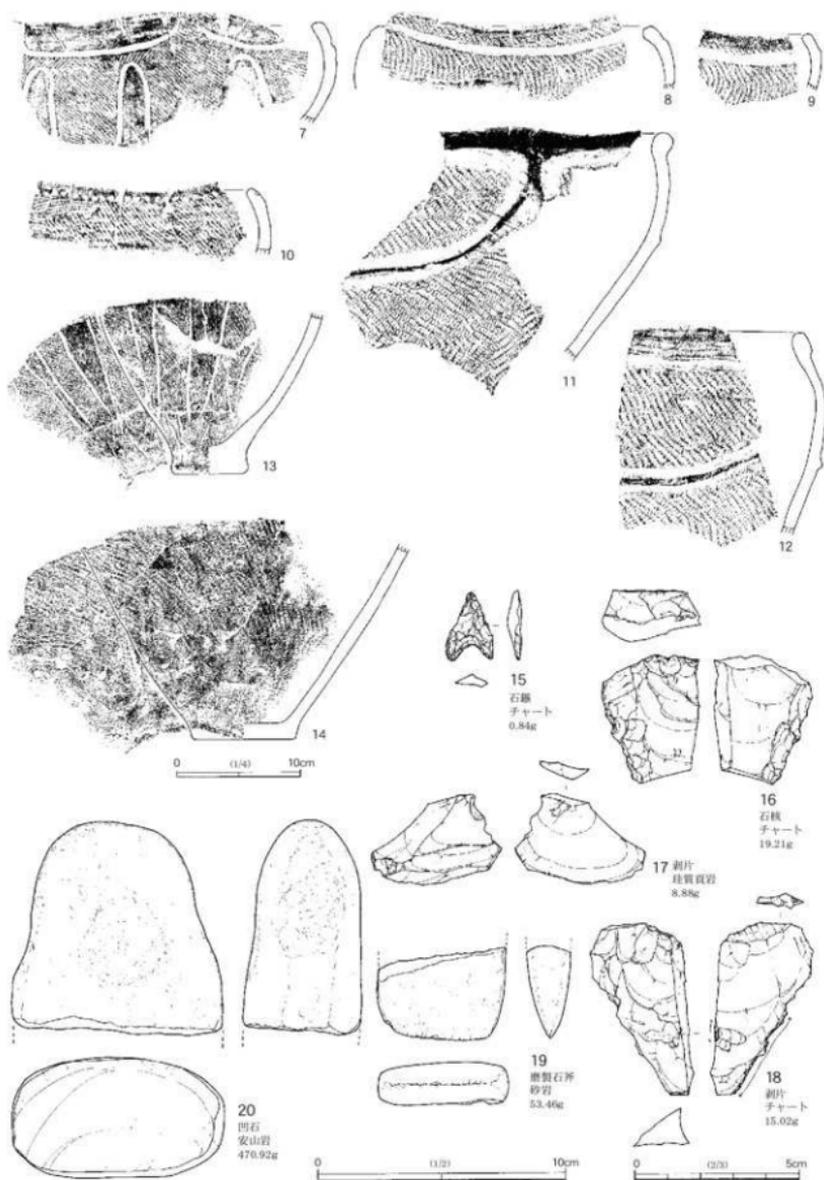
8～10はそのほかの類型で、8・9は同一個体である。地文縄文2段RLを施文後、口縁下に1条の沈線を引く。10は地文縄文1段Lを施文後、口縁下に円形刺突列を施す。

11・12は「懸華状連接区画文土器」で、同一個体である。器形的には平縁のキャリパー形深鉢と変わらない。主文様は隆線による円文で、その両脇に副文様の下向き弧線文を隆線で施し、2段RLを充填する。

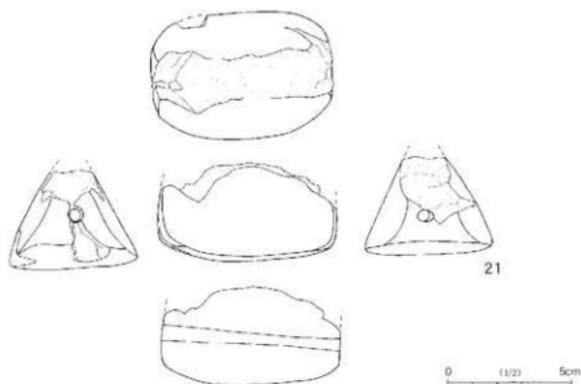
13・14は底部である。13は弧形深鉢で、「逆ランブシェード形」を呈する。文様は地文縄文2段LR(前々段多条)施文後、沈線を垂下して胴部磨消懸垂文を構成する。残存高13.1cm、底径6.2cmを測る。14も「逆



第4-7図 (5)SI002①



第4-8図 (5)SI002②



第4-9図 (5)SI002③

ランプシェード形]を呈すると思われる。区画文等は見られず、地文縄文2段LRを施すのみである。残存高15.9cm、底径8.4cmを測る。

15はチャート製の石鏃である。脚部の挟りは深い。左右の脚部が非対称であり、右脚部が細い。右側面に最終調整剥離があることから、右側面側に再生加工が行われたものと思われる。16はチャート製の石核である。厚みのある剥片を素材として、表面右上部と裏面右側から小型の剥片が剥離されている。削器の可能性もある。17は珪質頁岩製の剥片である。末端部が肥大する横長剥片である。18はチャート製の微細剥離痕のある剥片である。縦長剥片を素材として、裏面右下部に微細剥離痕が見られる。19は砂岩製の磨製石斧である。刃部のみが残存品であり全体形状が不明な点があるが、両側縁が角張っていることから、おそらく定角式石斧と思われる。20は安山岩製の凹石である。大型の扁平な楕円形礫を素材として、敲打により表裏両面の平坦面中央部と両側縁部の4か所に凹み痕が見られる。平坦面は研磨されている。下部は破損している。

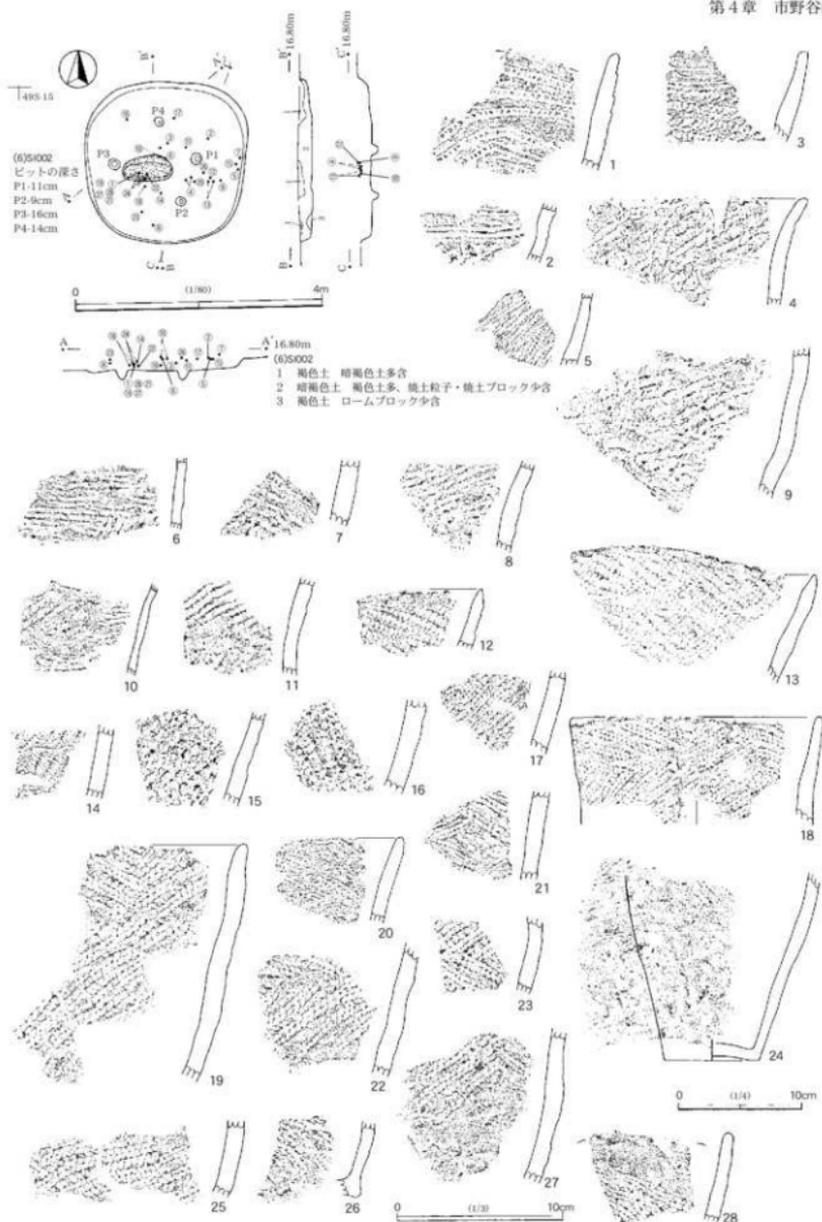
21は三角錐形土製品である。稜部など一部を欠くが、ほかは残存する。形状は三角柱の五面体で、長軸方向に直径5mmの貫通孔を穿つ。長さ73mm、高さ40mm、幅52mmを測る。全面良く磨かれているが、文様は施されていない。

#### (6)SI002 (第4-10図、図版4-1・8・10)

49S-15グリッドに位置する小竪穴である。平面形は一辺2.53mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは15cmと浅い。床面はほぼ平坦で、硬化面は見られない。炬は中央西寄りに設置される。平面形は0.80m×0.63mの東西に長い楕円形で、深さは6cmである。柱穴と思われるピットは4基検出された。深さはP1が11cm、P2が8cm、P3が15cm、P4が14cmである。覆土は暗褐色土を主体とする。

**出土遺物** 28点を図示した。1・2は「有尾系土器」である。1は波状口縁を呈し、爪形文で菱形文を描く。2は地文縄文施文後、半截竹管による平行沈線を施す。

3～28は黒浜式土器である。3は口唇部を欠損する。口縁下に縦位の沈線を施し、その下は平行沈線を6条施文する。口縁下部には還付末端によるループ文を重畳施文している。4～11は無節縄文を地文とし



第4-10図 (6)SI002

て施したものである。使用原体は4・5・8～11がL、6・7がRである。12～16は単節縄文を地文として施したものである。使用原体は14・15がLRで、14は0段多条（前々段多条）となる。17～27は附加条縄文を施したものである。使用原体は17が（軸LR+L1本）、20が（軸LR+R2本）、25・26は（軸不明+L2本）を用いる。18・19・21～24・27は（軸不明+L2本/軸不明+R2本）で羽状施文する。28は燃糸を地文として施したものである。波状口縁を呈し、口縁下に無文部を介し、燃糸Lを施文する。

## 2. 土坑

土坑は7基検出された。特に集中している地点はなく、台地平坦面に点在している。

### (1)SK003 (第4-11図、図版4-1)

調査区の北東、47V-42グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、長軸方位はN-1°-Wである。規模は長軸0.76m、短軸0.66m、確認面からの深さ15cmを測る。覆土は焼土と少量の炭を含む黄褐色土層を主体とするが、分層は困難である。

### (1)SK007 (第4-11図、図版4-2)

調査区の北東、47U-38グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、主軸方位はN-70°-Eである。規模は長軸2.69m、短軸1.88m、確認面からの深さ211cmを測る。陥穴と思われる。

### (2)SK003 (第4-11図、図版4-2)

調査区の北西、48Q-39グリッド周辺に位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-60°-Wである。規模は長軸0.83m、短軸0.60m、確認面からの深さ12cmと浅い。覆土は茶褐色土を主体とする。

### (6)SK002 (第4-11・12図、図版4-2・10)

調査区の南端、51R-29、51S-20グリッドに位置する。楕円形を呈する袋状の土坑で、陥穴の可能性もある。長軸方位はN-32°-E、規模は長軸2.57m、短軸2.00m、確認面からの深さ169cmを測る。黄白色粘土層まで掘り込んでおり、湧水が見られた。そのため、底面まで完掘しないが、粘土層を掘り抜いたところが底面と思われる。覆土は灰褐色土の上に黒褐色土、暗褐色土が堆積している。

**出土遺物** 遺物の出土は少なく、2点を図示した。1は単節LRが施された胴部片である。加曾利EⅢ式か。土器片円盤の可能性はある。2は加曾利EⅢ式の「浮文系意匠充填系土器」である。隆線で意匠を描き単節LRを充填後、隆線の両脇にナゾリを加える。

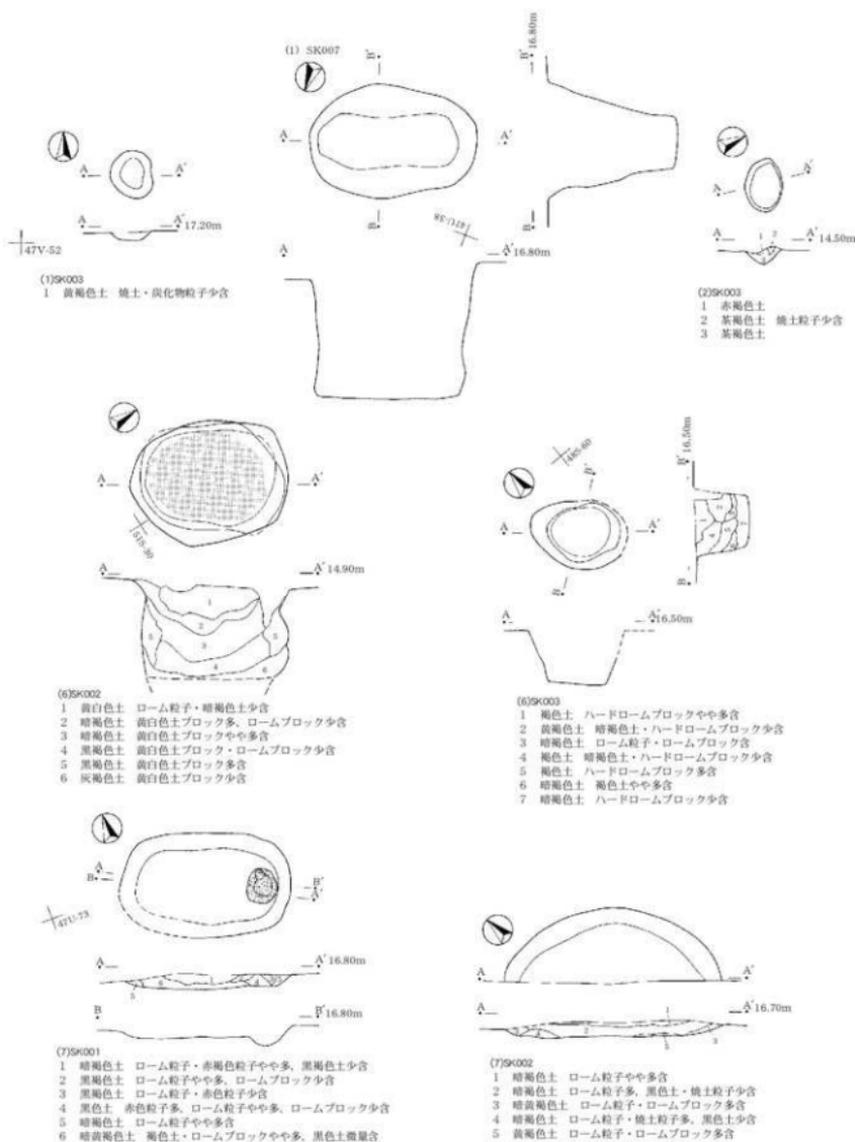
### (6)SK003 (第4-11・12図、図版4-2・10)

調査区の中央付近、48R-69グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-50°-Wである。規模は長軸1.57m、短軸1.14m、確認面からの深さ86cmを測る。床面は平坦で、堅くしまっている。遺物は縄文時代前期、黒浜式期の土器が数点出土している。

**出土遺物** 1・2とも黒浜式の胴部片である。地文縄文単節RLのみが施され、胎土に繊維を含む。

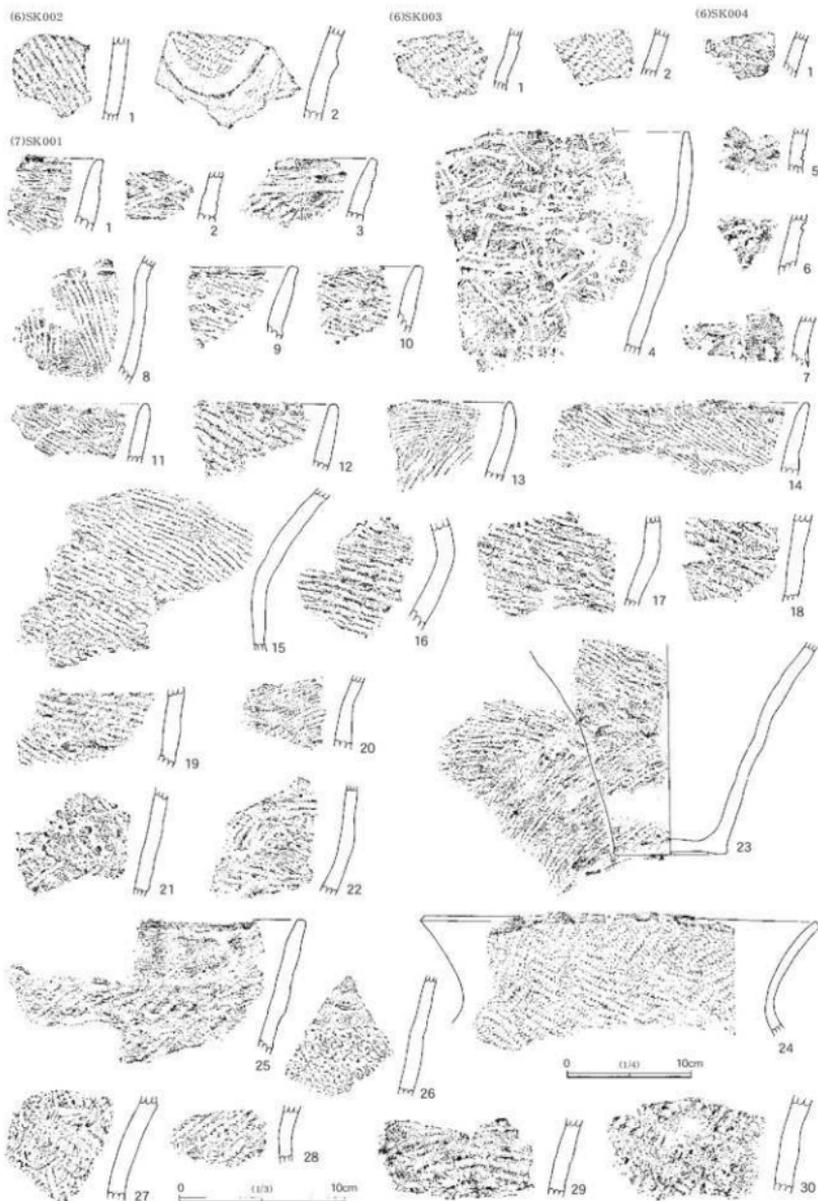
### (7)SK001 (第4-11・13図、図版4-1・10)

調査区の北東、47U-74グリッド周辺に位置する。平面形は長楕円形で、長軸方位はN-72°-Wである。規模は長軸2.77m、短軸1.70m、確認面からの深さ10cm～15cmである。東隅から炉が検出された。平面形は0.56m×0.52mの楕円形で、深さは7cmである。床面中央はロームブロックが硬化して凸レンズ状を呈している。柱穴は検出されなかった。覆土は暗黄褐色土、暗褐色土を主体とする。竪穴住居跡の屋内炉の可能性はある。本道構の時期は、出土遺物から縄文時代前期と思われる。

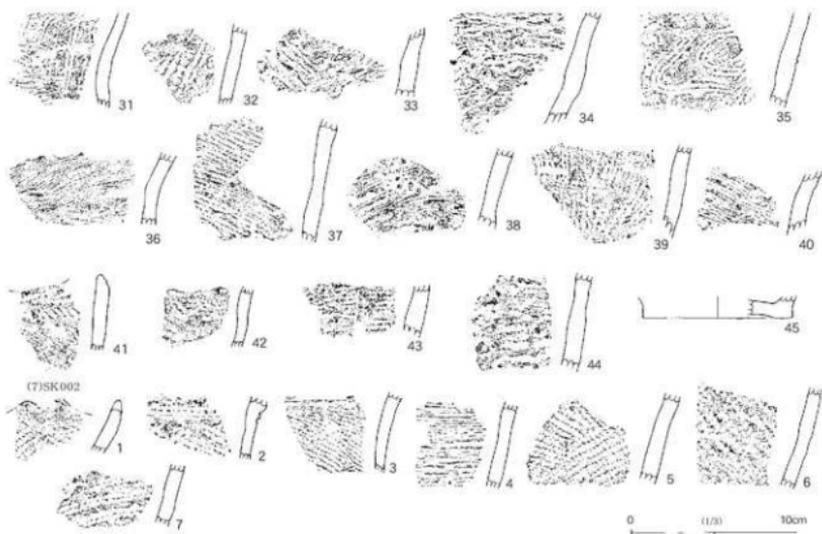


第4-11図 土坑（縄文時代）

0 (1/400) 1m



第4-12図 土坑出土遺物①



第4-13図 土坑出土遺物②

**出土遺物** 45点を図示した。1～3は「有尾系土器」である。1は爪形文で菱形文を描く口縁部片である。2は爪形文による菱形文が交差する。3は地文縄文1段Lを施文後、口縁下に平行沈線を引いている。

4～45は黒浜式土器である。4は竹管の内側でかなり雑な格子目文を施す。5～7は竹管を用いて刺突文を施したものを集めた。8は竹管のみならず、ササラ状工具で意匠を施すものである。

9～23は無節縄文を地文とする。使用原体は20～22がL、9・12・14～19がR、13・23はLとRを用いて羽状施文する。24～30は単節縄文を地文とする。使用原体は24～26・30がLRで、24は異方向の回転により羽状施文する。27～29はRLである。31～33は附加条縄文を地文とする。使用原体は31・32が(軸不明+R 2本)、33は(軸不明+L 2本)である。34は櫛描波状文か。35～40は燃糸を地文とする。35がいわゆる「木目状燃糸文」に近く、ほかは燃糸Rを施す。

41～44は貝殻腹緑文で、44を除きハイガイを用いている。

45は底部で、やや上げ底である。

(7)SK002 (第4-11・13図、図版4-1・10)

調査区の中央、48T-87グリッド周辺に位置する。北東側の一部のみの検出で、大半が調査区外となるため、規模や平面形は不明である。確認面からの深さは7cm～16cmと浅い。覆土は暗褐色土を主体とする。小型住居の可能性がある。

**出土遺物** 7点を図示した。1は小波状口縁で、地文縄文施文後に竹管で意匠を施す。

2～4は「有尾系土器」である。2は隆線下に爪形文を施す。3は地文縄文施文後、平行沈線を引くもの、4は平行沈線を多条化施文している。

5～7は黒浜式土器である。地文縄文を施した胴部片で、使用原体は6がRL、5はLRとRLで羽状施文する。7は附加条縄文(軸不明+R 2本)を施す。

## 3. グリッド出土の縄文土器・土製品 (第4-14～25図、図版4-2・11～13)

出土遺物の説明に際し、便宜的に以下の5群に大別し、各群を土器型式に準じて細別した。

- 第1群 縄文時代早期
- 第2群 縄文時代前期
- 第3群 縄文時代中期
- 第4期 縄文時代後期
- 第5群 縄文時代晩期

## 第1群1類 燃糸文系土器 (第4-14図1・2)

1・2は燃糸文系土器である。1は口縁端部が外側に肥厚し、単節縄文を施す。頸部無文帯を形成する井草Ⅱ式に位置づけられる。2は口唇部形態がシメトリイ気味な丸頭状を呈し、条間の空いた単節縄文RLを施文する。稲荷台式に位置づけられる。

## 第1群2類 沈線文系土器 (第4-14図3～14)

3～14は沈線文系土器である。3～6は同一個体で、口唇部形態は内削ぎ状を呈する。細沈線帯で上下を画し、縦位の刺突列を充填する。この下に3本一組の細沈線で変形菱形文を描く。7・8は同一個体で、2列ないし3列の刺突列を廻らせてから細沈線を密接に施す。9は3本一組の細沈線で変形菱形文を描く。10は調整痕のみの飾られない土器の胴部片である。これら3～10は三戸式に位置づけられる。

11～14は太沈線を施した胴部片で、これらは田戸下層式に位置づけられる。

## 第1群3類 条痕文系土器 (第4-14図15～18)

15～18は条痕文系土器である。いずれも表裏面に貝殻条痕を施した胴部片で、その方向は15・17が表面斜・裏面横、16は表裏面とも斜、18は表面斜・裏面不明となる。これらは16が野島式、15・17が鶴ヶ島台式、18が鶴ヶ島台式～茅山下層式に位置づけられる。

## 第2群1類 有尾系土器 (第4-15図19～58)

19～54は有尾系土器で、54～58は刺突文そのほかを施した類型をまとめたものである。爪形文で菱形文を描くことを特徴とするが、施文具と描出法には幾通りかある。例えば、23～26では極めてスパンが細かく、19～22・33～38・41～47ではやや広めのスパンとなり、両者には施文具の違いが認められよう。そのほかでは27～30のように刺突文で意匠を描くものがある。菱形文の内部は無文を基本とするが、33～35・39・40・48～51のように地文縄文を施すものもある。46・47は胴のくびれ部に鈎状隆帯を廻らせるものである。52・53は平行沈線で菱形文を描くもので、54は地文がササラ状の条痕である。

## 第2群2類 黒浜式土器 (第4-16～21図59～239)

59～239は黒浜式土器である。59・60は波状縁を呈し、口縁部に条線帯をもつ。その下は59が平行沈線、60は還付末端によるループ文を三段施している。61は片口付土器の片口部、ないし注口付土器の注口部と思われる。下部は鈎状隆帯に接続している。

62～79は竹管などで沈線文や格子目文を描くものである。62～64・66は平行沈線を描線とし、65・67～76・79は単沈線を描線とする。65・67～69は斜沈線、72～74・79は格子目を描き、特に79は胴部下半に文様が描かれる文様帯逆転例である。

80～86は櫛歯状工具などを施文具として用いた一群を集めた。横走重疊施文のみならず、83・84は斜位に施している。

87～213は地文縄文を施した一群である。87～117は無節縄文を施したもので、使用原帯は87～93・100・101～108・112～114・116がL、そのほかはRを用いる。99は0段多帯である。118～156は単節縄文を施したもので、131・133・144・146・147・150～154は単節LRとRLで羽状施文し、149・156は無節Lと単節RL、155は無節Rで羽状施文する。157は底部で上げ底となり、地文は単節RLである。158～191は附加条縄文を施したもので、使用原帯は158・169が(軸R+r 1本)、159が(軸LR+r 1本・L 1本)、168が(軸L+r 2本)、170が(軸RL+r 2本)、182・185が(軸LR+r 2本)で、LもしくはRを1～2本附加したものが大半を占める。羽状構成を取るのには162・164・172～174・176・177・181・183・187～189で、このうち172は(軸L+r 2本/軸R+L 2本)、174・176は(軸RL+r 2本/軸LR+L 2本)、173は(軸LR+r 2本)と単節RLで羽状施文する。190・191は附加条第3種か。192・193は異条斜縄文、194・195は結束(附加条付き)である。196～213は燃糸文を地文とするもので、使用原帯は197・202・203が燃糸L、196・204・205が燃糸Lと燃糸Rの羽状、そのほかは燃糸Rとなる。

214～217は無文土器そのほかを集めた。いずれも内外面とも器面調整痕のみとなる。

218～238は貝殻文を地文とする一群である。218・219・221～233がハイガイの貝殻背圧痕、220・234～236がハイガイの貝殻腹縁文、237・238は貝殻条痕文となる。

239は原帯及び施工具が不明の資料で、器面の風化などが目立ち、属性をピックアップできないでいる。黒浜式であることに間違いはない。

#### 第2群3類 大木2a式土器 (第4-21図240～242)

240～242は大木2a式土器である。240は内側に屈曲した口縁部に2列の円形刺突列を施す。241は円形刺突を施したもので、242は刺突列を重畳施文する。これのみ逸脱する可能性を孕む。

#### 第2群4類 諸磯式土器 (第4-21図243)

243は諸磯式土器である。竹管による細かなスパンの爪形文を施す。諸磯a式ないしb式の古層である。

#### 第2群5類 前期末葉縄文系粗製土器 (第4-21図244)

244は前期末葉縄文系粗製土器である。横位の結節縄文を重畳施文する。

#### 第3群1類 八辺式土器 (第4-21図245)

245は中期初頭の八辺式土器である。狭小な内稜を廻らし、2条の隆線を口縁下に貼付後、キザミを施す。この下は地文縄文施文後、隆線三角形印刻文を施し、区画内には結節沈線を施す。

#### 第3群2類 加曾利E式土器 (第4-22・23図246～301)

246～301は加曾利E式土器である。246～255はキャリパー形深鉢に相当する。246～249は上下両端を隆線で区画するが、渦巻き文や円文、区画文は形成せず、隆線の貼付による区切りを施す。胴部文様帯は地文縄文施文後、胴部磨消懸垂文を施す。250は沈線による楕円区画を主文様とし、251は隆線と沈線による区画文(おそらく副文様)を施す。252は条線を地文とし、隆線で主文様の渦巻文を描く。253～255は胴部磨消懸垂文を施した胴部片である。

256～268は「意匠充填系土器」に相当する。このうち、256～264が浮文系、265～268が沈文系となる。いずれも主文様は大柄渦巻文と思われる。充填縄文には259・268のように羽状施文もみられる。

269～276は「横位連携弧線文土器」に相当する。胴部上半のU字状文が残存するのは269のみで、ほかは胴部下半の逆U字状文の部分となる。

277～285は口縁下に1条の隆線を付したもので、沈線で画すことで口縁部無文帯を形成するものを集めた。

277～281は隆線を付したもので、280・281は口縁部の調整により痕跡的となる。さらに、282を加えた3点は同一個体で、地文が無節Rとなる。

286・287は微隆線を口縁下に貼付する。288～290は同一個体で、口縁下に微隆線を貼付して画し、口縁部に円形刺突列を廻らせる。291も同様の構成となるが、波頂部下に盲孔を施したボタン状の突起を付す。292は口縁下に沈線を廻らせて口縁部無文帯を形成するものである。293～296は微隆線で意匠を描くもので、地文を施さない。297・298は条線文を施した粗製土器である。

299～301は底部を集めた。いずれも瓢形深鉢の底部で、いわゆる「逆ランプシェード形」を呈する。

以上のことから、形式的な位置づけは、246～276が加曾利EⅢ式（古）、286～296は加曾利EⅣ式、277～285は概ね加曾利EⅢ式で、277・278・280～282は加曾利EⅣ式の可能性がある。条線文系の粗製土器は加曾利EⅢ式、底部も加曾利EⅢ式であろう。

#### 第4群1類 称名寺式土器（第4-24図302～307）

302～307は称名寺式土器である。意匠内に縄文を充填する302が称名寺Ⅰ式、意匠内に列点を充填した303～307は称名寺Ⅱ式に位置づけられる。

#### 第4群2類 堀之内式土器（第4-24図308～313）

308～313は堀之内式土器である。308は地文縄文単節LRを施文後、口縁下に2条の沈線を廻らせ、沈線で意匠を施す。309は頸部が短く外反気味に立ち上がり、口縁部が内側に屈曲する壺形を呈する。ラッパ状の突起の上部に一对の盲孔を穿ち、沈線で連結する。以上2点は堀之内Ⅰ式に位置づけられるが、309は「綱取系土器」で、あるいは称名寺Ⅱ式平行かもしれない。310は外面が磨消縄文、内面に内沈線及び裝飾を施す。311は口縁下に1条の沈線を廻らせ、内沈線を1条施したもので、以上2点は堀之内Ⅱ式に位置づけられる。312・313は条線文系粗製土器で、堀之内Ⅰ式に伴う可能性が高い。

#### 第4群3類 加曾利B式土器（第4-24図314～325）

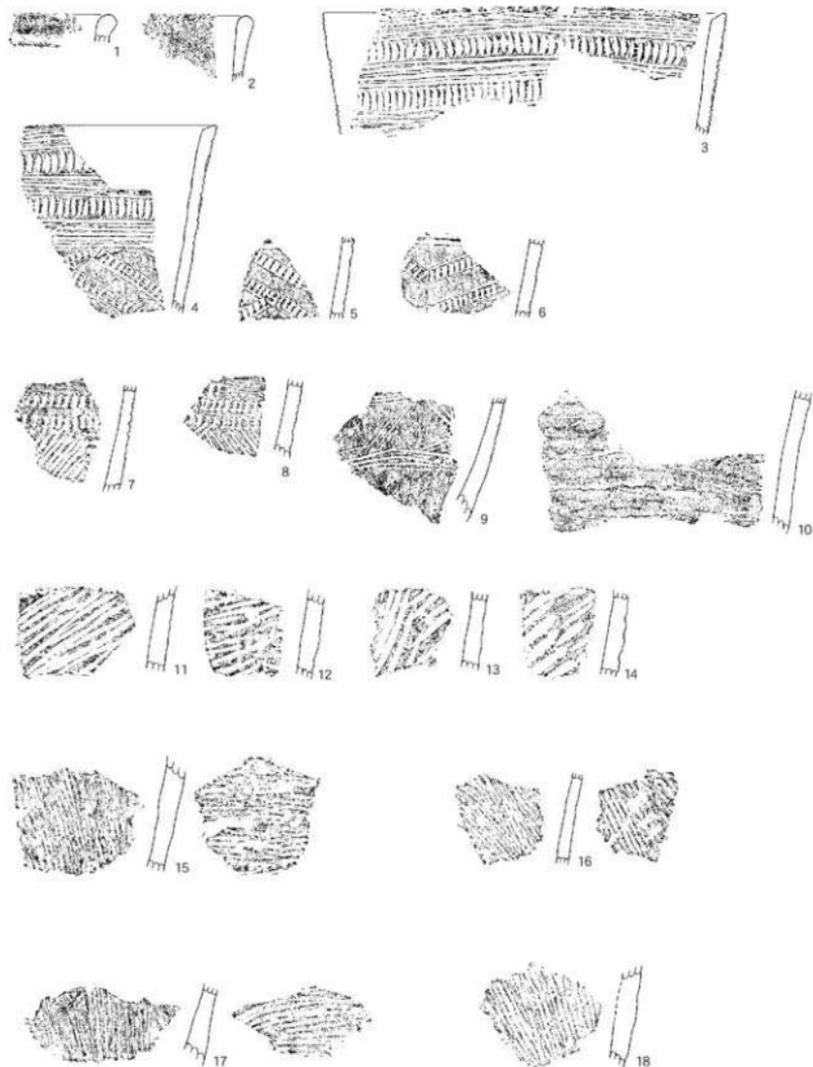
314～325は加曾利B式土器である。314・315は浅鉢形土器で、頸部に磨消縄文、胴部に綾杉状沈線を施す。316は算盤玉形を呈する深鉢と思われる、屈曲部にキザミを廻らせ、胴部には綾杉状沈線を施す。317は波状5単位の深鉢で、口頸部を無文帯とし、沈線で画した胴部以下に斜沈線を施す。318も同様と思われる。いわゆる「遠部第二類」である。以上の精製土器は加曾利BⅡ式に位置づけられる。

319・320は波状口縁である。口縁部文様帯は沈線で区画され、内側に刻文帯を施している。頸部文様帯は磨消縄文となる。321は浅鉢で、口縁下に平行沈線を引いて以下を画し、縄文を施す。322は外反した口縁部に縦位気味の斜沈線を施し、下端区画の沈線を引いて頸部を無文帯とする。以上の精製土器は加曾利BⅢ式に位置づけられる。

323は縄文地文に格子目文を施したもので、いわゆる「遠部第四類」である。324は紐線文系粗製土器で、施文工程は①地文縄文②斜沈線③粗線貼付④連続押捺となる。325は縄文系粗製土器で、地文縄文単節LRを施し、内沈線を2条廻らせる。以上の粗製土器は加曾利BⅡ式に位置づけられる。

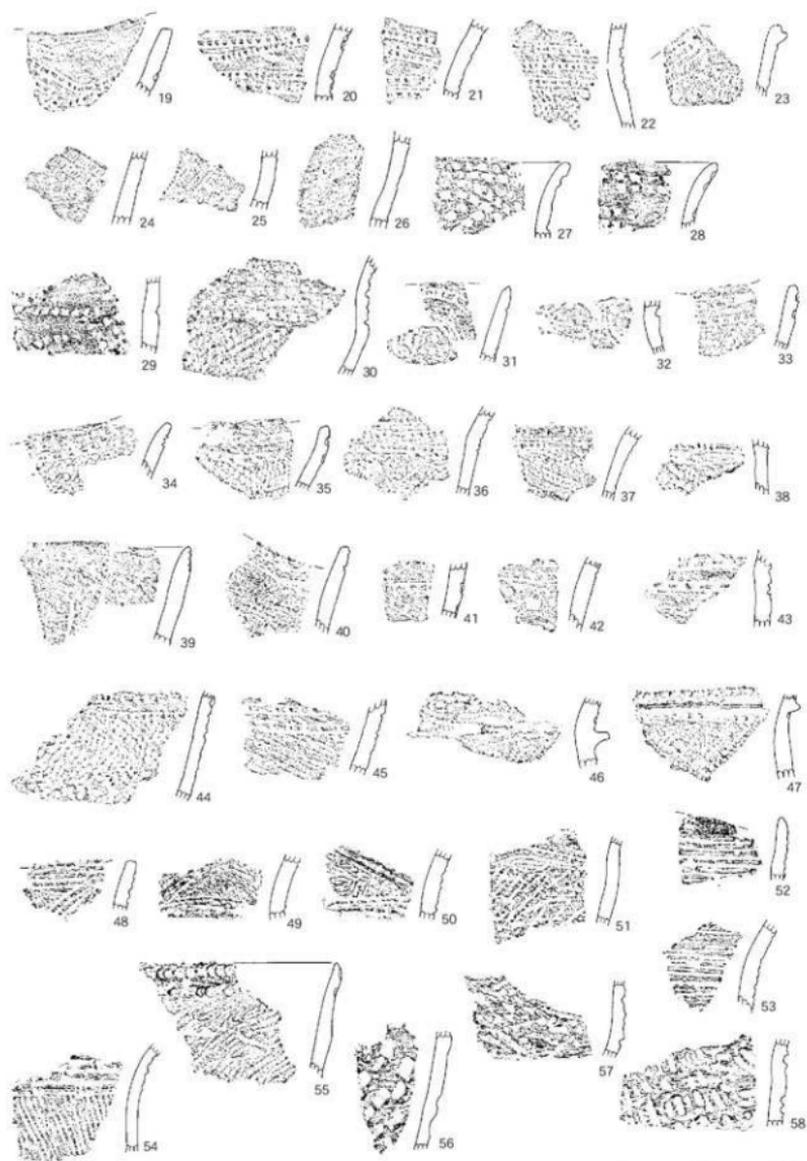
#### 第4群4類 後期安行式土器（第4-24図326～328）

326～328は後期安行式土器である。326は帯縄文系土器で、2帯の帯縄文と、それを跨ぐ形で貼瘤を付す。327・328は紐線文系粗製土器で、327の施文工程は①条線②粗線貼付③連続押捺となる。以上3点は安行式土器に位置づけられる。



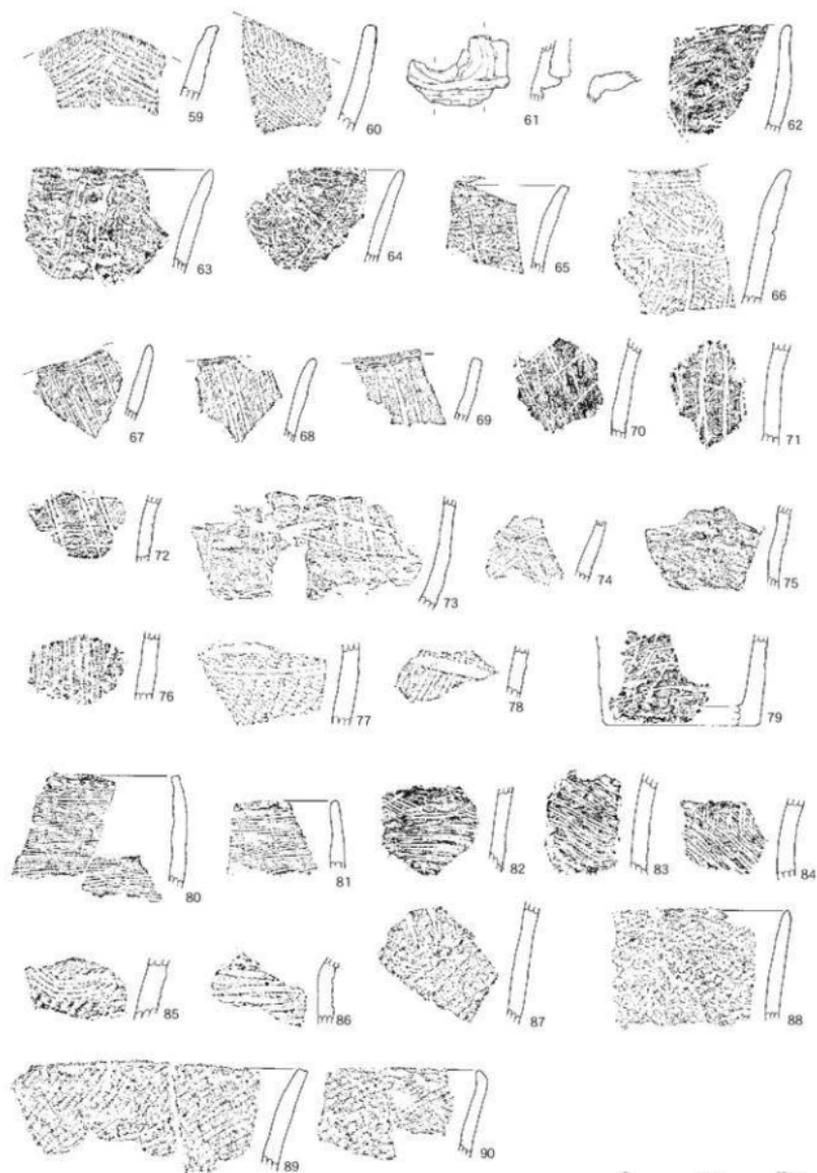
第4-14図 グリッド出土縄文土器①

0 (1/3) 10cm

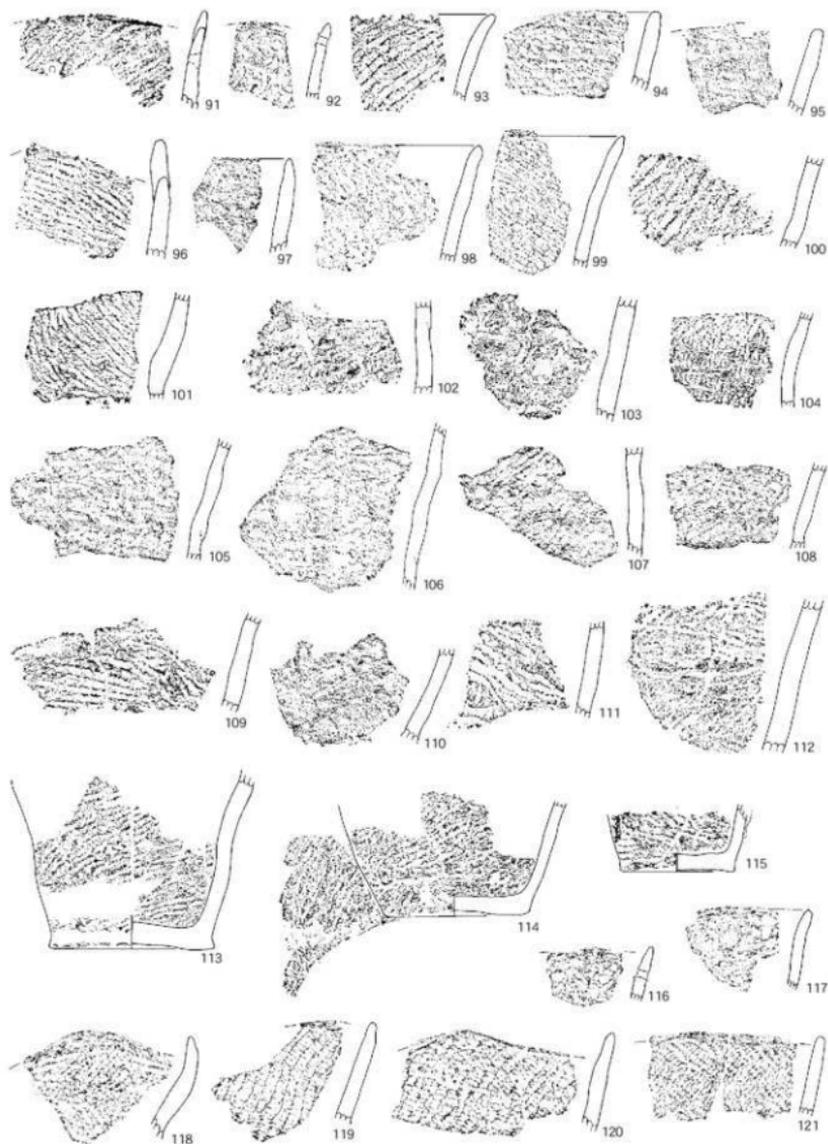


第4-15図 グリッド出土縄文土器②

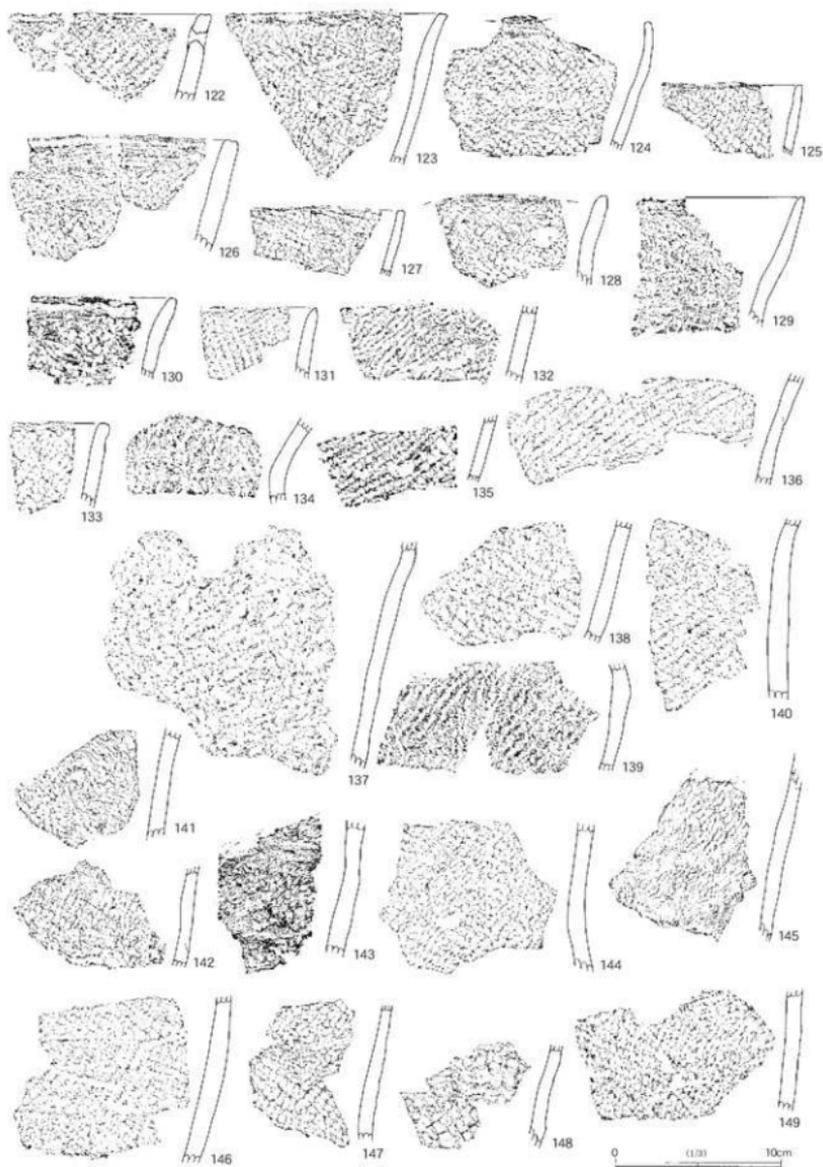
0 (1/20) 10cm



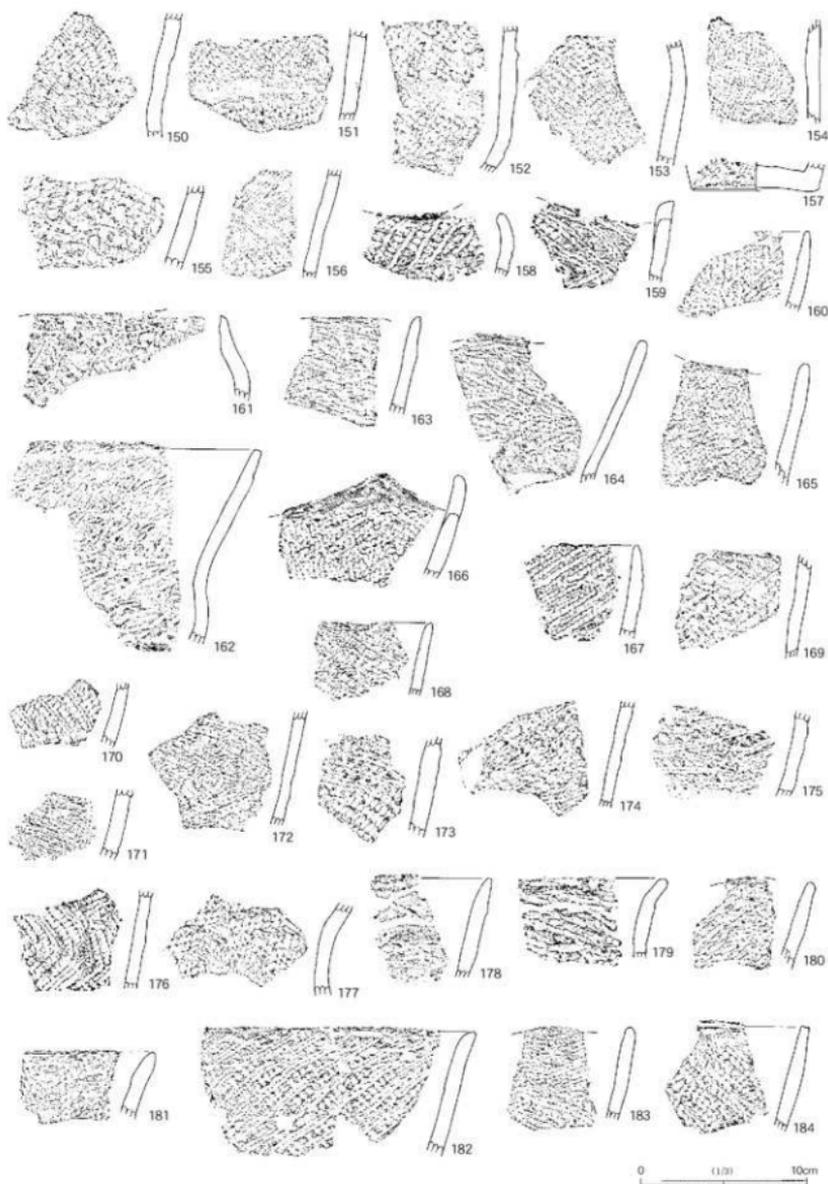
第4-16図 グリッド出土縄文土器③



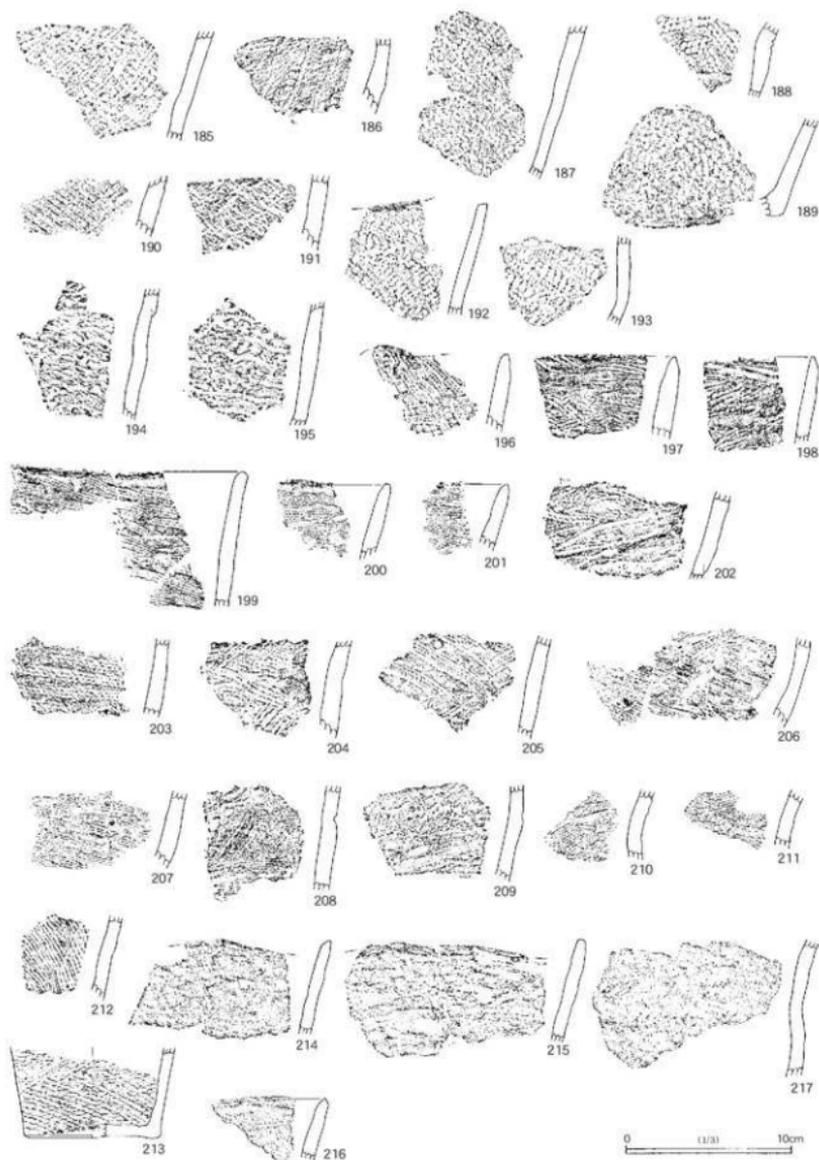
第4-17図 グリッド出土縄文土器④



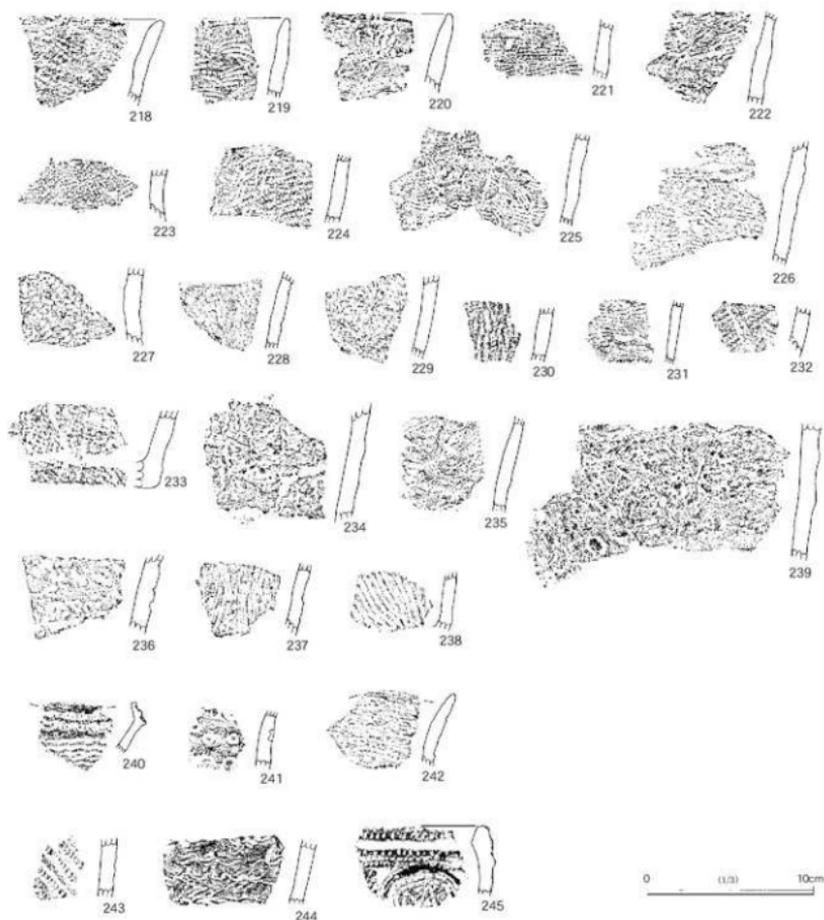
第4-18図 グリッド出土縄文土器⑤



第4-19図 グリッド出土縄文土器⑥



第4-20図 グリッド出土縄文土器⑦



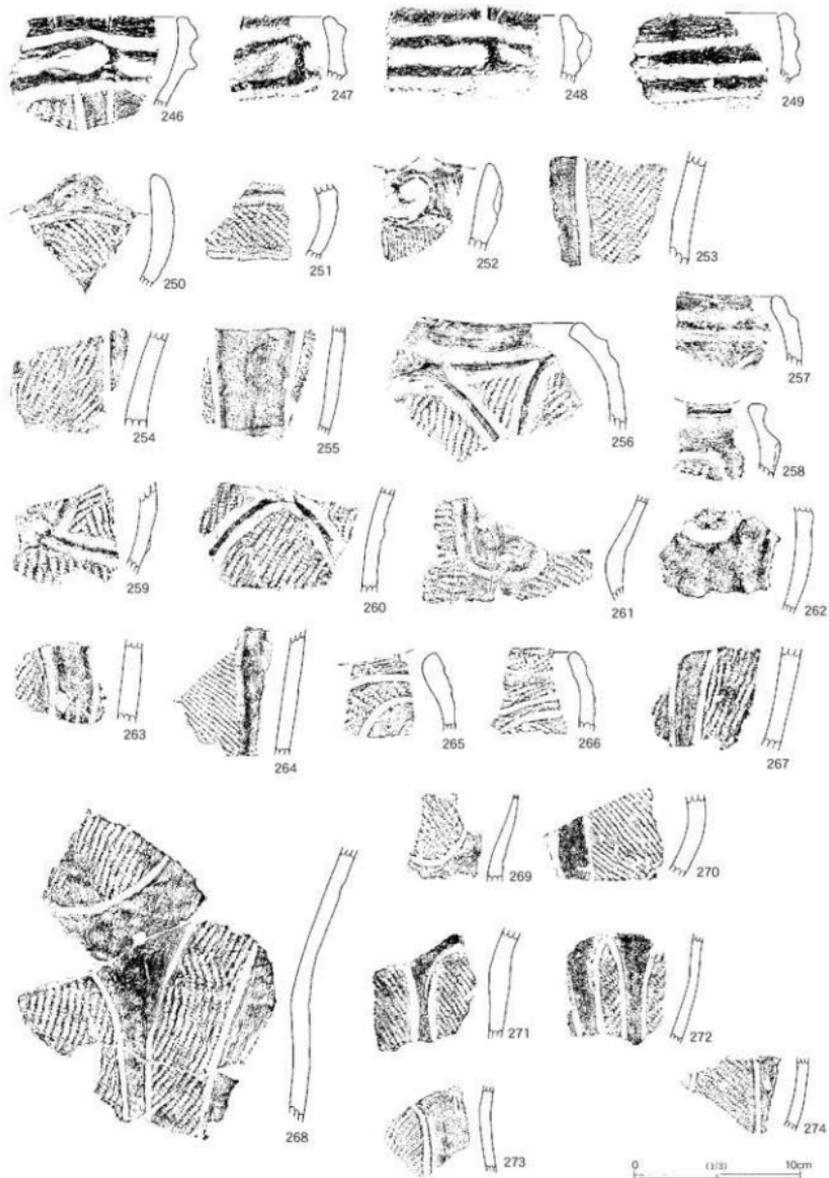
第4-21図 グリッド出土縄文土器⑧

**第5群第1類 前浦式土器 (第4-25図329~333)**

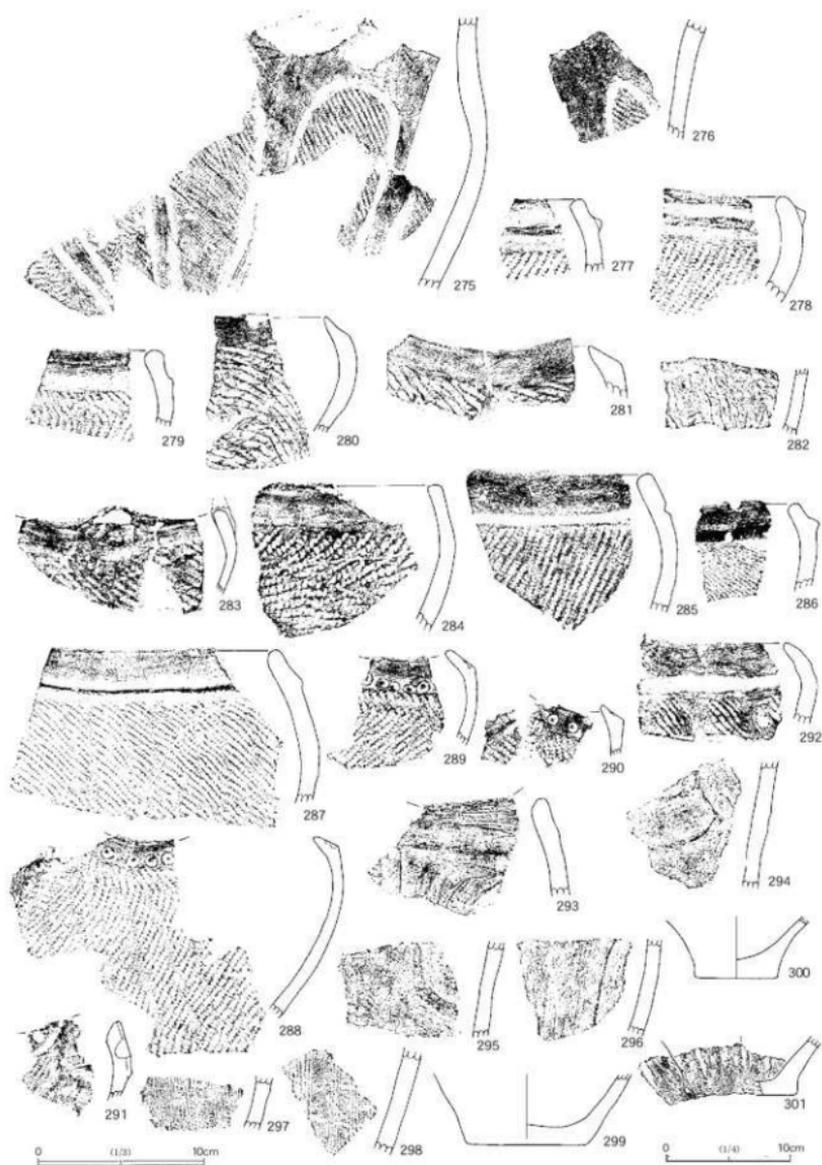
329~333は前浦式土器である。同一個体で、「の」の字文を主文様に、入り組み文を施す。

**第5群第2類 晩期安行式土器 (第4-25図334~336)**

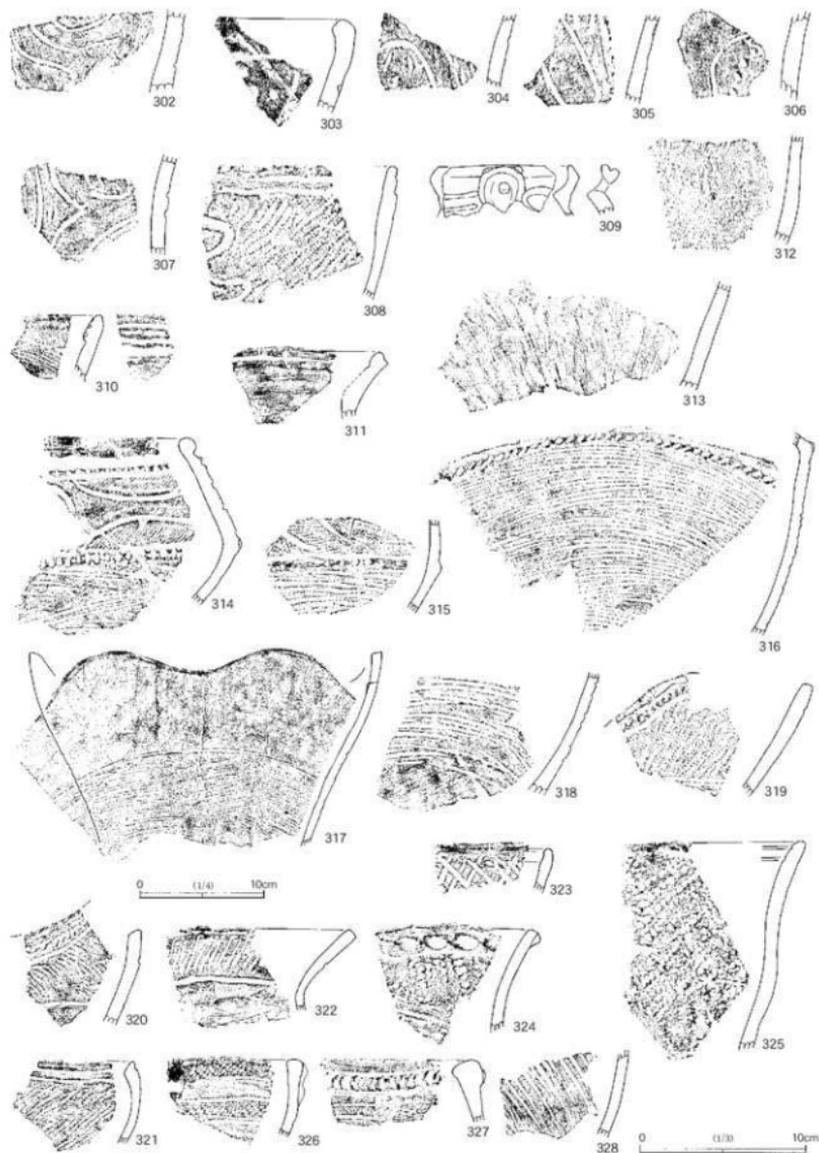
334~336は晩期安行式土器である。334・335は紐線文系組製土器の系譜を引くもので、頭部に装飾を施す。336は無文の浅鉢である。以上3点は安行3b式に位置づけられる。



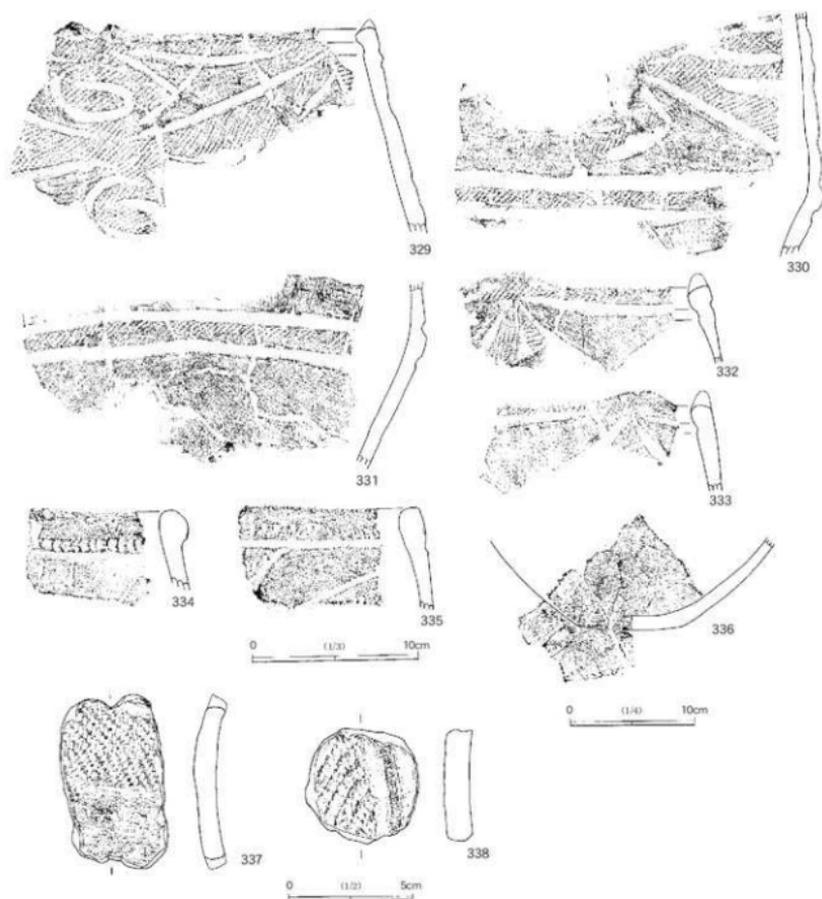
第4-22図 グリッド出土縄文土器⑨



第4-23図 グリッド出土縄文土器⑩



第4-24図 グリッド出土縄文土器⑩



第4-25図 グリッド出土縄文土器⑩・土製品

土製品 (第4-25図337・338、図版4-8)

337は加曾利E式の土器片を利用した土器片錘である。46S-59~46S-89にまたがる(5)次調査のトレンチから出土した。最大長7.1cm、最大厚0.9cm、最大幅4.2cm、重量35.2g、周縁部は打ち欠きのままで、長軸方向に紐かけを作り出している。338は加曾利E式の土器片を利用した円盤である。51S-11グリッドから出土した。径4.6cm、最大厚1.0cm、重量29.9g、周縁部は打ち欠きのままで、若干摩滅している。

## 4. グリッド出土の石器 (第24-26・27図、図版4-6)

グリッド出土の縄文石器が、早期、前期、中期、後期、晩期の5群に分類され、それぞれの時期ごとにある程度の割合で出土しており、主体となる時期のものが見られなかった。グリッド出土の縄文石器は、形態的にまとまっていないことから、帰属時期は多時期にわたるものと思われる。

1は有茎尖頭器である。先端部が欠損している。全面にわたって細かい平坦剥離が施されている。側縁の形状は鋸歯状に凹凸が均等に並んでいる。茎部もわずかに欠損している。おそらく、早期あるいは草創期の所産のものと考えられる。

2～13は石鎌である。2・3は脚部の挟りが深い。脚部の先端が尖った形状をしている。4～7は脚部の挟りが浅い。脚部の先端は、2・3と同様に尖った形状をしている。8は基部が突出する凸基有茎鎌である。器体中間部付近の両サイドが浅く抉れている。後期・晩期に特徴的に見られる形態を呈している。9・10は脚部の挟りがほとんど見られない。11～13は破損品である。11は先端部が破損している。脚部の先端は角張っており、2～7と形状が異なる。12・13は脚部が残存している。2～7と同様に各部の先端が尖っている。14は石鎌未成品である。15は剥片である。

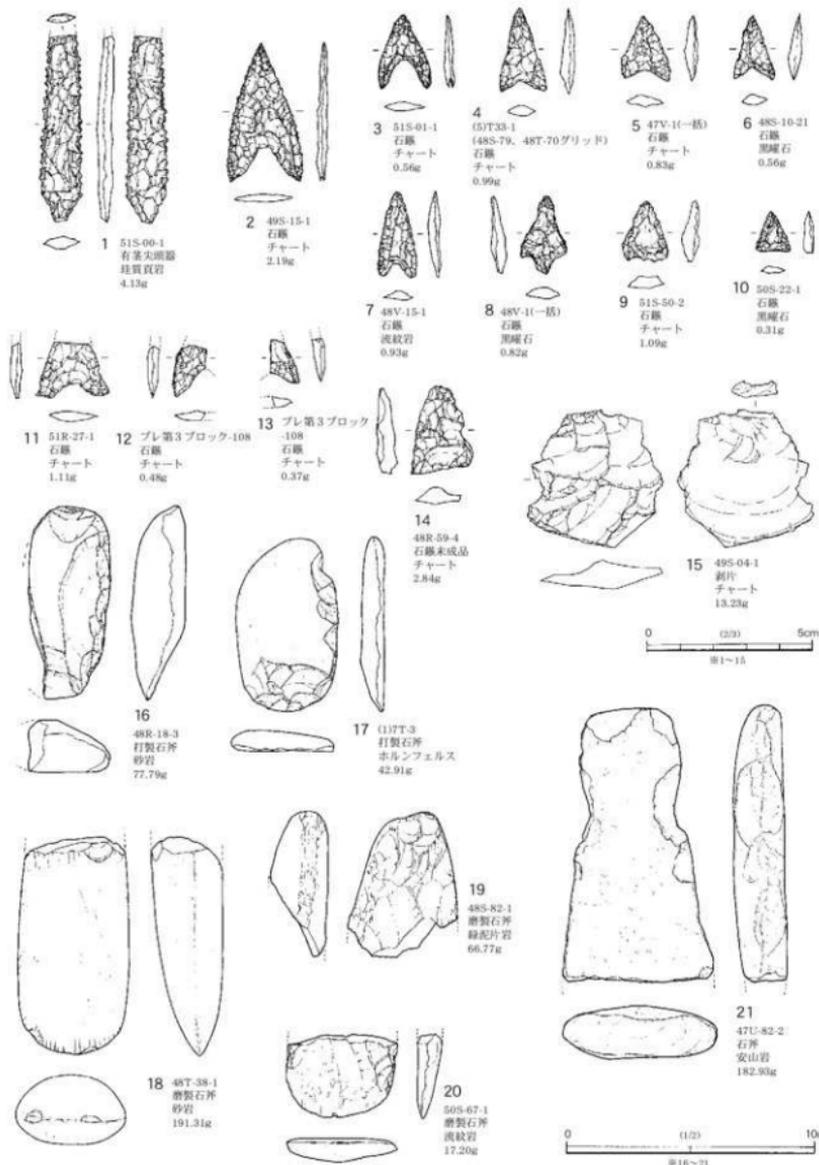
16・17は打製石斧である。16は厚みのある楕円形礫を素材としている。左側面側は下端部からの加撃により破損している。打製石斧の未成品の可能性もある。17は扁平な厚みのない楕円形礫を素材として、右側面と下端部に平坦な調整加工が施されている。自然面が大きく残されており、調整加工も簡易なものであることから、早期によく見られる礫石斧として分類することも可能である。

18～20は磨製石斧である。いずれも破損しているが、おそらく乳棒状の形態を呈していると思われる。18は頭部が欠損している。19は頭部が残存し、整形加工した剥離面が残っている。20は刃部が残存しており、刃部は非常に薄く鋭利な形状をしている。21は石斧である。刃部が破損しており、側縁が頭部付近で挟られる形状をしている。おそらく磨製石斧として分類されるものであろうが、全体形状が不明で、側縁の敲打によって整形加工されており、特異な形状をしていることから石斧と器種分類した。

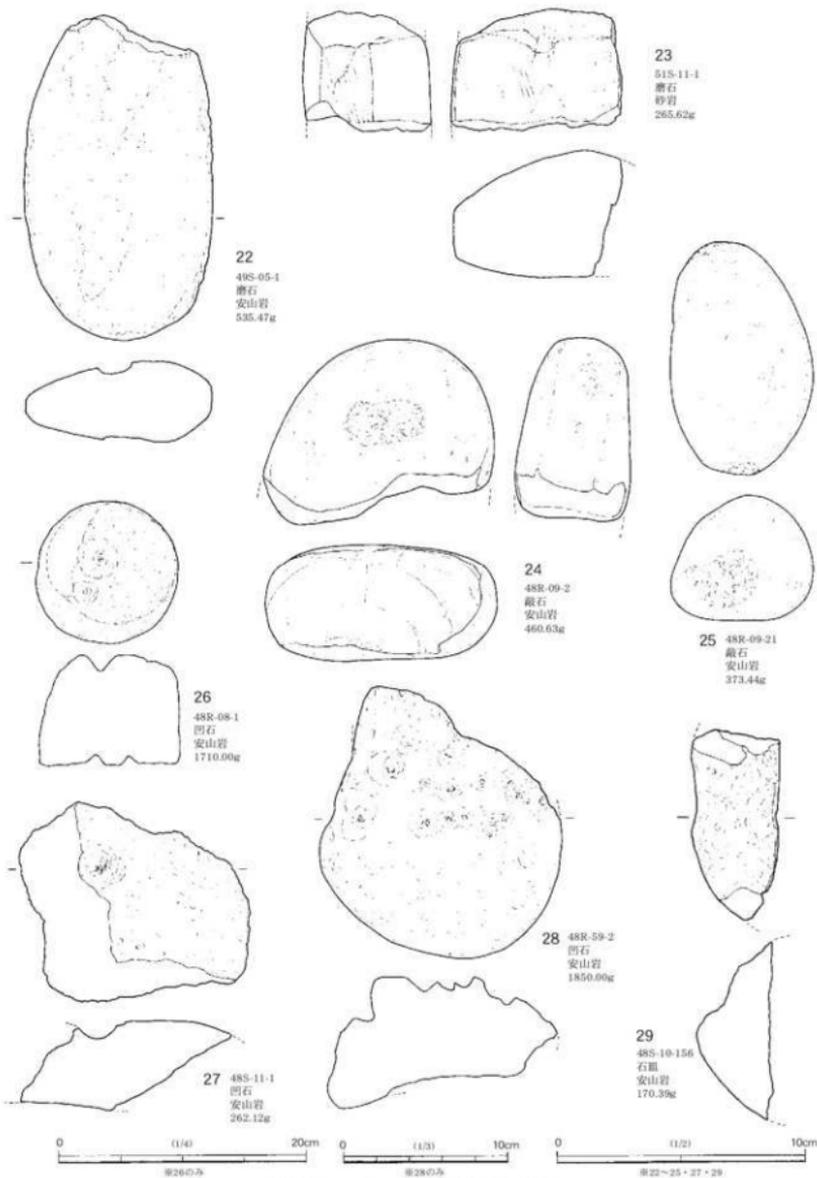
22・23は磨石である。22は扁平な楕円形礫を素材としている。平坦面には、敲打による凹み痕が斜め方向に数か所見られる。側縁は敲打した後に研磨されている。23は破損しており全体形状が不明である。全面が研磨され、側縁が角張った形状をしている。

24・25は敲石である。24は平坦面の中央付近に敲打による凹み痕がみられることから敲石として分類した。全面が研磨されており、側縁は22・23の磨石と同様に敲打した後に研磨されている。25は厚みのある楕円形礫を素材として、上下の突出部に強い加撃痕が見られる。

26～28は凹石である。26は大型の石棒の破損品を転用したものと思われる。破損面の上面部と下面部にそれぞれ2か所の凹み痕が見られる。27は表面に1か所の凹み痕が見られる。裏面に緩やかに湾曲した磨り面が見られる。28は表面に15か所の凹み痕が見られる。27・28は大きく破損しており、いずれも全体形状が不明であるが、石皿の破損品の可能性が高い。29は破損しているが、復元できる全体の形状から、石皿の側縁部の残存品と判断した。4か所の凹み痕が見られる。



第4-26図 グリッド出土縄文石器①



第4-27図 グリッド出土縄文石器②

### 第3節 古墳時代

#### 1. 竪穴住居跡

古墳時代の竪穴住居跡は8軒検出された。出土した遺物から、いずれも古墳時代中期に属すると思われる。8軒中7軒が調査区の中央より北東に集中し、1軒のみ南西端に位置する。南西側は遺跡範囲外となるが、台地平坦面が続いており、集落が続いている可能性がある。

##### (1)SI001 (第4-28・29図、第4-1表、図版4-2・7・14)

調査区の北東、48V-15グリッド周辺に位置する。平面形は方形で、主軸方向はN-22°-Wを指す。規模は長軸8.10m、短軸7.96m、確認面からの深さ22cm~27cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、南側がやや浅い。南壁際を中心に、床面の一部に硬化面が見られる。炬は南北2か所から検出された。北側の炬は直径70cm、深さは1cm以下と浅い。南側の炬は直径75cm、深さは4cm~8cmである。柱穴は4基検出され、深さはP1が52cm、P2が39cm、P3が36cm、P4が36cmである。出入口のピットは検出されなかったが、南壁中央の壁溝が途切れ、付近に硬化面が認められることから、出入口は南壁際にあつたと考えられる。南東隅に貯蔵穴が設置されている。東西長1.6m、南北長1.2mの楕円形を呈し、深さは40cmである。壁溝は南壁中央と西壁には巡らない。幅は23cm~30cm、深さ5cm~10cmである。

遺物は高杯・鉢・埴・甕・土玉・台石・軽石・磨石が出土している。壁際に近い床面から覆土下層にかけて分布し、南東隅にやや集中する傾向がある。

**出土遺物** 1は鉢である。平底で体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で直立する。外面の調整はハケの後体部中位から下位にかけてヘラケズリ、内面は丁寧なナデで口縁部にわずかにハケの痕跡が見られる。

2~7は高杯である。2の杯部は深さがあり、体部下端に弱い稜をもつ。脚柱部は膨らみのある円錐形で、裾部が屈折して大きく開く。外面の調整はミガキ、杯部内面はハケ後部分的にミガキが施される。3は直線的に開く円錐状の脚部で、器形には歪みが見られる。外面はハケ、ヘラケズリ後ミガキが施される。4は口縁部のみで遺存である。外面はミガキ、内面はハケの後ナデが施されているようだが、器面が荒れているため不明瞭である。5は口縁部と脚部を欠損している。杯部体部下位に稜をもつ。外面はミガキ調整である。杯部内面は被熱による器面の剥離が著しい。6は脚柱部のみ、7は裾部のみで遺存で、2点とも外面にはミガキが施される。6は杯部と脚部を隣接状態で接合した痕跡が確認できる。

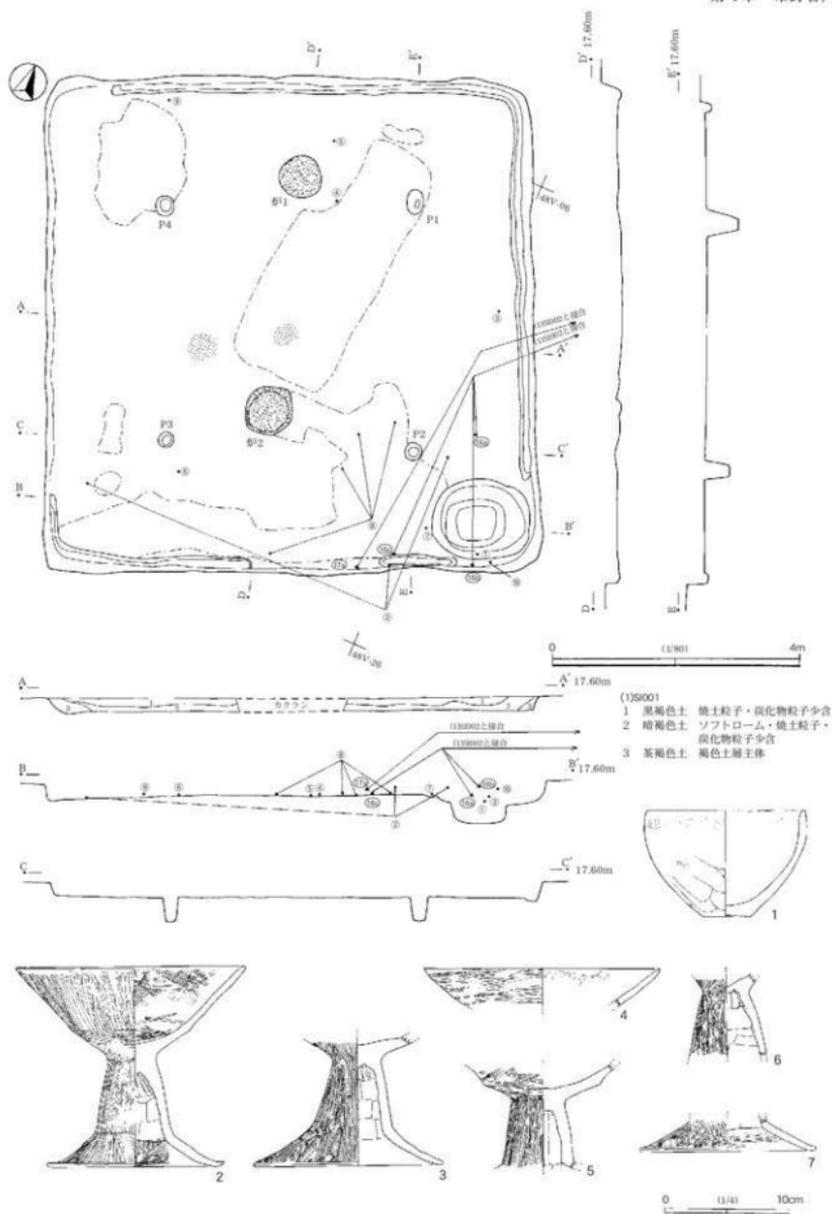
8は複合口縁の壺である。口頸部と胴部は接合しないが、図上で復元した。球胴形を呈し、外面は全面にミガキが施される。口縁部内面は外面と同様のミガキ、胴部は外面より幅広い工具による粗いミガキである。

9は甕である。口縁部から胴部上位が遺存する。肩の張った形態で、口縁部は「く」の字状に外反する。胴部外面はヘラナデの後ミガキが施されている。

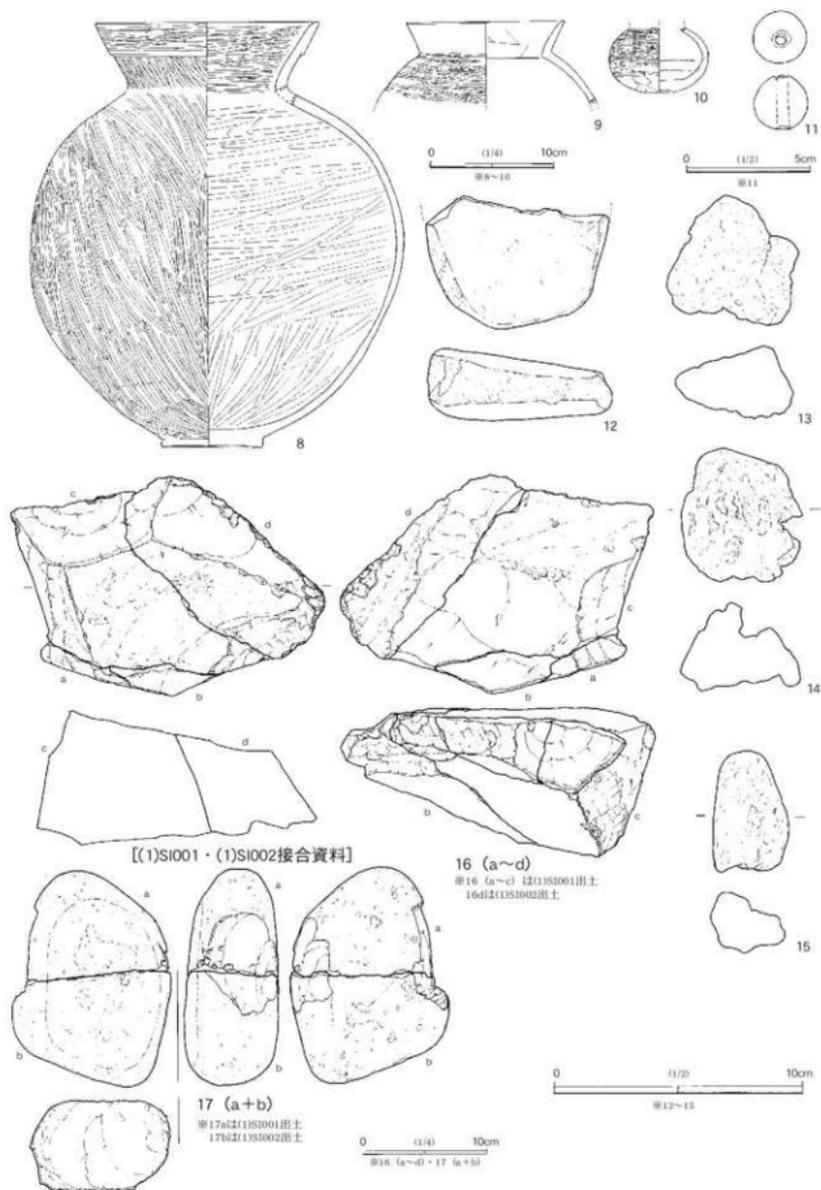
10は埴である。口縁部を欠損する。胴部が丸く張り、外面にミガキが施される。

11は土玉である。表面はナデによって平滑に整えられる。

12~17は石製模造品製作に関連する石器類であると思われる。2個体 [16 (a~d)・17 (a+b)] 出土した大型の台石は、南東16m離れた(1)SI002と接合関係を持つ資料である。(1)SI002からは滑石製の白玉と勾玉が各1点出土していることから、(1)SI001と(1)SI002において、滑石製の白玉や勾玉等の石製模造品が精製された可能性が高いと推察される。近隣の市野谷入台遺跡においても、本遺構と同時期の石製模造品の工房跡が4軒検出されている。



第4-28図 (1)SI001①



第4-29図 (1)SI001②

12は安山岩製の磨石で重量154.20g、扁平な楕円形礫を素材として、側縁部は敲打と擦痕が見られる。13～15は軽石で、周縁に擦痕が見られる。

16(a～d)は砂岩製の台石である。16(a～c)が(1)SI001、16dが(1)SI002から出土している。重量は、16aが385.00g、16bが235.00g、16cが2420.00g、16dが1520.00g、16(a～d)の接合した状態で4560.00gである。節理面に沿って剥離した大型の角礫を素材としている。表裏両面の平坦面に強い敲打による潰れ痕が多数見られる。特に、表面中央部の敲打痕が顕著で、横方向に2条の潰れ痕が連続して見られる。裏面左側と上部には、8か所ほどの凹みがありその内部は濃茶色に変色したものが詰まっていた。裏面左上部からの加撃により、16(a～c)と16dの2個体に分割されている。次に、16(a～c)は、裏面右下部からの加撃により、16a・16b・16cの3個体に分割されている。16cと16dは大型で大きな平坦面が残されており、分割した後も、台石として機能できる形状を保持したものである。16a・16b・16cは(1)SI001の南東隅の貯蔵穴周辺から出土している。16dは(1)SI002の北東隅から出土している。

17(a+b)は石英斑岩製の台石である。重量は、17aが1110.00g、17bが1465.00g、17(a+b)の接合した状態で2575.00gである。17aが(1)SI001、17bが(1)SI002から出土している。17(a+b)の状態では、表面の平坦面中央が強い敲打により潰れ痕が見られる。両側縁中央部は、加撃による剥離面が見られ、右側縁からの加撃により、器体中央部から17aと17bとに分割されている。分割後も平坦面が残されており、台石として機能できる形状を保持したものである。17aは(1)SI001の南東隅、17bは(1)SI002の北西隅から出土している。

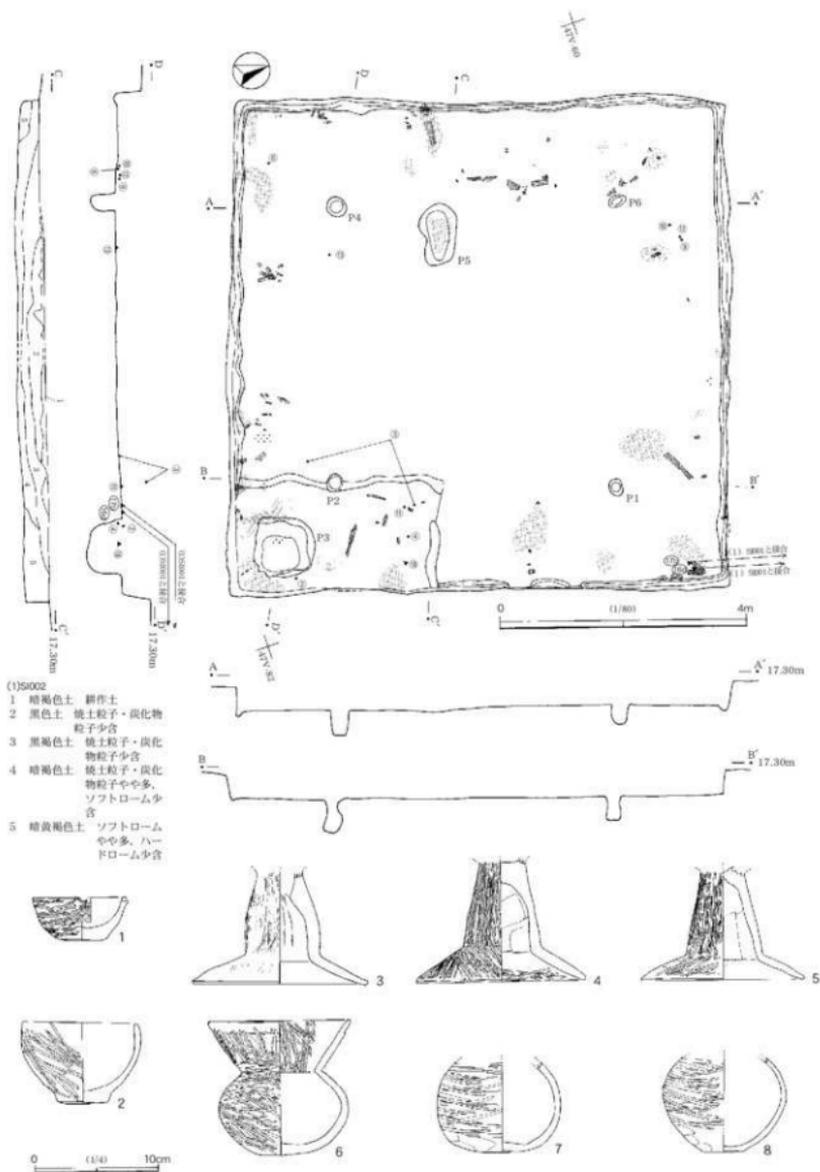
16(a～d)と17(a+b)は、接合した状態で多くの強い敲打痕が見られた。おそらく、石製模造品において、荒割や形割などの初期段階製作工程で機能したものである。その後、大型の台石を分割して、小型になった台石は、(1)SI001と(1)SI002の住居内に配備され、側面調整や研磨工程などの後半段階の製作工程で使用されたと思われる。なお、(1)SI001と(1)SI002からは、石製模造品製作に関連する剥片類が出土していないことから、初期段階の製作工程は、ほかの地点で行われたものと推察される。

#### (1)SI002 (第4-30・31図、第4-1表、図版4-2・7・14)

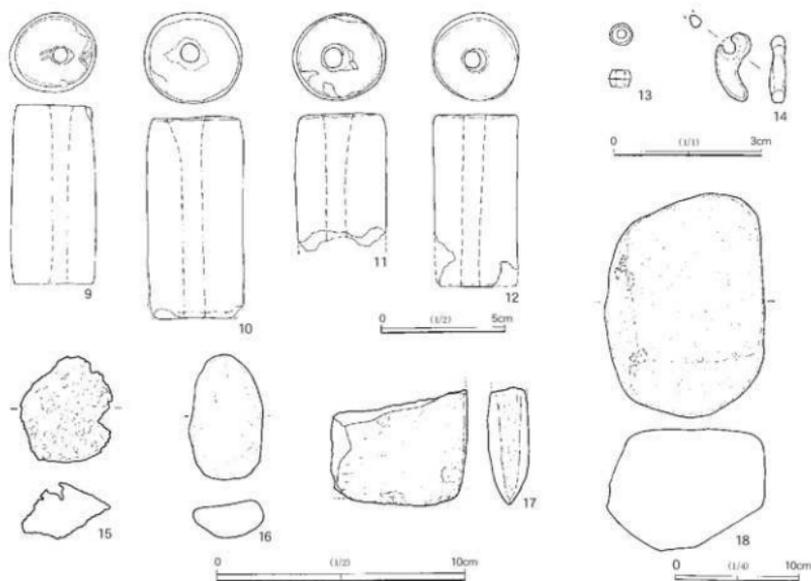
調査区の北東、47V-71グリッド周辺に位置する。(1)SI001から北西へ16mの距離にある。平面形は方形で、主軸方向はN-72°-Wを指す。規模は長軸8.20m、短軸8.04m、確認面からの深さ36cm～46cmを測る。床面に硬化面は見られず、焼土と炭化材が出土している。炉は検出されなかったが、中央西寄りにある楕円形のピットが炉の可能性がある。平面形は東西に長い楕円形で、長軸1.00m、短軸0.63m、深さ6cmである。柱穴は4基検出され、深さはP1が47cm、P2が53cm、P3が40cm、P4が32cmである。出入り口ピットは検出されなかった。南東隅に貯蔵穴が設置されている。一辺1m前後の方形で、深さは54cmである。また、貯蔵穴の周囲は南北3.48m、東西2.00m、段差1cmの区画が見られる。壁溝は東壁と貯蔵穴付近で途切れる。幅15cm～30cm、深さ6cmである。

遺物は高杯・鉢・埴・片口碗・ガラス玉・石製勾玉・円筒形の土錘・台石・軽石・砥石が出土している。床面から覆土下層にかけて分布し、南東隅の貯蔵穴周辺にやや集中する。4点出土した土錘のうち3点は北西隅付近からまとまって出土した。

**出土遺物** 1は片口碗である。平底で体部が内湾しながら開く。口唇部に1か所工具を挿して口を作っている。外面はナデのち粗いミガキ、内面はヘラナデで仕上げられる。



第4-30図 (1)SI002①



第4-31図 (1)SI002②

2は鉢である。全体的に内湾する器形で、底部が突出する。外面はナデの後粗いミガキが施される。

3～5は高杯である。いずれも脚部のみで遺存で、杯部との接合面が上端に残っている。3・4は膨らみのある円錐形の脚部から裾部が屈折して開く形状、5は直線的に開く脚柱部から裾部が屈折して開く形状である。外面の調整は3がハケ後ナデ、4・5がミガキである。

6～8は埜である。6は完形品である。丸底で、口縁部に最大径を有する。口縁部は直線的に大きく開き、端部にヨコナデによって段が形成されている。外面および口縁部内面にミガキが施される。7・8は口縁部を欠損する。胴部の形状が異なるものの、どちらも平底で、外面に粗いミガキが施されている。内面は被熱によるものか、器面が荒れているため調整は不明である。

9～12は円筒形の土錘である。長さ7.0cm～8.3cm、最大径は3.5cm～4.0cmで、表面はナデによって平滑に整えられている。

13は滑石製の白玉である。直径4.5mm、厚さ3.5mm、孔径2.0mm、重量0.11gで、算盤玉形である。14は滑石製の勾玉である。長さ13.5mm、厚さ3.0mm、幅7.0mm、重量0.39g、表面は丁寧に研磨されている。孔は両側穿孔で、背側が欠けている。

15～18は石製模造品製作に関連する石器類であると思われる。15は軽石で、周縁に擦痕が見られる。16は玉髓製の円礫である。17は安山岩製の砥石である。側面と平坦面の研磨が顕著である。左側縁と上部は破損しており全体形状は不明である。18は安山岩製の台石である。完形品で、重量3315.00gである。厚みのある円礫を用いて、突出した部位が敲打されている。ただし、(1)SI001で図示した16(a～d)や17

(a + b) のような強い敲打による潰れは見られなかった。

(2)SI001 (第4-32・33図、第4-1表、図版4-2・14・15)

調査区の中央、47T-87グリッド周辺に位置する。擾乱により住居の壁と床面はほとんど残っていない。僅かに残っている部分から一辺6.50mの方形で、主軸方向はN-53°-Wと推測される。確認面からの深さは20cm、炉・壁溝は確認できなかった。柱穴は4基検出された。深さはP1が66cm、P2が55cm、P3が37cm、P4が62cmである。P3は底部のみの検出で、堅くしまり黄みがかかったように変色している。柱痕跡か。北西壁側中央に直径50cm、深さ40cmのピットが確認された。貯蔵穴と思われる、底部付近から高杯の杯部が出土している。

遺物は高杯・埴が出土している。2点出土した高杯のうち1点は、貯蔵穴と思われるピットの底面から、もう1点の高杯と埴は覆土中からの出土である。本住居跡は擾乱が著しく、不明確な部分が多いが、3点とも本住居跡に伴う遺物であると判断した。

**出土遺物** 1～5は高杯である。1の杯部は下端に稜を有し、口縁部が大きく直線的に開く。脚柱部は直線的に開く円錐形を呈し、裾部が低い位置で開く。杯部外面の調整はハケ後ヘラナデ、脚部はミガキ、杯部内面は被熱のため不明瞭であるが、ミガキの可能性はある。2は杯部のみの遺存で、脚部との境に臍状の接合面が残っている。杯部下端に稜を有し、口縁部が直線的に開く。外面はヘラナデの後粗いミガキが施される。内面は被熱による器面の剥離が著しい。3は体部下端に弱い稜をもち、内外面ともミガキ調整である。4は杯部で、体部下位に稜をもち、口縁部が大きく開く。外面はハケ後ヘラケズリ調整、内面は被熱による器面の剥離が著しい。5は脚部のみの遺存である。やや膨らみのある円錐状の脚柱部から裾部が屈折して開く。外面にミガキが施される。内面には輪積み痕が見られる。

6・7・14は甕である。6は球形の胴部に緩やかに外傾する口縁部が付く。外面及び口縁部内面はハケ後ヘラナデ、胴部内面はヘラナデが施される。内外面とも被熱による器面の剥離が目立つ。7は底部を欠損する。胴部中位に最大径をもち、口縁部が緩やかに外反する。外面の調整は胴部最大径を境に上半部がハケ、下半部がヘラケズリ後ナデである。14は口縁部から胴部上位にかけて遺存する。口縁部は「く」の字状に外反し、端部が面取りされる。調整は内外面ともハケ後ナデである。口縁部外面には沈線が螺旋状に描かれている。

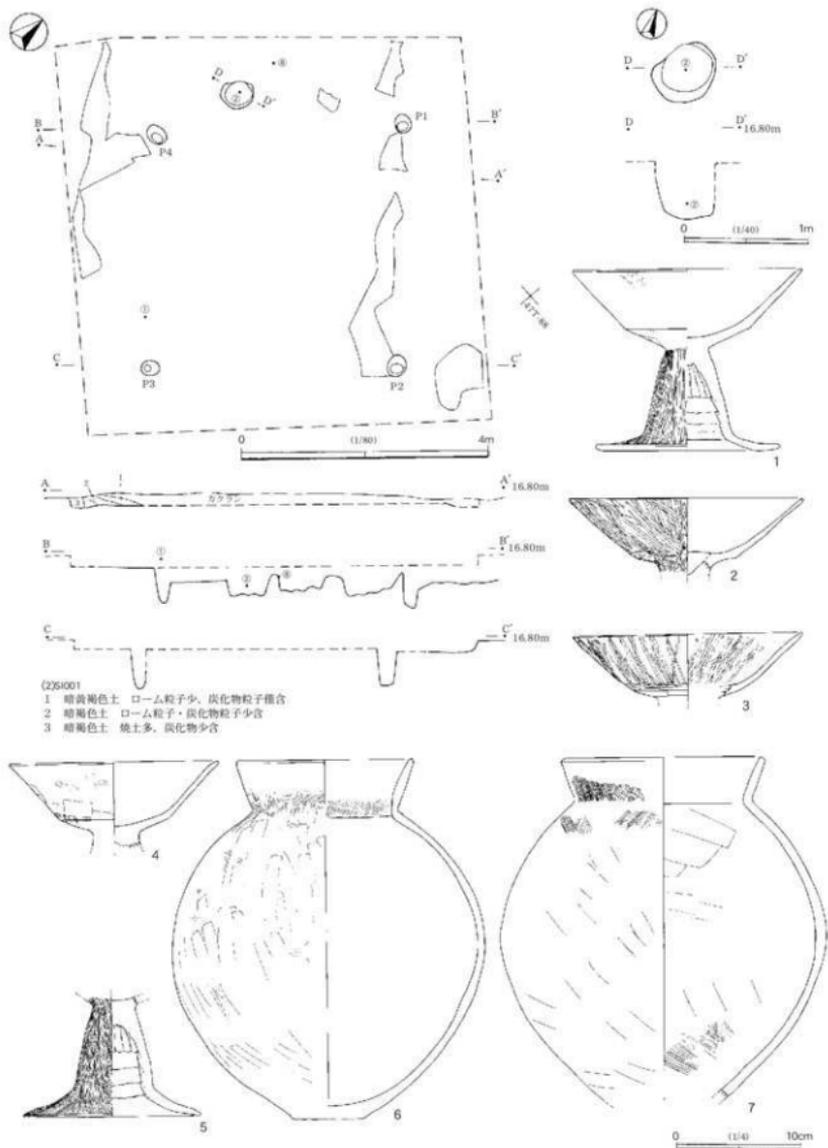
8は埴である。平底で口縁部に最大径をもち、外面は口縁部から胴部下位までミガキが施される。内面口縁部はハケ後ナデ、胴部はヘラナデ調整である。

9～13は埴で、9・10は口縁部、11～13は胴部が遺存する。9は内湾しながら開き、口縁端部で外反する器形、10は直線的に開く形状である。内外面ともミガキが施される。11は器厚が薄く、底部に直径3mmの穿孔が見られる。内面が剥離していることから、焼成後の穿孔と思われるが、意図的に開けられたものかどうかは不明である。

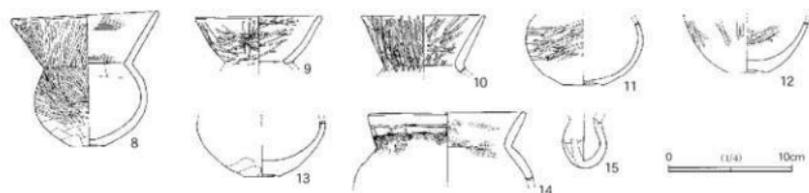
15はミニチュアで、長胴の甕形を呈し、口縁部を欠損する。内面はナデ、外面はヘラナデ調整である。

(4)SI001 (第4-34・35図、第4-1表、図版4-3・15)

調査区の南西端、50Q-26グリッド周辺に位置する。一辺6.80mの方形を呈し、主軸方向はN-47°-Wを指す。確認面からの深さは19cmと浅く、床面から焼土と炭化材が検出されている。炉は住居の北西中央に設置される。規模は長軸0.70m、短軸0.55m、深さは13cmである。柱穴は4基で、深さはP1が57cm、P2が61cm、P3が70cm、P4が66cmである。貯蔵穴は北隅にあり、直径0.7mの円形で、深さは55cmである。覆



第4-32図 (2)SI001①



第4-33図 (2)SI001②

土は黄褐色土の上に黒褐色土が堆積していた。壁溝は部分的に巡っている。南西・南東壁には見られず、北西壁も一部途切れる。幅は12cm～20cm、深さは5.2cmである。

出土遺物は多く、高杯・埴・壺・甕・ミニチュア・土玉・石製勾玉が住居内に点在している。特に土玉は8点と多く、北隅にやや集中する傾向がある。

**出土遺物** 1はミニチュアである。歪みながら埴形を模したものとされ、口縁部が直線的、あるいは内湾気味に開く。ヘラナデ調整で、内外面とも頸部にハケ目が見られる。

2～5は高杯である。2は杯部で、脚部との境に臍状の接合面が残る。杯部下端に突帯が巡り、口縁部が大きく外反して開く。内外面とも丁寧なナデで仕上げられ、赤彩が施される。3は杯部で、脚部との接合面で剥離している。杯部下端に稜を有し、口縁部が直線的に開く。外面はハケ後ミガキ、内面は横方向のまばらなミガキが施される。4・5は脚部である。4は直線的に開く円錐状の脚柱部から裾部が屈折して開く。5は膨らみのある円錐状で裾部を欠損している。4・5とも外面にミガキが施される。

6・7は埴である。6は口縁部から胴部上半にかけて遺存する。胴部の張りは弱く、口縁部が内湾気味に開く。胴部外面にはハケ後粗いミガキが施される。7は胴下半部である。平底で胴部は球形を呈するとされる。内外面とも被熱による器面の荒れが著しく、調整は不明瞭である。

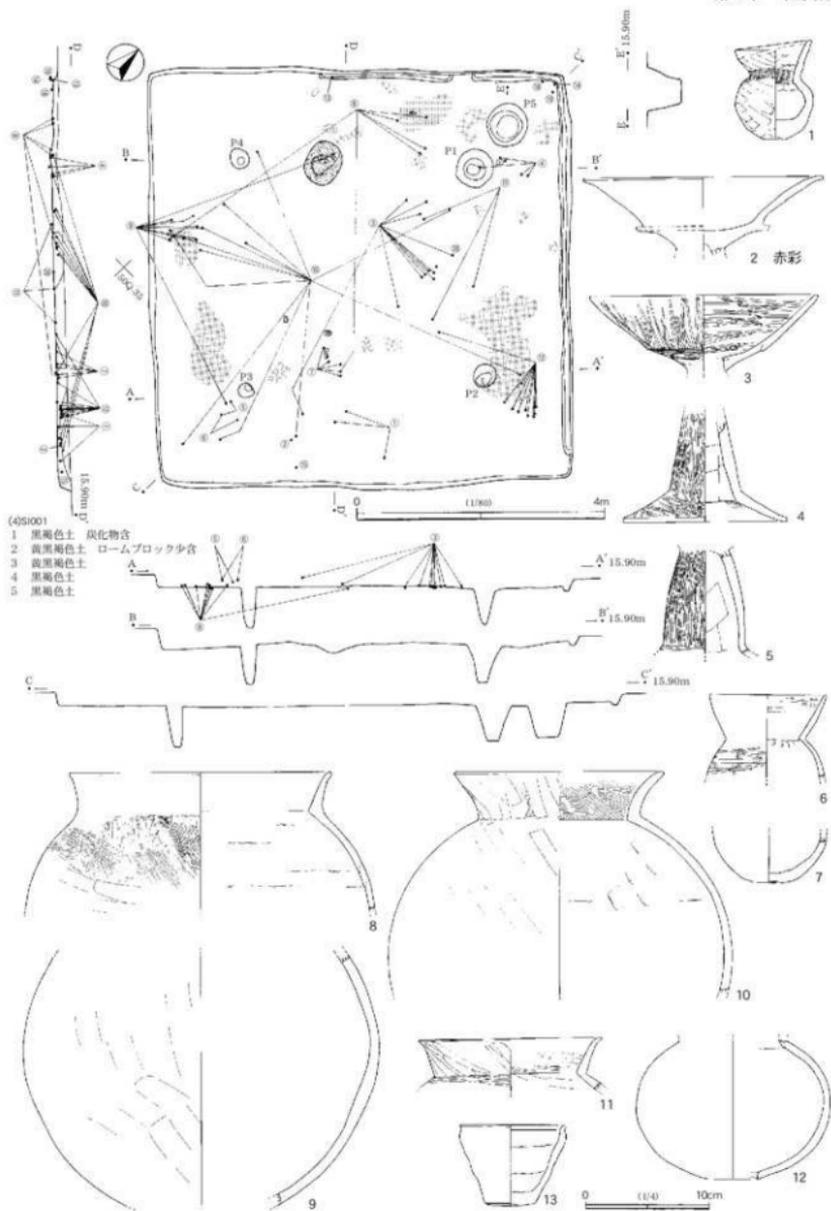
8～11は甕である。8は口縁部から胴部上位が遺存する。肩の張った形態で、外面はハケの後ヘラケズリが施されている。9は胴部のみで遺存し、球形を呈すると思われる。内面の調整はヘラナデ、外面はヘラケズリである。10は口縁部から胴部上半が遺存する。球形の胴部に「く」の字に外反する口縁部が付く。口縁部はハケ後ヘラナデ、胴部はヘラケズリ後ナデが施される。11は口縁部片で、「く」の字に大きく開いた後端部で外反する。口縁部内面はハケ後ヨコナデ、外面は斜方向のヘラナデ、わずかに残る胴部にはミガキが施されている。

12は小型の壺である。口縁部を欠損し、底部も10%程度の遺存である。外面はヘラケズリの後丁寧なナデ調整が施されている。

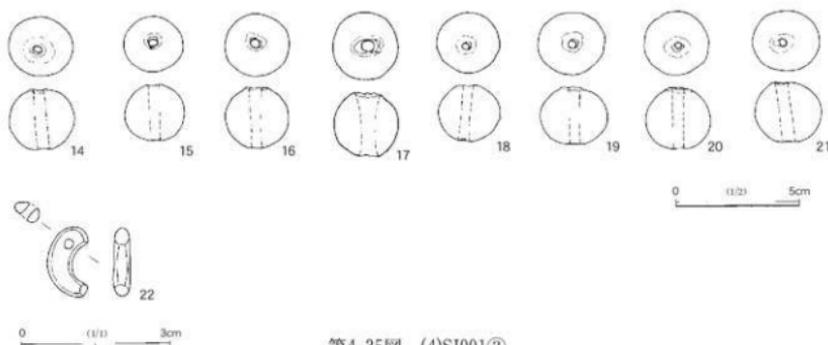
13は手捏ねである。体部が直線的に開く鉢形で、口縁部は摘み上げるように作られる。全体にナデ調整で仕上げられ、内面に輪積み痕を残す。

14～21は土玉である。直径2.4cm～2.8cm、重量11.79g～18.16g、孔径0.4cm～0.5cm、いずれも表面はナデによって平滑に整えられている。

22は滑石製の勾玉である。長さ14.0mm、厚さ3.0mm、幅5.0mm、重量0.58gで、表面は丁寧に研磨されている。



第4-34図 (4)SI001①



第4-35図 (4)SI001②

## (5)SI001 (第4-36図、第4-1表、図版4-3・15・16)

調査区の中央、48T-51グリッド周辺に位置する。攪乱が著しく、北東側1/3程の検出である。床面に硬化面は認められず、全体的に軟らかい。検出された範囲での規模は7.56m、主軸方向はN-48°-Wを指す。確認面からの深さは20cm~27cmである。炉は北壁中央付近から検出されたが、攪乱のため本来の形状は不明である。柱穴は東側から2基確認できた。深さはP1が53cm、P2が47cmである。壁溝は巡らない。貯蔵穴など、そのほかの付属施設は攪乱のため確認できなかった。

遺物は少なく、高杯・埴・土玉が覆土下層から中層にかけて点在している。

**出土遺物** 1・2は高杯である。1は杯部で、脚部との境に臍状の接合面が残る。杯部下位の稜はなく、口縁部が直線的に開く。外面は粗いミガキが施され、わずかではあるがハケの痕跡も認められる。内面は器面が荒れているため判然としないが、ミガキ調整と思われる。2は脚部で、杯部との境に臍状の接合面が残る。脚柱部は太く膨らみのある円錐形で、高い位置から裾部が開く。外面にミガキが施される。

3は埴である。最大径を胴部にもつが、頭部のくびれが弱い。外面はヘラケズリ後ナデ、口縁部内面はハケ後ナデが施される。全体に被熱による器面の剥離が見られる。

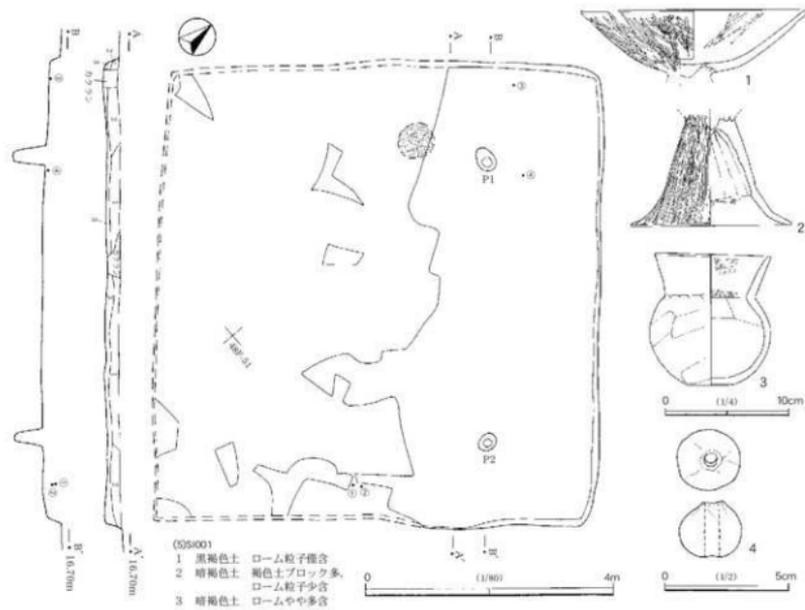
4は土玉である。表面はナデによって平滑に整えられている。

## (7)SI001 (第4-37図、第4-1表、図版4-3・16)

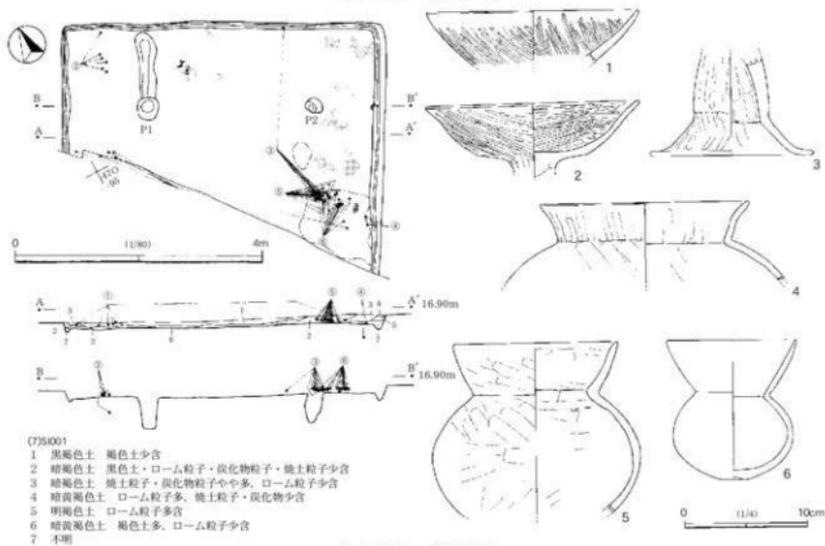
調査区の中央、47U-95グリッド周辺に位置する。南西側1/3ほどが攪乱のため未検出であるが、一辺5.23mの方形を呈するものと思われる。主軸方向はN-62°-W、確認面からの深さ12cm~19cmである。南西壁際に硬化面が見られた。炉や貯蔵穴などの付属施設は確認できなかった。柱穴は2基検出され、深さはP1、P2とも48cmである。P1の北側に長さ1.1m、幅30cm前後、深さ10cmの掘り込みが見られる。壁溝は検出された部分では全周する。幅5cm~20cm、深さは6cmで北西が狭くなっている。

遺物は南西壁際の硬化面周辺から集中して出土している。

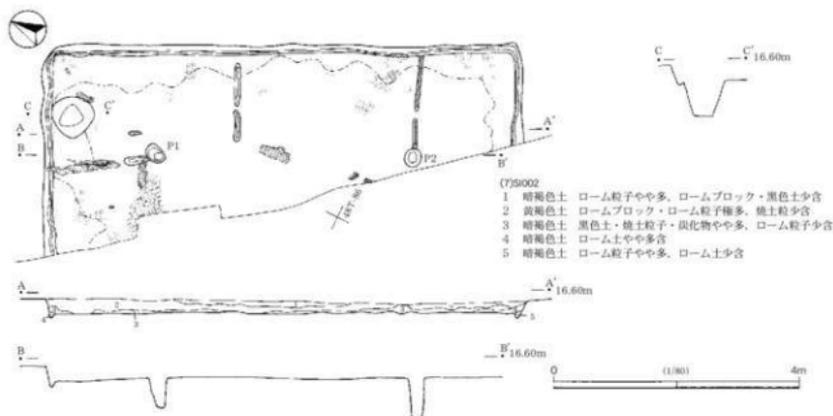
**出土遺物** 1~3は高杯である。1は口縁部のみで遺存である。内湾しながら開く形状で、内外面ともミガキが施されているが、調整は雑で光沢を伴ったヘラナデに近い。2は杯部で、脚部との境に臍状の接合面が残る。杯部下位に弱い稜を有し、体部が内湾しながら立ち上がった後口縁部で外反する。口唇部は面取りされている。内外面ともミガキ調整である。3は脚部である。膨らみのある円錐形の脚柱部から裾部



第4-36図 (5)SI001



第4-37図 (7)SI001



第4-38図 (7)SI002

が屈折して開く。ヘラナデ調整である。

4は甕で、口縁部から胴部上位にかけて遺存する。肩の張った形態で、内外面ともヘラナデ調整である。

5は壺である。胴部中位に最大径を有し、口縁部は内湾しながら開く。内外面とも光沢を伴ったヘラナデで仕上げられる。外面口縁部と胴部最大径付近に煤が付着している。胎土に白色粒子を多く含む。

6は埜である。口縁部に最大径を有し、底部が上げ底となる。内外面とも器面の荒れが著しく、調整不明瞭である。

(7)SI002 (第4-38図、第4-1表、図版4-3)

調査区の中央、48T-76グリッド周辺に位置する。西側2/3は調査区外のため、未検出である。主軸方向はN-26°-W、主軸長7.75mの方形を呈するものと思われる。確認面からの深さは15cm~20cmである。床面は壁際を除いた全面に硬化面が見られ、柱材も出土している。炬は北側中央から検出された。東西に長い不整な楕円形で、長軸1.10m、短軸0.62mである。柱穴は2基確認できた。深さはP1が149cm、P2が68cmである。貯蔵穴は北東隅にあり、直径0.68m、深さ57.8cmの円形を呈する。壁溝は幅10cm~20cm、深さ11cmで、検出された範囲では全周する。また、間仕切りと思われる幅10cm前後、深さ3cmの溝がP1の北側とP2の東側、東壁中央に見られる。

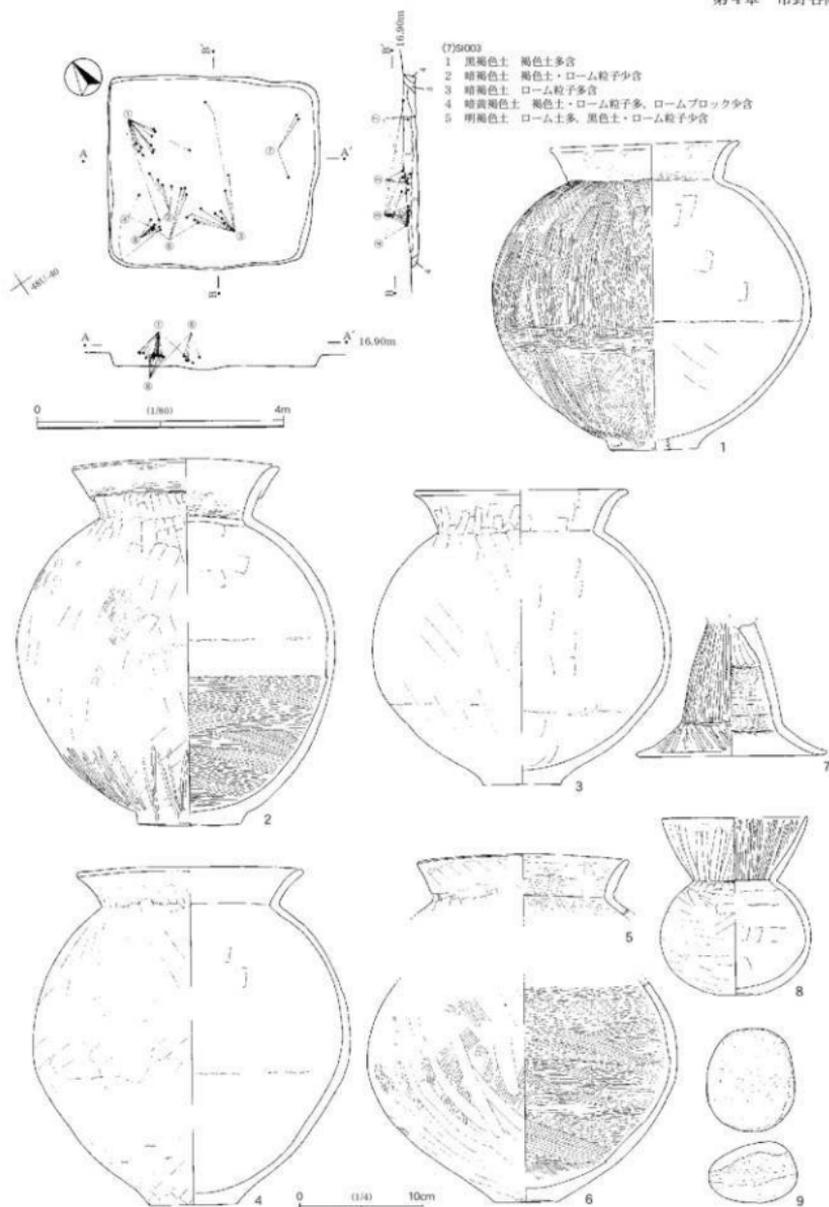
遺物は土師器甕片などが出土しているが、図化できるものはなかった。

(7)SI003 (第4-39図、第4-1表、図版4-3・7・16)

調査区の中央、48U-40グリッド周辺に位置する。炬跡、ビット等を伴わない小規模な住居跡である。平面形は方形で、規模は長軸3.42m、短軸3.15m、長軸方向はN-56°-Wである。確認面からの深さは7cm~20cmと浅い。北西壁でやや深くなるものの、床面は平坦で、硬化面は認められない。

遺物は東隅から高杯の脚部が正位で出土したほか、住居西側から、古墳時代中期の壺、甕が複数出土している。壺、甕は横倒しの状態で、胴部が潰れている。

**出土遺物** 1・3~6は甕である。1は球形の胴部に外反する口縁部が付く。内面胴部最大径付近に輪積み痕が見られる。外面の調整はハケ後胴部中位から下位にかけてミガキ、底部はハケ後ミガキである。胴



第4-39図 (7)SI003

部内面はヘラナデで、工具痕が顕著に残る。口縁部は内外面ともハケ後ヨコナデが施される。3は同一個体と思われる2個体を図上で復元した。最大径を胴部中位よりやや下に有する。胴部はヘラナデ調整である。4は胴部中位よりやや下に最大径を有する。胴部はヘラナデ調整である。5は口縁部片で、ハケ調整の後ヨコナデが施されている。頸部外面にヘラナデによる段が形成されている部分も見られる。6は胴部中位から底部にかけて遺存する。胴部内面はハケ、胴部下位の輪積み痕以下はヘラナデが主体となる。外面はハケ後ヘラナデが施される。

2は複合口縁の壺である。球形を呈し、底部がやや突出する。外面の調整はハケ後ヘラナデ、胴部下位に粗いミガキが施される。内面は胴部最大径より下半がハケ、上半がヘラナデ、口縁部から頸部にかけてはハケ後ヨコナデである。

7は高杯の脚部である。杯部との境に接合面が残っている。膨らみのある円錐形の脚柱部から裾部が屈折して開く。外面はミガキ、内面はハケ調整の後裾部にヨコナデが施される。

8は埴である。球形の胴部から口頸部が内湾気味に立ち上がる。口径と胴部最大径がほぼ等しく、底部が上げ底となる。胴部外面ヘラケズリの後ヘラナデ、口縁部内面にミガキが施される。

9は流紋岩製の磨石である。楕円形礫を素材として、側縁部は敲打した後に研磨されている。

## 第4節 平安時代

### 1. 竪穴住居跡

調査区の南西から1軒のみ検出された。出土した遺物から、9世紀中頃～後半に属するものと思われる。当該期の遺構は隣接する遺跡からは見つかっておらず、「離れ国分」的な様相を呈する。

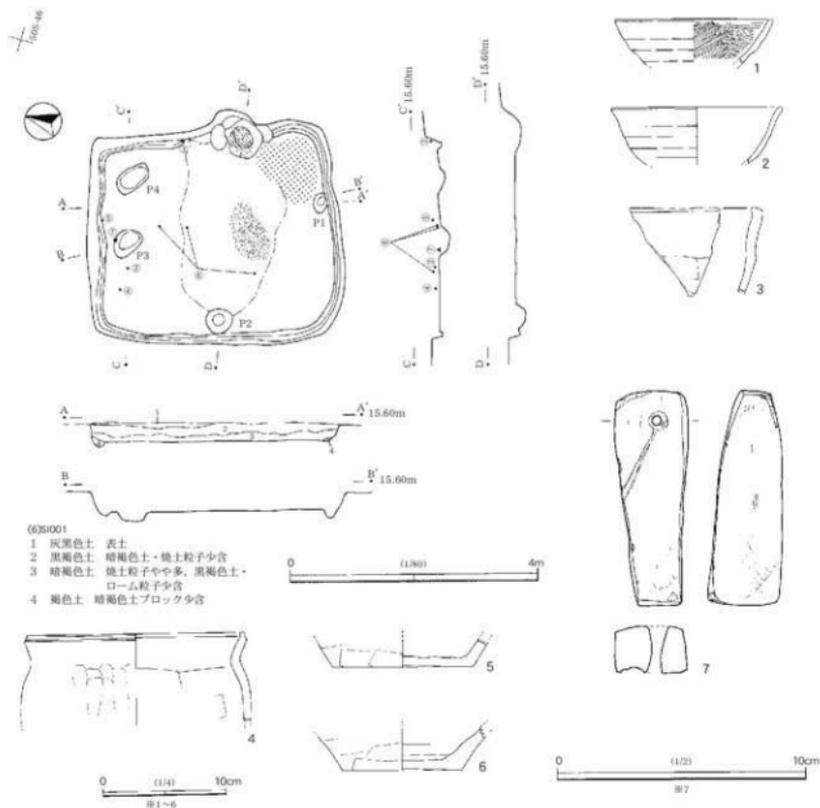
#### (6)SI001 (第4-40図、第4-1表、図版4-3・7)

調査区の南、50S-55グリッド周辺に位置する。平面形は南北に長い方形で、主軸方向はN-74°-Eを指す。規模は長軸4.16m、短軸3.45m、確認面からの深さ10cm～29cmを測る。床面は中央部分がよく踏み固められていた。カマドは東壁に設置されるが、遺存状態が悪く、床面にカマドのものと思われる焼土と砂質土が堆積していた。そのため、住居廃棄時にカマドを意図的に壊した可能性がある。また、北壁中央には旧カマドのものと思われるピットも検出されている。焼土、壁への掘り込みは見られないが、南壁際には旧カマドに対応する出入り口ピットもあり、北から東へカマドの掛け替えが行われたと考えられる。壁溝は18cm～30cm、深さ4cm～10cmで、カマド部分を除き全周する。ピットは4基検出された。旧カマドに対応する出入り口ピットP1の深さは13cm、新カマドに対応する出入り口ピットP2は13cm、旧カマド跡と思われるP3は16cm、北東隅のP4は10cmである。P4は貯蔵穴か。覆土は暗褐色土と黒褐色土を主体とする。

遺物は少なく、床面中央から北側にかけて点在する。

**出土遺物** 1・2はロクロ成形の土師器杯である。1は体部が内湾気味に開く器形で、内面にミガキ及び黒色処理が施される。2は体部が内湾しながら立ち上がった後、口縁部で外反する。外面体部下端に回転ヘラケズリを加える。

3は土師器鉢である。小片のため、器形の復元は行わなかった。口縁部と体部の境に稜をもち、口縁端部がわずかに内側に突出する。口縁部の調整は内外面ともヨコナデ、体部外面は横方向のヘラケズリである。外面には煤が付着している。



第4-40図 (6)SI001

4～6は土師器甕である。4は胴部の張りが弱く、口縁端部は斜め上方に摘み上げられている。5・6は底部である。2点ともロクロ成形と思われる、底部に回転糸切り痕が見られる。胴部外面及び底部の調整は横方向の手持ちヘラケズリである。

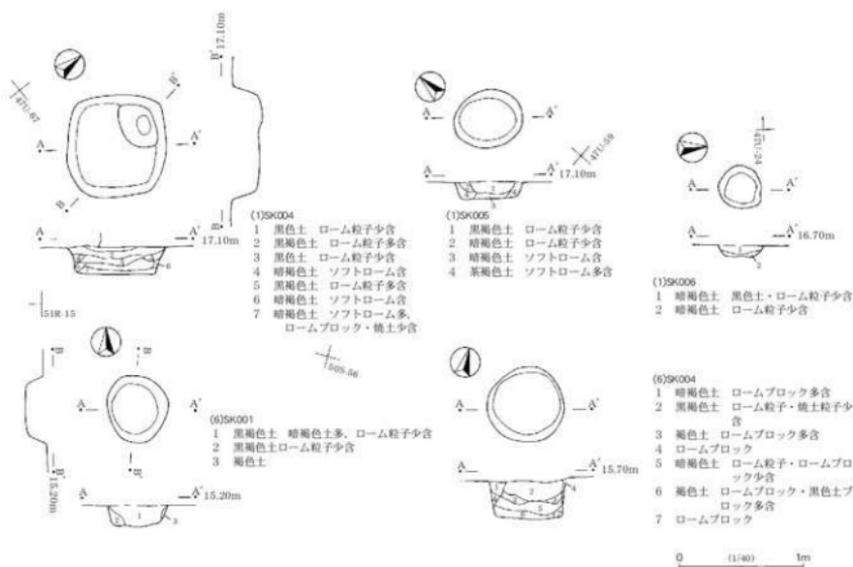
7は珪質凝灰岩製の有孔砥石である。重量96.19g、方柱状の形態をしており、全面が研磨されている。孔は表面側からの片面穿孔である。表面には、孔から左下方向に浅い凹みが伸びている。

## 2. 土坑

遺構に伴う出土遺物が少なく、明確ではないが、該期の土坑は2基である。いずれも調査区の南から検出された。

### (6)SK001 (第4-41図、図版4-3)

調査区の南端、51R-15グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸方位はN-16°-Wである。



第4-41図 土坑（平安時代以降）

規模は長軸1.13m、短軸0.98m、確認面からの深さ29cmを測り、床面は平坦である。黒褐色土を主体とする覆土はほぼ一様で、旧表土に似ている。埋め戻された可能性がある。遺物はロクロ成形の土師器杯口縁部片1点、土師器甕の胴部片1点が出土している。

#### (6)SK004（第4-12・41図、図版4-4・10）

調査区の南、50S-46、56グリッドに位置する。(6)SI001から東へ3mほどの距離にある。平面形は直径1.25mの円形で、長軸方位はN-74°-Eである。確認面からの深さは61cm、床面は平坦である。少量の縄文土器を出土するが、(6)SI001、(6)SK001と同様、黒褐色土主体の覆土であるため、平安時代の土坑と考えられる。また、(6)SI001と近いことから、(6)SI001の付属施設の可能性がある。

遺物は黒浜式の胴部片1点を第4-12図に示したが、本遺構に伴うものではないと思われる。

## 第5節 中世～近世

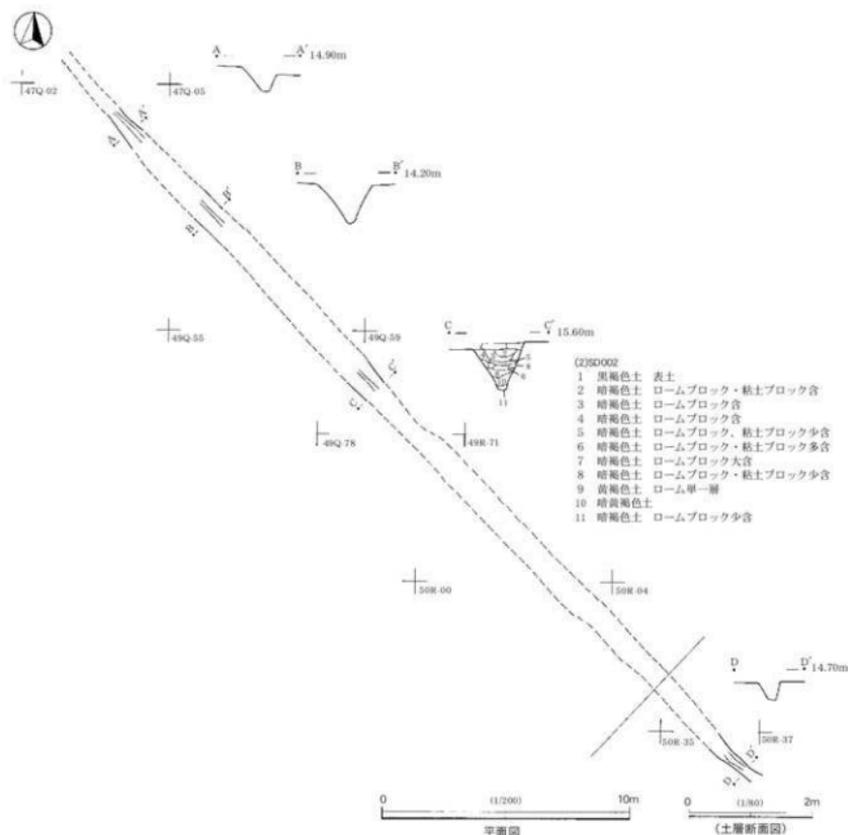
### 1. 土坑

#### (1)SK004（第4-41図、図版4-4）

調査区の北東、47U-67グリッドに位置する焼土遺構である。一辺1.63mの方形を呈し、長軸方位はN-50°-Wを指す。確認面からの深さ42cmで、床面はわずかにレンズ状に窪む。北隅に11cmほどの浅いピットを有する。覆土は焼土を少量含んだ暗褐色土に、黒褐色土と黒色土が交互に堆積している。

#### (1)SK005（第4-41図、図版4-4）

調査区の北東、47U-59グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-41°-W、規模は長軸1.10m、短軸0.95m、確認面からの深さ28cmである。床面は北西に向かってやや傾斜している。覆土は



第4-42図 溝状遺構

暗褐色土を主体とする。

#### (1)SK006 (第4-41図、図版4-4)

調査区の北東、47U-24グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形を呈する。長軸方位は $N-30^{\circ}-W$ 、規模は長軸0.70m、短軸0.63m、確認面からの深さ19cmである。床面にやや凹凸が見られる。覆土は暗褐色土を主体とする。

## 2. 溝状遺構

#### (2)SD002+ (6)SD001 (第4-42図、図版4-4)

調査区の南西、49Q-05グリッド周辺に位置する。トレンチによる断続的な調査であるが、北西から南東へ直線的に延びる溝状遺構であることが確認できた。北東側の台地と南西側の台地に挟まれた浅い谷を

通って、坂川河岸から台地を結んでいるようである。南端は攪乱を受けているため、不明瞭であるが、50 R-47グリッドで終了すると考えられる。検出された範囲の長さは90m、幅1m～2m、確認面からの深さは北西で76cm、中央で163cm、南東で84cmである。断面形は逆台形で、底面は平坦だが硬化はしておらず、道路ではないと思われる。また、ビット等も検出されなかったため、野馬場ではない。覆土は暗褐色土を主体とし、全体的にしまりがなく、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は縄文時代前期黒浜式期の土器片や、古墳時代中期の土師器片、近世の焙烙片等が見られるが、いずれも小片のため図化はしなかった。

第4-1表 古墳～平安時代 出土土器観察表(1)

探検番号	遺物番号	部材	形状	L (cm)	W (cm)	高さ (cm)	透水性 (%)	色澤	胎土	産地		備考
										内産	外産	
1-3区	1-0151001	1-302	片	12.0	3.7	8.7	65%	褐色	産	ハク、ナブ	ハク、ハクナブ、ナブ	縄文時代前期
	1-0151002	1-302	片	18.5	14.2	18.2	65%	褐色	産	ハク、ハクナブ、ナブ、 ヒメ	ハク、ハクナブ、ナブ、 ヒメ	
	1-0151003	1-302	片	115.2	116.1	95		褐色	産	ハク、ハクナブ、ナブ	ハク、ハクナブ、ナブ、 ヒメ	
	1-0151004	1-302	片	19.1	-	3.1	10%	褐色	産	ハク、ナブ	ハクナブ、ナブ、ヒメ	
	1-0151005	1-302	片	-	-	3.5	3%	褐色	産	ハク、ハクナブ	ハク、ハクナブ、ヒメ	
	1-0151006	1-302	片	-	-	6.7	10%	褐色	産	ハクナブ	ヒメ	
	1-0151007	1-302	片	114.2	124.0	105		褐色	産	ハク、ハクナブ、ナブ、 ヒメ	ハクナブ、ナブ、ヒメ	
	1-0151008	1-302	片	17.9	8.0	31.7	60%	褐色	産	ナブ、ハクナブ、ヒメ	ナブ、ハクナブ、ヒメ	
	1-0151009	1-302	片	122.0	-	36.7	10%	褐色	産	ナブ、ハクナブ	ナブ、ハクナブ、ヒメ	
	1-0151010	1-302	片	2.3	5.8	80%		褐色	産	ハクナブ	ヒメ	
1-4区	1-0151011	1-401	土	85.2	192.2	41.0	60%	赤褐色	産	ナブ	ナブ	縄文時代前期
	1-0151012	1-401	土	17.8	3.8	8.5	10%	褐色	産	ナブ、ハクナブ	ナブ、ヒメ	
	1-0151013	1-401	土	9.3	1.2	6.8	100%	褐色	産	ナブ、ハクナブ、ヒメ	ハクナブ、ヒメ	
	1-0151014	1-401	土	18.2	36.2	30%		褐色	産	ナブ	ナブ、ナブ	
	1-0151015	1-401	土	115.3	36.7	45%		褐色	産	ハクナブ、ハクナブ、ヒメ	ハクナブ、ナブ、ヒメ	
	1-0151016	1-401	土	-	119.2	3.7	35%	褐色	産	ナブ、ハクナブ、ヒメ	ハクナブ、ナブ、ヒメ	
	1-0151017	1-401	土	11.5	8.0	4.0	100%	褐色	産	ナブ、ハクナブ、ヒメ	ハクナブ、ナブ、ヒメ	
	1-0151018	1-401	土	2.2	1.4	3%		褐色	産	産地不明土器	ハクナブ、ナブ、ヒメ	
	1-0151019	1-401	土	3.8	71.0	30%		褐色	産	産地不明土器	ハクナブ、ナブ、ヒメ	
	1-5区	1-0151020	1-501	土	151.3	193.5	11.0	60%	褐色	産	ナブ	
1-0151021		1-501	土	85.3	147.3	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
1-0151022		1-501	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
1-0151023		1-501	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
1-0151024		1-501	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
1-0151025		1-501	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
1-0151026		1-501	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
1-0151027		1-501	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
1-0151028		1-501	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
1-0151029		1-501	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
1-6区	1-0151030	1-601	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	縄文時代前期
	1-0151031	1-601	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151032	1-601	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151033	1-601	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151034	1-601	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151035	1-601	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151036	1-601	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151037	1-601	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151038	1-601	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151039	1-601	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
1-7区	1-0151040	1-701	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	縄文時代前期
	1-0151041	1-701	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151042	1-701	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151043	1-701	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151044	1-701	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151045	1-701	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151046	1-701	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151047	1-701	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151048	1-701	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	
	1-0151049	1-701	土	115.2	143.0	11.0	60%	褐色	産	ナブ	ナブ	

第4-1表 古墳～平安時代 出土土器観察表(2)

〔1〕土器観察表〔2〕土器観察表

墳墓番号	遺体番号	遺物	類別	口径	底径	器高	器口径	色相	取上	位置		備考		
										内径	外面			
1-30区	8	405-801	土師器	壺	-	-	120.5	30%	褐色	蓋	ヘラナガ	ヘラナガ	内面底縁	
	9	405-801	土師器	壺	12.5	-	116.1	20%	褐色	蓋	ヘラナガ、ハシ、ナガ	ヘラナガ、ハシ、ヘラナガ		
	1	405-801	土師器	壺	14.8	-	119.7	2%	褐色	蓋	ハシ、ヘラナガ、ナガ	ナガ、ヘラナガ、ヘラナガ		
	2	405-801	土師器	壺	-	16.0	111.1	30%	黄褐色	蓋	ナガ	ヘラナガ、ナガ	外面底	
	3	405-801	土師器	壺	16.5	4.0	5.6	50%	褐色	蓋	ナガ	ナガ	内面底縁	
	1-30区	11	405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径						
		12	405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径						
		13	405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径						
		14	405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径						
		15	405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径						
		16	405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径						
		17	405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径						
18		405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径							
19		405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径							
20		405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径							
21		405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径							
22		405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径							
1-30区	1	405-801	土師器	壺	18.1	-	115.5	30%	褐色	蓋	ナガ、ハシ	ハシ、ヘラナガ、ナガ	内面底縁	
	2	405-801	土師器	壺	-	112.0	76.5	30%	褐色	蓋	ハシ、ナガ	ハシ、ナガ、ハシ	外面底	
	3	405-801	土師器	壺	8.1	3.7	10.7	100%	褐色	蓋	ハシ、ナガ、ヘラナガ	ヘラナガ、ナガ	外面底	
	4	405-801	土師器	土丸	底径	器高	器口径							
	5	405-801	土師器	壺	17.1	-	114.5	10%	褐色	蓋	ナガ、ハシ	ナガ、ヘラナガ、ハシ		
1-30区	1	405-801	土師器	壺	17.5	-	110.0	40%	褐色	蓋	ナガ、ハシ	ナガ、ヘラナガ、ハシ		
	2	405-801	土師器	壺	17.5	-	110.0	40%	褐色	蓋	ナガ、ハシ	ナガ、ヘラナガ、ハシ		
	3	405-801	土師器	壺	17.5	-	110.0	40%	褐色	蓋	ナガ、ハシ	ナガ、ヘラナガ、ハシ		
	4	405-801	土師器	壺	16.9	-	116.1	40%	褐色	蓋	ナガ、ヘラナガ	ナガ、ヘラナガ		
	5	405-801	土師器	壺	15.1	-	113.0	40%	褐色	蓋	ナガ、ヘラナガ	ナガ、ヘラナガ		
	6	405-801	土師器	壺	16.5	2.2	11.3	30%	褐色	蓋	ナガ、ヘラナガ	ナガ、ヘラナガ		
	7	405-801	土師器	壺	15.1	7.2	25.0	60%	褐色	蓋	ナガ、ヘラナガ、ナガ	ハシ、ナガ、ハシ		
	8	405-801	土師器	壺	16.5	8.4	29.8	70%	褐色	蓋	ナガ、ヘラナガ、ナガ	ハシ、ヘラナガ、ナガ		
	9	405-801	土師器	壺	17.6	6.3	29.3	30%	褐色	蓋	ナガ、ヘラナガ	ナガ、ヘラナガ		
	10	405-801	土師器	壺	18.0	7.1	25.6	40%	褐色	蓋	ナガ、ヘラナガ	ナガ、ヘラナガ		
1-30区	1	405-801	土師器	壺	16.8	-	111.1	3%	褐色	蓋	ナガ、ヘラナガ	ナガ、ヘラナガ、ナガ		
	2	405-801	土師器	壺	-	5.0	116.0	50%	褐色	蓋	ナガ、ヘラナガ	ナガ、ヘラナガ		
	3	405-801	土師器	壺	-	15.4	118.0	50%	褐色	蓋	ナガ、ナガ	ナガ、ヘラナガ		
	4	405-801	土師器	壺	11.8	3.0	11.5	50%	褐色	蓋	ナガ、ヘラナガ、ハシ	ナガ、ヘラナガ、ハシ		
	5	405-801	土師器	壺	12.1	-	117.1	10%	褐色	蓋	ナガ、ハシ	ナガ、ハシ	外面底縁	
	6	405-801	土師器	壺	113.0	-	14.5	35%	褐色	蓋	ナガ	ナガ、ナガ、ヘラナガ	外面底	
	7	405-801	土師器	壺	-	-	-	-	褐色	蓋	ナガ	ヘラナガ、ナガ	外面底	
	8	405-801	土師器	壺	17.5	-	111.1	3%	褐色	蓋	ナガ、ヘラナガ	ヘラナガ、ナガ	外面底縁	
	9	405-801	土師器	壺	-	11.0	11.0	3%	褐色	蓋	ナガ	ヘラナガ	外面底縁	
	10	405-801	土師器	壺	16.5	-	111.1	3%	褐色	蓋	ナガ	ヘラナガ	外面底縁	

## 第6節 旧石器時代（補遺）

第1次～第6次調査において出土した旧石器時代の遺構・遺物に関しては、すでに『流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書5』（2011）〔次回以降、『報告書5』と記載する〕で報告済み<sup>1)</sup>である。

しかしながら、今回上層（縄文時代以降）の整理を行った際に、第2次調査分と第5次調査分で、当初上層に帰属すると判断していた遺物の中に、旧石器時代に帰属する時期の石器が含まれていた。本節において、これらの報告漏れとなってしまう旧石器時代の石器について、旧石器時代（補遺）として記載することにする。

補遺として報告する遺物は、次のとおりである。第5次調査分は、『報告書5』において第3文化層第20ブロックと報告した東側に隣接して分布する。今回追加報告分は第3文化層第20ブロックに含めることにする。第2次調査の上層の確認調査である第15トレンチから単独で出土しており、単独出土石器として報告する。

### 1. 第3文化層第20ブロック（第4-43～45図、第4-2・3表、図版4-5）

**出土状況** 遺跡北側中央部の46S-79・89・99、46T-70・80・81・90グリッドに分布している。西側が報告書5掲載分で、東側の46T-81グリッドの確認グリッドと46T-70グリッドが今回報告分である。

今回報告分の33点が追加されたことにより、第20ブロック全体としては、7.6m×8.4mの範囲から181点出土したことになる。第3文化層の中で最も出土点数が多い。出土層位は、V層上部からⅢ層にかけてで、V層～Ⅳ層下部に集中する。北西部・南部・南東部の3か所の集中地点が見られる。今回の追加報告により、南東部の集中地点に礫片が比較的多く分布することが判明した。南東部と北西部の集中地点では、石器類と礫・礫片が伴っているが、南部の集中地点は石器類のみが密集している。

**出土石器** 器種組成は、今回報告分が、ナイフ形石器3点、搔器2点、二次加工のある剥片3点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片10点、石核4点、礫片10点である。第20ブロック全体では、ナイフ形石器12点、搔器2点、二次加工のある剥片11点、微細剥離痕のある剥片5点、剥片84点、砕片5点、石核7点、敲石1点、礫1点、礫片53点である。石材組成は、今回報告分が、ガラス質黒色安山岩8点、流紋岩1点、砂岩2点、珪質頁岩3点、嶺岡産珪質頁岩6点、チャート12点、玉髄1点である。第20ブロック全体では、チャート71点、嶺岡産珪質頁岩51点、ガラス質黒色安山岩34点、珪質頁岩11点、砂岩5点、頁岩3点、ホルンフェルス3点、トロトロ石1点、流紋岩1点、玉髄1点である。

出土石器の挿図番号については、報告書5掲載分においては1～22を掲載したので、今回報告分については、その続きの23～35をつけることにした。

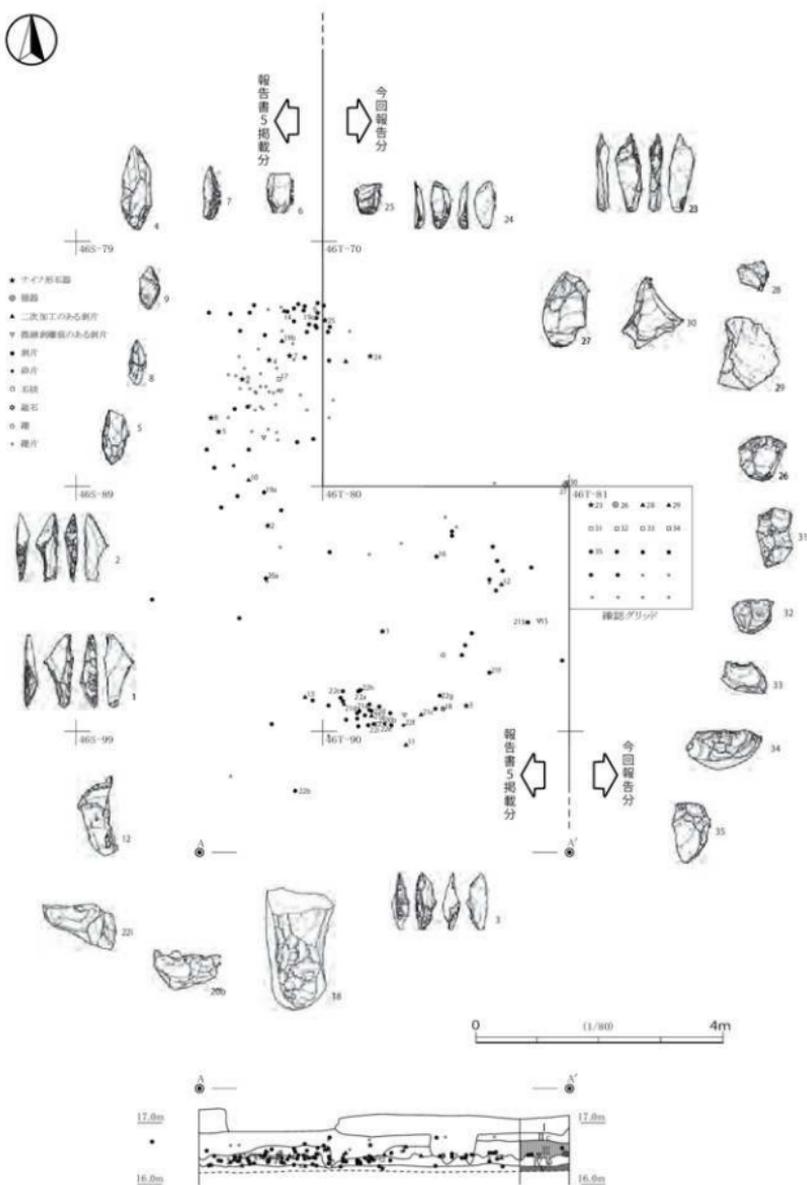
23～25はナイフ形石器である。23は板状の幅広剥片を素材として、両側縁を折断により成形した後に、右側縁は、中部が背面、上部が腹面からの対向調整加工が施されている。左側縁は上部に抉状の調整加工が施されている。先端部が尖った形状をしている。左側縁上部にわずかに素材の縁辺が残されている。先端部の片側に抉状の調整加工を施し先端部を尖らせた形態は、報告書5で掲載した3・7のナイフ形石器や12・13の二次加工のある剥片に見られた形態と類似しており、本ブロックを特徴づける石器といえよう。24は縦長剥片を素材として、素材末端部側を基部に設置している。先端部は破損している。右側縁下部と左側縁下部は急角度の調整加工が入念に施されている。25は縦長剥片を素材として、素材打面側を基部に設置している。右側縁下部は粗い調整加工が施され、左側面下部は急角度の調整加工が入念に施されている。24・25は全体形状が不明であるが、報告書5で掲載した4・6の基部加工のナイフ形石器と形態的

第4-2表 第3文化層第20ブロック (今回報告分)

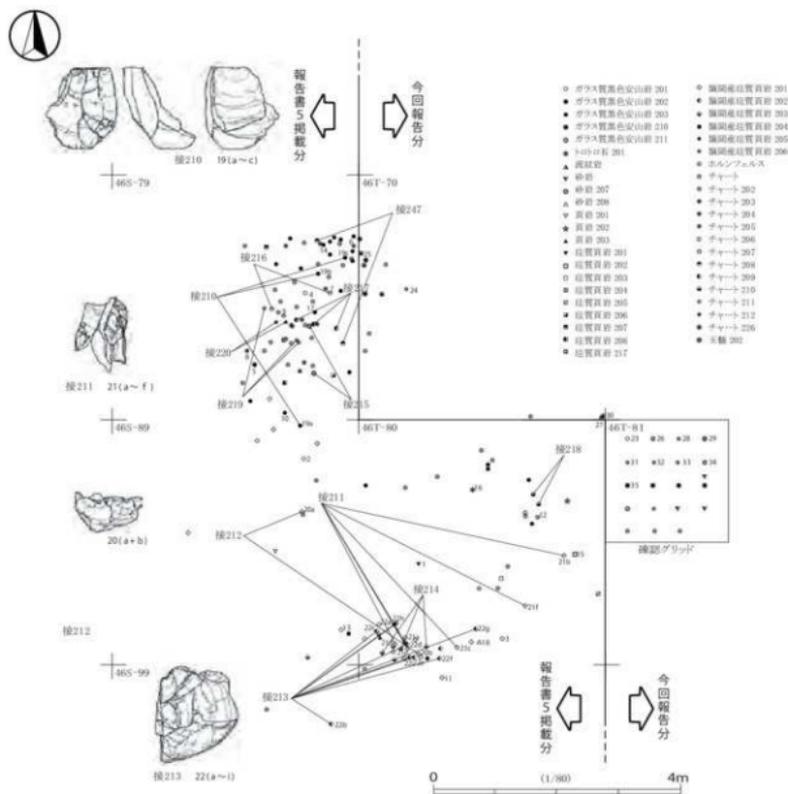
品名	検出数	タイプ別数	種別	二次加工の有無	修理・補修の有無	材質	形状	種別	点検数	点検率 (%)	重量合計 (g)	重量率 (%)
ガラス製黒色平山部	210					6			0	18.11	24.42	3.58
	211					1			2	6.01	8.66	2.72
ガラス製黒色山部点検品						2			8	24.24	31.08	12.58
漆									1	3.03	35.07	14.39
漆									2	6.01	35.51	14.89
磁器製黒部	212		2						3	9.03	42.60	17.46
陶器製黒部	206			1			1	2	5	18.18	31.22	12.73
土	208			1		2			5	15.15	9.78	3.88
チャーム									7	21.21	37.28	15.21
チャーム点検合計				1	1	2			7	12	36.30	18.19
点検品数合計	202								1	3.03	21.44	8.74
点検品数割合 (%)		3	2	3	1	19	4	10	23	100.00	245.17	100.00
点検品数割合 (%)		5.93	6.08	5.93	3.03	30.33	12.12	30.33	100.00			

第4-3表 第3文化層第20ブロック (今回報告分+報告書5掲載分)

品名	検出数	タイプ別数	種別	二次加工の有無	修理・補修の有無	材質	形状	種別	点検数	点検率 (%)	重量合計 (g)	重量率 (%)
ガラス製黒色平山部	201								1	0.55	6.31	0.24
	202								1	0.55	3.79	0.20
	203		2						24	13.26	223.81	12.10
	210								6	3.31	34.42	1.52
	211								2	1.10	6.88	0.36
ガラス製黒色山部点検品								24	18.75	254.99	14.22	
トコトコ	201								1	0.55	24.83	1.45
	207								1	0.55	35.07	1.80
	208								2	1.10	29.45	1.52
	209								1	0.55	137.25	6.50
印章点検品									2	1.10	36.31	1.57
									4	2.20	223.21	12.01
									1	0.55	9.29	0.50
漆	202								1	0.55	7.04	0.31
	205								1	0.55	30.50	1.80
	205			2	1				3	1.65	18.53	0.85
漆製黒部	201								1	0.55	5.16	0.23
	202								1	0.55	4.35	0.24
	203								1	0.55	8.28	0.45
	204								1	0.55	8.50	0.33
	205								1	0.55	18.72	0.90
	206								1	0.55	12.41	0.57
	207								1	0.55	20.94	1.13
	208								1	0.55	49.70	4.85
	217		2						2	1.10	42.56	2.31
	217		2		1	6	1		11	6.06	208.52	11.78
	陶器製黒部点検品	201		2	4	10	3	1		26	14.36	92.30
202					7	1	1		10	5.52	85.31	4.64
203						7			7	3.87	23.98	1.39
204						1			1	0.55	21.42	1.18
205						1			1	0.55	5.76	0.31
206						1	3		5	3.31	31.22	1.89
漆製黒部点検品									53	28.18	180.63	14.13
									1	0.55	123.06	7.19
チャーム	200								10	5.52	37.96	2.05
	203		1	2	1				5	3.21	18.16	0.88
	204								3	1.66	4.56	0.24
	205								1	0.55	1.53	0.08
	206								1	0.55	1.18	0.06
	207								2	1.10	6.44	0.35
	208								2	1.10	24.23	1.21
	209								3	1.66	14.46	0.78
	210								2	1.10	5.78	0.47
	211								3	1.66	23.30	1.28
	212								2	1.10	66.32	2.89
	228			1	1	2			5	2.76	5.76	0.35
	228								31	31	171.5	24.03
	チャーム点検合計	5		3	9	14			46	7	39.23	461.42
点検品数合計	200							1	0.55	21.44	1.15	
点検品数割合 (%)		12	2	17	5	84	5	7	1	53	163	100.00
点検品数割合 (%)		0.83	1.10	8.08	2.78	48.41	2.76	3.87	0.55	6.55	29.28	100.00



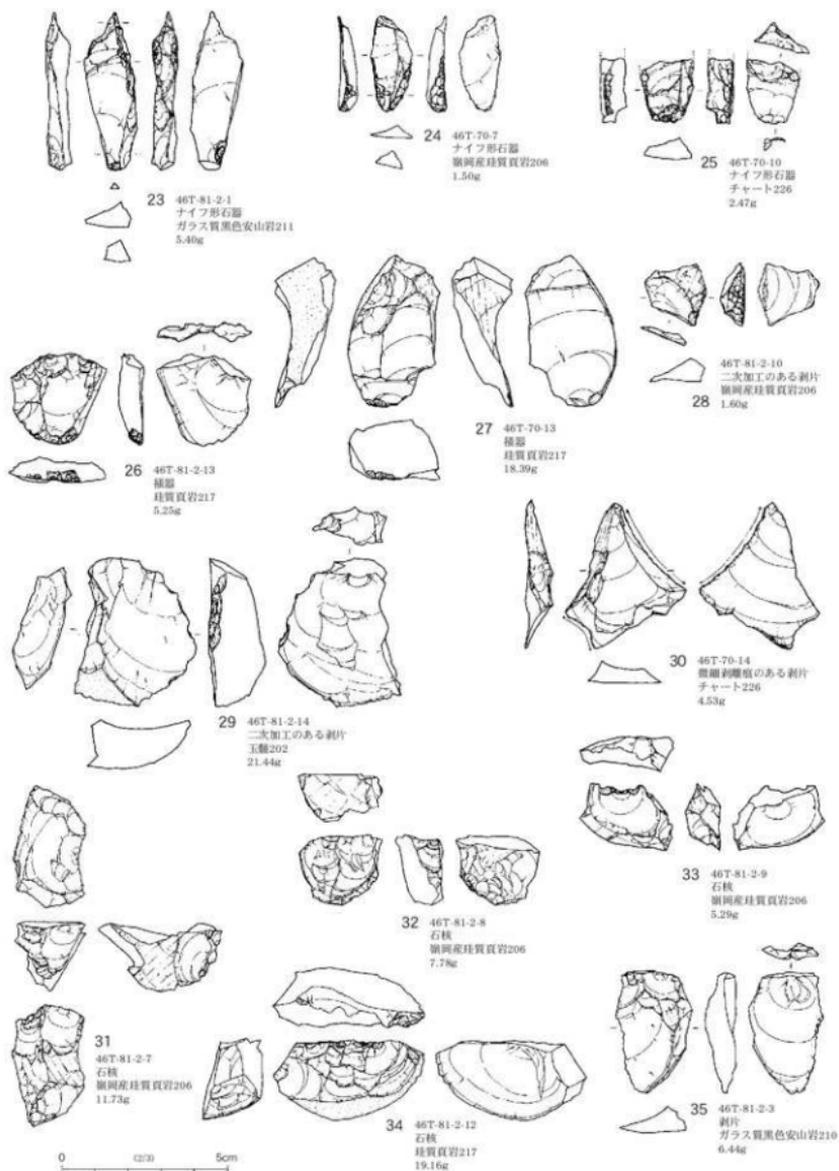
第4-43図 第3文化層第20ブロック器種別分布



第4-44図 第3文化層第20ブロック母岩別分布

に類似する。

26・27は槌器である。同一母岩の珪質頁岩217が用いられている。報告書5で掲載したものには、槌器が出土していなかったが、今回の追加分により、槌器が追加され石器群の内容がより豊富になった。26は幅広の厚みのない剥片を素材として、下端部の素材末端部に比較的平坦な調整加工を入念に施している。平面的には緩やかな弧を描く刃部が作られている。27は末端部が石核の底面を取り込んだ形状をした縦長剥片を素材としている。素材打面部側は非常に厚みのない形状をしており、下端部の素材打面部側に急角度の調整加工を入念に施している。平面的には下端部は緩やかな弧を描く刃部が作られている。26と比較すると素材の形状は大きく異なるが、刃部の形状は類似する。



第4-45図 第3文化層第20ブロック出土石器

28・29は二次加工のある剥片である。28は縦長剥片を素材として、右側縁の素材打面側面に急角度の調整加工が施されている。29は厚みのある幅広剥片を素材として、右側縁上部に粗い調整加工が施されている。左側縁は折れている。30は微細剥離痕のある剥片である。幅広の剥片を素材として、素材縁辺部に微細剥離痕が見られる。

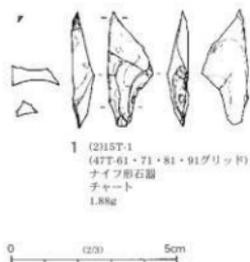
31～34は石核である。31は節理面に沿って分割された剥片を素材として、打面を右面下部→上面右側→表面上部に順番に転移して小型の剥片を剥離している。32は分割剥片を素材として、上面の節理面を打面として小型の剥片を剥離している。33は横長剥片を素材として、表面上部から横長剥片を剥離している。34は下面に自然面を大きく残した横長剥片を素材として、表面上部から小型の剥片を剥離している。

35は縦長剥片である。頭部調整が顕著に行われている。

## 2. 単独出土石器 (第4-46図、図版4-5)

第2次調査の上層において、第15トレンチからナイフ形石器が1点出土した。一括資料として取り上げているため正確な出土位置は不明であるが、47T-61・71・81・91グリッド付近から出土している。

1は切出形のナイフ形石器である。良質のチャートが用いられている。末端部が石核の底面を取り込んだ横長剥片を素材として、素材打面側の右側面下部に急角度の調整加工が施されている。前述の第3文化層第20ブロック(北側約35m離れた地点に分布)からは、2点の切出形のナイフ形石器(第20ブロックの1・2)が出土していることから、本資料は第3文化層(V層～IV層下部)に帰属する石器と思われる。



第4-46図 単独出土石器

注1 新田浩三・落合章雄 2011『流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書5—流山市大久保遺跡(下層)・市野谷向山遺跡(下層)・東初石六丁目第I遺跡(下層)・東初石六丁目第II遺跡・十太夫第II遺跡』

## 第7節 まとめ

### 1. 縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑7基が検出された。出土した遺物から想定される住居の時期は、前期黒浜式期が2軒、中期加曽利E式期が1軒である。グリッドから出土した土器も、この2時期が圧倒的に多く、後期の称名寺式と加曽利B式の土器が少量混じる。土坑については遺物を伴うものが(7)SK001と(7)SK002の2基のみで、2基とも黒浜式土器を出土している。

特徴的な遺物としては、(5)SI002から出土した三角埴形土製品が上げられる。三角埴形土製品は縄文時代中期後半～後期にかけて、北陸や中部高地を中心に出土する三角柱状の土製品である。近年では群馬県からの報告も増え、出土事例は東日本一帯に広がっている<sup>1)</sup>。千葉県ではこれまで千葉市荒屋敷貝塚<sup>2)</sup>や千葉市中野僧御堂遺跡<sup>3)</sup>、佐倉市池向遺跡<sup>4)</sup>などから出土している。沈線や刺突文により文様を描くものと無文のものがあり、本遺跡と荒屋敷貝塚、中野僧御堂遺跡から出土した三角埴形土製品はいずれも無文である。用途としては装飾品、あるいは祭祀遺物と考えられているが、まだ研究途上であり、今後更なる検証が必要となろう。

近隣の遺跡としては、本遺跡の南方400m程の所に野々下貝塚が所在する。平成6年に確認調査が行われ、縄文時代中期末～後期前半にかけて形成された貝塚であることが分かった<sup>5)</sup>。同一台地上に展開する同時期の遺跡として関連性が伺え、興味深い。

- 注1 小林康男 1980「三角埴形土製品考」『長野県考古学会誌』37 長野県考古学会  
大塚昌彦 2001「群馬の三角埴形土製品」『群馬考古学手帳』11 群馬土器観会
- 2 種田吾吾 1978「千葉市荒屋敷貝塚—貝塚中央部発掘調査報告書—」(財)千葉県文化財センター
- 3 齊木 勝 1977「千葉市中野僧御堂遺跡—千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告I—」(財)千葉県文化財センター
- 4 四柳 隆 1995「佐倉市池向遺跡—佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XI—」(財)千葉県文化財センター
- 5 四柳 隆 1995「流山市野々下貝塚確認調査報告書」(財)千葉県文化財センター

### 2. 古墳時代

市野谷向山遺跡から検出された古墳時代の住居跡は8軒である。同時代の遺構・遺物については市野谷宮尻遺跡<sup>1)</sup>、市野谷入台遺跡<sup>2)</sup>において詳細な考察が加えられている。市野谷宮尻遺跡は古墳時代前期の大規模な集落で、90軒の竪穴住居跡から多量の遺物が出土している。市野谷入台遺跡では、竪穴住居跡35軒、土坑15基が検出された。市野谷宮尻遺跡が前期のみであるのに対し、市野谷入台遺跡は前期から中期にわたって集落が営まれている。市野谷入台遺跡の前期の住居跡は市野谷宮尻遺跡に近い遺跡北側に、中期の住居跡は台地縁辺に沿って北から南に分布している。市野谷入台遺跡では出土した土器をⅠ～Ⅲ期に分類している。市野谷向山遺跡から出土した遺物は、高杯脚部が中膨らみの柱状を呈すること、甕は全て平底で台付甕がみられないこと等から、市野谷入台遺跡Ⅱ期に相当すると思われる。8軒の住居跡に然程時期差はなさそうであるが、(5)SI001のみや新しい要素を窺わせるものの、攪乱が著しく、出土遺物も少ないため不明確である。

住居形態は一辺6m台後半～8m台の方形を基本とする。8mを超す大形住居は本遺跡の東に位置する

(1)SI001・(1)SI002である。対して、最も規模の小さいものは調査区のほぼ中央に位置する(7)SI003で、一辺3.5m弱、柱穴や炉をもっておらず、住居として使用していたかどうか不明瞭である。炉は検出された住居跡のうち、北に設置するものが多く、炉と出入口を結ぶラインを主軸と捉えると、主軸をN-50°-W前後にとるものが半数を占める。貯蔵穴をもつ住居跡は、大形の(1)SI001と(1)SI002の2軒である。いずれも炉の反対面のコーナーに設置され、市野谷入台遺跡の住居跡と構造を同じくする。これらの特徴からも、本遺跡から検出された住居跡は市野谷入台遺跡Ⅱ期（5世紀初頭～前葉）に相当すると考えて大過ないと思われる。

注1 栗田則久 2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書1—流山市市野谷宮尻遺跡—』（財）千葉県文化財センター

2 伊藤智樹・新田浩三・安井健一 2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書3—流山市市野谷入台遺跡—』（財）千葉県文化財センター

### 3. 平安時代

平安時代の遺構は竪穴住居跡1軒と土坑2基が検出された。いずれも調査区の南端に位置している。住居跡は一辺4m前後で、この時期の住居跡としては平均的な大きさであろう。カマドは北から東へ掛け替えが行われている。出土遺物が少ないため、明確なことは言えないが、本住居跡の想定される時期は9世紀末～10世紀頃と思われる。

8世紀から10世紀代にかけての集落の拠点は、本遺跡より西に位置する加地区にあり、単独で検出された本住居跡は、一時的に営まれた作業小屋的な性格を有していたものと思われる。

## 第5章 市野谷立野遺跡

### 第1節 遺跡の概要 (第5-1・2・5～8図)

市野谷立野遺跡の調査状況は第5-1図のとおりである。今回は、第1次～第17次調査までの報告を行う。今回の報告により、遺跡の西部・北部・中央部が報告済みとなる。黄色で示した範囲が今後報告予定の範囲である。

検出した遺構は以下のとおりである。旧石器時代では、遺物集中地点は見られなかったが、単独出土として18点の石器が出土した。縄文時代では、竪穴住居跡7軒、焼土遺構・炉穴12基、陥穴12基、土坑25基、溝1条、礫群8か所が検出された。近世では、溝1条、野馬堀2条、シシ穴5基、土坑4基、ピット群1基、道路状遺構1条が検出された。

### 第2節 旧石器時代

旧石器時代の確認グリッド配置は第5-2図のとおりである。遺物集中地点は見られず、明確に旧石器時代に帰属すると思われる石器は18点であった。これらを単独出土石器として取り扱うことにする。

#### 単独出土石器 (第5-2～4図、図版5-1)

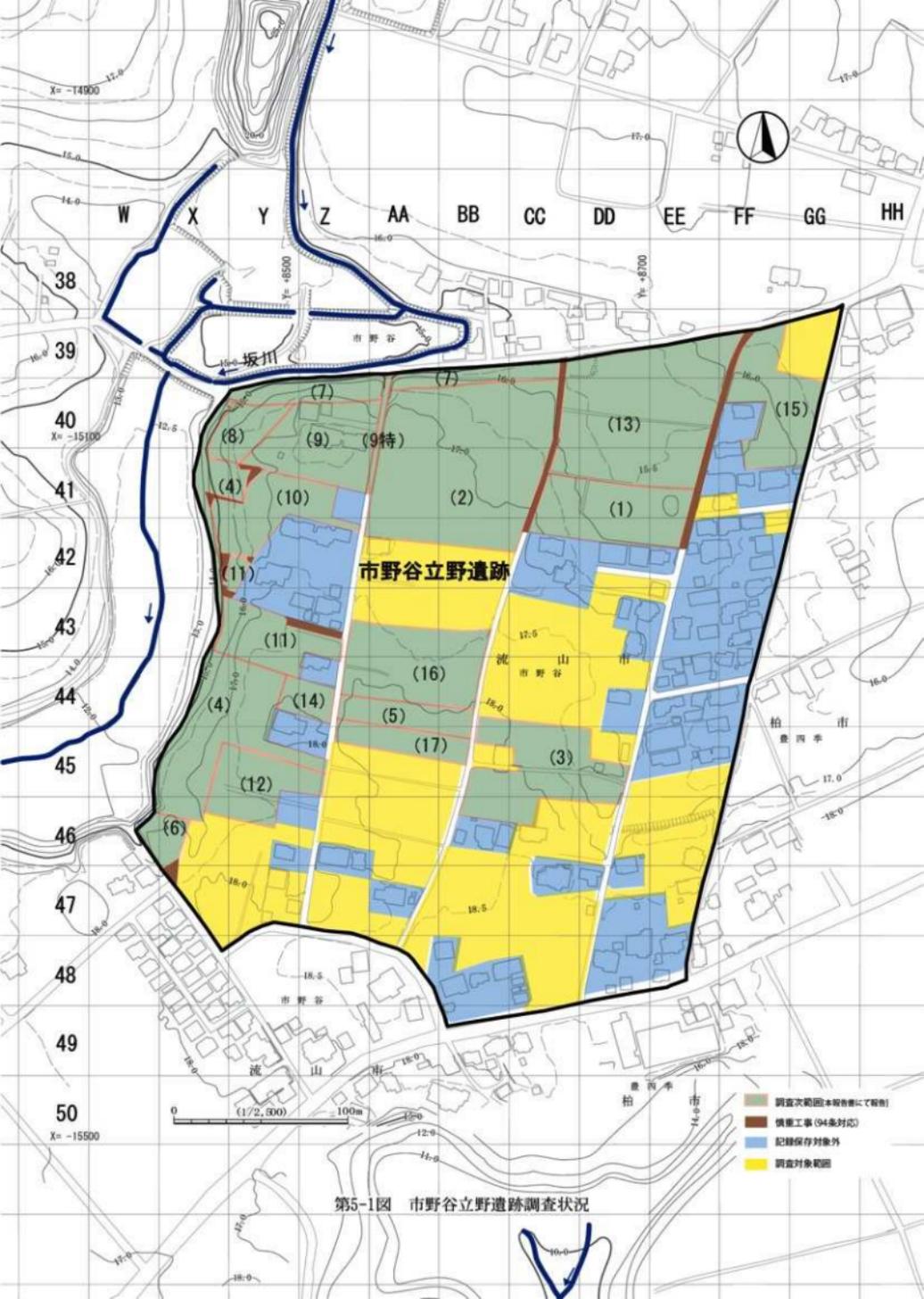
単独出土石器の出土位置は、第5-2図に示した。遺跡北西部の40Yグリッド付近と遺跡南西部の44Xグリッド付近にまとまりが見られるが、同一の層準から出土したものでないことから、これらを通常のブロックとして識別することはできなかった。

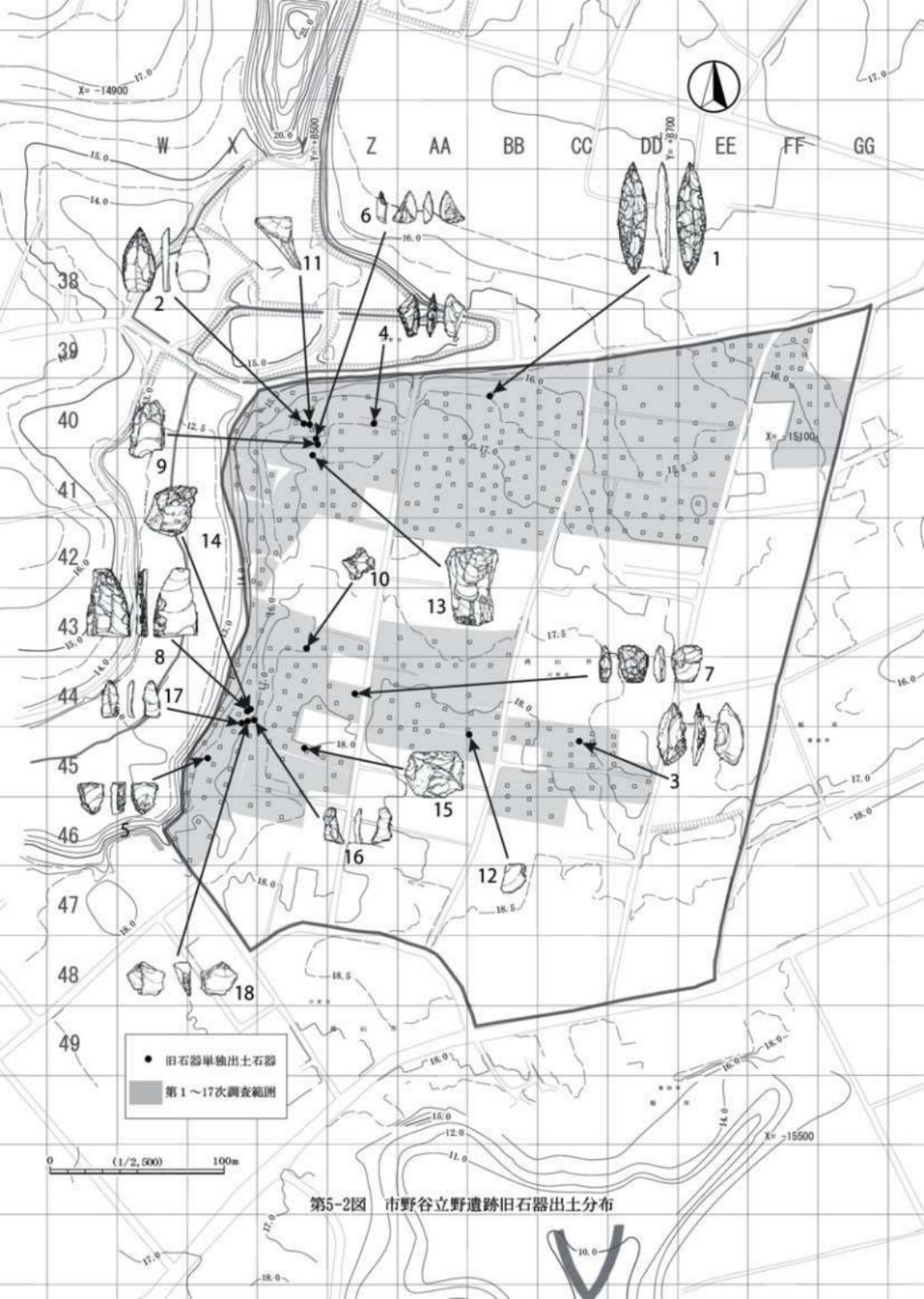
遺跡北西部から出土したものは1・2・4・6・9・11・13で、遺跡南西部から出土したものは5・8・14・16～18である。

1・2は尖頭器である。1は木葉形の形態をしている。器体全面に細かい調整加工が施されている。帰属時期は、ナイフ形石器の終末期から土器出現期までの範囲が考えられる。2は縦長剥片を素材として、先端部は、左側縁から急角度の調整加工、右側から平坦な調整加工が施され尖った形状をしている。左側縁下部と右側縁下部にも急角度の調整加工が施されている。下部は破損しているため全体形状が不明ではあるが、上下逆に設置して、基部が尖った形状をしているナイフ形石器として捉えることも可能である。

3～6はナイフ形石器である。3は横長剥片を素材として、右面の素材打面部を腹面から急角度の調整加工が施されている。4は切出形の形態をしている。幅広の剥片を素材として、右側縁は器体の中央部付近から折断した後に、急角度の階段状の調整加工が施されている。左側縁下部は、素材の打面部側に平坦な調整加工が施されている。5は基部が残存している。縦長剥片を素材として、左側面は背腹両面からの調整加工、右側面は背面からの調整加工が施されている。全体形状が不明であるため、ナイフ形石器と識別したが角錐状石器の可能性もある。6は横長剥片を素材として、左側縁を折断した後に、左上部に急角度の調整加工が施されている。

7は楔形石器である。左側縁は急角度の調整加工が施されていることから、ナイフ形石器を素材として、上下と左右両端から両極剥離が行われている。8は割器である。良質の硬質頁岩が用いられている。右側縁は背腹両面から平坦な調整加工が施されている。先端部は折れており、先端左部に桶状の剥離面が

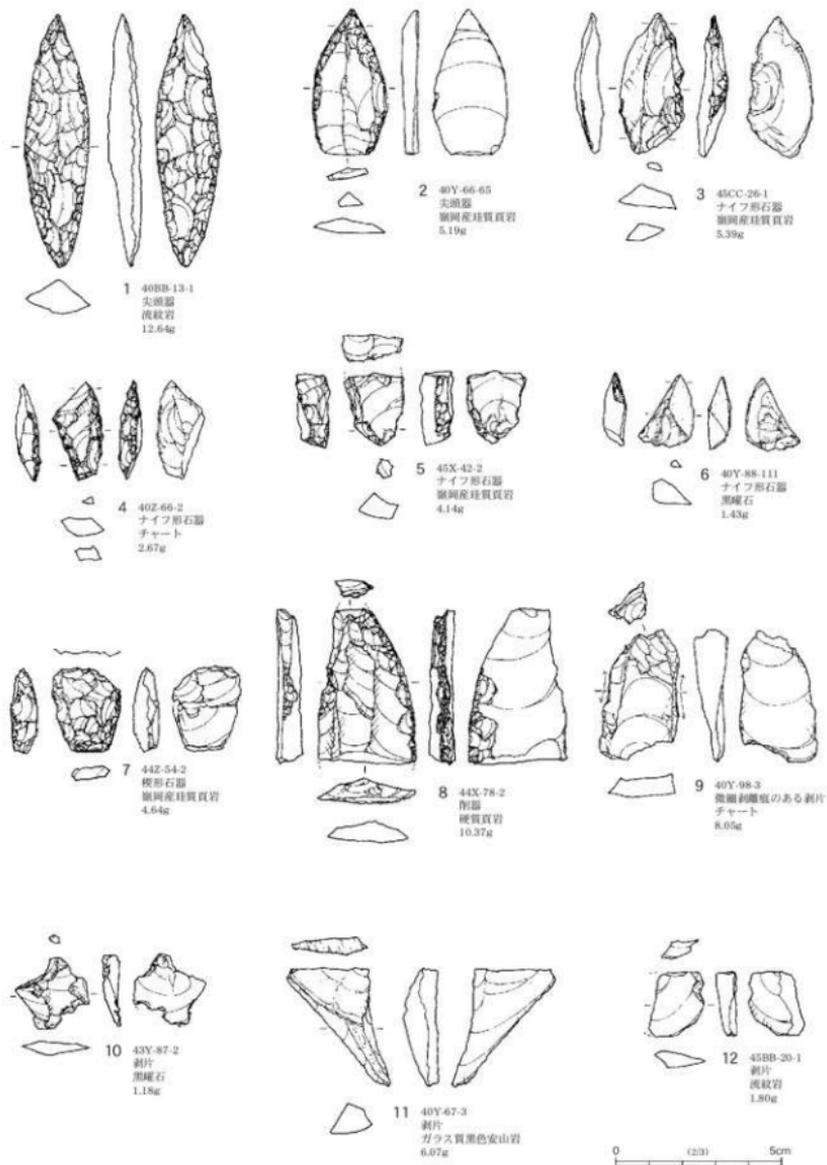




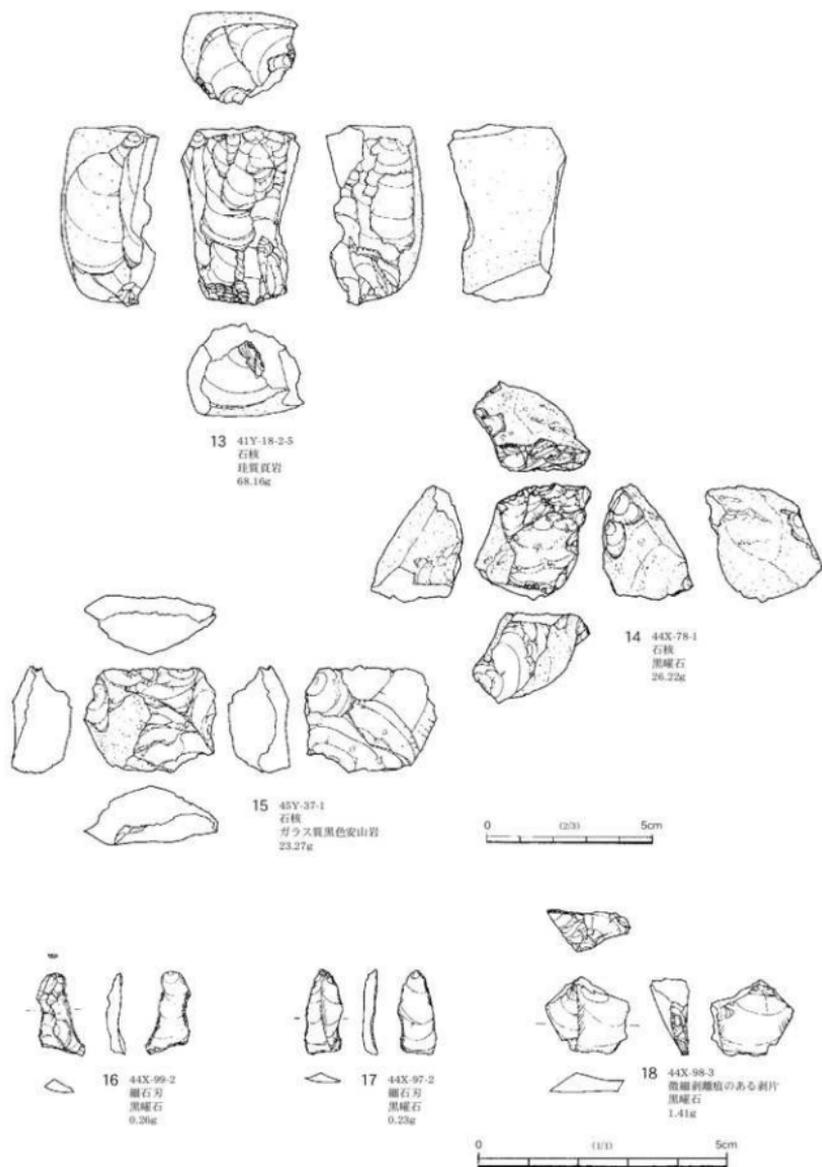
● 旧石器単独出土石器  
 ■ 第1～17次調査範囲

0 (1/2,500) 100m

第5-2図 市野谷立野遺跡旧石器出土分布



第5-3図 旧石器時代出土石器(1)



第5-4図 旧石器時代出土石器(2)

見られる。この槌状の剥離面は先端部の衝撃剥離痕と思われる。左側縁中部には急角度の調整加工が施されており、槌状剥離面よりも新しい。9は微細剥離痕のある剥片である。縦長剥片を素材として、両側縁に微細剥離痕が見られる。10～12は剥片である。いずれも不定形な剥片である。

13～15は石核である。13は両設打面の石刃石核である。上端からの剥離によって石刃が剥離されており、下端からの剥離は石核を成形する剥離が施されている。裏面には自然面が大きく残っている。14は角礫を素材としている。剥離は、表面と下面に行われ、それ以外は自然面が大きく残されている。15は分割礫を素材としている。求心状に横長剥片が剥離されている。

16～18は細石刃とそれに関連する資料である。いずれも黒曜石が用いられている。44X-97～99グリッドから出土しており、ブロックを形成していた可能性がある。16・17は細石刃である。どちらも末端部がわずかに折れている。16の背面は、主要剥離面と反対方向の剥離面で構成されている。17の背面は、主要剥離面と同じ方向の剥離面で構成されている。18は幅広の剥片を素材として、右側縁下部に微細剥離痕が見られる。

### 第3節 縄文時代

縄文時代の遺構として竪穴住居跡7軒、焼土遺構・炉穴12基、陥穴12基、土坑25基、溝1条、礫群8か所が検出された。竪穴住居跡は坂川に臨む台地西側縁辺部と、調査区中央の台地平坦面に、土坑は台地西側縁辺部と調査区北側にやや集中する傾向がある。また、蛇行する坂川に近接する台地北西部では、多量の礫・礫片がまとまって出土した。これらのまとまりを礫群として報告する。

#### 1. 竪穴住居跡

##### (4)SI011・(4)SP012 (第5-9・10図、図版5-2・13)

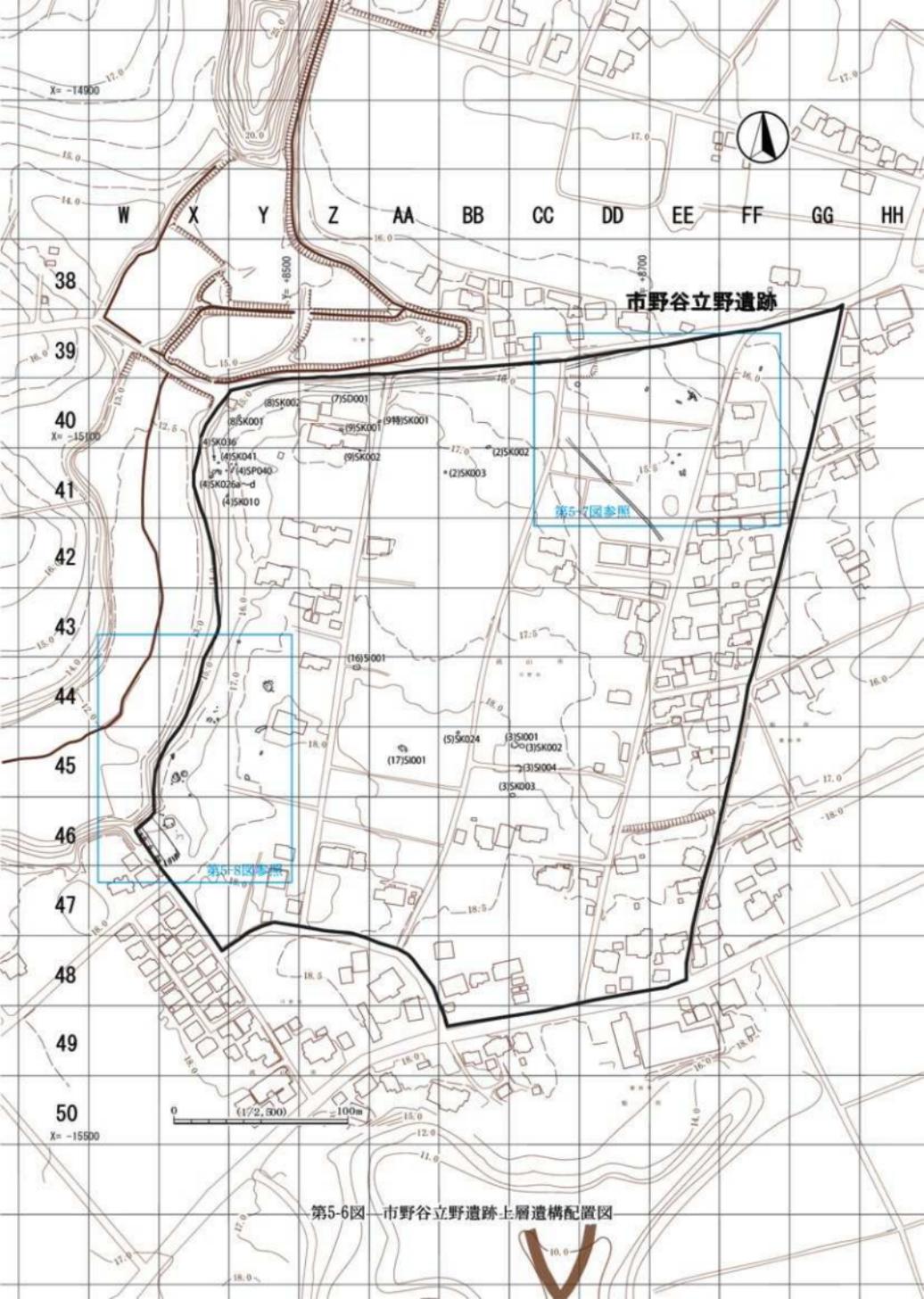
調査区の西端、44Y-35グリッド周辺に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸方向はN-43°-Wを指す。規模は長軸5.60m、短軸4.55m、確認面からの深さは4cm～17cmとごく浅い。炉は床面北西側にあり、長軸0.95m、短軸0.50mの不整楕円形を呈する。炉の北側から埋裏が検出された。底部はなく、焼土が周囲に固まっていた。ピットは住居内に13基、住居外に12基所在する。住居外のピット群は住居との関連性が不明なため、別に遺構番号を付し、(4)SP012とする。住居内のピットの深さは9cm～80cmとかなりばらつきがあり、南壁際中央に位置するP8が最も浅く、住居東側に位置するP2～P4が深い。(4)SP012の深さは13cm～27cmである。遺物は住居南東側に集中しており、P8周辺に特に多い。住居覆土及びピット覆土は暗褐色土が主体である。

**出土遺物** 24点を図示した。1～24は黒浜式土器である。1は口頸部に単沈線によるランダムな格子目文を描く。2～10は還付末端によるルーブ文を重畳施文する。3～9は同一個体で、無節Rの還付末端、2・10は無節Lの還付末端となる。11～20は地文縄文を施すものである。使用原体は11・13～15が無節L、12・16が無節R、18～20は同一個体で単節RL、17は単節LRとRLで羽状施文する。

21は炉土器で胴部中位付近を利用する。残存高15.2cm、最大径23.0cmを測る。胴部下半一帯が火熱により赤変色している。地文として単節RLを施す。22は底部片で、地文及び装飾は施されない。

23・24は同一個体で、上下端を平行沈線で画してから、コンパス文を重畳施文する。上記の1～22よりは、確実に新しい段階に相当する。黒浜式でも中頃の23・24は埋没過程での逆流入によるもので、本遺構の帰属時期にはならない。

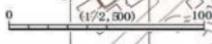




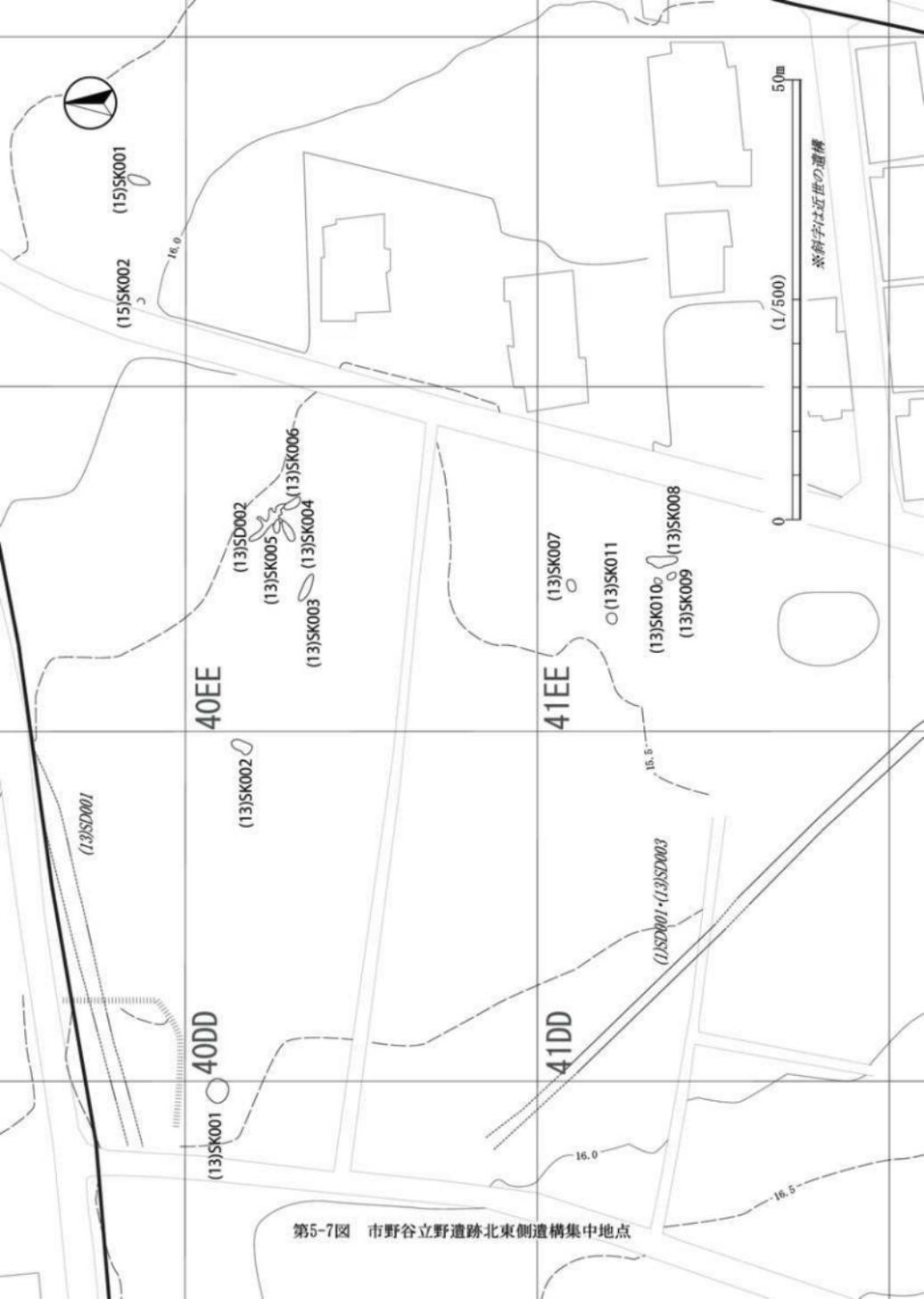
市野谷立野遺跡

第5-7図参照

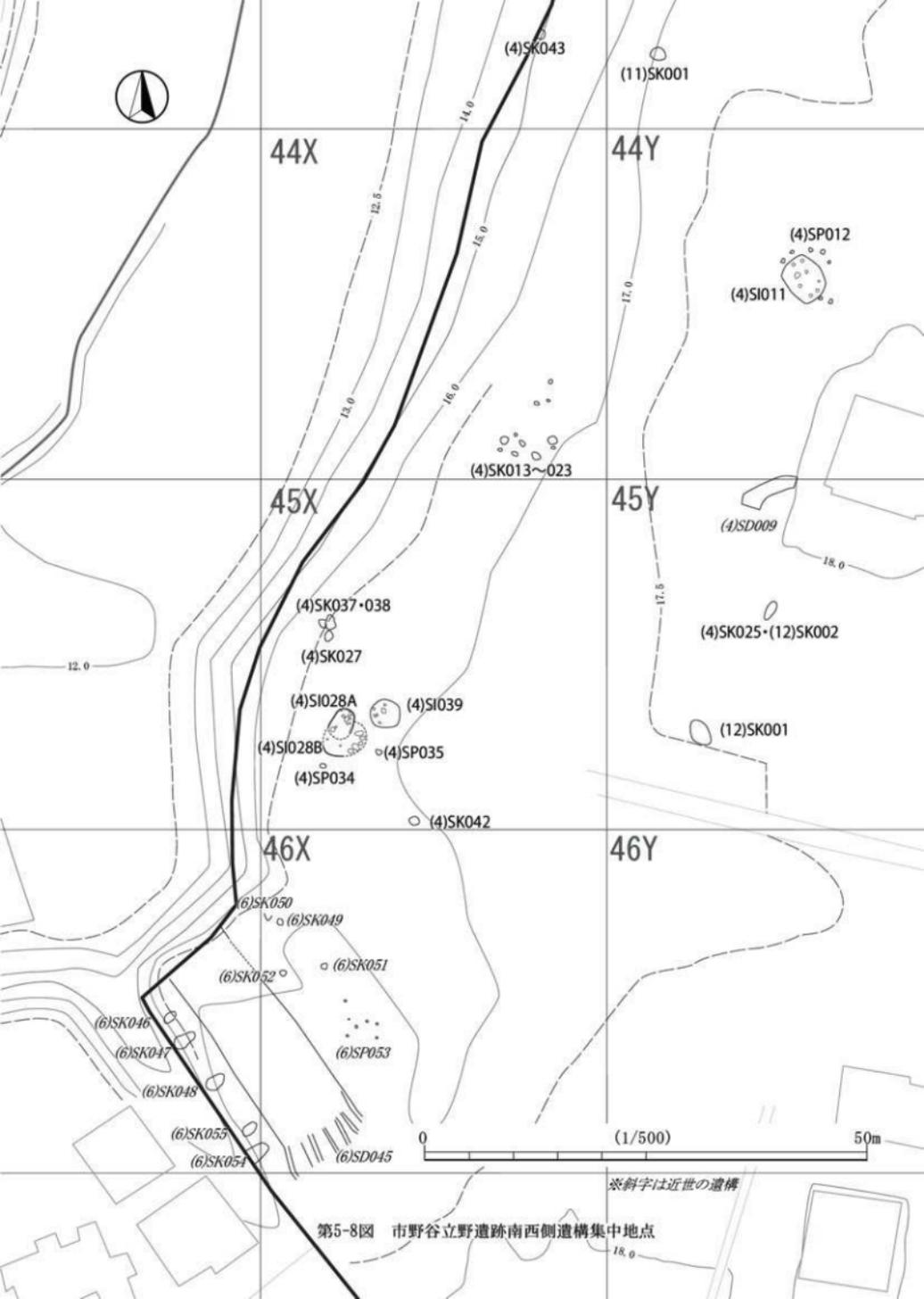
第5-8図参照



第5-6図 市野谷立野遺跡上層遺構配置図

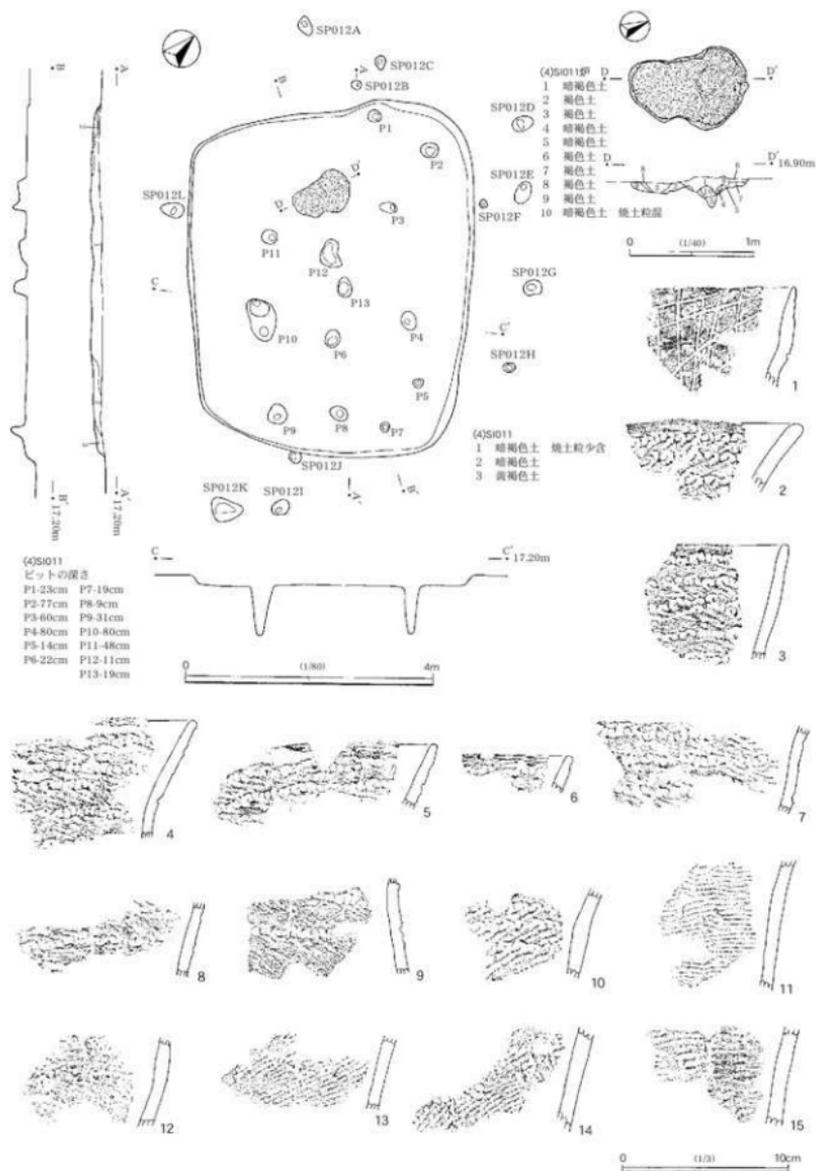


第5-7図 市野谷立野遺跡北東側遺構集中地点

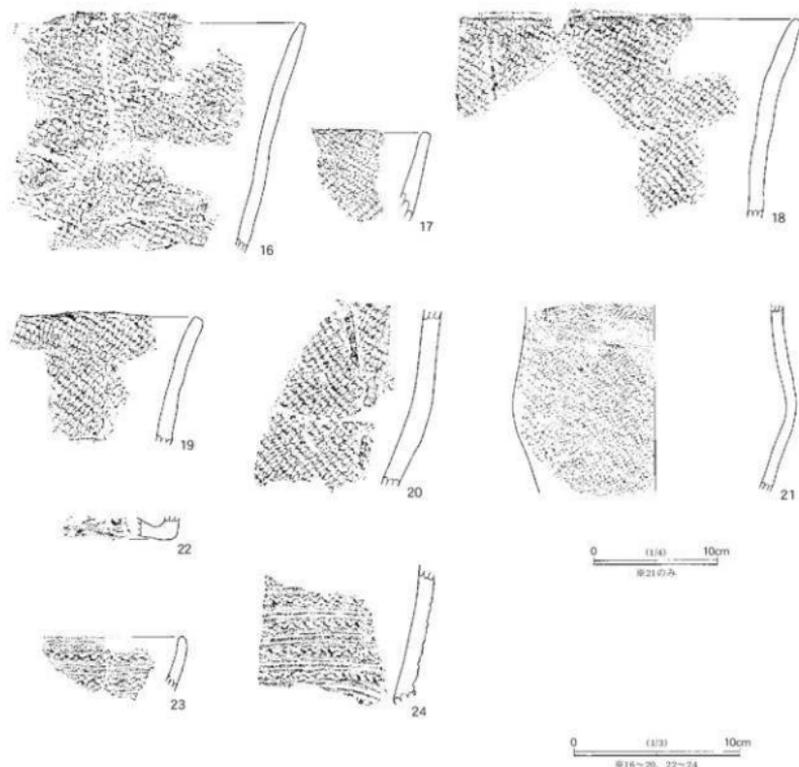


第5-8図 市野谷立野遺跡南西側遺構集中地点

※斜字は近世の遺構



第5-9図 (4)SI011・(4)SP012①



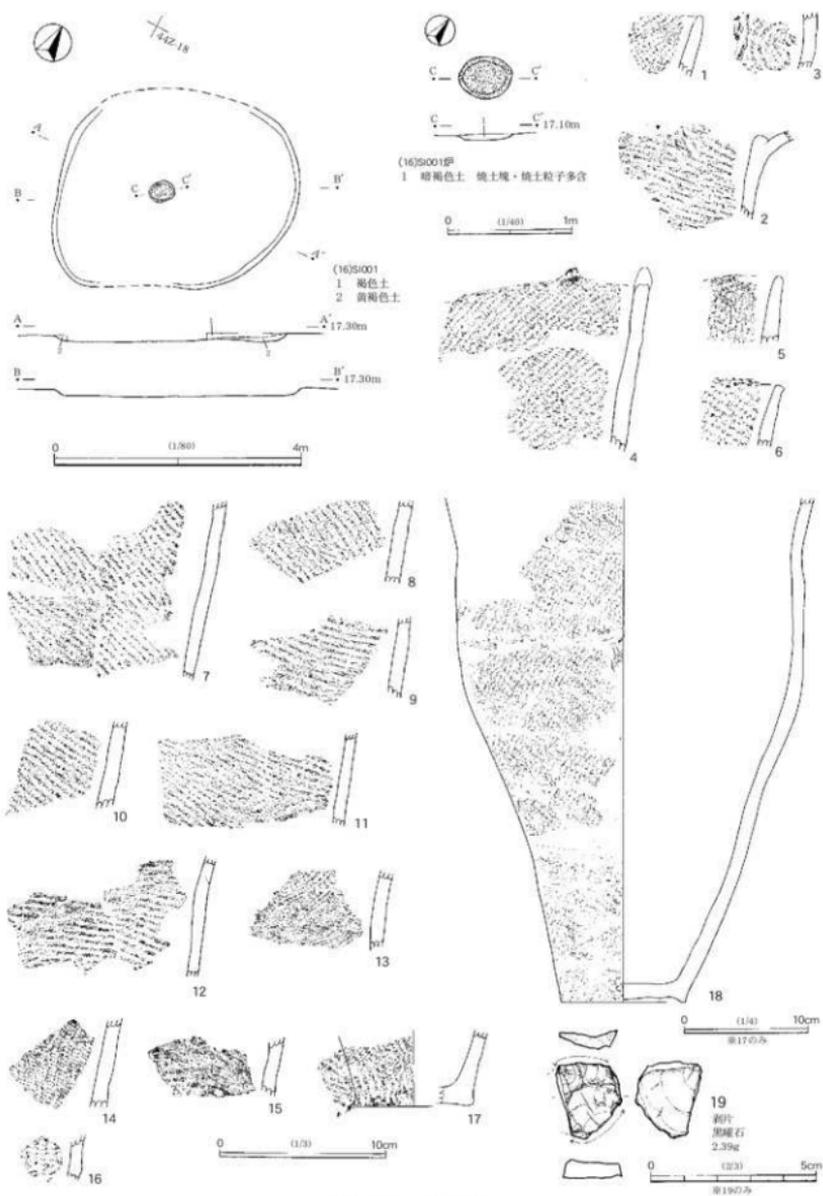
第5-10図 (4)SI011・(4)SP012②

## (16)SI001 (第5-11図、図版5-2・11・13)

調査区の中央西寄り、44Z-18グリッドに位置する。平面形は長楕円形であるが、遺構南西隅は攪乱により不明瞭である。長軸方向はN-66°-Eを指す。規模は長軸3.93m、短軸3.25m、確認面からの深さ16cmを測る。炉は中央に設置され、長軸0.76m、短軸0.58mの東西方向に長い楕円形を呈する。柱穴、硬化面は検出されなかった。遺物は炉の東側に集中している。覆土は黄褐色土に褐色土が堆積していた。

**出土遺物** 19点を図示した。図示した土器(1~18)は、すべて黒浜式土器である。1は口縁部片で、口唇部形態は内削ぎ状を呈し、地文縄文2段LRを施文後、縦位の短沈線を施す。2は片口が付く深鉢の口縁部片である。地文縄文1段Rを施す。3は口縁部付近か。地文縄文2段RL施文後、半截竹管で意匠を描く。4は小波状口縁の深鉢で、地文縄文2段LRを施す。5・6は平縁深鉢の口縁部片である。地文縄文はともに2段RLを施す。

7~18は胴部片である。基本的に地文縄文のみの例が多い。使用原体は7~12が1段R、13は附加条縄



第5-11図 (16)SI001

文(軸RL+L2本)、14は前々段多条のLRか、15は下端に沈線がみられ、胴下半部施文例か、16は2段RLを施し、土器片円盤の可能性ある。17は胴部下半から底部にかけて遺存する。上げ底を呈し、地文に2段LRを施す。18は復元し得た資料である。口縁端部を欠くものの、口縁～底部の8割が残存する。現存高41.0cm、底径10.0cmを測る。底部は上げ底を呈する。地文縄文2段RLの斜縄文を施文する。

19は黒曜石製の微細剥離痕のある剥片である。上縁部と下縁部に微細剥離痕が見られる。

#### (17)SI001 (第5-12図、図版5-2・11・14)

調査区の中央、45AA-24グリッド周辺に位置する。長軸方向をN-63°-Wにとる不整形を呈する。規模は長軸5.38m、短軸3.10m、確認面からの深さ15cmを測る。炬は北西に設置され、長軸1.00m、短軸0.50mの東西に長い楕円形を呈する。床面南東、P3の北東にごく狭い範囲ながら硬化面がみられる。ピットは4基検出された。深さは12cm～22cmと比較的浅い。

**出土遺物** 12点を図示した。図示した土器(1～11)は、すべて黒浜式土器である。1は平縁深鉢の口縁部片で、地文縄文3段RLRを施文する。2・3も口縁部片である。2は平縁で、地文縄文は附加条縄文(LR軸+L1本)である。3は地文縄文2段RLを施す。

4～11は胴部片で、地文縄文が施される。使用原体は、4が1段Lで羽状施文、5はLR、6はRLとLRの羽状施文、7・8は附加条縄文で(軸不明+R1本)、9は「異条斜縄文(直前段合燃)」である。10は胴下半の大破片で、附加条縄文(軸不明+L1本)を施す。11は上げ底を呈する底部片である。

12は安山岩製の磨石である。扁平な楕円形礫を素材として、平坦面を研磨している。

#### (3)SI001 (第5-13図、図版5-2)

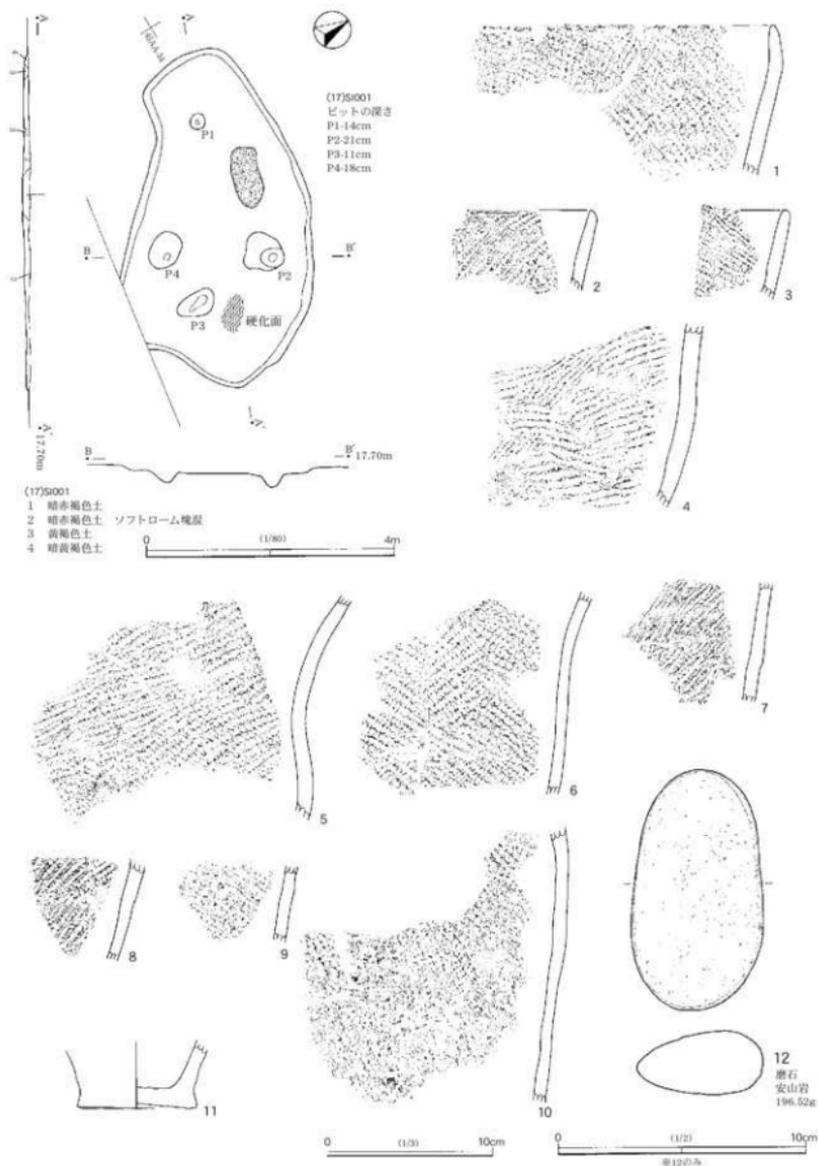
調査区の中央、45CC-20・21グリッドに位置する。平面形は不整形な楕円形で、長軸方向はN-28°-Eを指す。規模は3.63m、短軸3.46m、確認面からの深さ17cmを測る。床面はレンズ状に凹む。炬は中央に設置される。長軸0.52m、短軸0.28mの東西方向に長い不整形を呈する。ピットは3基検出され、深さは20cm～33cmである。

#### (3)SI004 (第5-14・15図、図版5-2・11・14)

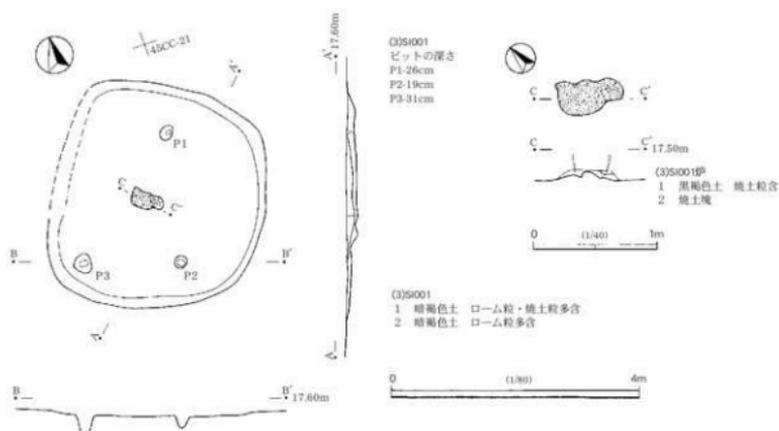
調査区の中央、45CC-51・61グリッドに位置する。平面形は不整形な楕円形を呈し、長軸方向はN-41°-Wを指す。西から南西にかけて既存の道路により欠けている。規模は長軸3.82m、確認面からの深さは6cmとごく浅い。炬は床面南東に設置され、径0.50mの楕円形を呈する。ピットは検出されなかった。覆土は焼土粒、ローム粒を含む暗褐色土が主体である。

**出土遺物** 30点を図示した。1～4は関山Ⅱ式直後の土器群である。1は推定口径36.6cm、現存高5.4cmを測る。地文として附加条縄文(軸不明+L2本)、(軸不明+R2本)で羽状施文し、口縁部に条線帯を施す。2は1と同一個体で、胴部片となる。3は地文縄文(前々段反燃か)施文後、口縁部に条線帯を施す。4は地文縄文無節Lを施文後、半截竹管の内側で意匠を描く。

5～29は黒浜式土器である。5は口縁部片で、隆線で区画文を描き、爪形文を沿わせる。6・7は地文縄文のみの口縁部片である。6は無節L、7は複節LRLか。8・9は内外面ともナデつけによる器面調整のみを施す。10はくびれ部に鈔状隆線を廻らす。11は地文縄文無節Lを施文後、胴部下半に平行沈線で意匠を描く。12・13は同一個体で、地文縄文無節LとRで羽状施文する。14～24は地文縄文を施した胴部片で、使用原体は14～18が無節L、19・21・23が単節RLで、20・22・24は単節RLとLRの羽状施文となる。25～27は附加条縄文で、(軸不明+L2本)と(軸不明+R2本)を用いて羽状施文する。25・26は1・



第5-12図 (17)SI001



第5-13図 (3)SI001

2 と同一固体である。28・29は底部片で、ともに上げ底を呈し、外面に地文縄文を施す。使用原体は28が単節LR、29は複節LRLを用いる。

30はホルンフェルス製の打製石斧である。小型の扁平な楕円形礫の下端部に粗い調整加工が施されている。

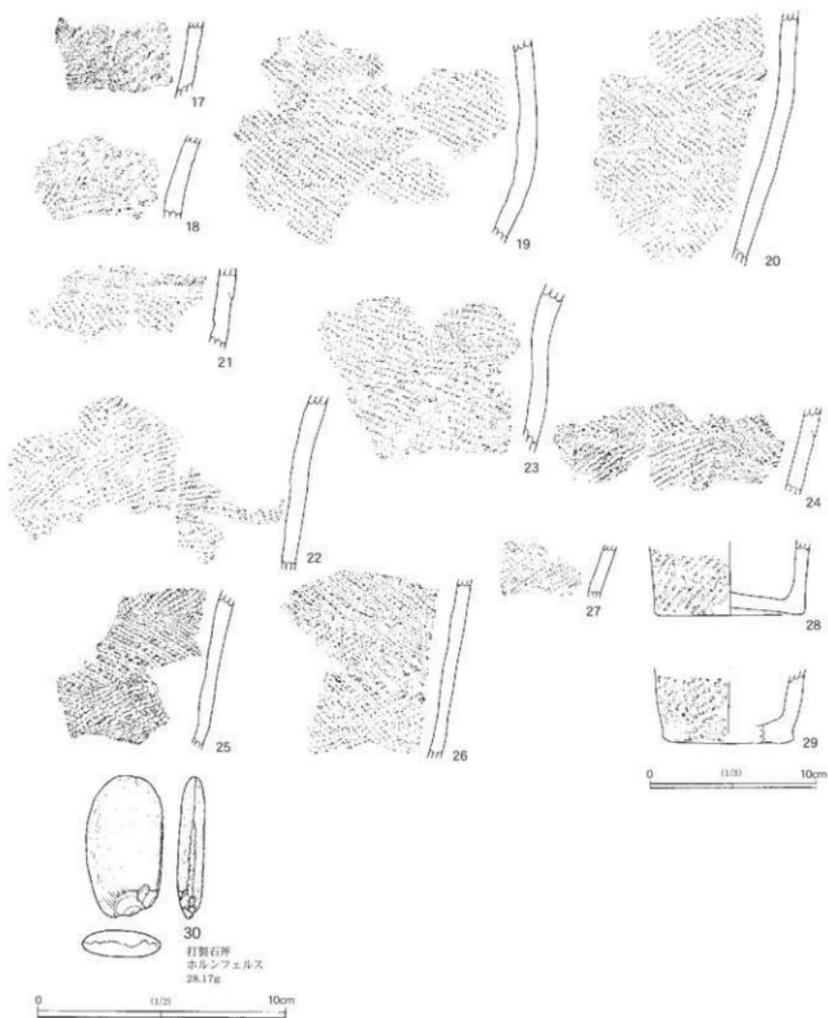
#### (4)SI028A (第5-16図、図版5-2・11・13・14)

調査区の南西端、45X-62・72グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-26°-Eを指す。規模は長軸3.60m、短軸2.59m、確認面からの深さ17cmを測る。炬は北側中央に設置される。長軸0.68m、短軸0.44m、床面からの深さ14cmの南北方向に長い楕円形を呈する。西壁北側に幅20cm前後、深さ5cmの周溝がみられる。ピットは8基検出された。北西壁に小ピットが並んでいる。覆土は暗褐色土を主体とする。

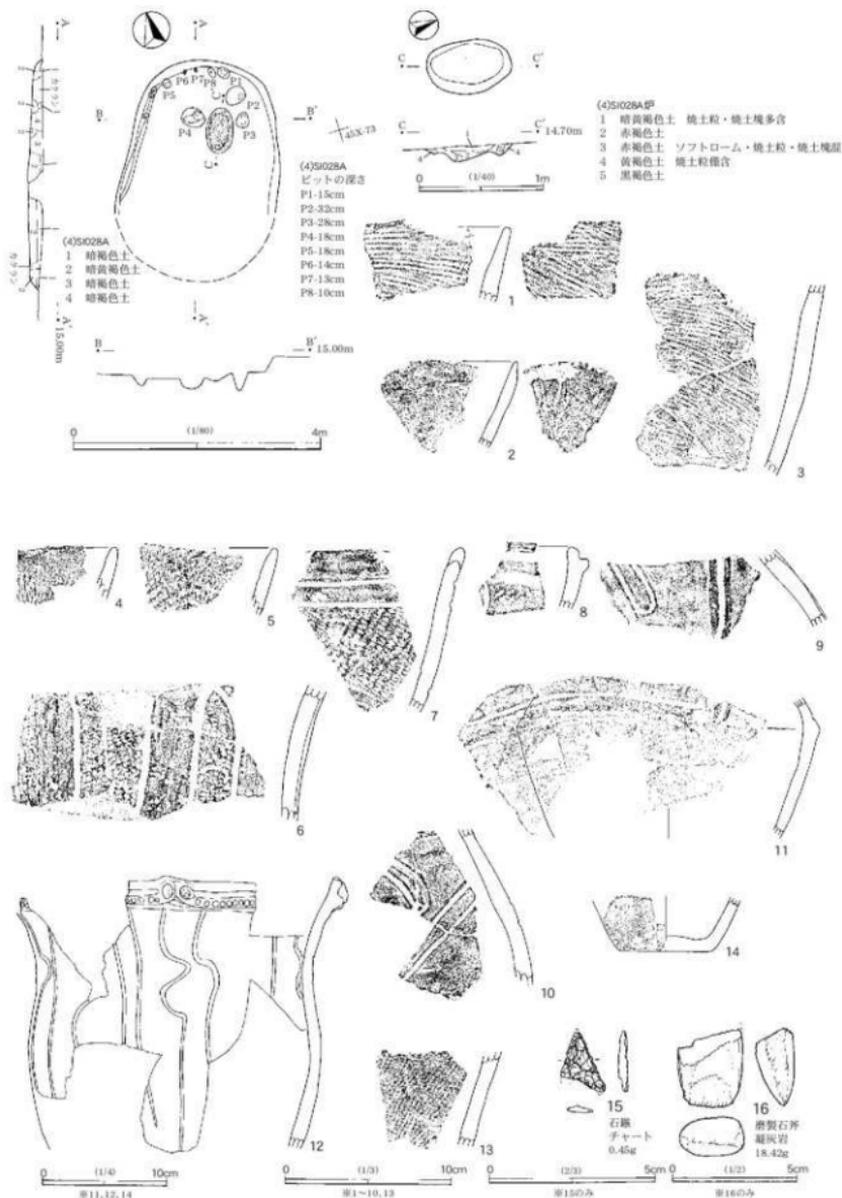
**出土遺物** 遺物は16点を図示した。1～3は条痕文系土器である。いずれも文様は有さず、表裏面とも貝殻条痕が施される。斜方向を主とするもので、野島式に位置づけられると捉えて大過なだろう。以上3点は本住居跡に帰属する可能性が高く、以下の出土土器と分けることにしたい。

4は摺糸文系土器で、口縁部にやや狭小な無文帯を挟み、摺糸Rを施文する。稲荷台式に位置づけられる。5は地文縄文として無節Lを施したもので、黒浜式土器に位置づけられよう。6は称名寺式土器で、磨消縄文で意匠を描く。充填縄文は単節LRである。7～14は堀之内式土器で、器形に分かるものも含め、出土量は多い。7・8は地文縄文施文後、口縁下に2条の沈線を引く。8は何某かの意匠が施されるが、具体的な文様名等は不明である。12は平縁に小突起が4か所付くものと思われる。小突起下には一対の盲孔を穿ち、沈線を廻らせる。口縁端部には刺突列を施し、これらが狭小な口縁部文様帯となる。地文は有さず、2本一組の沈線で意匠を描く。西岡東的な要素である。9～11も地文を有さず、沈線で意匠を施す

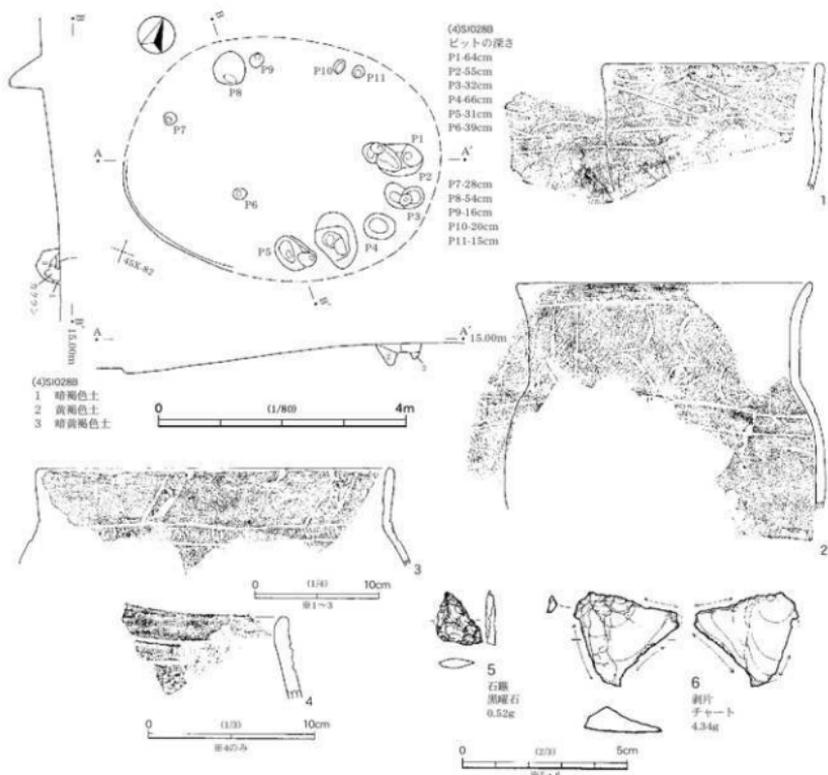




第5-15図 (3)SI004②



第5-16図 (4)SI028A



第5-17図 (4)SI028B

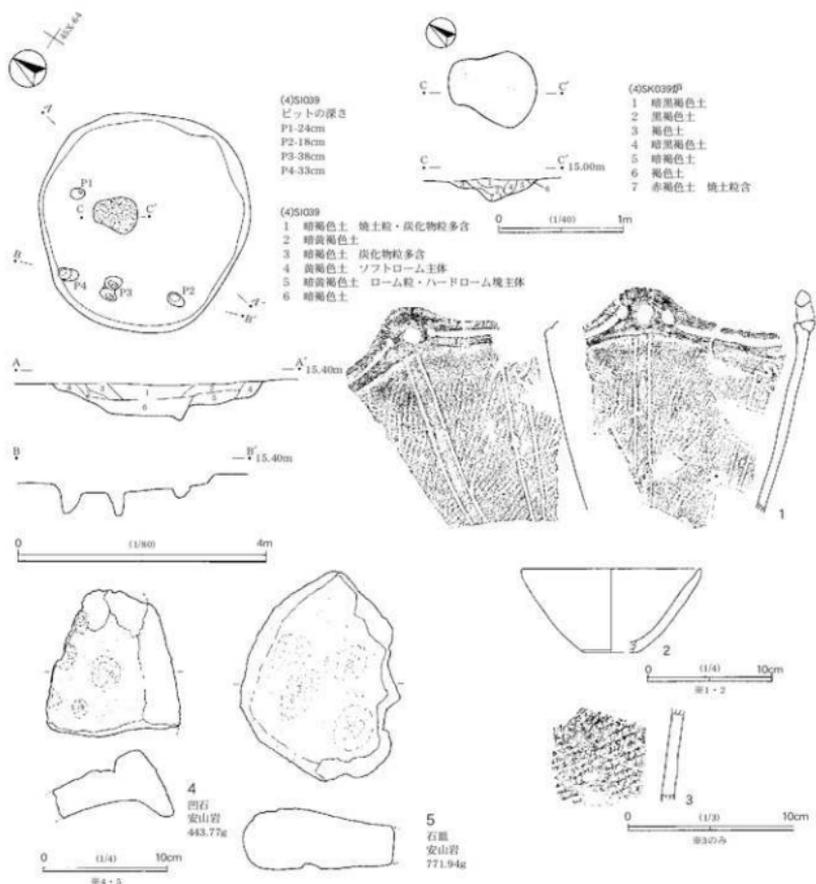
もので、器形的には算盤玉状を呈し、注口付土器の類いか。13・14を含め、堀之内1式に位置づけられる。

15はチャート製の石鏝である。左脚部は破損している。16は凝灰岩製の磨製石斧である。器体の中央部から破損しており、刃部が残存している。側縁が角張っていることから、全体形状が不明であるが、定角式磨製石斧であると思われる。

#### (4)SI028B (第5-17図、図版5-2・11・13・14)

調査区の南西端、45X-71・72グリッドに位置する。北西で(4)SI028Aと重複している。壁の掘り込みはほとんど検出されず、柱穴の分布状況から平面形は長楕円形を呈すると思われる。推定される規模は長軸5.12m、短軸3.94m、確認面からの深さ10cm、長軸方向はN-69°-Eである。炬は検出されなかった。ピットは11基で、径は20cm～98cm、深さは15cm～70cmである。覆土はいずれも暗黄褐色土が主体である。

**出土遺物** 遺物は6点を図示した。1～4は晩期安行式土器である。1・2は意匠内に細密沈線を充填す



第5-18図 (4)SI039

るもので、2は1よりも沈線がまばらである。3は屈曲部に平行沈線を引き、突起を付すが、地文ないしほかの充填要素を有さない。4は口縁が内傾気味に立ち上がる。口縁下に2本一組の沈線を引いて画す。1・2は姥山系（姥山Ⅲ式）であるが、3・4と同様に安行3c式に併行するものである。

5は黒曜石製の石皿である。左脚部が破損している。6はチャート製の微細剥離痕のある剥片である。縁辺のほぼ全周に微細剥離痕が見られる。

(4)SI039 (第5-18図、図版5-2・11・15)

調査区の南西端、45X-63・73グリッドに位置し、(4)SI028から東へ1.4mの距離にある。平面形は楕円形を呈するが、遺構プランは極めて曖昧である。長軸方向はN-44°-Eを指す。規模は長軸3.65m、短軸3.43m、確認面からの深さ23cmを測る。炉は床面北西に設置され、長軸0.72m、短軸0.60mの楕円形を呈する。ピットは北～西側にかけて4基検出され、深さは15cm～40cmである。壁面の立ち上がりは軟弱で、直線的ではない。覆土は暗褐色土が主体である。

**出土遺物** 5点を図示した。1・2は堀之内式土器である。1は概ね器形が分かる資料で、推定口径22.4cm、残存高18.0cmを測る。波状三単位を呈する深鉢で、波頂部は2か所が残存する。波頂部下には大ぶりの貫通孔を穿ち、その両脇に1個ずつより小ぶりな盲孔を穿つ。小盲孔間は太めの沈線で連携しており、これが口縁部文様帯を形成する。胴部文様帯は地文縄文無節Lを施文後、波頂部下より2本一組の沈線を垂下し、画線内の磨消(不完全)を行う。波底部からは「蕨手文」を垂下する。2は内外面とも器面調整のみを施した無文の浅鉢で、口径14.6cm、器高6.8cm、推定底径4.4cmを測る。これら2点は堀之内1式に位置づけられ、本住居跡の帰属する時期として捉えられる。

3は黒浜式土器である。無節Lを地文として施す。これのみ混入品と思われる。

4は安山岩製の凹石である。表面平坦部に5か所の凹み痕が見られる。裏面は全面が研磨され、縁辺部に向かって緩やかに湾曲している。この裏面の特徴から、石皿と分類したほうが妥当かもしれない。5は安山岩製の石皿である。表面平坦部には4か所の凹み痕が見られる。

## 2. 焼土遺構・炉穴

### (8)SK002 (第5-19図)

調査区の北西端、40Y-47グリッドに位置する焼土遺構である。礫群1に伴う遺構と思われる。長軸0.51m、短軸0.34mの楕円形を呈する。確認面からの深さは10cmと浅い。覆土中に焼土粒が僅かに混入する程度で、火床面も然程焼けた痕跡はみられない。

### (4)SK041 (第5-19図)

調査区の北西端、41X-18グリッドに位置する焼土遺構である。礫群3に伴う遺構と思われる。長軸0.50m、短軸0.42mの楕円形を呈する。確認面からの深さは15cmと浅い。

### (5)SK024 (第5-19・25図、図版5-2・15)

調査区の中央、45BB-02グリッドに位置する焼土遺構である。径1.00mの円形を呈し、確認面からの深さは11cmと浅い。北側から縄文時代前期の土器が集中して出土しており、若干の焼土を伴う。

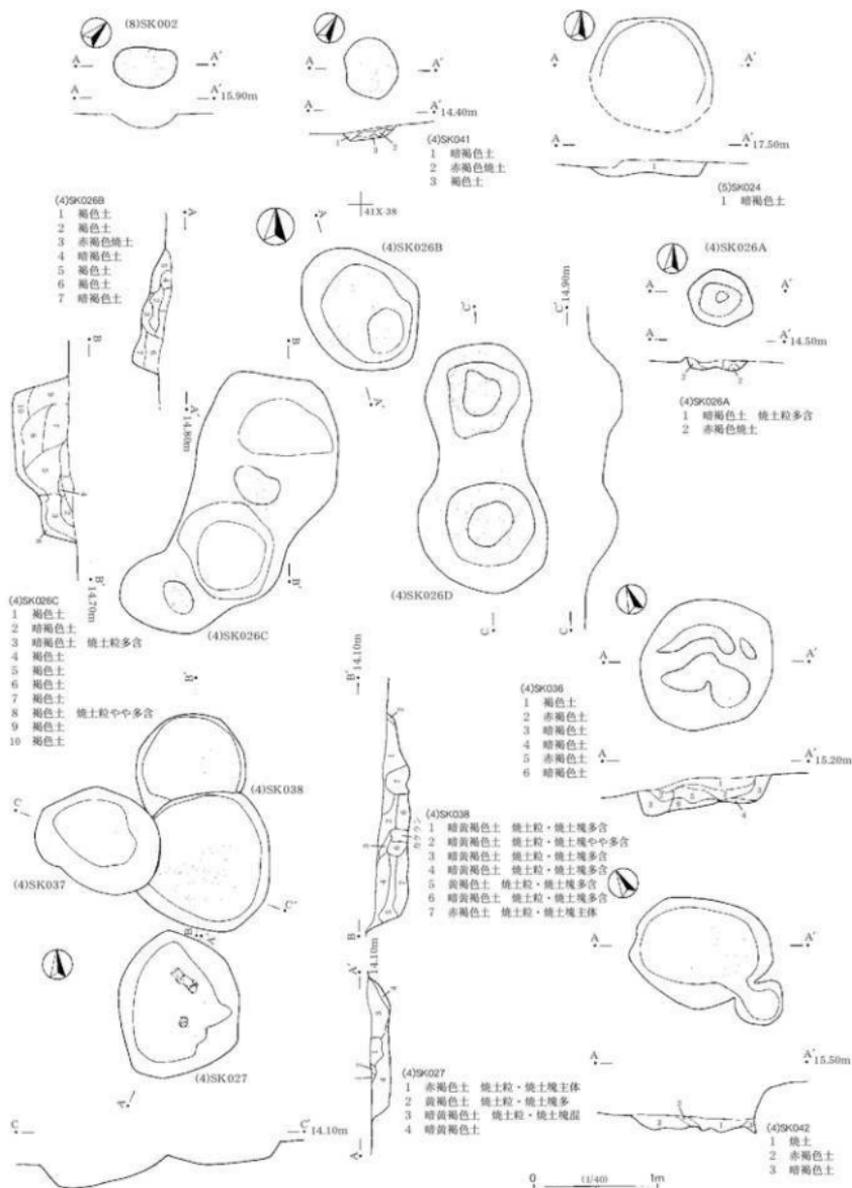
**出土遺物** 4点を図示した。1～4は黒浜式土器である。1は口縁部片で、平縁深鉢か。ほぼ口縁直下から地文縄文2段RLを施す。2～4は胴部片で、地文縄文のみのものである。使用原体はいずれも2段RLを用いるが、2は太さの違う2本を撻り合わせた、いわゆる「異束」の縄文となる。

### (4)SK036 (第5-19図、図版5-2)

調査区の北西端、41X-28グリッドに位置する炉穴である。(4)SK041の南2.2mの距離にある。礫群3に伴う遺構と思われる。長軸1.08m、短軸0.83mの楕円形を呈し、確認面からの深さは20cmを測る。

### (4)SK026C (第5-19・25図、図版5-3・15)

調査区の北西端、41X-37グリッドに位置する炉穴である。礫群3に伴う遺構と思われる。(4)SK026は4基からなり、A～Dの枝番を付けた。(4)SK026Cは中央西側の遺構である。長軸2.40m、短軸1.20mの



第5-19図 焼土遺構・炉穴

不整な長楕円形を呈し、確認面からの深さは最深部で71cmを測る。

**出土遺物** 遺物は2点を図化した。1・2は条痕文系土器である。1は胴部片、2は口縁部片で、表裏面に貝殻条痕を施す。方向は縦に近い斜位が主体となる。2点とも野島式に位置づけられる。

(4)SK026B (第5-19図、図版5-3)

調査区の北西端、41X-37・38グリッドに位置する炉穴である。礫群3に伴う遺構と思われる。4基のうち最も北に所在する。長軸1.12m、短軸0.9mの円形を呈し、確認面からの深さは33cmを測る。

(4)SK026D (第5-19図、図版5-3)

調査区の北西端、41X-38グリッドに位置する炉穴である。礫群3に伴う遺構と思われる。(4)SK026Cの東0.7mにある。長軸2.00m、短軸1.05mの瓢箪形を呈し、確認面からの深さは31cmを測る。

(4)SK026A (第5-19図、図版5-3)

調査区の北西端、41X-47グリッドに位置する炉穴である。礫群3に伴う遺構と思われる。4基のうち最も南にあり、(4)SK026Cから南へ1.1mほど離れる。長軸0.55m、短軸0.45mの楕円形を呈し、確認面からの深さは15cmを測る。

(4)SK038 (第5-19図、図版5-3)

調査区の南西端、45X-32・42グリッドに位置する炉穴である。径1.12mの炉穴と径0.88mの炉穴が切り合っており、2基合わせた長さは1.80mとなる。確認面からの深さは北側が39cm、南側が27cmである。

(4)SK037 (第5-19図、図版5-3)

調査区の南西端、45X-41グリッドに位置する炉穴である。(4)SK038の西で切り合うが、新旧関係は不明である。土層の堆積状況から本遺構の方が新しい可能性がある。長軸1.05m、短軸0.80m、確認面からの深さは17cmを測る。

(4)SK027 (第5-19・25図、図版5-3・15)

調査区の南西端、45X-41・42グリッドに位置する炉穴である。(4)SK037から南へ0.24m、(4)SI028から北へ約8mの距離にある。長軸1.16m、短軸1.00mの楕円形で、確認面からの深さは18cmを測る。火床部は南東にあり、南北0.44m、東西0.30mの範囲で赤化している。

**出土遺物** 1点を図示した。1は条痕文系土器である。推定口径10.5cm、残存高22.5cmを測る。平縁深鉢で口唇上にキザミ、表裏面に貝殻条痕を施す。方向は表が斜め、裏が横に近い斜めを専らとする。野島式に位置づけられる。

(4)SK042 (第5-19図、図版5-3)

調査区の南西端、45X-94グリッドに位置する炉穴である。長軸1.12m、短軸0.80mの楕円形で、確認面からの深さは40cmである。

### 3. 陥穴

(15)SK001 (第5-20図、図版5-3)

調査区の北東端、39FF-85・86グリッドに位置する。長軸2.43m、短軸0.92mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-23°-Eを指す。湧水のため発掘できなかったが、確認面からの深さは188cmと推測される。

(9)SK001 (第5-20図、図版5-3)

調査区の北西、40Z-76グリッドに位置する。長軸1.90m、短軸1.08mの不整形を呈し、長軸方向はN-67°-Wを指す。確認面からの深さは136cmを測る。断面は袋状で、東側はオーバーハングしている。覆土は暗黄褐色土が主体である。

(9特)SK001 (第5-20・25図、図版5-11)

調査区の北側、40AA-61グリッドに位置する。長軸2.38m、短軸1.52mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-31°-Eを指す。確認面からの深さは164cmを測る。壁面は若干凹凸があるものの、ほぼ直線的に立ち上がる。覆土は暗黄褐色土を主体とする。

**出土遺物** 1・2はチャート製の石鐮である。1は重さ1.38g、両脚部は破損している。折れ面の形状から、脚部の挟りは深いものであったと思われる。2は重さ0.96g、脚部の挟りが深い。

(2)SK002 (第5-20図、図版5-4)

調査区の北側中央、40BB-97、41BB-07グリッドに位置する。長軸2.62m、短軸1.13mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-55°-Eを指す。確認面からの深さは228cmを測る。覆土から縄文土器片と焼礫片が出土している。覆土は黒色土主体で、全体にソフトロームが混入している。

(13)SK003 (第5-20図、図版5-4)

調査区の北東、40EE-33・34グリッドに位置する。北東部に攪乱を受けている。長軸3.14m、短軸0.62mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-69°-Wを指す。確認面からの深さは72cmを測る。覆土は褐色土の上に暗黄褐色土が堆積している。

(9)SK002 (第5-20図、図版5-4)

調査区の北西、41Z-08グリッドに位置する。長軸1.10m、短軸0.72mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-24°-Wを指す。確認面からの深さは195cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は黄褐色土の上に暗褐色土が堆積している。

(2)SK003 (第5-20図)

調査区の北側中央、41BB-30・31グリッドに位置する。長軸2.11m、短軸1.67mの楕円形を呈し、長軸方向はN-8°-Eを指す。確認面からの深さは207cmを測る。覆土は黒褐色土を主体とし、最下層は黒色土である。

(4)SK010 (第5-20図、図版5-4)

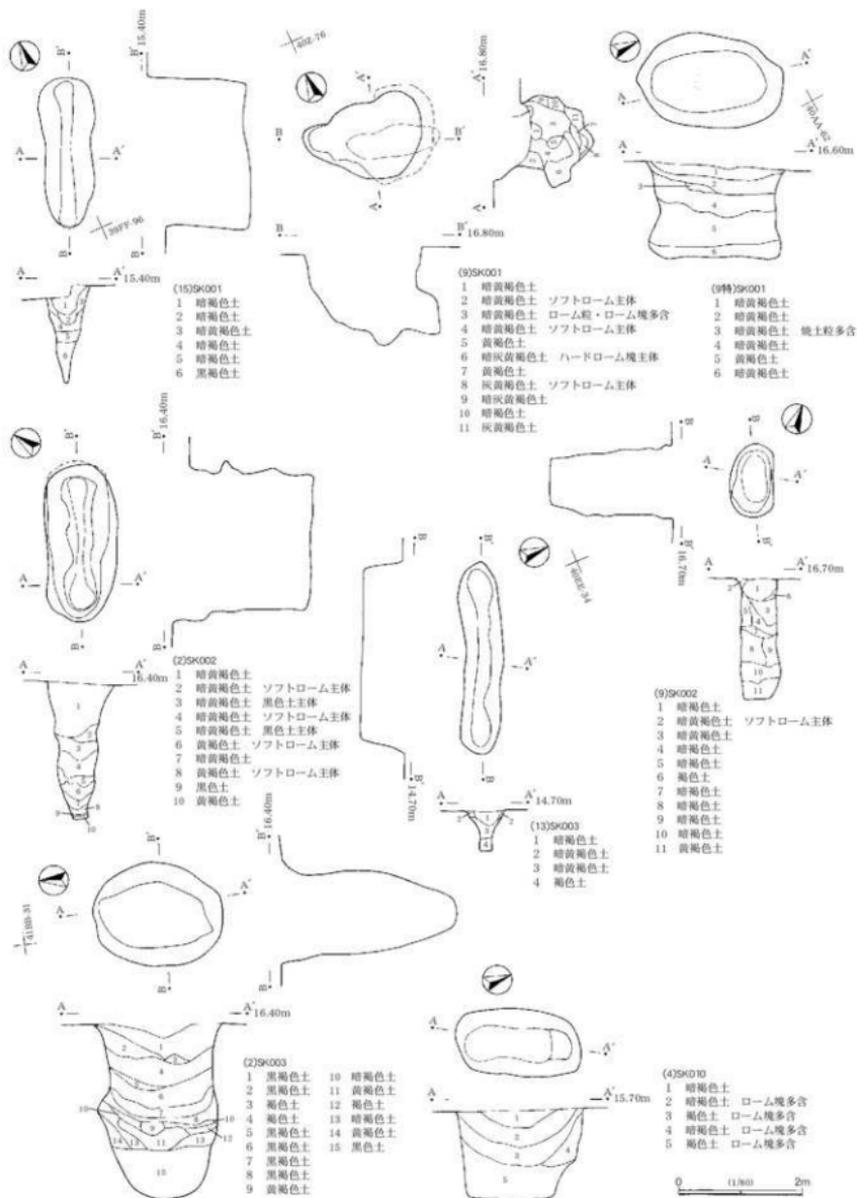
調査区の北西端、41X-59グリッド周辺に位置する。礫群2に伴う遺構か。長軸2.04m、短軸1.10mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-25°-Eを指す。確認面からの深さは151cmを測る。北側は10cm程高いテラス状となる。覆土はロームブロックを多く含む褐色土と暗褐色土が交互に堆積している。

(4)SK025+ (12)SK002 (第5-21図、図版5-4)

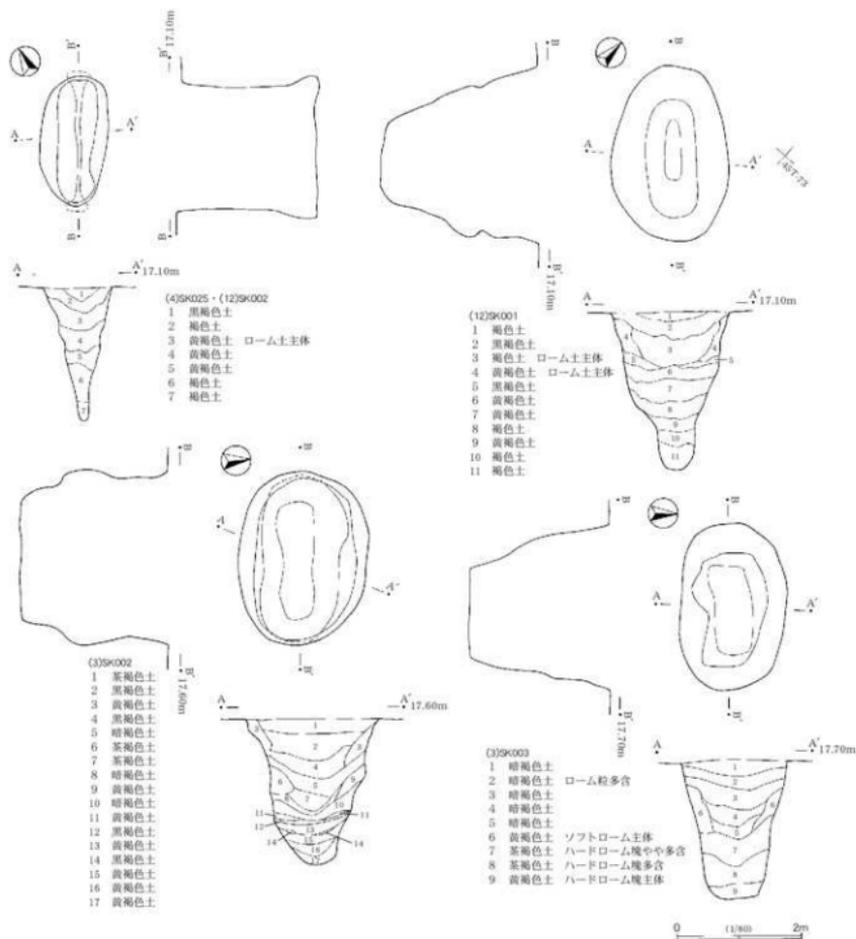
調査区の南西、45Y-34グリッドに位置する。北半分を平成11年度に、南半分を平成22年度に調査した。長軸2.12m、短軸1.09mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-32°-Eを指す。南北両端はオーバーハングする。確認面からの深さは222cmを測る。覆土は褐色土、黄褐色土を主体とする。

(12)SK001 (第5-21図、図版5-4)

調査区の南西、45Y-72グリッドに位置する。確認面での規模は長軸2.86m、短軸1.92m、底面は長軸0.98m、短軸0.28mである。平面形は長楕円形を呈し、長軸方向はN-42°-Wを指す。確認面からの深



第5-20図 陥穴①



第5-21図 陥穴②

さは258cmを測る。覆土は褐色土、黄褐色土を主体とする。

(3)SK002 (第5-21図、図版5-4)

調査区の中央付近、45CC-21・22グリッドに位置する。(3)SI001の東1.50mの距離にある。長軸2.85m、短軸2.07mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-85°-Wを指す。確認面からの深さは240cmを測る。中段はオーバーハングしている。覆土はハードローム主体の黄褐色土に黒褐色土、暗褐色土が堆積している。

## (3)SK003 (第5-21図、図版5-4)

調査区の中央付近、45CC-90グリッドに位置する。長軸2.70m、短軸1.66mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-90°-Eを指す。確認面からの深さは225cmを測る。覆土最下層はハードロームブロック主体の黄褐色土、中～上層は暗褐色土が主体となる。

## 4. 土坑・溝

## (15)SK002 (第5-22図、図版5-5)

調査区の北東端、39FF-82グリッドに位置する。西半は調査区外となる。長軸1.08mの楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは29cmを測る。

## (8)SK001 (第5-22図、図版5-5)

調査区の北西端、40Y-51グリッドに位置する。長辺0.86m、短辺0.70mの不整形を呈し、確認面からの深さは62cmを測る。下層グリッド調査中に検出され、縄文時代中期の土器片、円礫が出土した。円礫は2層～4層に含まれる。覆土は暗褐色土に褐色土が堆積する。

## (13)SK001 (第5-22図、図版5-5)

調査区の北側、40CC-09・19グリッドに位置する。径2.59mの円形で、断面は掘り鉢状を呈する。確認面からの深さは75cmを測る。覆土は暗褐色土の上に黒褐色土が堆積する。

## (13)SK002 (第5-22図、図版5-5)

調査区の北東、40EE-09グリッドに位置する。長軸1.88m、短軸1.38mの不整形楕円形を呈する。南側は攪乱を受けている。確認面からの深さは23cmとやや浅く、床面には凹凸がみられる。床面北東にピットを有する。長軸0.65m、短軸0.31m、床面からの深さ15cmである。覆土は暗黄褐色土に暗褐色土、黒褐色土が堆積する。

## (13)SK005 (第5-22図、図版5-5)

調査区の北東、40EE-25グリッドに位置する。長軸1.34m、短軸0.71mの不整形長楕円形を呈し、確認面からの深さは40cmを測る。北東壁は(13)SD002と重複し、(13)SD002の途中から西へ延びる。新旧関係は不明である。

## (13)SK004 (第5-22図、図版5-5)

調査区の北東、40EE-25・35グリッドに位置する。長軸2.65m、短軸0.78mの長楕円形を呈し、確認面からの深さは60cmを測る。(13)SD002の途中から南西方向に延び、南西端がオーバーハングする。

## (13)SK006 (第5-22図、図版5-5)

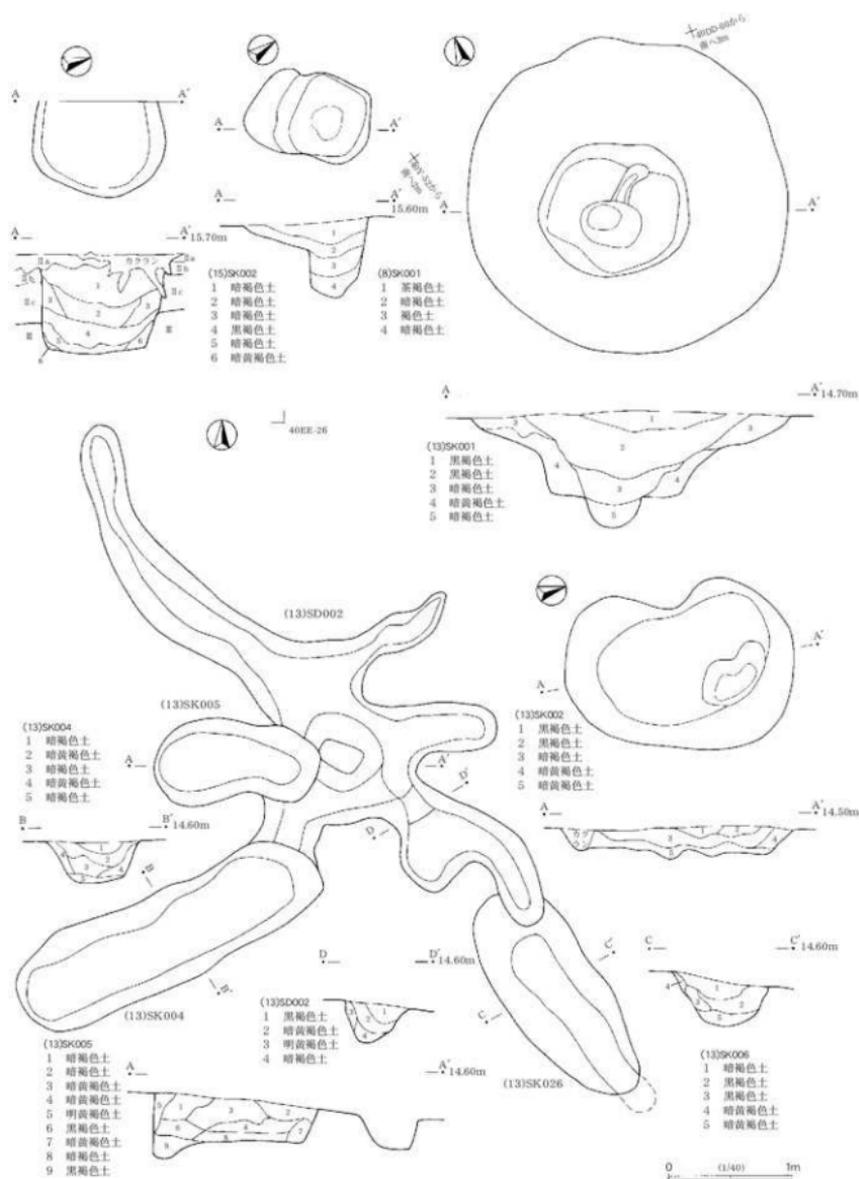
調査区の北東、40EE-36グリッドに位置する。長軸1.95m、短軸0.77mの長楕円形を呈し、確認面からの深さは50cmを測る。(13)SD002の南東端より南東へ延びる。南東端はオーバーハングする。

## (13)SK007 (第5-23図、図版5-5)

調査区の北東、41EE-04・14グリッドに位置する。長軸1.30m、短軸0.98mの楕円形を呈し、確認面からの深さは44cmを測る。床面は北から南へ10cm前後傾斜している。西側に径30cm、床面からの深さ16cmのピットを有する。

## (13)SK011 (第5-23図、図版5-5)

調査区の北東、41EE-13・23グリッドに位置する。(13)SK007から南西へ4.45mの距離にある。長軸1.35



第5-22図 土坑①

m、短軸1.30mの円形を呈し、確認面からの深さは36cmを測る。

(13)SK008 (第5-23図、図版5-5)

調査区の北東、41EE-34グリッドに位置する。長軸3.45m、短軸1.55mの不整な長楕円形を呈し、確認面からの深さは77cmを測る。南北方向に長く、北側には床面より35cm程高いテラス状となる。

(13)SK010 (第5-23図、図版5-5)

調査区の北東、41EE-34グリッドに位置する。(13)SK008から西へ1.05mの距離にある。長軸0.80m、短軸0.63mの楕円形を呈し、確認面からの深さは17cmと浅い。

(13)SK009 (第5-23図、図版5-5)

調査区の北東、41EE-34グリッドに位置する。(13)SK008の南端から西へ1.04m、(13)SK010から南へ0.90mの距離にある。長軸0.87m、短軸0.72mの楕円形を呈し、確認面からの深さは23cmを測る。

(4)SK043 (第5-23図)

調査区の西端、43X-78グリッドに位置する。西半は調査区外のため、未検出である。短軸1.20mの楕円形を呈すると思われる、確認面からの深さは40cmを測る。

(11)SK001 (第5-23図)

調査区の西端、43Y-71・81グリッドに位置する。長軸1.70m、短軸1.57mの楕円形を呈し、確認面からの深さは53cmを測る。木根による攪乱を受ける。底面は平坦、壁面は直線的に立ち上がる。覆土は暗黄褐色土に暗褐色土が堆積している。

(4)SK013 (第5-24図、図版5-6)

調査区の西端、44X-78グリッドに位置する。長軸0.68m、短軸0.60mの円形を呈し、確認面からの深さは18cmと浅い。木根による攪乱を受けている。覆土は暗褐色土が堆積している。

(4)SK014 (第5-24図、図版5-6)

調査区の西端、44X-78グリッドに位置する。(4)SK013から南西へ2.00mの距離にある。長軸0.83m、短軸0.75mの不整な楕円形で、断面は掘り鉢状を呈する。確認面からの深さは20cmを測る。覆土は暗褐色土を主体とする。

(4)SK015 (第5-24図、図版5-6)

調査区の西端、44X-78グリッドに位置する。(4)SK013から南へ1.50m、(4)SK014から東へ0.90mの距離にある。径0.40mの円形で、断面は掘り鉢状を呈する。確認面からの深さは20cmと浅い。覆土は暗褐色土を主体とする。

(4)SK016 (第5-24図、図版5-6)

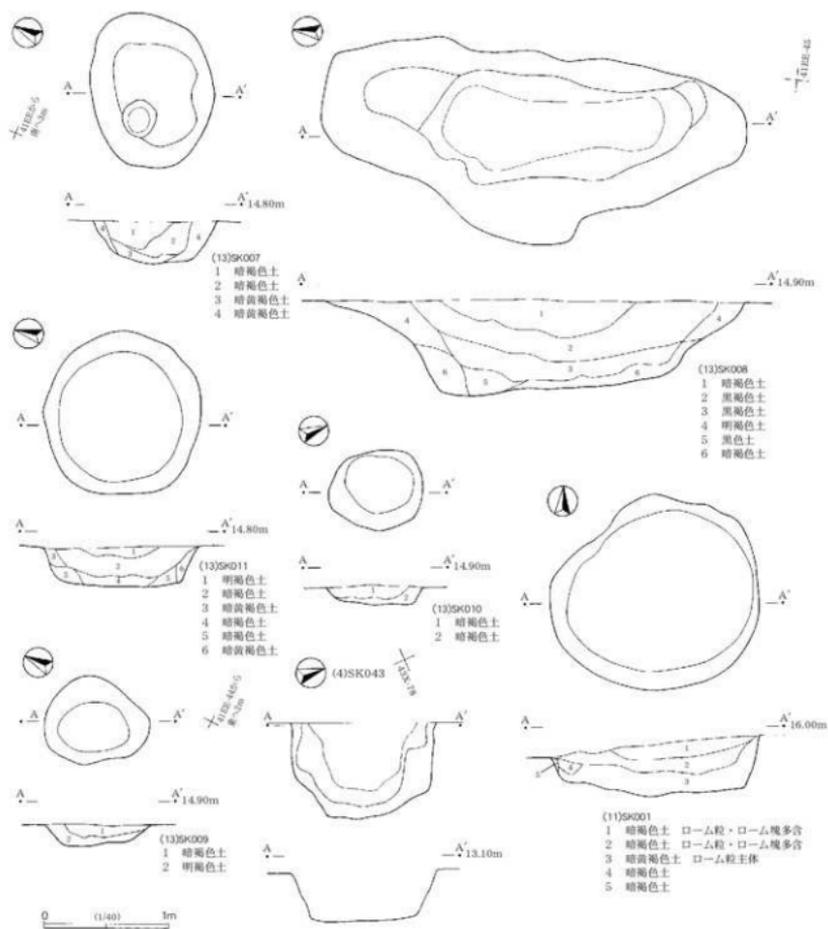
調査区の西端、44X-87グリッドに位置する。長辺0.62m、短辺0.46mの不整な長方形を呈する。確認面からの深さは12cmと浅い。

(4)SK023 (第5-24図、図版5-6)

調査区の西端、44X-87グリッドに位置する。(4)SK016から南東へ1.14mの距離にある。径1.10mの円形を呈し、確認面からの深さは15cmと浅い。

(4)SK017 (第5-24図、図版5-6)

調査区の西端、44X-87グリッドに位置する。(4)SK016から南へ0.10m、(4)SK023から東へ0.43mの距離にある。長辺1.69m、短辺1.12mの不整な長方形を呈し、確認面からの深さは15cmと浅い。



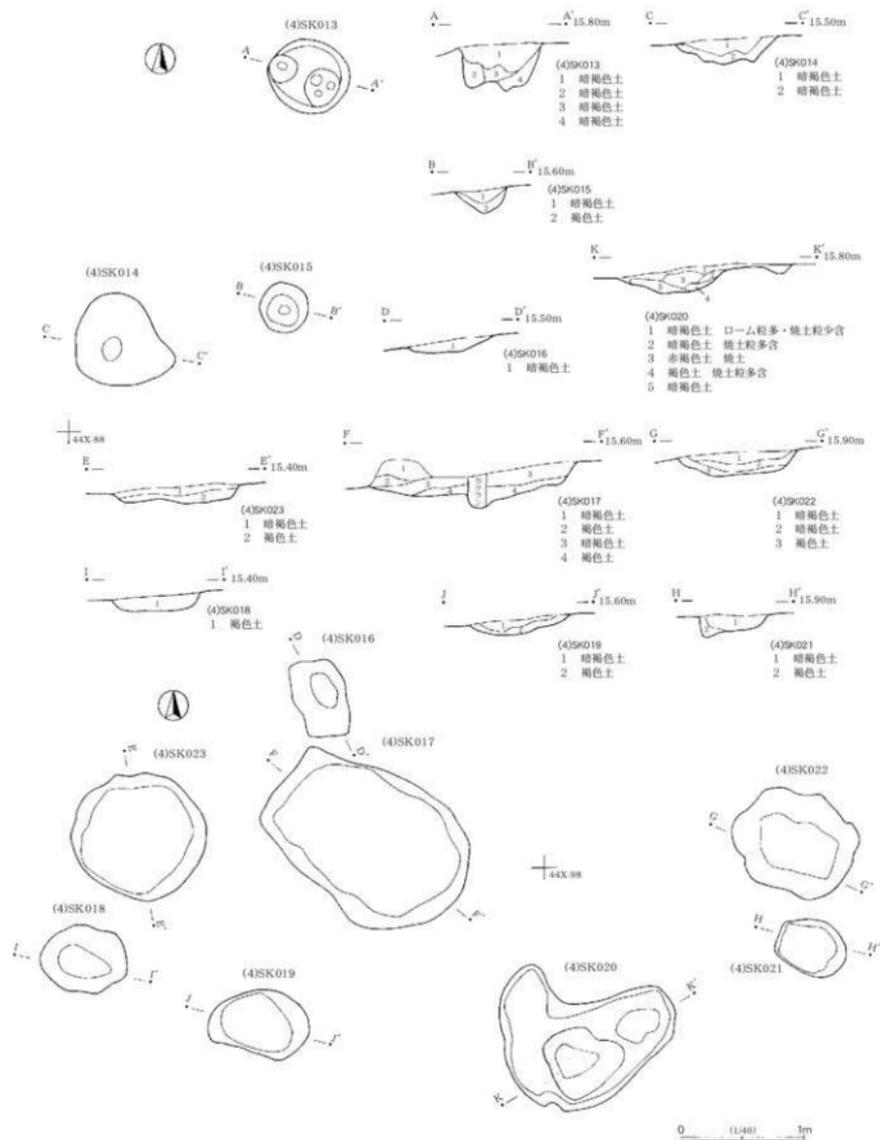
第5-23図 土坑②

(4)SK022 (第5-24図、図版5-6)

調査区の西端、44X-88・98グリッドに位置する。長軸1.00m、短軸0.85mの不整形で、確認面からの深さは17cmと浅い。

(4)SK018 (第5-24図、図版5-6)

調査区の西端、44X-97グリッドに位置する。(4)SK023から南へ0.38mの距離にある。長軸0.73m、短軸0.56mの楕円形を呈し、確認面からの深さは17cmと浅い。

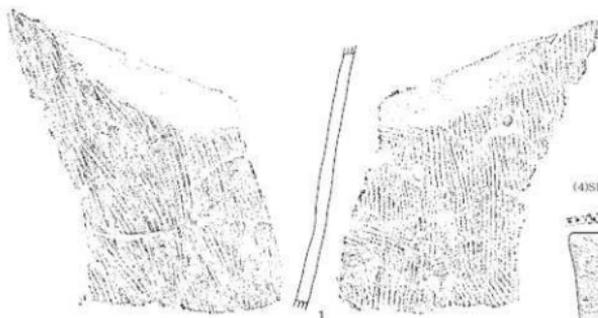


第5-24図 土坑③

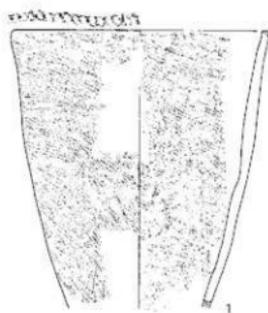
(5)SK024



(4)SK026C



(4)SK027



0 (1/3) 10cm

0 (1/4) 10cm

(9特)SK001



0 (2/3) 5cm

第5-25図 そのほか遺構出土縄文土器・石器

(4)SK019 (第5-24図、図版5-6)

調査区の西端、44X-97グリッドに位置する。(4)SK017から南西へ0.80m、(4)SK018から南東へ0.75m、(4)SK023から南東へ0.98mの距離にある。長軸0.82m、短軸0.53mの楕円形を呈し、確認面からの深さは19cmを測る。

**(4)SK021** (第5-24図、図版5-6)

調査区の西端、44X-98グリッドに位置する。(4)SK022から南へ0.16mの距離にある。長軸0.58m、短軸0.45mの楕円形を呈し、確認面からの深さは22cmを測る。

**(4)SK020** (第5-24図、図版5-7)

調査区の西端、44X-98グリッドに位置する。(4)SK021から南西へ0.94m、(4)SK022から南西へ0.12mの距離にある。長軸1.42m、短軸1.25mの不整形で、確認面からの深さは13cmと浅い。

**(13)SD002** (第5-22図、図版5-5)

調査区の北東、40E-25グリッド周辺に位置する。土坑群に混在し、北西～南東方向へアレーバ状に延びる。規模は長さ5.43m、幅0.52m～0.80m、確認面からの深さは北西端で10cm、中央で23cm、南東端で8cmである。本遺構の途中で多方向に枝分かれし、土坑群と重複する。西方向に(13)SK005、南西方向に(13)SK004、南東方向に(13)SK006が位置する。

**5. 礫群****(1) 概要** (第5-26・27図、第5-1表、図版5-7・8)

遺跡北西部の坂川に近接する40X・Y・Z、41X・Y・Z・AAグリッドから多量の礫・礫片がまとまって出土した。これらのまとまりを礫群として記載する。礫群の集中地点は8か所識別できた(第5-26・27図)。8か所の礫群が分布する範囲は、南北66m、東西140mにも及ぶ広範な分布状況を示す。礫群に伴う土器や石器類はわずかであったため、土器・石器類を含めた8か所の礫群の集中地点を礫群1～8と呼称することとする。

礫群1～8から出土した遺物総点数は、14,436点である。内訳は、礫・礫片13,002点、土器1,419点、石器類15点である。礫・礫片の占める割合が90%と極めて高い割合を示す(第5-1表)。

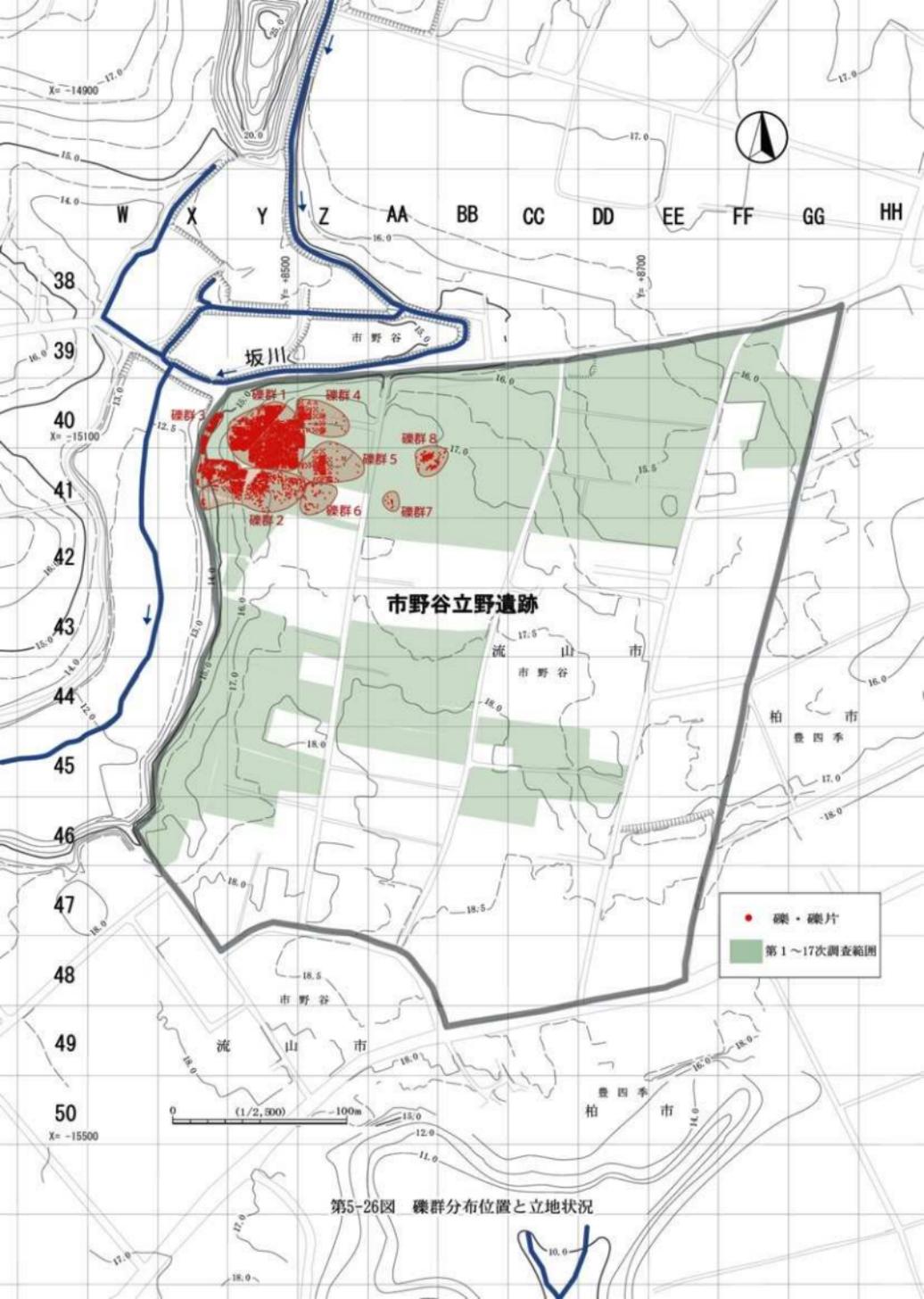
市野谷立野遺跡においては、礫群1～8以外の地点では礫・礫片がほとんど出土しておらず(第5-26図)、極めて限定された地点に礫群が形成されていることが特徴といえる。遺跡の北西部に坂川の氾濫原に近接して出土していることが大きな要因と思われる。

おそらく、この付近では、坂川によって段丘礫層が浸食され礫が露出していた可能性があり、これらの礫を用いて礫群が形成されたものと推定される。ただし、これらの推定は、地下深くまでのボーリングデータが不足しているため確実なことがいえないが、今後の課題といえよう。市野谷立野遺跡をはじめ、この周辺には旧石器時代や縄文時代の礫群を伴う遺跡が多数検出されており、礫の搬入経路を検証することは重要な課題といえよう。

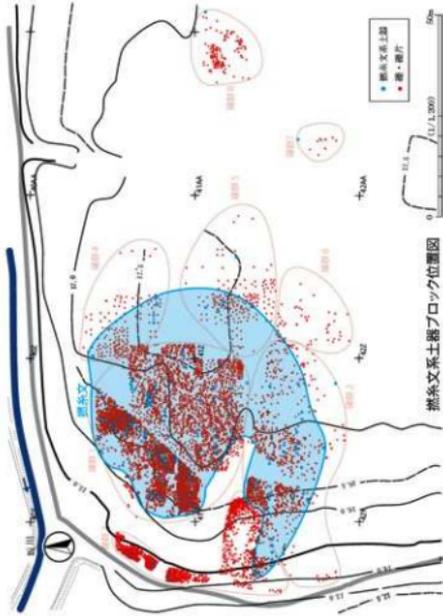
それぞれの礫群の形成時期を検討するために、次のような方法を用いた。礫群と土器・石器類・遺構との分布状況により、平面分布域の重複関係を見た。次に、8か所の礫群の集中地点の遺物組成から各礫群の特徴を抽出し、土器・石器類・遺構の平面分布域の重複関係を併せて、礫群の形成時期を検討した。

**(2) 礫群と土器・石器類・遺構との分布状況** (第5-28～32図、第5-1～9表)

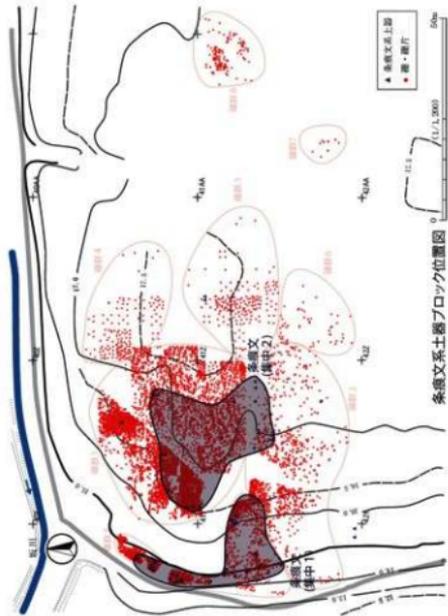
礫群の形成時期を検討するにあたっては、礫群と土器・石器類・遺構との平面分布域の重複関係を見ることにした(第5-28～32図)。また、土器組成比から、各礫群における主体となる土器型式の傾向を見た。本来ならば、出土層位も併せて検討することが望ましいが、遺物の垂直分布幅が狭く、層位的に礫群の先



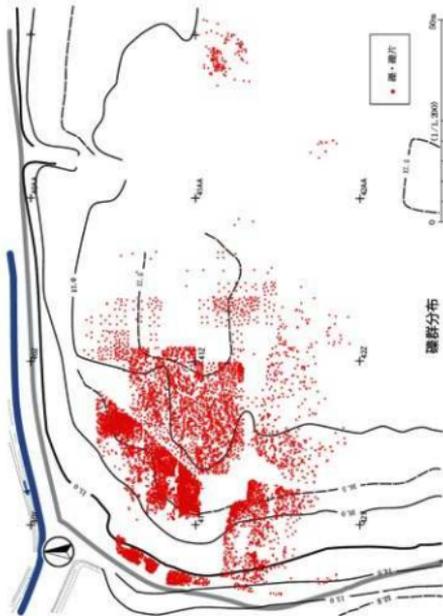
第5-26図 礫群分布位置と立地状況



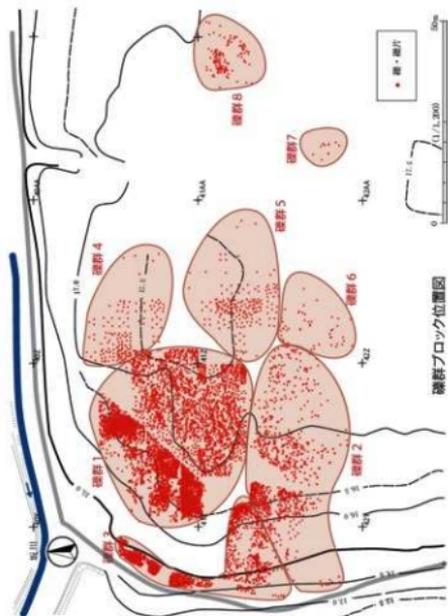
Kushikawa River basin map showing the distribution of Yayoi bronze tools.



Kushikawa River basin map showing the distribution of Yayoi bronze tools, categorized into two groups.



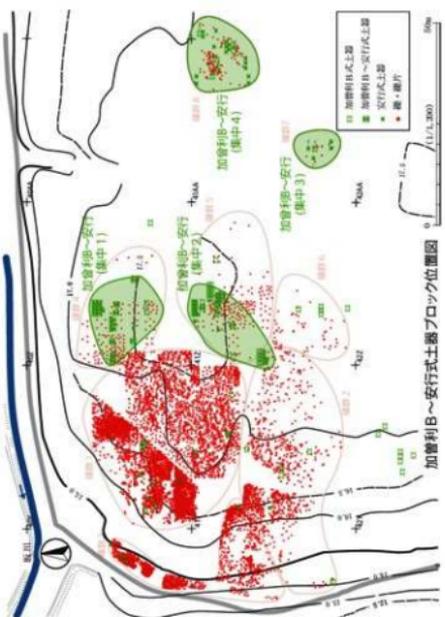
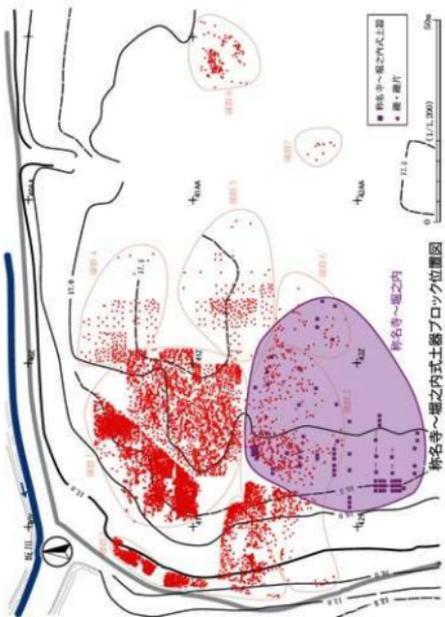
Kushikawa River basin map showing the distribution of Yayoi bronze tools.



Kushikawa River basin map showing the distribution of Yayoi bronze tools, categorized into eight groups.

Figure 5-27: Yayoi bronze tools distribution map (1) [Yayoi bronze tools distribution map]

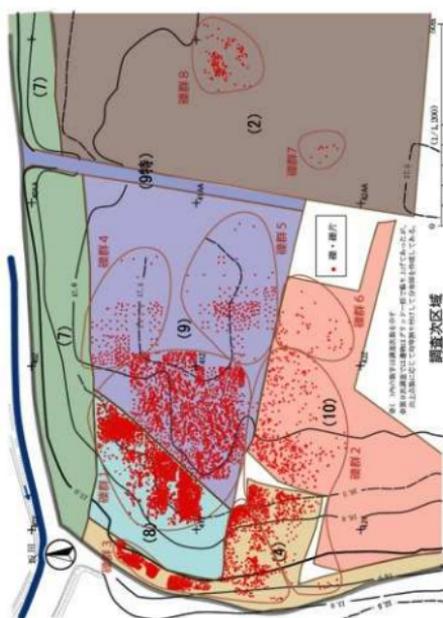
Figure 5-28: Yayoi bronze tools distribution map (2) [Yayoi bronze tools distribution map]



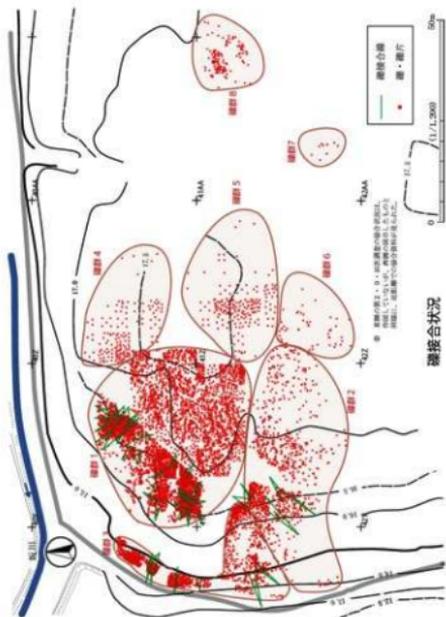
第5-30図 礫群分布(4)  
〔称名寺〜堀之内式土器・加賀利B〜安行式土器ブロック位置図〕



第5-29図 礫群分布(3) 〔黒褐色土器・浮島式土器ブロック位置図〕



第5-32図 縄群分布(6) [遺構分布・調査次区域]



第5-31図 縄群分布(5) [縄接合状況・石器出土位置]

後関係を見出すことが出来なかった。そのため本項では、平面分布域の重複関係と土器組成比から、それぞれの礫群が帰属する土器型式を推定することとした。

#### ①燃糸文系土器 (第5-28図上段)

礫群集中城西側の台地の縁辺部に分布する。礫群1全域・礫群2北部・礫群3南端部・礫群4西部・礫群5西部と重複しており、礫群1に密集し、その周辺の礫群2・4・5に散漫に分布する傾向が見られる。燃糸文系土器の土器組成比は、礫群1では56.0%、礫群2では20.2%、礫群4では19.4%、礫群5では5.6%である。燃糸文系土器は礫群1との関連が強く、礫群1の周辺の礫群2・4・5とも関連すると推定される。

#### ②条痕文系土器 (第5-28図下段)

礫群集中城西側の台地の斜面部と縁辺部に分布する。条痕文(集中1)[以下、該当する土器型式について記載をしている場合は、土器型式名を省略して集中1と記載する]と集中2の2か所の集中地点を識別できた。集中1は礫群3全域とほぼ重複し、密集して分布する。集中2は礫群1南西部・礫群2北東端部と重複、散漫に分布する。礫群3における条痕文系土器の土器組成比は46.1%である。条痕文系土器は礫群3との関連が強いと推定される。

#### ③黒浜式土器 (第5-29図上段)

礫群集中域のほぼ全域に点在する。集中1から集中6の6か所の集中地点を識別できた。集中1は、台地西側の斜面部に分布し、礫群3全域とほぼ重複する。集中2から集中4の3か所は、台地縁辺部に分布する。集中2は礫群1北西部、集中3は礫群1南東端部・礫群5東部、集中4は礫群2南部とそれぞれ重複する。集中5と集中6の2か所は、台地平坦面に分布する。集中5は礫群7、集中6は礫群8と重複する。

黒浜式土器の土器組成比は、礫群5では33.3%、礫群7では39.7%、礫群8では36.7%で高い割合を示しており、黒浜式土器は礫群5・7・8との強い関連が推定される。

#### ④浮島式土器 (第5-29図下段)

礫群集中域中央の台地平坦面に分布する。集中1と集中2の2か所の集中地点を識別できた。集中1は礫群6東部、集中2は礫群5北西部と重複する。

浮島式土器の土器組成比は、礫群6では75.6%と極めて高い割合を示す。礫群5では17.6%で、黒浜式土器の割合(33.3%)の方が高い。これらのことから、浮島式土器は礫群6との強い関連が推定される。

#### ⑤称名寺～堀之内式土器 (第5-30図上段)

礫群集中域南西の台地縁辺部に分布する。礫群2東部・礫群6西部に散漫に分布するが、礫群2よりも南側に密集域があり、礫群と平面分布が重複しない範囲に集中域が見られる。これらのことから、称名寺～堀之内式土器は、明確には礫群と重複関係がみられないと判断される。

#### ⑥加曾利B～安行式土器 (第5-30図下段)

礫群集中域西部の台地平坦面に分布する。集中1から集中4の4か所の集中地点を識別できた。集中1は礫群4全域、集中2は礫群5西部、集中3は礫群7全域、集中4は礫群8全域とそれぞれ重複する。

加曾利B～安行式土器(加曾利B式土器や安行式土器としたものも含む)の土器組成比は、礫群4では66.7%、礫群5では37.9%、礫群7では35.9%、礫群8では60%といずれも高い割合を示す。加曾利B～安行式土器は礫群4・5・7・8と重複が見られるものの、礫群4・5・7・8は、ほかの土器型式にお

いても重複関係が見られることから検討が必要である。

#### ⑦礫接合状況（第5-31図上段）

礫の接合状況については、近距離での接合資料がほとんどであった。また、礫群集中域の東側の第2・9・10次調査の接合状況は、作成していないが、西側の図示したものと同様に、近距離での接合資料が見られた。礫群間の接合資料は見られなかった。

#### ⑧石器類（第5-31図下段）

石器類は、礫・礫片の出土点数に比べて極めて少なく、わずかに15点しか出土していない。礫群1が11点、礫群6が2点、礫群8が1点、礫群外が1点である。礫群1にまとまって出土している。石器類全体の器種組成は、石鏃2点、楔形石器1点、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片4点、石核1点、打製石斧1点、磨製石斧1点、凹石1点、磨石2点である。

#### ⑨遺構分布（第5-32図上段）

礫群集中域とその周辺から出土した遺構は、焼土遺構2基、炉穴5基、陥穴5基、土坑1基である。

これらの遺構のなかで、遺構形態・分布状況から、礫群に伴うと思われるものは、焼土遺構2基と炉穴5基である。礫群の集中地点別に見ると、礫群1に伴うものが焼土遺構の(8)SK002、礫群3に伴うものが焼土遺構の(4)SK041と炉穴の(4)SK026A～D・(4)SK036である。

礫群3の南部に遺構が集中する傾向がある。遺物が出土している遺構は、条痕文系土器の野島式土器が2点出土した(4)SK026Cのみである。礫群3は条痕文（集中1）の集中地点と重複していることから、礫群3から出土したほかの遺構も条痕文期のものであると思われる。礫群1から出土した焼土遺構の(8)SK002の時期については、摺糸文と条痕文（集中2）の集中地点の範囲から出土していることから、摺糸文期か条痕文期のものであると思われる。

礫群1と礫群3から出土した焼土遺構と炉穴は、火処に関連する遺構であることから、礫を焼成するなどの機能を持っていた可能性があり、礫群の形成に大きくかかわったことが推察される。

#### ⑩調査時区域（第5-32図下段）

礫群集中域は、第2・4・8～10次の5回にわたって調査が行われた。それぞれの調査次で遺物の取り上げ方法が異なっていたので、調査次区域と遺物分布状況を示した。

第2・4・8・10次調査は全点出土位置を記録したが、第9次調査では、遺物はグリッド一括で取り上げてあった。そのため、第9次調査区域の遺物分布状況に関しては、ほかの調査次区域との整合性を持たせるために、出土点数に応じて均等割付けしてドット図を作成した。

### （3）礫群の遺物組成と礫群の形成時期（第5-28～32図、第5-1～9表）

本稿では、礫群の遺物組成を記載し、礫群の形成時期を検討する。

#### ①礫群1（第5-2表）

台地縁部に立地しており、比較的広い範囲に分布する。8か所の礫群の中でも、もっとも密度が高く、出土点数が多い。礫・礫片は10,070点出土し、礫・礫片全体の組成比の77.4%を占める。台地縁部に分布する。

礫・礫片の石材組成は、砂岩3,682点、流紋岩2,961点、チャート1,766点、ホルンフェルス1,620点で、この4石材で礫・礫片組成比の99.6%を占める。この4石材は、ほかの礫群においても主体を占めること

から、主要4石材と呼称する。そのほかの石材として、ガラス質黒色安山岩34点、玉髓5点、トトロ石1点、絹雲母片岩1点である。このうち、ガラス質黒色安山岩と玉髓は、礫・礫片として器種分類したが、石器類の剥片と識別可能なものが含まれていた。

礫・礫片の平均重量を( )内に記載した。礫群1全体の平均重量は、礫が54g、礫片が24gである。小型の円礫が持ち込まれ、大半のものが半分以下の大きさに割れたことが推定される。主要4石材の平均重量を見ると、礫では流紋岩が61gで最も重い、次に砂岩・ホルンフェルス49g、チャート47gである。礫片は、流紋岩35g、砂岩27g、チャート18g、ホルンフェルス9gである。

礫片の礫に対する平均重量比率(礫片の平均重量÷礫の平均重量×100)を礫片完形率と呼称する。礫片完形率は、礫の平均重量に対しての礫片の平均重量の比率である。礫片完形率の低いものほど、破砕

第5-1表 礫群1～8 遺物組成表

土器型式	土器不明 組成比率 (%)	器種 石材	礫		礫片完形率 (%)	礫・礫片 点数	礫・礫片 組成比 (%)	石根 二次加工 の形工 のある 剥片	二刺石 細刺石 の ある 剥片	打石 打石 の ある 剥片	磨石 磨石 の ある 剥片	凹石 凹石 の ある 剥片	磨石 磨石 の ある 剥片	石器類 点数	礫・礫片・石器類 点数					
			平均重量 (g)	平均重量 (g)												石器類 点数	石器類 点数			
世系文	190	24.0	砂岩	616 (51)	4,623 (78)	[55]	5,239	40.32						1	3	5,242				
沈線文	3	0.4	流紋岩	1,032 (61)	3,160 (36)	[58]	4,192	32.25						1	1	4,193				
条痕文	57	7.2	チャート	346 (46)	2,241 (49)	[42]	2,587	19.92	2	1				3	2,590					
閉山	2	0.3	ホルンフェルス	166 (52)	758 (28)	[54]	924	7.12			1	1		2	926					
黒浜	146	18.5	黒曜石											1	1					
踏碕a	12	1.5	ガラス質黒色 安山岩	4 (64)	37 (27)	[41]	41	0.32			1			1	42					
浮島	66	8.3	安山岩										2	2	2					
加曾利E	7	0.9	トトロ石		1 (3)		1	0.01						1	1					
加曾利EIII	3	0.4	斑岩質岩											1	1					
加曾利EIV	18	2.3	玉髓	1 (36)	4 (27)	[95]	5	0.04						5	5					
称名寺	32	4.0	蛇紋岩		1 (26)		1	0.02						1	2					
称名寺～堀之内	45	5.7	結晶片岩		1 (28)		1	0.01						1	1					
堀之内1	21	2.7	緑泥片岩		10 (16)		10	0.08						10	10					
堀之内2	8	1.0	絹雲母片岩		1 (103)		1	0.01						1	1					
土器片礫	3	0.4																		
加曾利B	81	10.2																		
加曾利B～安行	20	2.5																		
安行	77	9.7																		
土器型式不明	628																			
点数合計	1,419		点数合計※1	2,165 (53)	10,837 (28)	[51]	13,002		2	1	1	4	1	1	1	2	15	13,017		
重量合計(g)	17,422		重量合計(g)	119,247	308,068		427,315		2	90	7	8	21	68	332	14	2,550	926	4018	431,333
遺物総点数	14,436		※1 礫片完形率=礫片の平均重量÷礫の平均重量×100																	
遺物総重量(g)	448,753		※2 ( )は平均重量、[ ]は礫片完形率%																	

された割合が高いと推定される。ただし、本来ならば、それぞれの礫片を1点ごとに観察し、自然面のカーブの形状などから、完形礫の形状を推定して、推定復元される完形礫に対しての礫片の推定残存率を算出した上で、礫片の完形率を出す方法と併せる方法が望ましいと思われる。今回は、時間的制限から、1点ごとの礫片の推定残存率を算出してない。そのため、ここで呼称した礫片完形率は、あくまでも礫片の完形礫に対する残存率の目安として用いたものであることを付記しておく。

礫片完形率を低いものから順に示すと、ホルンフェルス19%、チャート38%、砂岩55%、流紋岩57%である。すなわち、破碎された確率の高いと想定されるものから順番に示すと、ホルンフェルス>チャート>砂岩>流紋岩である。

礫群1の帰属時期は、燃糸文期を主体とする。条痕文期と黒浜期においても、繰り返し礫群が形成されたと推定される。

第5-2表 礫群1 遺物組成表

土器型式	土器		器種	礫片		礫片完形率(%)	礫片点数	礫片組成比(%)	二次加工のある石器	微細剥離痕のある石器	剥石	打製石	磨製石	凹石	石器類点数	礫片・石器類点数総計
	土器	土器不明		器種	平均重量(g)											
燃糸文	145	56.0	砂岩	454 ( 39 )	3,228 ( 27 )	[ 55 ]	3,682	36.56	1	1			1	3	3,685	
条痕文	10	3.9	流紋岩	813 ( 61 )	2,148 ( 35 )	[ 57 ]	2,961	29.40						1	1	2,962
閉山	1	0.4	チャート	275 ( 12 )	1,491 ( 19 )	[ 38 ]	1,766	17.54		1					1	1,767
黒浜	14	5.4	ホルンフェルス	129 ( 12 )	1,491 ( 19 )	[ 19 ]	1,620	16.09				1			2	1,622
踏碇a	1	0.4	黒曜石												1	1
浮島	12	4.6	ガラス質黒色 安山岩	4 ( 28 )	30 ( 24 )	[ 36 ]	34	0.34		1				1	35	
加管利EⅢ	3	1.2	トロ口石		1 ( 2 )		1	0.01							1	1
加管利EⅣ	18	6.9	珪質頁岩									1			1	1
称名寺	27	10.4	玉髓	1 ( 36 )	4 ( 37 )	[ 95 ]	5	0.05							5	
堀之内1	2	0.8	蛇紋岩								1				1	1
堀之内2	8	3.1	網雲母片岩		1 ( 103 )		1	0.01							1	1
土器片鏝	2	0.8														
加管利B	14	5.4														
加管利B～安行	1	0.4														
安行	1	0.4														
土器型式不明	339															
点数合計	598			1,676 ( 91 )	8,394 ( 21 )	[ 44 ]	10,070		1	1	1	4	1	1	1	13
重量合計(g)	6,536			91,249	204,357		91,249		90	7	8	21	68	332	14	2,598
遺物総点数	10,679															
遺物総重量(g)	100,875															

※1 礫片完形率=礫片の平均重量÷礫の平均重量×100

※2 ( ) は平均重量g, [ ] は礫片完形率%

## ②礫群2 (第5-3表)

台地斜面部と縁辺部に立地しており、東西に細長く分布する。8か所の礫群の中で3番目に出土点数が多い。礫・礫片は1,134点出土し、礫・礫片全体の組成比の8.7%を占める。

礫・礫片の石材組成は、砂岩457点、流紋岩360点、チャート216点、ホルンフェルス100点で、主要4石材で礫・礫片組成比の99.9%を占める。そのほかの石材として、蛇紋岩が1点出土している。石材組成は礫群1と類似する。

礫群2全体では、礫の平均重量78g、礫片の平均重量33g、礫片完形率42%である。礫群1よりもやや大型の礫が持ち込まれている。主要4石材の平均重量を見ると、礫では砂岩が97gで最も重い、次にホルンフェルス88g、流紋岩63g、チャート58gである。礫片は、流紋岩40g、ホルンフェルス34g、砂岩31g、チャート24gである。

礫片完形率を低いものから順に示すと、砂岩32%、ホルンフェルス38%、チャート41%、流紋岩64%である。礫群1に比べて、礫片完形率が高い。

礫群2の帰属時期は、燃糸文期を主体とする。そのほかの時期のものとして、条痕文期は北部、黒浜期は北西・南東部に分布域が見られる。称名寺～堀之内時期は東部に分布するが、礫群2に帰属するか明確ではない。

第5-3表 礫群2 遺物組成表

土器型式	土器		器種	礫		礫片完形率(%)	礫・礫片点数小計	礫・礫片組成比(%)	遺物総点数	遺物総重量(g)
	土器	土器不明組成を比較(%)		礫(平均重量g)	礫片(平均重量g)					
燃糸文	26	20.2	砂岩	24 (97)	433 (21)	[32]	457	40.30	1,275	42,250
条痕文	11	8.5	流紋岩	21 (63)	339 (46)	[64]	360	31.75		
黒浜	17	13.2	チャート	10 (58)	206 (21)	[41]	216	19.05		
踏碓α	5	3.9	ホルンフェルス	10 (88)	90 (34)	[38]	100	8.82		
称名寺	3	2.3	蛇紋岩		1		1	0.09		
称名寺～堀之内	40	31.0								
堀之内1	7	5.4								
加曾利B	14	10.9								
安行	6	4.7								
土器型式不明	12									
点数合計	141		点数合計※2	65 (79)	1,069 (33)	[42]	1,134			
重量合計(g)	1,941		重量合計(g)	5,095	35,214		40,309			

※1 礫片完形率=礫片の平均重量÷礫の平均重量×100  
 ※2 ( )は平均重量g、[ ]は礫片完形率%

## ③礫群3 (第5-4表)

台地斜面部に立地しており、南北に細長く分布する。8か所の礫群の中で2番目に出土点数が多い。礫・礫片は2,220点出土し、礫・礫片全体の組成比の17.1%を占める。

礫・礫片の石材組成は、砂岩888点、流紋岩616点、チャート549点、ホルンフェルス160点で、主要4石材で礫・礫片組成比の99.7%を占める。そのほかの石材として、ガラス質黒色安山岩6点、結晶片岩1点である。石材組成は礫群1と類似する。

礫群3全体では、礫の平均重量50g、礫片の平均重量27g、礫片完成率54%である。礫群1とほぼ同じ大きさの礫が持ち込まれている。主要4石材の平均重量を高いものから示すと、礫では流紋岩58g、ホルンフェルス53g、砂岩45g、チャート40gである。礫片は、流紋岩34g、砂岩28g、ホルンフェルス26g、チャート20gである。

礫片完成率を低いものから順に示すと、ホルンフェルス49%、チャート51%、流紋岩60%、砂岩62%である。礫群1・2に比べて礫片完成率が高く、より完形に近い礫片が多いことが特徴といえよう。

礫群3の帰属時期は、条痕文期を主体とする。そのほかの時期のものとして、黒浜期に中央部から南半部において活動した痕跡が窺える。

第5-4表 礫群3 遺物組成表

土器型式	器不明組成を比較(%)		器種	片		片完成率(%)	礫片点数	礫片組成比(%)
	器	器		片	片			
			石材	重量(g)	重量(g)	※1	小計	
嵌糸文	4	5.3	砂岩	100 (15)	788 (29)	[62]	888	40.00
沈線文	2	2.6	流紋岩	135 (25)	481 (51)	[60]	616	27.75
条痕文	35	46.1	チャート	46 (30)	503 (29)	[51]	549	24.73
朝山	1	1.3	ホルンフェルス	20 (53)	140 (26)	[49]	160	7.21
黒浜	26	34.2	ガラス質黒色安山岩		0 (26)		6	0.27
隼磁a	1	1.3	結晶片岩				1	0.05
浮島	1	1.3						
珍名寺	1	1.3						
安行	5	6.6						
土器型式不明	117							
点数合計	193		点数合計 ※2	301 (56)	1,919 (27)	[54]	2,220	遺物総点数 2,413
重量合計(g)	2,520		重量合計(g)	15,115	52,538		67,653	遺物総重量(g) 70,173

※1 片完成率 = 礫片の平均重量 ÷ 礫の平均重量 × 100  
 ※2 ( ) は平均重量、[ ] は片完成率

## ④礫群4 (第5-5表)

台地平坦部に立地しており、楕円形に分布する。8か所の礫群の中では5番目の出土点数である。礫・礫片は174点出土し、礫・礫片全体の組成比の1.3%を占める。

礫・礫片の石材組成は、砂岩69点、流紋岩72点、チャート20点、ホルンフェルス13点で、すべて主要4石材で占められる。

礫群4全体では、礫の平均重量70g、礫片の平均重量37g、礫片完形率53%である。礫群1よりも大きな礫が持ち込まれている。主要4石材の平均重量の高いものから示すと、礫では砂岩88g、流紋岩76g、ホルンフェルス66g、チャート43gである。礫片は、流紋岩49g、砂岩33g、ホルンフェルス28g、チャート12gである。

礫片完形率を低いものから順に示すと、チャート27%、砂岩38%、ホルンフェルス43%、流紋岩64%である。礫群2と同じ程度の礫片完形率を示す。

礫群4の帰属時期は、燃糸文期が該当すると思われる。加曾利B～安行期は、分布域が重複するが、礫群4に帰属するかは明確ではない。

第5-5表 礫群4 遺物組成表

土器型式	土器		器種	礫		礫片完形率(%)	礫・礫片点数	礫・礫片組成比(%)
	土器不明組成を比較(%)	器		( )は平均重量(g)	( )は平均重量(g)			
燃糸文	7	19.4	砂岩	9 ( 89 )	60 ( 33 )	[ 38 ]	69	39.66
諸磯a	1	2.8	流紋岩	27 ( 76 )	45 ( 49 )	[ 64 ]	72	41.38
称名寺	1	2.8	チャート	11 ( 33 )	9 ( 12 )	[ 27 ]	20	11.49
加曾利B	3	8.3	ホルンフェルス	4 ( 66 )	9 ( 28 )	[ 43 ]	13	7.47
加曾利B～安行	15	41.7						
安行	9	25.0						
土器型式不明	24							
点数合計	60		点数合計※2	51 ( 33 )	123 ( 37 )	[ 53 ]	174	
重量合計(g)	807		重量合計(g)	3,588	4,562		8,150	

※1 礫片完形率=礫片の平均重量÷礫の平均重量×100  
※2 ( )は平均重量、[ ]は礫片完形率%

遺物総点数	234
遺物総重量(g)	8,957

## ⑤礫群5 (第5-6表)

台地平坦部に立地しており、楕円形に分布する。8か所の礫群の中では4番目の出土点数である。礫・礫片は180点出土し、礫・礫片全体の組成比の1.4%を占める。

礫・礫片の石材組成は、砂岩74点、流紋岩65点、チャート22点、ホルンフェルス9点で、主要4石材で礫・礫片組成比の94%を占める。そのほかの石材は、ガラス質黒色安山岩1点、緑泥片岩9点である。

礫群5全体では、礫の平均重量55g、礫片の平均重量41g、礫片完形率75%である。礫群1とほぼ同じ大きさの礫が持ち込まれている。礫片完形率が高く、破損している割合が低いことが特徴である。礫片完形率を低いものから順に示すと、ホルンフェルス66%、流紋岩69%、砂岩78%である。

礫群5の帰属時期は、黒浜期を主体とする。そのほかの時期のものとして、浮島期が北部に分布し、礫

第5-6表 礫群5 遺物組成表

土器型式	土器	土器不明 相成を比較 (%)	器種	礫		礫片 完形率 (%)	礫・ 礫片 点数 小計	礫・ 礫片 組成比 (%)
				(平均重量g)	(平均重量g)			
透糸文	6	5.6	砂岩	24 (19.3)	50 (36)	[78]	74	41.11
沈線文	1	0.9	流紋岩	29 (66)	36 (43)	[69]	65	36.11
糸痕文	1	0.9	チャート	4 (23)	18 (36)		22	12.22
黒糸	36	33.3	ホルンフェルス	3 (31)	6 (35)	[66]	9	5.00
諸磯a	3	2.8	ガラス質黒色安山岩		1 (10.7)		1	0.56
浮島	19	17.6	緑泥片岩		9 (4)		9	5.00
土器片鉢	1	0.9						
加曾利B	17	15.7						
加曾利B～安行	4	3.7						
安行	20	18.5						
土器型式不明	42							
点数合計	150		点数合計※2	60 (36)	120 (41)	[75]	180	
重量合計(g)	1,645		重量合計(g)	3,323	4,903		8,226	

遺物総点数	330
遺物総重量(g)	9,871

※1 礫片完形率=礫片の平均重量÷礫の平均重量×100  
 ※2 ( )は平均重量g、[ ]は礫片完形率%

群5の帰属時期に該当する可能性がある。加曾利B～安行期は西部に分布するが、礫群5に帰属するかは明確ではない。

#### ⑥礫群6 (第5-7表)

台地平坦部に立地しており、楕円形に分布する。8か所の礫群の中では7番目の出土点数で散漫に分布している。礫・礫片は58点出土し、礫・礫片全体の組成比の0.4%を占める。

礫・礫片の石材組成は、砂岩22点、流紋岩24点、チャート10点、ホルンフェルス2点で、すべて主要4石材で占められる。

礫群6全体では、礫の平均重量66g、礫片の平均重量34g、礫片完形率56%である。礫群4と類似している。礫片完形率を低いものから順に示すと、流紋岩63%、砂岩67%である。

礫群6の帰属時期は、浮島期を主体とする。

#### ⑦礫群7 (第5-8表)

台地平坦部に立地しており、小範囲に分布する。8か所の礫群の中では最も出土点数が少ない。礫・礫片は15点出土し、礫・礫片全体の組成比のわずか0.1%である。

礫・礫片の石材組成は、砂岩2点、流紋岩9点、チャート1点、ホルンフェルス2点で、主要4石材で礫・礫片組成比の93%を占める。そのほかの石材は、緑泥片岩1点である。

礫群7全体では、礫の平均重量59g、礫片の平均重量27g、礫片完形率46%である。礫群1と類似して

第5-7表 礫群6 遺物組成表

土器型式	土器	土器不明を比較(%)	器種	礫片 ( )は平均重量(g)	礫片 ( )は平均重量(g)	礫片 完形率(%)	礫片 ・ 礫片 組成比(%)	石 ・ 磨石	石器類 点数	石器類 小計	礫片・石器類 点数総計	遺物総点数	遺物総重量(g)
諸磯a	1	2.2	砂岩	4 (15)	18 (43)	[67]	22	37.93			22		
浮島	34	75.6	流紋岩	3 (26)	21 (35)	[63]	24	41.38			24		
称名寺～堀之内	5	11.1	チャート		10 (17)		10	17.24	1	1	11		
加曾利B	5	11.1	ホルンフェルス 安山岩		2 (28)		2	3.45		1	2		
点数合計	45		点数合計※2	7 (61)	51 (31)	[56]	58		1	1	60	105	
重量合計(g)	734		重量合計(g)	428	1,743		2,171		1	438	439	2,610	3,344

※1 礫片完形率=礫片の平均重量÷礫の平均重量×100  
 ※2 ( )は平均重量g、[ ]は礫片完形率%

第5-8表 礫群7 遺物組成表

土器型式	土器	土器不明を比較(%)	器種	礫片 ( )は平均重量(g)	礫片 ( )は平均重量(g)	礫片 完形率(%)	礫片 ・ 礫片 組成比(%)	石 ・ 磨石	石器類 点数	石器類 小計	礫片・石器類 点数総計	遺物総点数	遺物総重量(g)
徳系文	1	1.3	砂岩		2 (28)		2	13.33			2		
黒浜	31	39.7	流紋岩	1 (26)	8 (26)	[60]	9	60.00			9		
加曾利E	6	7.7	チャート		1 (1)		1	6.67			1		
堀之内1	12	15.4	ホルンフェルス		2 (20)		2	13.33			2		
加曾利B	10	12.8	緑泥片岩		1 (2)		1	6.67			1		
安行	18	23.1											
土器型式不明	69												
点数合計	147		点数合計※2	1 (26)	14 (27)	[46]	15				15	162	
重量合計(g)	1,699		重量合計(g)	59	379		438				438	2,137	

※1 礫片完形率=礫片の平均重量÷礫の平均重量×100  
 ※2 ( )は平均重量g、[ ]は礫片完形率%

いる。

礫群7の帰属時期は、黒浜期の集中域が礫群1～3・5と密接に関連していることから、黒浜期が該当する可能性が高い。加曾利B～安行期については、礫群7に帰属するかは明確ではない。

## ⑧礫群8 (第5-9表)

台地平坦部に立地しており、楕円形に分布する。8か所の礫群の中では6番目の出土点数である。礫・礫片は143点出土し、礫・礫片全体の組成比の1.1%を占める。

礫・礫片の石材組成は、砂岩45点、流紋岩85点、チャート3点、ホルンフェルス10点で、すべて主要4石材で占められる。

礫群8全体では、礫の平均重量98g、礫片の平均重量31g、礫片完形率32%である。

礫群8の帰属時期は、礫群7と同様に黒浜期が該当する。

第5-9表 礫群8 遺物組成表

土器型式	土器不明組成を比較(%)		器種	礫 ( )は平均重量(g)	礫片 ( )は平均重量(g)	礫片完形率(%) ※1	礫・礫片点数小計	礫・礫片組成比(%)	石器類 点数小計	礫・礫片・石器類 点数総計	
	土器	土器不明									石材
燃糸文	1	1.7	砂岩	1 (29)	44 (20)	[40]	45	31.47	0	45	
黒浜	22	36.7	流紋岩	3 (104)	82 (31)	[30]	85	59.44	0	85	
加曾利E	1	1.7	チャート		3 (23)		3	2.10	0	3	
加曾利B	18	30.0	ホルンフェルス		10 (36)		10	6.99	0	10	
安行	18	30.0	安山岩						1	1	
土器型式不明	25										
点数合計	85		点数合計 ※2	4 (106)	139 (31)	[32]	143		1	1	144
重量合計(g)	1,542		重量合計(g)	390	4,371		4,761		488	488	5,249

※1 礫片完形率=礫片の平均重量÷礫の平均重量×100  
 ※2 ( )は平均重量g、[ ]は礫片完形率%

遺物総点数	229
遺物総重量(g)	6,791

## (4) 礫群内出土の縄文土器 (第5-33~40図、図版5-15・16)

出土遺物の説明に際し、便宜的に早期、前期、中期、後期、晩期の5群に大別し、各群を土器型式に準じて細別した。

## 第1群1類 燃糸文系土器 (第5-33図1~40)

早期燃糸文系土器を一括した。1~4は夏島式土器で、縄文施文型(J型)と燃糸施文型(Y型)が検出された。1・2はJ型で、使用原体は単節RL。3・4はY型で、使用原体は燃糸Rとなる。

5~40は稲荷台式土器である。口唇形態はシメトリー気味の円頭状を呈する。5・12はJ型で、使用原体は5が単節RL、12が単節LRとなる。6~11・13~27はY型で、使用原体は8・10・11・13・21・22・25・26が燃糸L、これ以外は燃糸Rとなる。施文域では10・11がやや幅狭の口縁部無文帯を有する。そのほか、24では燃糸原体が粗く、稲荷原式的な色合いを有する。

30~40は無文土器(M型)で、39・40のような、やや擦痕気味のものも含む。

**第1群2類 沈線文系土器** (第5-33図41~43)

41は胎土に長石・石英粒を含み、ケズリにより粒子が移動するもので、三戸式に伴う飾らない土器と思われる。42・43は田戸下層式で、文様描線に太沈線を用い、装飾として爪形文を施す。

**第1群3類 条痕文系土器** (第5-34図44~63)

44~63は条痕文系土器である。このうち、斜めないし縦を主とする貝殻条痕を表裏に施したものは、野島式土器に位置づけられる可能性が高い。そのほかは茅山下層式土器に位置づけられる。文様帯を有するものは44~47で、刺突や太沈線で意匠を描く。48・49は表裏とも貝殻条痕、口唇部に刻みを施すものである。50~53・55~63は表裏とも貝殻条痕を施した胴部片で、先述の野島式に比較して器壁が厚く、繊維の含有量が増加傾向にあり、横方向の条痕を主とする。

**第2群1類 関山式土器** (第5-35図64~66)

64~66は関山Ⅱ式土器である。いずれも口縁部片で、還付末端によるループ文を重畳施文する。

**第2群2類 有尾系土器** (第5-35図67~72)

67~69は同一個体で、波状口縁を呈し、波底部に2個一組の山形突起を付す。地文縄文として附加条縄文(軸RL+r)と(軸LR+r)で羽状施文後、口縁下に2列の爪形文を廻らす。70は爪形文を描線として菱形文を描くもので、71・72も同様の文様構成となろう。

**第2群3類 黒浜式土器** (第5-35図73~94)

73・74は縦位沈線を施したもので、75は葉脈状文ないし肋骨文の類いか。76~94は地文縄文のみ、ないし地文部分を集めた。76~82は無節縄文を地文とするもので、使用原体は76~80がL、81・82がRとなる。83~88は単節縄文を地文とするもので、83・85がLR、84・86がRL、87・88はLRとRLで羽状施文する。89~92は附加条縄文を地文とし、89は(軸不明+L 2本)と(軸不明+R 2本)による羽状施文、90は(軸不明+L 1本)、91は(軸不明+L 2本)、92は(軸不明+R 2本)を用いる。93は貝殻腹縁文か。94は底部である。

**第2群4類 諸磯式土器** (第5-36図95~98)

95~98は同一個体で、地文として単節RL(直前段多条)を施文後、頭部に竹管の内側で葉脈状文を描く。くびれ部は上下両端を平行沈線で画し、沈線間を磨り消している。諸磯a式土器である。

**第2群5類 浮島式土器** (第5-36図99~107)

99・100は口唇部に縦位の条線帯を有し、口縁部以下はランダムな沈線を施す。106・107も沈線を施すが、構成は不明である。101は横位に三角文を重畳施文する。102は竹管による刺突、103~105は波状貝殻文を施す。これらは浮島Ⅲ式に位置づけられる。

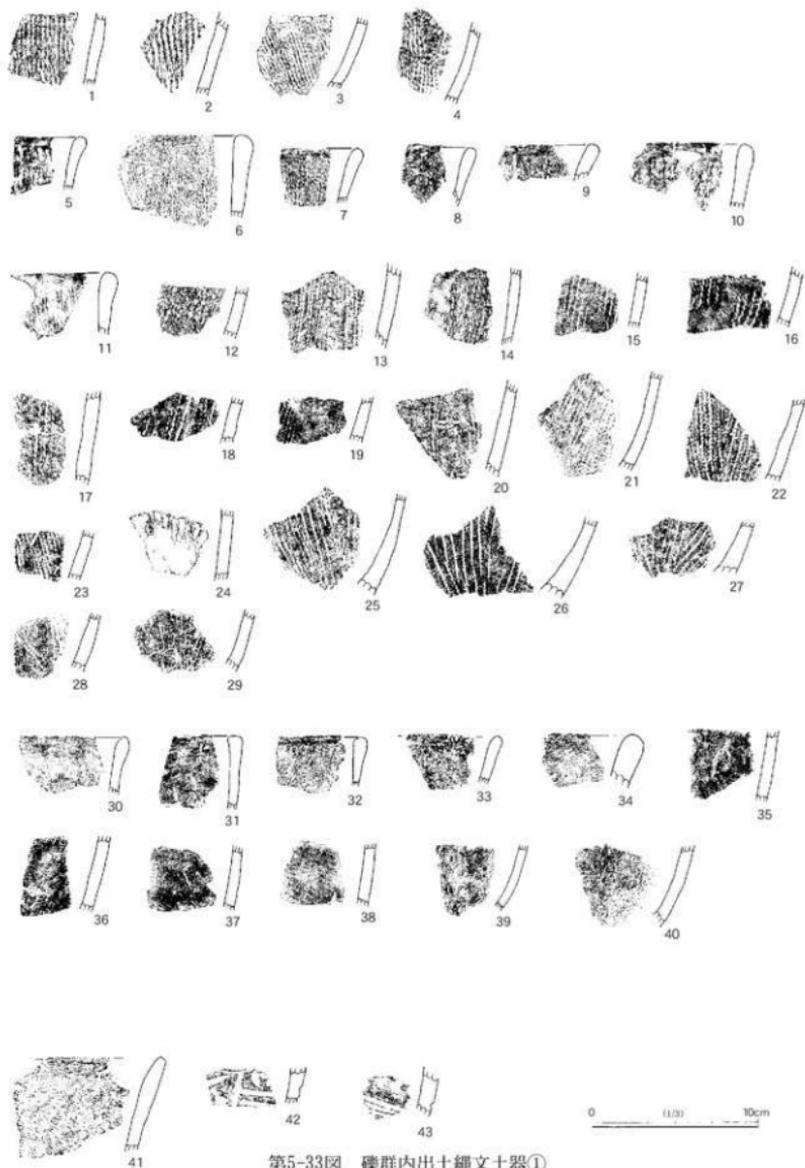
**第3群 加曾利E式土器** (第5-37図108~118)

中期に大別される土器は加曾利E式土器のみであるため、本群は細別を行わなかった。

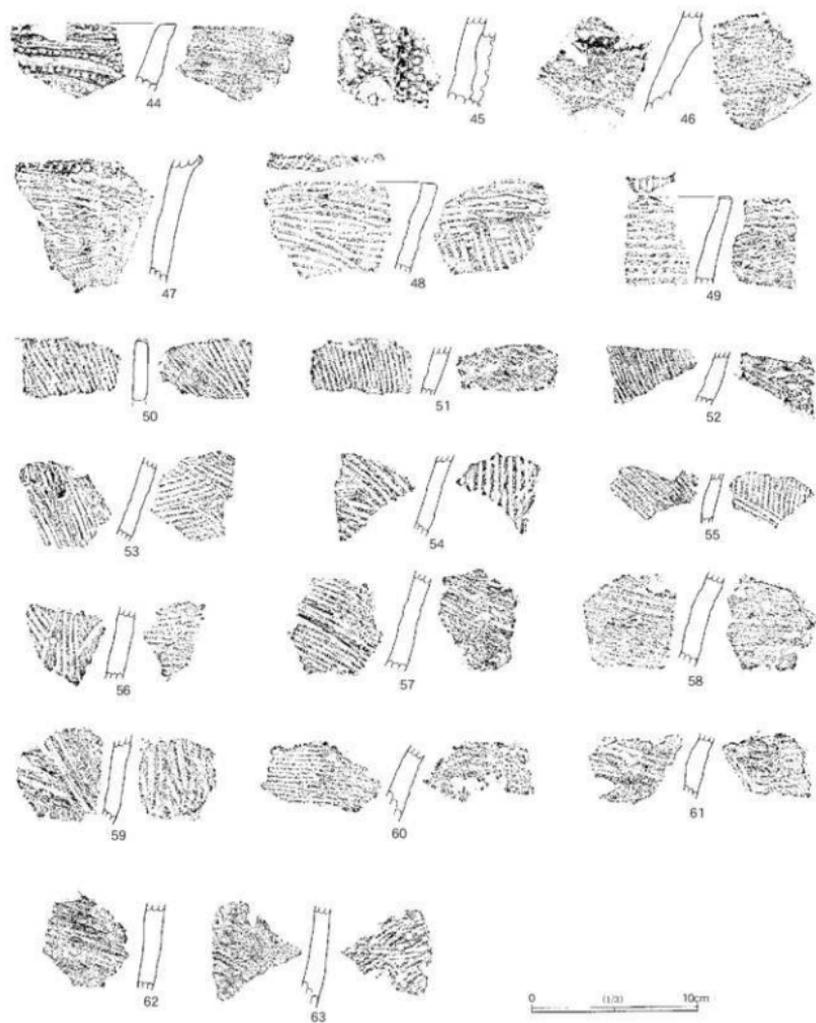
108は地文縄文単節LRを施文後、円形刺突を廻らす。109・110は「沈文系意匠充填系土器」で、磨消縄文で逆U字状文などを描く。縄文はともに単節RLを充填する。111~115は微隆線で意匠を施すもので、111・112とも単節LRを用いる。116・117は縄文系粗製土器、118は条線文系粗製土器である。以上のうち、108~110・116~118は加曾利EⅢ式、111~115は加曾利EⅣ式に位置づけられる。

**第4群1類 称名寺式土器** (第5-37図119~130)

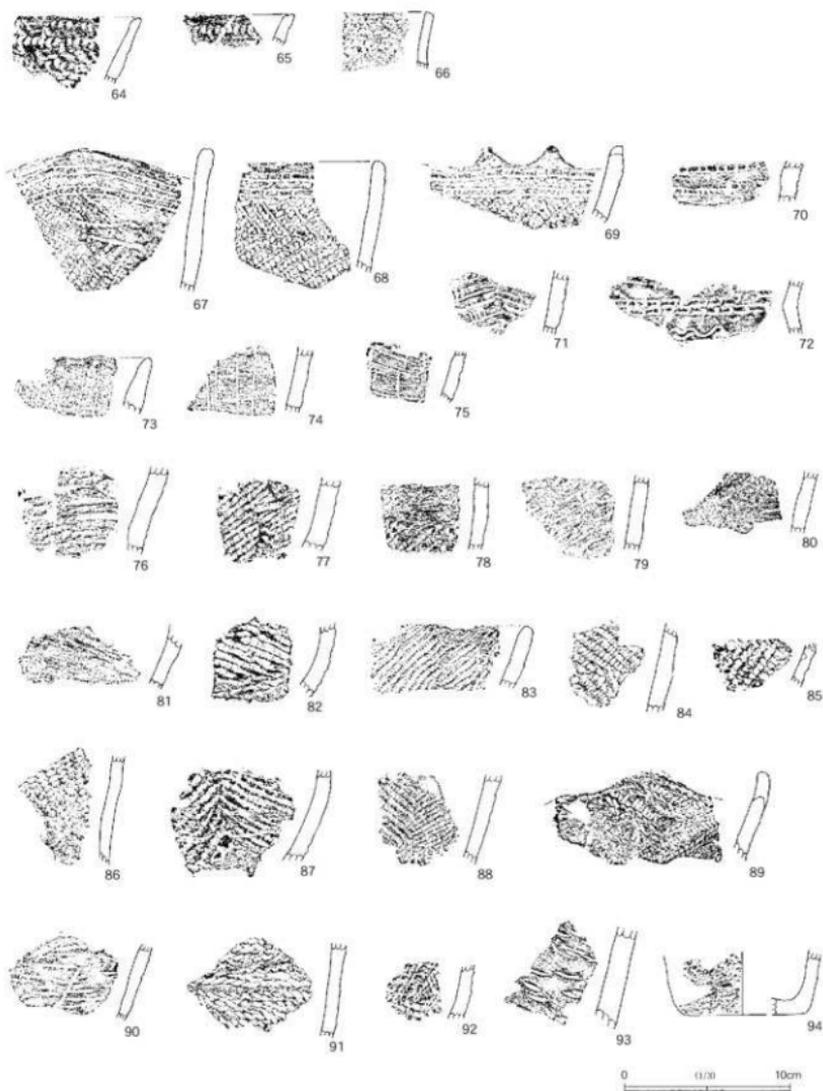
119~122は磨消縄文で意匠を描くもので、充填縄文は119~121が単節RL、122が単節LRとなる。123



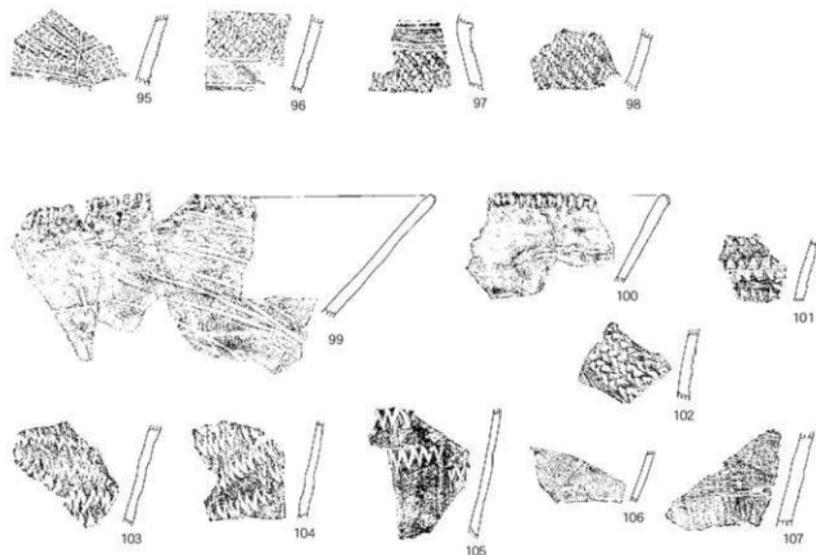
第5-33図 礫群内出土縄文土器①



第5-34図 礫群内出土縄文土器②



第5-35図 礫群内出土縄文土器③



第5-36図 磯群内出土縄文土器④

～125は沈線で意匠を描き、列点を充填する。123は施文の二原則である交互施文の原理を逸脱している。126～129は沈線で意匠を描き、条線を充填するもので、口縁部文様の復活が認められる。130は沈線のみで意匠を施したものである。以上のうち、119～122は称名寺Ⅰ式、123～130は称名寺Ⅱ式に位置づけられるが、119はボタン状貼付文などの要素から、称名寺Ⅱ式で良いかもしれない。

**第4群2類 堀之内式土器 (第5-38図131～147)**

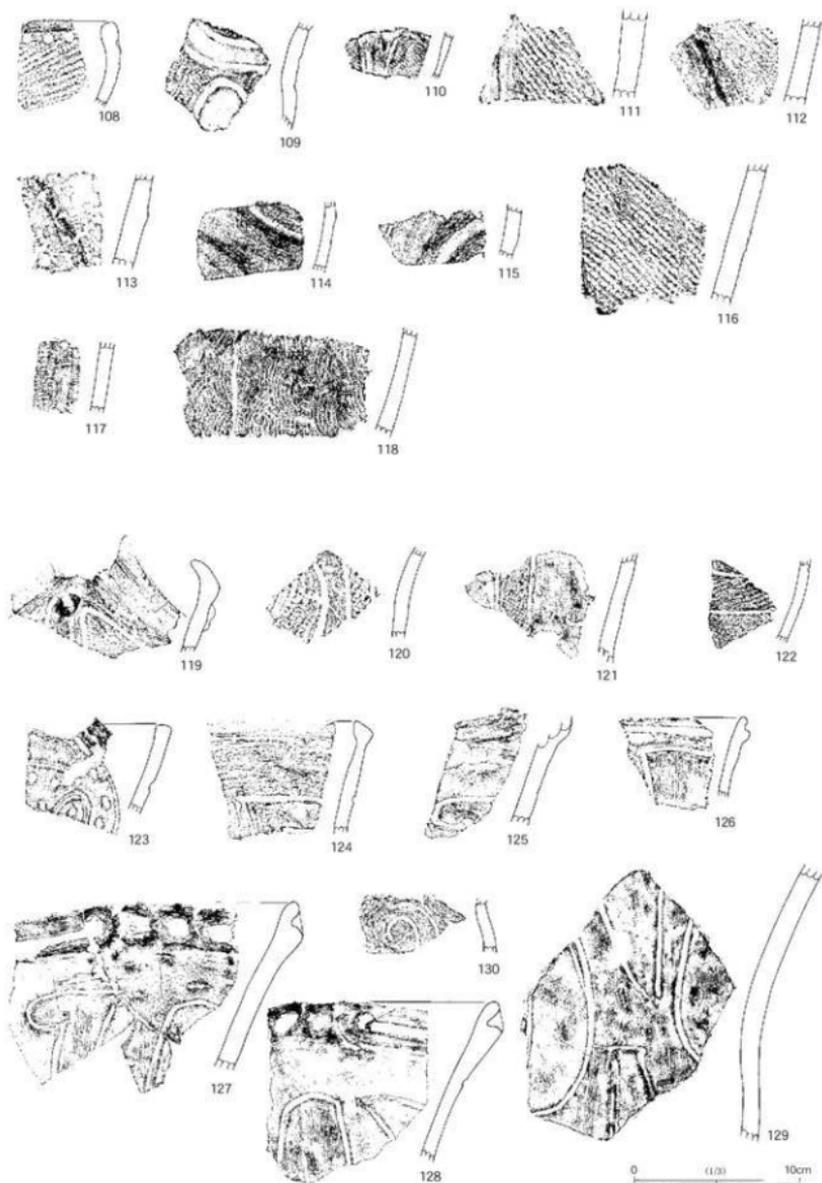
132・135・136・138は口縁部文様ないし装飾を有する。基本的には地文縄文を施文後、沈線による意匠を施すが、142は地文をもたず、沈線のみで意匠を描くもので、これのみ西関東系となる。主文様の描き方から133・134・140・141が新しくなるが、131～142は堀之内Ⅰ式に位置づけられる。143～147はいわゆる朝顔型深鉢で、重三角文や重菱形文を磨消縄文で描く。使用原体はいずれも単節LRで、これらは堀之内Ⅱ式に位置づけられる。

**第4群3類 加曾利B式土器 (第5-39図148～162)**

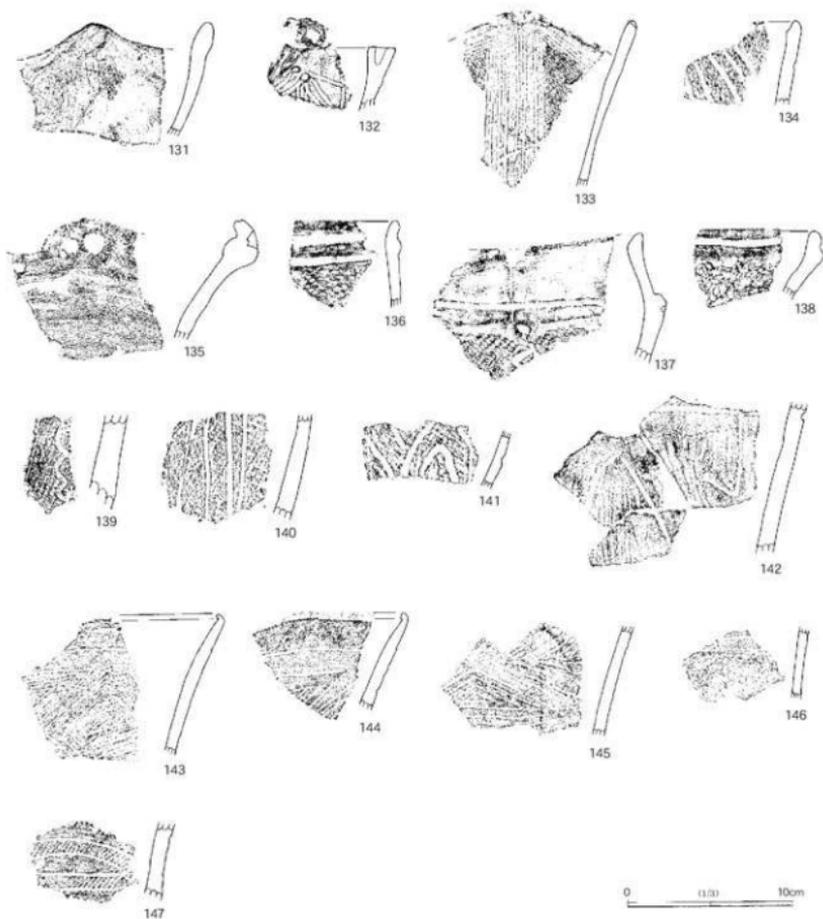
148～156は精製土器で、148・149は波状口縁深鉢、150は平縁深鉢、151～154は深鉢胴部、155は浅鉢となる。磨消縄文で意匠を描く。使用原体は148～150が単節RL、ほかは単節LRである。156は類型不明の精製土器、157は無文系粗製土器、162は地文に単節RLを施す縄文系粗製土器である。158～161は紐線文系粗製土器で、紐線貼付部位の施文順序は①地文②条線③紐線貼付④連続押圧となる。型式上の位置づけは、精製土器・粗製土器ともにおおむね加曾利B3式の可能性が高い。

**第4群4類 後期安行式土器 (第5-39図163～176)**

163～165は精製土器で、口唇部に刻文列を施し、それ以下は右下がりの条線となる。166～176は紐線文



第5-37図 礫群内出土縄文土器⑤

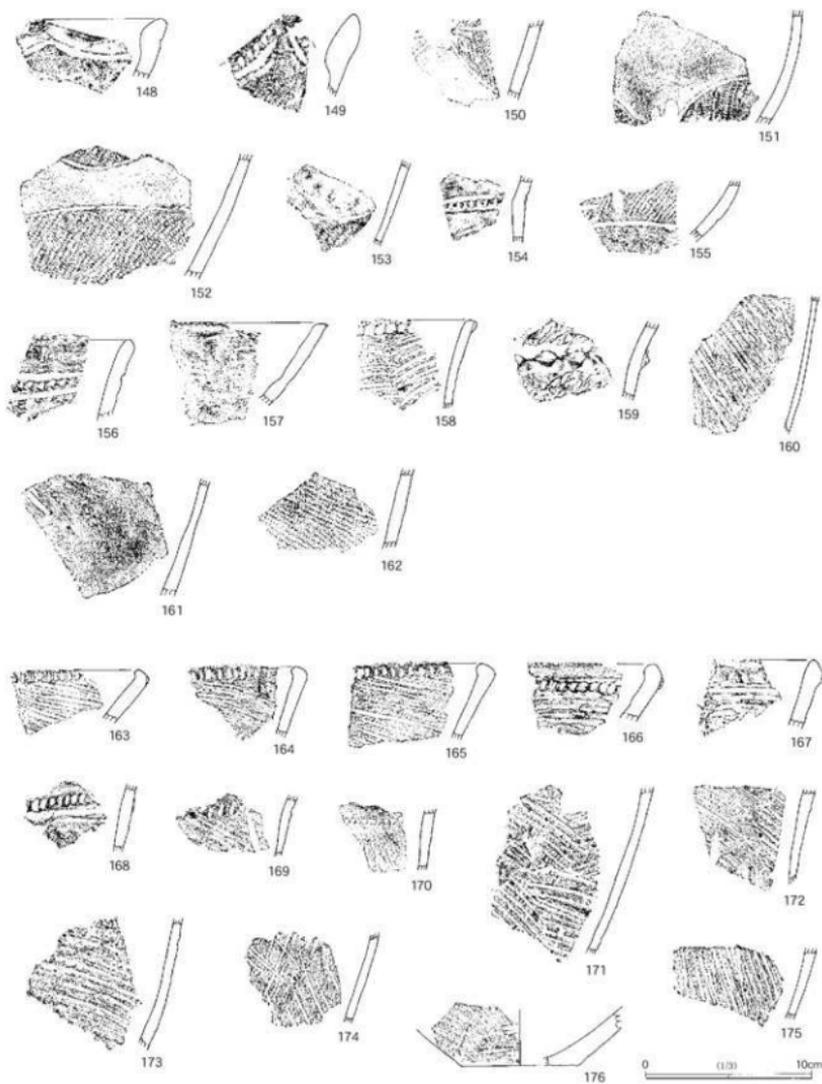


第5-38図 礫群内出土縄文土器⑥

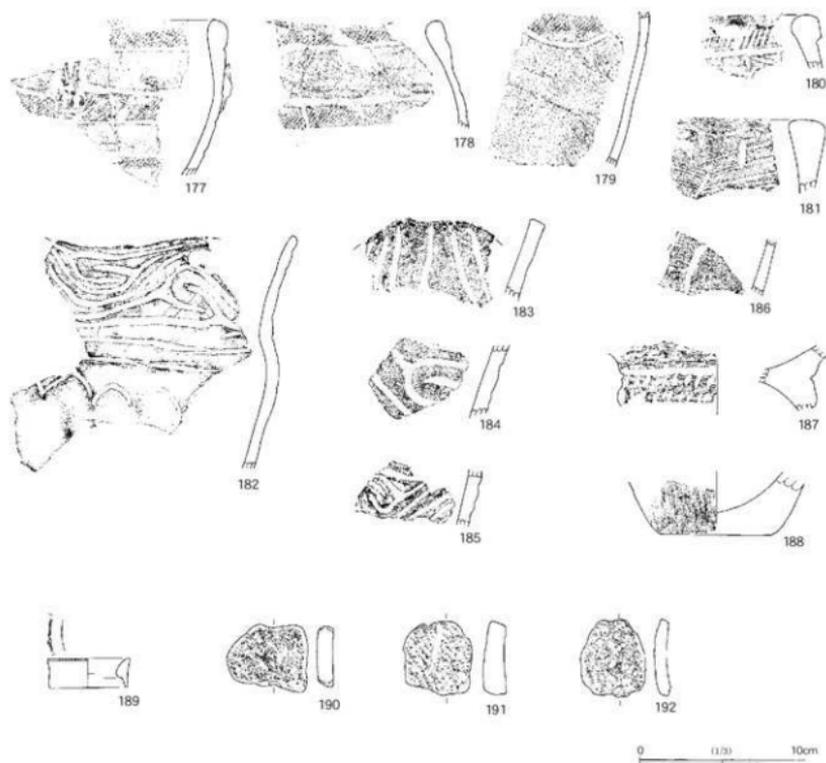
系粗製土器で、紐線貼付部位の施文順序は①条線②紐線貼付③密接した連続押圧となる。型式上の位置づけは、精製土器・粗製土器ともに安行1式の可能性が高い。

**第5群土器 晩期安行式土器 (第5-40図177~188)**

177~179は精製土器である。このうち177・178は平縁深鉢で、帯縄文で連続杵状文を描く。179は磨消縄文を用いて下向き弧線文を描いている。180・181は紐線文系粗製土器であるが、180では紐線上に単筋RLを施す。181は条線のみを施したもので、以上は安行3b式に位置づけられるが、東関東の「姥山系(姥山Ⅱ式)」の影響が強い。



第5-39図 礫群内出土縄文土器⑦



第5-40図 磯群内出土縄文土器⑧・土製品

182～188は精製深鉢で波状4単位を呈し、口縁部文様帯に三叉入組文、胴部中位に平行沈線を引き、胴部に弧線文を廻らせる。187は精製台付土器であるが、台部より上の器形は不明である。188は調整痕のみの無文系粗製土器となる。型式上の位置づけは、精製土器・粗製土器ともに安行3d式に比定される。

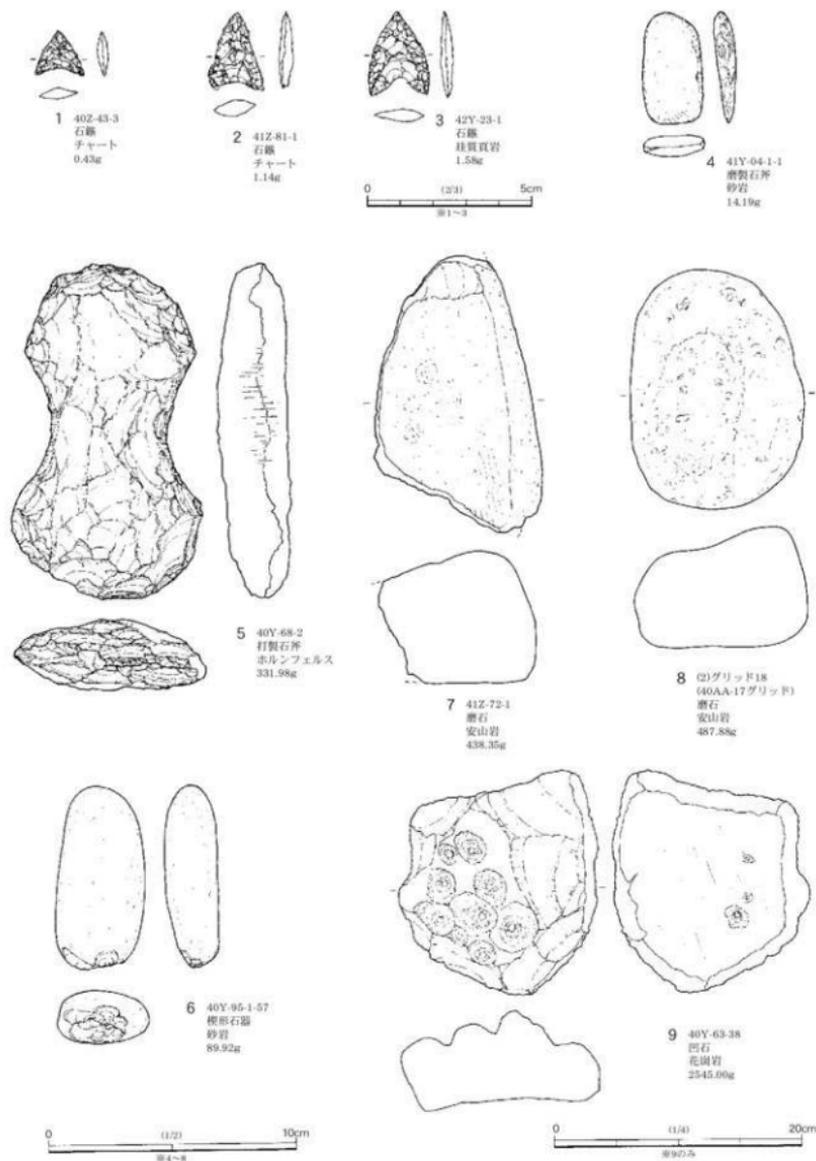
**土製品** (第5-40図189～192)

189は滑車型耳飾で、縁辺に細かな刻みを施す。

190～192は土器片錘である。190は短軸中央、ほかは長軸中央に索溝を刻み込んでいる。3点とも打ち欠き整形のみで、側縁の研磨はさして行っていない。

(5) 磯群内出土の縄文石器 (第5-31・41図、第5-1～9表、図版5-12)

磯群1～8から出土した縄文石器は、総計15点である。器種組成は、石鏃2点、楔形石器1点、二次加工のある剥片1点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片4点、石核1点、打製石斧1点、磨製石斧1点、磨石



第5-41図 礫群内出土縄文石器

2点である。礫・礫片の出土点数が13,002点であったことに比べると、石器類の出土点数がきわめて少ないことが特徴といえる。礫・礫片として分類したなかで、ガラス質黒色安山岩と玉髄は石器類として分類することが可能であるものが含まれるが、それらを含めたとしても石器類の出土点数が非常に少ない。

礫群内出土の縄文石器は第5-41図に示した。図示した石器の出土位置は、第5-31図の下端に器種別のドットマークで示した。石器類の大半は、礫群1から出土しており、礫群4から石鏃が1点、礫群6から石鏃1点と磨石、礫群1～8の周辺から3の石鏃、8の磨石が出土している。

1～3は石鏃である。1は小型で全体形状が正三角形を呈し、挟りがわずかに見られる。2は中型で全体形状が二等辺三角形を呈し、挟りがわずかに見られる。3は中型で全体形状が正三角形を呈し、挟りがやや深い。1・2に比べて器体の奥まで入る入念な調整加工によって整形されている。

4は磨製石斧である。小型の扁平な礫を素材として、右側面をやや粗い調整加工により成形した後に、全面を研磨している。研磨により下端部は鋭利な刃部が形成されている。5は分銅形の打製石斧である。器体の中間部は平坦な調整加工、器体の上下の刃部は急角度の階段状の調整加工がそれぞれ施されている。6は上下両端からの加撃があることから楔形石器として分類したが、敲石と分類することも可能である。7・8は磨石である。7は左側面が破損していることから、本来は大型の磨石であったと思われる。8は厚みのある楕円形礫を素材として、平坦面の中央部の研磨が顕著で、浅い凹みが形成されている。9は凹石である。表面中央部付近には9か所の円形の深い凹みが見られる。裏面は平坦面が研磨されており、右部に3か所の浅い凹みが見られる。全体形状が不明なので凹石と分類したが、裏面の平坦面に着目して石皿と分類することも可能である。

#### (6) 礫群形成の時期別変遷

上述の(2)～(5)の検討を踏まえて、礫群形成の時期別変遷について検討してみよう。

##### ①燃糸文期 (第5-28図上段)

本遺跡において最初に礫群を形成した時期は、燃糸文期である。台地の縁辺部に濃密に分布し、礫群1を中心域として、周辺の礫群2・礫群4西部・礫群5西部において礫群を形成したと思われる。これらの区域だけで、礫・礫片全体の組成比の90%近くを占める。

主体を占める礫群1が燃糸文期の特徴を示している。その特徴は、礫の平均重量54g、礫片の平均重量24g、礫片完形率44%であった。石材組成は、砂岩36.6%、流紋岩29.4%、チャート17.5%、ホルンフェルス16.1%で、この4石材で99.6%を占める。ほかの時期との比較をする際には、これらの礫群1と比較しながら見ていくことにする。

##### ②条痕文期 (第5-28図下段)

二番目に礫群を形成した時期は、条痕文期である。集中地点は、台地の斜面部に濃密に分布する集中1(礫群3の全域)と台地縁辺部にやや散漫に分布する集中2(礫群1の南西部)の2か所を識別できた。台地縁辺部から台地斜面地帯へと礫群形成の選地を変えた時期と捉えることも可能である。この選地変遷の要因は、燃糸文期よりもさらに低位面で礫を採取することに適した自然環境があったことなどが推察される。

条痕文期の主体を占める礫群3の特徴は、礫の平均重量50g、礫片の平均重量27g、礫片完形率54%であった。石材組成は、砂岩40.0%、流紋岩27.8%、チャート24.7%、ホルンフェルス7.2%で、この4石材

で99.7%を占める。これらの特徴は、燃糸文期とほぼ同じ特徴を持つ。

また、条痕文期において、前段階に形成された礫群の礫を再利用したかの検討については、礫群間の接合資料や遠距離の接合資料が見られない(第5-31上段参照)ことから、おそらく再利用は行われていないものと判断される。ほかの時期においても、同様に再利用は行われていないものと思われる。

### ③黒浜期(第5-29図上段)

三番目に礫群を形成した時期は、黒浜期である。集中地点は、礫群集中域のほぼ全域に点在し、6か所を識別できた。台地斜面部には集中1(礫群3の全域)、台地縁辺部には集中2(礫群1北西部)・集中3(礫群1南東端部・礫群5西部)・集中4(礫群2南部)、台地平坦部には集中5(礫群7)・集中6(礫群8)が分布している。黒浜期の礫群を伴う集落展開が、前段階よりも拡大したことが窺える。それぞれの集中地点に伴う礫群の出土点数は、燃糸文期や条痕文期に比べると少なくなるものの、集中域が台地斜面部・縁辺部・平坦部の広い範囲に展開することが黒浜期の特徴といえよう。

黒浜期の礫・礫片の特徴は、斜面部と縁辺部に立地する集中1・2・4については、前段階の燃糸文期・条痕文器と分布が重複する地点が多いので、明確にこれらの特徴を抽出することができなかったが、おそらく燃糸文期・条痕文期とほぼ同じ特徴を持つと思われる。台地平坦部に立地する集中3(礫群南東端・礫群5西部)・集中5(礫群7)・集中6(礫群8)の礫・礫片の特徴は、燃糸文期・条痕文期に比べて礫の平均重量がやや重く、礫片完形率がやや高い傾向がみられる。これらのことから、台地平坦面では、燃糸文期・条痕文期に比較すると、やや大型の礫が持ち込まれ、礫を破砕するような行為があまり行われなかったことが推察される。また、礫・礫片の出土点数が少なく、散漫に分布する傾向も見られる。石材組成においては、主要4石材でほぼ占められ、ほぼ同じ特徴が見られた。

燃糸文期・条痕文期・黒浜期の3時期に帰属すると思われる礫・礫片の出土点数は、礫・礫片全体の組成比の95%以上を占めるとと思われる。これらのことから、黒浜期までが礫群形成の盛行期と捉えられよう。

### ④浮島期(第5-29図下段)

浮島期以降は、礫・礫片の出土点数がきわめて少なく、礫・礫片が散漫に分布する。また、土器と礫群との重複分布する範囲が明確には一致しない傾向がみられる。これらのことから、浮島期以降の礫群形成は、礫群形成の衰退期と捉えられ、時期別変遷を明確に捉えることは困難な点がある。ただし、浮島期以降においても、礫群との平面分布の重複関係がみられることから、推定される傾向を見ていくことにする。

集中地点は、台地平坦部の集中1(礫群6東部)と集中2(礫群5北西部)の2か所を識別できた。どちらも土器が小範囲に密集して出土する傾向が見られ、それぞれの礫群の密集域とはやや分布域がずれる傾向がある。集中1・2の礫・礫片の特徴は、燃糸文期・条痕文期に比べて礫の平均重量がやや重く、礫片完形率がやや高い傾向がみられる。

### ⑤称名寺〜堀之内期(第5-30図上段)

集中地点は、礫群2よりも南側に密集域があり、礫群2東部・礫群6西部に散漫に分布する。礫群2は燃糸文期と黒浜期、礫群6は浮島期とそれぞれ関連の強いことが推察されることから、この時期には礫群を形成していない可能性が高いと思われる。

### ⑥加曾利B〜安行期(第5-30図下段)

集中地点は、台地平坦部の集中1(礫群4)・集中2(礫群5西部)・集中3(礫群7)・集中4(礫群8)の4か所を識別できた。それぞれの集中地点は、ほかの時期とも重複しており、かならずしもこの4

か所の集中地点が、礫群の形成に関連したかについては明確なことはいえない。集中1（礫群4）は燃糸文期、集中2（礫群5西部）は燃糸文期・黒浜期、集中3（礫群7）・集中4（礫群8）は黒浜期とそれぞれ関連が強いことが推察されることから、この時期には礫群を形成していない可能性が高いと思われる。

#### ⑦礫群形成の時期別変遷（第5-28～30図）

上述の時期別の検討した結果をまとめると、以下のようなことが推察される。

礫群を形成した時期は、主に燃糸文期・条痕文期・黒浜期において行われた。

最初に礫群形成した燃糸文期では、台地縁辺部に広範囲に礫群を形成した。礫・礫片の大半はこの時期に帰属するものと思われる。石材は、砂岩・流紋岩・チャート・ホルンフェルスが9割以上を占める。約50g程度の小型の円礫を持ち込んでいる。完形礫は2割程度で、大半の8割程度が礫片で構成される。礫片の完形礫に対する完形率は4割程度であると推定される。

次の条痕文期では、台地斜面部に活動拠点の中心を移している。燃糸文期と同様に礫・礫片の密集度は高いが、分布範囲は燃糸文期ほど広範囲ではなく、分布範囲が狭くなり、集中地点が2か所形成される。礫・礫片の特徴は燃糸文期とほぼ同じ特徴を持つ。おそらく、継続して同じ場所から礫を採取したことが推察される。礫の接合関係は遠距離のものがなく、礫群間の接合関係が見られないことから、前段階に形成された礫を再利用している可能性は低いと思われる。ほかの時期においても再利用はされていないものと思われる。

3番目の黒浜期では、台地斜面部・縁辺部・平坦面の礫群が形成されたほぼ全域に集中地点が6か所形成されている。前段階の条痕文期に比べてさらに、分布範囲が狭くなり、遺物の密集度が低くなり、小範囲に散漫に分布するようになる。礫・礫片の特徴は、石材組成が前段階と燃糸文期・条痕文期とほぼ同じ特徴をもつことから、おそらく継続して同じ場所から礫を採取したことが推察される。また、台地平坦部に位置する黒浜（集中5）[礫群7]・黒浜（集中6）[礫群8]の礫片完形率が、燃糸文期・条痕文期に比べて低いことから、礫を破砕するような行為が頻繁に行われたことが推察される。

黒浜期までが礫群形成の盛行期であると捉えられる。浮島期以降は、礫群形成の衰退期にあたり、礫群が小範囲に散漫に形成されるようになる。浮島期以降については、明確に礫群が形成された集中地点を抽出することは困難であった。

## 6. グリッド出土の縄文土器（第5-42～45図、図版5-13・17）

本遺跡から出土した遺物の内、遺構に伴わないものをグリッド出土遺物として扱った。今回の調査では早期燃糸文系土器から晩期安行式まで断続的に出土しているが、主体は遺構の帰属時期である黒浜式を中心とした前期中葉土器群である。出土遺物の分類は礫群出土の縄文土器と同じく、便宜的に早期、前期、中期、後期、晩期の5群に大別し、各群を土器型式に準じて細別した。

### 第1群3類 条痕文系土器（第5-42図1～5）

1～5は条痕文系土器である。いずれも表裏に貝殻条痕を施す。口縁部が残存するものでは、1が口唇部にキザミを施し、2は施さない。5は底部で、尖底を呈する。以上5点は胎土に繊維の混入が少なく、斜め及び縦方向を主とする貝殻条痕を施すという属性から、野島式に位置づけられる。

### 第2群1類 関山式土器（第5-42図6～10）

6～10は関山式である。6は平行沈線の間に単沈線を充填し、文様の交点に小瘤を貼付する。地文はいわゆる「平組紐」か。関山Ⅰ式に位置づけられる。

7は地文の「異条斜縄文」を施文後、コンパス文を施す。8・9は地文縄文施文後、半截竹管の内側で鋸歯状文や渦巻文を描く。10は単節LR/RLで羽状施文後、半截竹管の内側で意匠を画くほか、還付末端によるループ文を1段施す。7～10は関山Ⅱ式に位置づけられる。

#### 第2群2類 有尾系土器 (第5-42図11)

11は有尾系土器である。瓜形文で菱形文を描く。胎土中の繊維の含有量は比較的少ない目である。

#### 第2群3類 黒浜式土器 (第5-42図12～31)

12～31は黒浜式土器である。12は有文土器で、沈線文を施す。13は平行沈線とコンパス文を重畳施文する。14・15は同一個体で、単節LR/RLで羽状施文し、還付末端によるループ文が付く。16～31は地文縄文ないし地文部分の破片である。16・17は無節縄文を地文とするもので、使用原体は16がL、17がRとなる。18～24は単節縄文を地文とするもので、使用原体は18・19・24がLR、20～23がRLとなる。25はLRとRLで羽状施文し、26は無節R/LRで羽状施文する。27・29は附加条縄文(軸不明+L2本/軸不明+R2本)を羽状施文する。28は燃糸Rを地文とする。30・31は底部である。

#### 第2群5類 浮島・興津式土器 (第5-43図32～34)

32～34は浮島・興津式土器である。32は平縁深鉢の口縁部片で、口縁下に端列の刺突列を廻らし、平行沈線で画した以下は密接した波状貝殻文を施す。33は波状貝殻文を施した胴部片で、以上2点は興津式に位置づけられる。34は底部で浮島式に伴うものと考えられる。

#### 第2群6類 前期末葉縄文系粗製土器 (第5-43図35)

35は前期末葉縄文系粗製土器である。地文として単節LRを施す。

#### 第3群 加曾利E式土器 (第5-43図36～47)

36～47は加曾利E式土器である。36～38・40・41は「沈文系意匠充填系土器」で、充填された縄文の使用原体は、37が無節L、38・39が単節LR、それ以外は単節RLとなる。39はキャリパー形深鉢の胴部片で、胴部磨消懸垂文を施す。縄文の使用原体は単節LRとなる。これら36～41は加曾利EⅢ式に位置づけられる。

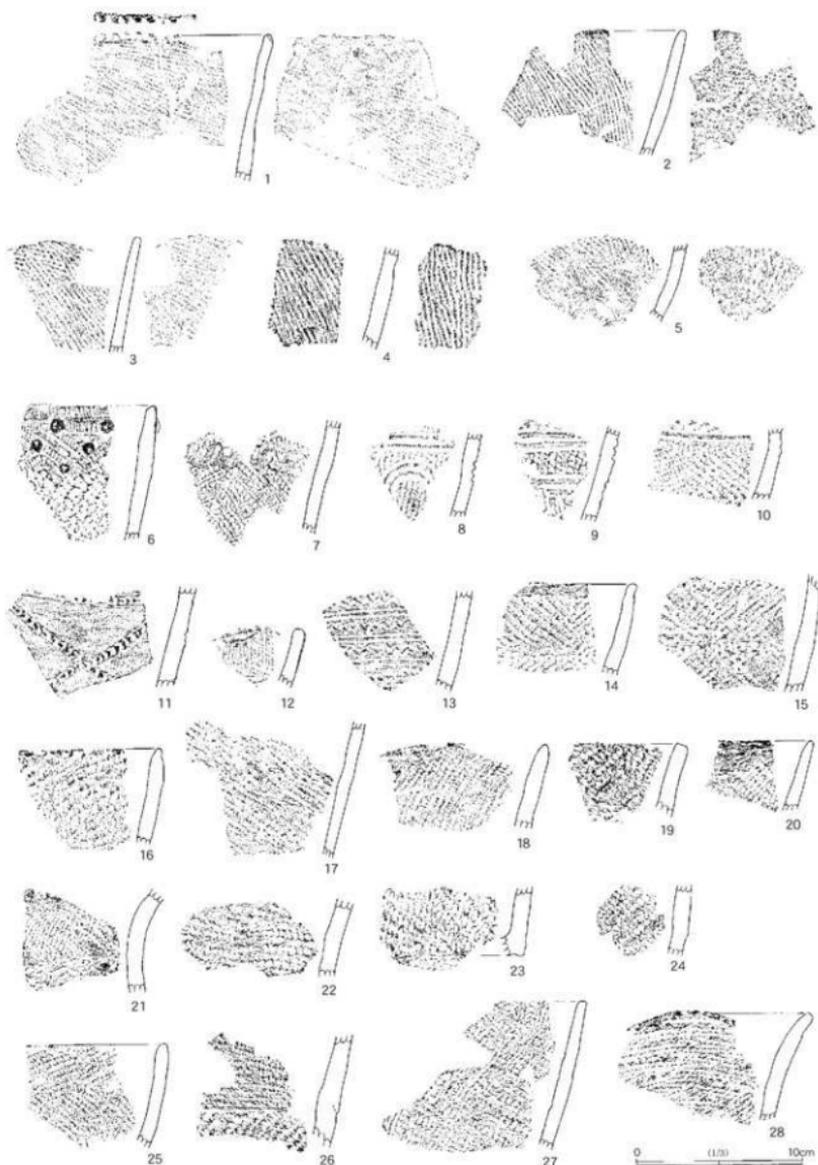
42～45は微隆線を区画線や文様描線として用いたものである。地文ないし充填縄文の使用原体は、42・43が単節RL、44・45が単節LRとなる。これら42～45は加曾利EⅣ式に位置づけられる。46・47は底部で、いずれも「逆ランプシェード形」を呈する。加曾利EⅢ式～EⅣ式に位置づけられよう。

#### 第4群1類 称名寺式土器 (第5-43図48～51)

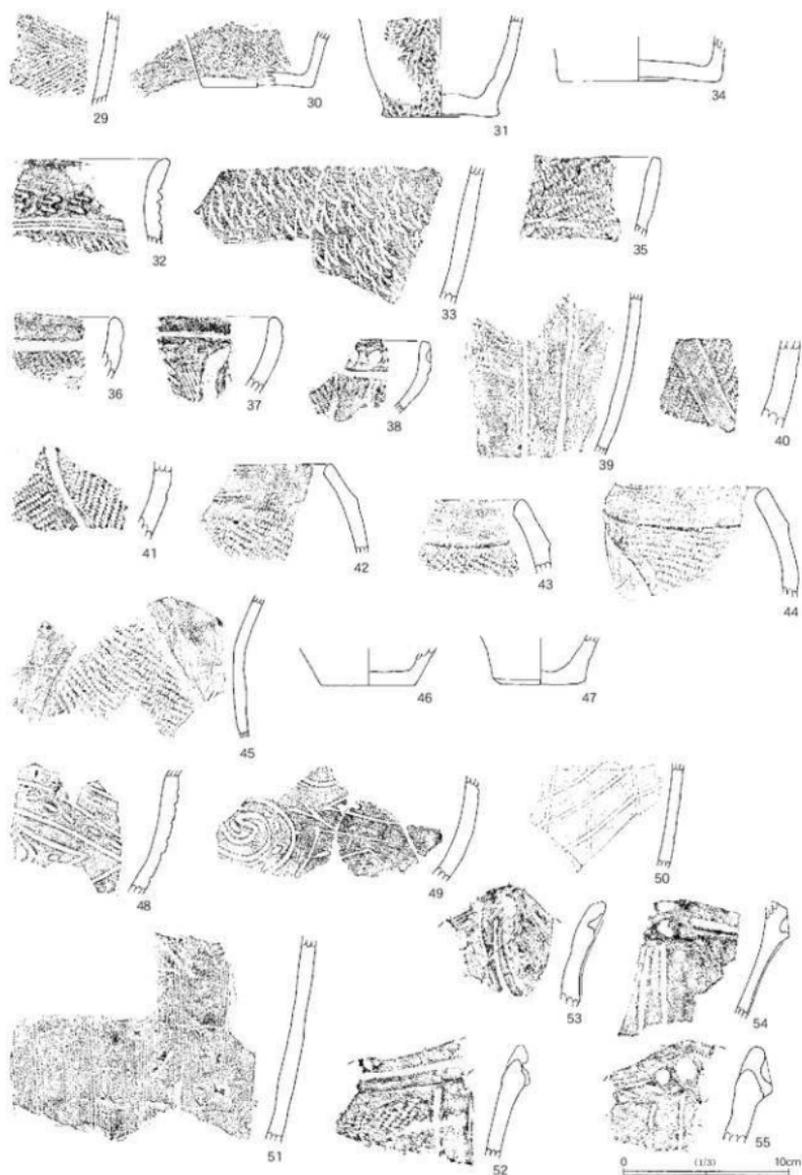
48～51は称名寺式土器である。48・49は沈線による意匠内に列点を充填する。50は格子目文系粗製土器、51は条線文系粗製土器の胴部片となる。以上4点は称名寺Ⅱ式に位置づけられる。

#### 第4群2類 堀之内式土器 (第5-43-44図52～79)

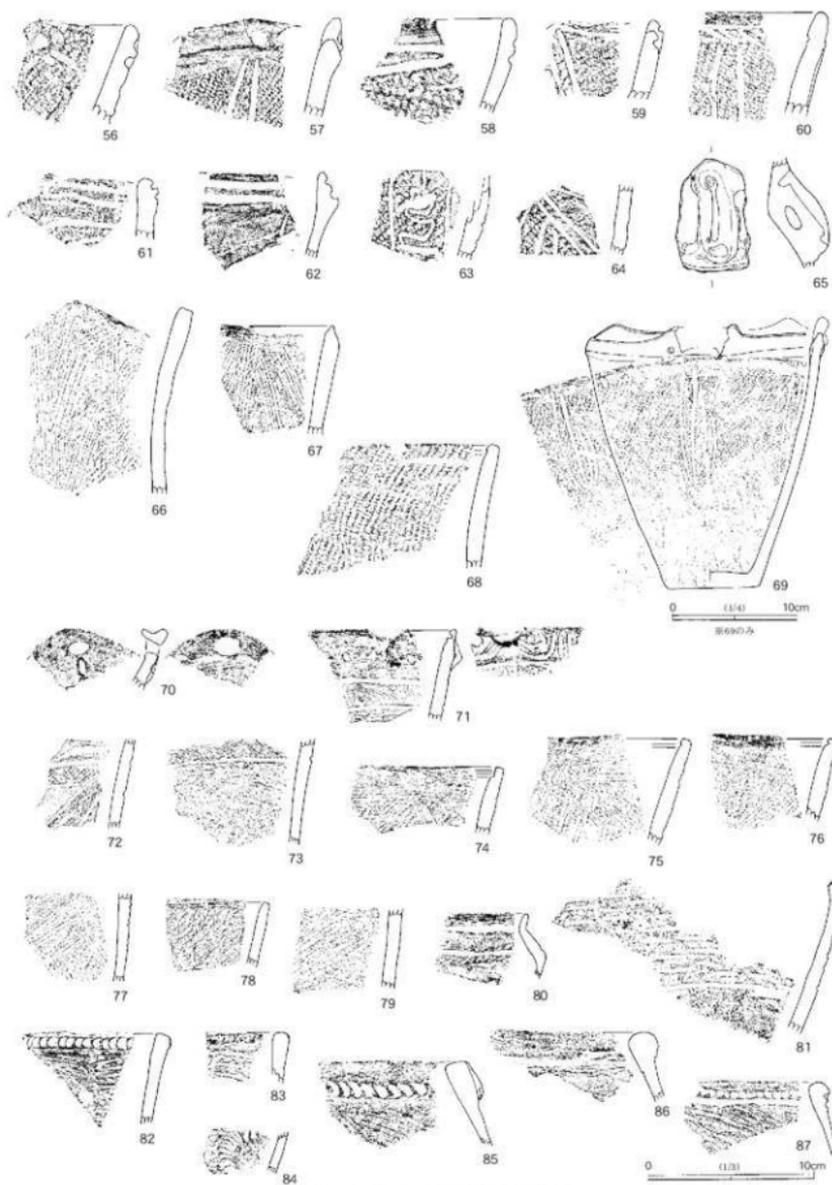
52～79は堀之内式土器である。52～61は口縁部に盲孔やC字状貼付文沈線などを廻らす程度で、主要な施文域にはしない。そのほとんどが地文縄文施文後、単沈線で意匠を施す。62のみ地文を施文しない。使用原体は55・56・57・59～61が単節LR、58が複節RLRとなる。63・64は地文縄文に沈線で意匠を施した胴部片で、63の基幹文様は「蕨状文」である。使用原体は63・64とも単節LRとなる。65は壺形土器などの把手で、上下両端施した盲孔の間を沈線で繋いでいる。以上、52～65は堀之内Ⅰ式土器に位置づけられる。この中では52と65が網取系の影響が強い。そのほか、沈線のみで意匠を施す完形土器の79も堀之内Ⅰ



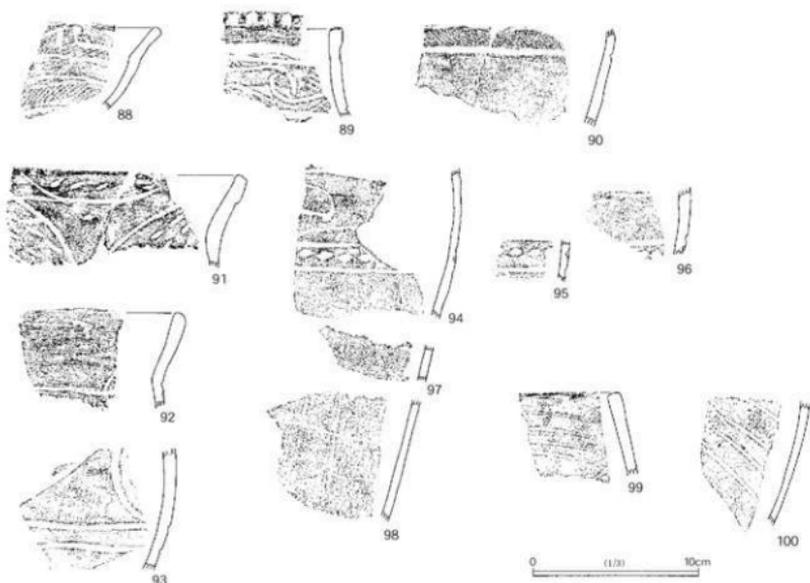
第5-42図 グリッド出土縄文土器①



第5-43図 グリッド出土縄文土器②



第5-44図 グリッド出土縄文土器③



第5-45図 グリッド出土縄文土器④

式土器で、有文とは言え複雑な印象を受ける。

66・67は地文縄文施文後、3本一組の沈線で意匠を描く。使用原体は共に単節LRとなる。68は地文縄文単節LRを施文し、口縁内面に浅い内沈線を施した縄文系粗製土器である。これら3点は限りなく2式に近い堀之内1式として位置づけられる。

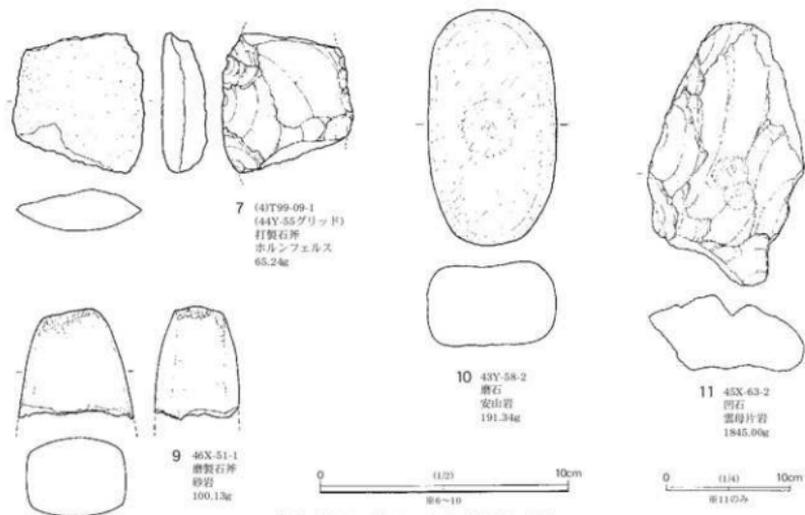
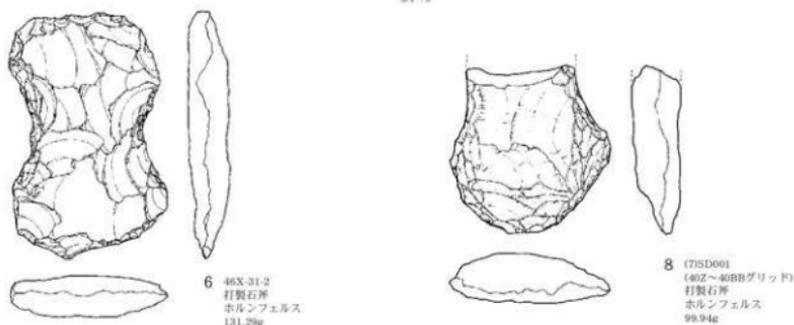
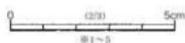
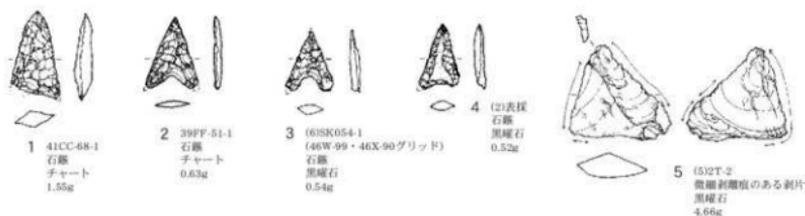
69～76は精製の朝顔型深鉢である。これらは、口縁下に隆線を廻らせて「8の字貼付文」を施し、基幹文様の三角文などを磨消縄文で描く69～72と、地文縄文施文後、平行沈線で基幹文様を描く73～76の二者が存在する。78・79は同一個体で、地文縄文無節Lを施した縄文系粗製土器である。これら69～78は堀之内2式として位置づけられる。

#### 第4群3類 加曾利B式土器 (第5-44図80～83)

80～83は加曾利B式土器である。80は口縁が外反し、肩部以下が算盤玉型を呈する浅鉢土器となる。81は深鉢形土器の胸部上位片で、横位の沈線を充填する。これら2点は精製土器である。82・83は紐線文系粗製土器で、①地文縄文②条線③紐線貼付④連続押捺という施文工程となる。以上4点は加曾利B3式に位置づけられる。

#### 第4群4類 後期安行式土器 (第5-44図84～87)

84～87は後期安行式土器である。いずれも紐線文系粗製土器で、84・85は安行2式土器、86・87は晚期



第5-46図 グリッド出土縄文石器

まで下がる可能性がある。

#### 第5群土器 晩期安行式土器 (第5-45図88~100)

88~100は晩期安行式土器である。88~90は磨消縄文で入組文を描くもので、安行3b式精製土器に位置づけられる。88は「姥山系(姥山Ⅱ式)」に該当する。91~98は沈線による意匠内に米粒状の列点を充填するもので、安行3c式精製土器に位置づけられる。91~98は同一個体である。99・100は紐線を貼付せず、条線のみを施した粗製土器で、安行3b式「姥山系」の粗製土器に位置づけられる。

#### 7. グリッド出土の縄文石器 (第5-46図、図版5-12)

遺構外出土のもので、礫群内からも出土していないものをグリッド出土の縄文石器として取り扱うこととする。

1~4は石鏃である。1・4は全体形状が二等辺三角形を呈し、抉りはわずかに見られる。2・3は抉りがやや深い。4の表面は磨痕が見られる。5は微細剥離痕のある剥片である。ほぼ全周に微細剥離痕が見られる。6~8は打製石斧である。6・8は分銅形である。7は全体形状が不明で、打製石斧の未成品の可能性もある。9は定角式磨製石斧の頭部が残存しているものである。10は楕円形礫を素材として、全面研磨して平坦面の中央部に浅い凹みが見られる。11は凹石である。表面平坦部に円形の深い凹みが2か所形成されている。

### 第4節 近世

近世の遺構として溝1条、野馬堀2条、シシ穴5基、土坑4基、ビット群1基、道路状遺構1条が検出された。これらの遺構は、遺跡調査範囲の北側と南西端のごく限られた範囲に分布している。

出土した近世の遺物は僅少で、寛永通宝などの古銭と陶磁器片だけであった。

#### 1. 溝

調査範囲の北東部から断続的に3条検出された。広範囲にわたるため、複数の調査区に跨がるが、本来は繋がっているものと思われる。調査区の北側には遺跡外周をめぐる野馬堀(7)SD001・(13)SD001が所在する。北西端はトレンチ調査のみのため不明確であるが、野馬堀へと続いていたものと推察される。

(13)SD003・(1)SD001 (第5-47図、図版5-9)

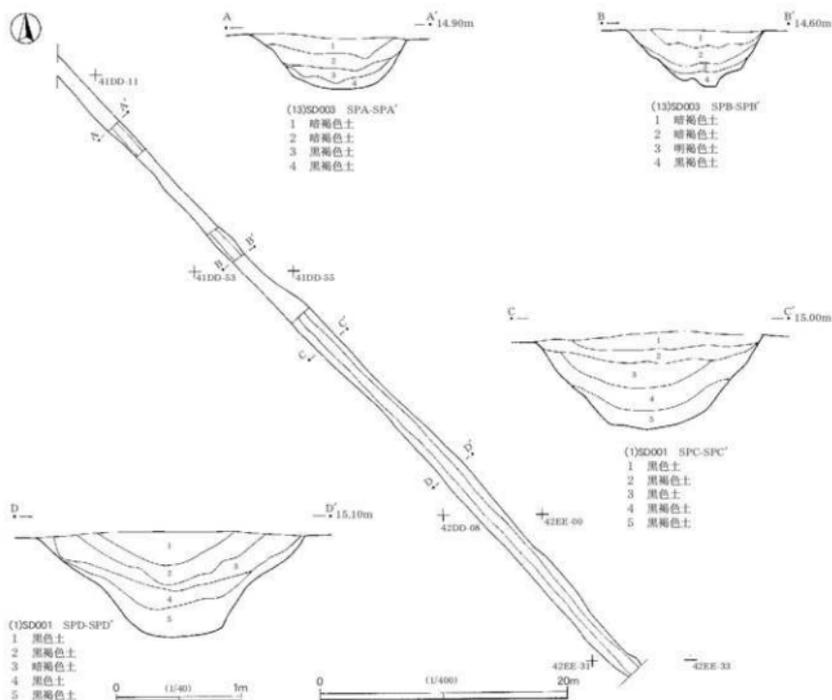
調査区の北東、41DD、42DD、42EEグリッドに位置する。北西から南東方向へ直線的に延びる溝である。(2)調査区にも確認調査段階で上端のみ記録された溝の一部がみられ、総延長は96m以上を測る。幅は0.9m~2.2m、確認面からの深さは60cm前後である。覆土は黒色土を主体とし、底面はレンズ状を呈する。

#### 2. 野馬堀

遺跡の北辺から1条、南西端から3条検出された。いずれもトレンチによる部分的な調査であるため、詳細は不明だが、土手や盛り土は検出されなかった。

(13)SD001・(7)SD001 (第5-48図、図版5-9)

調査区の北辺、39CC~40Zグリッドに位置する。東西方向に直線的に走る溝で、遺跡北側の外周を廻る。東側は遺跡外へと続き、北側に隣接する大久保遺跡の(7)SD001・(1)SD014を経て、市野谷駒木野馬土手に続いていくものと思われる。野馬堀のみの検出で、野馬土手は確認できなかったが、野馬堀と平行

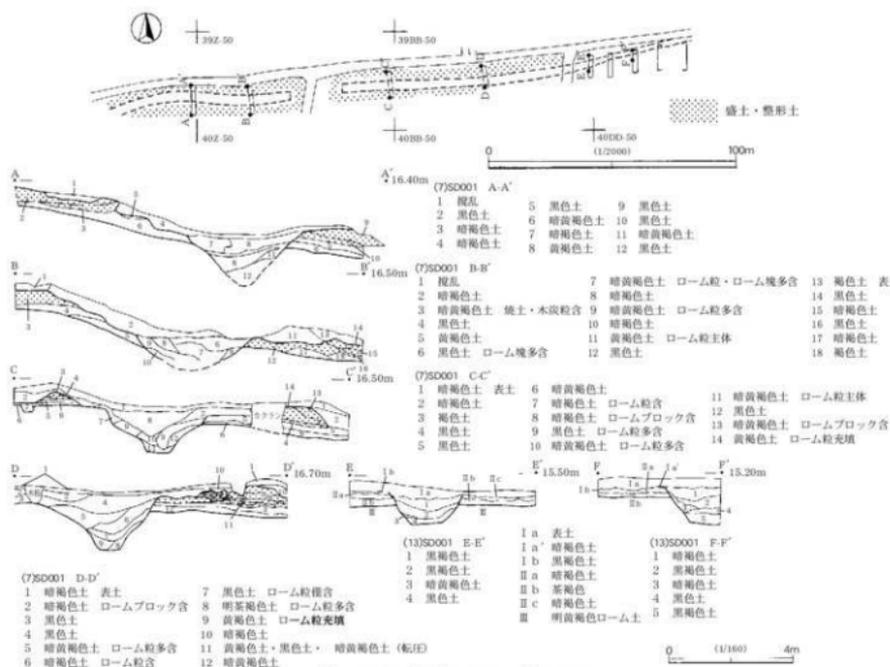


第5-47図 (13)SD003・(1)SD001

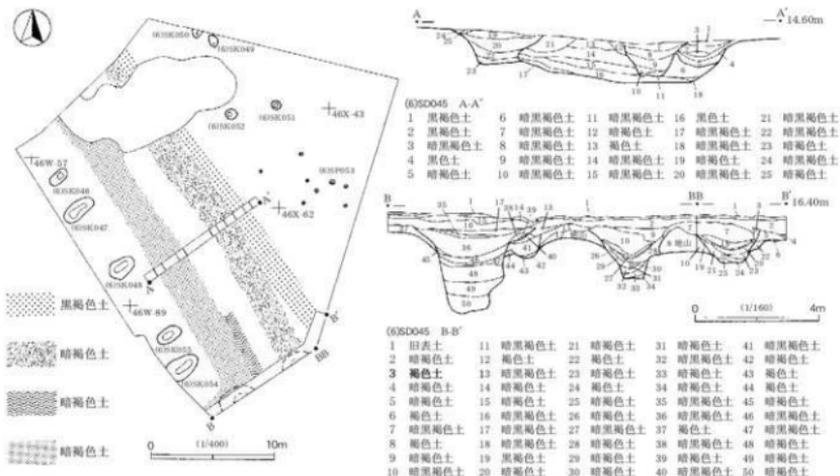
するように道路が走っているため、開発とともに野馬土手は削平されて消滅し、野馬堀のみが残ったと推測される。検出された部分の長さは200mである。規模は東端39DD-71グリッド付近で幅1.6m、深さ26cm、中央40BB-09グリッド付近で幅2.0m、深さ84cm、西端40Z-11グリッド付近で幅3.1m、深さ102cmである。西へ行くほど規模がやや大きくなっていることがわかる。覆土は黄褐色土の上に黒色土、暗褐色土が堆積する。

(6)SD045 (第5-49図、図版5-9)

調査区の南西端、46X-82、91~92グリッドに位置する。トレンチ調査により3条の溝が検出された。南東~北西方向に延び遺跡外周を廻ると思われる。溝と溝の間の地山には、盛土や、その後削った形跡がなく、当初から野馬土手が造られず、野馬堀だけが造成されたと推測される。東側の溝は幅1.0m、深さ36cm、中央の溝は幅0.8m、深さ92cm、西側の溝は幅1.0m、深さ248cmである。西側に谷が入り込んでい



第5-48図 (13)SD001・(7)SD001



第5-49図 (6)SD045

るため、西へ行くほど溝が深くなっている。

### 3. シシ穴

調査区の南西端にのみみられる。遺跡外周を廻る野馬堀(6)SD045の西側(外側)斜面部に5基連なっている。

#### (6)SK046 (第5-50図、図版5-9)

調査区の南西端、46W-57グリッドに位置する。5基のうち最も北に位置する。長軸1.70m、短軸0.87mの長楕円形で、長軸方向はN-42°-Eを指す。確認面からの深さは131cmを測る。覆土は暗黒褐色土と黒褐色土が主体である。

#### (6)SK047 (第5-50図、図版5-9)

調査区の南西端、46W-57グリッド周辺、(6)SK046の南東1.8mに位置する。長軸2.23m、短軸1.20mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-52°-Eを指す。確認面からの深さは151cmを測る。覆土は黒褐色土を主体とする。

#### (6)SK048 (第5-50図、図版5-9)

調査区の南西端、46W-78・79グリッド、(6)SK047の南東4.5mに位置する。長軸2.28m、短軸1.38mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-54°-Eを指す。確認面からの深さは172cmを測る。覆土は暗褐色土、黒褐色土を主体とする。

#### (6)SK055 (第5-50図、図版5-10)

調査区の南西端、46W-79グリッド、(6)SK048の南東5.2mに位置する。長軸2.05m、短軸1.2mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-56°-Eを指す。確認面からの深さは184cmを測る。覆土は暗褐色土、黒褐色土を主体とする。

#### (6)SK054 (第5-50図、図版5-10)

調査区の南西端、46W-99グリッド周辺、(6)SK055の南東1.2mに位置する。南西端は調査区外である。長軸は2.53m以上、短軸1.73mの長楕円形で、長軸方向はN-50°-Eを指す。確認面からの深さは194cmを測る。

### 4. 土坑・ピット群

調査区の南西から4基の土坑とピット群が検出された。遺跡外周を廻る野馬堀(6)SD045の東側台地平坦面に位置する。

#### (6)SK050 (第5-51図、図版5-10)

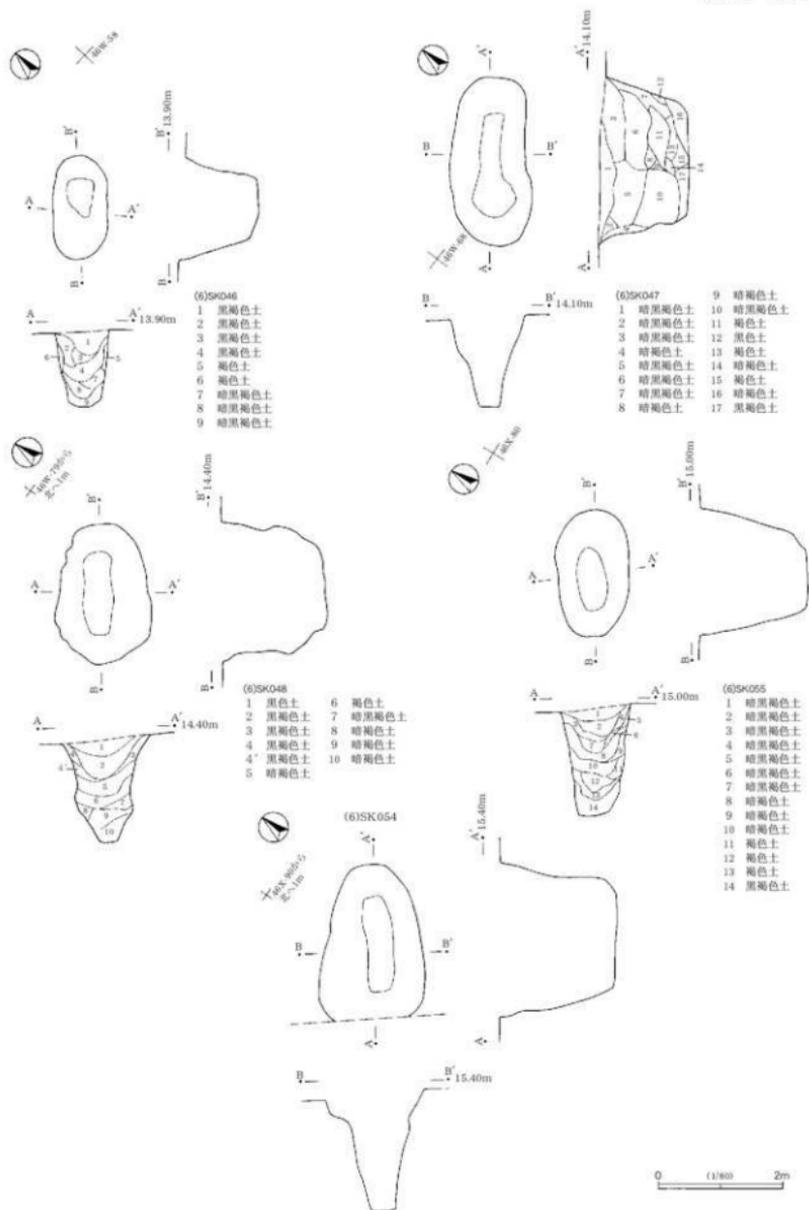
調査区の南西端、46X-20グリッドに位置する。北半は調査区外のため未検出である。短軸0.77mの長楕円形を呈し、確認面からの深さは52cmを測る。覆土は暗黒褐色土に黒褐色土が堆積する。

#### (6)SK049 (第5-51図、図版5-10)

調査区の南西端、46X-20グリッド、(6)SK050の南東0.6mに位置する。長軸1.02m、短軸0.69mの長楕円形を呈し、長軸方向はN-24°-Wを指す。確認面からの深さは58cm~68cmで、南側が10cmほど深い。覆土は暗褐色土が主体である。

#### (6)SK051 (第5-51図、図版5-10)

調査区の南西端、46X-31グリッド、(6)SK049の南東6.2mに位置する。長軸0.75m、短軸0.73mの楕円



第5-50図 シシ穴

形を呈し、確認面からの深さは22cmを測る。覆土は褐色土の上に黒褐色土、黒色土が堆積する。

(6)SK052 (第5-51図、図版5-10)

調査区の南西端、46X-40・41グリッドに位置する。(6)SK049の南5.2m、(6)SK051の西4.0mの距離にある。長軸0.48m、短軸0.42mの楕円形を呈し、確認面からの深さは43cmを測る。覆土は褐色土の上に黒褐色土、黒色土が堆積する。

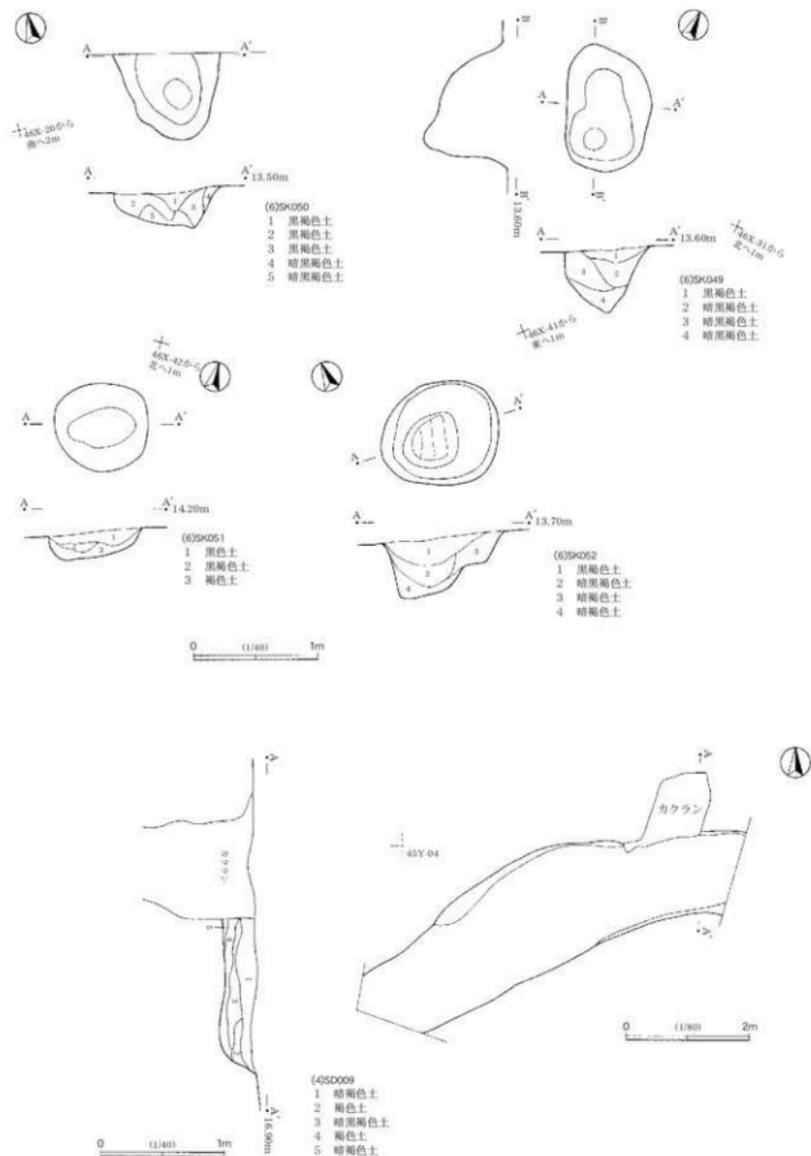
(6)SP053 (第5-49図、図版5-10)

調査区の南西端、46X-41グリッド周辺に位置する。9基の円形ピットからなる。径20cm～40cm、確認面からの深さは25cm～50cmである。覆土のしまりが軟らかい点と、ロームとの境が比較的鮮明な点等を考慮すると、近世の建物の柱穴痕と推測される。覆土は褐色土に暗褐色土が堆積する。

## 5. 道路状遺構

(4)SD009 (第5-51図、図版5-10)

調査区の西、45Y-04・05グリッドに位置する。トレンチ調査の段階で、明瞭な硬化面が認められたため、西側に範囲を拡張して調査を行った。その結果、東から南西へ曲線を描きながら延びる道路状遺構であることがわかった。東側は民家が所在するため、未検出である。長さ6m以上、幅1.8m、深さ32cmを測る。台地から谷へ降りる道路と関連か。東側は浅い掘り込みの内側に硬化している。西側では掘り込みが認められないものの、硬化面はしっかりとしていた。硬化している土は暗黄褐色土で、厚さは3cm～5cm、遺構と考えられる範囲全体はほぼ同様に硬化している。覆土は褐色土と暗褐色土が主体である。遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。



第5-51図 土坑・道路状遺構

## 第5節 まとめ

### 1. 旧石器時代

遺物集中地点は見られず、明確にブロックを形成している地点がなかった。単独で18点の石器が出土した。遺跡北西部の40Yグリッド付近と遺跡南西部の44Xグリッド付近にやまとまって出土している。遺跡北部の40BB-13グリッドから木葉形の尖頭器が単独で出土している。44X-97-99グリッドから細石刃とそれに関連する資料が出土している。そのほか、ナイフ形石器や削器などが出土しているが、出土層位が明確ではなく、単体で出土していることから編年的な位置づけを行うことはできなかった。

### 2. 縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡7軒、焼土遺構・炉穴12基、陥穴12基、土坑25基、溝1条、礫群8か所が検出された。このうち、本項においては、特徴的な出土状況が見られた礫群について記載することにする。蛇行する坂川に近接する遺跡北西部において、南北66m、東西140mの範囲から8か所の礫群が検出された。礫群から出土した遺物の総点数は14,436点である。内訳は、礫・礫片13,002点、土器1,419点、石器類15点である。礫・礫片の占める割合が90%ときわめて高い。

#### (1) 礫群形成の時期別変遷

礫群の形成時期は、縄文時代早期の燃糸文期・条痕文期から縄文時代前期の黒浜期にかけてである。時期別に礫群形成の変遷を概観してみよう。

**燃糸文期** 台地縁辺部の礫群1を中心域として濃密に分布している。1か所の集中地点において礫群を伴う集落が営まれたと思われる。礫・礫片の出土量は、礫群1だけで全体の77%を占める10,070点出土しており、燃糸文期には多量の礫が台地縁辺部に持ち込まれたものと思われる。石材組成は、後段階の条痕文期・黒浜期とほぼ同じ特徴を持つことから、おそらく継続して同じ場所から礫を採取したことが推察される。

**条痕文期** 台地縁辺部の礫群1（南西部）と台地斜面部の礫群3の2か所に分布し、燃糸文期よりもさらに低位面で礫を採取したことが推察される。礫・礫片の出土量は、条痕文期においても出土量の大半を占める礫群1の南西部にも分布していることから、燃糸文期と同様に多量の礫を持ち込んだものと思われる。遺構は、礫群3の南側において条痕文期に形成されたと思われる炉穴4基〔(4)SK026a～d〕と焼土遺構1基〔(4)SK036〕が出土しており、台地斜面部の低位面において火処と推定される遺構がままとまっている。このことは、礫を採取して焼成した作業場所を特定する意味でも興味深い。坂川から礫を採取したと推定するならば、礫群3付近が緩やかな斜面であることから、礫群3付近を経由して台地縁辺部から平坦面へと礫を持ち込んだと思われる。なお、礫群の立地状況については、写真図版5-8の礫群1・3（第8次調査40X・40Y付近）と坂川の写真から、礫群3付近が坂川まで緩やかな斜面であることが読み取れるので参照していただきたい。

**黒浜期** 礫群集中域のほぼ全域に拡がり、6か所の集中地点が見られる。黒浜期の礫群を伴う集落が、前段階よりも拡大し、台地斜面部（礫群3）・台地縁辺部（礫群1・2・5）・台地平坦部（礫群7・8）の広い範囲に展開するようになる。燃糸文期・条痕文期で分布が見られなかった台地平坦部の礫群7・8に分布するようになる。礫群7・8は礫片完形率（礫片の平均重量÷礫の平均重量×100）が低い。最も台地内部に位置する礫群8では、礫片完形率が32%と低いことから、礫を破碎する行為が多く行われたと

推察される。台地斜面部・台地縁辺部に分布する礫群の礫片完形率が44%～75%であり、坂川から礫を採取したと推定するならば、採取地から遠くなるほど礫を破砕する頻度が高くなることを意味しているものと思われる。ただし、礫群8の礫・礫片の出土点数が143点で、礫群1・2に比べて少量であることから、慎重な検討が必要となろう。

次の段階の縄文前期の浮島期以降は、礫群形成の衰退期にあたり、明確に礫群が形成されたと捉えられ集中地点を抽出することが出来なかった。

### (2) 礫群採取場所について

礫群の礫の採取場所については、遺跡の北西部に坂川の氾濫原が近接しており、坂川によって段丘礫層が浸食され礫が露出した可能性がある。遺跡北西部の区域において、数時期にわたって繰り返し礫群が形成されていることから、近隣の坂川から礫を採取したと推測できる。40X・Y、41X・Yグリッドは西側に緩やかに傾斜する斜面が形成されており、比較的容易に坂川まで行き着くことができる。また、38W・X・Y、39W・X・Yグリッド付近は、氾濫原が形成されている。氾濫原付近から上流約400mの29Xグリッドには、現在でもかなりの豊富な水量を噴出する湧水地がある。湧水地付近には、河川の下割がすすみ、深い谷（古坂川）が形成されることが知られている<sup>1)</sup>。

注1 三谷 豊 2001「第四節 河川・水路」『流山市史 通史編1』流山市教育委員会

## 3. 近世

近世の市野谷立野遺跡は、小金牧の一つである上野牧に含まれる。遺跡の北東に日光東往還が、南側に諏訪道が通っており、本遺跡の南端は諏訪道に接している。2つの街道は本遺跡の東500m程の所で交差している。

北に隣接する大久保遺跡との境に野馬堀が検出された。東側は大久保遺跡の南端を廻る野馬土手・堀へと続き、クランク状に屈折する日光東往還を跨いで市野谷駒木野馬土手へと繋がっていく。付近には市野谷木戸の地名が残っており、地名通り木戸が街道と野馬土手が接する辺りに設置されていたのであろう。一方西側は、台地の縁辺を囲むように廻り、南側で諏訪道を跨いで更に南東へと続いている。牧の境界である野馬土手・堀と諏訪道の交差する付近にも木戸が設置されていた、という伝承が残っている。市野谷立野遺跡は北と南2か所に木戸が接していたことになる。

調査区の南西端、(6)SD045の西側にある5基のシシ穴は、牧の境界である野馬堀の外側に位置するため、野犬などの害獣除けに設置されたものと思われる。野馬堀の東側、牧の内側と思われる場所にビット群と土坑が検出されたが、遺構の性質は不明である。広い調査範囲に比して検出された遺構・遺物が少ないのは、上野牧の境界に位置していたためと思われる。

### 参考資料

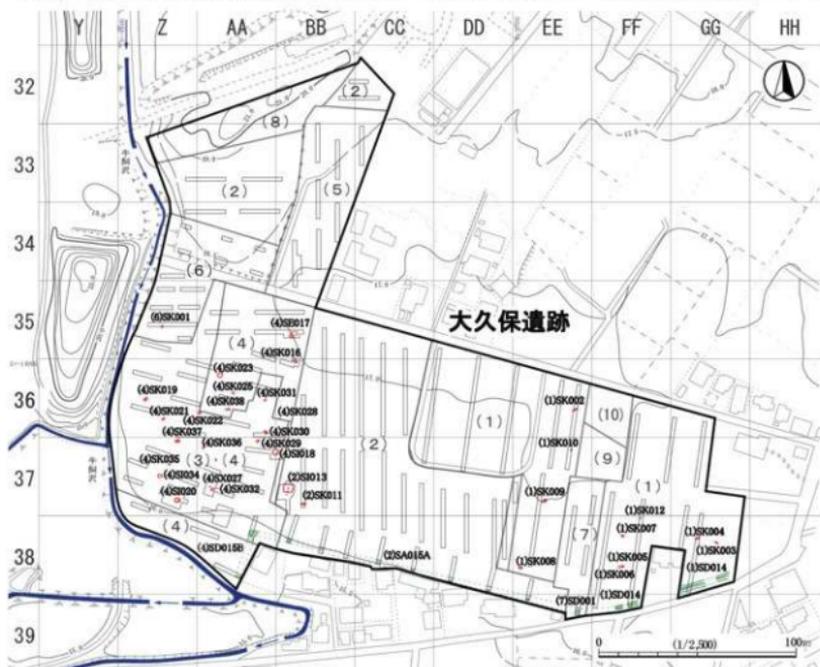
- 青木更吉 2001『小金牧 野馬土手は泣いている』  
 青木更吉 2003『小金牧を歩く』嵩書房  
 千葉県教育委員会 2006『房総の近世牧跡』（財）千葉県教育振興財団

## 第6章 大久保遺跡

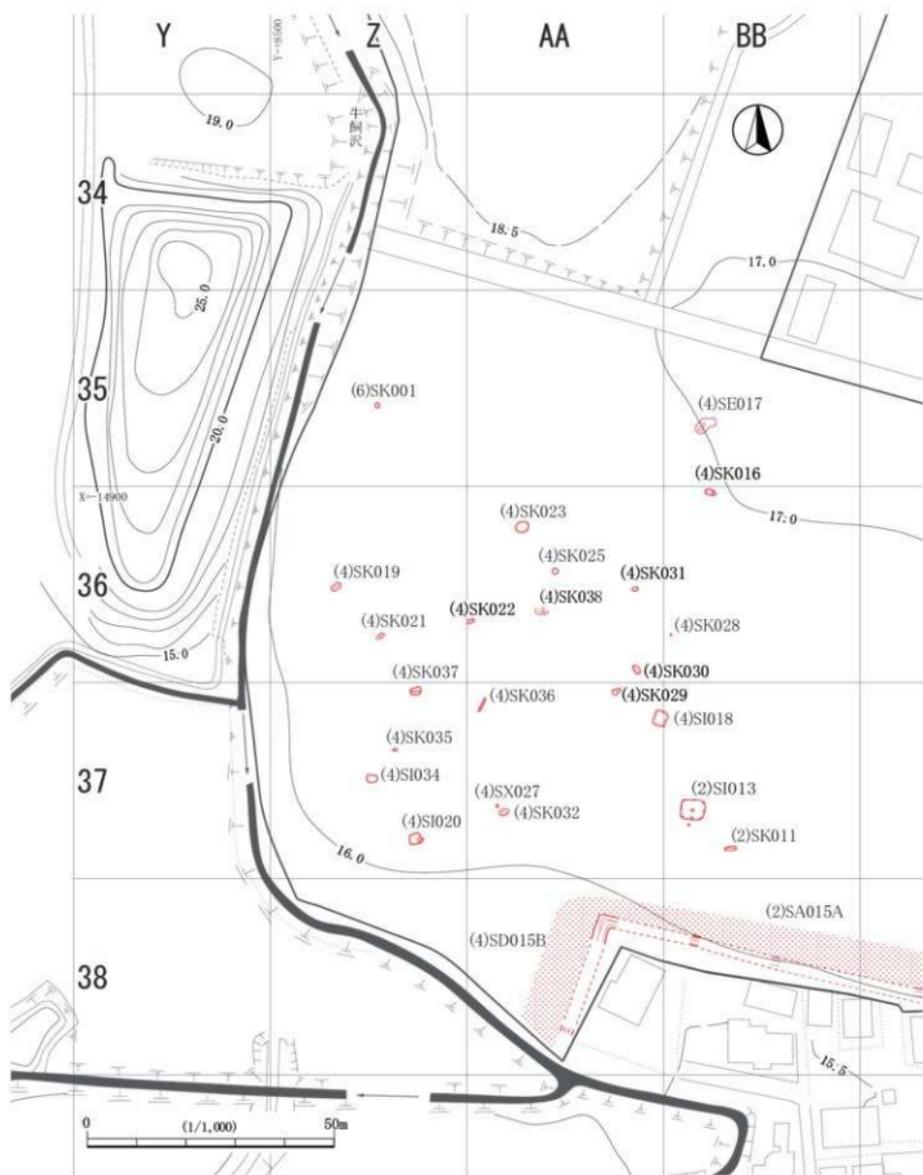
### 第1節 遺跡の概要 (第6-1～4図)

大久保遺跡下層は既刊(平成23年度)のため、本報告では上層の概要を述べる。本調査範囲と調査回数、上層の遺構・トレンチ配置は第6-1～3図のとおりである。遺構としては、縄文時代の竪穴住居跡3軒、炉跡・焼土遺構3基、貯蔵穴1基、陥穴15基、土坑9基が検出された。住居跡や炉跡などは遺跡の西側に、陥穴や土坑は東側に分布する傾向があり、遺跡西側に流れる沢水を生活用水として活用していたことは想像に難くない。奈良時代では竪穴住居跡1軒が検出された。近世では井戸のほか、江戸幕府直轄の小金五牧の一つである上野牧が遺跡南端を区画するように検出されており、野馬土手1基、野馬堀3条を報告した。

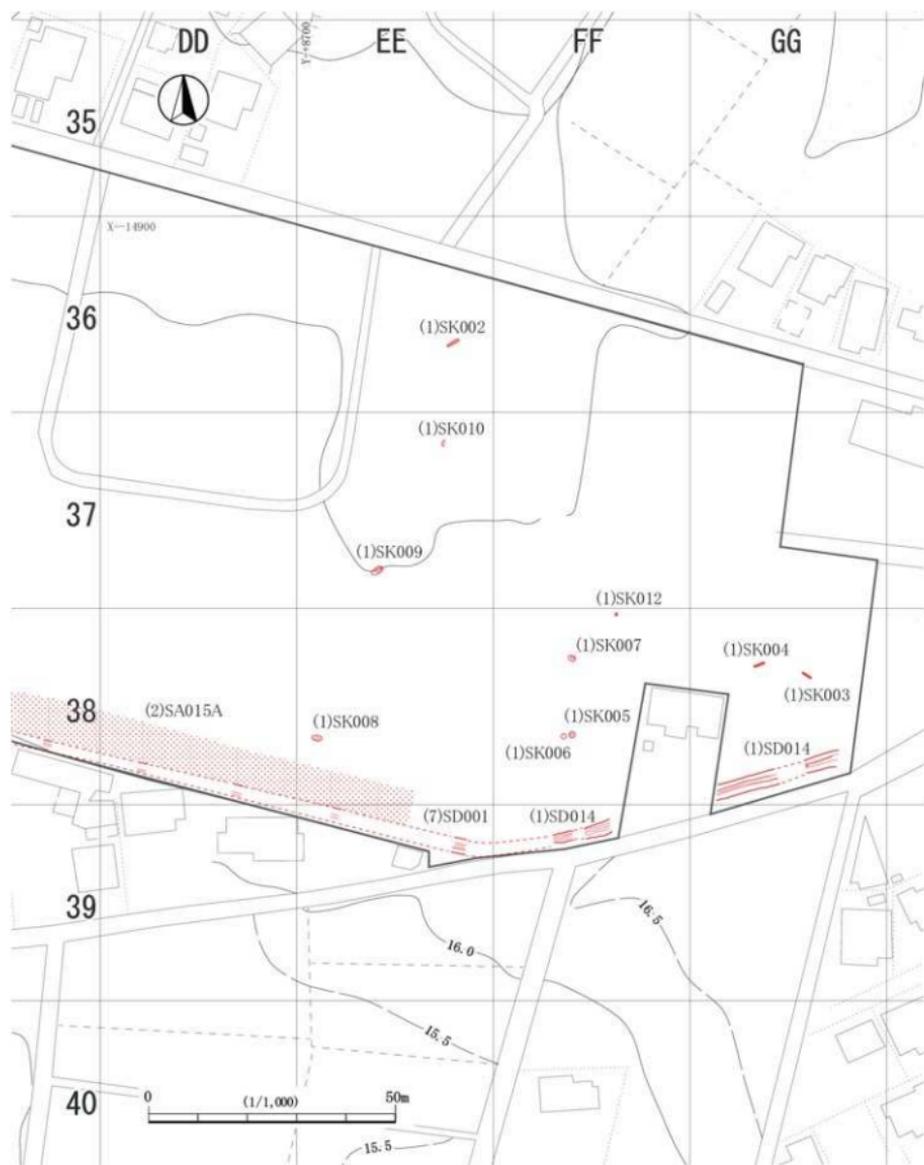
また遺物としては、極めて特徴的な石器が西側の遺物包含層から単独出土している。縄文時代前期後葉に東北を拠点として関東地方にも流通した有掘石器—いわゆる「押出型ポイント」と呼ばれる形態の石器である。硬質頁岩で作られたつまみ部のあるこの石器は威信財、あるいは副葬品であろうといわれ、大久保遺跡で出土したものは発掘調査直後から、大きさ・形状ともに優品として研究者の間で周知されている。



第6-1図 大久保遺跡調査範囲と遺構の位置



第6-2図 大久保遺跡遺構配置 (西側)



第6-3図 大久保遺跡遺構配置(東側)

## 第2節 縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、炉跡・焼土遺構3基、貯蔵穴1基、陥穴15基、土坑9基が検出された。これらの遺構は、遺跡範囲の主に東側と西側に分かれて分布し、中央付近では遺構のない空白地帯となっている。西側では住居跡や炉跡など生活に関する遺構が集中し、その一方東側では土坑や陥穴がやや散漫に分布していた。

### 1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査範囲西側で3軒検出され、密集することなく散在していた。

#### (4)SI034 (第6-4図)

調査範囲の西側、37Z-45~55グリッドに位置する。東西方向に長軸が向く楕円形の形状で、長軸2.29m、短軸1.73m、深さ10cm~19cmであった。住居内覆土の上層に炭化粒や焼土粒が混入し、また南壁沿いの中央に焼土が半円形に堆積していた。遺構が小規模で、床面から柱穴や踏み固めた硬化面が検出されなかったが、一応住居跡と判断しておく。

遺物は、黒浜式の縄文土器片が1点出土した。

#### (4)SI018 (第6-4図、図版6-1-6)

調査範囲の西側、37AA-19~37BB-20グリッドに位置する。形状は正方形に近い長方形で、長軸3.21m、短軸2.89m、深さ36cmであった。床面から柱穴は検出されなかった。

主な出土遺物は土器で、早期、中期、後期の縄文土器片であった。

**出土遺物** 縄文土器片2点を図化できた。1は口縁の破片で、細い平行沈線文が縦位に施文されている。2は繊維を含んだ条痕文系の土器片である。2片とも早期の土器片である。

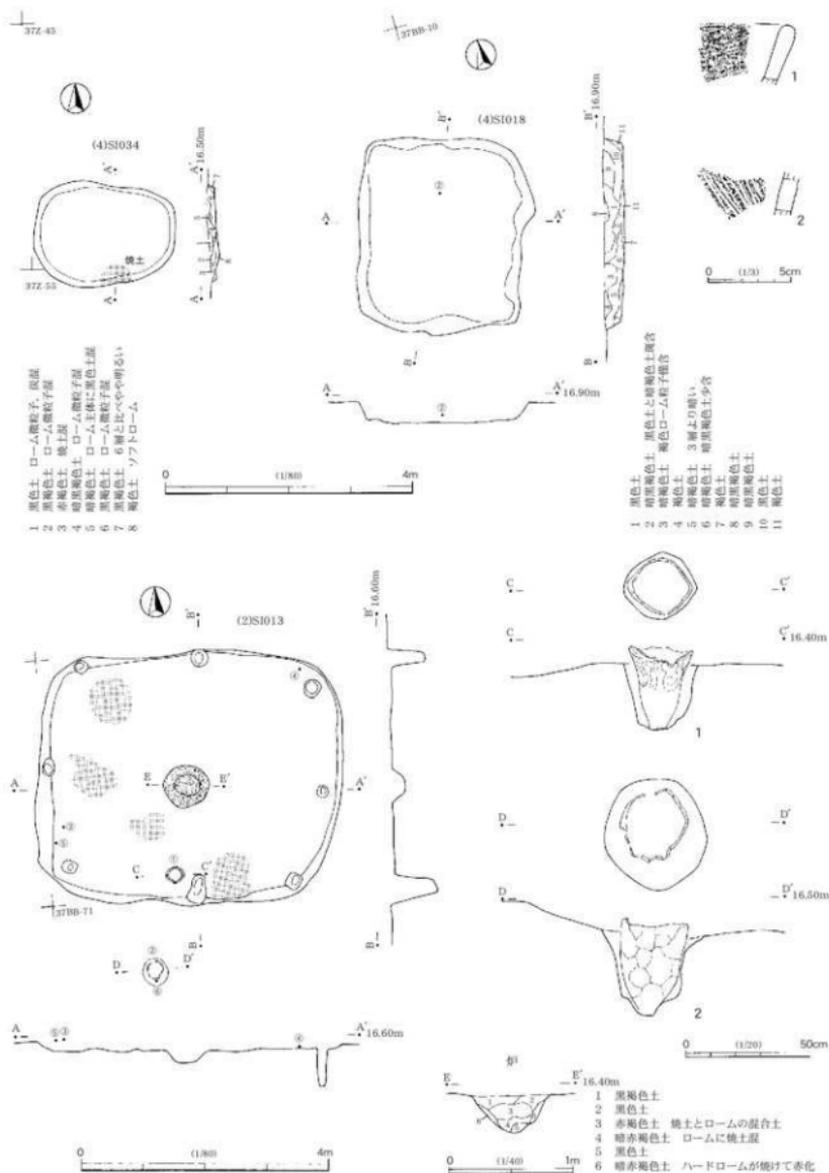
#### (2)SI013 (第6-4・5・18図、図版6-1-6)

調査範囲の西側、37BB-61~62グリッドに位置する。形状は隅丸長方形で、長軸が東西方向を向く。長軸4.95m、短軸4.18m、深さ2cm~8cmであった。掘り込みが浅く、壁高はほとんどなかった。住居中央に直径約75cmの炉跡があり、また住居西側の床面に焼土が4か所分布していた。住居の四隅と四壁中央の計8か所に柱穴が穿たれていて、深さは70cm~80cmであった。南壁中央付近および壁を挟んだ住居外側にも、それぞれ深鉢が埋設されていた。南壁中央には入口が設けられていたと予測されるので、入口付近の住居の内と外で深鉢が埋設されたのである。

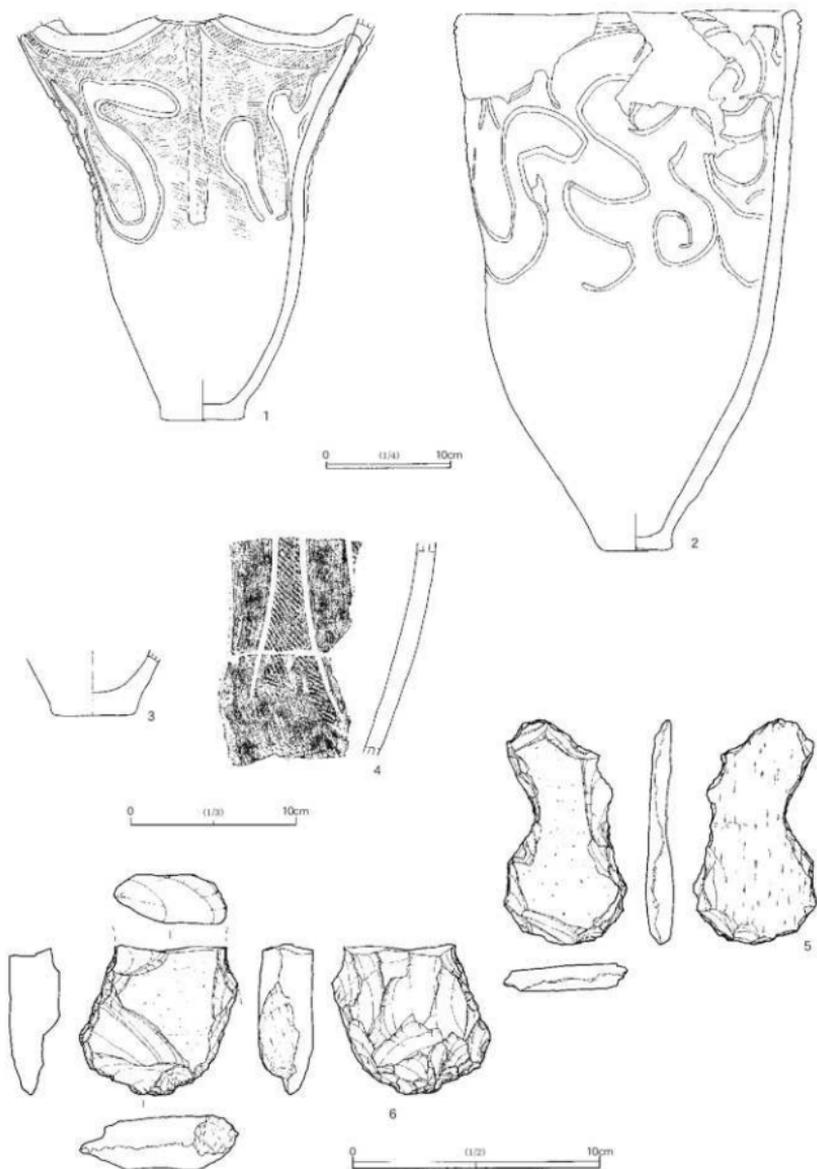
出土遺物は主に土器で、そのほかに礫と石器が少量含まれていた。

**出土遺物** 出土した土器は、埋喪の深鉢以外は小さな破片だった。1は住居内の南壁中央付近に埋設されていた深鉢である。現存高32.8cm、口径28.5cm、底径6.8cmである。4単位の波状口縁で、波頂部の下に隆帯が胴部中間まで縦位に貼付されていた。隆帯には刻み目か、もしくは縄文が施文されている。胴部上半は、沈線で区画した弧状モチーフの中に縄文を充填している。胴部下半は無文である。2は南壁中央の住居外に埋設されていた深鉢である。高さ43.8cm、口径28.2cm、底径5.9cmである。平縁の口縁で、胴部上半に渦巻文や1の深鉢と同じような弧状モチーフが沈線によって描かれていた。胴部下半は無文である。4は深鉢の胴部で、細かい縄文が沈線で区画されている。

5は上部が欠損した銅形打製石斧である。(2)SI013内の西側の溝に近い床面から出土した。粘板岩を素材としているためか、頁状の剥がれによって器厚が薄くなっており、刃部は潰れて丸みを持つ。表は素



第6-4図 縄文時代住居跡(1)



第6-5図 縄文時代住居跡(2)

材面、裏は節理面かと思われる。6は分銅形打製石斧の下半部である。青灰色を基調とするが、濃灰色の網目状構造を持ち赤茶色の節理が発達したチャート製である。剥片石器の素材としては一般的だが、加工具にはほとんど利用されることのないチャートである。(2)S1013の南側に近接し、埋嚢と共存する。嚢の口縁部付近から出土しており、嚢を埋めるための土掘り具として使用されたあと、そばに添えられたものか。住居内から検出された5と同様、器厚が減じられた後も繰り返し刃部が再生され、使用された痕跡が残っている。

## 2. 炉跡・焼土遺構

炉跡・焼土遺構は調査範囲西側で2基、東側で1基検出された。

### (4)SK028炉跡 (第6-6図)

調査範囲の西側、36BB-70グリッドに位置する。形状はほぼ円形で、底面は楕円状であった。長軸0.45m、短軸0.42m、深さ15cmである。覆土には焼土粒子が含まれ、底面から側面にかけて焼けて硬化した面があった。

遺物は出土しなかった。

### (4)SX027焼土遺構 (第6-6図)

調査範囲の西側、37AA-61グリッドに位置する。形状はやや楕円形で、長軸0.76m、短軸0.66m、深さ9cmであった。遺構上面に焼土が分布していた。

遺物は出土しなかった。

### (1)SK012炉跡 (第6-6図)

調査範囲の東側、38FF-06グリッドに位置する。形状はやや楕円形で、長軸0.64m、短軸0.54m、深さ23cmであった。遺構上面に焼土が分布し、底面の一部が焼けて硬化していた。

遺物は出土しなかった。

## 3. 貯蔵穴

貯蔵穴は、調査範囲西側で1基検出された。

### (4)SK023 (第6-6図、図版6-2)

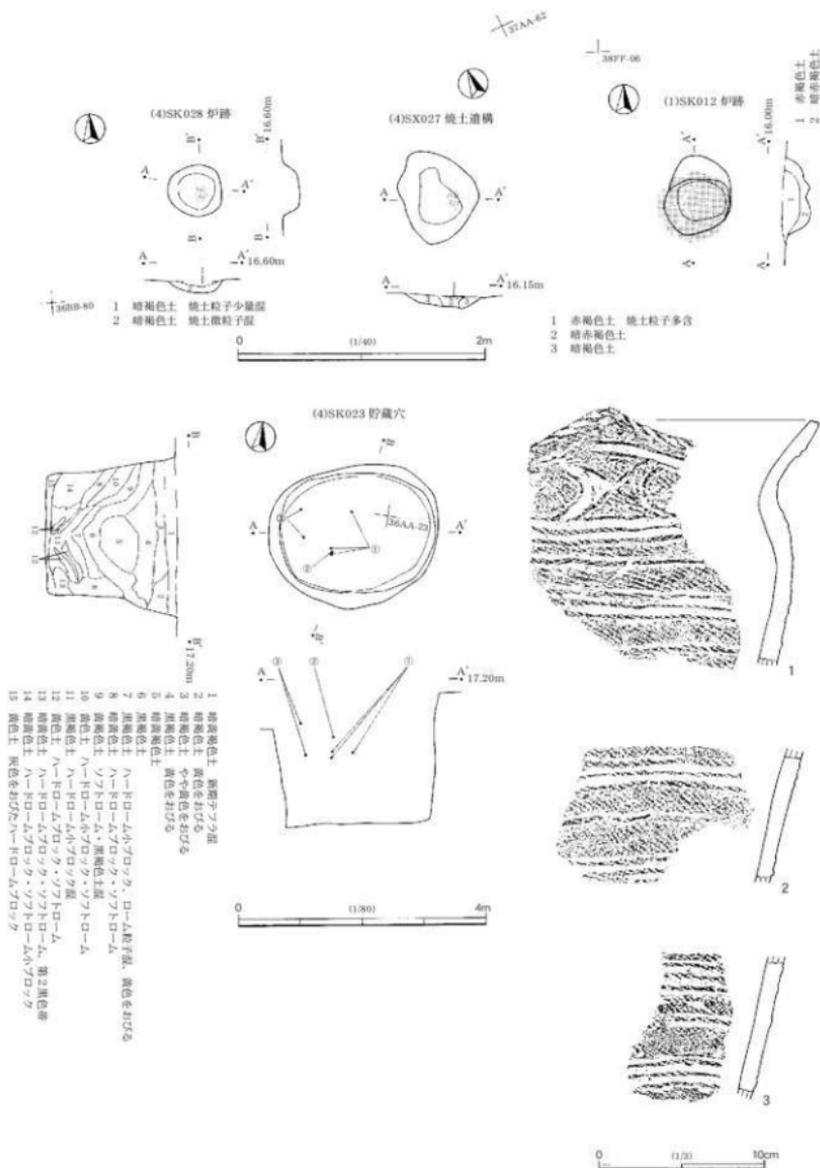
調査範囲の西側、36AA-12～13、22～23グリッドに位置する。形状はやや楕円形で、長軸が東西方向を向く。長軸2.80m、短軸2.27m、深さ2.14mであった。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上る。上層構造を支える柱穴などは検出されなかった。

遺物は、主に覆土の中上層から土器や礫が出土した。

**出土遺物** 1～3には同じ文様が施文されていた。縄文の施された地文に、細い粘土紐が横位に平行して貼付され、粘土紐にも縄文が施されていた。1は波状口縁で口縁縁辺にも縄文が施されている。頸部には交差して区画するように細い粘土紐が貼付されていた。胴部には縄文の施された細い粘土紐が横位に平行して貼付されている。1～3は諸磯b式の縄文土器片である。

## 4. 陥穴

陥穴は調査範囲西側で12基、東側で3基、計15基が検出された。西側でやや密集して分布し、東側では



第6-6図 炉跡・焼土遺構、貯蔵穴

散在していた。

(4)SK019 (第6-7図、図版6-2)

調査範囲の西側、36Z-53グリッドに位置する。形状は長楕円形で長軸2.20m、短軸1.23m、深さ1.31m～1.49mであった。底面の長さは2.37m、幅46cm～49cmと狭くなり、長軸側の壁面下部はオーバーハングしていた。壁面はほぼ真直ぐに立ち上る。

遺物は出土しなかった。

(4)SK021 (第6-7図、図版6-2)

調査範囲の西側、36Z-75グリッドに位置する。形状は長楕円形で長軸2.20m、短軸0.90m、深さ1.78mであった。壁面にはやや凹凸があり、長軸側の壁面の中間部分がオーバーハングしていた。

遺物は、諸磯式の縄文土器片が5点出土した。

(4)SK031 (第6-7図、図版6-2)

調査範囲の西側、36Z-75グリッドに位置する。形状は楕円形で長軸2.20m、短軸0.90m、深さ1.78mであった。底面が袋状となっている。

遺物は出土しなかった。

(4)SK022 (第6-7図、図版6-2)

調査範囲の西側、36AA-60～70グリッドに位置する。形状は長楕円形で長軸1.63m、短軸0.72m、深さ0.81m～0.96mであった。壁面はほぼ真直ぐに立ち上る。

遺物は出土しなかった。

(4)SK030 (第6-7図、図版6-2)

調査範囲の西側、36AA-98グリッドに位置する。形状は長楕円形で長軸2.09m、短軸1.26m、深さ1.55mであった。長軸側の壁面下部はオーバーハングしていた。壁面はほぼ真直ぐに立ち上る。

遺物は出土しなかった。

(3)SK016 (第6-7図、図版6-2)

調査範囲の西側、36BB-02～03グリッドに位置する。形状は隅丸長方形で長軸2.23m、短軸1.33m、深さ1.16mであった。底面は長軸1.22m、短軸0.63mの長方形で、平坦で硬かった。壁面はほぼ真直ぐに立ち上る。東側にテラス状になった平坦部分があり、掘りすぎた可能性がある。

遺物は出土しなかった。

(1)SK002 (第6-7図、図版6-2)

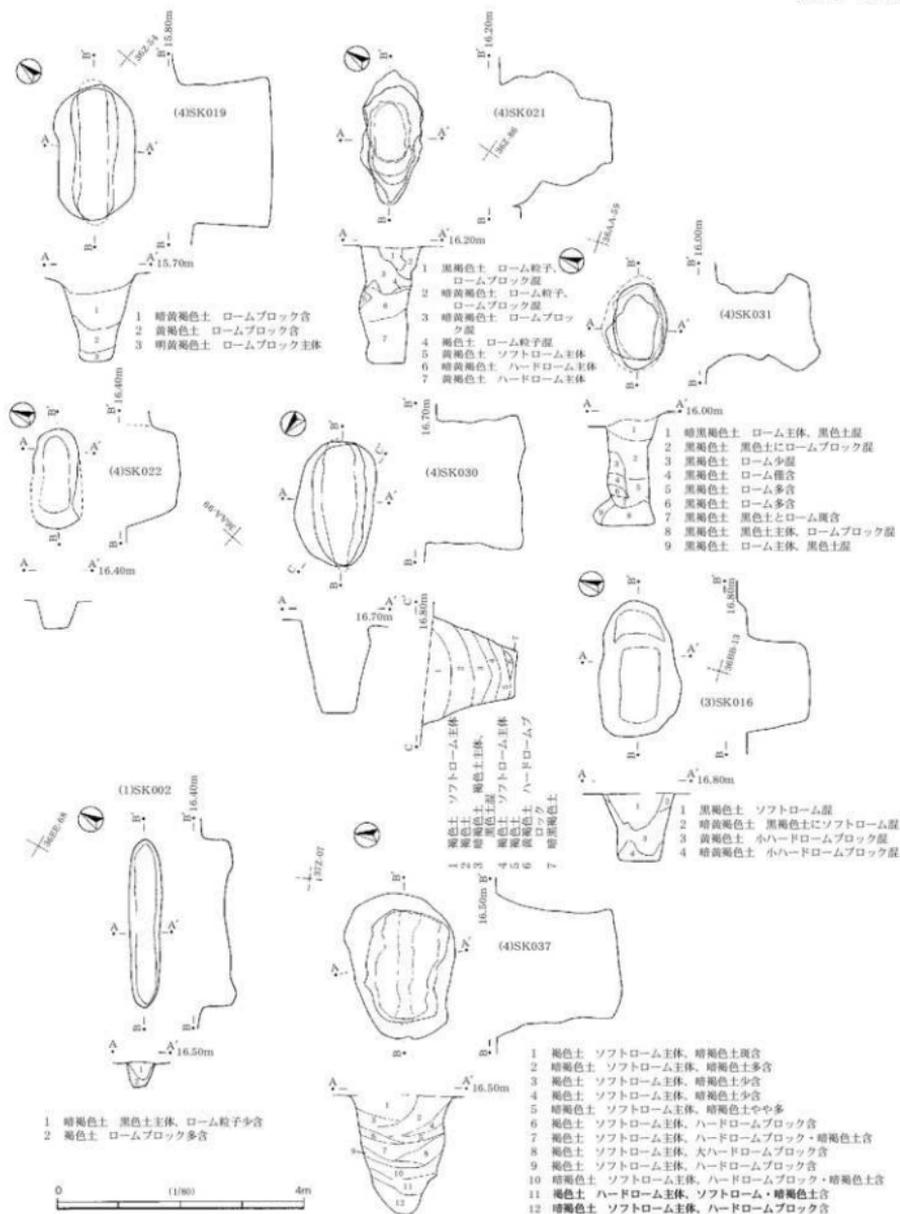
調査範囲の東側、36EE-67～68グリッドに位置する。形状は長楕円形で長軸2.75m、短軸0.52m、深さ41cm～51cmであった。壁面はほぼ真直ぐに立ち上る。

遺物は出土しなかった。

(4)SK037 (第6-7図、図版6-2)

調査範囲の西側、37Z-06グリッドに位置する。形状は楕円形で長軸2.17m、短軸1.50m、深さ1.92m～2.00mであった。底面は長軸1.80m、幅24cm～34cmで、壁面はほぼ真直ぐに立ち上る。長軸側の壁面下部がややオーバーハングしていた。

遺物は出土しなかった。



第6-7図 陥穴(1)

(4)SK036 (第6-8図、図版6-3)

調査範囲の西側、37AA-00~01、10~11グリッドに位置する。形状は長楕円形で長軸3.28m、短軸1.56m、深さ57cm~63cmであった。壁面はほぼ真直ぐに立ち上る。

遺物は出土しなかった。

(4)SK032 (第6-8図)

調査範囲の西側、37AA-61~62グリッドに位置する。形状は楕円形で長軸2.13m、短軸1.28m、深さ2.34mであった。底面から湧水があり、底面の詳細な状況は不明である。壁面はほぼ真直ぐに立ち上るが、長軸側壁面の底部付近には、やや凹凸がある。

遺物は出土しなかった。

(1)SK011 (第6-8図、図版6-3)

調査範囲の西側、37BB-73グリッドに位置する。形状は長楕円形で長軸2.42m、短軸0.93m、深さ1.49mであった。壁面はほぼ真直ぐに立ち上る。底面の長軸はオーバーハングして開口部より長く、2.56mだった。短軸は狭く15cm~32cmであった。

遺物は出土しなかった。

(1)SK010 (第6-8図)

調査範囲の東側、37EE-17グリッドに位置する。遺構の半分以上が隣接の民家敷地にかかっていた。形状は楕円形で長軸1.34m、短軸0.52m、深さ2.00mであった。壁面はほぼ真直ぐに立ち上る。

遺物は出土しなかった。

(1)SK009 (第6-8図、図版6-3)

調査範囲の東側、37EE-73、83~84グリッドに位置する。形状は楕円形で長軸2.56m、短軸1.28m、深さ1.76mであった。底面の平坦面が東側に寄り、また底面付近は袋状に広がっていた。

遺物は出土しなかった。

(1)SK004 (第6-8図、図版6-3)

調査範囲の東側、38GG-23グリッドに位置する。形状は長楕円形で長軸2.31m、短軸0.44m、深さ64cmであった。壁面はほぼ真直ぐに立ち上る。

遺物は出土しなかった。

(1)SK003 (第6-8図、図版6-3)

調査範囲の東側、38GG-35~36グリッドに位置する。形状は長楕円形で長軸2.20m、短軸0.33m、深さ40cmであった。壁面はほぼ真直ぐに立ち上る。

## 5. 土坑

土坑は調査範囲西側で5基、東側で4基、計9基が検出された。

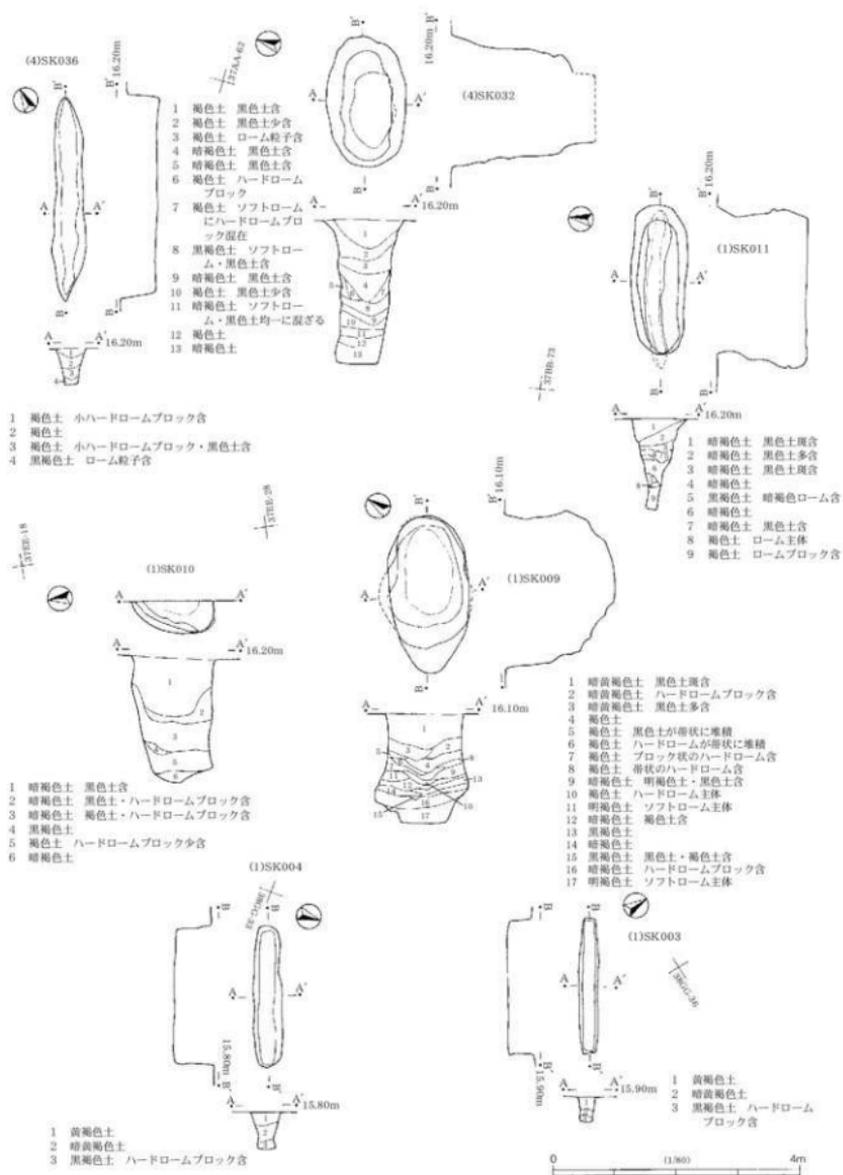
(6)SK001 (第6-9図、図版6-3)

調査範囲の西側、35Z-55~65グリッドに位置する。形状は円形で直径約1.1m、深さ48cmであった。

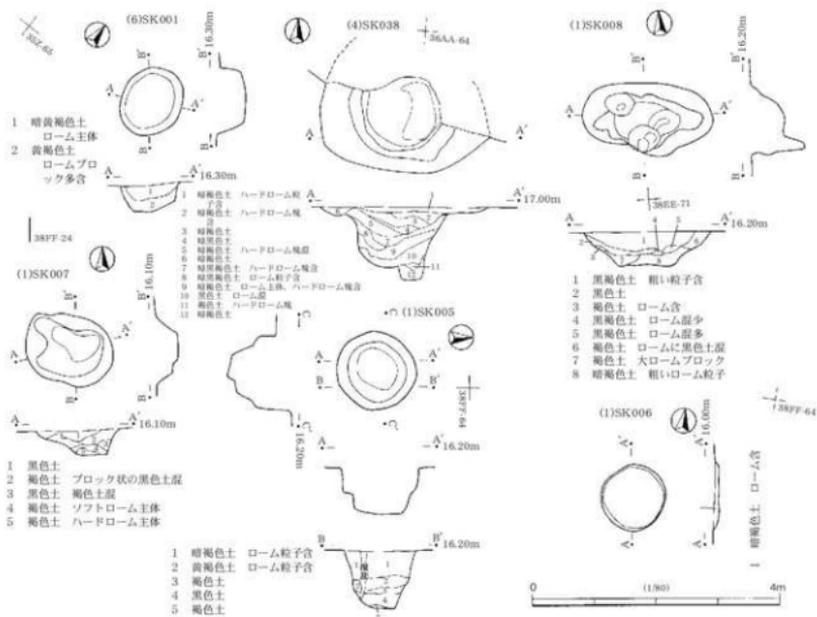
遺物が少量出土した。

(4)SK025 (第6-10図、図版6-4・6)

調査範囲の西側、36AA-44グリッドに位置する。形状は円形で直径約1.3m、深さ42cmであった。壁面



第6-8図 陥穴(2)



第6-9図 土坑(1)

はほぼ垂直に立ち上る。

遺物として、少量の土器と石が覆土の中上層から出土した。

**出土遺物** 1は土器の口縁部片である。口縁部に刺突文をめぐらせ、その下部に同じような刺突文を施した細い突帯が横位にめぐる。さらに細い沈線、そしてその下に縄文が施文されていた。2も土器の口縁部片で、口縁上部に小さな突起がある。2点とも後期の加曾弁B3式ないしは曾谷式の土器片と思われる。

**(4)SK038** (第6-9図、図版6-3)

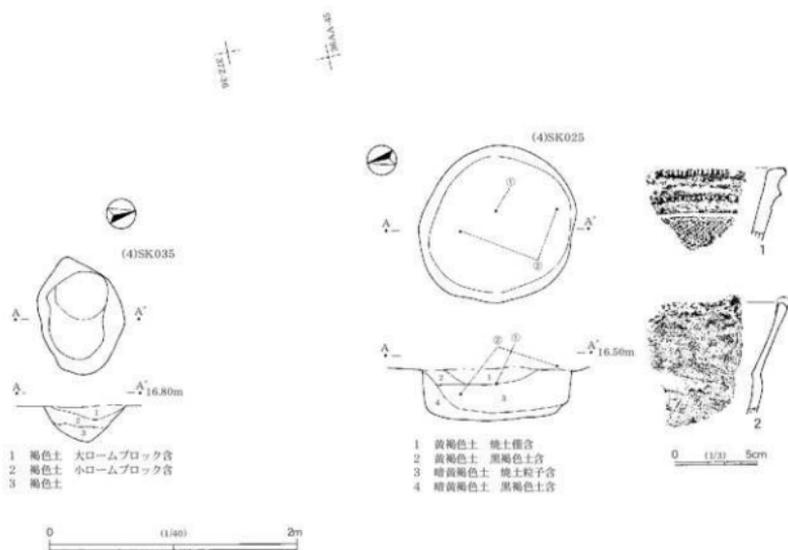
調査範囲の西側、36AA-63~64グリッドに位置する。北側半分の上面は削平されていた。形状は円形で直径約2.5m、深さ1.2mであった。底面の東側部分が一段低くなっている。壁面はほぼ垂直に立ち上る。

遺物が出土せず、遺構の時期を比定するのは困難であるが、一応縄文時代としておく。

**(4)SK035** (第6-10図)

調査範囲の西側、37Z-36グリッドに位置する。形状は楕円形で長軸0.96m、短軸0.67m、深さ0.35mであった。底面西側がピット状にくぼむ。

少量の遺物が出土し、焼けた礫が含まれていた。



第6-10図 土坑(2)

## (1)SK008 (第6-9図、図版6-4)

調査範囲の東側、38EE-60~61グリッドに位置する。形状は不整な長楕円形で長軸1.12m、短軸0.59m、深さ56cmであった。底面は凹凸が目立ち、南壁中央に深さ32cmのビット状の穴がある。

遺物は出土しなかった。

## (1)SK007 (第6-9図、図版6-4)

調査範囲の東側、38FF-24グリッドに位置する。形状は楕円形で長軸1.47m、短軸1.09m、深さ41cmであった。壁面から底面にかけて不定形で、北側から西側が緩やかで、南側には段差があり、東側は急な角度で壁が立ち上る。

遺物は出土しなかった。

## (1)SK005 (第6-9図、図版6-4)

調査範囲の東側、38FF-63~64グリッドに位置する。西側約0.6mの地点に(1)SK006土坑がある。形状は円形で直径約1.2m、深さ77cmであった。平坦な底面で、壁は二段の掘り込みとなっていた。

遺構内および周辺で礫が出土しているが、周辺の礫群に含めて取り扱った。

## (1)SK006 (第6-9図、図版6-4)

調査範囲の東側、38FF-63グリッドに位置する。東側約0.6mの地点に(1)SK005土坑がある。形状は円形で直径約1m、深さ13cmだった。底面は平坦で、浅い土坑である。

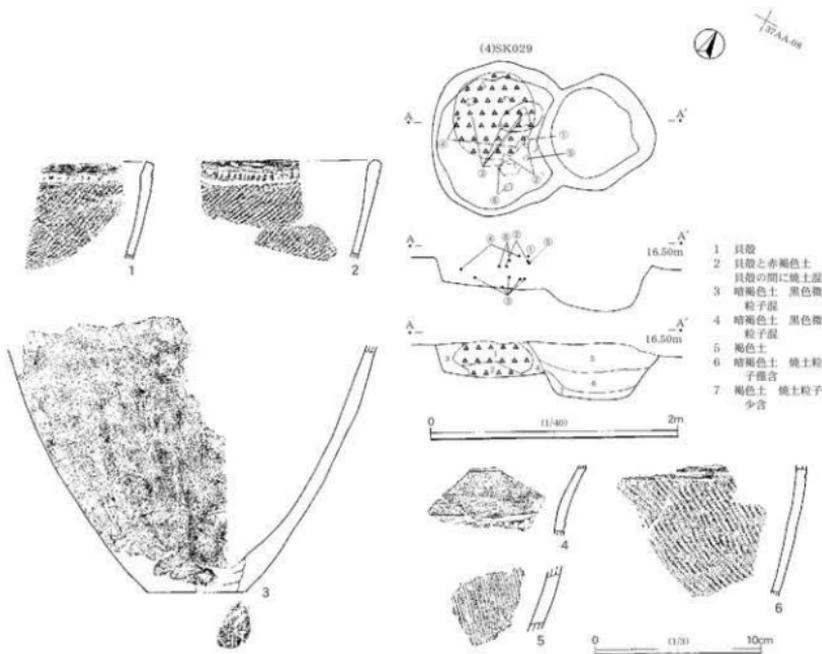
遺物は出土しなかった。

## (4)SK029 (第6-11図、第6-1・2表、図版6-8・15)

調査範囲の西側、37AA-07グリッドに位置する。形状は2基の円形土坑が重複した瓢箪形で長軸1.82m、短軸1.26m、深さ46cmであった。西側の円形土坑は直径約1.2m、深さ30cm、東側の円形土坑は直径約0.9m、深さ47cmであった。底面はそれぞれ平坦であった。西側土坑から貝殻と焼土、土器片が出土し、東側土坑からは遺物が出土しなかった。土層断面を見ると、東側土坑が新しく、西側土坑が古いことがわかる。

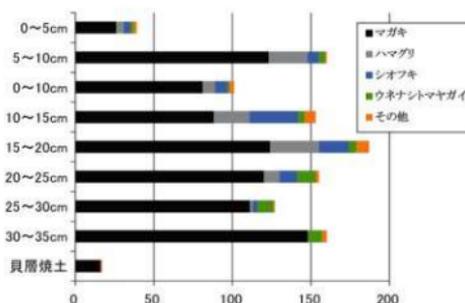
西側土坑の覆土層に貝殻の堆積層があり、その下に貝殻に焼土を混ぜえた土層が堆積していた。貝殻および焼土の堆積層に土器片が混入していた。

**出土遺物** 1の口縁下部には連続刺突文による押し引き文が横性に施され、その下に縄文が施文されている。2にもほぼ同じ文様が施され、押し引き文の下に細い沈線文がめぐっている。4は細い沈線文の下に連続刺突文による押し引き文が横性に施され、6は細い沈線文の下に縄文が施されていた。5は平行沈線文が施されている。3の底部には網代圧痕があった。これらの土器片は、後期の加曾利B3式ないしは曾谷式と思われる。

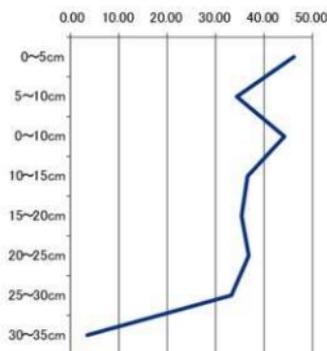


第6-11図 土坑(3)

第6-1表 層序別貝殻個体数



第6-2表 マガキの層序別平均長さ



貝殻は西側の直径約1.2m、深さ約30cmの円形土坑から出土し、直径約70cm、深さ約30cmの円柱状に堆積していた。貝殻層を深さ5cmごとに水平に分層しながら採取した。一部10cmの厚さで採取したものもあったが、全部で9種類の層序別貝殻資料となった。採取後に整理作業の段階で、貝殻を水洗・選別して層序ごとに貝殻の識別と貝殻の長さを計測した。

貝殻の計測基準および方法については、『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書5—柏市駒形遺跡—縄文時代以降編2』千葉県教育振興財団調査報告書第691集の283頁に記載された分析方法に準じて行なった。

貝殻の総個体数は1,099個で、その内訳はマガキ837個、ハマグリ104個、シオフキ83個、ウネナシトマヤガイ47個、オキシジミ14個、オオノガイ9個、アサリ3個、ヤマトシジミ1個、イタボガキ1個であった。マガキが全体の4分の1以上を占め、マガキを主体とする貝殻堆積層といえるだろう。層序別個体数を見ると(第6-1表)、下層ではマガキを主体にウネナシトマヤガイが少量含まれ、中上層になるとマガキを主体にハマグリ、シオフキが少量含まれている。マガキを主体に上下層で若干の相違が見られる。

マガキの貝殻の長さを層序別に平均値で見ると、下の層から3.50mm、33.23mm、36.85mm、35.35mm、36.60mm、44.20mm、34.37mm、46.17mmとなり(第6-2表)、最下層を除いて総じて40mm弱で、層序的に大きな差異を見いだせなかった。最下層の貝殻は極端に小さいので、破碎した貝だけの集積だったのだろうか、特殊な原因によって小さい貝殻のみで構成される層になったのだろうか。

上下層でマガキ以外の貝構成に若干の差異がみられるものの、マガキを主体とする点については大差がない。またマガキの貝殻の長さにも層序的に大きな相違がないので、(4)SK029土坑の貝殻層は長期にわたって形成されたのではなく、短期間で堆積したものと推測できるだろう。貝殻とともに縄文時代後期中葉ないし後葉の土器が出土している。つまり縄文時代後期の貝採取行動の一例を提示しているといえるだろう。

## 6. グリッド出土の縄文土器 (第6-12～17図、第6-3・4表、図版6-8・12)

遺構出土の遺物以外に、大量の遺物が出土した。それらの遺物はグリッド別に取り上げられた。遺物のほとんどは土器で、土器以外に少量の石器が含まれていた。土器の大半は縄文土器だったが、それ以外に奈良・平安時代の土師器・須恵器、近世陶磁器の破片などがあつた。出土した土器を大グリッドごとに集計して、縄文土器の分布状態の概要を示しておきたい(第6-3表)。

縄文土器の分布は、遺構分布と同様に調査範囲の東側と西側に分かれ、中央付近では出土せずに空白状態だった。出土総点数も遺構の分布密度と連動し、西側では1,200点以上、それに対して東側では200点以下という大きな差異を見せている。

西側の大グリッドを見ると、35Z、36Z、37Zグリッドでは黒浜式、諸磯式、浮島式など前期の土器を主体に、早期の燃糸文系、条痕文系、後期の称名寺、安行式などの土器が少量含まれていた。東側に隣接する36AA、37AA、38AAグリッドでは逆に後期の称名寺式や堀之内式が主体となり、前期、中期の土器は少なかった。

東側の大グリッドを見ると、37EE、38EE、38FFグリッドでは中期末から後期前葉の土器が多く見られた。

なお、第4次調査で検出された野馬堀(4)SD015Bの覆土から、348点もの大量の縄文土器が出土した。大半は中期の加曾利E式から後期の称名寺式までの土器で、それ以外に前期の浮島式の土器がわずかに含まれていた。検出された野馬堀は38AAグリッドに位置し、覆土から出土した縄文土器の様相は38AAグリッド出土の縄文土器と同じであった。そこで、野馬堀(4)SD015B出土の縄文土器は、グリッド出土の土器として取り扱うことにした。

総じて前期と後期の土器が多く、中期の土器が少量含まれていた。

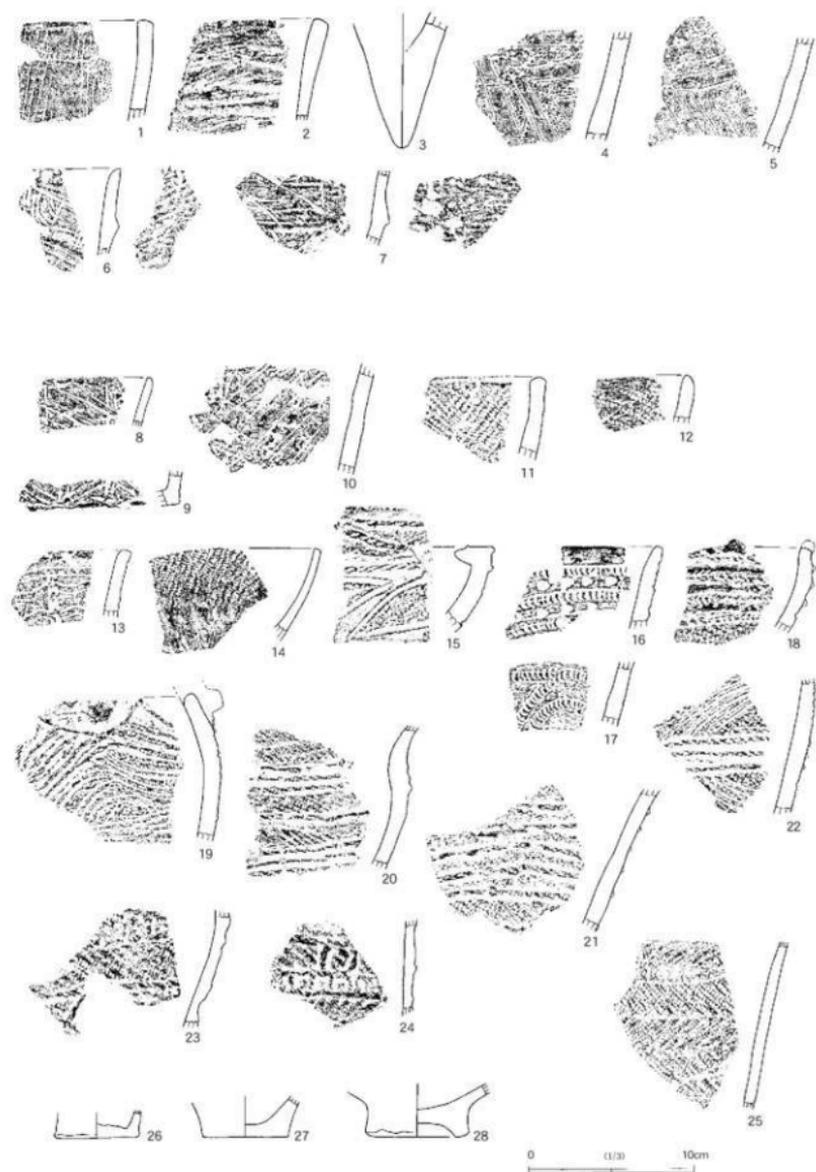
### 第Ⅰ群土器 (1～7) (第6-12図、図版6-8)

早期の土器である。1は口縁で、縦位の燃糸文が施されている。2も口縁で胎土に白色長石の微粒が含まれている。無文に削り整形の擦痕が顕著で、平坂式であろう。4と5は、沈線による矩形の区画に貝殻腹縁文と無文が交互に続く。田戸上層式である。6と7は胎土に繊維を含む条痕文系の土器である。7は鶴ヶ島台式である。

### 第Ⅱ群土器 (8～43) (第6-12・13図、図版6-8・9)

前期の土器である。前期の土器は後期の土器とともに本遺跡で多く出土した。8と9は平行沈線が斜行し、9は斜行沈線が矢羽状に施された底部である。10は平行沈線を交叉して斜行させている。8～10は黒浜式である。11は胎土に繊維を含み、羽状縄文が施されている。12も胎土に繊維を含んでいる。

13は平行沈線による肋骨文が施されている。諸磯a式である。15は口縁の周縁、端部、上面に細い粘土紐が貼付され、さらに細かい刻目目が施されている。口縁下部には沈線が弧状に施文されている。16は平行沈線の間に幅の広い爪形文と刺突文が交互に施されている。17は平行沈線を直線状と弧状に施してから爪形文を施している。18は口縁上部に小さな突起を付け、細い粘土紐を口縁の周りに平行に回らせてから、その間に爪形文を施している。19は波状口縁で、退化した獣面把手の一部が見られる。地文に縄文が施されてから、縄文の施文された細い粘土紐が貼付され、その下に平行沈線で半円形や直線形が描かれている。20と21は縄文の地文に、縄文の施文された細い粘土紐が平行に貼付されている。22は縄文の地文に、縄文の施文された細い粘土紐が平行に貼付され、その上下に斜行する平行沈線が施されている。23と24は縄文



第6-12図 縄文土器(1)

の地文に、縄文の施文された細い粘土紐による円形が連続して描かれている。15～24は諸磯b式である。25は羽状縄文が施文されている。26～28は前期の底部と思われる。

29～32は波状口縁で、山形の口縁に獣面把手の退化した突起が見られる。口縁周縁に上下2段の爪形文が施文され、その下に平行沈線が弧状に施されている。33も口縁で、幅広い爪形文が上下2段に施文され、その中間に細長い直線の刺突文が斜めに施されている。そして爪形文の下に直線状および斜行状の平行沈線が施文されている。29～33は浮島Ⅱ式である。34は半載竹管による横位の押し引き文と、交叉する斜行状の平行沈線が施されていた。35と36は横位の爪形文の下にループ文が見られる。37は半載竹管による横位の押し引き文が施文されている。浮島Ⅲ式である。38は半載竹管による横位の押し引き文の下に、細い半載竹管による刺突文が横位に施されている。

39は口縁端部に細長い刻み目が施され、その下に平行沈線と刺突文が交互に施文され、さらにその下に半載竹管による横位の押し引き文が施されている。40は口縁に刺突文が上下2段にわたって回らされてい



第6-13図 縄文土器(2)

た。39～40は興津式である。41は無文の口縁の下に、刻み目のある隆帯が回らされていた。前期終末の土器と思われる。

### 第Ⅲ群土器 (44～58) (第6-14図、図版6-10)

中期の土器である。44には太い沈線文と大きな刺突文が施され、胎土には雲母片、長石粒が含まれていた。45の胎土にも雲母片、長石粒が含まれていた。44と45は中期前半の土器であろう。

46と47は深鉢の波状口縁で、口縁に沿って隆帯が貼付され、楕円形の区画内に細かい縄文が施されている。49は橋状把手のついた口縁である。口縁周縁に沈線を回らせ、胴部に懸垂文が施されている。50は無文の口縁である。49と50は加曾利EⅣ式である。51は口縁のすばまる壺型の土器の口縁で、胴部に渦巻の隆帯が施されている。加曾利E式である。52は無文の口縁端から下に、細い平行沈線が斜位にランダムに施されていた。54は無文の口縁下部に細い隆帯を貼付して橋状把手をつけ、その下に縄文を施文している。橋状把手は破損していて、痕跡のみ残っていた。55は無文の口縁下部に細い隆帯を貼付して把手をつけ、その下に縄文を施文している。54と55は加曾利EⅣ式の胴部のふくらむやや大きい土器である。57は縄文に縦位の隆帯が貼付されていた。

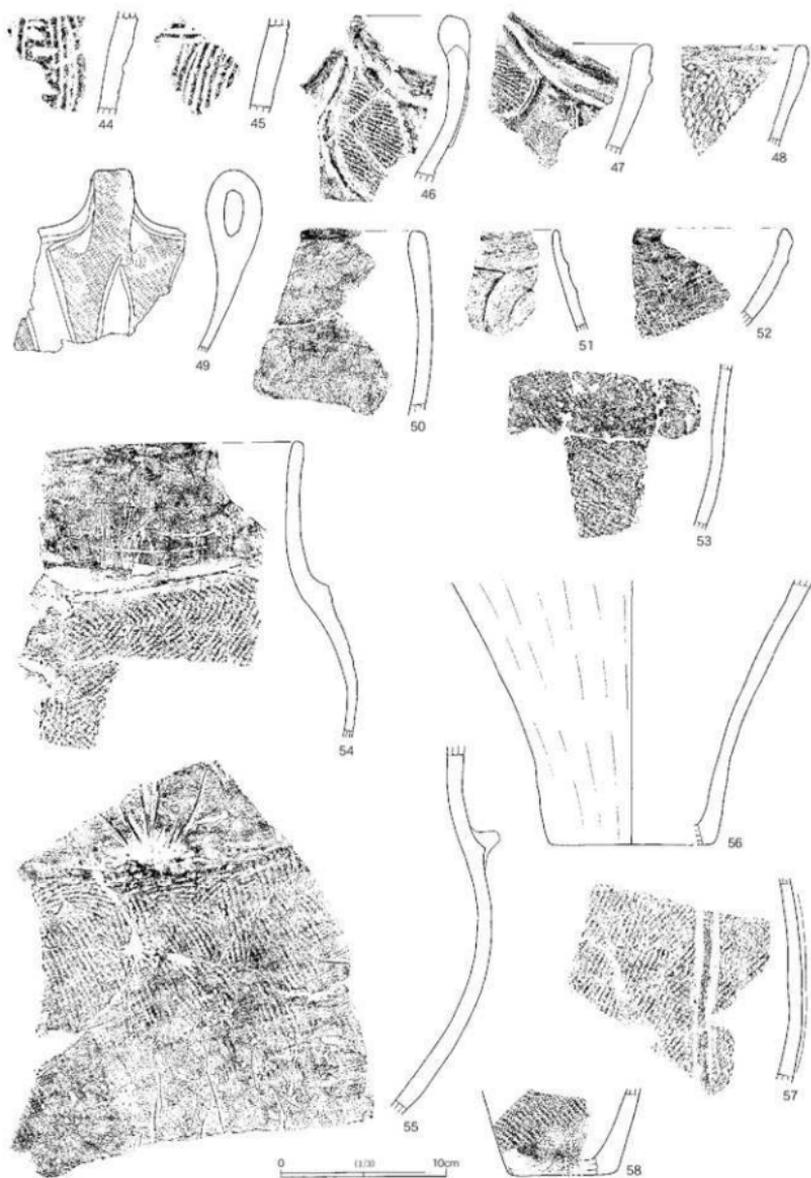
### 第Ⅳ群土器 (59～112) (第6-15・16図、図版6-11・12)

後期の土器である。後期の土器は前期の土器とともに本遺跡で多く出土した。59の口縁には4単位の突起がつけられ、太い沈線で区画されて縄文の充填された矩形が、突起に応じて4単位配されていた。口径は22.4cmである。60も59と同じような口縁の突起である。59と60は称名寺Ⅰ式である。61～70には沈線で区画されて縄文の施されたさまざまな弧状のモチーフが描かれていて、称名寺式である。71と72は口縁で、上下2本の沈線で横位に区画された中間に、縄文と竹管による円形刺突文が施されていた。73は突起のある口縁で、口縁上面に円形刺突文が施され、口縁から下に太い沈線と縄文からなる弧状のモチーフが施文されていた。76は細い沈線で縦位に区画した中を細かい縄文で施文していた。77は無文の口縁の下に沈線を回らせ、その下に縦位の櫛歯状沈線と、沈線による鉤状のモチーフが描かれている。78は孔の穿たれた口縁で、沈線から下にランダムな列点文が施されている。79と80は、沈線による区画の中に列点文が施されていた。78～80は称名寺Ⅱ式である。

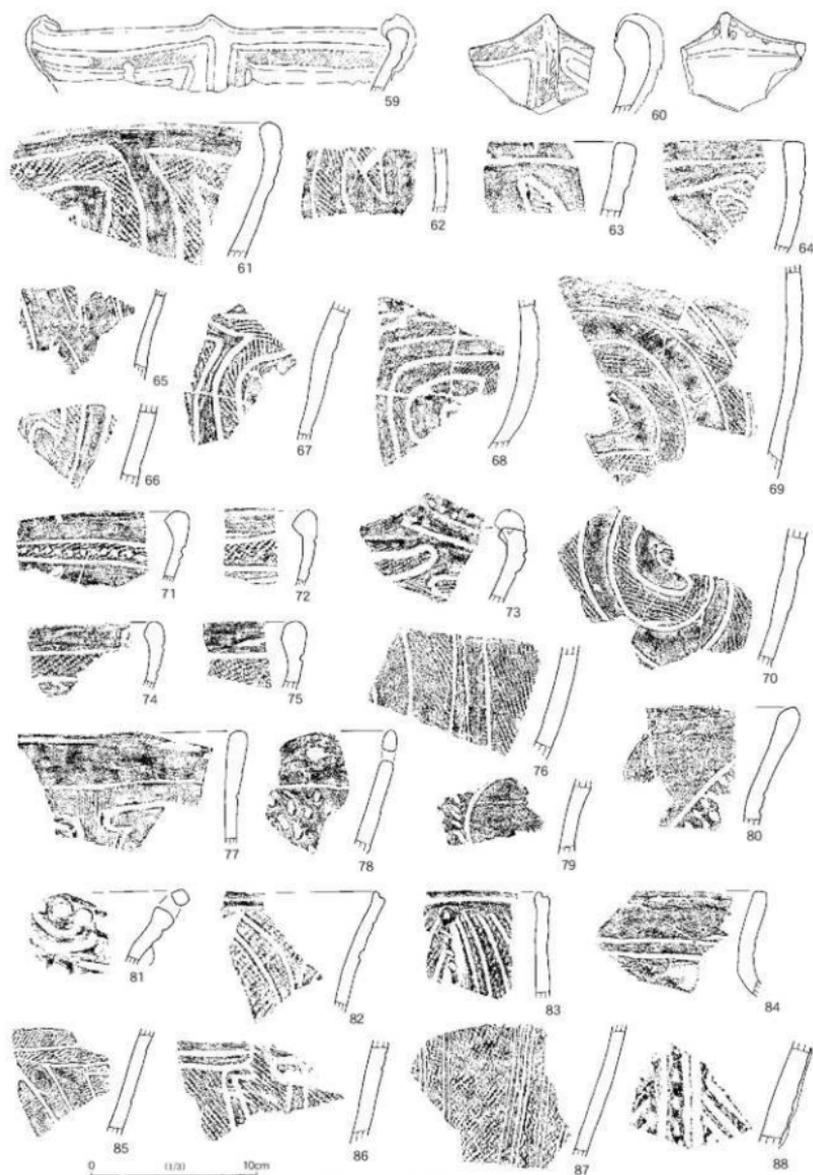
81は孔の穿たれた口縁で、孔の左右両側に竹管による刺突文があり、その下側に太い沈線文が施されている。82は口縁で、縄文の地文に太い沈線文が施されている。83も口縁で、口縁端に沈線を回らせ、地文に縄文が施され、口縁直下の半截竹管による円形刺突文を中心に、その下に列点文、左右両側に開くように沈線が斜位に施されている。81～83は堀之内Ⅰ式である。84は無文の口縁の下に2本の沈線を横位に平行に回らせていた。85は縄文の地文に、沈線が鉤状に施されていた。堀之内Ⅱ式である。86は縄文の地文に太い沈線で矩形状、鉤の手状のモチーフが描かれている。87は縄文の地文に、平行沈線が縦位に施されていた。堀之内式である。

89は口縁端に刻み目を回らせて浅い沈線を横位に施し、その下に細かい縄文が施文されていた。加曾利BⅢ式である。90は加曾利B式の粗製土器で、平行沈線が斜位に施文されている。91は口縁端に刻み目と沈線を回らせ、胴部には沈線で区画された縄文が施されている。加曾利B式である。

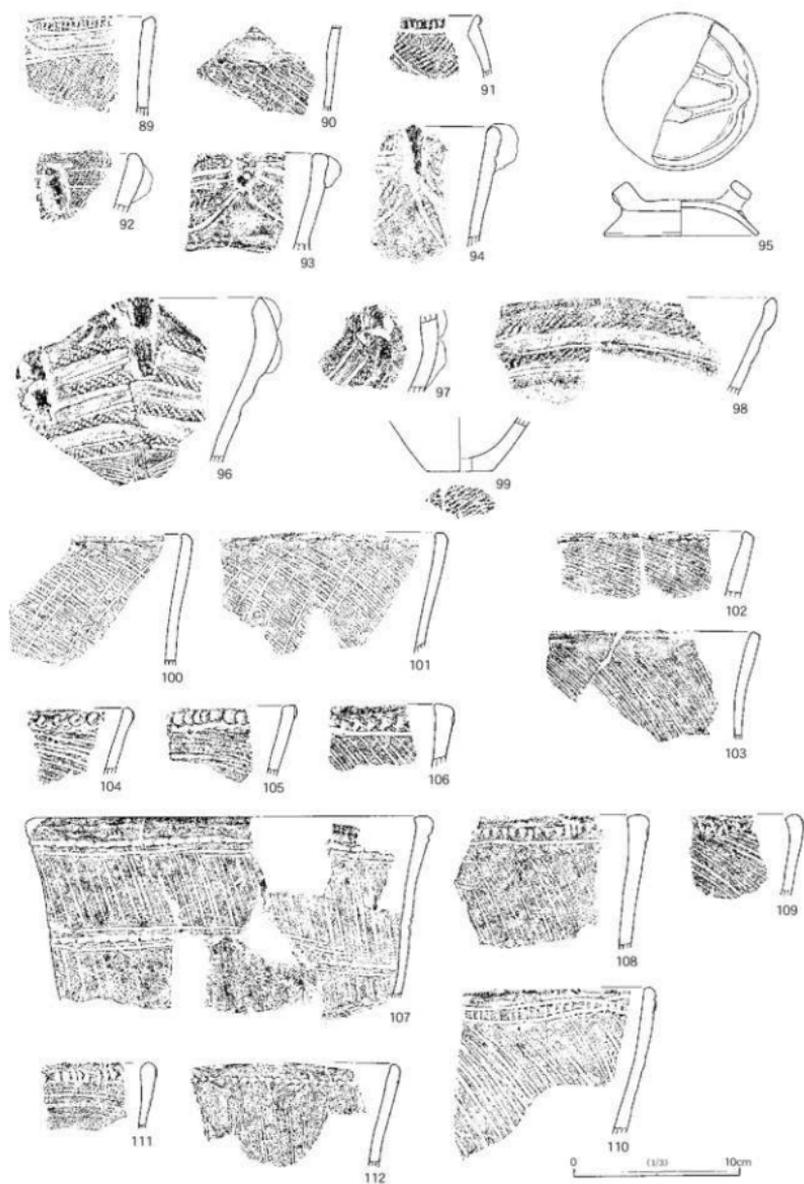
92は突起のある口縁で、細かい縄文の地文に細い沈線が横位に重層して施されている。93も突起のある口縁で、横位の沈線と沈線で区画された縄文が施文されている。94も突起のある口縁で、口縁端に沈線で区画された刻み目が施され、その下に沈線で区画された縄文が施文されていた。92～94は曾谷式である。



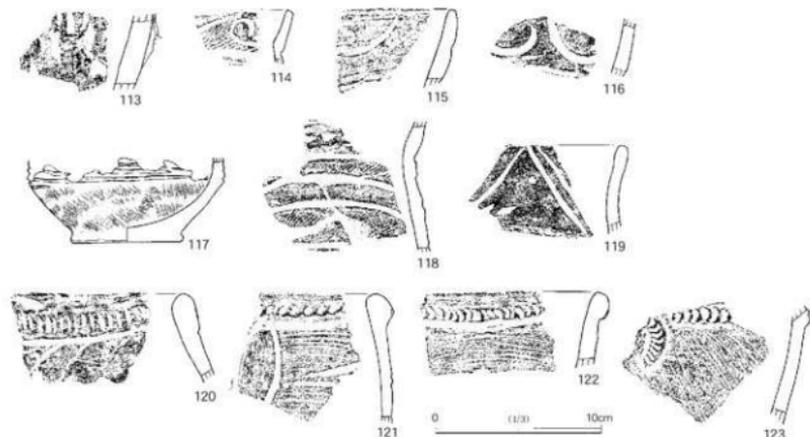
第6-14図 縄文土器(3)



第6-15図 縄文土器(4)



第6-16図 縄文土器(5)



第6-17図 縄文土器(6)

95は蓋で、半分欠損していた。左右一對の橋状把手が上面につくと思われる。蓋の口径は9.5cm、把手までの器高は3.3cmである。同じ様な蓋が流山新市街地地区の流山市市野谷二反田遺跡で出土している。

96は深鉢の突起のある波状口縁で、磨消による帯縄文が重層して施され、その下に平行沈線文が施文されていた。97も突起のある波状口縁で、磨消による帯縄文が施文されている。98は沈線で区画された帯縄文が横位に重層する口縁である。96～98は安行1式である。99は網代圧痕のある底部である。

100・101は斜位に交差させた沈線文が施されている。102・103は斜位の沈線文が施されている。104・105の口縁端には刺突文が回らされ、その下に斜位に沈線が施されている。106は口縁端に刺突文と沈線を回らせ、その下に斜位に沈線が施されている。107は斜位に平行沈線を施した後、口縁に刺突による押し引き文と沈線を回らせ、口縁下部に平行する2本の沈線の間には刺突による押し引き文を施文している。108～109、111～112の口縁には列点文と沈線が回り、その下に斜位の平行沈線が施文されている。110の口縁には、横位の2本の沈線の間には列点文が施され、その下に斜位の平行沈線が施文されている。100～110は安行式の粗製土器である。

#### 第V群土器 (113～123) (第6-17図、図版6-12)

晩期の土器である。113は突起のある波状口縁で、退化した獣面突起であろう。114の口縁には縄文と沈線による渦巻文が見られる。113～114は安行3a式である。115・116には弧状の太い沈線文が施されていて、安行3b式であろう。

117は浅鉢の胴部から底部にかけての破片で、底径が6.7cmである。胴部に平行沈線文と縄文が施文されている。大洞a式である。118には平行沈線で区画した中を列点文や細かい縄文で充填している。120の口縁には刻み目のある隆帯がつけられている。121の口縁の隆帯にも刻み目があり、胴部には横位の沈線文に太い沈線が弧状に施されていた。122の口縁の隆帯には半截竹管による連続刺突文が施され、胴部には横位に平行沈線文が施文されている。123は斜位の沈線文を地文とし、半截竹管による連続刺突文の施された隆帯が貼付されていた。

第6-3表 大グリッド別縄文土器の出土点数と概要

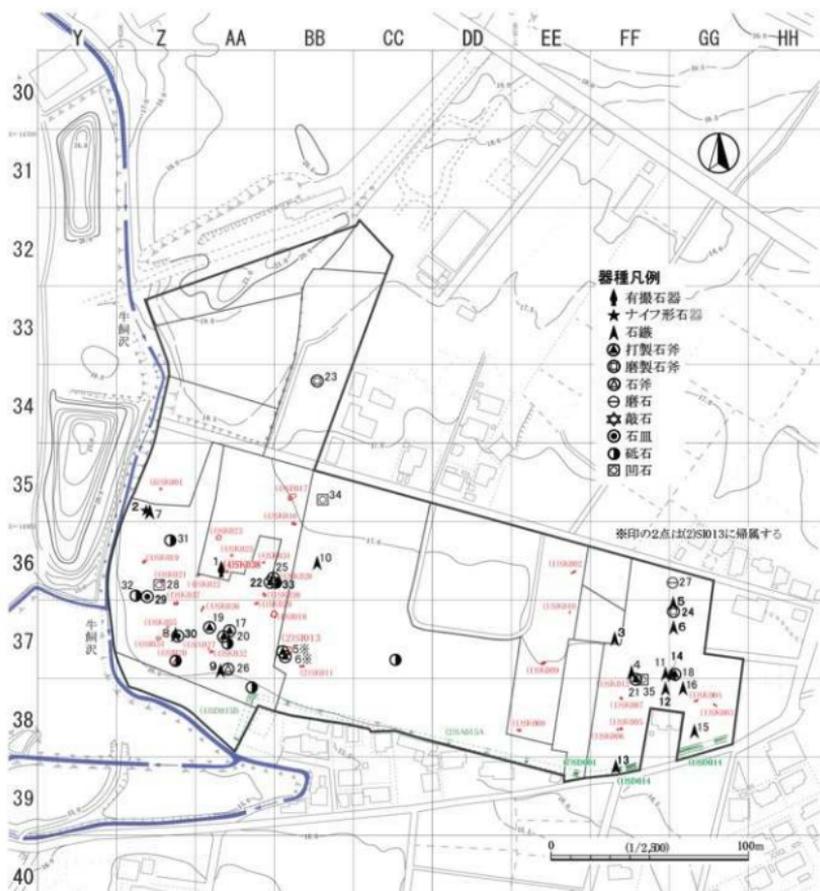
西側				東側				
グリッド	点数	内容	グリッド	点数	内容	グリッド	点数	内容
35Z	85	前期を主体						
36Z	283	前期を主体に、後期を少量含む	36AA	92	前期と後期が半々			
37Z	111	前期を主体	37AA	323	後期を主体	37EE	32	中期と後期
			38AA	363	後期を主体に、前期を少量含む	38EE	78	中期から後期を主体
						39EE	2	39FF
								50
								3

第6-4表 縄文土器

種別番号	時期	器種	型式	遺構番号	遺物番号	調査区	備考
1	縄文前期	器皿	高	グリッド	36B8-70-3	(4)	
2	縄文前期	平盤	グリッド	37AA-52-5	(4)		無文、擦痕
3	縄文前期	グリッド	36AA敷	(4)			産部
4	縄文前期	田戸上層	グリッド	36Z-68-1	(4)		16, 22同一個体?
5	縄文前期	田戸上層	グリッド	36Z-66-1	(4)		16, 22同一個体?
6	縄文前期	陶ヶ島台	グリッド	36Z-66-1	(4)		
7	縄文前期	陶ヶ島台	グリッド	36Z-46-1	(4)		
8	縄文前期	高	グリッド	36Z-28-1	(4)		
9	縄文前期	高	グリッド	36Z-28-1	(4)		産部
10	縄文前期	高	グリッド	35Z-98-1	(4)		
11	縄文前期	高	トレンチ	9833T-1	(2)		縦線土器、新装土
12	縄文前期	高	グリッド	36Z-04-1	(4)		
13	縄文前期	罎罐a	グリッド	36Z-48-1	(4)		
14	縄文前期	罎罐b	トレンチ	31Z-2	(4)		
15	縄文前期	罎罐b	グリッド	36Z-08-1	(4)		
16	縄文前期	罎罐b	グリッド	37AA敷一層	(4)		
17	縄文前期	罎罐b	グリッド	37AA敷一層	(4)		
18	縄文前期	罎罐b	グリッド	37Z-33-3	(4)		
19	縄文前期	罎罐b	グリッド	36Z-66-1	(4)		19, 23同一個体?、裏面イシレンの痕部分
20	縄文前期	罎罐b	グリッド	36AA-22-1, 36AA-10-2	(4)		
21	縄文前期	罎罐b	グリッド	36Z-66-1	(4)		
22	縄文前期	罎罐b	グリッド	36Z-28-1	(4)		19, 23同一個体?
23	縄文前期	罎罐b	グリッド	36Z-28-1	(4)		
24	縄文前期	罎罐b	グリッド	35Z-87-1	(4)		
25	縄文前期	北白川下層	グリッド	36AA敷	(4)		西白系?
26	縄文前期	罎罐b	グリッド	35Z-98-1	(4)		産部
27	縄文前期	高	トレンチ	38F-11一層	(1)		産部
28	縄文前期	高	トレンチ	31Z-2	(4)		産部
29	縄文前期	浮島II	グリッド	36Z-46-1	(4)		8, 9, 11同一個体
30	縄文前期	浮島II	グリッド	36Z-46-1	(4)		8, 9, 11同一個体
31	縄文前期	浮島II	グリッド	36Z-46-1	(4)		8, 9, 11同一個体
32	縄文前期	浮島II	グリッド	36Z-66-1	(4)		
33	縄文前期	浮島	グリッド	36Z-46-1	(4)		
34	縄文前期	浮島	グリッド	36Z-66-1	(4)		
35	縄文前期	浮島	グリッド	36Z-46-1	(4)		
36	縄文前期	浮島	グリッド	36Z-46-1	(4)		縦線土器
37	縄文前期	浮島山	グリッド	37AA-83-4	(4)		縦線土器
38	縄文前期	浮島	トレンチ	9820T-1	(2)		
39	縄文前期	興津	グリッド	37AA-84-4	(4)		
40	縄文前期	興津	グリッド	37AA-94-1, 2	(4)		
41	縄文前期	グリッド	36Z-44-1	(4)			煎餅結束
42	縄文前期	トレンチ	9820T-1	(2)			
43	縄文前期	グリッド	37AA-42-3	(4)			
44	縄文中期	阿玉台	4(SD0)158	015B-1	(4)		
45	縄文中期	阿玉台	グリッド	38AA-18-1	(4)		
46	縄文中期	深鉢	4(SD0)158	015B-1	(4)		3, 4同一個体
47	縄文中期	深鉢	4(SD0)158	015B-1	(4)		3, 4同一個体
48	縄文中期	不羽	グリッド	37AA-84-3	(4)		時代不明不羽
49	縄文中期	加加利EV	グリッド	38G0-00一層, 38G0-01一層	(1)		
50	縄文中期	加加利EV	グリッド	38G0-93一層	(1)		
51	縄文中期	グリッド	37FF-97-3	(4)			
52	縄文中期	グリッド	35B8-99-1	(4)			
53	縄文中期	グリッド	37Z-09-1	(4)			
54	縄文中期	トレンチ	31Z-2	(4)			輪状把手
55	縄文中期	加加利EV	トレンチ	38FT-06-19	(1)		丸状把手
				31Z-2	(4)		丸状把手
				015B-1	(4)		
				38AA-06-2, 38AA-06-5	(4)		産部
56	縄文中期	深鉢	4(SD0)158	015B-1	(4)		口縁突
57	縄文中期	加加利EV	グリッド	38EE-29-2, 38EE-56-2	(7)		
58	縄文中期	グリッド	36AA敷	(4)			産部
				015B-1	(4)		
59	縄文後期	深鉢	4(SD0)158	37AA-87-1	(4)		口縁
				38AA-16-6	(4)		
60	縄文後期	熱名寺	グリッド	37AA-57-11	(4)		
61	縄文後期	熱名寺	グリッド	37AA-43-2	(4)		
62	縄文後期	熱名寺	トレンチ	9837T-1	(2)		
63	縄文後期	熱名寺	グリッド	37AA-93-4	(4)		
64	縄文後期	熱名寺	グリッド	37AA-46-1	(4)		
65	縄文後期	熱名寺	グリッド	38G0-00一層, 38G0-01一層	(1)		
66	縄文後期	熱名寺	グリッド	38G0-10一層	(1)		
67	縄文後期	熱名寺	グリッド	37AA-56-1	(4)		
68	縄文後期	熱名寺	トレンチ	9837T-1	(2)		
69	縄文後期	熱名寺	グリッド	4(SD0)158	015B-1	(4)	
				38AA-06-13	(4)		3, 4同一個体
				015B-1	(4)		
70	縄文後期	熱名寺	グリッド	38AA-06-12, 38AA-16-6, 38AA-26-1, 015B-1	(4)		3, 4同一個体
71	縄文後期	深鉢	熱名寺	4(SD0)158	015B-1	(4)	
72	縄文後期	熱名寺	トレンチ	9837T-1	(2)		
73	縄文後期	深鉢	熱名寺	グリッド	38AA-17-5	(4)	
74	縄文後期	熱名寺	グリッド	37Z-26-14	(4)		
75	縄文後期	熱名寺	グリッド	37Z-26-14	(4)		
76	縄文後期	熱名寺	グリッド	38AA-18-1	(4)		
77	縄文後期	熱名寺	グリッド	37AA敷一層	(4)		
78	縄文後期	熱名寺	トレンチ	38Z-44-1	(4)		
79	縄文後期	熱名寺	グリッド	38AA-18-1	(4)		
80	縄文後期	熱名寺	グリッド	38AA-18-1	(4)		
81	縄文後期	熱名寺	グリッド	38AA-18-1	(4)		
82	縄文後期	熱名寺	グリッド	37AA-83-4	(4)		
83	縄文後期	熱名寺	堀之内	4(SD0)158	015B-1	(4)	
84	縄文後期	熱名寺	堀之内	4(SD0)158	015B-1	(4)	
85	縄文後期	熱名寺	堀之内	グリッド	37AA-53-1	(4)	
86	縄文後期	熱名寺	堀之内	グリッド	38AA-17-8	(4)	
87	縄文後期	熱名寺	堀之内	グリッド	37AA-83-2	(4)	
88	縄文後期	熱名寺	堀之内	グリッド	37AA-92-12	(4)	
89	縄文後期	加加利EV	グリッド	38B8-31-2	(4)		
90	縄文後期	加加利EV	グリッド	38FF-08一層	(1)		
91	縄文後期	加加利EV	グリッド	37Z-26-14	(4)		
92	縄文後期	曹笠	1(SD0)14	015B-1	(1)		
93	縄文後期	曹笠	グリッド	38AA-59-1	(4)		
94	縄文後期	曹笠	グリッド	38B8-64-3	(4)		
95	縄文後期	曹笠	堀之内	トレンチ	31Z-2	(4)	
96	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	37AA-07一層	(4)	
97	縄文後期	曹笠	深鉢	1(SD0)14	015B-1	(1)	
98	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	38AA-22-1	(4)	
99	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	38AA-69-17	(4)	産部、網代
100	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	37FF-84一層	(1)	
101	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	38FF-06一層	(1)	
102	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	37G0-94一層	(1)	
103	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	38G0-30一層	(1)	
104	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	38AA-69-17	(4)	
105	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	38AA-69-17	(4)	
106	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	38G0-05一層	(1)	
107	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	38G0-92一層	(1)	
108	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	37G0-41一層	(1)	
109	縄文後期	曹笠	安行	トレンチ	77-1	(1)	
110	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	38AA-77-3	(4)	
111	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	38EE-19-6	(7)	
112	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	38AA敷	(4)	
113	縄文後期	曹笠	安行	3(SD0)14	015B-1	(1)	口縁突
114	縄文後期	曹笠	安行	トレンチ	9844T-1	(2)	
115	縄文後期	曹笠	安行	グリッド	37AA-69-1	(4)	
116	縄文後期	曹笠	安行	トレンチ	9832T-1	(2)	
117	縄文後期	曹笠	大淵	グリッド	933-2	(4)	産部、033の遺構(裏面)出土地点
118	縄文後期	曹笠	グリッド	38AA-16-6, 015B-1	(4)		
119	縄文後期	曹笠	グリッド	37Z-97-1	(4)		
120	縄文後期	曹笠	トレンチ	9837T-1	(2)		
121	縄文後期	曹笠	グリッド	37FF-39一層	(1)		
122	縄文後期	曹笠	グリッド	38G0-59一層	(1)		
123	縄文後期	曹笠	グリッド	38G0-93一層	(1)		

## 7. グリッド出土の石器 (第6-18~23図、第6-5表、図版6-13・14)

上層の調査中に出土した石器について記載する。遺構中または遺構に伴う遺物と判断した石器についてはそれぞれの遺構の項で報告した。本項では35点を抜粋し、実測している。縄文時代に帰属するものが大多数だが、2は旧石器時代、31・32は弥生時代以降の所産である可能性が高い。遺跡西側では石斧などの加工具、東側には石鏃が多く出土する傾向がある。石器の属性は第6-5表に示した。有掘石器・ナイフ形石器・石鏃などの剥片を素材とした石器は2/3、石斧・磨石・石皿・砥石・凹石などの比較的大型のものは1/2で図化した。また、部分的にスクリーントーンを用いた。



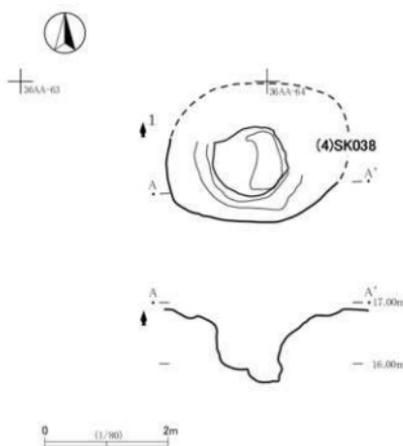
第6-18図 石器分布状況

1は尖頭器、石匙、有撮石器、押出型ポイントなど、様々に呼称される石器である。本報告では、2007年(平成19年)に刊行された『押出遺跡』<sup>1)</sup>に倣い、つまみ部を下に、尖頭部を上方に据えて図化し、その形状からつまみの付いた石器=有撮石器<sup>2-3)</sup>として報告する。

石器の大きさは、最大長156.9mm、最大幅37.8mm、最大厚14.6mm、重さ79.40gであり、最大幅を上方に持つ。石材は褐色で光沢があり、一部黒褐色を呈する硬質頁岩である。つまみ部の凹みは、推定される側縁から3.0mm～3.4mmほど抉入しており、弧状に細かく整形される。線対称の整美な形状であるが、中央部の断面形は歪んだ菱形となっており、器体中心部にある素材面の高まりを除去しきれてはいない。側縁部の加工は押圧剥離が多用されているが、縁辺には細かな加工が施され、尖頭部ではさらに微細な調整が加えられている。特に、右側縁上方1/2ほどでは器面を削ぐような連続した剥離作業が行われ、その裏側からは細かな作業によって縁辺が調整され、原型を損なわぬよう器形が整えられている。また、つまみ部と先端部はわずかに黒みを帯びている。

正面の器体中央部右方に直径2.7mm～2.9mm程の穴がみられ、有孔虫の隔壁跡が残っている。この有孔虫は海底に生息する「底生有孔虫」と推定され、海底の泥質堆積物に混入し化石となったものであろう<sup>4)</sup>。

石器は単独で、遺物包含層の外縁部から出土した。しかし、出土地点付近には上半部が欠落した(4)SK038遺構が検出されており、この遺構との関連が指摘される。遺存する遺構上端の最大径は約2.50m、底面は1.25m×1.15mの円形、出土遺物はなく時期や性格は不明とされるが、この土坑に伴う遺物であれば、「墓と副葬品」の関係にあったと推定できる。なお、(4)SK038が所属する36AAグリッドには、前期と後期を中心に多数の土器片が出土しており、時期の特定はできない。だが、押出遺跡が縄文時代前期後葉に営まれていたこと、関東地方の出土例などを鑑みると、大久保遺跡の有撮石器も同時期の所産<sup>5-6)</sup>であると考えられる。



第6-19図 有撮石器出土状況

2はナイフ形石器である。青灰色で鈍い光沢があり、網目状の構造がみられないチャート製である。器厚1.0mmほどの薄い部分では光を透過する。横長剥片の器軸を横位とし、打点対縁を刃部としている。刃部縁辺には微細な剥離痕がみられる。攪乱土中から出土したため層位は不明であるが、隣接する流山市市野谷入台遺跡、市野谷二反田遺跡のV層～IV層から出土したチャートと極めて近似する。石器石材、形態から類推すると旧石器時代の所産である可能性が高い。

3～16は石鏃である。14点中、完形品は7・10・11・16のわずか4点であり、そのほかの石鏃には欠損部位がみられる。縄文時代草創期から後期にかけて出土したものであるが、帰属時期を特定することが困

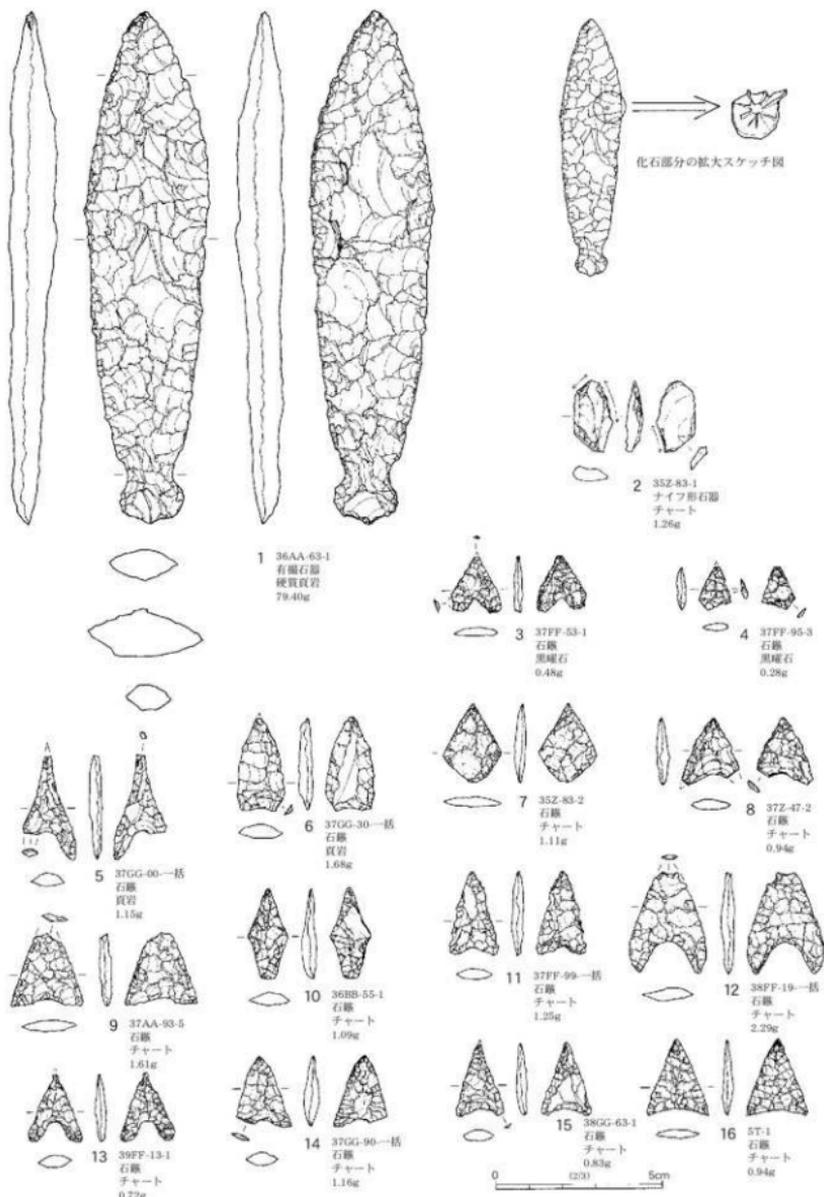
難なため、便宜的に石材ごとに記載する。

3・4の石鎌は黒曜石製である。3はわずかに青みがかった黒色不透明で、光沢があり、直径1.5mmほどの夾雑物がみられるが良質な素材である。両側縁と内側の脚部は直線のだが、脚端部には丸みがある。先端と左脚部がわずかに欠ける。4は黒色不透明で直径1.2mmの夾雑物を含む。端部はすべて欠損している。右側縁は脚部の折れに伴って下方からめくられるように剥離されているが、左側縁の稜は細かな潰れ痕によって直線状となっている。グラインディングによる調整が施されたものと思われる。

5・6の石鎌は頁岩を素材とする。5は濃い灰色で光沢のない頁岩で作られている。機能部、脚部とも一般的な石鎌に比して細長く、鉄塔のような形状である。先端部の欠けは刺突による衝撃剥離とは違い、側方から生じたものであることから、錐として機能していた可能性も否めない。左脚部は欠損している。表土一括資料で出土位置の詳細は不明である。6は黄褐色を帯びた灰白色で、光沢はないが堅緻な頁岩製の平基鎌である。先端と右脚部が欠損する。

7～16の石鎌はチャートを素材とする。7は基部が半円弧を描く円基鎌である。石材は半透明な部分と光を全く透過しない部分があり、黒色の網目状構造がみられる濃灰色のチャートである。先端部分の角度は60°で、上部3/5は直線のだが下部は丸みをもっており、全体の形状は下膨れの五角形、厚みは3.4mmで薄い板状を呈する。類例は柏市溜井台遺跡<sup>7)</sup>、印西市南西ヶ作遺跡<sup>8)</sup>などにある。なお帰属年代については、攪乱された土中から出土しており、遺構・遺物などを手がかりにすることはできないが、橋本勝雄氏が2008年に提示した石鎌の系譜についての記載によれば<sup>9)</sup>、縄文時代草創期前半のごく短い期間、関東にのみ確認できる形態であるとされる。

8は緑灰色で滑らかな質感を持ち、不透明である。両脚部は欠損している。正面先端には衝撃剥離痕がみられるが、左・右・上部から修復され、先端が作り出されている。9はわずかに緑色を帯びた濃灰色で不透明である。両側縁は直線状で基部の挟りは弱い、中央付近では端部よりも深く凹んでいる。先端部は欠損している。10はわずかに褐色を帯びた灰白色で、光沢がある。器厚の薄い部分では半透明で、光を透過する。外形はやや背勢であるがシャープな直線が五角形を成している。背稜の高まりは早い段階で除去されている。11は緑色を帯びた灰色で、不透明である。長辺と短辺が2対1の割合で、整った形状の二等辺三角形であるが両側縁は鋸歯縁状で凹凸がある。正・裏面とも器面の中ほどは平坦で、稜はほとんど感じられない。12は網目状構造をもたない小豆色のチャートである。先端は衝撃剥離痕によって欠損する。両側縁の脚部は、外縁部では内側に、内縁部では外側に向かって成形され、先が尖る。全体的には丸みを持った平面形状となっている。13の石材は青灰色で不透明であり、11よりも光沢・黒みが強い。先端部には尖端作出の意図がうかがわれるが、最端部がわずかに欠けている。脚部の挟りは急角度に加工されており、細い棒状の工具で押し引きしたような空間ができている。脚部自体は丸みを持った棒状である。14には微かに褐色を帯びる部分はあるが、灰白色～青灰色で半透明である。両側縁は概ね直線状で先端は閉じ気味、脚部末端は開き気味である。頂点が側縁の延長上ではなく、低い位置にあり、細かく丁寧な調整が施されていることから、欠けた先端部が補修・再生された可能性がある。基部の挟りは浅く、左脚部は欠損している。15は濃灰色で不透明だが、器厚の薄い縁辺では曇りガラスのように半透明である。両側縁は直線状で基部の挟りは浅い。裏面には素材時の剥離面が広く残る。先端部・右脚部はわずかに欠ける。16は灰白色で、器厚の薄い部分では光を透過する。両側縁は直線状で細かな刃こぼれがみられる。グラインディングによる整形痕か。先端部は整形後に入念に調整されている。



第6-20図 グリッド出土石器(1)

17～26は石斧である。搬入時の形態に近いと思われるものは19・21・26のみで、17・18・20・22・23は器体の2/5以上が欠損し、遺存していない。27は用途の変更がみられる。

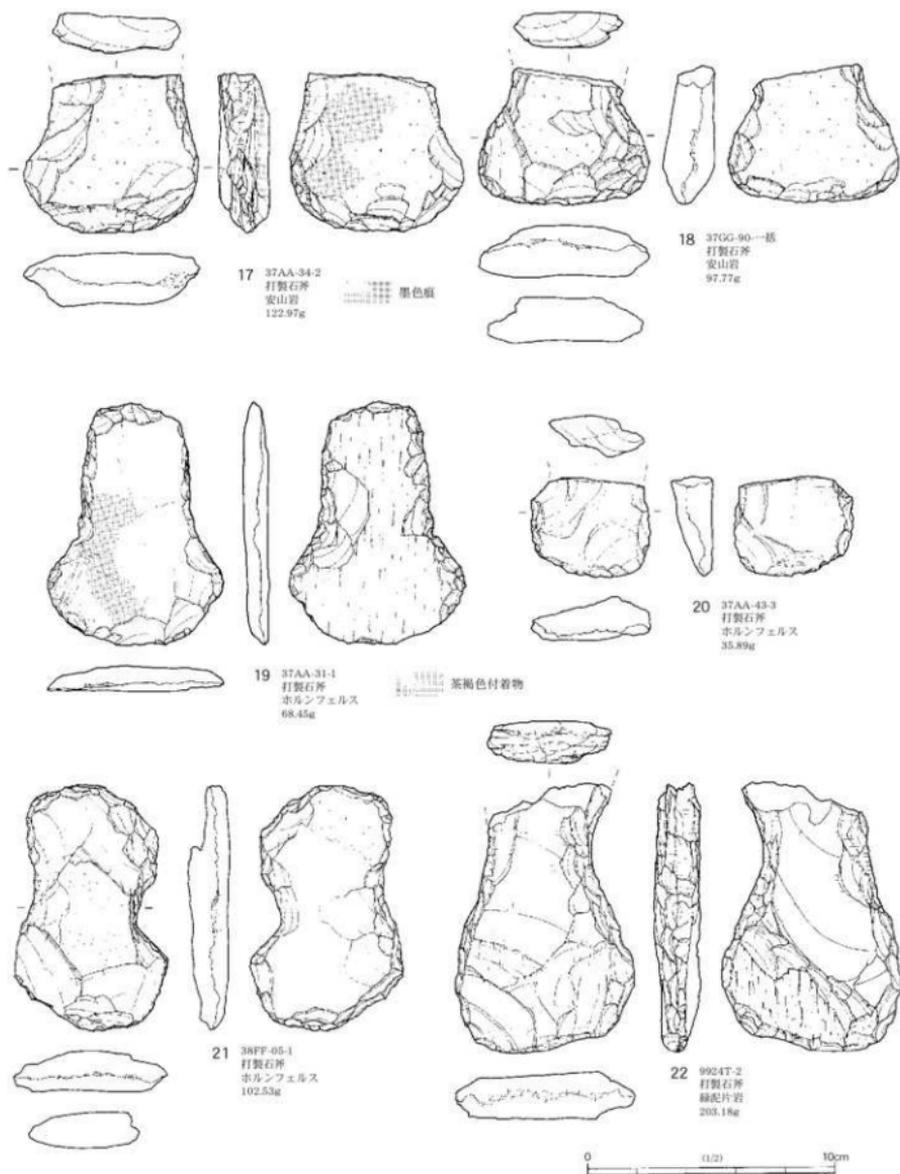
17～22は分銅形打製石斧である。当遺跡での帰属時期は明確ではないが、関東地方では縄文時代後期の遺跡から多出する。17は欠損品である。石基は灰色、斑目は濃灰色～黒色で、直径0.1mm～3.0mmほどと、大きさにばらつきがある安山岩製である。正面平坦部はわずかながら赤みを帯びるが、裏面の凹んだ部分には煤のような黒色痕が残っている。左側縁のくびれた部分は擦れて平坦面となっており、刃部は度重なる補修が行われたことを示す段差が残る。18は欠損品である。全体的に赤みを帯びているが、剥離面の一部及び裏面は灰褐色の安山岩である。器表面の変色痕が剥離面では薄いことから、被熱後に加工されたものと推測され、度重なる修復作業の痕跡をみることができる。17・20同様、くびれ部分で上下に分断されている。刃部は直線状となっているが、潰れあるいは摩耗など、使用により初期の形状が変化した可能性がある。左縁部のくびれ部分は擦れて丸みを持つ。19は、上半部が四角形、下半部は横長の楕円形であり、正・裏面とも平らで、薄い板状である。特に裏面はカンナをかけたように平坦で正面とは色調差があり、使用途中で頁状に剥落を起こしたものと推測される。裏面は剥落後もさらに加工され、縁辺が成形されている。刃部にはわずかな折れが認められるものの、鋭さを十分に残した形状を保っており、当遺跡で出土した多くの打製石斧とは様相を異にする。石材はホルンフェルスであり、黄土色に風化している。縄文時代中期後葉の千葉市加曾利北貝塚出土の打製石斧に形状が近似する。茶褐色の付着物が認められる部分はスクリーントーンで示した。20は欠損品である。風化面は粉をふいたような褐色だが、稜上は濃い灰色のホルンフェルスが素材であり、節理面と風化面の区別が困難である。刃部は緩やかな弧状に成形されているが、剥離痕は磨滅し、打点も残されていない。17同様、中央部で上下に折れている。21の石材は灰色で、青みがかった濃灰色の筋をもつホルンフェルスである。頁状に剥がれやすい性質であり、使用前の素材面は裏面上部のみ残存する。剥がれた後も周縁から加工され、使用と修復が繰り返されている。器体中央のくびれた部分は赤褐色を帯びており、外縁部よりも厚みがある。このことは中央部に存在した何らかの緩衝剤＝紐や縄などによって保護され、剥落などの欠損を免れたものと推測される。

22は9924トレンチから出土した。青緑色で細かな銀色の粒子が入り、めくれるように剥離する性質の緑色片岩製である。括れた部分から上方で生じた折れにより、2/3ほどが残存している。刃部の一部はすり減って面状を呈しており、全体的に良く使いこまれて摩耗している。また、裏面は機能部からの衝撃で剥落し、最大幅の約半分、9.8mmに減じられている。くびれ部分には光沢がみられる。出土地点は(4)SK028炉跡付近であるが、炉跡に伴う遺物であるかどうかは不明である。

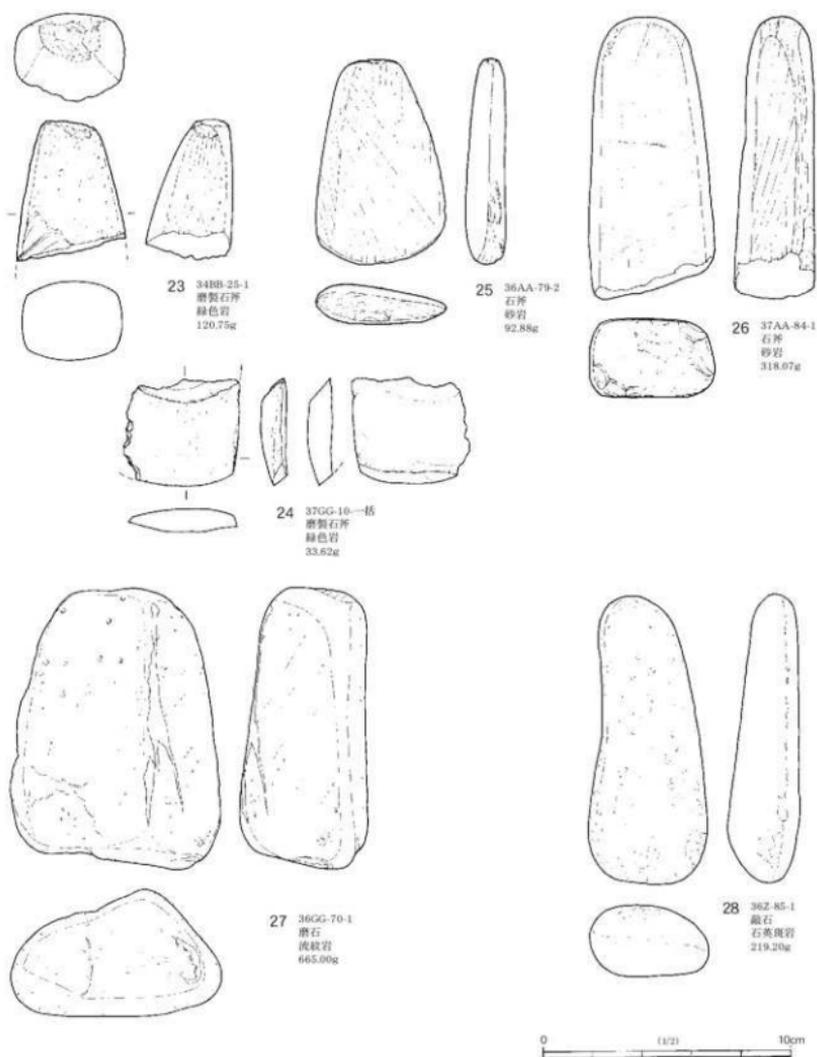
23・24は定角式の磨製石斧である。23は欠損品であり、上部のみが残存する。器体は灰色で、端部の磨り・敲打による剥落の一部は青灰色である。磁性のごく微弱な緑色岩製である。右側面にのみ光沢が残る。24は青みを含んだ緑灰色で、緑黒色の点状斑が万遍なく入る緑色岩製である。左・上方は遺存しない。刃部であるが、正面はなだらかな丸みを持ち、裏面は磨りによって平坦に仕上げられており、72°の刃先角を成す。縦断面を示した。また正面側の刃先には帯状の擦痕がみられ、素材面の光沢が失われている。定角式の磨製石斧として報告するが、弥生時代に出現する偏平片刃石斧である可能性がある。

25は偏平な砂岩の自然礫を利用した石斧である。上端部と下縁辺に磨り痕がみられ、下部に最大幅を持つ。右側縁には正・裏面に施された磨りにより鋭い稜が作出されているが、使用痕跡は確認できなかった。

26は砂岩製で、破損した石斧を別の用途で利用した痕跡がある石器である。下半部は斜めに折れている



第6-21図 グリッド出土石器(2)



第6-22図 グリッド出土石器(3)

が、角部が削られ、磨られたことで平坦な面が形成されている。正面を除く三面は赤茶色に変色し、光沢がみられる。敲打具としての機能を欠いた後、磨石に転用されたものと推測される。

27は流紋岩製の磨石である。明るい黄褐色で、直径0.1mm～2.0mmほどの斑晶痕がみられるが斑晶はなく、擦れて剥落したものと推測する。正面稜上は青みを帯びた灰色であることから、表面と内側とでは色調にかなりの隔りがあるものと思われる。上・下・左・右・裏面とも、平滑な面には線状の擦痕がみられる。

28は石英斑岩製の敲打石である。石基は薄い緑灰色だが、赤茶色・青灰色・薄いベージュなど、さまざまな色の斑晶がみられる。下端部には弱い敲打痕・擦痕が残る。

29・30ともに、推定される石皿完形品の1/10程である。29は磁性の強い多孔質安山岩製である。所々黒色に変色しており、破碎後に被熱したものとみられる。黒色部分をスクリーントーンで示した。30は被熱により赤色を帯びた安山岩であり、全体的に砂質化し、脆い。

31～33は砥石である。31は凝灰岩製である。下端部は濃灰色～黒色、そのほかは赤みがかった褐色である。熱による変色痕であろう。柱状の砥石の端部と推測される。32は粒子の細かい凝灰岩製で、板状の砥石片である。正・裏面、上面は鏡のように平らで、多方向の擦り痕が観察され、金属用の砥石と推測される。31・32の帰属時期は不明であるが、弥生時代以降の遺物であろう。33は緑灰色を基調とし、薄いベージュ色の粒子が万遍なく入る緑泥片岩製の砥石である。上・下端部は弱い敲打痕によってざらつく感があるが、そのほかの面は平滑であり、面の中ほどがわずかに凹む。一部には摩耗による光沢がみられる。

34・35は安山岩製の凹石である。34は正・裏面中央部は各々5mm程度の凹みがある。35は正・裏面にのみ、元の形状が残っており、第6-5表に記載した最大厚の45.6mm以外は残存値を示す。平滑に整えられた平坦面の中央部にざらついた凹みがあり、そこから欠けが生じている。対象物を加工する作業の際に生じた割れと推測される。

注1 佐藤鎮雄 2007『押出遺跡』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館編集

2 吹野富美夫 1995『梨ノ子木久保遺跡出土石器の再検討』『みちのく発掘—菅原文也先生還暦記念論集—』pp.121～127 菅原文也先生還暦記念論集刊行会

3 大野憲ほか 1988『上ノ山Ⅱ遺跡』『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第166集 秋田県教育委員会

4 座間時夫 1970『日本化石図譜』図版7-14

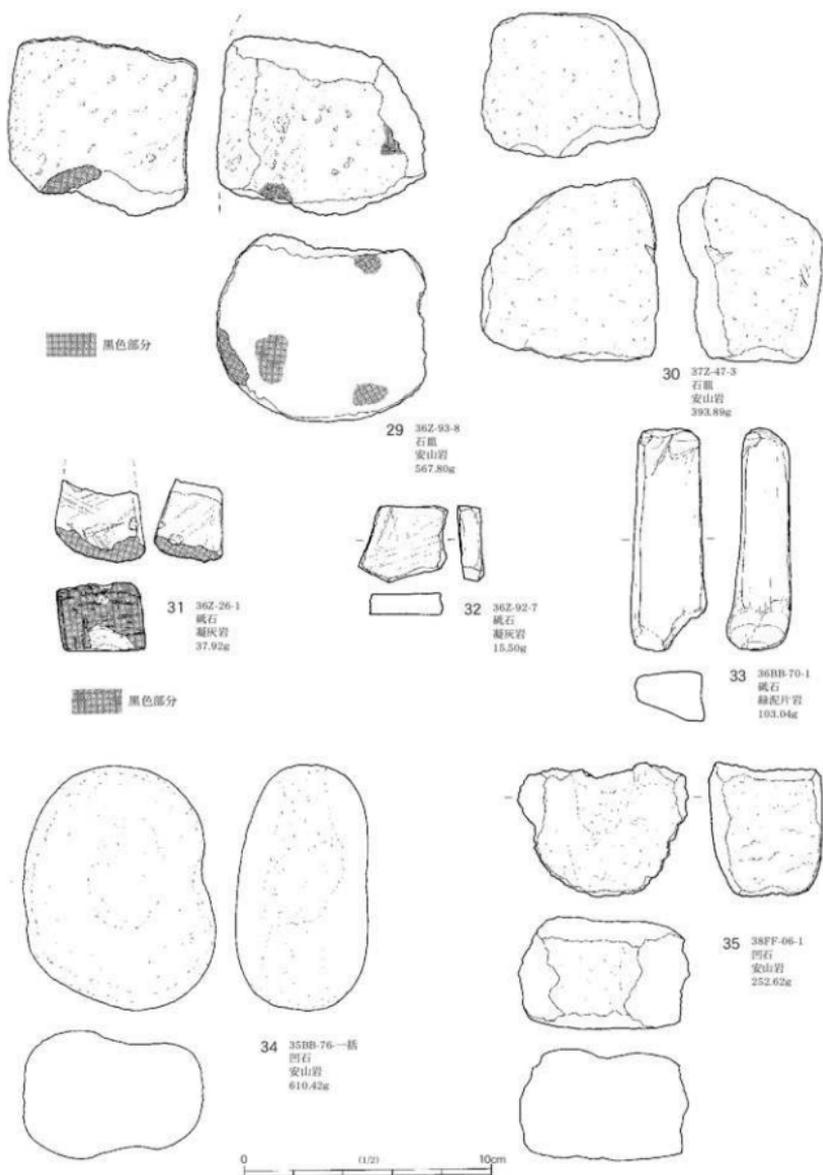
5 岡村道雄 1993『埋葬にかかわる遺物の出土状態からみた縄文時代の墓葬礼』『論苑考古学—坪井清さんの古希を祝う会—』

6 大工原 豊 2012『威信財としての縄文石器—東北地方の縄文石器—』『考古学』第119号 pp.19～24

7 山岡磨由子 2007『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書1—柏市溜井台遺跡—』(財)千葉県教育振興財団

8 香取正彦 2008『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XX—印西市南西ヶ作遺跡・本笠村武込遺跡—』(財)千葉県教育振興財団

9 橋本勝雄 2008『縄文時代草創期の局部磨製石器について—関東の資料を中心として—』『芹沢長介先生追悼 考古・民俗・歴史学論叢』芹沢長介先生追悼論文集刊行会



第6-23図 グリッド出土石器(4)

第6-5表 出土石器属性表

※ 計測値は現在値を表す

## 遺構に伴う石器

採回番号	遺構種別	遺構	遺物番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	出土レベル (m)	備考
(2)S1013-5	37BB-61	(2)S1013	15	打製石斧	粘板岩	91.3	50.0	11.0	49.76	16.520	床面端、溝際出土
(2)S1013-6	37BB-71	(2)S1013	2	打製石斧	チャート	64.8	64.5	21.9	105.13	16.355	S1013の埋葦2に付随する石器

## グリッド出土石器

採回番号	遺構種別	遺構	遺物番号	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	出土レベル (m)	備考
1	36AA-63		1	有縁石器	硬質頁岩	156.9	37.8	14.6	79.40	16.748	押出型石匙 SK038至近
2	35Z-83		1	ナイフ形石器	チャート	21.8	11.9	5.1	1.26	15.415	攪乱中より出土
3	37FF-53		1	石鏃	黒曜石	17.2	15.1	2.4	0.48	-	
4	37FF-95		3	石鏃	黒曜石	12.9	10.0	2.6	0.28	16.071	
5	37GG-00		一括	石鏃	頁岩	32.2	15.9	4.1	1.15	-	
6	37GG-30		一括	石鏃	頁岩	28.6	14.6	4.1	1.68	-	平基
7	35Z-83		2	石鏃	チャート	24.1	17.4	3.4	1.11	15.620	攪乱中より出土
8	37Z-47		2	石鏃	チャート	20.6	17.6	3.9	0.94	16.668	
9	37AA-93		5	石鏃	チャート	22.1	21.8	3.9	1.61	15.581	
10	36BB-55		1	石鏃	チャート	27.9	12.1	4.4	1.09	16.439	異形 五角鏃
11	37FF-99		一括	石鏃	チャート	26.1	14.8	3.4	1.25	-	
12	38FF-19		一括	石鏃	チャート	31.5	23.2	4.3	2.29	-	赤チャート
13	39FF-13		1	石鏃	チャート	21.1	16.3	3.2	0.72	16.020	
14	37GG-90		一括	石鏃	チャート	21.4	16.7	4.4	1.16	-	
15	38GG-63		1	石鏃	チャート	22.2	14.6	3.3	0.83	-	
16	5T		1	石鏃	チャート	23.4	19.1	3.2	0.94	-	
17	37AA-34		2	打製石斧	安山岩	64.2	70.5	20.9	122.97	16.574	
18	37GG-90		一括	打製石斧	安山岩	55.9	68.7	20.1	97.77	-	
19	37AA-31		1	打製石斧	ホルンフェルス	98.9	71.3	11.0	68.45	16.541	
20	37AA-43		3	打製石斧	ホルンフェルス	39.3	47.4	15.1	35.89	16.448	
21	38FF-05		1	打製石斧	ホルンフェルス	99.7	61.4	15.1	102.53	16.017	
22	9924T		2	打製石斧	緑泥片岩	109.7	72.3	19.0	203.18	-	
23	34BB-25		1	磨製石斧	緑色岩	54.1	43.4	33.8	120.75	-	定角式
24	37GG-10		一括	磨製石斧	緑色岩	43.4	47.3	10.4	33.62	-	偏平片刃?
25	36AA-79		2	石斧	砂岩	84.2	52.4	16.1	92.88	16.522	
26	37AA-84		1	石斧	砂岩	112.9	51.2	32.6	318.07	15.525	
27	36GG-70		1	磨石	流紋岩	112.4	86.1	51.4	665.00	16.149	
28	36Z-85		1	敲石	石英斑岩	117.8	48.2	29.1	219.20	16.507	
29	36Z-93		8	石皿	安山岩	72.8	84.6	76.9	567.80	16.057	
30	37Z-47		3	石皿	安山岩	72.5	71.2	58.6	393.89	16.568	
31	36Z-26		1	砥石	凝灰岩	32.4	36.8	27.6	37.92	16.362	
32	36Z-92		7	砥石	凝灰岩	31.1	36.1	9.2	15.50	15.304	
33	36BB-70		1	砥石	緑泥片岩	91.1	32.8	25.4	103.04	16.520	
34	35BB-76		一括	凹石	安山岩	100.5	77.7	53.1	610.42	-	
35	38FF-06		1	凹石	安山岩	54.5	69.6	45.6	252.62	15.970	



立ち上がる。色調が明瞭に2色にわかれ、外面上半部分が暗灰色、下半部分が灰色で、内面口縁部分が暗灰色、底面部分が灰色だった。底部とその周縁が手持ちヘラケズリで調整されている。3は1とほぼ同形の須恵器杯で、50%遺存する。1と色調が異なり、灰黄色をしている。胎土に細かい雲母片を含む。底面は回転ヘラケズリ、その周縁は手持ちヘラケズリで調整されている。

4は土師器杯で、35%遺存する。体部からわずかに湾曲しながら口縁が立ち上がる。色調が内外面ともに橙色であった。内面口縁部分は横位の細かいミガキで調整されている。底面は回転ヘラケズリだった。5は土師器杯で、13%遺存する。丸底の底部から内湾して口縁が立ち上がる。6は土師器の小形甕で、65%遺存する。口縁部にヨコナデ、内面にナデ、外面にヘラケズリの調整が施されている。

7は須恵器大甕の破片で、外面にタタキ、内面にナデの調整痕が見られる。

須恵器杯と土師器杯の形態、および調整方法などから、住居跡出土の土器は8世紀中葉の特徴を示している(以上、第6-6表)。

8は凝灰岩製の砥石で、上部は欠損している。正・裏・両側面の4面に使用痕がある。濃灰色で煤のようなものが全体に付着している。遺存する長さ7.1cm、幅4.5cm、厚さ4.4cmであり、重さは154.7gである。

第6-6表 奈良時代の土師器・須恵器

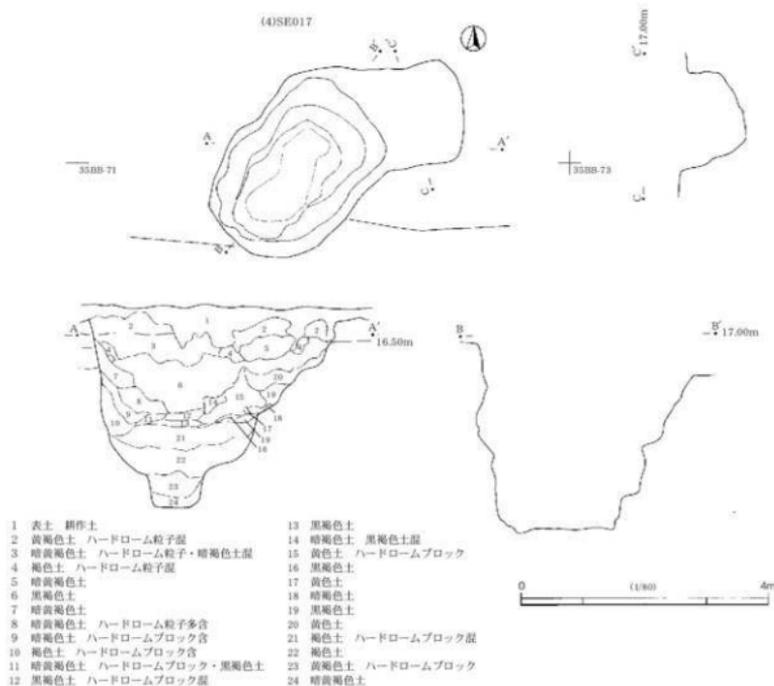
検出 番号	遺構	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存率	色調内面	色調外面	混入物	調整内面	調整外面	底部整形	回転 方向
1	(4)S020	須恵器	杯	(12.8)	7.4	4.2	30%	灰色	灰色	粗い長石粒	ロクロナデ	ロクロナデ、 手持ちヘラケズリ	ヘラ整形	
2	(4)S020	須恵器	杯	12.9	7.8	4.1	70%	暗灰色、 灰色	暗灰色、 灰色	スコリア、 長石粒	ロクロナデ	ロクロナデ、 手持ちヘラケズリ	ヘラ整形	
3	(4)S020	須恵器	杯	(12.8)	7.5	4.2	50%	灰黄色	灰黄色	細かい雲母片、 長石粒	ロクロナデ	ロクロナデ、 手持ちヘラケズリ	回転ヘラ整形	右
4	(4)S020	土師器	杯	(13.7)	8.8	5.5	35%	橙色	橙色		ロクロナデ、 ヘラミガキ	ロクロナデ	回転ヘラ整形	右
5	(4)S020	土師器	杯	(10.8)	-	(2.6)	13%	赤褐色	赤褐色	スコリア	ロクロナデ、 ヘラミガキ	ロクロナデ、 手持ちヘラケズリ	ヘラ整形	
6	(4)S020	土師器	小形 甕	(12.6)	(7.0)	11.2	65%	暗褐色	黒褐色、 明赤褐色		ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
7	(4)S020	須恵器	大甕 破片	-	-	-	-	青灰褐色	青灰褐色		ナデ	タタキ		

#### 第4節 近世

近世の遺構として井戸と野馬土手・堀が検出された。井戸からは遺物が出土せず、年代を比定するのが困難だったが、一応近世の遺構にしておく。野馬土手・堀は調査範囲南端にそって検出された。

#### (4)SE017井戸 (第6-25図、図版6-4)

調査範囲の西側、35BB-61~62、71~72グリッドに位置する。西側に南西—北東を主軸とする隅丸長方形土坑、そして東側には東西方向を主軸とする方形土坑が合体した形状である。西側の隅丸長方形土坑は長軸3.4m、短軸2.2mで、深さ3.24mで、最下層から湧水があったので、正確に底面を調査できなかった。東側の方形土坑は1辺約1.3mで、東側から西へ下に向かって傾斜している。西側土坑の壁は、東側土坑に接する東壁以外、北、西、南の壁がほぼ垂直に直線的に立ち上っていた。明らかに東側の方形土坑は、西側土坑へ降りていくための傾斜路だったと判断できる。底面で湧水しているので、調査担当者は井戸と推定した。



第6-25図 井戸

出土遺物はなかった。

調査メモによると、覆土最上層に新期テフラに酷似した土層が堆積していたと記されている。縄文時代前期に掘られた土坑の可能性がある。この土層は、宝永の火山灰（1707年の富士火山噴火）であろうか。江戸時代中期以前に掘削された井戸かもしれない。

#### (4)SD015B、(2)SA015A、(7)SD001、(1)SD014野馬土手・堀（第6-26～30図、図版6-5・6・15）

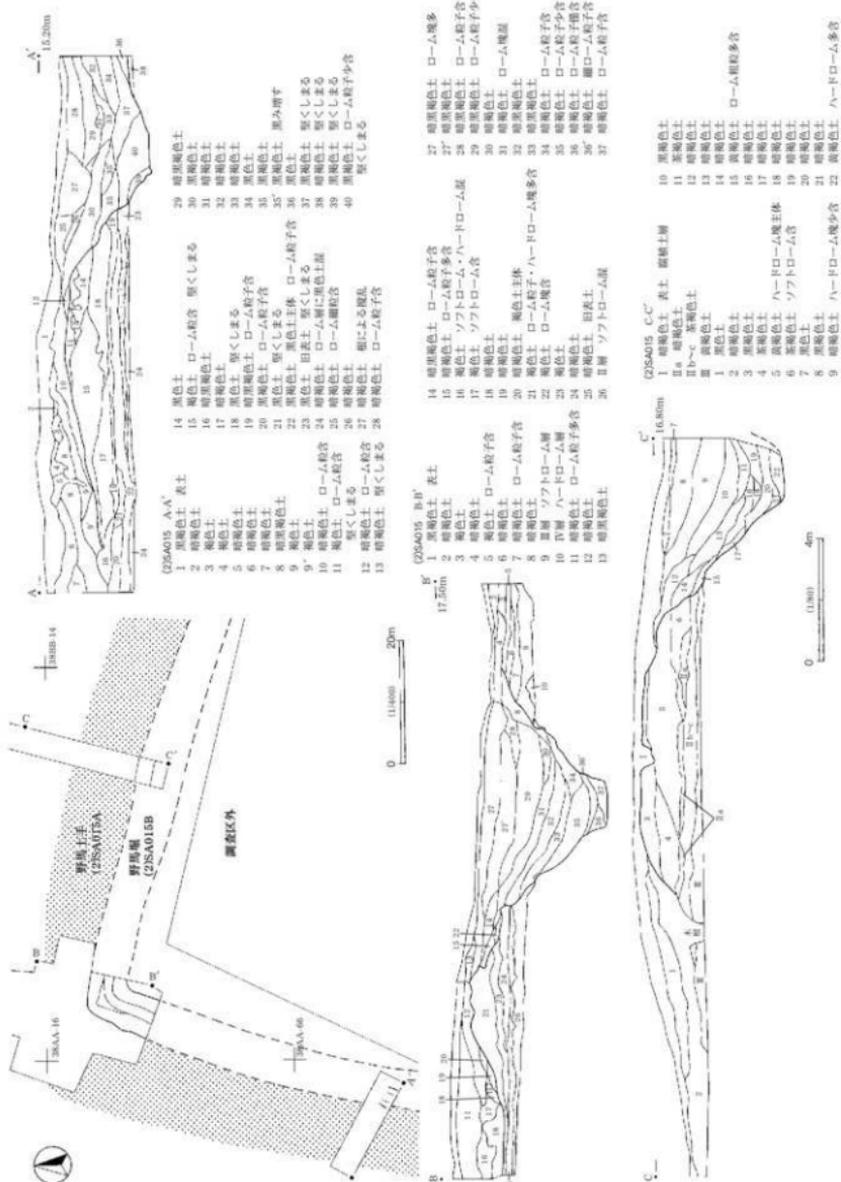
調査範囲の南端に沿って野馬土手・堀が検出され、調査範囲南端より外側には人家が並んでいた。野馬土手・堀は、調査範囲内であった荒蕪地・農地と、調査範囲外の住宅地とを区画するように延びている。つまり野馬土手・堀は、かつて土地境界線の役割も担っていたと推測される。

記録された野馬土手・堀は、基本的には同一の遺構に、各調査次にそれぞれ別個に遺構番号がつけられて調査されたものである。そこで、ここでは各調査次の記録を同一の遺構にまとめて報告することにする。

野馬土手・堀は、38AA グリッドから東へ38GG グリッドまで、ほぼ東西に延びている。細かく見ると、38AA グリッドで南北方向から東西方向にほぼ直角に向きを変え、東へ175m進んだ39EE グリッド東端付近でやや北向きに角度を変え、道に沿って東へ調査範囲の東端まで延びている。調査は、野馬土手・堀のすべてを発掘するのではなく、部分的に幅2mのトレンチを野馬土手・堀に直交して設定し、土手や堀の規模・形態を観察するという調査方法を採用した。



第6-26図 野馬堀全体図



第6-27図 野馬土手・堀(1)

まず南西端の土層断面A-A'を見てみると、東側に堀、西側に土手がある。堀は浅く、ソフトローム上面からさほど掘り込まれていない。土手は旧表土の上に幅約5.5m、高さ約1mの規模で造られ、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土が素材であった。土手の構築土にロームの混入が少ないのは、堀の掘削が浅く、ロームの排土が比較的少量だったためと思われる。

野馬土手・堀は38AA-27グリッドで、南北から東西へ向きを変えて直交する。直交する部分の堀の底面には、数段の平坦面があり、堀の底面が数回にわたって掘削された観を受ける。南北の土層断面B-B'を見ると、南側に堀、北側に土手がある。堀はソフトローム上面から約1.4mの深さまで掘り込まれていた。堀の幅は上面で約3m、底面で幅0.75mの平坦面になっている。北側の土手は、旧表土の上に幅約3.5m、高さ約0.65mの規模で造られていた。土手の構築には褐色土、暗褐色土が用いられ、ハードローム塊が含まれていた。堀の底面から土手上面まで、およそ2.3mの高低差となる。

直交部分から東へ約20mの地点に南北の土層断面C-C'がある。この部分のトレンチは調査範囲の境界に近接し、堀の南側を発掘できなかった。堀はソフトローム上面から約1.5mの深さまで掘り込まれていた。北側の土手は、幅約5m、高さ約0.3mの規模で造られていた。土手の構築には黒褐色土、茶褐色土、黄褐色土が用いられ、ハードローム・ブロックとソフトロームが含まれていた。堀の底面から土手上面まで、およそ2.4mの高低差となる。

野馬土手・堀は、38AA-27グリッドで直交してから東へ約170m直線状に伸びる。直線状の野馬土手・堀の中間部分に、土層断面D-D'と土層断面E-E'がある。土層断面D-D'は38CC-57~67グリッドに位置し、この地点でも堀の南側を発掘できなかった。堀の掘削はやや浅く、ソフトローム上面から約0.3mの深さまで掘り込まれていた。北側の土手は、幅約8m、高さ約0.8mの規模で造られていた。土手の構築には黒色土、褐色土、暗褐色土、黒褐色土、茶褐色土が用いられ、ハードロームとソフトロームが含まれていた。堀の底面から土手上面まで、およそ高さ2mの高低差となる。

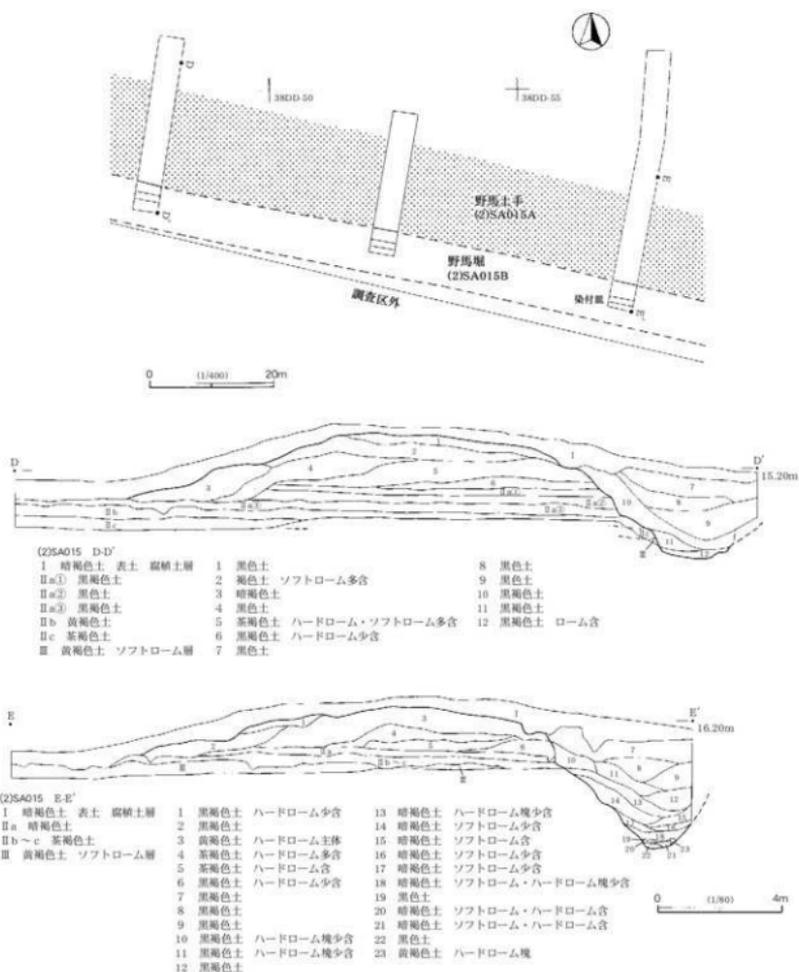
土層断面D-D'から東へ約40mの地点に土層断面E-E'がある。この地点でも堀の南側を発掘できなかった。堀はソフトローム上面から約1.4mの深さまで掘り込まれていた。底面の幅は約0.4mと狭い。北側の土手は、幅約7m、高さ約0.7mの規模で造られていた。土手の構築には黒褐色土、黄褐色土、茶褐色土、暗褐色土が用いられ、ハードロームが含まれていた。堀の底面から土手上面まで、およそ2.3mの高低差がある。堀の底面付近から染付皿が出土した。

直線状に伸びた野馬土手・堀は、39EE-19グリッド付近で調査範囲境界に接して東西に走る道路に突き当たり、角度を若干北向きに変えて東へと伸びている。この道路と接する区間では、盛り上がった馬土手は見当たらず、地中に掘られた野馬堀だけを確認できた。調査前に道路ぞいに家屋が建っていたようで、おそらく開発とともに馬土手は削平されて消滅し、野馬堀のみが残ったと思われる。

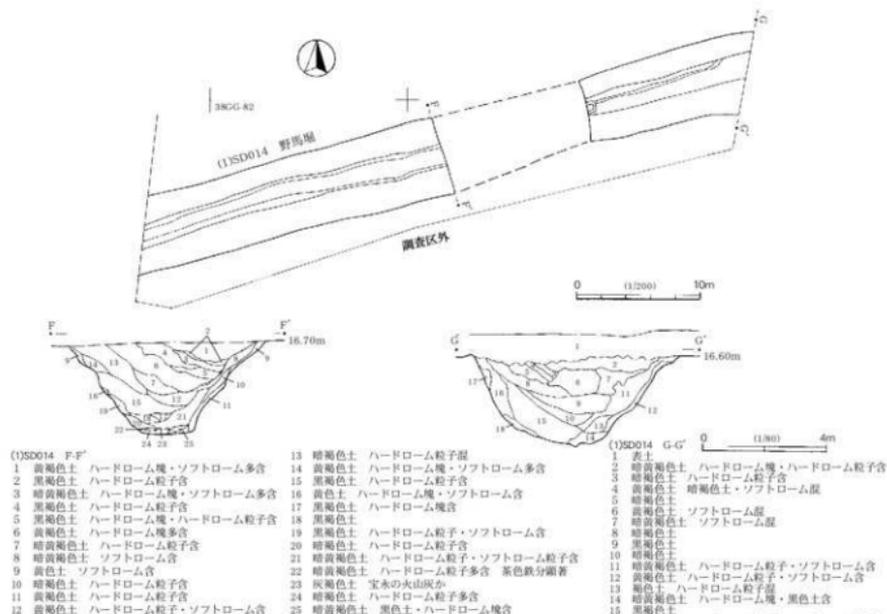
調査範囲東端の38GGグリッドで検出された野馬堀を見てみると、上面で幅約3m、底面で幅0.8m~1.0mであった。土層断面F-F'の底面は平坦で、G-G'の底面は丸みを帯びていた。堀の深さは、F-F'の地点でソフトローム上面から約1.5m、G-G'の地点で約1.4mであった。

**出土遺物** 野馬土手から遺物は出土しなかったが、野馬堀からは大量の縄文土器と少量の近世遺物が出土した。大量の縄文土器は、38AAグリッドの野馬土手・堀が直交する付近から出土し、グリッド出土の縄文土器として取り扱った。

1~4は調査範囲南東部分の野馬堀から出土した。1の染付皿は、38DDグリッドにある土層断面E-



第6-28図 野馬土手・堀(2)

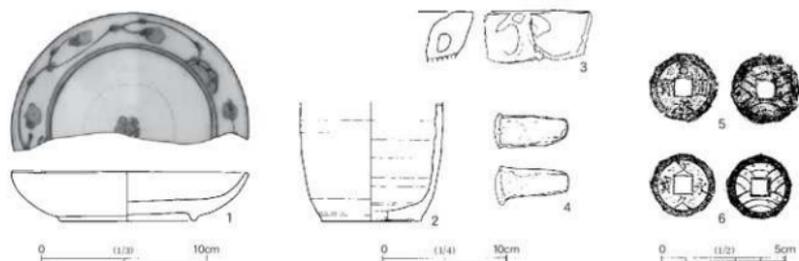


第6-29図 野馬土手・堀(3)

E'の堀の底面付近から出土した(図版6-6)。染付輪秃皿で口径14.1cm、底径8.1cm、器高3.1cm、遺存度は55%であった。内外面ともに灰白色で、内面中央にこんやく版の見込み五弁花がある。五弁花はさほど簡略化が進んでなく、丁寧に描かれている。口縁には梅樹文が描かれ、その内側に輪トチン痕が残る。18世紀中葉の肥前焼であろう。この陶器の出土により、野馬土手・堀の構築を、18世紀中葉以降に比定できるだろう。

2の鉄種徳利は胴部から底部にかけての破片で、底径8.1cm、遺存度は30%であった。胴部全体に褐釉がかかり、瀬戸美濃焼であろう。割れた面が黒ずみ、2次的に被熱していた。3は内耳鍋の把手部分である。赤褐色で、胎土に大きな長石粒が含まれていた。4も鍋の把手である。

ここで、グリッドから出土した古銭も記載しておく。出土した古銭は寛永通宝と文久永宝である。5の寛永通宝は腐食が進んで緑青が目立ち、文字の視認もやや困難だった。外縁外径28.1mm、外縁内径20.2mm、内径外径7.2mm、内径内径7.0mm、縁厚1.1mm、内厚1.0mm、重量3.79gであった。裏に波文様があり、四文銭(波銭)である。6は幕末の文久永宝で、外縁外径26.6mm、外縁内径20.4mm、内径外径6.9mm、内径内径6.3mm、縁厚1.1mm、内厚0.8mm、重量3.59gであった。これも裏に波文様があり、四文銭(波銭)である。



第6-30図 近世の遺物

## 第5節 まとめ

大久保遺跡では旧石器時代、縄文時代、奈良時代、近世の遺構・遺物が検出された。旧石器時代に関しては、『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書5』千葉県教育振興財団調査報告書第670集に収録された。本報告書では縄文時代以降の遺構・遺物を収録した。

### 1. 縄文時代

縄文時代の遺構として、竪穴住居跡、炉跡・焼土遺構、陥穴、土坑が検出された。これらの遺構は遺跡範囲内の東側と西側に大きく分離し、中央付近は約100mの間隔で、両者を隔てる空白地帯となっている。西側には竪穴住居跡、炉跡・焼土遺構、陥穴、土坑が分布し、東側からは陥穴、土坑が検出された。全体的に狩猟に関連した陥穴が検出されているので、付近一帯は狩場として利用されていたのだろう。西側には居住に関連した遺構が含まれているので、生活空間であった可能性が考えられる。

縄文時代の竪穴住居跡は3軒検出された。そのうち比較的規模の大きい、壁の四周に柱穴を設けられていた(2)SI013には、称名寺式の深鉢が埋設されていたので、縄文時代後期初頭の住居跡と判断できる。(4)SI018の出土遺物として早期の土器片2点を図示したが、同じ住居跡からはほかにも中期、後期の土器片も出土しているので、(4)SI018を早期の住居跡とするのは難しいだろう。黒浜式の縄文土器片1点が出土した(4)SI034についても、そのまま住居跡を前期に比定するのは困難だろう。覆土の中・上層から諸磯b式の縄文土器片が出土した(4)SK023貯蔵穴は、縄文時代前期の遺構だろう。

グリッド出土の縄文土器片は、前期と後期のものが大半を占めていた。東西に分かれた遺構分布に対応するように、グリッドから出土した縄文土器片の分布状況も東側と西側に偏在して、中央付近からは出土していない。また東側よりも西側から大量に縄文土器片が出土しているの、居住に関連してより多くの生活遺物が西側で遺存したと推測できる。

大久保遺跡の南側に隣接する市野谷立野遺跡でも、縄文時代の竪穴住居跡が検出された。両遺跡は一体となって、縄文時代の集落を構成していた可能性も考えられる。

なお、大久保遺跡から出土した石器の中では、東北地方で製作されたと推測されるつまみ部を持った石器1が特筆される。この形状の石器は石匙<sup>1)</sup>や尖頭器<sup>2-3)</sup>、あるいは石小刀<sup>4)</sup>などと分類された経緯があるが、現在では「押出型ポイント」<sup>5-6)</sup>、「有撮石器」<sup>7-9)</sup>として広く周知されているものである。山形県の最上川流域で採取される硬質頁岩が押出遺跡あるいはその近で加工され<sup>10-11)</sup>、関東地方にもたらされ

たことが知られている。押出遺跡では227点の押出型ポイントが出土しており、長さ171.0mm～32.6mm、平均98.5mmである。当遺跡で出土した1の大きさは156.9mmと千葉県内最大であり、製作・流通の拠点とされる押出遺跡に残されたものの中でも大型の部類に入る。

石器製作遺跡である押出遺跡では交易品として收藏されていた<sup>12)</sup>といわれているが、遠隔の地での用いられ方としては、紐で括って威信財とした、副葬品として死者に手向けた、狩猟具・加工具として携帯したなど、様々に推測されている石器である<sup>13～16)</sup>。

## 2. 奈良時代

奈良時代の遺構は(4)SI020住居跡1軒だけであった。出土した土師器・須恵器の年代から8世紀中葉の竪穴住居跡と判断してよからう。1辺3m未満のほぼ正方形の小規模な竪穴住居跡で、東壁にカマドが設置されていた。

同時期かつ同じような規模の竪穴住居跡が、流山新市街地地区の市野谷入台遺跡でも検出された。市野谷入台遺跡では8世紀中葉の竪穴住居跡が4軒あり、いずれも1辺3m未満のほぼ正方形もしくは長方形の小規模な竪穴住居跡で、カマドが設けられていた。そのうち3軒は遺跡南東部分で約50mの範囲内にやや集中していたが、残り1軒だけは西側約250m離れて孤立していた。市野谷入台遺跡は大久保遺跡の西側に隣接する遺跡で、大久保遺跡の(4)SI020は、市野谷入台遺跡の集中する3軒から東側に約200m離れて、同じく孤立した存在だった。

小規模な(4)SI020の居住面積は2㎡ほどしかなく、旧来の地積単位に換算すると2畳にも満たない。このような狭小な空間で複数人が長期同居することは困難だろう。日常的な生活空間というよりも、一時的な作業小屋だったかもしれない。

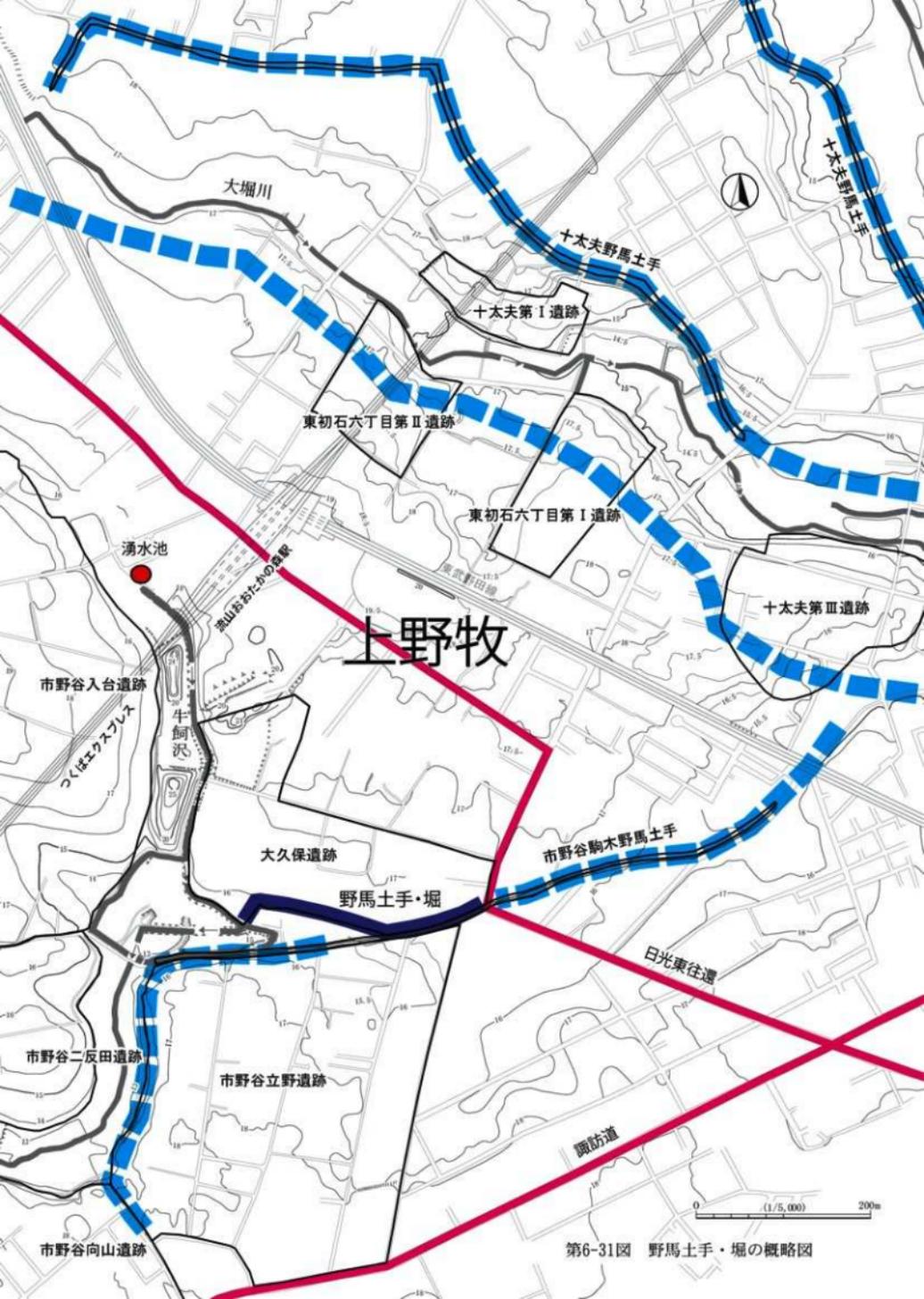
## 3. 近世 (第6-31図)

大久保遺跡の南側境界に沿って野馬土手・堀が検出された。遺跡付近一帯は、江戸時代に上野牧であった。江戸幕府直轄の牧として千葉県には小金牧、佐倉牧、嶺岡牧があり、下総の西側に小金牧、東側に佐倉牧があった。小金牧は、高田台牧、上野牧、中野牧、下野牧、印西牧で構成され、小金五牧とよばれた。上野牧は、北西から南東に細長くのびる小金牧のほぼ中間に位置している。

上野牧には水戸街道と日光東往還の2本の街道が通っていた。水戸街道は現在の国道6号線で、上野牧の南東端を南西から北東へと向かっている。日光東往還は日光街道の脇街道で、現在のJR常磐線南柏駅付近で水戸街道から分岐し、北西へ上野牧を縦走するように通っていた。日光東往還は、分岐点から約4km北西の地点で90度曲がって北東へ向きを変え、さらに200m行って今度は北西へ90度角度を変える。その屈曲部分に大久保遺跡が隣接していた。

近世の牧跡に関する報告書『房総の近世牧跡』千葉県教育委員会や<sup>17)</sup>、そのほかの文献を参考にしながら、大久保遺跡周辺の野馬土手・堀を概観してみよう(第6-31図)。

大久保遺跡の東側と北側に日光東往還が通っている。その北側を並行するように東武野田線が南東から北西へと走っている。東武線の北側には大堀川の支流が北西から南東に向かって流れ、そして支流を取り囲むように馬土手が築かれていた。この馬土手は馬が川に近づくのを防ぐと同時に、上野牧の境界線でもあったのだろう。



# 上野牧

第6-31図 野馬土手・堀の概略図

現在のつくばエクスプレス線流山おおたかの森駅駅舎中央付近を、かつて日光東往還が通っていた。流山おおたかの森駅の西側に小高く盛り上がった牛飼沢があり、その北側に湧水池がある。この池は今でも水をたたえ、古くから水飲み場だった。湧水池の南西側付近の小字芋久保に、小金牧の斃馬捨て場があったという。三輪野山村、市野谷村、大畔新田（今の西初石）の村境だった。その西側、市野谷と三輪野山との境に土手が走り、その西（村側）にも馬捨て場があったという。三輪野山の馬捨て場は、農家が飼っていた馬を死んだときに埋めた墓で、東側の芋久保の斃馬捨て場は、小金牧の野馬の埋め墓であった<sup>10)</sup>。両者は異なるタイプの馬の墓場だった。

大久保遺跡の野馬土手・堀の東側には市野谷駒木野馬土手が連なっている。また南西側には牛飼沢から流れる小川に沿って、市野谷立野遺跡の西端沿いに野馬土手・堀が連なっている。つまり、日光東往還の屈曲部をまたぐようにして、野馬土手・堀が東西に横切っていた。付近にはかつて市野谷木戸の字名があったり<sup>11)</sup>、あるいは新木戸の伝承（現西初石6丁目付近）も残っていたので、日光東往還の屈曲する前か後の部分に木戸が設けられていたと考えられる。

江戸川沿いの流山市役所付近から諏訪神社に向かう諏訪道が、大久保遺跡の南側を東西に通っている。市野谷の諏訪道沿いには上野牧の牧士（もくし）を勤めた鈴木家の屋敷があるという。19世紀後半に作製された陸軍迅速側図をみると、市野谷から諏訪神社まで諏訪道沿いには人家が建ち並び、また付近には田畑が広がっていたようである。

大久保遺跡の野馬土手・堀に連なる野馬土手は、日光東往還の屈曲部分をまたいで諏訪道に並行して東西に走り、また付近には木戸もあった。東西の野馬土手・堀は、南側の人煙立ち上る街道筋の集落の空間と、北側の野馬たちの疾駆する荒野とを分かち隔壁の役割をはたしたのかもしれない。

- 注1 建石 徹・佐々田友規 2010『流山市内遺跡出土黒曜石の原産地推定—縄文時代資料を中心にして—』『流山市史研究』第18号 流山市立博物館
- 2 後藤義明 1988『主要地方茨城・鹿島線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書—梨ノ子木久保遺跡 割り塚古墳—』財団法人 茨城県教育財団
- 3 柏市教育委員会 1980『千葉県柏市布施 守谷・流山線調査報告書—寺山遺跡 宮ノ内遺跡 荒屋敷遺跡 谷ノ尻遺跡—』
- 4 川根正教・増崎勝仁 1983『このす台第IV遺跡』流山市遺跡調査会
- 5 山形県埋蔵文化財緊急調査団 1986『押出遺跡』山形県教育委員会・山形県埋蔵文化財緊急調査団
- 6 『押出遺跡』2007 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 7 吹野富美夫 1995『梨ノ子木久保遺跡出土石器の再検討』『みちのく発掘—菅原文也先生選別記念論集—』pp.121~127
- 8 大野憲司ほか 1988『上山II遺跡』『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II』秋田県文化財調査報告書第166集 秋田県教育委員会
- 9 萩野谷 悟 2000『茨城県岩間町上郷出土の有掘石器』『常総台地15—諸星政得先生会会長就任35周年記念号—』常総台地研究会
- 10 秦 昭繁 1994『珪質頁岩分布と縄文時代の石材流通』『考古学ジャーナル』No.380
- 11 秦 昭繁 1995『珪質頁岩』『福島考古36号』福島考古学会
- 12 原田正行 1996『押出遺跡出土品の意味するもの』『縄文のタイムカプセル—押出遺跡』pp.34~39 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 13 大工原 豊 2003『模倣と模造—硬質頁岩製石匙・石槍の流通と型式変容』『縄文時代』14 pp.1~29
- 14 岡村道雄 1993『埋葬にかかわる遺物の出土状態からみた縄文時代の墓葬礼』『論苑考古学—坪井清足さんの古希を祝う会—』
- 15 大工原 豊 2012『縄文石器の概念と時空的範囲、東北地方の縄文石器』季刊考古学 第119号 pp.14~24
- 16 野村祐一・神林哲夫・野辺地初雄 2003『函館市 豊原4遺跡』『農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』函館市教育委員会
- 17 千葉県教育委員会 2006『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡（財）千葉県教育振興財団
- 18 青木更吉 2003『小金牧を歩く』pp.67~69 崙書房
- 19 青木更吉 2001『小金牧 野馬土手は泣いている』pp.91~92 崙書房

## 第7章 西初石五丁目遺跡

### 第1節 遺跡の概要 (第7-1・2図)

本遺跡の調査範囲と遺構・遺物の検出状況は第7-1・2図のとおりである。本報告では、上層分(縄文時代以降)として第18～20次調査1,882㎡/16,352㎡、下層分(旧石器時代)として第20次調査368㎡/4,491㎡の報告を行うものである。

上層の遺構としては、縄文時代の土坑3基、近世の溝1条、野馬土手・堀2条、シシ穴3基を検出した。

下層では第2黒色帯にて石器集中地点1か所を検出し、黒曜石の石核から石刃・剥片類が剥離される工程の一部が確認できた。旧石器時代の石器集中は、調査次数を追って順次付されるため、今回報告分は前報告からの続き番号となり、「第6地点」と呼称する。

このほか、集中域を形成しない単独出土の石器は、立川ローム層の上部から3点、第2黒色帯で1点が出土し、第20次調査での総出土点数は72点を数えた。

なお、上・下層の第1～17次調査の成果は報告書第596集(2008年刊行)、下層の第18・19次調査は報告書第706集(2013年刊行)にて報告済みである。

縄文土器に関する記載には上席文化財主事 西川博孝氏に、近世に関しては上席文化財主事 小高春雄氏に多くのご教示をいただいた。

### 第2節 旧石器時代

旧石器時代の調査で出土した遺物は72点であり、このうち23F-34・43・44グリッドに分布する68点が第6地点に帰属し、立川ローム層のIX層を中心に含まれる。第6地点の石材は黒曜石65点、頁岩1点、チャート2点であり、黒曜石が約90%を占めている。科学的な分析を行ってはいないが、他遺跡の資料や原産地から採集した標本を観察した限りでは、長野県の蓼科冷山群産の黒曜石と大変近似する。黒曜石1は石核1点、ナイフ形石器2点、微細剥離痕のある剥片1点、石刃9(12)点、剥片10(11)点、砕片38点を組成し、総重量は57.63gである。小ぶりの鶏卵大の塊を当遺跡に持ち込み、石刃を剥離した形跡が残る資料である。なお、器種名の石刃であるが、背稜が側縁と平行に走り、縦横比が2対1以上の規格的に剥離された縦長剥片をさすものである。出土時には15mm以下の砕片と分類したものが、接合作業を経て1点の石刃、あるいは剥片と確認されたものを含むため、出土点数と組成数には若干の差異が生じている。

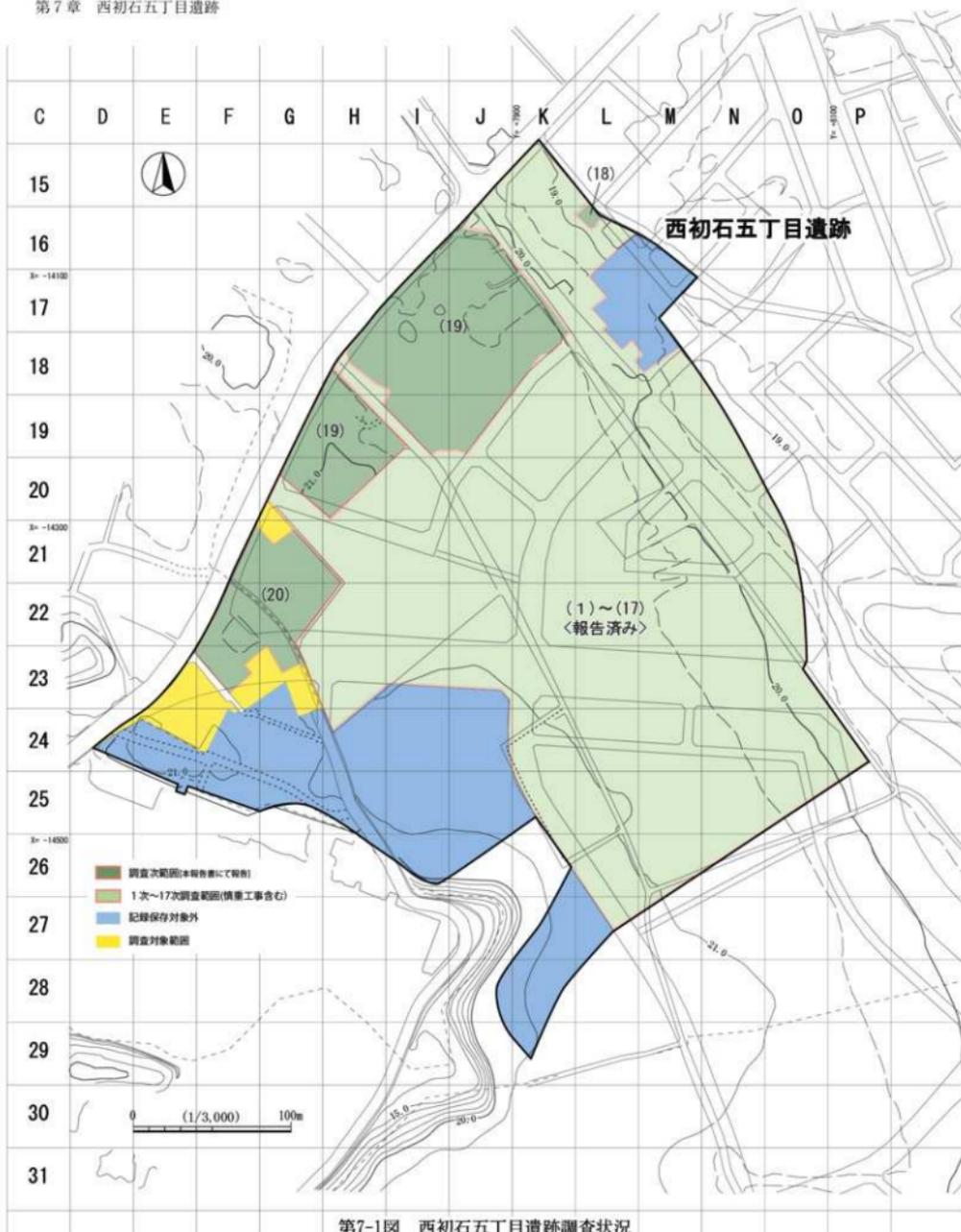
器種名に続く数字は組成数を表し、それに続く括弧内は出土時の点数を記載した。

なお、当遺跡の基本層序は第1章で掲載した。

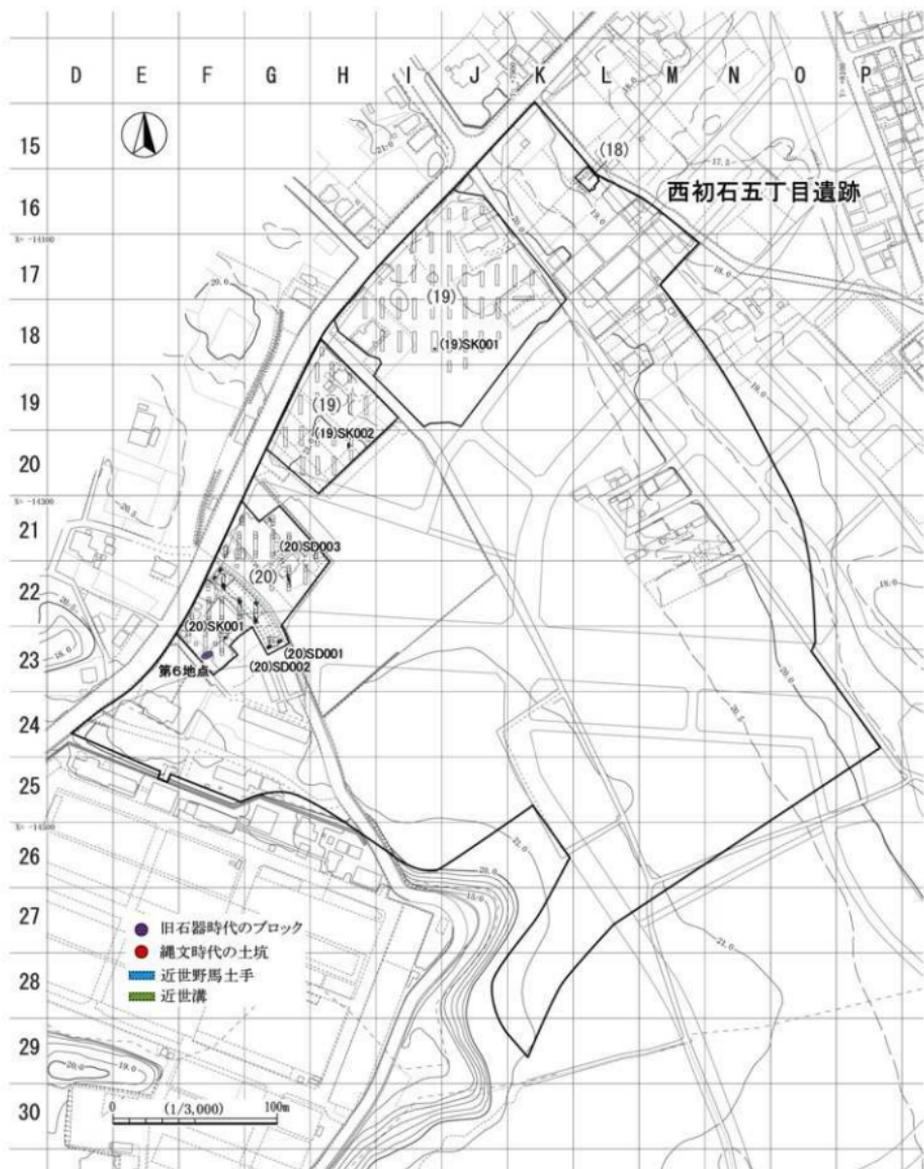
#### 1. 第6地点 (第7-3～6図、第7-1・2表、図版7-1・3)

##### 分布状況 (第7-3・4図、図版7-1)

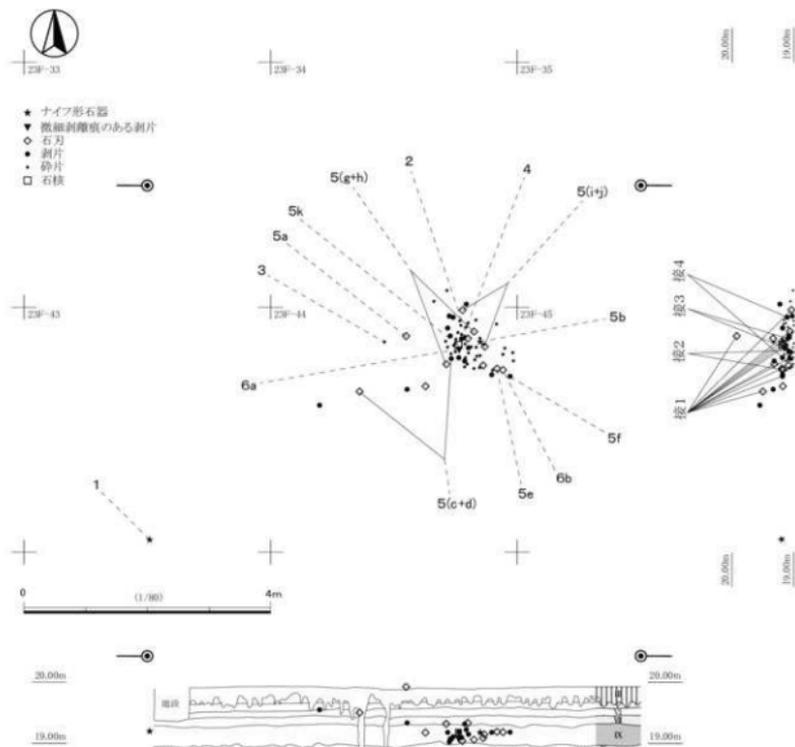
西初石五丁目遺跡第20次調査区域の一部は南西側の道路によって区画されているが、明治13年の迅速測図ではすでに道であったことがわかる。標高20mほどの台地はこの道路に寸断される形であるが、旧石器



第7-1図 西初石五丁目遺跡調査状況



第7-2図 西初石五丁目遺跡調査範囲と遺構の位置



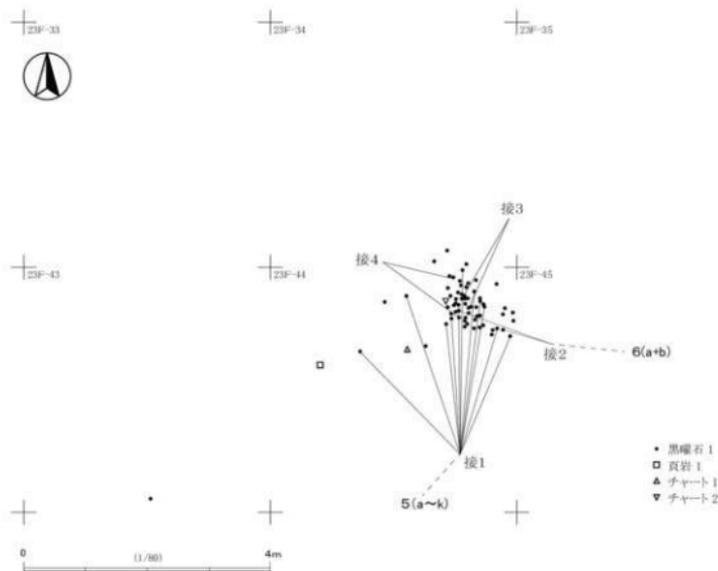
第7-3図 第6地点器種別分布

時代の石器集中地点は台地の安定した平坦面に営まれており、後世の人為的な開発の影響を受けてはいないと思われる。

第6地点は遺跡の西側に位置し、石核を囲むように1.5mほどの範囲に剥片・砕片類が集中する。この密集域から南西方向へ向かって徐々に疎らになり、南西端のナイフ形石器と石核間は約6mを測る。接合関係は密集域の17点にみられる。石器が出土した標高は18.90m～20.00mの間に分布し、立川ローム層IX層中部にあたる19.10m付近にもっとも濃密に分布する。上層に数点が散在するが、同一母岩であるうえ、いくつかは接合関係が認められるため、同じ文化層に属する一つの「地点」と捉えた。

**出土石器** (第7-5・6図、第7-1・2表、図版7-3)

1は黒曜石1のナイフ形石器先端部である。基部は残存していないが、折れ部分に刃つぶし状の加工が施されている。先端部もまた再加工され、錐のような鋭い尖頭部が作出されている。



第7-4図 第6地点母岩別分布

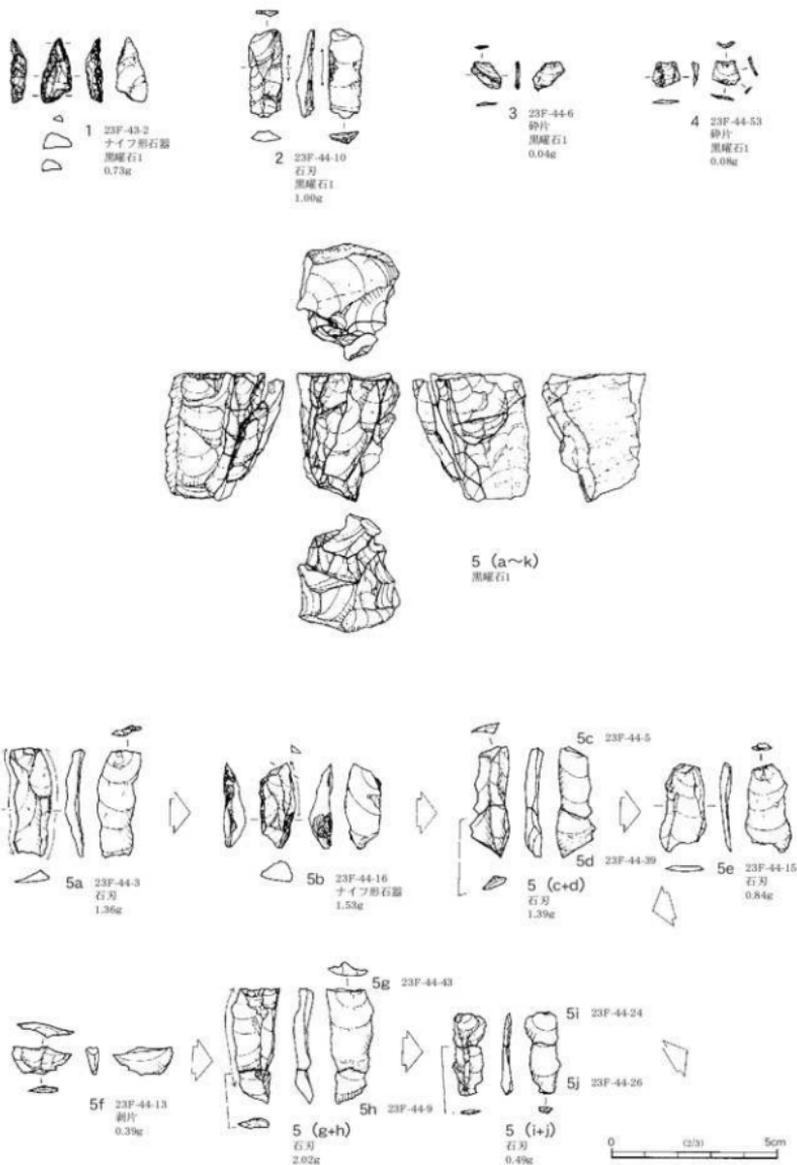
2は石刃である。打面と末端は欠損しており、中央部のみの資料である。両側縁には微細剥離痕がみられ、ほぼ平行に走る。

3・4は砕片である。石核の稜や器面を整えるために剥離されたものである。砕片には器長が15mm未満であることを目安としたが、打点を持たない小片や矩形的剥片も含む。

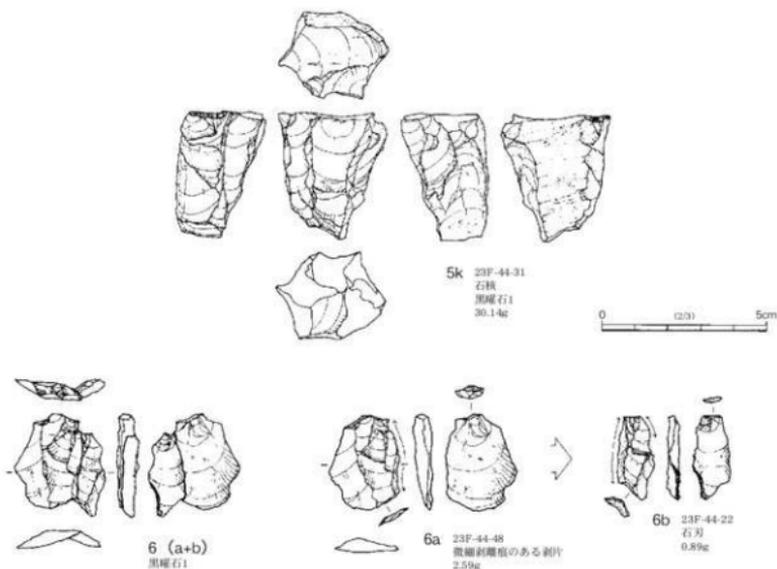
5は黒曜石1の接合資料である。ナイフ形石器1点、石刃8点、剥片1点、石核1点の計11点を組成する。石材は透明感のある良質な黒曜石で、 $\phi 0.3\text{mm}\sim 1.0\text{mm}$ の斑品を含んでいる。裏面には節理面が残っており、黄灰色の筋が入ったすりガラスのように見える。内部よりも強度があるために剥離の流れは一旦ここに留まり、底状の稜を残している。剥離作業は節理面を避けるように行われ、加工の痕跡がないまま平坦な板状となって残されている。

作業面は正面・左右面の3面であり、基軸を保ったまま石核を回転させ、背稜が石刃の中心を通るように的確に打撃を加えることで複数枚の石刃作出に成功している。剥離された順は石刃5a→ナイフ形石器5b→石刃5c+5d→石刃5e→剥片5f→石刃5g+5h→石刃5i+5jで、石核5kが残る。石核5k右面中部の高まりは階段状の末端となっており、剥離は石核底面に到達していない。残された石核には打面調整の痕はなく、この剥離が最終であることは明らかである。

作出された石刃5点(5a、5c+5d、5e、5g+5h、5i+5j)の最大長は25.01mm~33.61mm、最大幅10.07mm~14.92mm、最大厚3.21mm~5.98mmである。軽い頭部調整の痕はみられるが、打面調整は行われていないと思われる。微細剥離痕は5a、5b、5g+5hの縁辺にみられる。使用による刃こぼれは5bに



第7-5図 第6地点出土石器(1)



第7-6図 第6地点出土石器(2)

顕著である。

5bのナイフ形石器は二側縁加工で、右上縁に微細な刃こぼれを伴う使用痕がみられる。打面部を斜めに断つことで、厚みのある三角形の断面を持つ先端部となっており、刺突具として機能していた可能性がある。

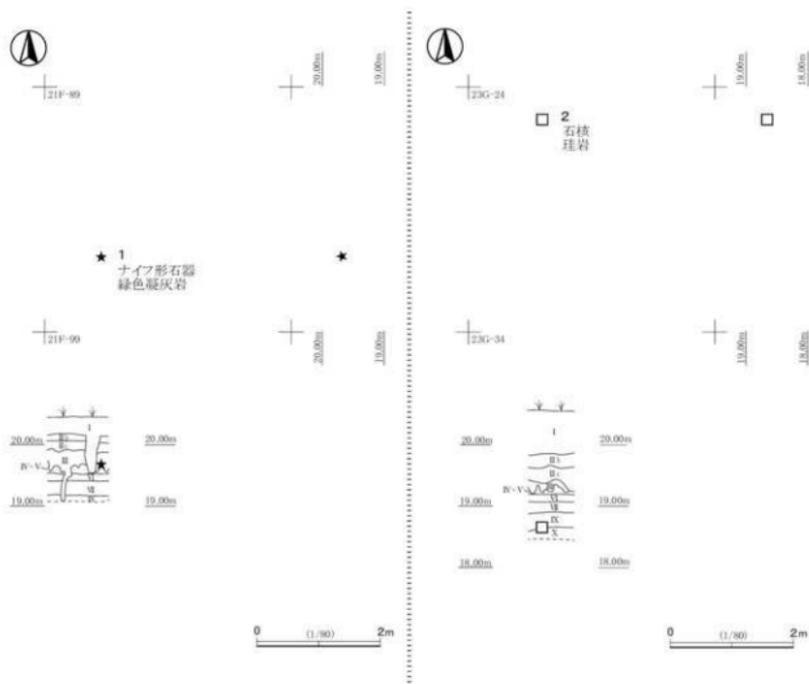
6もまた黒曜石1の接合資料であり、微細剥離痕のある剥片6aと石刃6bが接合した。6a、6bの縁辺には擦って潰したような小さな刃こぼれが直線的に並ぶ。6bの右側縁下部は新鮮な剥離痕がみられる。この石刃は、長さ25.28mm、幅11.18mm、厚さ3.88mmであり、先の石刃サイズの範疇に含まれる。

#### 単独出土石器 (第7-7・8図、第7-1・2表、図版7-3)

第20次調査における単独出土石器は4点あるが、出土層位が明確な2点を報告する。IX層下部から出土した珪岩製の石核1点、Ⅲ層上部から出土した緑色凝灰岩製のナイフ形石器1点である。

1は21F-89グリッドから出土した切出形のナイフ形石器である。標高19.69m、Ⅲ層上部に包含されるが、Ⅳ・Ⅴ層の一部はソフトローム層に取り込まれており、Ⅴ層～Ⅲ層の幅を持つものと捉えられる。

石器の自然面は黄褐色 (2.5Y5/3 標準土色帖 2000年 以下同様)、剥離面は灰オリーブ色 (10Y6/2～7/2) であり、微光沢をもつ緑色凝灰岩である。器体中ほどの最大厚を測る部分には砂粒をまぶしたような自然面がわずかに残る。



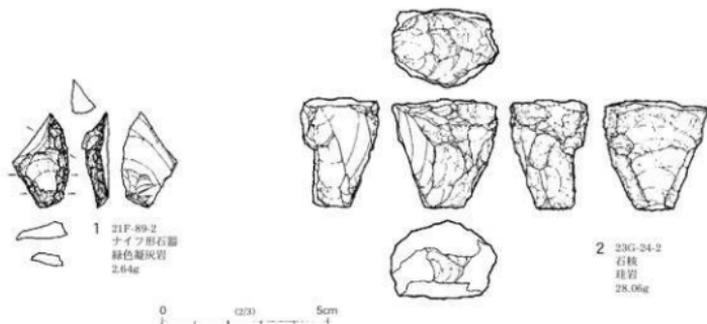
第7-7図 旧石器時代の単独出土石器分布

器長28.75mm、刃部19.00mmであり、刃先角74°、刃部角46°、右側縁中～下部に93°～95°、同上部には73°～84°のブランティングが施され、左側縁の基部には平坦剥離のち、稜線上に微細な急角度調整が加えられており、当概期の標準石器の一つとされる切出形を呈している。素材は厚みを持った幅の広い剥片であり、剥片剥離軸に沿うように右側縁部が作り出されている。なお、素材打面は加工されていない。

2は23G-24グリッドの標高18.66mから出土した珪岩製の石核である。地表付近は近世の溝により一部削平されているが、VI層以下の土層は水平に堆積しており、石器の出土状況に影響を及ぼすものではない。石器はIX層から出土している。

石材は灰白色に風化してチョークのような肌触りだが、ガジリ（調査時の欠損）部分は濃い灰色で珪質であり、8倍ルーペでガラス質の結晶が確認できる。高橋直樹氏（千葉県立中央博物館）の鑑定により、「珪岩」として報告する。

石核には、設定された打面及び下方が加撃され、複数枚の剥片が剥離された痕跡が残るが、作出されたであろう剥片の検出には至らなかった。残核が単体で遺棄・廃棄されたものと推察する。



第7-8図 単独出土石器

第7-1表 旧石器時代の石器組成表

集中地点	石材	母岩番号	ナイフ形石器	剥離剥離痕のある剥片	石刀	剥片	砕片	石核	点数	点数比	重量(g)	重量比
第6地点	黒曜石	1	2	1	9(12)	10(11)	38	1	65	90.28%	57.63	59.53%
	頁岩	1	0	0	0	1	0	0	1	1.39%	0.98	1.01%
	チャート	1	0	0	0	1	0	0	1	1.39%	0.86	0.89%
	チャート	2	0	0	0	0	1	0	1	1.39%	☆0.00	0.00%
第6地点小計			2	1	9	12	39	1	64(68)	94.44%	59.47	61.43%
単独出土	黒曜石		0	0	0	1	0	0	1	1.39%	1.24	1.28%
	緑色凝灰岩		1	0	0	0	0	0	1	1.39%	2.64	2.73%
	砂岩		0	0	0	1	0	0	1	1.39%	5.40	5.58%
	珪岩		0	0	0	0	0	1	1	1.39%	28.06	28.98%
単独出土小計			1	0	0	2	0	1	4	5.56%	37.34	38.57%
合計			3	1	9	14	39	2	68(72)	100.00%	96.81	100.00%

※ ( ) は出土点数  
☆ 換算するための重量計測不可(0.01g未満)

第7-2表 旧石器時代の石器属性表

集団	遺物番号	器種	石材	注目理由	採掘位置	検出番号	長さ(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	微細特徴	産出部位	備考	
6	Z3F-34	2	FL	OR	1	17.76	10.52	6.16	0.60	M	19.225	残破		
6	Z3F-34	3	CH	OR	1	12.46	11.76	2.94	0.34	H	19.012	残破上縁	行面わずかに欠ける	
6	Z3F-34	4	CH	OR	1	12.73	9.46	2.88	0.30	H	19.055	残破上縁		
6	Z3F-43	2	KN	OR	1	19.95	9.45	5.07	0.73	H	19.206	残破	加工部分の硬化層に相当する	
6	Z3F-44	3	BL	OR	1	32	12.38	5.47	1.36	H	19.025	残破	器類	
6	Z3F-44	4	FL	SH	1	25.80	15.20	2.91	0.98	H	19.502	残破上縁		
6	Z3F-44	5	BL	OR	1	5c	21.57	9.45	4.05	0.75	H	19.560	残破上縁	Z3F-44-39と片で1点の石片 接合時:33.61mm×12.16mm×5.51mm 1.39g
6	Z3F-44	6	CH	OR	1	8.32	9.22	1.39	0.04	H	19.335	残破上縁		
6	Z3F-44	7	FL	CH	1	16.13	8.56	7.18	0.86	H	19.335	残破上縁		
6	Z3F-44	8	FL	OR	1	17.89	14.23	2.61	0.75	H	19.317	残破上縁		
6	Z3F-44	9	BL	OR	1	5b	11.57	10.04	4.46	0.35	○	19.315	残破上縁	Z3F-44-43と片で1点の石片
6	Z3F-44	10	BL	OR	1	2	26.20	10.52	5.44	1.00	○	19.335	残破上縁	微細特徴あり
6	Z3F-44	11	CH	CH	2	2.69	1.77	0.59	0.00	○	19.317	残破上縁	微細特徴あり	
6	Z3F-44	12	BL	OR	1	9.95	2.67	2.84	0.25	M	19.177	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	13	FL	OR	1	5f	8.99	17.68	4.19	0.39	T	19.184	残破	
6	Z3F-44	14	FL	OR	1	15.31	10.71	4.24	0.54	○	19.180	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	15	BL	OR	1	5e	27.10	13.57	3.72	0.84	H	19.190	残破	
6	Z3F-44	16	KN	OR	1	5b	26.50	11.40	6.88	1.53	○	19.180	残破	微細特徴あり
6	Z3F-44	17	CH	OR	1	4.28	6.21	1.28	0.01	H	19.167	残破		
6	Z3F-44	18	CH	OR	1	4.41	14.01	4.51	0.13	H	19.159	残破		
6	Z3F-44	19	FL	OR	1	15.38	9.85	8.27	0.80	H	19.180	残破		
6	Z3F-44	20	FL	OR	1	22.60	20.52	5.13	1.71	T	19.108	残破	Z3F-44-25と片で1点の石片	
6	Z3F-44	21	CH	OR	1	8.55	14.05	4.73	0.40	H	19.125	残破		
6	Z3F-44	22	BL	OR	1	2	25.28	11.18	3.88	0.89	○	19.184	残破	微細特徴あり
6	Z3F-44	23	BL	OR	1	19.99	10.87	3.05	0.48	H	19.088	残破		
6	Z3F-44	24	BL	OR	1	5i	11.01	12.09	1.90	0.18	H	19.146	残破	Z3F-44-26と片で1点の石片 接合時:25.01mm×10.07mm×3.21mm 0.49g
6	Z3F-44	25	FL	OR	1	12.19	15.72	5.44	0.86	H	19.184	残破	Z3F-44-20と片で1点の石片	
6	Z3F-44	26	BL	OR	1	3j	16.01	9.49	2.76	0.31	V-M	19.037	残破	Z3F-44-24と片で1点の石片 剥離時に欠点欠縁
6	Z3F-44	27	FL	OR	1	16.86	10.29	4.12	0.42	H	19.024	残破		
6	Z3F-44	28	CH	OR	1	6.42	5.51	1.86	0.06	H	19.095	残破		
6	Z3F-44	29	CH	OR	1	5.24	2.86	0.93	0.00	H	19.216	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	30	CH	OR	1	5.08	7.13	2.33	0.03	H	19.193	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	31	CH	OR	1	5k	28.28	33.27	29.51	30.14	H	19.181	残破	
6	Z3F-44	32	CH	OR	1	10.75	3.41	2.47	0.07	H	19.126	残破		
6	Z3F-44	33	CH	OR	1	10.47	7.95	2.42	0.14	H	19.155	残破		
6	Z3F-44	34	CH	OR	1	5.34	8.34	0.99	0.03	H	19.059	残破		
6	Z3F-44	35	CH	OR	1	11.92	3.06	2.24	0.06	H	19.085	残破		
6	Z3F-44	36	CH	OR	1	9.28	6.78	1.99	0.08	H	19.105	残破		
6	Z3F-44	37	CH	OR	1	3.82	4.89	0.49	0.00	H	19.185	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	38	CH	OR	1	3.83	2.33	0.32	0.00	H	19.149	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	39	BL	OR	1	5d	16.17	12.16	5.51	0.64	T	19.066	残破	微細特徴あり
6	Z3F-44	40	FL	OR	1	21.38	14.45	5.03	0.96	H	19.148	残破		
6	Z3F-44	41	CH	OR	1	3.29	5.57	0.81	0.00	H	19.055	残破		
6	Z3F-44	42	FL	OR	1	16.85	8.85	3.99	0.40	H	19.074	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	43	BL	OR	1	5g	25.18	14.51	5.89	1.47	○	19.060	残破	Z3F-44-9と片で1点の石片 接合時:35.01mm×14.92mm×5.98mm 2.02g
6	Z3F-44	44	CH	OR	1	7.86	4.39	1.41	0.04	H	19.090	残破		
6	Z3F-44	45	CH	OR	1	2.05	3.13	0.42	0.00	H	19.144	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	46	CH	OR	1	3.40	4.36	0.86	0.00	H	19.119	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	47	CH	OR	1	5.41	3.09	0.46	0.00	H	19.072	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	48	MP	OR	2	6a	28.21	21.53	5.47	2.59	H	19.043	残破	
6	Z3F-44	49	CH	OR	1	4.81	5.29	0.80	0.00	H	19.100	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	50	CH	OR	1	2.10	4.72	3.03	0.60	H	19.095	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	51	CH	OR	1	7.46	12.87	3.04	0.25	H	19.025	残破	破片 打点なし	
6	Z3F-44	52	CH	OR	1	7.89	10.38	3.12	0.16	H	18.999	残破		
6	Z3F-44	53	CH	OR	1	4	7.20	8.57	2.01	0.08	H	19.128	残破	平坦打面 打角95°
6	Z3F-44	54	FL	OR	3	30.19	25.64	6.62	3.64	H	19.097	残破	剥離片	
6	Z3F-44	55	CH	OR	1	5.99	1.76	0.62	0.00	H	18.997	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	56	CH	OR	1	6.72	8.41	2.68	0.08	H	19.062	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-44	57	CH	OR	1	2.79	2.97	2.06	0.01	H	19.027	残破	打点なし	
6	Z3F-44	64	CH	OR	1	4.17	7.08	0.87	0.03	H	19.027	残破		
6	Z3F-44	65	CH	OR	1	8.85	5.58	1.20	0.05	H	19.035	残破	打点あり	
6	Z3F-44	66	CH	OR	1	10.20	6.27	4.12	0.25	H	19.015	残破		
6	Z3F-44	67	CH	OR	1	6.63	3.07	0.56	0.00	H	18.949	残破	微細特徴あり	
6	Z3F-89	2	KN	GT	1	28.75	17.45	7.85	2.64	H	19.090	残破	剥離片	
6	Z1G-66	1	FL	OR	1	16.02	17.44	8.38	1.24	T	-	Bc層一帯	剥離片 剥離片を含む 負負 剥離片剥離片時期不明	
6	Z3F-06	3	FL	SA	1	25.71	27.39	8.57	5.40	H	19.749	残破	剥離片 剥離片	
6	Z3G-24	2	CO	QT	2	33.29	32.65	23.54	28.06	H	18.658	残破	剥離片 剥離片	

### 第3節 縄文時代

第18～20次調査では縄文時代の土坑3基を検出した。また、遺構外遺物として前期中葉の土器片が多数出土した。

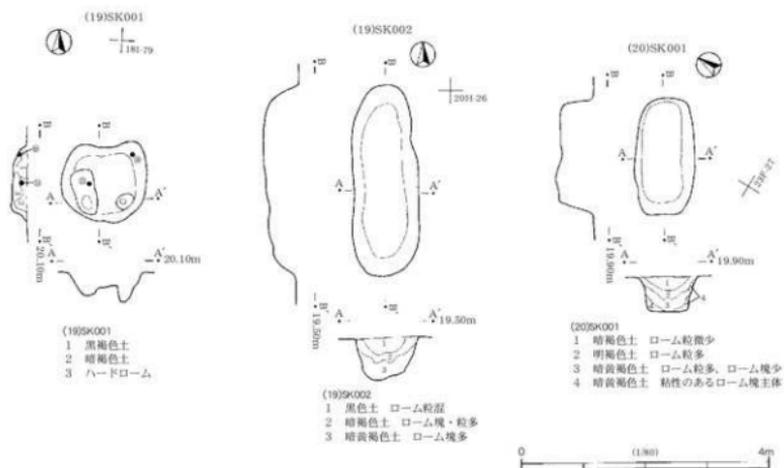
#### 1. 土坑

##### (19)SK001 (第7-9・11図、図版7-1)

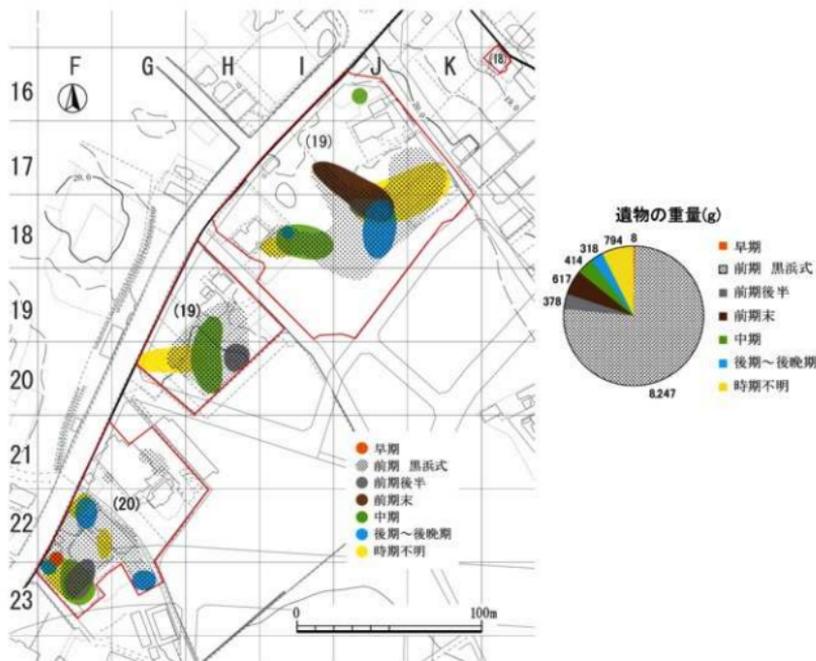
18I-78・79グリッドに位置する。遺構検出面では円形をなし、長軸1.42m、短軸1.25mを測る。坑底はほぼ円形で平坦であるが、南側に2か所の窪みがある。西側の窪みの深さは38cmで比較的なだらかだが、南東側は底面から直線的に掘り下げられており、深さは48cmを測る。出土遺物は縄文時代前期中葉の黒浜式土器の胴部破片が2点であり、23、30と番号を付して第7-11図に示した。23は土層3の直上から出土し、30は緩やかに傾斜している部分から出土した。いずれも、(19)SK002周辺に多数分布する土器片と同時期の黒浜式期のものであり、本遺構の帰属時期に近いものであろう。

##### (19)SK002 (第7-9図、図版7-1)

20H-25グリッドに位置する。遺構検出面では長楕円形をなし、長軸3.12m、短軸1.03mを測る。深さは67cmである。長軸の方位はN-1°-Wであり、南北軸とほぼ一致する。底面の平面形は長楕円形で縦断面は逆台形である。遺構に伴う遺物はない。類似する土坑には柏市駒形遺跡C区SK035、白井市復山谷遺跡6次・8次調査SK011が挙げられる。



第7-9図 土坑



第7-10図 縄文土器時期別分布状況

## (20)SK001 (第7-9図、図版7-1)

23F-16・17グリッドに位置する。遺構検出面での平面形は長方形で、長軸1.98m、短軸0.98m、深さ59cmを測り、長軸の方位はN-55°-Wである。底面の平面形もまた長方形であり、縦断面は箱形である。遺構に伴う遺物は検出されなかったが、近辺からは縄文時代前期の土器が多数出土しており、この時期の土坑である可能性が高い。

## 2. グリッド出土の土器

遺構外で出土した縄文時代の土器・土製品の総点数は750点、総重量は10,775.83gであった。土器の大半は前期中葉の黒浜式土器であり、総点数の87%にあたる651点が相当する。重量比では76.5%であり、黒浜式土器は比較的小型の破片で構成されていることがわかる。土器の形状を復元できるほどの大きさ・数量はなく、脆く壊れやすい特徴を有するものである。第7-10図に縄文土器の時期別分布状況を掲載した。

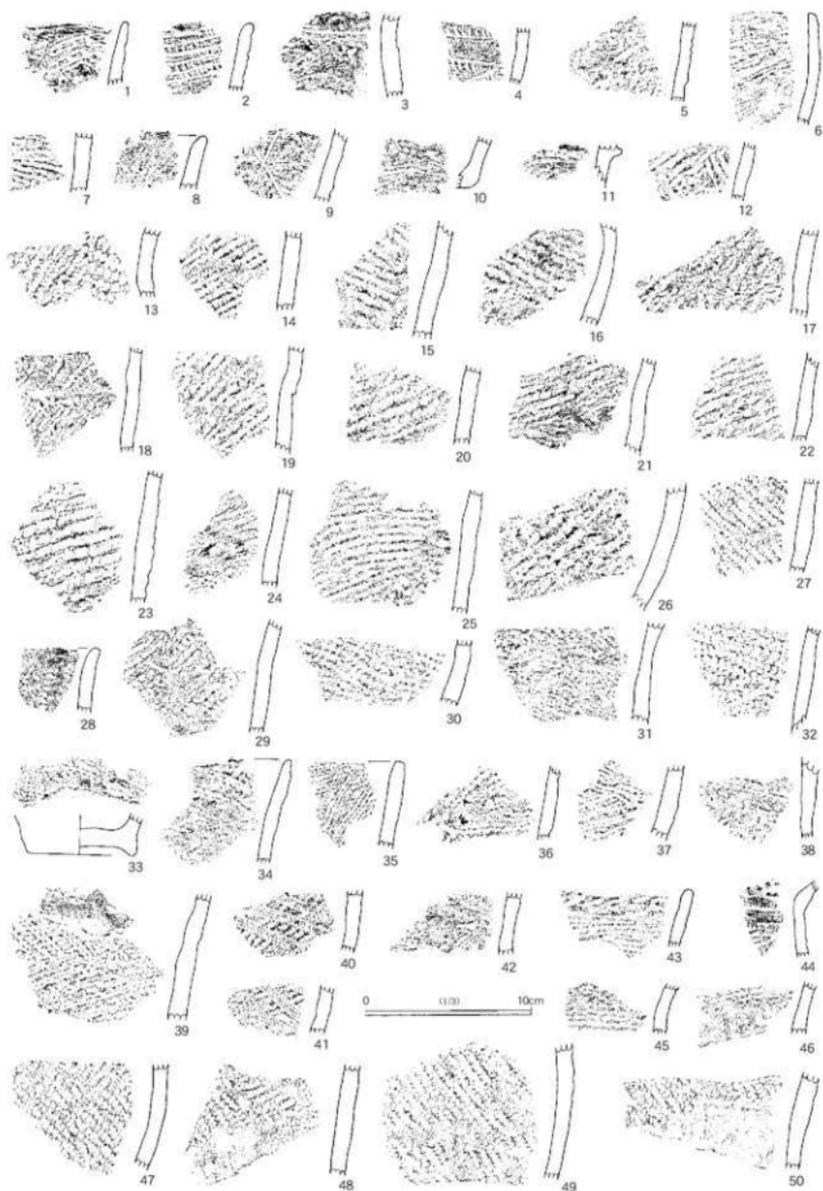
第18・19・20次の調査区は未調査域を挟んで隣接するため、遺物が出土した第19次調査範囲と第20次調査範囲とを分けて報告する。

## 第19次調査地点 (第7-10~12図、第7-3表、図版7-4)

第19次調査では未調査域を挟んで、18Jグリッドを中心とする北側、19Hグリッドを中心とする南東側に土器片が集中する。両区域から出土した縄文時代の土器を第19次調査分として報告する。

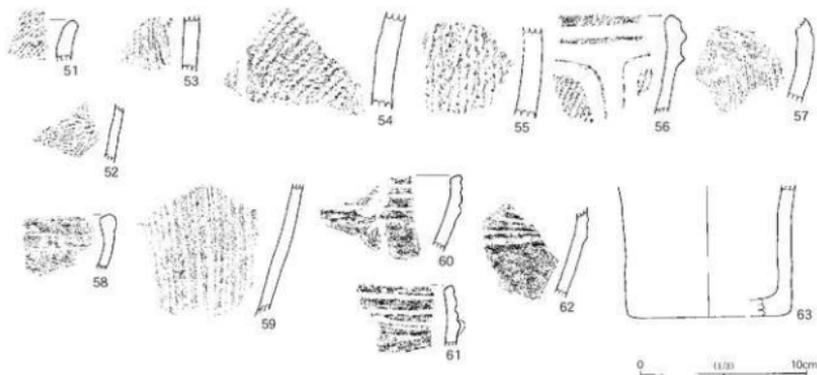
時期的には前期から後晩期にわたるが、大半を前期中葉の黒浜式が占める。黒浜式土器は調査区全体にみられるが、最も高密度に分布するのは18Jグリッドであり、この西側には(19)SK002土坑が検出されている。前期後葉の浮島式土器は18J-05グリッド、20H-17グリッドを中心とした2か所に分布する。前期末葉・中期・後期の土器は北側調査区に分布する傾向がある。

1~42は前期黒浜式である。1~6は半載竹管による刺突文を施す。5を除き平行沈線文と併用している。1はゆるい波状突起を持ち、突起下に刺突列で菱形文様を配する。2も波状突起をもつ。口縁に平行して4段の刺突列を施す。3は無文帯下に刺突列で横位区画文、鋸歯文、弧線文を施す。5は刺突文帯の下に段を設けて、Rの縄文を縦位回転施文している。6の縄文は燃系文ないしは附加条縄文で、2本のRの縄を軸棒ないしは軸繩に絡げた原体である。7は縄文地に多載竹管の沈線文を施す。8・9は縄文地にヘラによる沈線で格子目文を施す。8の縄文は単節、9の縄文は無節である。10は底部の破片で、底から胴部へ立ち上がる個所に多載竹管の沈線文を施す。11は断面三角形の突帯の際に細い棒状工具による刺突を施す。12~42は縄文のみを施す。12・13は羽状縄文で、12は無節のLとRを横位回転施文し、13はLRとRLを横位回転施文している。14~33は斜縄文である。14~26は無節縄文で、15がRの横位回転施文、16がRの縦位回転施文、ほかはLの横位回転施文である。27~33は単節縄文で、28・29が同一個体でLRの横位回転施文、ほかはRLの横位回転施文である。なお、33は底径5.5cmを測り、上げ底である。34~42は燃系文ないしは附加条縄文で、複数条の縄を軸棒ないしは軸繩に絡げた原体を使用している。39には軸繩が見えることから附加条縄文であることが分かる。上半は軸繩LにLの縄を2条そろえて絡げた附加条第2種で、下半は軸繩RにRの縄を2条そろえて絡げた附加条第2種である。40~42は同一個体で、やはり附加条第2種である。軸繩はL、附加繩は細いLの縄を4条そろえて絡げている。一部が羽状となっており、軸繩R、4条そろえて絡げた附加繩もRの附加条第2種と思われる。



第7-11图 第19次調査地点出土遺物(1)

43～46は前期浮島式である。43は口唇に棒状工具による斜位の刺突列を、その下に平行沈線文と半截竹管内側による連続刺突文を施す。44は強く外反した器形で、棕櫚状文風の密接した連続爪形文を施す。45・46は同一個体で、フネガイ科の貝を引きずり気味にロッキングした波状貝殻文である。47～52は前期末の縄文施文の土器である。47～50は同一個体で、RLとLRの縄文を羽状に施す。51は細かいLの縄文を口唇とその下に横位回転施文する。52は種類の異なるLの縄文を上下2段に施す。53は細かいLの縄文痕が疎らに縦走している。燃糸文であろうか。54～57は中期加曽利E式である。54はRLの縦位回転縄文を地文として磨消懸垂文を施す。55は燃糸文で、連弧文土器であろう。56は細い隆線で棒状の文様を施す。57は口縁部の破片で、口縁直下に沈線を巡らせ、以下櫛歯条線文を施す。58・59は後期加曽利B式で、58は帯縄文を施した精製土器、59は条線を施した粗製土器である。60～62は同一個体で、晩期終末の鉢形土器である。低い隆線で区画した幅の狭い口縁部文様帯に3条の平行線文が認められる。63は筒状の底部である。



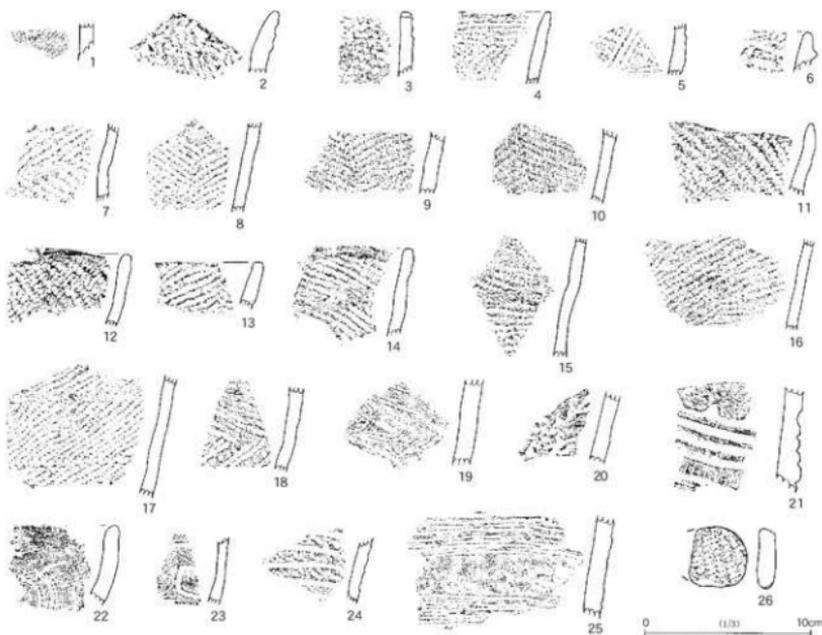
第7-12図 第19次調査地点出土遺物(2)

#### 第20次調査地点（第7-10・13図、第7-3表、図版7-5）

早期中葉から後期中葉の土器片が出土した。土器の分布域は第20次調査の主に南半部であり、第19次調査同様、前期中葉の黒浜式が大半である。

1は早期沈線文系土器で、細沈線を斜位に施す。三戸式ないしは田戸下層式古段階であろう。2～19は前期黒浜式である。2は波状突起部分の破片で、無節の縄文地に突起に沿って半截竹管内側による刺突列を2段施す。3も波状突起を持つ。無文地に櫛状工具で4列1単位の刺突列で菱形文様を施すと思われる。4・5は縄文地に半截竹管による平行沈線文を施す。4の縄文はLRの横位回転施文、5の縄文はLRの縦位回転施文である。6は口縁部に隆線を貼りつけている。口唇部と隆線にはLRの回転縄文が付く。7～10は羽状縄文を施す。7は単節縄文、ほかは無節縄文である。8～10はいずれもLとRの横位回転施文である。11～16は斜縄文である。11の口縁部はゆるい波状をなす。11・12はRL、13はL、14は

R、15はRL、16はLRのいずれも横位回転施文である。17はLRの縄文であるが、縄文原体の末端が2段認められる。18は上半が燃糸文ないしは附加条縄文で、Lの縄を2条まとめて軸棒ないしは軸縄に絡げた原体である。下半はR（ $\begin{matrix} LR \\ RL \end{matrix}$ ）の縦位回転施文である。0段多条である。19も燃糸文ないしは附加条縄文で、Rの縄を軸棒ないしは軸縄に絡げた原体である。20はフネガイ科の貝による波状貝殻文を施す。前期浮島式であろう。21はやや曲線的な半隆線による区画文の上に三角形の沈刻文を連続して施す。勝坂式であろう。22は軽いキャリバー型の器形で口縁直下に無文帯を置き、その下に鋸歯条線文を施す。加曾利E式後半であろう。23は弛んだ枠状区画内に細かい縄文をまばらに施す。薄手で堅い焼成であることから加曾利B式と思われる。24は粗い縄文地に条線を施す。加曾利B式の粗製土器であろう。25は胎土に銀色の雲母と長石の角礫を多く含み、繊維は含まない。半截竹管による平行沈線帯を2段施す。時期不明で、前期諸磯B式かもしれない。26は土製円板である。一部欠損する。胎土に繊維を含まず、横位施文の縄文を施す。中期後半と思われる。



第7-13図 第20次調査地点出土遺物

第7-3表 縄文土器時期別出土量

時期		点数	点数比	重量(g)	重量比
早期		1	0.13%	8.27	0.08%
前期	前期中葉	651	86.80%	8247.01	76.53%
	前期後半	25	3.33%	377.88	3.51%
	前期末	14	1.87%	617.30	5.73%
前期 小計		690	92.00%	9242.19	85.77%
中期	中期中葉	2	0.27%	68.16	0.63%
	中期後葉	10	1.33%	345.96	3.21%
中期 小計		12	1.60%	414.12	3.84%
後期～晩期	後期中葉	6	0.80%	153.00	1.42%
	後期	6	0.80%	94.75	0.88%
	不明	4	0.53%	70.00	0.65%
後期～晩期 小計		16	2.13%	317.75	2.95%
時期不明		31	4.13%	793.50	7.36%
合計		750	100.00%	10775.83	100.00%

### 3. 縄文時代の石器 (第7-14・15図、第7-4表、図版7-5)

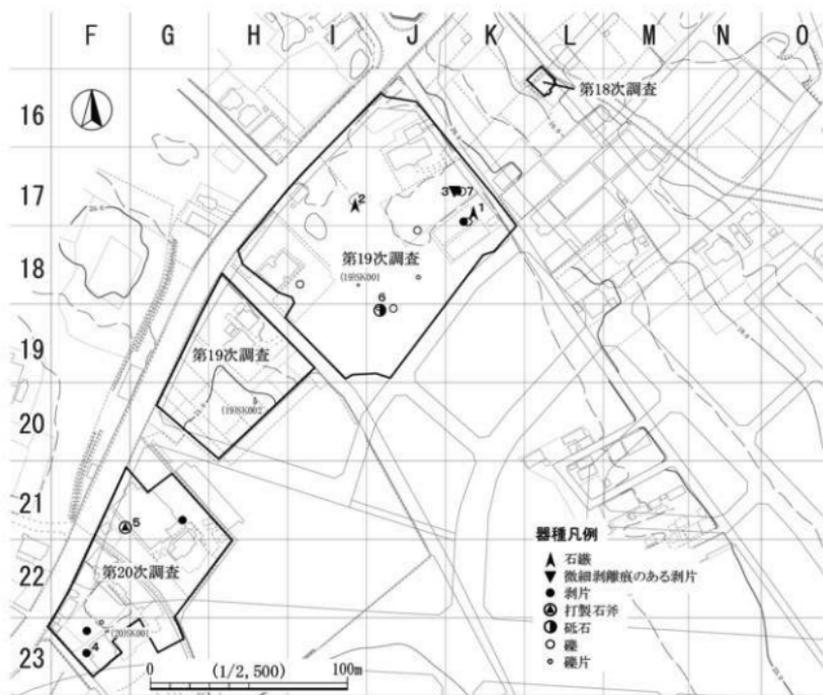
第18～20次調査区の上層からは、18点1,081.18gの石器類が出土した。器種の内訳は石鏃2点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片5点、打製石斧1点、礫5点、礫片3点、砥石1点である。石材は流紋岩5点、チャート3点、砂岩2点、ホルンフェルス2点、玄武岩・黒曜石・閃緑岩・頁岩・珪質頁岩・結晶片岩が各1点である。石器・石製品は遺構に伴うものではなく、そのほとんどが溝・トレンチ・グリッドでまとめて取り上げられた一括資料の中に含まれている。分布状況は第7-14図に示した。

1・2は石鏃である。1は青灰色を帯びた黒色で、玻璃質だが透明度の低い黒曜石製である。天城柏峠から産出する黒曜石に近似する。正面の背稜は直線的で、山高の断面形を呈する。脚部はやや内湾しており、左脚部尖端は欠損している。2は緑がかった灰褐色で黒色の筋が入るチャート製である。側縁が緩やかな弧状を呈する正三角形状であり、全体的に丸みの感じられる凹基鏃となっている。厚みは薄く、先端部には打点を有しない、めくれたような剥離痕がみられ、刺突の際に生じた衝撃剥離痕であろうと思われる。

3は微細剥離痕のある剥片である。剥離面は薄い黄褐色の粉を吹いたような濃灰色であり、細かい穴が万遍なく覆っているホルンフェルス製である。平坦な打面を持った縦長の剥片であり、側縁には刃こぼれ状の剥離痕がめぐる。右側縁上部は調査時の欠損だが、左側面には古い剥離面が筋状に残る。

4は剥片である。小豆色で不透明な部分と暗緑色で玻璃質部分とが混在するチャート製である。扁平な小型の円礫の一端が台石などに固定されて加撃された結果、打点直下で縦折れを起こしたものである。主要剥離面の片側は末端に向かう力が素直に働くが、側面では、打点で派生した力が背面側から主要剥離面に向かい、剥片を左右に分断するような折れ面が出現する。上下に残る自然面からは素材の大きさが類推できる。23F-44グリッドのⅡc層から出土しており、縄文時代に属する可能性が高い。

5は21F-89グリッドから出土した打製石斧である。素材には扁平な楕円形のホルンフェルス礫が用いられ、自然面の緩やかなカーブが正面形に活かされている。刃部を作るために正面下部の表面は薄く削が



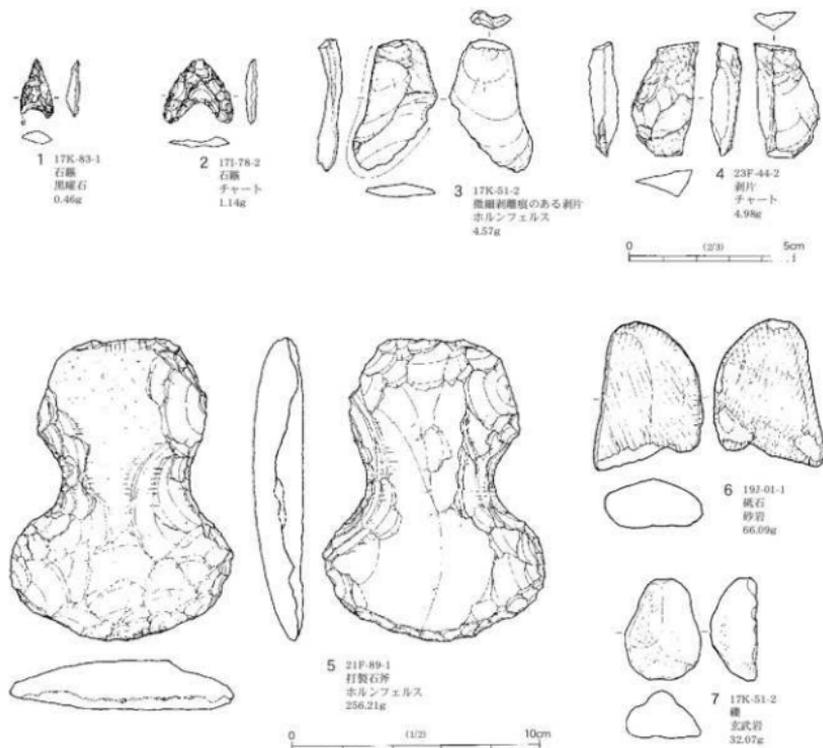
第7-14図 縄文時代の石器分布

れているが、丁寧な擦りによって器形は滑らかに整えられ、剥離作業によって弧状に成形されている。二次的な調整は正面・裏面の両方から施されており、風化の違いからは刃部のメンテナンスが繰り返行われたことが見て取れる。着柄部のくびれは側縁を延長した推定線から1.2cm～1.5cmほどで、剥離の後や角は除去され、丸みをもっている。

なお、21F-89グリッドでは縄文時代前期の土器が多数出土しているが、遺構に伴うものではないため、5の帰属時期は不明である。石斧の形態は分銅形を呈しており、千葉県では縄文時代中期末葉以降に顕在化する傾向がある。

6は砥石である。明るい黄褐色で、崩れやすい砂岩である。ほぼ全面に擦痕がみられる。角は摩耗して滑らかな面取り状であり、下部の折れ面のざらつきも擦られて平滑な面となっている。

7は礫である。光沢のない灰褐色の部分と、礫石のような鈍い光沢を持つ黒色部分に二分される玄武岩である。磁性が強く、持ち重りがする。山高な正面に比して不自然なほど平坦な裏面であるが、擦痕などの使用痕は観察されなかった。



第7-15図 縄文時代の石器

第7-4表 縄文時代の石器組成表

石材/器種	石鏃	微細刻離痕のある剥片	剥片	打製石斧	鏃	礫片	砥石	点数	点数比	重量(g)	重量比
流紋岩	0	0	1	0	3	1	0	5	27.78%	352.69	32.62%
玄武岩	0	0	0	0	1	0	0	1	5.56%	32.07	2.97%
黒曜石	1	0	0	0	0	0	0	1	5.56%	0.46	0.04%
閃緑岩	0	0	0	0	0	1	0	1	5.56%	322.65	29.84%
砂岩	0	0	0	0	0	1	1	2	11.11%	71.24	6.59%
頁岩	0	0	1	0	0	0	0	1	5.56%	0.38	0.04%
珪質頁岩	0	0	1	0	0	0	0	1	5.56%	6.61	0.61%
ホルンフェルス	0	1	0	1	0	0	0	2	11.11%	260.78	24.12%
結晶片岩	0	0	0	0	1	0	0	1	5.56%	24.03	2.22%
チャート	1	0	2	0	0	0	0	3	16.67%	10.27	0.95%
合計	2	1	5	1	5	3	1	18	100.00%	1081.18	100.00%
点数比	11.11%	5.56%	27.78%	5.56%	27.78%	16.67%	5.56%	100.00%			
重量(g)	1.60	4.57	17.18	256.21	386.99	348.54	66.09			1081.18	
重量比	0.15%	0.42%	1.59%	23.70%	35.79%	32.24%	6.11%				100.00%

## 第4節 近世

西初石五丁目遺跡の第20次調査では、調査範囲を斜めに二分するような北西—南東に走る野馬土手が検出された。野馬土手とは、牧内の馬が隣接する田畑を荒らすのを防ぐとともに、野犬などの害獣の侵入を阻む目的で牧を囲むように作られた土手ととらえられ、馬土手・野馬除土手・馬土堤・野馬土手・野馬除堤などと呼ばれることもある<sup>1)</sup>。牧は古代の律令制のもとに設けられたとされるが、現在確認されているのは江戸幕府によって経営されていた牧の遺構である。西初石五丁目遺跡で確認された牧は、慶長年間(1596～1615年)に整備された下総の小金五牧のうち上野牧に属し、「御林領主林請地林」として区画されている<sup>2)</sup>（『小金上野高田台両御牧大凡図』『流山市史 近世資料編Ⅱ』262～263頁）。明治2年に牧が廃止された後もその名残はあり、明治13年の迅速測図<sup>3)</sup>（千葉県下総国東葛飾郡下花輪村乃近傍村落 明治前期測量2万分の1 フランス式彩色地図）をみると、第20次調査の南東部一帯は「草地」として記録されている。

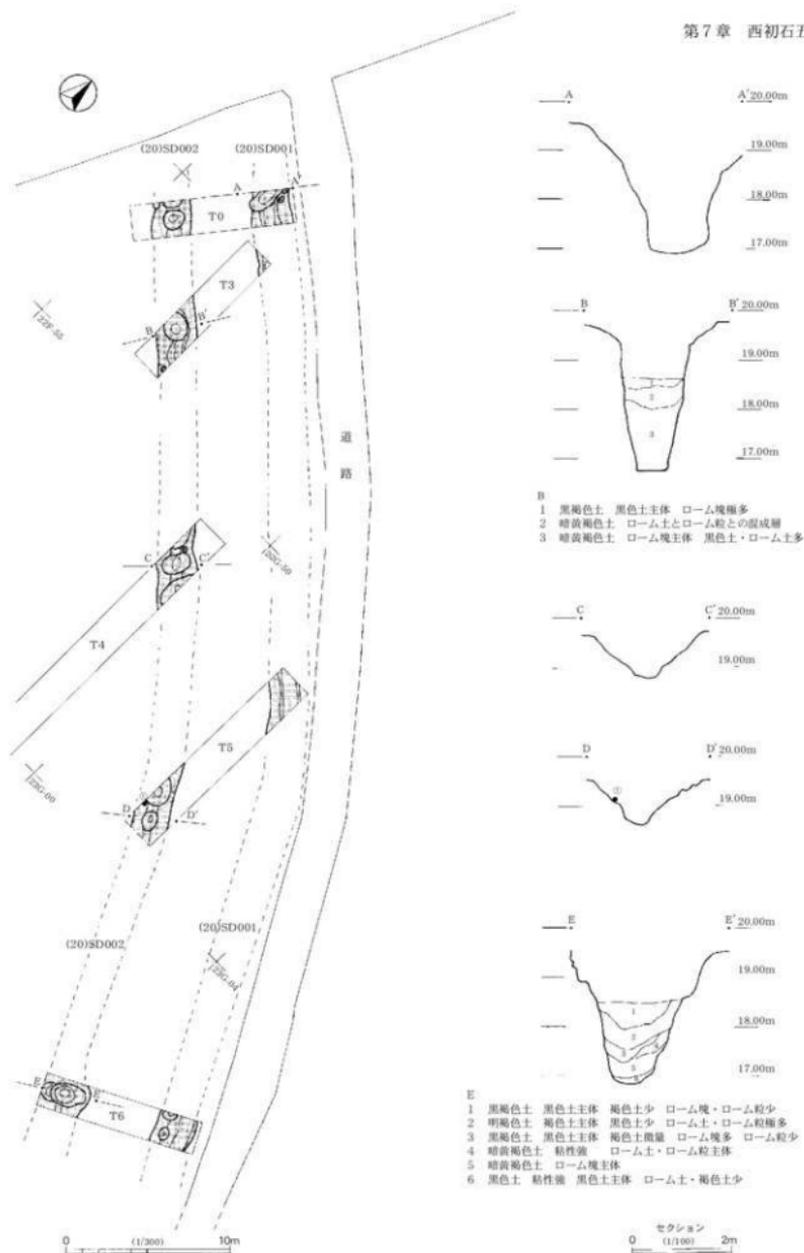
平成23年度の発掘調査直前風景には往時の面影が残ってはいないが、調査の結果、検出された野馬土手を挟むように沿う2条の堀(20)SD001、(20)SD002の存在が明らかになった。また野馬土手の北側には道路が走っており、この道が敷設された当時から野馬土手の起伏を避けて、あるいは沿うように人々の往来があったものと推測する。両堀には合計3基のシシ穴（もしくは犬落し穴）が確認され、北西に沿う(20)SD001には宝永の火山灰などの自然な土層の堆積状態が保たれていた。今回の調査では野馬土手・野馬堀の一部である68mほどが検出できたに過ぎないが、調査範囲外へと続いていることは明らかである。

### 1. 野馬土手・野馬堀（第7-16～18図、図版7-2）

野馬土手と野馬堀2条は、22F・22G・23Gグリッドの北西から南東に、緩やかな弧を描きながら延びている。調査範囲内は公共座標による大グリッドを設定した後、南北の軸に沿った幅2mのトレンチを入れ、野馬土手の存在を確認した。この後、端部2本のトレンチを野馬土手に直交するように設定し、遺構の規模や形状、土層の状態を観察するという方法を採用した。野馬土手の北東側堀を(20)SD001、南西側堀を(20)SD002とし、各野馬堀の位置及び検出状況を第7-16図にスクリーントーンで示した。北西に設定したトレンチから順に記載していく。

第7-17図に示したトレンチ0の土層断面A-A'を見ると、(20)SD002は表土から1.28m、(20)SD001は2.86mの深さである。表土は南西に向かって低くなるように見えるが、10mで20cmほどの傾斜であり、高みの削平・くぼみへの土盛りなど、後世に行われた整地化に起因する。(20)SD002は堀幅約3.5mであり、現表土から約1.28mに最底面がある。断面の形状はなだらかで、土層は第6層から第1層まで、自然堆積であると思われる。一方、(20)SD001は、表土から2.86mの深さまで掘った後、明黄褐色のロームブロック・ローム粒が混じった第8・9層で埋め戻し、堀の下部を整形している。第7層のローム土主体の黒褐色土もこの埋め戻した土とほぼ水平に堆積しており、人為的な結果と思われる。この後、第6層から第2層までは自然堆積であろう。なお、堀に切られる小穴(20)SD002の第7・8層、(20)SD001の第10層の覆土はいずれも明～暗黄褐色を呈し、低位面の標高が19.30m～19.50mである。

(20)SD001と(20)SD002の間にある野馬土手は、上部が削平され、わずかな下部のみが地中に残されていた。第a層は旧表土である第b層の上に盛られた暗黄褐色土である。ローム粒を非常に多く含んでおり、上記の小穴に含まれている黄褐色土や(20)SD001の第6層と近似する。ローム粒が僅かに混在してい



第7-16図 野馬土手・野馬堀(1)

る旧表土との違いは明らかであり、堀を掘った際の土であろうと推測する。

トレンチ3では(20)SD002の土層断面が得られた。調査時の所見は「シシ穴」であり、深さは3.04m、土坑の始まりから底部までは2.62mである。土坑上面の直径は1.36m、底面は60cmほどである。急角度で下部へ向かうため、断面は山高の逆台形である。土層は、第2・3層が北東の壁面に近いほど高く、中ほどでは低い堆積状態だが、第1層は水平に堆積している。

トレンチ4・5の(20)SD002は、どちらも1m近い深さを測る。一部の側壁が階段状になっているのは昇降のための足場であろうか。

トレンチ6では、トレンチ0同様、野馬土手に直交する土層断面と、シシ穴の断面を記録した(第7-18図)。まず、(20)SD002のシシ穴の平面形状であるが、堀幅を長軸とする楕円形をしている。規模は、長径2.88m、短径1.36m、最深度までは2.65mを測る。南東側の堀の上端から段を作りながらほぼ垂直に掘り下げ、山高の逆台形をした深くて狭い穴を作り出している。下端の直径は0.55mである。野馬土手側は南東側より緩やかである。底面には強い粘性で良く締まった黒色土が18cmほど堆積していた。ローム土はわずかに混入する程度なので、掘られた土が落ちてきたものではないだろう。この後、ローム土を主体とする暗黄褐色土の第5層、第4層が野馬土手側から堆積する。第3層は黒色土主体である。この上には明褐色土の第2層が乗っており、第3層は褐色土に挟まれるように検出されている。

次に、トレンチ6の南東側壁面であるが、シシ穴から南に0.4m離れた土層の断面を実測しており、宝永の火山灰や焼土を確認することができた。堀幅は2.5m~2.9mで、底部にさらに0.35m~0.45mの狭い堀が確認された。現表土面から底部までは1.9mである。堀の底部及びびならかな側壁にはローム土を主体にした褐色・黒色土がみられた。堆積状況から野馬土手に用いられた土が流れ込んだものと思われる。同様の土は調査時の野馬土手の堆積土には見られず、削平された上部にあったものではないだろうか。第10層の上面には黒色粒を多く含んだ第9層が、局所的に8cmほど堆積している。全体的に自然な堆積状況を示しているが、第6層には1707年の富士噴火の際に噴出した火山灰、いわゆる「宝永の火山灰」<sup>1)</sup>が最大8cmの厚みをもって堆積している。第3層は堀の形状に沿って20cm~40cmの帯状に焼土が厚く堆積する。

注1 宝永大噴火—宝永4年11月23日(1707年12月16日)に始まり、12月8日(12月31日)に終了した。この期間、噴火は一種ではなく、最初の4日は激しく噴火し、その後は小康状態と断続的な噴火を繰り返し、沈静化した。火山灰・降下物は当初「白灰」、その後「黒灰」に変わった。火口周辺での降下物は「降下軽石」→「降下スコリア」に移行した。降下物中の珪酸(二酸化珪素)の含有量が変化したためといわれている。噴火初期の「白灰」はデイサイト質で、富士山としては珍しい。「黒灰」は富士山を形成する玄武岩質と一致する。約800年間噴火がなかったため、比重の軽い白っぽい軽石や火山灰が先に放出され、その後本来の黒いスコリアが続いたものである。

トレンチ6の(20)SD001の堀は、2.25m~2.90mの幅をもつ。下端は0.38m~0.52m、深さは約2.8mである。野馬土手側には段差がみられ、約0.5m毎に3段の平坦面がつけられている。土層の堆積状況は西側の(20)SD002とは違い、宝永の火山灰や焼土は検出されなかった。また、両脇にみられた小穴も東側では確認できなかった。下位の層からみていくと、第15層は暗黄褐色土で粘性が強く、ロームブロックが主体である。淵にのみ8cmほどが薄く堆積しており、黒色土が少々混じるが基本土層のⅦ層ではないかと思われる。この上に当時の表土と思われる第14層の黒色土が流れ込み、第13~5層(第9・6層を除く)まで

はローム土・粒が多く含まれ、当遺跡のX層～IV層の土層と近似する。野馬土手及び東側の堀上に積み上げられた土が崩れて自然に堆積したものであろう。第9・6層はローム粒が少なく黒色粒子が多量に混入している。第5層は褐色土主体、第4層は黒色土である。第3層以上は西側の(20)SD002とほぼ同じ土質であるが、西側の第3層にみられた焼土は確認されなかった。

野馬土手の第0層は、粘性があり良く締まった旧表土である。II b層の上面は旧表土に覆われているが、これより上位の層は両堀を掘った際の土が順次盛り上げられたものである。層の重なり具合から、(20)SD002の方が若干早い時期に掘られたと考えられる。時間の幅は不明であるが、両方向から積み上げられ、固められたあと、第A層が盛られていることから両堀が同じ目的—野馬土手を盛り上げる—で構築されたものであることがわかる。

以上、トレンチ0、3、4、5、6の土層断面から知り得た情報を整理すると、当遺跡の野馬土手は二重土手（にじゅうどて、あるいはふたえどて）と呼ばれるもので、大土手と、これを挟む堀2条が検出されている。掘り上げた土で牧側に小土手、村側に大土手を築き境界を成したものであるが、牧側の土手は現在道路となっており残存していない。

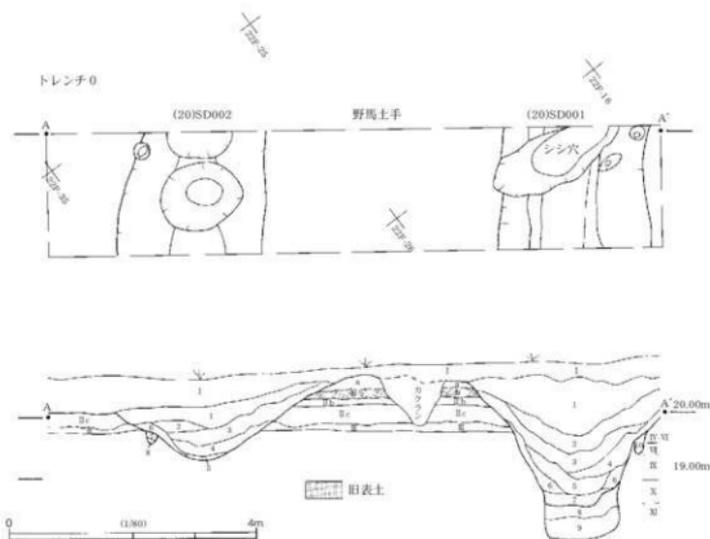
シシ穴（犬落し穴を含む）には人為的に埋め戻された穴と自然堆積で埋まった穴とがある。トレンチ3のシシ穴は埋め戻され、トレンチ0にはシシ網を設置した際の杭痕のような小ビットがみられるが、堀は自然に埋まったらしい。トレンチ6のシシ穴もまた自然堆積の様相を呈しているが、南方に約1mの位置で実測した土層断面には宝永の火山灰が確認されているため、堀が構築された後にシシ穴が掘られたか、降灰後に穴の中が清掃されたものと推測される。

野馬土手で検出された遺物は、村側の堀である(20)SD002から古銭2枚、陶器1片が出土した。銭貨は寛永通寶（古寛永）と紹聖元寶である。

#### 出土遺物（第7-20図、図版7-5）

銭貨が2点出土した。1はトレンチ5の調査で(20)SD002の堀から出土した寛永通寶である。堀の最底部ではなく、下端にかかる直前でとどまっていた。17世紀前半の寛永～万治期にかけて鑄造された「古寛永」と称される銅銭で、大きさは外郭径25.10mm、内郭径6.21mm、銭厚1.54mm、重量2.93gである。表面の外縁部の縁幅は2.85mm～3.18mm、内郭の縁幅は1.12mmである。裏の外縁部の縁幅は2.52mm～3.83mmである。全体に風化して緑色がかっており、「寛」と「寶」の文字が不鮮明であるが、8倍に拡大して観察した結果、「寶」字の「貝」の五画目から六画目が続いており、「ス貝」と呼ばれる状態であるのが確認できた。同様の銭貨は、印西市泉北側第2遺跡の1号溝から1点が出土している。

2はトレンチ6から出土した紹聖元寶で、北宋銭と目される。大きさは外郭径23.50mm、内郭径6.92mm、銭厚1.09mm、重量2.30gである。表の外側の縁幅は2.22mm～2.50mm、内側の縁は約1mmである。裏の外側の縁幅は2.80mm～3.00mm、内側の縁幅は1.20mm～1.30mmであり、1と同様に風化している。トレンチ6では(20)SD001、(20)SD002、シシ穴が検出されており、いずれかの遺構に伴うものと推定されるため、覆土中一括遺物であるが本項に掲載した。



トレンチ0 (20)SD002

- 1 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 黒色土・ローム土少  $\phi 2.5\text{mm}$ ローム粒少層  $\phi 2.3\text{mm}$ 黒色粒少層
- 2 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 黒色土やや多 ローム土微量  $\phi 2.5\text{mm}$ ローム粒・黒色粒少層 1より暗い
- 3 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土少  $\phi 2.3\text{mm}$ ローム粒・黒色粒やや多層 2より明るい
- 4 黒褐色土 粘性 しまる 黒色土主体 褐色土・ローム土少  $\phi 1.2\text{mm}$ ローム粒少層
- 5 黒色土 粘性やや強 しまる 黒色土主体 ローム土やや多  $\phi 1.2\text{cm}$ ローム塊少層  $\phi 2.5\text{mm}$ ローム粒やや多層
- 6 明褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土多  $\phi 1.2\text{cm}$ ローム塊少層  $\phi 1.0\text{mm}$ ローム粒多層
- 7 暗黄褐色土 粘性 しまる ローム土主体 褐色土・黒色土少  $\phi 2.3\text{cm}$ ローム塊少層  $\phi 2.3\text{mm}$ ローム粒少層
- 8 明黄褐色土 粘性 しまる ローム土主体 ローム土と $\phi 2.3\text{cm}$ ローム塊の混成層

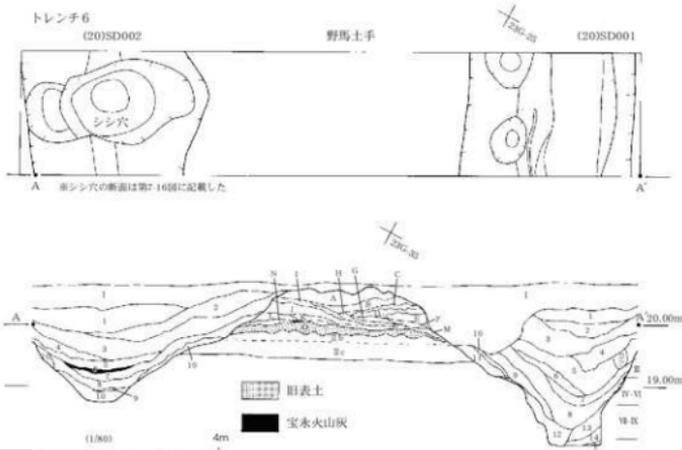
トレンチ0 (20)SD001

- 1 暗褐色土 粘性・しまり弱 褐色土主体 ローム土少  $\phi 1.3\text{cm}$ ローム塊やや多層  $\phi 1.10\text{mm}$ ローム粒多層  $\phi 2.5\text{mm}$ 黒色粒微量層
- 2 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土少  $\phi 1.2\text{cm}$ ローム塊微量層  $\phi 1.10\text{mm}$ ローム粒少層  $\phi 2.5\text{mm}$ 黒色粒やや多層 1より暗い
- 3 黒褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 褐色土多 ローム土少  $\phi 1.5\text{mm}$ ローム粒やや多層  $\phi 2.5\text{mm}$ 黒色粒多層
- 4 明褐色土 粘性 しまりやや弱 褐色土主体 ローム土極多  $\phi 1.2\text{cm}$ ローム塊少層  $\phi 1.10\text{mm}$ ローム粒多層
- 5 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土少  $\phi 1.5\text{mm}$ ローム粒多層  $\phi 2.5\text{mm}$ 黒色粒多層 2より暗い
- 6 暗黄褐色土 粘性 しまり弱 ローム土主体 褐色土多  $\phi 1.5\text{cm}$ ローム塊極多  $\phi 1.10\text{mm}$ ローム粒極多 ポツポツの土質
- 7 黒褐色土 粘性やや強 しまり弱 黒色土主体 ローム土極多  $\phi 1.5\text{cm}$ ローム塊少層  $\phi 1.10\text{mm}$ ローム粒多層
- 8 明黄褐色土 粘性強 しまりやや強 ローム土と $\phi 1.5\text{cm}$ ローム塊と $\phi 1.10\text{mm}$ ローム粒の混成層 褐色土・黒色土少層
- 9 明黄褐色土 粘性・しまり強 ローム土と $\phi 1.5\text{cm}$ ローム塊と $\phi 1.10\text{mm}$ ローム粒の混成層 褐色土・黒色土少層  
※8と9は、9の方がローム土主体でローム塊・粒が少なく、8の方がより弱くポツポツした土質
- 10 暗褐色土 粘性 しまり弱 ローム土主体 褐色土少  $\phi 1.10\text{mm}$ ローム粒多層  
※8と9は土坑を埋め戻し、野馬塚下部を整形している

トレンチ0 野馬土手

- a 暗黄褐色土 粘性 しまりやや弱 ローム土主体 褐色土極多  $\phi 2.3\text{cm}$ ローム塊極多層  $\phi 1.10\text{mm}$ ローム粒多層
- b 黒色土 粘性やや強 しまる 黒色土主体 褐色土多 旧表土層  $\phi 1.2\text{mm}$ ローム粒微量層

第7-17図 野馬土手・野馬塚(2)



## トレンチ6 (2015D002)

※1層=表土 段乱、ゴミ、砂利等の整地層 腐植土含む

- 1 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 黒色土多  $\phi$ 1.3cmローム塊微量  $\phi$ 1.2mmローム粒少  $\phi$ 2.3mm黒色粒少  $\phi$ 2.3mm炭化物片少
- 2 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土多  $\phi$ 2.3mmローム粒多  $\phi$ 2.3mm黒色粒少 1より明い
- 3 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土多  $\phi$ 2.3mmローム粒・黒色粒  $\phi$ 1.3mm赤色土粒多 2より明い
- 4 黒褐色土 粘性 しまる 黒色土主体 褐色土・ローム土少  $\phi$ 1.2mmローム粒少
- 5 灰黄色土 粘性 しまる 褐色土主体 褐色土多  $\phi$ 2.3-5cmローム塊微量  $\phi$ 1.3mmローム粒多  $\phi$ 2.3mm黒色粒少 4より明い
- 6 灰黄色土 粘性 しまる 褐色土主体 褐色土多  $\phi$ 3mmローム粒少 宝永火山灰土砂質 ゼラザラしている
- 7 黒褐色土 粘性 しまる ローム土や中  $\phi$ 1.3mmローム粒・黒色粒 5より明い
- 8 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 褐色土・ローム土や中  $\phi$ 1.3mmローム粒多  $\phi$ 2.3mm黒色粒多 ポツポツした土質
- 9 暗褐色土 粘性 しまる ローム土と $\phi$ 5cmローム塊主体 黒色土多  $\phi$ 2.3mmローム粒・黒色粒多
- 10 暗褐色土 粘性 やや強 しまる 弱 ローム土主体 褐色土・黒色土や中  $\phi$ 2.3cmローム塊少  $\phi$ 1.3mmローム粒多 ポツポツした粒状の土質

## トレンチ6 (2015D001)

※1層=表土 段乱、ゴミ、砂利等の整地層 腐植土含む

- 1 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 黒色土多 ローム土少  $\phi$ 1.2mmローム粒少  $\phi$ 2.3mm黒色粒多 炭化物片少
- 2 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土多  $\phi$ 2.3mmローム粒・黒色粒 1より明い
- 3 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 褐色土少 ローム土多  $\phi$ 1.3mmローム粒少  $\phi$ 2.3mm黒色粒多 ややポツポツした土質
- 4 黒褐色土 粘性 しまる 黒色土主体 褐色土多  $\phi$ 1.3cmローム塊微量  $\phi$ 1.3mmローム粒少  $\phi$ 2.3mm黒色粒少
- 5 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 褐色土少 ローム土や中  $\phi$ 2.3cmローム塊少  $\phi$ 1.5mmローム粒少  $\phi$ 2.3mm黒色粒多
- 6 黒褐色土 粘性 しまる 黒色土主体 褐色土・ローム土少  $\phi$ 1.2mmローム粒微量  $\phi$ 2.3mm黒色粒多
- 7 黒褐色土 粘性 しまる 黒色土主体 褐色土・ローム土少  $\phi$ 1.5mmローム粒多  $\phi$ 2.3mm黒色粒多
- 8 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 褐色土・ローム土や中  $\phi$ 1.2mmローム粒少  $\phi$ 2.3mm黒色粒多 7より明い
- 9 黒褐色土 粘性 しまる 黒色土主体 ローム土少  $\phi$ 1.2cmローム塊少  $\phi$ 1.3mmローム粒少  $\phi$ 2.3mm黒色粒多
- 10 暗黄色土 粘性 しまる やや中  $\phi$ 2.3cmローム塊主体 褐色土多  $\phi$ 1.1mmローム粒多
- 11 黒褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土や中  $\phi$ 1.5mmローム粒多  $\phi$ 1.3cmローム塊少  $\phi$ 2.3mm黒色粒多
- 12 黒褐色土 粘性 しまる 黒色土主体 褐色土少 ローム土多  $\phi$ 1.5mmローム粒多  $\phi$ 2.3mm黒色粒少
- 13 暗黄色土 粘性 しまる やや強 ローム土とローム塊の混成層 褐色土多 黒色土少  $\phi$ 2.5cmローム塊多
- 14 黒褐色土 粘性 しまる 黒色土主体  $\phi$ 2.3cmローム塊微量  $\phi$ 1.1mmローム粒少  $\phi$ 2.3mm黒色粒多
- 15 暗黄色土 粘性 強 しまる  $\phi$ 2.3-5cmローム塊主体 ローム土多 黒色土少  $\phi$ 1.1mmローム粒多

※1~3は2015D002に似るが3層に換した

## トレンチ6 野馬土手

※1層=表土 段乱、ゴミ、砂利等の整地層 腐植土含む

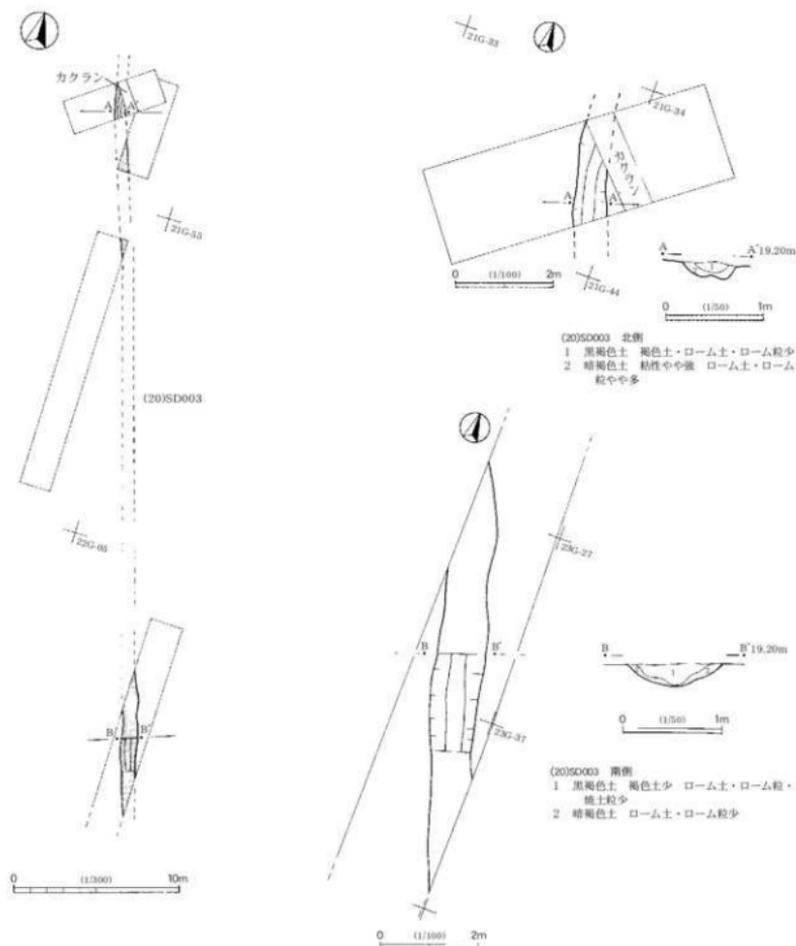
- A 黒褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 褐色土・ローム土少  $\phi$ 1.5mmローム粒多  $\phi$ 2.3mm黒色粒多
- B 暗黄色土 粘性 しまる やや強 ローム土と褐色土・ローム塊の混成層 褐色土多  $\phi$ 2.3mm黒色粒少
- C 暗褐色土 粘性 しまる ローム土主体 褐色土多  $\phi$ 1.2cmローム塊少  $\phi$ 1.3mmローム粒・黒色粒少 2より明い
- D 暗黄色土 粘性 しまる やや強 ローム土と $\phi$ 5-10cmローム塊の混成層 褐色土多  $\phi$ 2.3mmローム粒・黒色粒少
- E 黒色土 粘性 しまる 褐色土主体 褐色土・ローム土多  $\phi$ 1.2mmローム塊少 やや砂質 ゼラザラ
- F 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 褐色土多 ローム土少  $\phi$ 1.2mmローム塊少  $\phi$ 2.3mm黒色粒微量
- G 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土や中  $\phi$ 1.2mmローム塊少  $\phi$ 2.3mm黒色粒微量 Fより明い
- H 暗黄色土 粘性 しまる ローム土と $\phi$ 1.5mmローム塊の混成層 褐色土多  $\phi$ 1.2cmローム塊少  $\phi$ 2.3mm黒色粒微量
- I 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土や中  $\phi$ 1.2mmローム粒少  $\phi$ 2.3mm黒色粒微量
- J 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土少  $\phi$ 1.3mmローム粒多  $\phi$ 2.3mm黒色粒少 1より明い
- K 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土多  $\phi$ 1.2cmローム塊微量  $\phi$ 2.5mmローム粒多  $\phi$ 2.3mm黒色粒微量
- L 暗褐色土 粘性 しまる 褐色土主体 ローム土少  $\phi$ 2.3mmローム粒多  $\phi$ 2.3mm黒色粒多 ポツポツした土質 1より明い
- M 黒色土 粘性 しまる やや強  $\phi$ 2.3mm黒色粒主体 褐色土多 褐色土少 ローム土多  $\phi$ 1.2mmローム粒多
- N 暗黄色土 粘性 しまる やや強 褐色土・ローム土と $\phi$ 1.1mmローム塊の混成層 褐色土多  $\phi$ 1.3cmローム粒少
- O 黒色土 粘性 しまる 田裏土層 下面に向かい湿み増す 褐色土主体 褐色土・ローム土少  $\phi$ 2.3mm黒色粒多  $\phi$ 1.2mmローム粒微量

第7-18図 野馬土手・野馬堀(3)

## 2. 溝状遺構

(20)SD003 (第7-19図、図版7-2)

溝は21G-33グリッドから22G-36グリッドにかけて、4本の確認トレンチで検出された。第7-19図は推定ラインを加味した(20)SD003の全体図であるが、溝は調査区域を越えて延びていることは明らかである。溝の幅は0.8m~1.0m、溝の下端は35cm~40cmほどである。検出面からの深さは14cm~20cmである。



第7-19図 溝(20)SD003

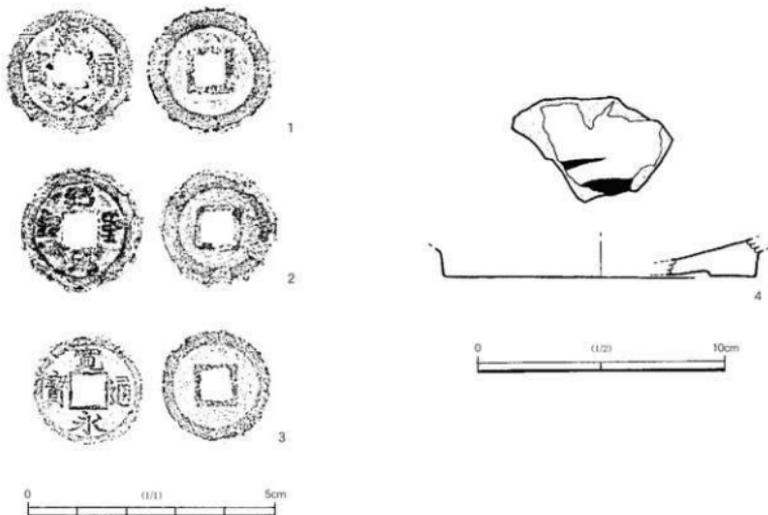
平坦な地形ではあるが、北側が僅かに高く、溝を流れる水は北から南へ向かったと推測される。

なお、この遺構に伴う遺物は検出されなかった。帰属時期は不明である。

### 3. グリッド出土遺物 (第7-20図、図版7-5)

3は銭貨である。16I・16J・17H・17I・17J・17K・18H・18I・18J・18K・19G・19H・19I・19J・20G・20H・20Iグリッドが含まれる第19次調査時に出土したが、詳しい位置や層位は不明である。寛文8年(1668年)以降に鑄造された新寛永と称される寛永通寶である。大きさは外郭径23.10mm、内郭径6.10mm、銭厚1.14mm、重量1.93gである。表面の外縁部の縁幅は1.65mm～2.00mm、内郭の縁幅は0.72mmである。裏の外縁部の縁幅は2.90mm、内縁幅は1.15mmである。全体に緑白色がかっており、第7-20図1よりも小型である。寶の文字の貝部分は五画目と六画目が離れており、いわゆる「八貝」と呼ばれる状態に鑄られている。

4は陶器である。トレンチ3から瀬戸・美濃染付鉢の高台片1点が出土した。残存する器高は1.60cm、推定される底径は12.60cmである。2同様、野馬土手の覆土中から、一括して取り上げられた小片である。正確な位置や層位は不明であるが、出土した陶器の年代は18世紀に位置付けられるものであり、近世の遺物として図示した。



第7-20図 近世の出土遺物

- 注1 千葉県教育委員会 2006 『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡』 (財)千葉県教育振興財団  
2 流山市史 1995 『小金上野高田台岡脚牧大凡図』流山市史 近世資料編Ⅱ pp.262～263  
3 明治13年の迅速測図 (千葉県下下総国東葛飾郡下花輪村乃近傍村落 明治前期測量2万分の1 フランス式彩色地図)

#### 野馬土手参考文献として

- 鈴木国邦 1979 『小金原今昔』 審書房  
青木源内 1980 『松戸史談』第20号 松戸史談会  
河野達二ほか 1985 『房総の牧』第三号 房総の牧研究会  
河野辰二ほか 1988 『房総の牧』第四号 房総の牧研究会  
八木康行 2000 『小金牧と狩り』企画展図録 八千代市立郷土資料館  
青木更吉 2001 『野馬土手は泣いている 小金牧』 審書房出版  
青木更吉 2010 『小金原を歩く 將軍鹿狩りと水戸家鷹狩り』 審書房

#### 銭貨参考文献として

- 小高春雄 2013 『出土銭貨による年代推定—宣徳以降を中心にして—』『出土銭貨』第33号  
永井久美男編 1997 『近世の出土銭Ⅰ』—論考編—兵庫埋蔵銭調査会  
永井久美男編 1998 『近世の出土銭Ⅱ』—分類図版編—兵庫埋蔵銭調査会  
都司勇夫編 1981 『日本貨幣図鑑』 東洋経済新報社  
(公財)千葉県教育振興財団 2013 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXIX —印西市泉北側第2遺跡(Ⅱ)—』  
(財)千葉県文化財センター 2002 『印西市新井堀Ⅰ遺跡・新井堀Ⅰ野馬土手 —印西市道00-026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書—』  
(財)千葉県教育振興財団 2011 『千原台ニュータウンXXVI —市原市草刈遺跡(Ⅰ区)—』

#### 陶器参考文献として

- 加藤朋也ほか 1987 『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』 瀬戸市民俗資料館

なお、野馬土手を始め、古銭や出土遺物に関しては、上席文化財主事 小高春雄氏に多くのご教示をいただいた。

## 第5節 まとめ

### 1. 旧石器時代

旧石器時代の出土地点位置図は第7-2図のとおりである。今回報告する成果は第20次調査分で、第1～17次調査分については報告書第596集(2008年刊行)、第18・19次調査分は第706集(2013年刊行)にて報告済みである。旧石器時代の集中地点は調査回数に関わらず、遺跡全体で順次通し番号が振られている。第1～17次調査では第1～4地点、第18・19次調査では第5地点、第20次調査で検出した石器集中部は1か所であり、前例からの流れを汲んで第6地点と呼称した。

第2・3・5地点はⅣ層下部～Ⅳ層中部に生活面を持ち、第4地点出土の6点はⅢ層に包含される。第6地点と同じくⅣ層に生活面がある第1地点の石器群の石材は、ガラス質黒色安山岩・珪質頁岩・チャートが主体であり、88点中黒曜石は2点のみである。素材の周縁を敲打することで貝殻状の剥片が生産されており、第20次調査の第6地点とは明らかに様相を異にする。第6地点の石器群は、ほとんどが同一母岩

と推定される黒曜石であり、石核から石刃が作出される工程をうかがうことができる。あくまで目視であるが、この黒曜石は蓼科冷山群産と大変近似している。同様の石材が用いられ、石刃・剥片類が検出されたⅨ層の石器群としては市原市草刈六之台遺跡<sup>1)</sup>第3地点、同草刈Ⅰ区<sup>2)</sup>第4文化層、同ヤジ山遺跡<sup>3)</sup>第2文化層などが挙げられる。また、流山市の南に隣接する松戸市では、関場遺跡<sup>4)</sup>第2地点で12点の蓼科冷山群産黒曜石製剥片石器が出土している。

注1 (財)千葉県文化財センター 1994 『千原台ニュータウンⅥ 一草刈六之台遺跡一』

2 (財)千葉県文化財センター 2005 『千原台ニュータウンⅩⅢ 一市原市草刈遺跡(西部地区旧石器時代)一』

3 (財)千葉県文化財センター 2000 『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書5—市原市中伊沢遺跡・百目木遺跡・下椎木遺跡・志保知遺跡・ヤジ山遺跡・細山(1)(2)遺跡—』

4 松戸市立博物館 2009 『関場遺跡第2地点出土旧石器資料報告』『寒風台遺跡出土石器再整理報告』

## 2. 縄文時代

土坑3基を検出した。土坑から出土した土器、遺構外出土の土器の多くは縄文時代前期の黒浜期に属するものである。

## 3. 近世

野馬土手の一部を検出した。土手の両側には堀が廻らされ、シシ穴(犬落し穴)3基が確認できた。堀には宝永の火山灰が自然堆積した状態が残されており、1707年以前に構築されたことがわかる。出土した古寛永の鋳造年代が1600年代前半であることから、構築時期は17世紀前～中頃と推定される。

野馬土手は二重土手(にじゅうどて、あるいはふたえどて)と呼ばれるもので、掘り上げた土で牧側に小土手、村側に大土手を築き境界を成したものである。シシ穴(犬落し穴を含む)には人為的に埋め戻された穴と自然堆積で埋まった穴があり、シシ網を設置した際の杭痕と推測されるピットが確認できた。

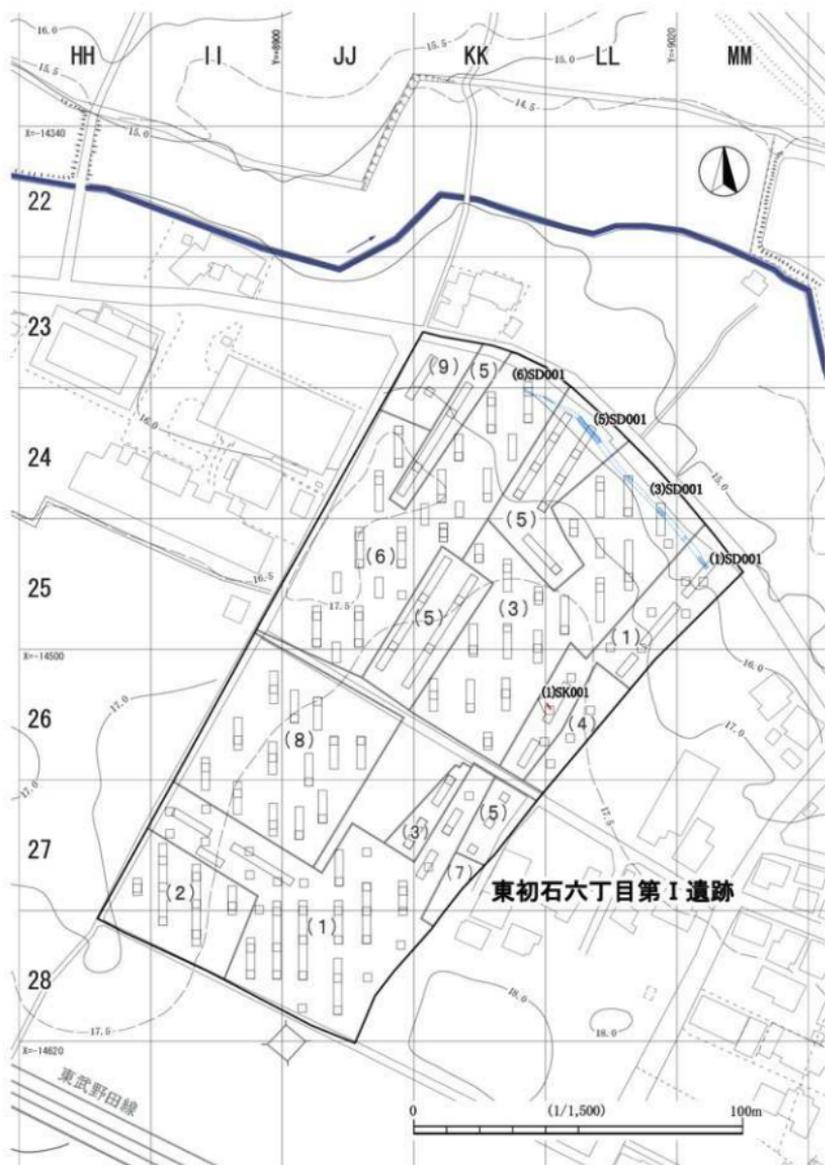
## 第8章 東初石六丁目第I遺跡

### 第1節 遺跡の概要 (第8-1・2図)

東初石六丁目第I遺跡の調査状況は第8-1・2図のとおりであり、今回は第1次から第9次調査までの上層分の報告を行う。遺跡の標高は15.5m～17.5mであり、北側の大堀川に向かって緩やかに傾斜している。遺跡北側の縁辺部から大堀川までは最短で25mほどであり、標高差は1.5mである。大堀川は利根川水系のひとつで、柏市十余二の青田新田に源を発し、こんぶくろ池や弁天池からの流れや湧水などを合わ



第8-1図 東初石六丁目第I遺跡調査状況



第8-2図 東初石六丁目第I遺跡調査範囲と遺構の位置

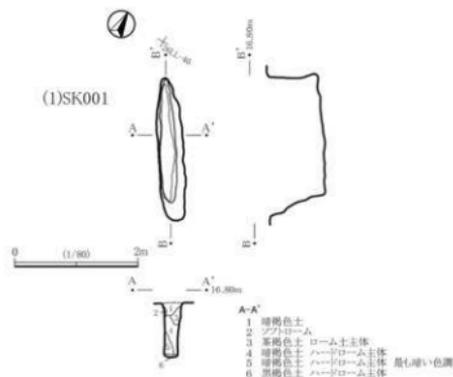
せながら手賀沼に注いでいる。大堀川上流の地下水位は高く、昭和初期にはいたるところに湧水地があったことが知られており、当遺跡からも北側の道路に沿って、近世の溝状遺構1条が検出されている。このほかの遺構としては、溝から30m南方の高まりを持った台地部分に、縄文時代の陥穴1基が作られていた。

## 第2節 縄文時代

東初石六丁目第1遺跡では縄文時代の陥穴1基を検出した。

### (1)SK001 (第8-3図、図版8-1)

標高17.5mの26LL-40グリッドに位置する。溝状の陥穴で、規模は長軸2.32m、短軸0.44m、深さは約1mを測る。長軸の方位はN-30°-Wである。縦の断面形は箱状を示し、北側の底面はわずかに壁面に食い込む。南側の壁は北面よりも傾斜が緩く、凹凸がある。階段状に成形されていた可能性があるが、推測の域を出ない。覆土はローム土を主体とする。遺構に伴う遺物はない。



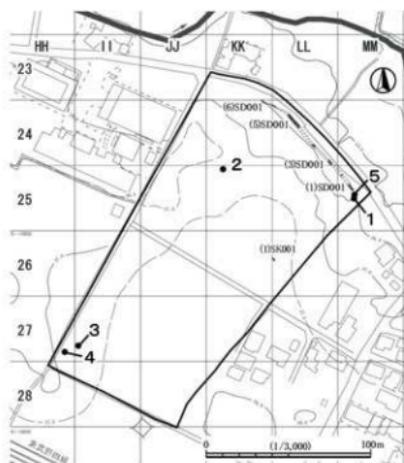
第8-3図 (1)SK001

### グリッド出土遺物 (第8-4・5図、図版8-2)

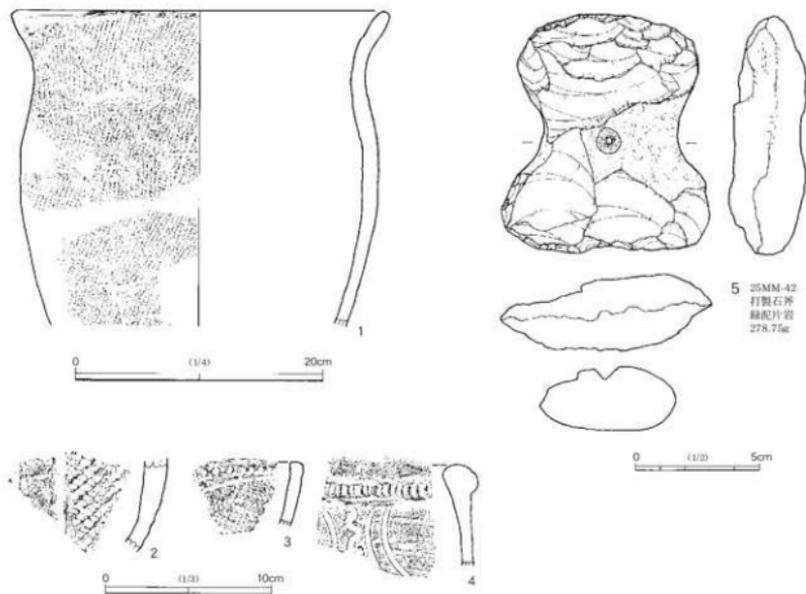
調査区内に散漫に分布する土器片75点、石器類2点のうち、縄文土器4点、石斧1点を図化した。

1は25MM-42・52グリッドから出土した後期の堀之内1式土器である、多数の土器片が接合し、上部の形態を確認できるまでに復元された。底部片も出土しているが間隙多く、接合には至っていない。復元した土器の口径は直径30.6cm、遺存する器高は25.6cmである。最大径は口縁部にあり、口唇部は平らな面取り状である。口唇部を除いた全面に縄文が施されている。

2は25KK-02グリッドから出土した中期加曽利E式後半の胴部片である。文様は縄文を地文とし、磨



第8-4図 グリッド出土遺物分布



第8-5図 グリッド出土遺物

消懸垂文が施される。

3は27II-70グリッドから出土した後期加曾利B式の口縁部である。

4は27HH-88グリッドから出土した晩期安行3式前半期の粗製土器口縁部である。

5は25MM-42グリッドから出土した打製石斧である。緑泥片岩製の分銅形で、器体には直径約1cm、深さ5mmほどの円錐形のくぼみがある。石皿が転用されたと推測するが、くぼみが器体の中央に位置することから、なんらかの機能を有した可能性がある。着柄部は帯状の摩耗痕が観察される。上部、下部とも刃部の消耗が著しい。1の分布域と重なることから後期の堀之内式期に属する遺物と考えられる。

### 第3節 近世 (第8-2図、図版8-1)

調査範囲の北側縁辺を区画するように近世の溝が1条検出された。第1・3・5・6次調査で確認された一連の溝であり、検出された長さは約80m、溝幅は1.0m~1.7m、深さは40cm~60cmである。この溝に伴う遺物は出土していない。

### 第4節 まとめ

発掘調査は平成15年1月から平成21年2月にかけて、9次に分けて断続的に行われた。下層は平成23年度に既刊であり、流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書5第4章で掲載した。このたびは上層のみの報告を行った。

遺構としては縄文時代の陥穴1基と、近世の溝1条が検出された。どちらにも遺物は伴っていないが、グリッド出土遺物として、縄文時代中期後半~晩期の土器4点と石斧1点を図示することができた。中でも遺跡の東端にあたる25MMグリッドでは、散漫な中にもまとまりをもった遺物分布域があり、多数の破片からなる深鉢形土器と、1点の分銅形石斧を確認できた。調査区外へと広がりを感じさせる出土状況である。

## 第9章 十太夫第I遺跡

### 第1節 遺跡の概要 (第9-1・2図)

十太夫第I遺跡の調査状況は第9-1・2図のとおりである。今回は第1次から第6次調査の報告を行う。遺跡は流山市十太夫、市野谷に所在し、江戸川によって開析された小支谷に面する標高15m～18mの台地上に立地する。明治13年の地図をみると、この一帯は松林となっており、水田が溝状に入っていた。現在、調査区外の南側に遺跡の区画に沿うように、かつての水田であった大堀川が西から東へ流れている。

調査区西側には縄文時代の土坑・陥穴各1基、近世の溝状遺構4条が検出されているが、東側では遺構が確認されていない。東側の大部分は水田に盛り土をした畑地であったため、現表土下1.8mほどでは現在でも所々で湧水が湧く地点がある。立川ローム層は調査区北側のわずかな部分でのみ確認されているが、東側の表土はほとんどが客土であり、遺構の帰属時期の特定は困難を要した。

なお、十太夫第I遺跡は第1次調査から第6次調査まで、遺跡範囲が細かく区分されているが、縄文時代では遺構名の重複はなく、近世の溝は第2～4次調査にまたがる。このため、次数を表記せず、遺構名のみを記すこととした。また、旧石器時代の遺物は検出されなかった。

### 第2節 縄文時代

縄文時代の遺構は土坑1基と陥穴1基である。

#### 土坑

##### SK001 (第9-3図、第9-1表、図版9-1)

遺跡の北西、20HH-20グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、長軸2.18m、短軸1.45m、深さ17cmと浅い。主軸の方向はN-36°-Eである。底面はやや凹凸がある。出土遺物はない。構築時期は不明である。

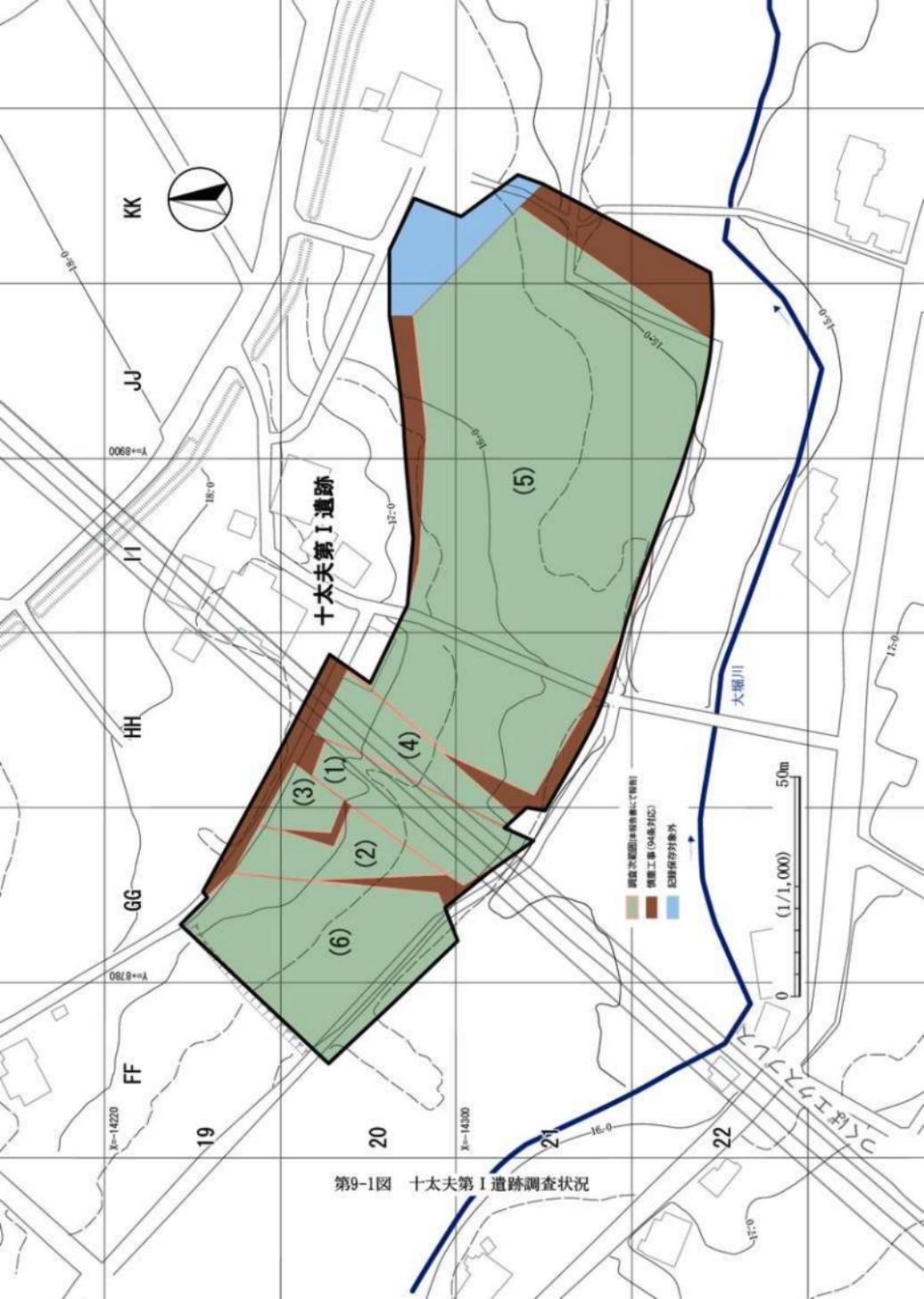
#### 陥穴

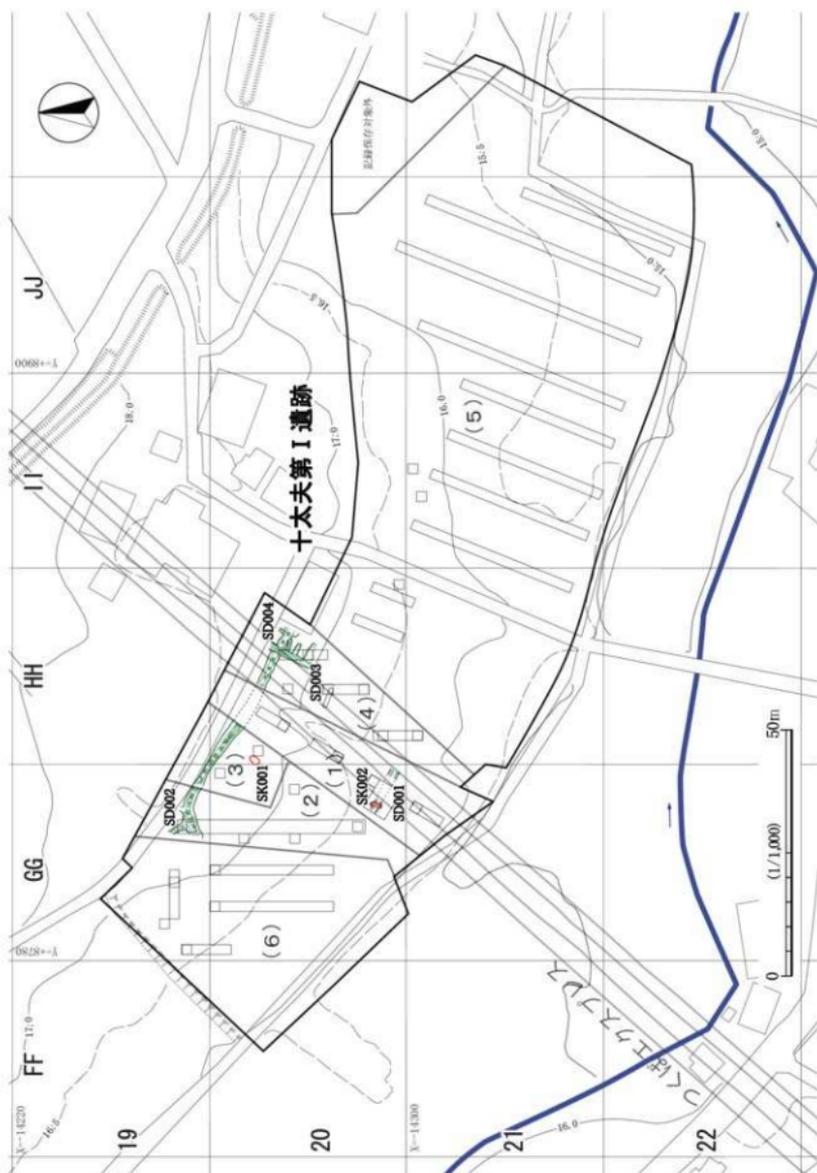
##### SK002 (第9-3図、第9-1表、図版9-1)

遺跡の南西、20GG-87・88グリッドに位置する。平面形態は長楕円形で、長軸2.06m、短軸0.73m、深さ78cmを測るが、近世の溝に切り崩されているため正確な深さは不明である。主軸の方向はN-10°-Eである。覆土中から縄文時代の土器片が9点出土し、うち4点を第9-4図2～5に示した。遺構の構築時期はこれらの土器が作られる以前のものであろう。

#### 出土遺物 (第9-4図、第9-2表、図版8-2)

十太夫第I遺跡では縄文時代早期～後期の土器片約50点が出土している。遺構の構築された時期に伴う土器はなく、全体から7個体を選別し、図化した。石器は24点が出土し、そのうちの11点が礫・礫片である。そのほかの器種は石鏃2点、二次加工のある剥片2点、剥片6点、砕片2点、磨石1点であり、このうち5点を図化した。

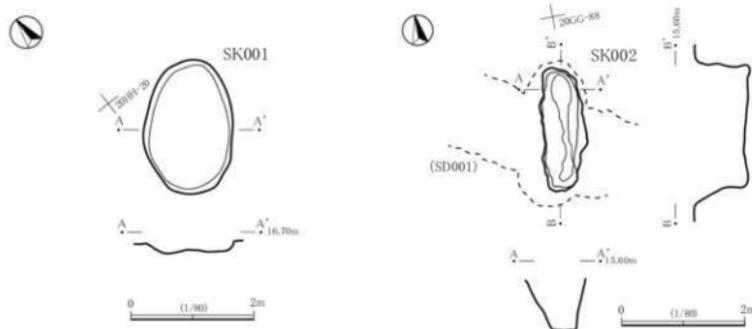




第9-2図 十太夫第I遺跡調査範囲と遺構の位置

第9-1表 遺構一覧

遺構番号	調査次	種別	時期	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
SK001	(3)	土坑	不明	20BH-20	2.18	1.45	0.17	楕円形 出土遺物なし
SK002	(1)	陥穴	縄文前期	20GG-87・88	2.06	0.73	0.78	江戸時代の溝に切りこまれている
SD001	(1)	溝	近世	20GG-87・88・99				
SD002	(2)	溝	近世	19GG-86・87・88・96・97・98他				(2)(3)(4)共通 検出された全長は約50m
	(3)	溝	近世	19GG-99, 20BH-00・01・11他				
	(4)	溝	近世	20BH-24・25・34・35・36・46他				
SD003	(4)	溝	近世	20BH-35・36・45・46・55他				
SD004	(4)	溝	近世	20BH-36・45・46				



第9-3図 SK001・SK002

1は早期の井草Ⅱ式に比定される燃糸土器である。第5、6次調査で出土した19点の破片のうち、3個体11点が接合した。いずれも口縁部から胴部にかけての土器片で、やや開き気味かほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部から縦走する縄文を施す。

第9-4図2～5がSK002の覆土から出土した土器である。縄文時代早期後半の茅山式土器であり、貝殻条痕文が施文される。胎土に植物の繊維を多く含むため、熱を強く受けた部分には陥没や剥落、黒色変などがみられる。いずれも胴部破片で、裏側にも条痕文が施文される土器片が見受けられる。

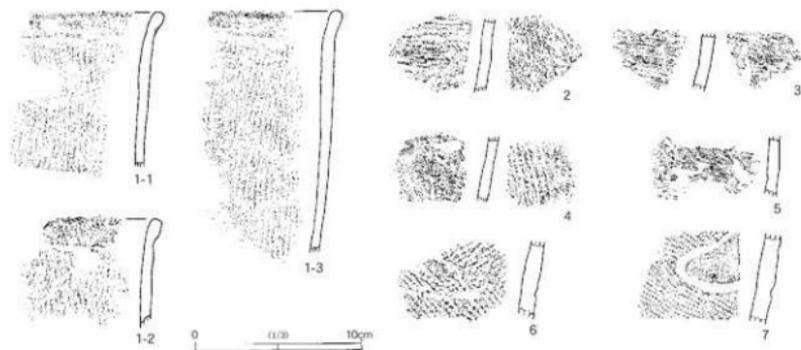
6は縄文が羽状に施文された黒浜式の胴部片である。胎土に植物繊維を含む。表面は赤褐色だが、裏面は黒く炭化している。前期前葉に比定されよう。

7は加曾利B式土器の胴部片である。沈線による曲線的な区画文内に縄文を充填する。表裏面とも灰黒色だが、間層は黒色で、細かな砂粒がみられる。

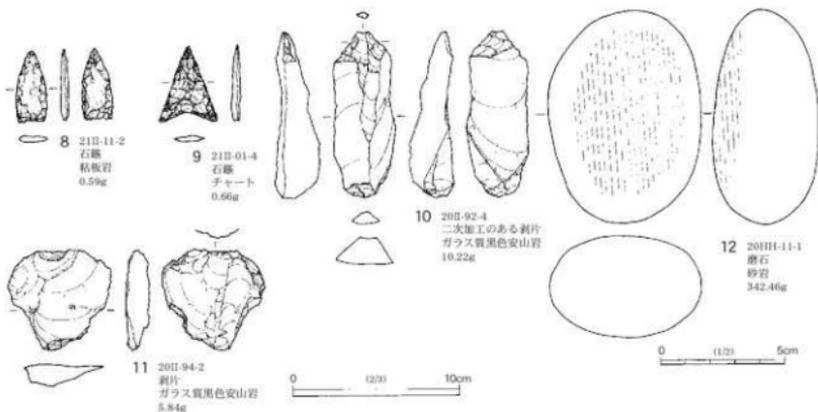
8・9は石鏃である。8の石材は青みがかった濃灰色の粘板岩である。板状の剥片を素材とし、両側縁が緩やかに向勢する細身の二等辺三角形に仕上げられている。基部の抉りは浅く、脚部からの深さは0.6mmに満たない。正・裏面とも背稜はなく、側縁調整後に磨られており、平らで均一な薄さとなっている。

このため、鎌としての機能性は薄いように思われる。21II-11グリッドで出土した。9はわずかに青色を帯びた灰白色を基調とし、濃い灰色の筋が入ったチャートで作られた石鎌である。両側縁は直線状で、脚端部は尖る。脚部からの挟りは2.5mmである。21II-01グリッドから出土した。

10は20II-92グリッドから出土した。ガラス質黒色安山岩製の二次加工のある剥片である。山高の縦長剥片の打面部が尖頭状に加工されているが、先端部は折れて欠損している。両極から加えられた打撃痕がみられることから、素材の一端を固定して剥離されたものと推測される。



第9-4図 縄文時代の土器



第9-5図 縄文時代の石器

第9-2表 石器組成表

調査次	石材/器種	石鏃	二次加工の おろし剥片	剥片	砕片	磨石	礫	礫片	点数	点数比	重量(g)	重量比
(2)	渡紋岩	0	0	0	0	0	2	0	2	8.33%	19.98	1.76%
	石英珉岩	0	0	0	0	0	1	0	1	4.17%	27.35	2.41%
	黒曜石	0	0	0	1	0	0	0	1	4.17%	0.43	0.04%
	砂岩	0	0	0	0	0	0	1	1	4.17%	5.12	0.45%
	ホルンフェルス	0	0	1	0	0	0	0	1	4.17%	28.74	2.53%
	チャート	0	0	0	0	0	1	0	1	4.17%	152.20	13.41%
(2)小計		0	0	1	1	0	4	1	7	29.17%	233.82	20.60%
	(2)重量(g)	0.00	0.00	28.74	0.43	0.00	199.53	5.12			233.82	
(3)	渡紋岩	0	0	0	0	0	0	1	1	4.17%	120.01	10.57%
	砂岩	0	0	0	0	1	0	0	1	4.17%	352.46	31.06%
(3)小計		0	0	0	0	1	0	1	2	8.33%	472.47	41.63%
	(3)重量(g)	0.00	0.00	0.00	0.00	352.46	0.00	120.01			472.47	
(5)	ガラス質黒色安山岩	0	2	1	0	0	0	0	3	12.50%	22.87	2.02%
	砂岩	0	0	0	0	0	0	4	4	16.67%	361.72	31.87%
	頁岩	0	0	0	0	0	0	1	1	4.17%	12.06	1.06%
	頁岩	0	0	1	0	0	0	0	1	4.17%	5.72	0.50%
	粘板岩	1	0	0	0	0	0	0	1	4.17%	0.59	0.05%
	ホルンフェルス	0	0	1	0	0	0	0	1	4.17%	5.33	0.47%
	チャート	1	0	0	1	0	0	0	2	8.33%	0.90	0.08%
(5)小計		2	2	3	1	0	0	5	13	54.17%	409.19	36.06%
	(5)重量(g)	1.25	16.06	17.86	0.24	0.00	0.00	373.78			409.19	
(6)	頁岩	0	0	1	0	0	0	0	1	4.17%	17.46	1.54%
	チャート	0	0	1	0	0	0	0	1	4.17%	1.91	0.17%
(6)小計		0	0	2	0	0	0	0	2	8.33%	19.37	1.71%
	(6)重量(g)	0.00	0.00	19.37	0.00	0.00	0.00	0.00			19.37	
合計		2	2	6	2	1	4	7	24	100.00%	1134.85	100.00%

11は著しく風化したガラス質黒色安山岩の剥片である。両極打撃によって主要剥離面に縦稜が生じ、横断面が逆三角形となっている。20II-94グリッドから出土した。

12は磨石である。砂岩の楕円礫が素材であり、平坦な1面にのみ、微光沢のある磨面が残る。20HH-11グリッドから出土した。

### 第3節 近世

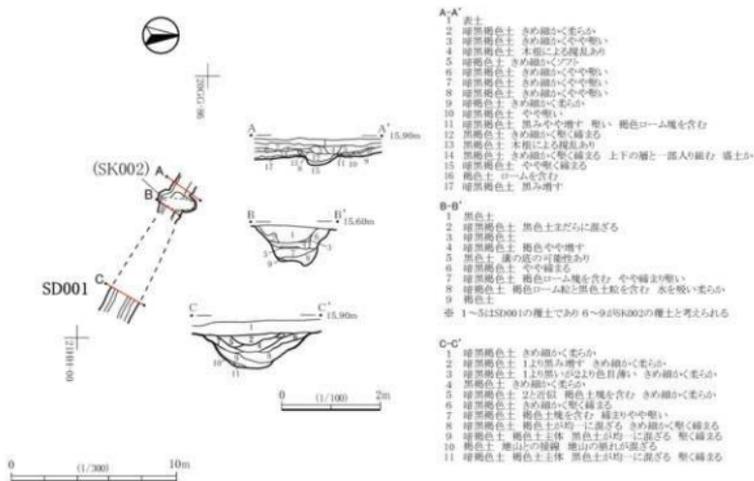
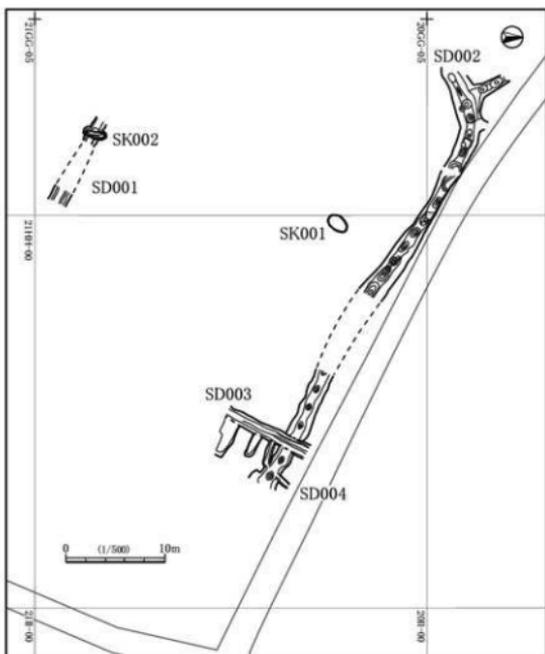
十太夫第1遺跡の第1～4次調査では、4条の溝が検出された。調査区北側には、道路と平行する溝SD002があり、その南東にはこれと直交する溝SD003が重なる。SD003には複数の窪みが溝に直交するように派生しており、SD004もそのうちの1条とみられるが、SD002、SD003との切り合い関係は不明である。

#### 溝状遺構

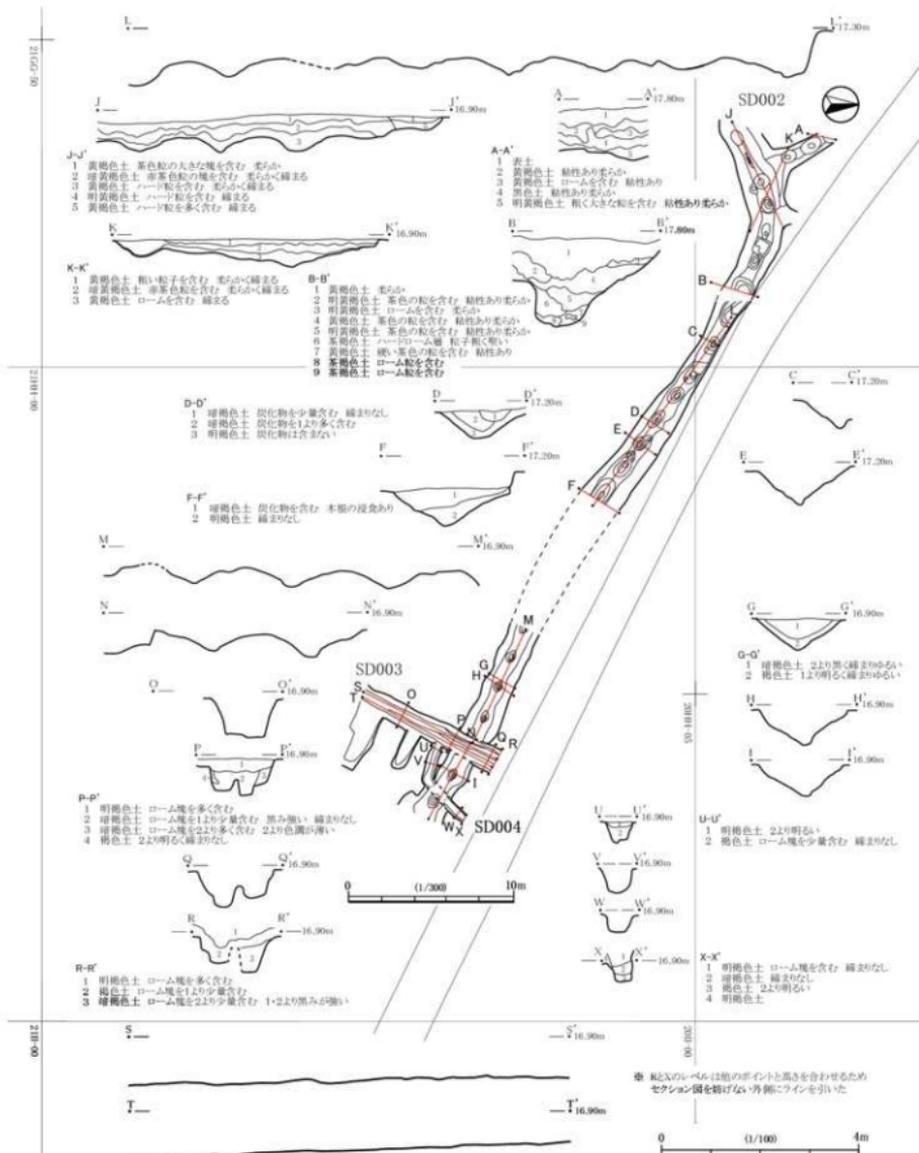
##### SD001 (第9-6図、図版9-1)

遺跡の南西、20GGグリッドの南東(20GG-87・88・99グリッド)に位置し、北西から南東にかけて走る1条の溝状遺構である。北側に位置するSD002と平行しているため、何らかの関連性がある可能性も否定できない。また南側の水田跡とも平行して斜面の縁につくられた溝であるが、野馬堀ほどの深さはないため、近世に作られた猪垣とも考えられる。西側の一部は縄文時代早期～前期の陥穴SK002を切り込んでいた。

トレンチを配した調査で検出された溝の間隙を結ぶと、同じ1条の溝と考えられ、推定される長さは約9.8m、溝の幅は1.38m～1.98m、深さは40cm～96cm(C-C'の1層が表土の場合は74cm)であり、西に向かうほど浅くなる。SK002と切り合う部分を断面図B-B'に示したが、このうち6層から9層にかけては縄文時代の陥穴SK002の覆土であるため、5層を底部とする溝の深さは約45cmとなる。この溝に伴



第9-6図 SD001



第9-7図 SD002・SD003・SD004

う遺物は出土していない。

#### SD002 (第9-7図、図版9-1)

遺跡の北西に位置し、19GG・19HH・20GG・20HHグリッド(19GG-76・86~88・96~99, 19HH-90, 20GG-09, 20HH-00・01・11・12・23~25・34~36・46グリッド)にわたり検出された。遺跡北側の道路と並行して北西から南東にかけて走る1条の溝である。北側の道路とは、接するほどの至近距離から、最大で約2m離れて平行する。北西端ではほぼ直角に分岐し、一方は南西方向へゆるく曲がり、もう一方は北西方向に向かっている。それぞれ調査区域外へ続くものと考えられる。今回の調査で検出された溝の全長は49.95m(間の推定部分9.19mを含む)、幅は1.27m~3.22m、深さは0.55m~1.79m(B-B'の1層を除くと0.97m)である。底面には直径約0.50mから約1.30mまで大小様々なピット状もしくは土坑状の掘り込みが並び、特に南東側では、直径0.80m内外の大きさのピット状掘り込みが1m前後の一定間隔で並ぶ。出土遺物はない。

遺構の南東端では、直交するSD003と切り合ったうえ、L字型に曲がるSD004とも重なる。

#### SD003 (第9-7図、図版9-1)

遺跡の北西寄りに位置し、20HH-25・35・36・44・45・54・55グリッドにかけて検出された。SD004の一部と直交し、道路によって寸断される。

検出された部分の全長は8.95m、幅は1.35m~1.58m、深さは72cm~97cmを測り、南西方向に向かいゆるく傾斜する。溝は調査区域外に向けて続くと考えられるが、形状がこのまま直線状を維持するかどうかは不明である。底面にピット状の掘り込み等はないが、溝の幅中ほどの位置に溝と平行するような硬化面がある。この硬化面は、長さ7.30m、幅は最大5.29m、深さ31cm~44cmを測り、道路に近づくほど深く顕著に残されているが、南西に向け次第に不明瞭となり、端は曖昧である。出土遺物はない。

#### SD004 (第9-7図、図版9-1)

遺跡の北西寄りに位置し、20HH-35・36・45・46グリッドにかけて検出された。SD002・SD003と切り合い、それらの溝とそれぞれ平行するように走る部分をもつL字型に曲がった1条の溝状遺構である。全長は5.73m、幅は0.56m~0.65mと狭く、深さは40cm~62cm、L字型に曲がる部分の角度はおよそ120°を測る。SD002・SD003と重なり、それら2条に切られているが、この溝は北の道路方面と南西方向にそれぞれ続いているものと考えられる。底面に掘り込み等はみられず、両側の壁がほぼ切り立ち、底面は概ね平坦な形状となっている。出土遺物はない。

## 第4節 まとめ

江戸川によって開析された標高15m~18mの台地上に遺跡は立地している。明治時代、溝状に流れる湧水を利用した水田が松林に貫入していたが、現在は大堀川となって調査区外の南側に流れている。遺跡東側の大部分は水田に盛り土をした畑地であったため、遺構と認められるものは確認できなかったが、調査区西側からは縄文時代の土坑・陥穴各1基、近世の溝状遺構4条が検出された。中でもSD002は、野馬土手に関連すると考えられる土坑列を伴う溝状遺構であり、現代の道路はこれに沿うように敷設されている。なお、土坑列を伴う野馬土手・野馬堀については大久保遺跡、西初石五丁目遺跡でも検出されており、広大な範囲に及ぶ近世牧の一端を垣間見ることができる。

## 第10章 十太夫第三遺跡

### 第1節 遺跡の概要 (第10-1・2図)

十太夫第三遺跡は常磐新線つくばエクスプレス・東武野田線の「流山おおたかの森駅」から東へ600mほどの距離にあり、標高15.0m～17.5mに立地する。

今回の報告は、平成20～24年度にかけて行われた第1～7次調査にて検出された遺構と遺物について記載するものであり、上・下層の確認調査及び本調査範囲、遺構の位置は第10-2図のとおりである。上層では確認調査1,770㎡の結果、348㎡で本調査を行ったが、下層では遺構の広がりが見受けられなかったため確認調査のみで終了した。

十太夫第三遺跡から検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡1軒、陥穴1基、土坑3基、礫集中1基、近世溝2条であった。調査域が細かく区分されており、本報告でも各調査時の遺構名を踏襲した。なお、遺構名の前につく括弧内の数字は調査回数を示す。

遺跡全体を俯瞰すると、西側には近世以前の溝状遺構が3条確認され、東側では、縄文時代の竪穴住居跡1軒が検出されたほか、大堀川を臨む台地縁辺に沿うように早期～後期の土器片、礫・礫片が集中していた。また、これらに混じって旧石器時代の石器が出土しており、時期・形態ともに、近在する遺跡との相関関係がみられる。

以下、旧石器時代、縄文時代、近世と、時代を追って記載していく。

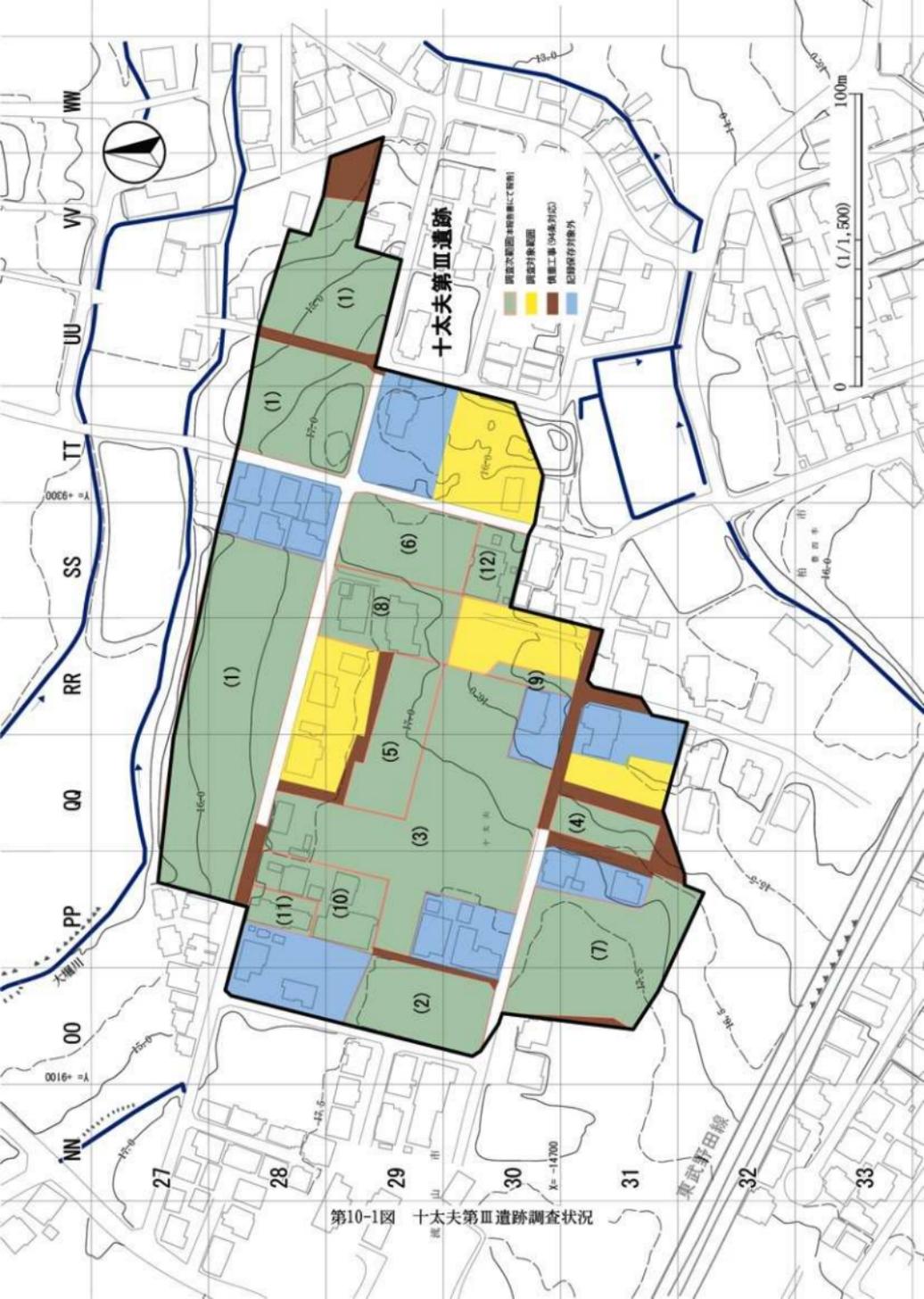
### 第2節 旧石器時代 (第10-2・3図、図版10-2)

確認調査で出土した石器は、遺跡北側の28RR・28SS・29UUグリッドに点在する。石器分布域の広がりには確認されず、本調査には至らなかったが、単独で出土した石器3点について報告する。

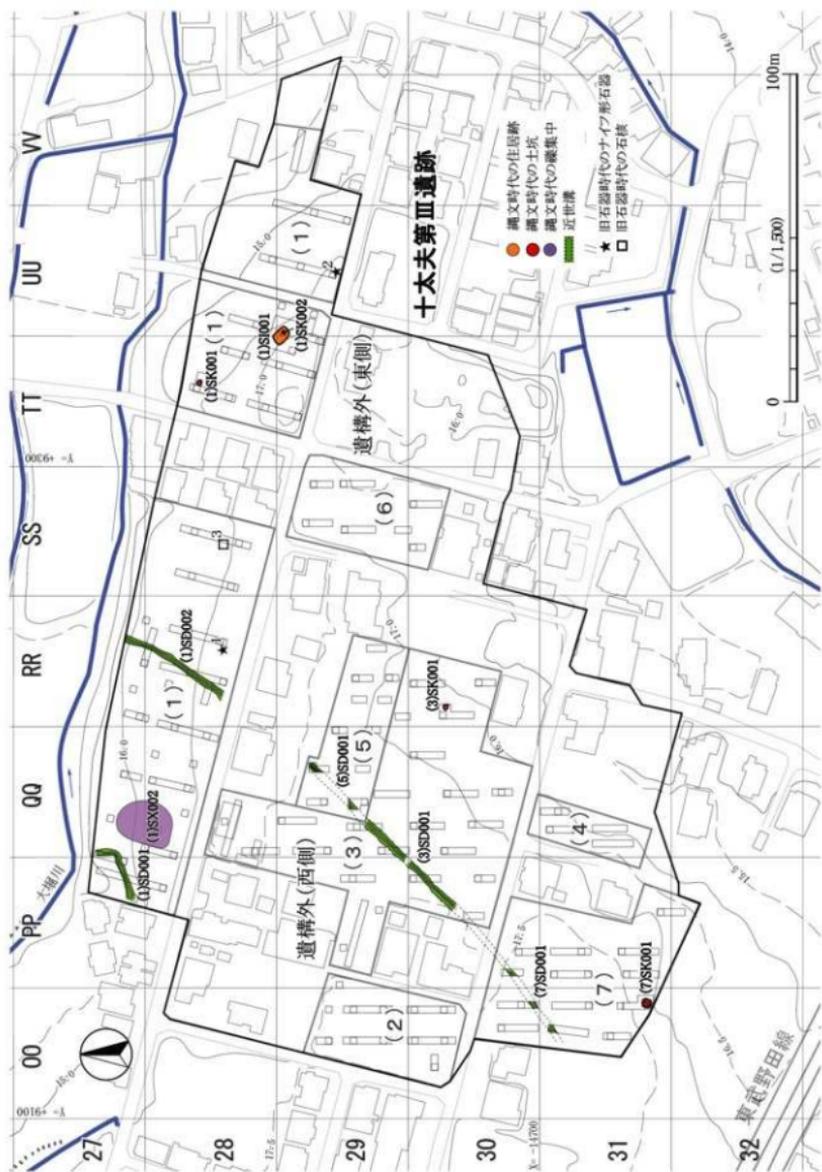
1・2は、ナイフ形石器である。1は28RR-56グリッドでまとめて取り上げられた資料のうちの1点であり、正確な出土位置や標高は不明である。黄褐色～灰白色で光沢のある珪質頁岩製の剥片が用いられており、最大長は3cmに満たないが、素材の打面側を基部、末端側を刃部とした精美な形状に仕上げられている。2は29UU-44グリッドから出土したナイフ形石器の基部であるが、機能部は遺存していない。基部は急角度調整によって角柱状となっているため、角錐状石器とも捉えられよう。立川ロームのIV層下部に比定される器種である。石材は茶褐色の夾雑物を多く含む黒曜石であり、目視では高麗山甘湯沢産と思われる。

3は28SS-54グリッドから出土した黒曜石製の石核である。縦長の剥片、あるいは石刃が折れてできた面を打面とした剥片剥離痕が看取される。鋭角な縁辺には微細剥離痕が廻っており、上縁辺及び下縁辺で顕著である。左下端部はわずかに欠損する。2・3は夾雑物や色調が大変似通っており、同じ石材であろうと推測される。

いずれも遺跡北側の標高16mやや上方からの出土であり、大堀川を臨む台地上に点在している。



第10-1図 十太夫第三遺跡調査状況



第10-2図 十太夫第三遺跡調査範囲と遺構の位置



第10-3図 旧石器時代の出土石器

### 第3節 縄文時代

縄文時代の遺構は竪穴住居跡1軒、土坑4基、礫集中1基である。第1～7次に亘って調査が行われており、なかでも、大堀川を臨む台地縁辺に沿うように調査された第1次調査区では、早期～前期、後期の土器片、礫・礫片が多数分布している。縄文後期の住居跡(1)SI001は構築以前に存在していた土坑を取り込むようにつくられており、炉跡の直下に陥穴(1)SK002が検出された。このほかの3基、(1)SK001、(3)SK001、(7)SK001はいずれも後期の土坑であろう。礫集中(1)SX001では、27QQ、28QQグリッドを中心としたおおよそ3,200mほどの範囲に、変色した礫片が密集している。北側を流れる川に近接しており、千葉県北西部地域で検出される礫群・礫集中のあり方との共通性がうかがえる。

遺構外では住居跡や土坑付近を中心に土器片の分布がみられたため、調査区内を東側・西側に二分して出土した土器の特徴を記載した。東側に分布する土器片の数量は前期の土器片が約63%、後期は約16%である。西側は後期が主体で約64%、これに続く前期の土器片は約10%である。

以下、遺構ごとに順次記載する。

#### 1. 竪穴住居跡

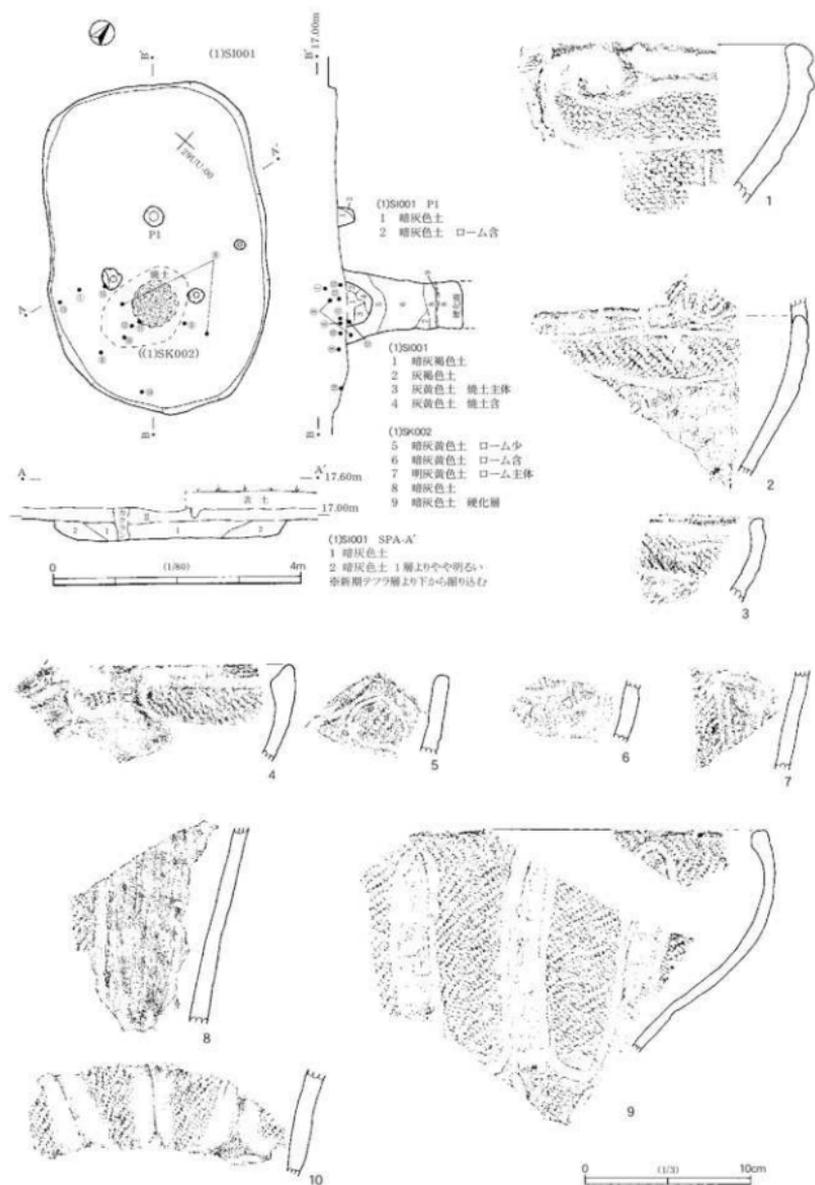
##### (1)SI001 (第10-4-5図、図版10-2)

調査区北西側、28TT-99・28UU-90・29TT-09・29UU-00グリッドにまたがって所在する。規模は長径5.30m、短径3.50m、床面積約17㎡を測り、隅丸長方形形状である。主軸方向はN-47°-Wである。確認面からの深さは28cmであり、床面はよく踏み固められている。炉は南東壁側に位置し、(1)SK002の直上に設けられており、前時代の陥穴が埋まった後の窠みと軟らかな埋土が利用されたものと推察される。柱穴を含むピットは3基あり、長軸上にある柱穴は床面から0.25m、炉の脇にある2基は40cmの深さをもつ。

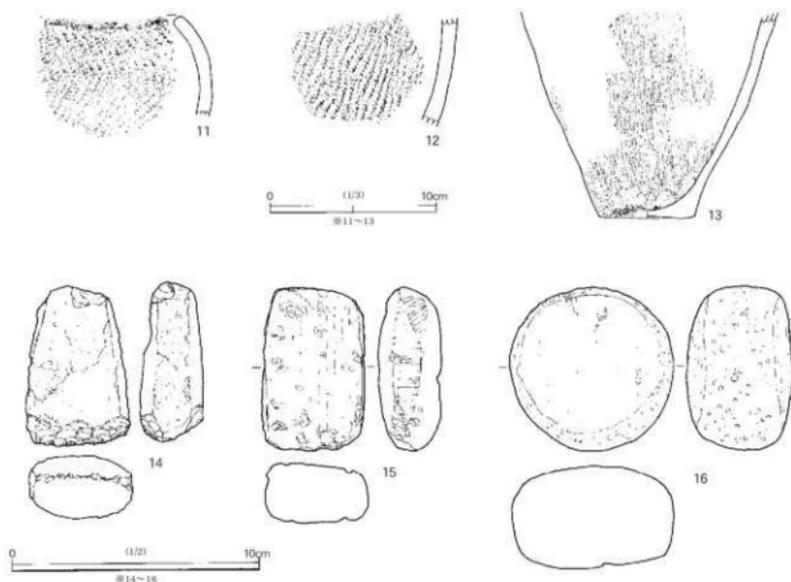
遺構内から出土した遺物は89点を数えるが、一括・表採資料を除いた25点は縄文時代中期後葉の加曾利E式土器片が主体であり、炉を中心とした南東部分に集中している。石製品は軽石製品1点と石斧2点があり、石斧1点は南東端部から出土した。(1)SI001の土器一括・表採分としては前期浮島・中期加曾利E式土器が混在しており、いずれも(1)SI001近辺に散在する土器片との接合関係がみられる。

##### 出土遺物

1～13は縄文時代中期後葉の加曾利E3式土器である。1は口縁突起下に、巻きのゆるい渦巻き文がみられる。脚部は磨消態垂文を施す。2も口縁部破片である。波状突起であるが、突起の先端は欠損している



第10-4図 (1)SI001検出状況・出土遺物(1)



第10-5図 (1)SI001出土遺物(2)

る。口縁部文様帯は2条の浅く細い沈線によって横長の楕円形状に区画され、脚部は幅広い磨消懸垂文である。3～5は口縁部、6～8は胴部破片で、5を除く2～8は同一個体の可能性がある。

9は沈線文、10は微隆起線文によって磨消縄文が区画されている。13は櫛歯条線が施された胴部から底部にかけての破片である。住居内の炉を中心に分布するが、近縁のグリッドから出土した表採資料との接合関係も認められる。

14は緑色凝灰岩製の石斧である。リダクションの進んだ定角式磨製石斧であり、素材時の滑らかな表面は正面の一部に遺存するが、剥落が著しい。

15は軽石製品である。全体的に褐色に変色している。形状は箱型で横断面は角の丸い長方形を呈しており、両側面は平らに磨られている。砥石や磨石として使用されていたものと思われる。14と15はほぼ同じ大きさであるが、重量は5倍以上異なり、使用目的に応じた石材の選択が行われていたことが端的に示される資料と言えよう。

16は(1)SI001の北西端に位置する29TT-09グリッドから一括資料として出土した。厚みのある安山岩製で、平坦面には線状の擦り痕、側面には敲いてできたような凹凸があり、複数の機能が想定される円盤製の加工具である。

このほか、16と同様、住居跡付近の29TT-19グリッド一括資料6点の中に滑らかな平坦面を持ち、角張った形状を呈する礫片1点が土器に混じって出土している。14・15と同じような大きさの石斧の欠片である可能性も否めないため、参考資料として図版10-2に17と番号を付して写真のみ掲載した。

## 2. 陥穴・土坑

### (1)SK002 (第10-6図)

(1)S1001の底面調査時に検出された陥穴である。29UU-00グリッドに位置する。遺構検出面での平面形は楕円形で、長軸1.75m、短径1.15m、深さ約1.9mを測り、長軸の方向はN-9°-Eである。底面の平面形は遺構検出面とほぼ同じ楕円形で、壁は底面から垂直に立ち上がっているが、中段がやや袋状となる。(1)SK002の底面は堅く締まった暗灰色の硬化面であり、この上にはソフトローム主体の暗灰色土が60cmほど堆積し、間に堅く締まった暗灰色土が5cm~7cmの厚さをもって入っている。陥穴の構築直後は補修と利用が繰り返されたものと推測される。陥穴の硬化面をさらに掘り下げたところ、直下はハードローム主体の暗灰褐色土であり、さらに下位にあたる遺構確認面から約2.8m付近では立川ロームX層が確認された。なお、覆土中から1.6cm×2.6cm、厚み1.1cmほどの土器片1点が出土しているが、(1)S1001から流れ込んだ可能性が高く、構築時期の特定は困難である。図化は行っていない。

### (1)SK001 (第10-6図)

28TT-46グリッドに位置する。遺構検出面の大きさは長軸1.89m、短軸1.65m、深さ48cmを測り、長軸の方向はN-79°-Wである。土坑内の北東隅では炭材を多く含む黒色土の塊がみられた。遺構内の土層は自然な堆積状態を示しており、暗灰褐色のソフトローム層の次に黒色土層、黒色のII層のブロック、黒灰色土の順に埋まっていた。新規テフラを掘りこんで構築されており、遺構覆土及び土坑近辺には縄文時代後期の土器が複数出土している。底面からの出土ではないが、遺構の形状・性格などから、当概期の所産と思われる。図化は行っていない。

### (3)SK001 (第10-6図、図版10-3)

標高16.70mの比較的安定した30RR-21グリッドに立地する半円形の土坑である。遺存する遺構確認面の直径は1.6mほどである。当初の埋土が軟質だったことから、現代の芋穴等、新しい時期の可能性を考えたが、掘りこみの内外から縄文土器が10点以上出土（覆土中の点取りされたものは5点）したことから土坑であるとの認識に至った。深さは約50cmである。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物には縄文時代後期の堀之内式期、称名寺式期の土器片が含まれる。この時期に構築された土坑であろう。第10-6図に土器3点を図示した。

#### 出土遺物

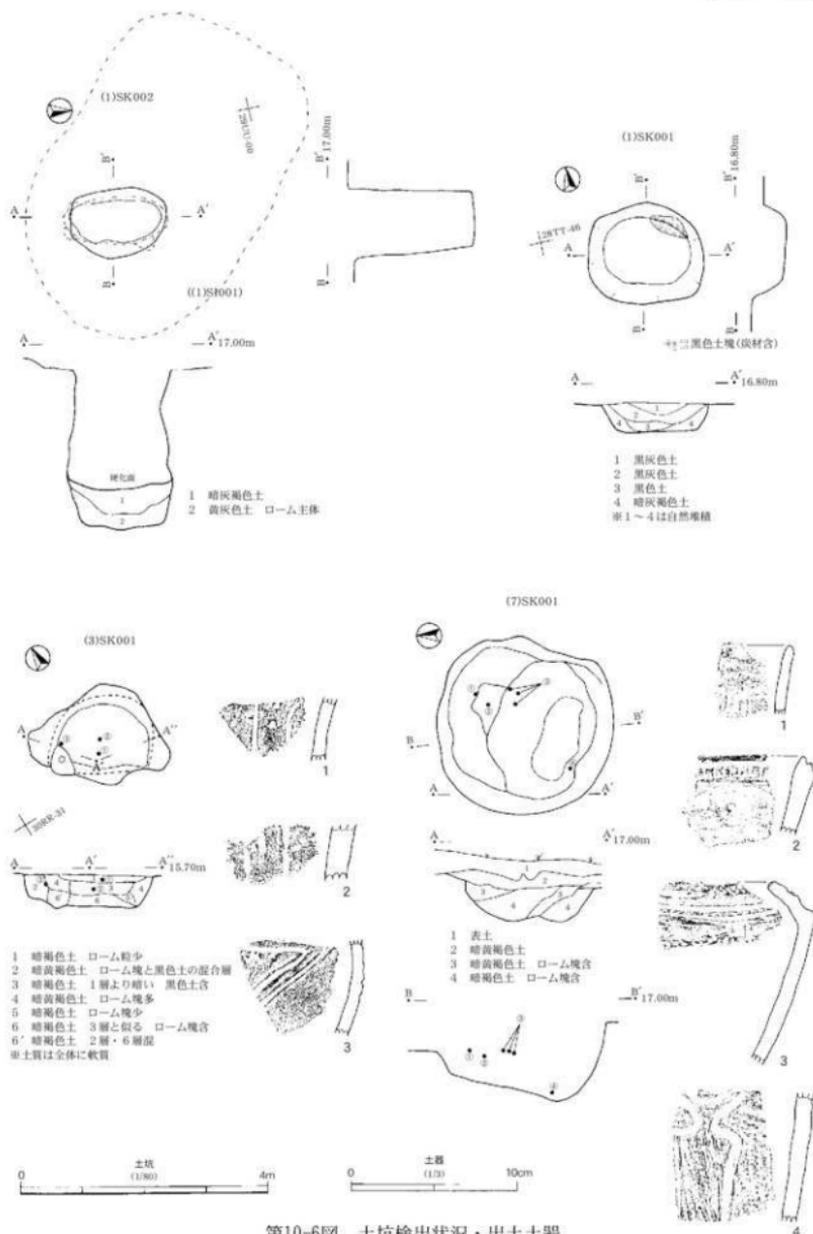
1・2は後期称名寺2式土器の胴部破片である。いずれも小片であるが、縦方向に施された列点がみられる。3は後期堀之内1式土器の胴部破片である。平行する2条の沈線で三角形の文様が描かれている。

### (7)SK001 (第10-6図、図版10-3)

調査範囲の南西端に位置し、標高は約17mである。十太夫第三遺跡の調査範囲の標高は15.0m~17.5mであり、(7)SK001は遺跡内では比較的高所に立地している。平面形は直径約3mの正円形だが、底面は南西側に向かって下降しており、確認面からの深さは75cm~122cmである。

#### 出土遺物

ソフトローム上面及び覆土上・下部から土器片13点が出土し、このうち4個体を図示した。1~3は称名寺2式、4は堀之内1式土器であり、いずれも縄文時代後期に帰属する。1の口唇部付近は無文であるが、胴部には沈線に区画された細かな縄文がみられる。2は口縁部に5mm間隔で縦の刻みを入れた後、その上部に沈線をめぐらせている。3は浅鉢の口縁部から胴部である。胴部から口縁部が急角度に立ち上が



第10-6図 土坑検出状況・出土土器

り、口唇部には直径2mmほどの刺突痕が2mm～5mmの間隔で並んでいる。表面にみられる刺突文よりも幾分不規則な並びとなっている。覆土下方から出土した4は深鉢胴部である。縄文を地文とし、蛇行する沈線で剣先状の文様が描かれている。

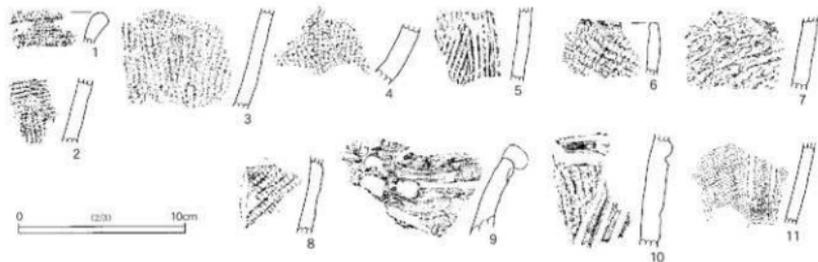
### 3. 礎集中

(1)SX002 (第10-2・7～9図、第10-1表、図版10-3・4)

遺跡の北東部側を北から南に概観すると、北西方向から流れてきた水路（大堀川）が東に流れを変える付近では、遺物の集中域がみられる。遺物は28QQ-02グリッドを中心に南北に18m、東西に14mほどの範囲に分布しており、南では密に、北ではやや疎らに分布する傾向がみられる。数量の内訳は礫・礫片275点、縄文土器片は23点である。これらの出土層位はⅡ層から表土層下位までで、Ⅲ層からの出土はない。縄文時代早期から後期の土器片が散漫に出土しており、構築時期を推量することは困難であるが、胎土に繊維を含む破片が少なからず見受けられる。礫・礫片、石器についても同様で、包含される層位には石礫未成品・敲石・二次加工のある剥片・剥片・石核が出土しているが、示準となる石器はなく、このうちの幾片かは旧石器時代に帰属する可能性も否めない。

出土土器 (第10-7・8図、図版10-3)

- 1・2は早期燃糸文期の井草Ⅰ式土器である。1は口縁部、2は胴部破片である。
- 3・4は燃糸文土器の胴部破片である。
- 5は早期末葉の貝殻条痕文土器である。
- 6・7は前期の黒浜式土器であるが、6の口縁部の縄文はRL、7はLの無節縄文である。
- 8は中期の加曾利E式土器である。
- 9～11は後期の堀之内Ⅰ式土器である。



第10-7図 礎集中出土土器

## 出土石器 (第10-8-9図、第10-1表、図版10-3・4)

礫・礫片269点のほとんどに被熱によると思われる変色、変質がみられ、自然面・剥離面の剥落、接合資料には間隙を持つものも複数認められた。接合した礫片の数は68点27個体である。8 m以上離れて接合したものは2個体であり、そのほかはおおむね近距離間での接合である。

礫21点の平均重量は92.80 g、礫片230点の平均重量は31.68 gであり、単純に計算すると3片の礫片が1個の礫の重さと同様、という図式が得られる。礫片の総重量は7288.20 gで、礫重量の平均92.80 gで割ると78.5個体の礫に換算される。これに礫21点を加えると99.5となり、100点ほどの素材礫が持ち込まれたものと推測されるが、石材による個体差が大きく、石英斑岩・泥岩・頁岩・ホルンフェルスの完形礫は皆無である一方、安山岩は変色が認められるものの熱による破砕は少なく、5点が完形のまま遺存する。なお、このうちの2点は旧石器時代に用いられることの多い斑晶の少ないガラス質黒色安山岩とトロトロ石である。チャートの礫片の平均重量は19.58 g、砂岩は24.81 gと、脆い個体は細かく砕ける傾向がある。礫石材は砂岩、安山岩が多く、チャートがこれに続く。礫片は点数、重量ともに多い方から順に砂岩→流紋岩→チャートとなる。これらの礫・礫片と分布域、層序を同じくして出土した石器類を以下に図示する。

1は黒曜石製の石鏃未成品である。剥離面は銀色を帯びた黒色で半透明であるが、正面の大部分は淡褐色で透明感の少ない平坦な面であり、裏面は素材の主要剥離面である。板状の剥片の縁辺が粗く成形されているが、器中央で縦折れを起こしたため完成には至っていない。礫群の北西端に位置し、礫片類の下方に包含される。

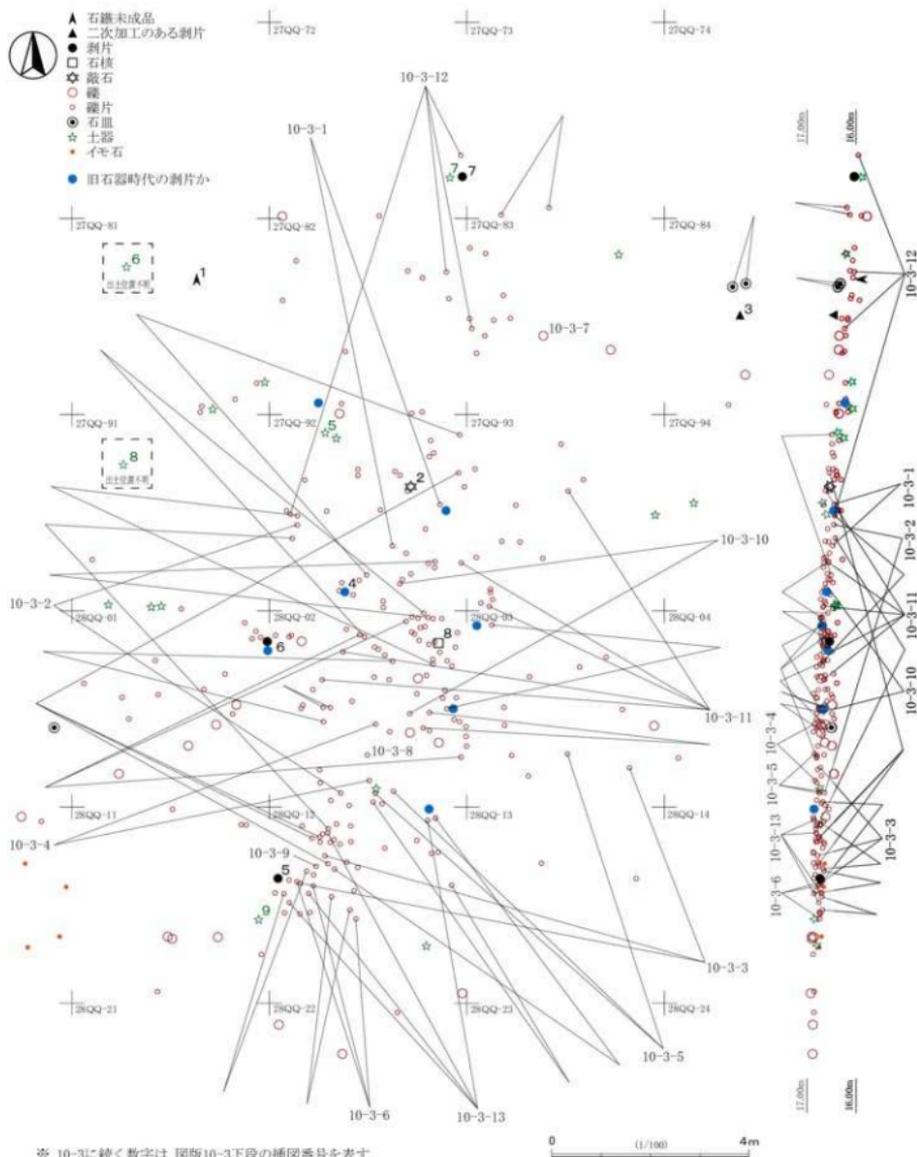
2は砂岩の敲石である。小さな鶏卵ほどの円礫を素材とし、外周には弱い敲き痕が廻っている。両端部は潰れや欠けによって器面に荒れが生じている。全体に被熱による変色と器面の剥落がみられる。

3は二次加工のある剥片である。青みがかった濃灰色のガラス質黒色安山岩製である。打点対縁は半円弧を描き、縁辺には厚みを削ぐような平坦な小剥離痕がみられる。だが、これらの一部は不連続であり、偶発的に生じた欠損である可能性がある。

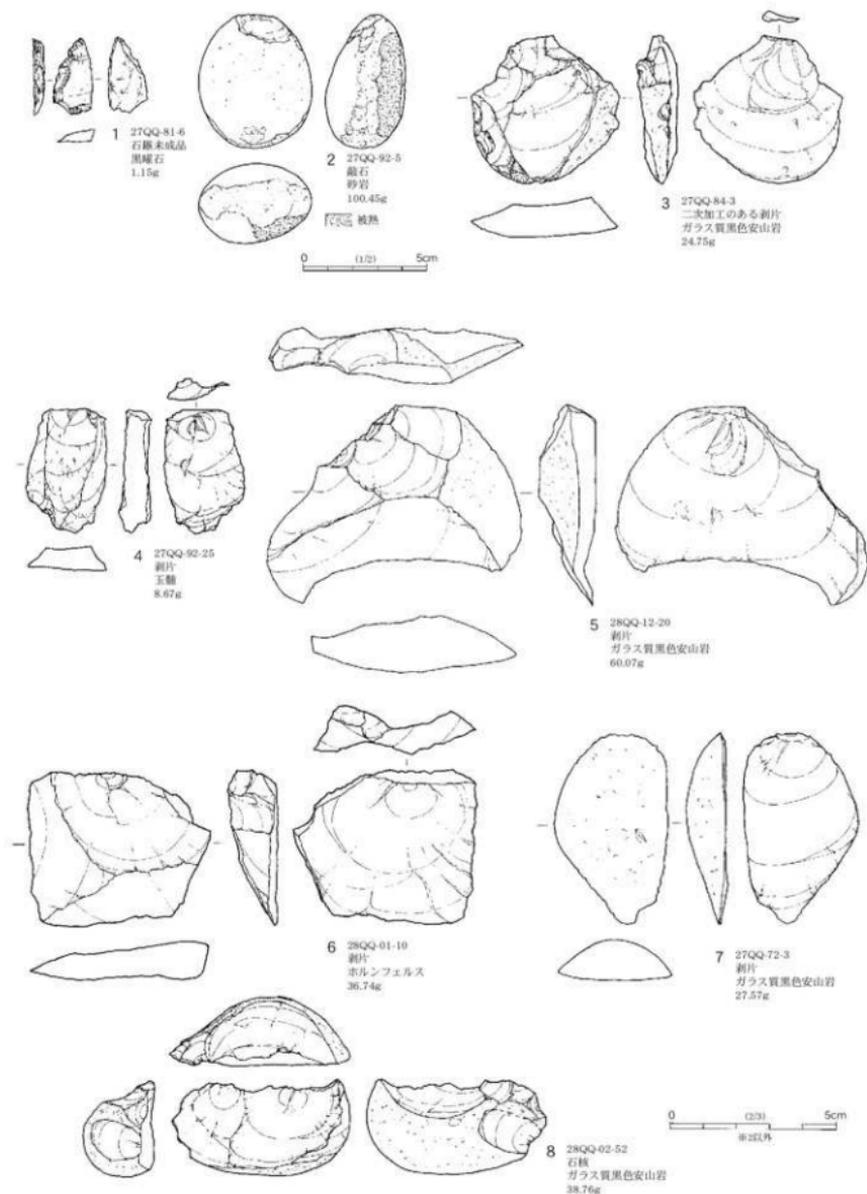
4～7は剥片である。4は黄白色～橙色で白色斑が入り、厚さ9 mmほどの部位でも光を透過する玉髓製の縦長剥片であり、末端は階段状となっている。5はガラス質黒色安山岩である。小児の拳大ほどの素材礫から貝殻状、あるいは幅広の剥片を作成する意図がみられる剥片である。初期の工程で表れた剥離面を打面とする剥離作業により複数枚の剥片が作出された後、器面調整のために剥離されたものであろう。二次加工痕や微細剥離痕は看取されない。6は板状のホルンフェルス製である。左側縁と下縁は直線状であるが、風化により加工痕や使用痕を確認できなかった。7はガラス質黒色安山岩の礫端片である。正面は自然面、剥離面は1面であり、素材礫から最初に剥離された剥片である。

8は石核である。鶏卵大のガラス質黒色安山岩礫が素材である。打面作出後、貝殻状剥片が2枚以上剥離された痕跡が残っている。

なお、この礫集中域から出土したガラス質黒色安山岩3・5・7・8の風化面には黄褐色の細かい粒子がみられることから、ハードローム層中に包含されていた石器が混在した可能性がある。



第10-8図 礫集中遺物分布



第10-9図 礫集中出土石器

第10-1表 礫集中石器組成表

石材	石礫 未成品	二次加工の おろし片	削片	石核	礫石	磨石類	礫	礫片	不明	イモ石	点数	点数比	重量(g)	重量比
ガラス質黒色安山岩	0	1	3	1	0	0	0	0	0	0	5	1.83%	183.13	1.72%
※ ガラス質黒色安山岩	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0.73%	22.39	0.21%
※ トロロ石	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0.73%	7.10	0.07%
安山岩	0	0	0	0	0	3	5	15	0	0	23	8.42%	2280.69	21.43%
流紋岩	0	0	0	0	0	0	2	53	0	0	55	20.15%	2327.57	21.87%
石英斑岩	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	9	3.30%	417.03	3.92%
黒曜石	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.37%	1.15	0.01%
花崗岩	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.37%	43.86	0.41%
砂岩	0	0	0	0	1	0	8	87	0	0	96	35.16%	2998.38	28.17%
泥岩	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.37%	169.51	1.59%
頁岩	0	0	0	0	0	0	0	19	0	0	19	6.96%	642.08	6.03%
ホルンフェルス	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	8	2.93%	355.37	3.34%
※ ホルンフェルス	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0.37%	36.74	0.35%
チャート	0	0	0	0	0	0	5	36	0	1	42	15.38%	1067.46	10.03%
※ 玉髓	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0.73%	15.26	0.14%
不明	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	6	2.20%	74.41	0.70%
合計	1	1	10	1	1	3	21	230	1	4	273	100.00%	10642.13	100.00%
土器											42		754.62	

※は旧石器時代の遺物の可能性がある

点数比	0.37%	0.37%	3.66%	0.37%	0.37%	1.10%	7.69%	84.25%	0.37%	1.47%		100.00%		
重量(g)	1.15	24.75	201.11	38.76	100.45	990.15	1949.60	7288.20	1.33	46.63			10642.13	
重量比	0.01%	0.23%	1.89%	0.36%	0.94%	9.30%	18.32%	68.48%	0.01%	0.44%				100.00%

## 4. グリッド出土土器（東側）（第10-10図、図版10-5）

調査区東側の28TT～28VV、29TT～29VVグリッドに帰属する遺構外出土の遺物のまとまりを報告する。

(1)S1001の周辺、28TT・28UU・28VV・29TT・29UU・29VVグリッドに分布する約436点の半数は縄文前期の土器片で占められ、なかでも浮島式が多くみられる。縄文中期の加曾利E式が26点、後期の土器は称名寺・堀之内式が65点あり、加曾利B式が僅かに混じる。早期の土器は6点を図示した。

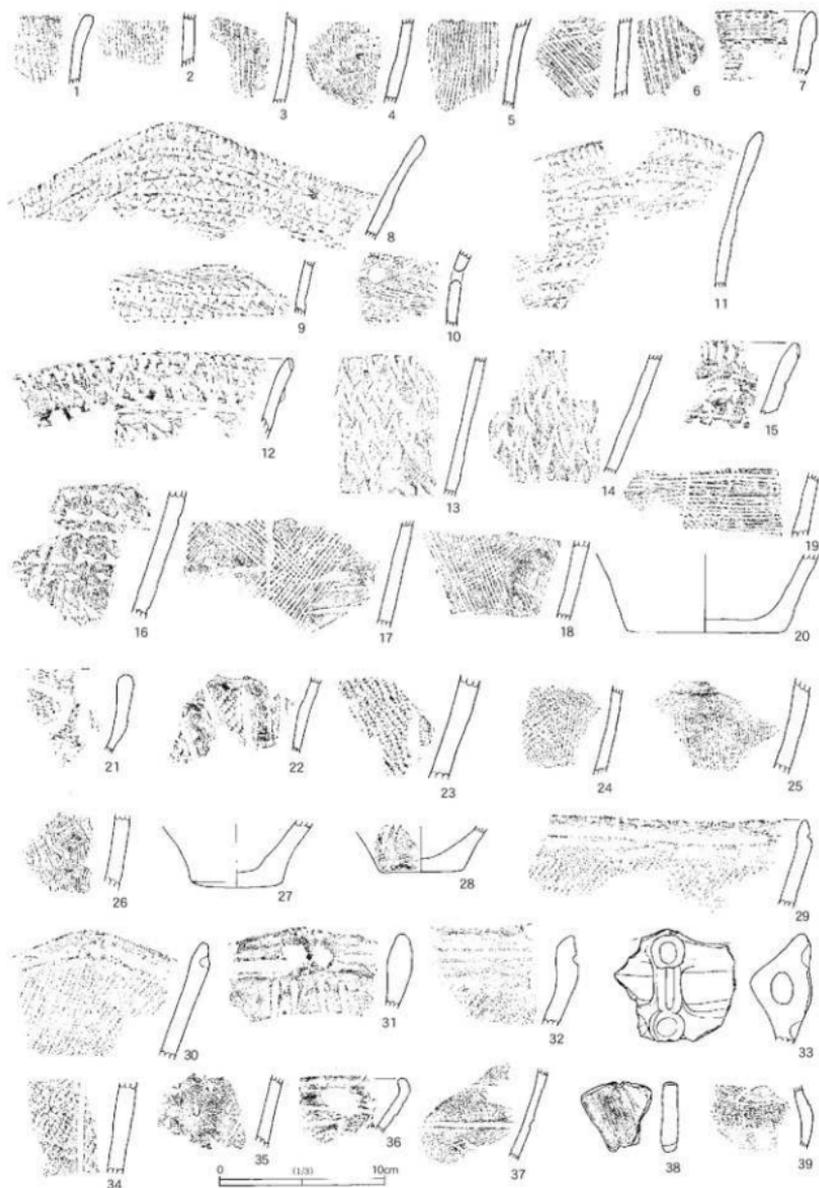
1～6は早期の土器片である。1は井草Ⅱ式口縁部である。緩やかに外反する口唇部直下から縦位の縄文が施文される。2は燃糸土器の胴部破片である。3は稲荷台式土器と推定される。燃糸文の条間が開いて疎らに施文されている。押圧が弱いめか、文様は沈みがちで磨り消されているように見える。胎土にφ2mmほどの白い石粒を多く含む。4は燃糸文が浅く施されている。5・6は表裏面に条痕文が施されている。

7～16は縄文時代前期の浮島式土器である。7は口縁部である。口唇部には長短入り混じった細い刻目が施されており、直下を細い沈線が廻っている。さらに頸部には連続した列点文がみられる。8～10は同一個体の口縁部と胴部である。胴部から大きく開く大波状口縁の深鉢形土器で、口縁には条線帯が走る。条線帯の下には三角文が施文されるが、歯状工具による沈線帯を配する。10には内外面双方から穿れた外径10.0mm、内径6.5mmの補修孔が残る。11もまた大波状口縁を持つ深鉢形土器で、口縁の条線帯の下に崩れた三角文を施す。12は平縁で、口縁の条線帯は深くはっきりとしている。直下に波状貝殻文が2段みられるが、その間は浅い凹凸文となっている。補修孔はこの凹凸文の部分に開けられている。13・14は波状貝殻文が施文された胴部片である。12とも同一個体である可能性がある。

15・16は口縁が直線的に外に開くものとやや外反しながら開くものがあるが、15は直線的に開くものと思われる。口縁には条線帯を配し、以下に三角文を多段に施している。

17～19は興津式である。波状口縁を持つ。歯状条線文を縦横に配しているが、無文部位も残る。焼成は良好で、器体表裏には煤状の変色痕と焼成による黒ずみがみられる。

20は深鉢底部である。径は9.7cmである。



第10-10図 グリッド出土土器 東側

21～23は加曾利E 3式の口縁部及び胴部片である。いずれも小片であるが、21は波状口縁で、沈線による杵状区画文を施す。22・23は磨消懸垂文が施されている。24～26はこれらに伴うもので、24には細かな縄文と櫛歯条線文が、25・26には櫛歯条線文のみが施される。27・28は加曾利E式後半期の底部である。底径は27が5.3cm、28は4.3cmである。いずれの内面も変色しており、27は全体が黒く、28は薄黒色と赤褐色が斑状に残っており、内部への滲出がみられる。

29～35は後期の堀之内1式期、36・37は加曾利B式である。

38は土器片鏝である。加曾利E式土器の胴部片を利用したもので、周縁は打ち欠き、糸掛けは磨りによる。19.10gを量る。

39は表面が赤く彩色された弥生土器で、ふくらみのある胴部片である。細い針状のもの3～4本並べた工具を縦方向に刺突し、連続した施文が行われている。胎土には細かく珪質な砂粒がみられる。内側は全体的にやや薄いベージュを呈し、厚みのある部分の断面は濃灰色である。櫛歯状工具による連続刺突列を斜位と横位に帯状に施す。

## 5. グリッド出土土器（西側）（第10-11・12図、図版10-6）

調査区の西側27PP～27RR、28PP～28SS、29OO～29RR、30OO～30RR、31OO～31QQ、32PPグリッドに帰属し、遺構出土分を除いた土器をグリッド出土土器（西側）として報告する。縄文時代の土器片は366点出土した。大半が後期の土器で、東側で多出した前期の土器は10%に留まる。施文の無いもの、焼けの激しいもの、細かなものは識別が困難であり、「不明」分が11%に上った。時間的には早期から後期にわたり、時期ごとに出土量及び分布状況が異なっていた。早期の燃糸土器は近世の溝である(1)SD002とその近辺、及び北側の台地縁辺から10点出土している。後期では、(7)SK001の周囲に堀之内1式の土器片が多く分布する傾向がうかがえた。

1～10は早期前半の燃糸土器で、1は井草1式である。口縁が強く肥厚、外反し、口縁端部と口頸部に斜位回転の縄文が施されている。肥厚した口縁下には指頭圧痕が認められる。2～10は稲荷台式である。口縁直下から縄文が疎らに縦走施文されている。10は細かい燃糸文が施される。

11は早期前半の沈線土器で、田戸下層式の口縁部である。口縁直下に太い沈線が2条横位に施され、その下方は左傾の斜沈線となる。

12～14は早期の茅山式土器である。胎土には繊維が多く含まれる。12・13は表裏面とも条線文が施されている。14の表面には縄文、裏面には条痕文がみられる。

15～17は貝殻文が施文された前期の土器である。15は口唇部に縦方向の刻み目が入る。口縁部には縦位の貝殻腹縁圧痕が施されている。16・17には放射筋のある波状腹縁文がみられる。

18～24は中期後半の加曾利E 3式である。18・19は口縁部文様帯が簡素化し、渦巻文がみられない。20～24は磨消懸垂文を施す。25・27～29は加曾利E 3-4式であろう。沈線区画内に縄文を充填したポジ文様を施す。26の口縁突起は加曾利E 4式かもしれない。30・31は幅広の沈線区画内に櫛歯条線文を施す。加曾利E 3式と思われる。

32～53は後期後葉の称名寺式・堀之内式土器である。32・33は称名寺2式である。太い沈線区画内に列点が施されている。45～49は同一個体で、縄文地に間隔のあいた沈線による単位文様を施す。

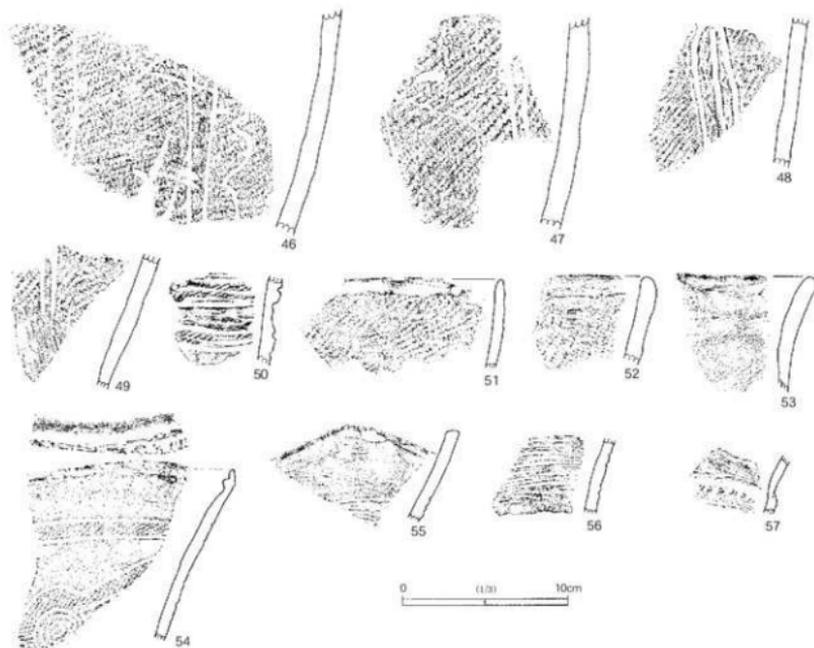
54は堀之内2式土器で、朝顔型深鉢である。口縁に低い幅広の突起を作り、その内面に文様を施す。胴



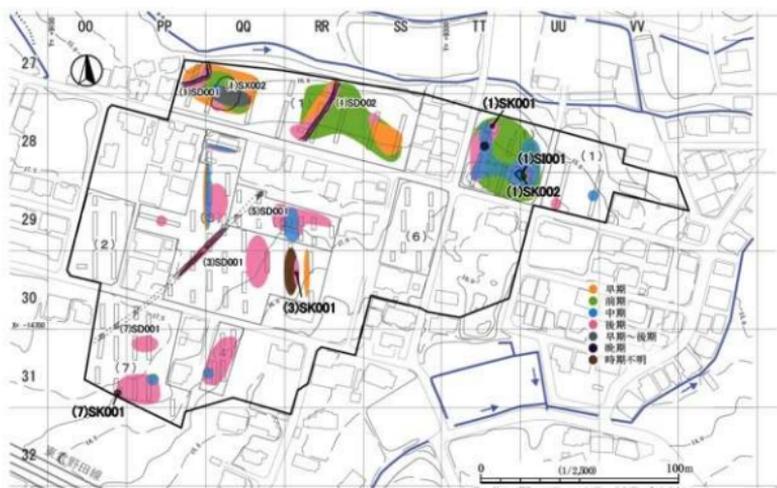
第10-11図 グリッド出土土器 西側(1)

部上半には帯縄文による幅の広いたすき状の区画文様を施し、たすき状の交点には重円文を配する。胴部には、平行沈線で区画された中に縄文が施されている。

55～57は加曾利B2式の条線文を施したものである。



第10-12図 グリッド出土土器 西側(2)



第10-13図 縄文土器時期別分布

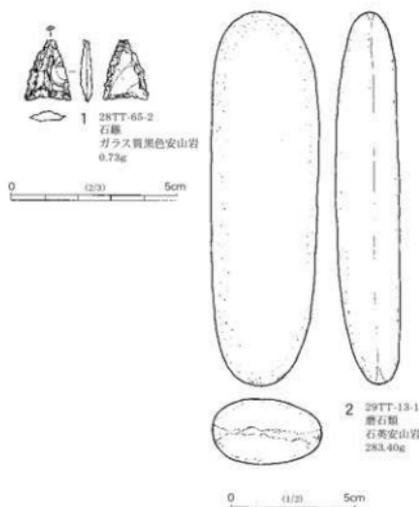
第10-2表 縄文土器時期別出土量

時期	土器型式	点数	点数比	重量 (g)	重量比
早期	摺糸文・条痕文	39	4.01%	591.29	3.40%
	沈線文	1	0.10%	28.11	0.16%
	貝殻文	1	0.10%	10.00	0.06%
	茅山	3	0.31%	85.21	0.49%
	不明	3	0.31%	29.30	0.17%
早期小計		47	4.84%	743.91	4.28%
前期	浮島	128	13.17%	2051.20	11.79%
	興津	40	4.12%	590.00	3.39%
	浮島・興津	83	8.54%	1464.07	8.42%
	貝殻文	3	0.31%	84.09	0.48%
	黒浜	3	0.31%	129.00	0.74%
	不明	101	10.39%	1015.26	5.84%
前期小計		358	36.83%	5333.62	30.66%
中期	加曾利E	76	7.82%	2791.18	16.05%
中期小計		76	7.82%	2791.18	16.05%
後期	加曾利B	6	0.62%	159.22	0.92%
	称名寺	15	1.54%	507.00	2.91%
	堀之内	51	5.25%	1610.74	9.26%
	称名寺・堀之内	236	24.28%	4022.44	23.12%
	不明	110	11.32%	1080.21	6.21%
後期小計		418	43.00%	7379.61	42.42%
早期～後期	不明	5	0.51%	59.80	0.34%
	早期～後期小計	5	0.51%	59.80	0.34%
晩期	安行	2	0.21%	20.00	0.11%
晩期小計		2	0.21%	20.00	0.11%
不明	不明	66	6.79%	1066.44	6.13%
	不明小計	66	6.79%	1066.44	6.13%
合計		972	100.00%	17394.56	100.00%

## 6. 単独出土石器 (第10-14図、図版10-4)

1は石鏃である。ガラス質黒色安山岩の剥片を斜位に用いているが、最大長は20mmに満たない。裏面は素材剥片の主要剝離面であり、周縁のみ加工される。基部の挟りは浅く、先端は僅かに欠損している。28TT-65グリッドからの出土である。

2は磨石類である。石英安山岩の扁平な棒状礫であるが、下端部に弱いざらつきが感じられるため、加工品として持ち込まれたものと判断した。29TT-13グリッドから出土しており、20mほど東には縄文時代後期の住居跡が検出されている。



第10-14図 単独出土石器

## 第4節 近世

## 1. 概要

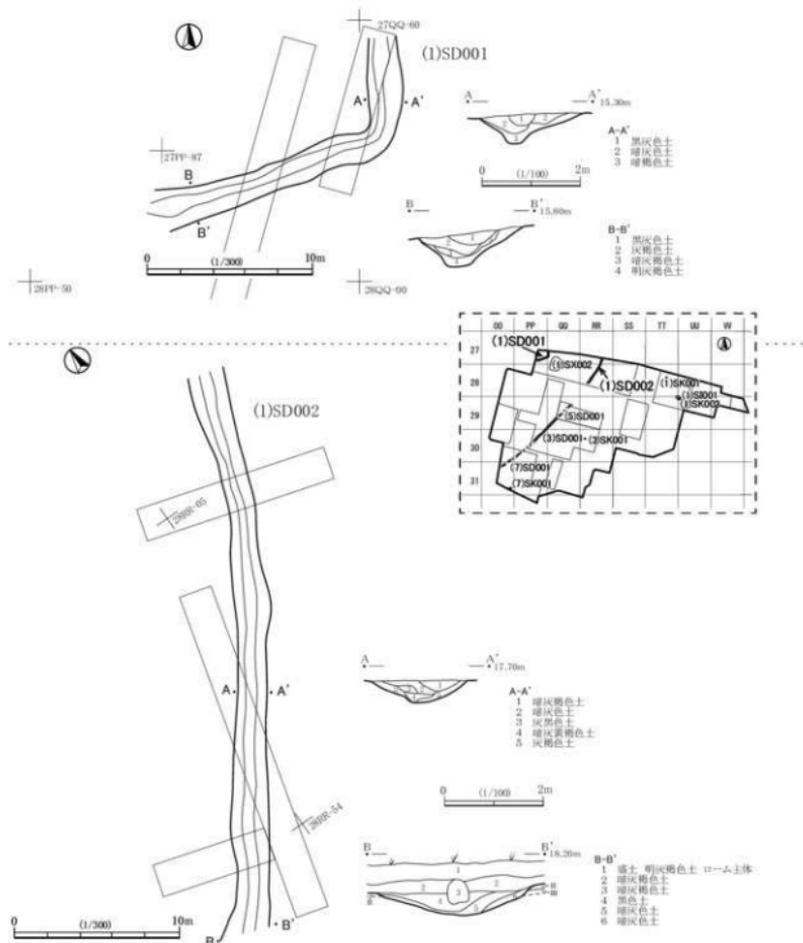
遺跡から5m～6mほど北側には西から東へ向かって流れる大堀川があり、ここへ注ぐ溝2条と、南西方向から続く1条が検出された。北西隅に位置する(1)SD001は、西側に所在する東初石六丁目第1遺跡の北東隅で検出された溝と繋がっていた可能性がある。(1)SD002は今回の調査区域外から続いていたことは明らかであるが、(1)SD001と同じく、大堀川へと向かう溝である。(3)SD001、(5)SD001、(7)SD001とつながっていた可能性があるが、30m以上が未調査区であるため、本節では別個の溝として報告する。

(3)SD001、(5)SD001、(7)SD001は遺跡外の南西方向から続くものであり、複数次に亘る調査のため、溝の呼称は一樣ではないが、間断なく調査範囲内を縦貫していたものと思われる。

## 2. 溝状遺構

## (1)SD001 (第10-15図)

検出された溝の長さは約20m、溝幅約2m、溝の深さは60cm～65cmである。調査区域外から続いていることは明らかであり、わずかに南寄りの西側から続く溝は27QQ-80グリッド付近で真北に流れを変え、6m先の大堀川へと注ぐ。



第10-15図 (1)SD001・(1)SD002



出土遺物は縄文土器片と小礫片のみであり、溝の構築以前より存在していたものが流れこんだものであろう。溝の覆土は褐灰色、暗灰色、明褐灰色など、灰色の土を多く含んでいる。硬化面は認められない。

#### (1)SD002 (第10-15図)

第1次調査のSD002の両端は調査区域外へと続いていたことが明らかであるが、北側は6mほど先の大堀川に注いでいた可能性が高い。検出された溝の長さは約34m、幅1.7m～2.2m、深さは溝検出面から40cmほどである。A断面とB断面とでは基準となる標高に隔たりがあるが、溝底の標高は両方ともに16.90mで同じ深さを測る。A断面を実測したあたりから標高は低くなっていき、川へと流入していたものであろう。底部に硬化面は認められず、溝に伴う遺物は出土していない。

#### (3)SD001、(5)SD001、(7)SD001 (第10-16図、図版10-1)

第3・5・7次調査で検出された南西から北東へ向かう1条の溝であり、西側の調査区域外から続いていたことは明らかである。検出された溝の長さは約88m、幅1.3m～2.8m、深さは25cm～60cmほどである。29QQ-26グリッド付近では2列が並んでいるように見えるが、C断面をみると2つの窪みがあり、またほか断面よりも浅いことが確認できた。ここでわずかに流路が変わったか、分岐していたか、消滅したかは定かではないが、水の流れが断続的であったことに起因するものと思われる。溝の覆土は底面近くでは明るめの色調であるが、上位へ移るに従い、黒みを帯びる。溝として機能しなくなった後は自然堆積に任せられた結果と思われる。なお、溝下部は全体的に砂質土であり、層のしまりは良好であるが底面は硬化していない。溝に伴う遺物の出土はない。

## 第5節 まとめ

今回の報告は、平成20～24年度に行われた第1～7次調査での成果である。第10-1図のとおり、遺跡範囲の中には未だ調査が行われていない地点が見受けられるが、現時点で確認できた範囲内での報告を行った。

出土した遺物の大部分は縄文土器である。これらの時期別分布状と数量・重量を第10-13図、第10-2表に記した。北に流れる大堀川に沿うように、台地縁辺では縄文時代前期の土器が3か所に集中していた。台地のなかほどには後期の土器が多く分布する傾向がある。ほか時期の土器も少数ながら出土している。

縄文時代の礫集中の中には、多数の礫片に混じって縄文土器や石器が出土した。垂直分布はほぼ直線上に並ぶ。中には旧石器時代に帰属するような石器もあるが、区分するための判断材料に欠けるため、縄文時代の「礫集中」の項(第3節3)で報告した。

十太夫第三遺跡から検出された遺構は、縄文時代の陥穴1基、礫集中1基、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡1軒、縄文時代後期の土坑3基、近世の溝3条であった。

本遺跡では、既調査区に挟まれた未調査部分を埋めるように、2014年現在も発掘調査が行われているため、今後の成果を待ってまとめとしたい。

# 写 真 图 版











第1文化層 第1～6・9・10ブロック 北西から



第1文化層 第2・3・6・9・10・13～15ブロック 西から



第1文化層 第9・13～18ブロック 南西から



第1文化層 第15ブロック 南西から



第1文化層 第4～7・11～13・19ブロック 南から



第1文化層 第6・7・11・12・19ブロック 北西から



第1文化層 環状ブロック群(中央南北セクション) 北東から



第2文化層 第20・21ブロック (下部)  
第3文化層 第30・31ブロック (上部)  
北東から



第2文化層 第20・21ブロック (下部)  
第3文化層 第30・31ブロック (上部)  
南南東から



※ 不発跡が算30ブロック  
其他は第20ブロック  
第2文化層 第20ブロック (下部)  
第3文化層 第30ブロック (上部)  
東から



第2文化層 第21ブロック (下部)  
第3文化層 第31ブロック (上部)  
南東から



第2文化層 第22ブロック 西・南西から



第2文化層 第22ブロック 南から



第2文化層 第23ブロック 南から



第2文化層 第24ブロック 北から



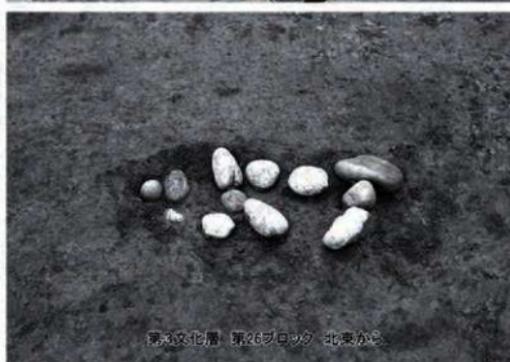
第3文化層 第25ブロック 南東から



第3文化層 第25ブロック 北東から



第3文化層 第26ブロック 北から



第3文化層 第26ブロック 北東から



第3文化層 第26ブロック 北西から



第3文化層 第27ブロック 北西から



第3文化層 第28・29ブロック 北北西から



第3文化層 第29ブロック 北西から





(8) SI008 北から



(3) SI009ベルトセクション 北東から



(20) SI001 東から



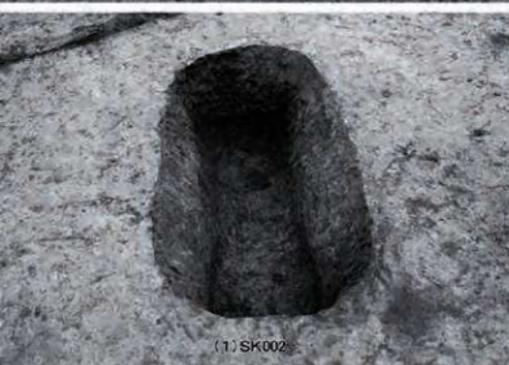
(12) SI001出土状況 南から



(14) SI001 西から



(3) SK007 東から



(1) SK002



(1) SK001 東から





(12)SK005 北西から



(12)SK005 南から



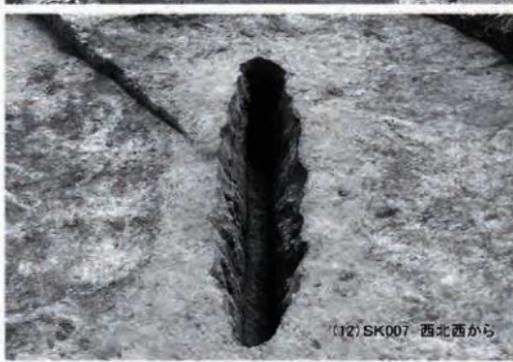
(12)SK013 北西から



(12)SK006 西北西から



(12)SK002 北西から



(12)SK007 西北西から



(10)SK003 南西から



(10)SK005 南から



(10) SK004 南から



(13) SK020 東から



(11) SK025 北から



(14) SK024 西から



(8) SK017 南西から



(9) SK016 東から



(6) SK018 北西から



(3) SK010 北から



(3)SK011 北から



(3)SK013 北から



(3)SK012 北から



(3)SK015 東から



(3)SK014 東から



(18)SK003 南西から



(18)SK004 東から



(18)SK005 西から



(18)SK001 東から



(12)SK001 南東から



(12)SK020セクション 北から



(12)SK024セクション 南から



(12)SK012 北から



(12)SK011セクション 東から



(12)SK022 北から



(12)SK010 北から



(12)SK008 北から



(13)SK028 南西から



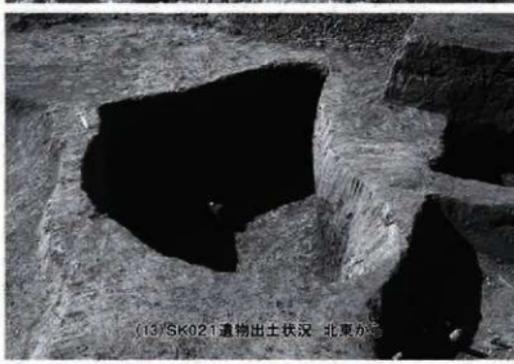
(11)SK009 北から



(13)SK005・SK006 北北西から



(13)SK005・SK003セクション 西から



(13)SK021遺物出土状況 北東から



(13)SK006 東から



(13)SK002・SK003 西から



(10) SK004 南から



(11) SK026 東から



(12) SK001 西から



(13) SL006 78トレンチ内(残土遺構) 西から



(14) SD004第1トレンチ 東から



(15) SD001第12トレンチ



(16) SD001第2トレンチ 南東から



(17) SD001第2トレンチ 北から





## 第1文化層 [黒曜石]



## [ホルンフェルス]



第1文化層環状ブロック群出土石器(1)

第1文化層

[ホルンフェルス]



23 (a~g)

総合資料1040  
ホルンフェルス1005  
第1・6・9・10ブロック



24

磨器  
ホルンフェルス1013  
第5ブロック



25 (a~y)

総合資料1032  
ホルンフェルス1001  
第13・14・19ブロック

[緑色凝灰岩]



26 (a~g)

総合資料1022  
緑色凝灰岩1001  
第9ブロック



26b

打製石片  
緑色凝灰岩1001  
第3ブロック



26f

二次加工のあらかし片  
緑色凝灰岩1001  
第9ブロック



27 (a~s)

総合資料1021  
緑色凝灰岩1001  
第10・11・13ブロック



28 (a~c)

総合資料1023  
緑色凝灰岩1001  
第13ブロック



29 (a+b)

総合資料1025  
緑色凝灰岩1002  
第4ブロック

0 (2/3) 5cm

## 第1文化層

## [トトロ石]



30  
台形礫石器  
トトロ石1036  
第10ブロック



31  
台形礫石器  
トトロ石1034  
第14ブロック



32  
側部  
トトロ石1035  
第12ブロック



33  
側部  
トトロ石1031  
第4ブロック



34  
側部  
トトロ石1033  
第2ブロック



35  
側部石器  
トトロ石1032  
第7ブロック



36  
側部石器  
トトロ石1029  
第12ブロック



38  
二次加工のある側片  
トトロ石1005  
第4ブロック



39  
二次加工のある側片  
トトロ石1007  
第4ブロック



40  
石核  
トトロ石1022  
第14ブロック



41(a~c)  
総合資料1064  
トトロ石1006  
第4ブロック



37  
二次加工のある側片  
トトロ石1009  
第6ブロック



42(a~d)  
総合資料1051  
トトロ石1002  
第19ブロック



43(a~f)  
総合資料1047  
トトロ石1001  
第10・13ブロック



44(a+b)  
総合資料1058  
トトロ石1003  
第2ブロック



45(a~i)  
総合資料1057  
トトロ石1004  
第1・2・6・15ブロック



46(a~f)  
総合資料1067  
トトロ石1006  
第13・19ブロック



47(a~c)  
総合資料1020  
トトロ石1010  
第12ブロック



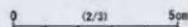
48(a+b)  
総合資料1053  
トトロ石1015  
第2ブロック



49(a+b)  
総合資料1056  
トトロ石1012  
第4・12ブロック



50(a~c)  
総合資料1059  
トトロ石1013  
第4ブロック



第1文化層環状ブロック群出土石器(3)

第1文化層

[玉髓]



51 (a~o)  
総合資料1026  
土器1001  
第1~8・12ブロック



52 (a~c)  
総合資料1029  
土器1002  
第2・8ブロック



53  
磨蝕面のある剥片  
土器1003  
第10ブロック



54  
磨蝕面のある剥片  
土器1003  
第12ブロック

[流紋岩]



55 (a+b)  
総合資料1018  
流紋岩1002  
第4ブロック



56 (a+b)  
総合資料1011  
流紋岩1002  
第4・7ブロック

[硬質頁岩]



58 (a~p)  
総合資料1005  
硬質頁岩1001  
第9・15ブロック



57 (a~c)  
総合資料1009  
流紋岩1001  
第15ブロック

[珪質頁岩]



59 (a~j)  
総合資料1003  
珪質頁岩1001  
第9ブロック



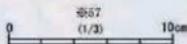
60  
石核  
珪質頁岩1002  
第9ブロック



61  
二次加工のある剥片  
珪質頁岩1005  
第18ブロック



62  
磨蝕面のある剥片  
珪質頁岩1006  
第16ブロック



[嶺岡産珪質頁岩]

[黑色頁岩]



63  
ナイフ形石核  
嶺岡産珪質頁岩1004  
第15ブロック



64  
二次加工のある剥片  
嶺岡産珪質頁岩1004  
第15ブロック



65  
楔形石核  
嶺岡産珪質頁岩1003  
第15ブロック



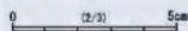
66  
剥片  
嶺岡産珪質頁岩1002  
第15ブロック



67 (a+b)  
総合資料1015  
嶺岡産珪質頁岩1001  
第15・16ブロック



68  
剥片  
黑色頁岩1002  
第15ブロック



第1文化層環状ブロック群出土石器(4)

## 第1文化層 [チャート]



69(a~h)  
総合資料1016  
チャート1001  
第19ブロック



70(a~f)  
総合資料1018  
チャート1003  
第13ブロック



71(a~f)  
総合資料1011  
チャート1002  
第15ブロック



72  
断片  
チャート1005  
第18ブロック

## [砂岩]



73(a~g)  
総合資料1006  
砂岩1001  
第5・9ブロック



77  
礫石  
砂岩1002  
第1ブロック



75  
礫石  
砂岩1005  
第8ブロック



74  
礫石  
砂岩1004  
第8ブロック



76  
礫石  
砂岩1003  
第18ブロック

## [安山岩]



78(a~d)  
総合資料1007  
安山岩1002  
第2・6ブロック



80(a~d)  
総合資料1001  
安山岩1001  
第7・19ブロック



82  
礫石  
安山岩1007  
第17ブロック



83  
礫石  
安山岩1008  
第17ブロック



79(a~d)  
総合資料1008  
安山岩1003  
第4ブロック



81(a+b)  
総合資料1002  
安山岩1009  
第13ブロック

※69~73. 78・79  
(2/3) 5cm

※74・75. 80~83  
(1/2) 5cm

※76・77  
(1/3) 10cm

第1文化層環状ブロック群出土石器(5)

第 1 文化層 [ガラス質黒色安山岩]



第 1 文化層環状ブロック群出土石器 (6)

## 第1文化層 [ガラス質黒色安山岩]



第1文化層環状ブロック群出土石器(7)

第1文化層 [ガラス質黒色安山岩]



121 (a+b)  
 総合資料1142  
 ガラス質黒色安山岩1067  
 第19ブロック



122 (a+b)  
 総合資料1143  
 ガラス質黒色安山岩1058  
 第10・13ブロック



123 (a+b)  
 総合資料1151  
 ガラス質黒色安山岩1068  
 第7ブロック



124 (a~g)  
 総合資料1070  
 ガラス質黒色安山岩1001  
 第5・10・14ブロック



125 (a~k)  
 総合資料1086  
 ガラス質黒色安山岩1007  
 第2・8・9ブロック



126 (a~s)  
 総合資料1190  
 ガラス質黒色安山岩1008  
 第7・10・12ブロック



127 (a~j)  
 総合資料1051  
 ガラス質黒色安山岩1009  
 第2・9・19ブロック



128 (a~k)  
 総合資料1190  
 ガラス質黒色安山岩1012  
 第12・19ブロック



129 (a~f)  
 総合資料1111  
 ガラス質黒色安山岩1016  
 第7ブロック

単独



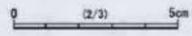
1  
 ナイフ形石器  
 チェーン  
 41X-66<sup>+</sup> 7y1\*



2  
 石核  
 五輪  
 35Q-14P<sup>+</sup> 7y1\*



3  
 石核  
 ガラス質黒色安山岩  
 35Q-14P<sup>+</sup> 7y1\*



## 第2文化層 第20ブロック



1  
ナイフ形石器  
黒曜石2009  
【和田小深沢群】



2  
磨石石器  
黒曜石2008  
【和田小深沢群】



5  
二次加工のある剥片  
黒曜石2004  
【和田小深沢群】



7  
二次加工のある剥片  
黒曜石2006  
【和田小深沢群】



8  
二次加工のある剥片  
黒曜石2011  
【和田小深沢群】



9  
磨石剥離痕のある剥片  
黒曜石2012  
【和田小深沢群】



3  
削片  
黒曜石2002  
【和田小深沢群】



4  
削片  
黒曜石2003  
【和田小深沢群】



6  
二次加工のある剥片  
黒曜石2002  
【和田小深沢群】

## 第22ブロック



1  
二次加工のある剥片  
黒曜石2001  
【和田小深沢群】



2  
石刃  
黒色頁岩2011



3  
石刃  
黒色頁岩2010

## 第21ブロック



1  
ナイフ形石器  
黒曜石2005  
【和田小深沢群】



2  
ナイフ形石器  
黒曜石2010  
【和田小深沢群】



3  
二次加工のある剥片  
黒曜石2003  
【和田小深沢群】



4 (a+b)  
複合資料2002  
黒色頁岩2002

## 第24ブロック



4  
磨石剥離痕のある剥片  
黒曜石2002  
【和田小深沢群】



5  
磨石剥離痕のある剥片  
黒曜石2002  
【和田小深沢群】



1  
二次加工のある剥片  
黒曜石2013



2  
二次加工のある剥片  
黒曜石2014



3  
磨石剥離痕のある剥片  
黒曜石2015

## 第23ブロック



1  
ナイフ形石器  
チャート2001



2 (a+b)  
複合資料2004  
黒色頁岩2004



3 (a-c)  
複合資料2001  
黒色頁岩2001



4 (a+b)  
複合資料2003  
黒色頁岩2003

## 単独



1  
磨石剥離痕のある剥片  
黒曜石  
363-643\*1y1\*



2  
剥片  
頁岩  
388-997\*1y1\*  
378-463\*1y1\*



3  
剥片  
頁岩  
378-463\*1y1\*

0 (2/3) 5cm

第3文化層 3aユニット

第25ブロック



第26ブロック



第27ブロック



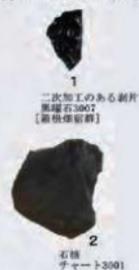
第28ブロック



第29ブロック



第30ブロック 第3文化層 3bユニット



第31ブロック



## 第3文化層 3bユニット

## 第32ブロック



1  
二次加工のある剥片  
燧石3001  
【藤科山山群】



2  
石核  
珪質頁岩3001

## 第33ブロック



1  
ナイフ形石器  
燧石3003  
燧石頁岩3003



2  
ナイフ形石器  
チャート3004



3  
二次加工ある剥片  
チャート3004



4  
石核  
チャート3004



5  
石核  
チャート3004

## 第3文化層 3cユニット

## 第34ブロック



1  
石核  
ガラス色黒色火山岩3017



2  
剥片  
珪質頁岩3003



3 (a+b)  
複合資料3002  
ガラス色黒色火山岩3016

## 第35ブロック



1  
二次加工のある剥片  
燧石頁岩3013

## 第36ブロック



1  
二次加工のある剥片  
黒曜石3020  
【高野山甘藷群】



2  
燧石  
砂岩3002



3  
石核  
ガラス色黒色火山岩3011



4  
石核  
玉髓3004

## 第37ブロック



5 (a+b)  
複合資料3029  
燧石3002



6 (a~d)  
複合資料3031  
珪質頁岩3006



7 (a~k)  
複合資料3030  
珪質頁岩3006



1 (a+b)  
複合資料3042  
ガラス質黒色火山岩3013

## 第38ブロック



1  
ナイフ形石器  
ガラス質黒色火山岩3012



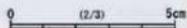
2  
ナイフ形石器  
玉髓3004



3  
燧石  
砂岩3001



4 (a~c)  
複合資料3085  
燧石3003



第3文化層 3c ユニット

第38ブロック



5 (a~c)  
総合資料3056  
流紋岩3003



6 (a~d)  
総合資料3053  
ガラス質黒色安山岩3014



7 (a~c)  
総合資料3054  
ガラス質黒色安山岩3015



8 (a+b)  
総合資料3057  
ホルンフェルス3005

第3文化層

第39ブロック

第40ブロック



1  
ナイフ形石器  
玉髓3003



2  
磨面した面のある剥片  
黒曜石2017



1 (a~d)  
総合資料3114  
チャート3018

第42ブロック



1  
二次加工のある剥片  
黒曜石3025



2 (a+b)  
総合資料3117  
ガラス質黒色安山岩3032



3  
石核  
ガラス質黒色安山岩3033

第41ブロック



1  
ナイフ形石器  
流紋岩3004



2  
剥片  
黒曜石質頁岩3008



3  
剥片  
黒曜石質頁岩3005



4  
石器  
黒曜石質頁岩3009



5  
二次加工のある剥片  
ガラス質黒色安山岩3005



6  
二次加工のある剥片  
黒曜石質頁岩3007



7  
二次加工のある剥片  
ガラス質黒色安山岩3007



8  
石核  
ガラス質黒色安山岩3006



9  
石核  
ガラス質黒色安山岩3007



10  
石核  
黒曜石質頁岩3011



11 (a~c)  
総合資料3019  
ガラス質黒色安山岩3003



12 (a+b)  
総合資料3024  
黒曜石質頁岩3024



13 (a+b)  
総合資料3025  
黒曜石質頁岩3007



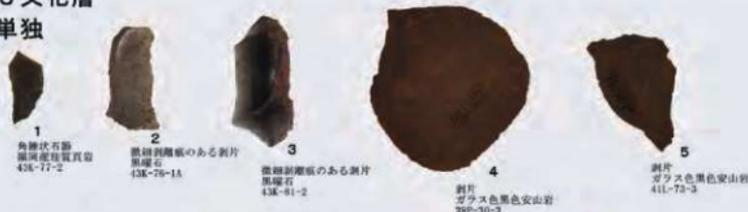
14 (a~c)  
総合資料3021  
黒曜石質頁岩3005



14c  
二次加工のある剥片

0 (2/2) 5cm

第3文化層  
単独



第4文化層

第44ブロック

第43ブロック



第4文化層単独

第45ブロック

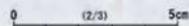


第5文化層

第46ブロック



第5文化層単独

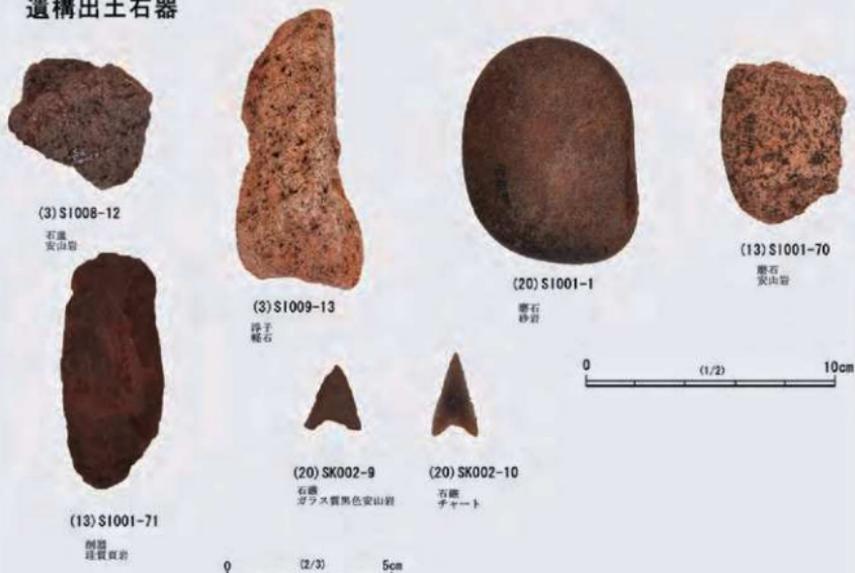


第3文化層(4)・第4文化層・第5文化層出土石器

旧石器時代  
単独出土石器



縄文時代  
遺構出土石器



旧石器時代単独出土石器 縄文時代遺構出土石器

縄文時代

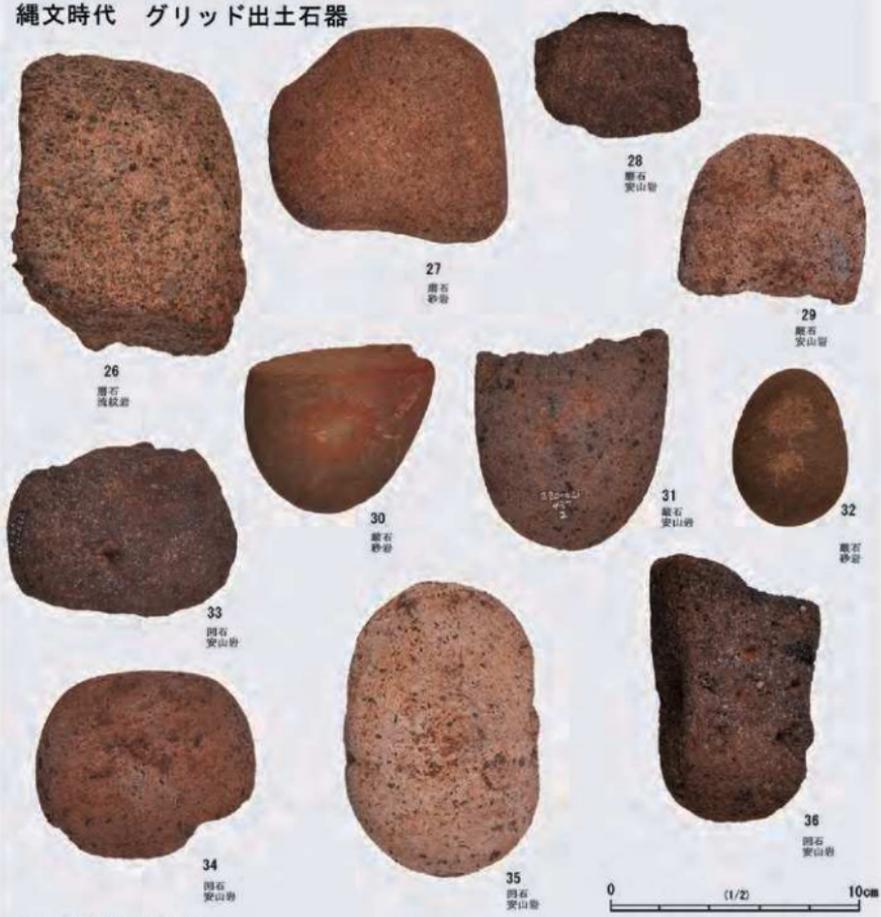
グリッド出土石器



グリッド出土縄文石器

市野谷芋久保遺跡

縄文時代 グリッド出土石器



市野谷中島遺跡

縄文時代

遺構出土石器

グリッド出土石器



市野谷芋久保遺跡グリッド出土縄文石器

市野谷中島遺跡遺構・グリッド出土縄文石器

市野谷芋久保遺跡

(3) S1008 - 009



(12) S1001



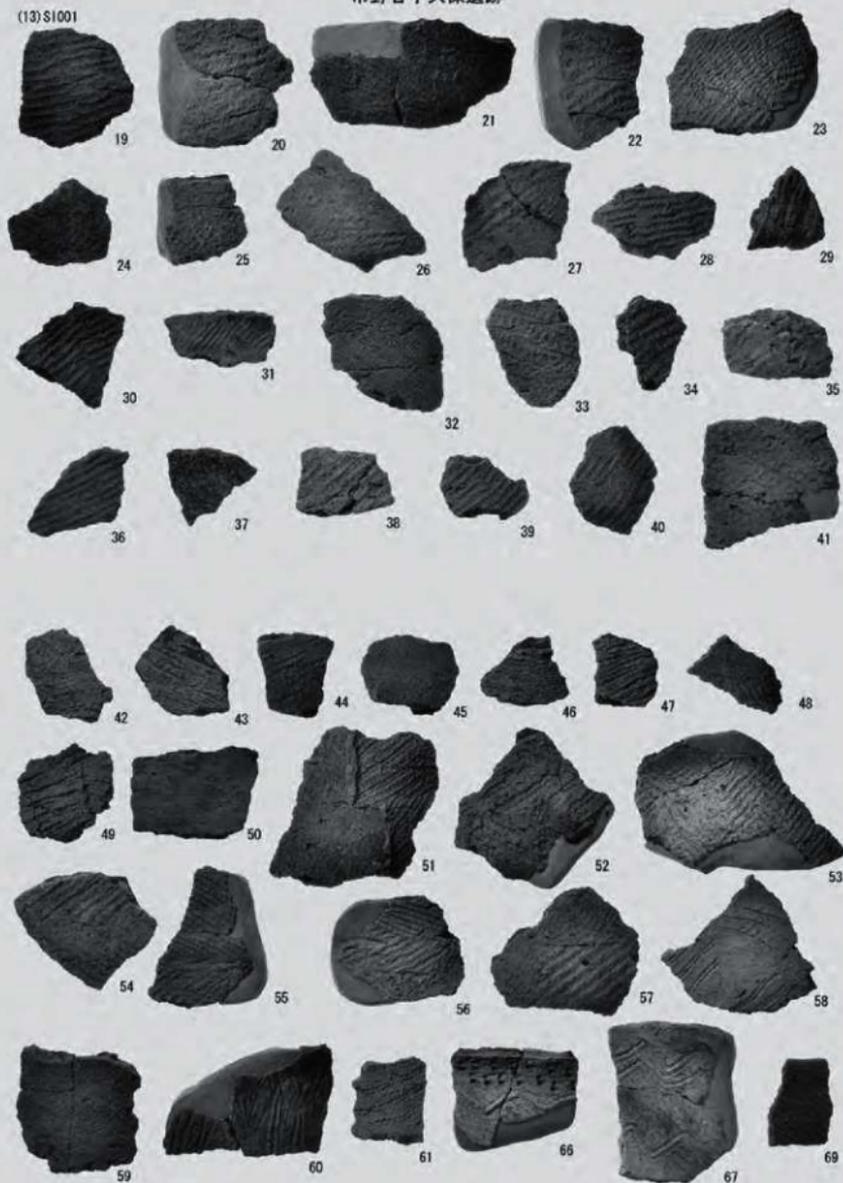
(13) S1001



縄文土器 1

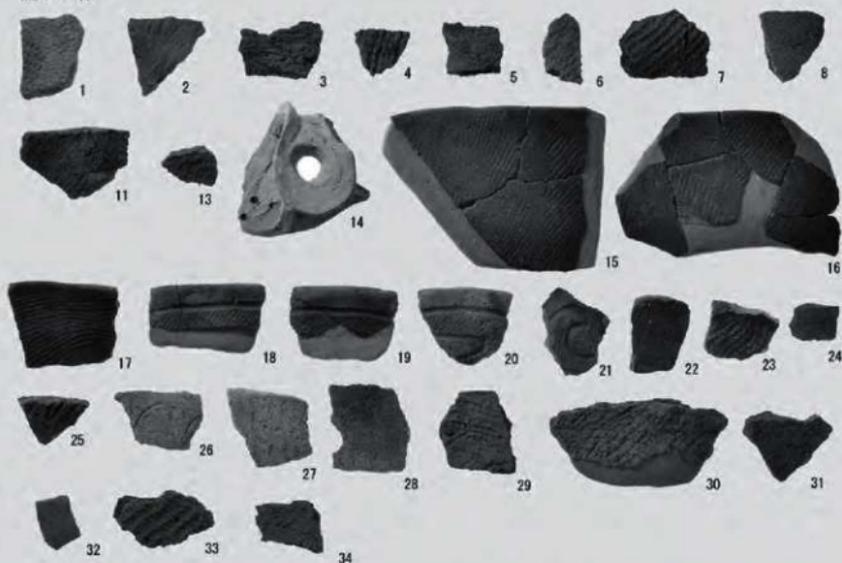
市野谷芋久保遺跡

(13)SI001

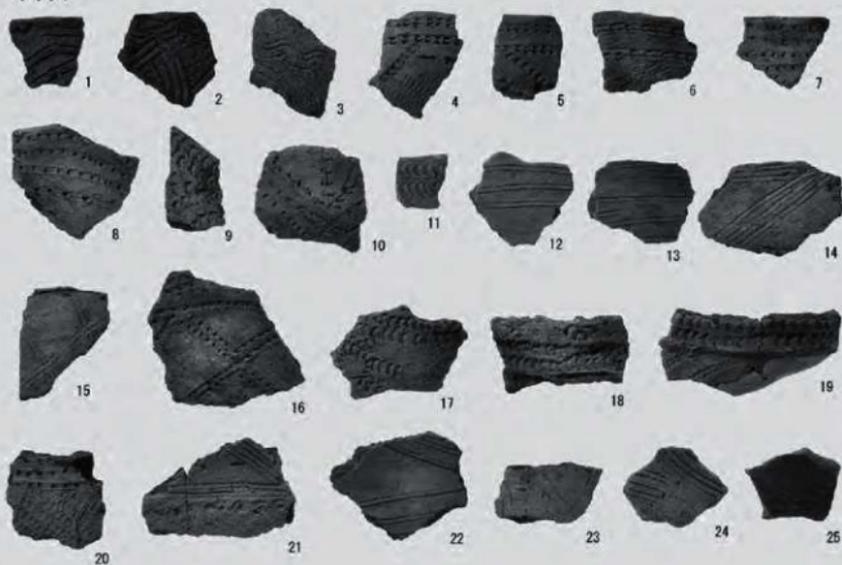


## 市野谷芋久保遺跡

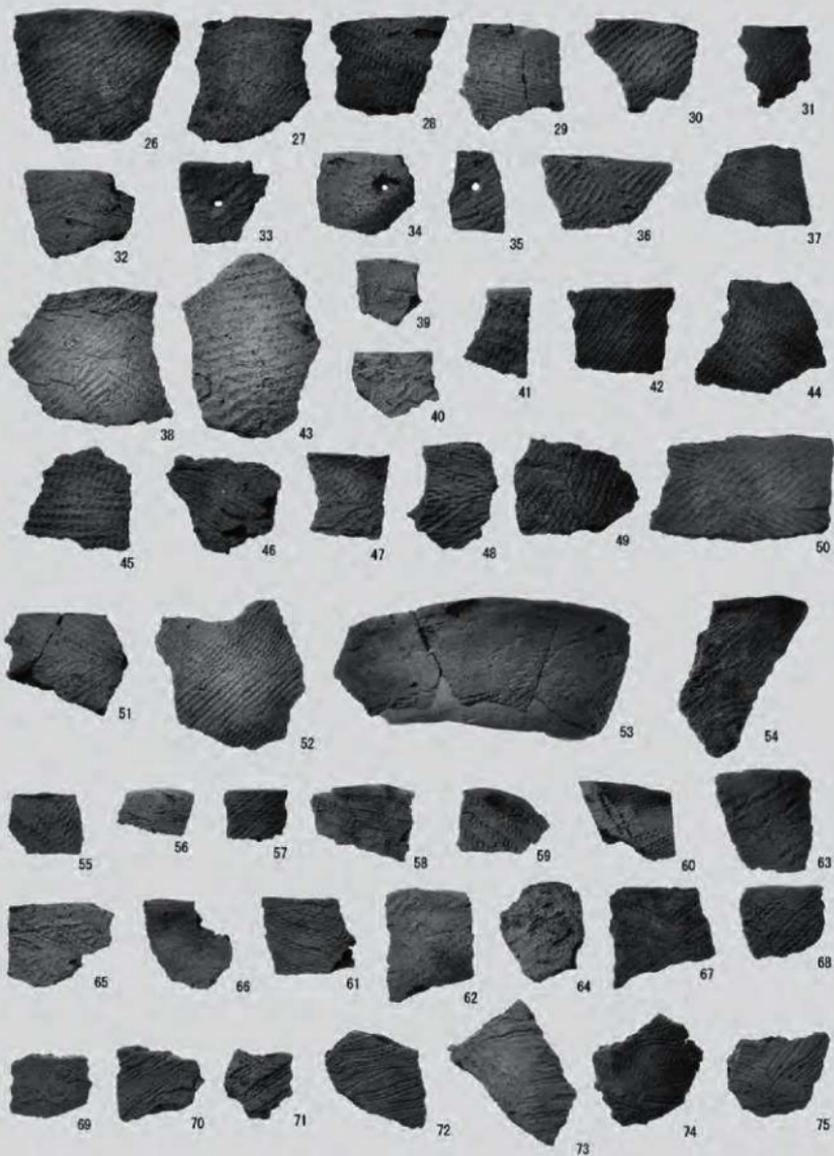
## 陥穴・土坑



## グリッド



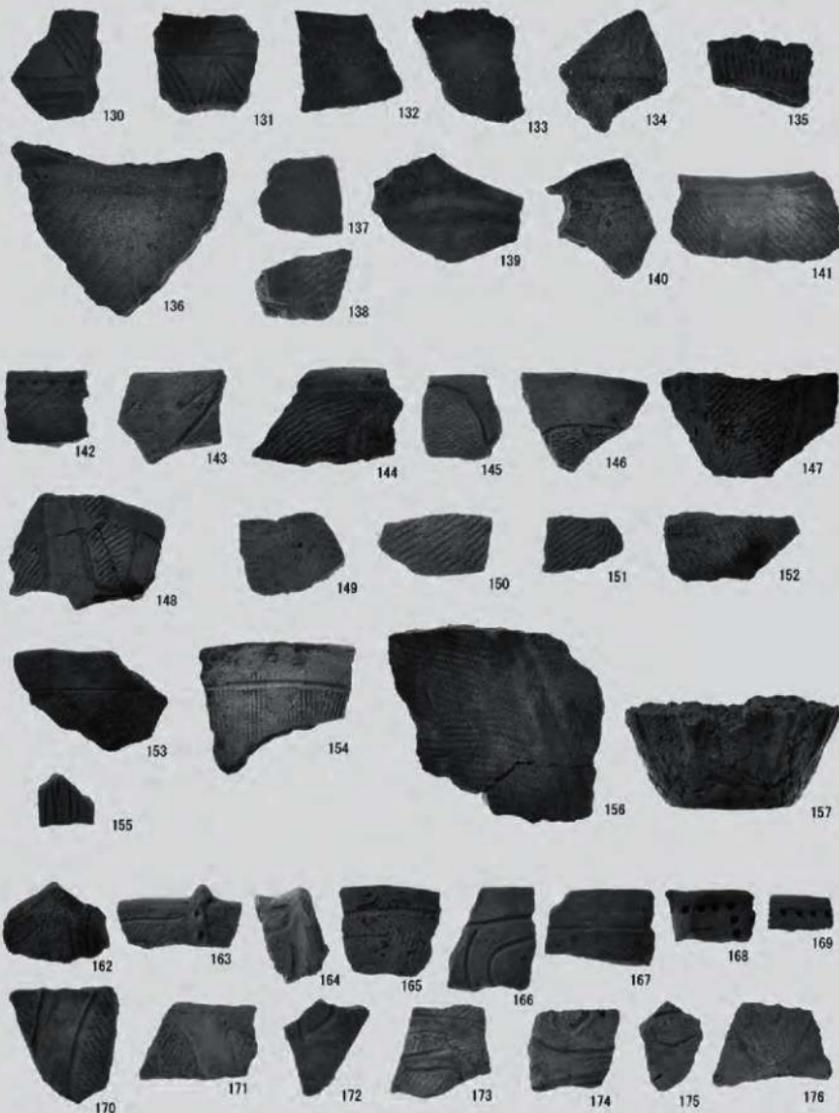
市野谷羊久保遺跡



市野谷芋久保遺跡



市野谷羊久保遺跡



市野谷芋久保遺跡





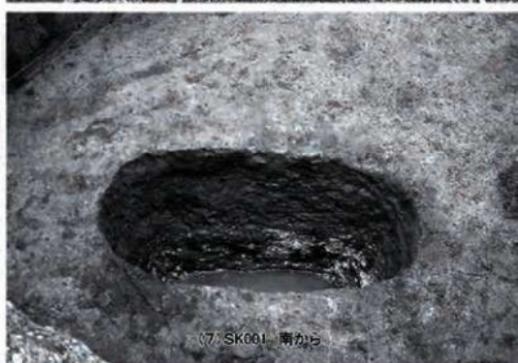
(2) SP005 東から



(7) SK002 東から



(1) SI001 北東から



(6) SK001 南から



(3) SI001 西から



(4) SI001の中心部 北から



(5) SI001の左側部 北から



(8) SI002遺物出土状況 北から



市野谷中島遺跡

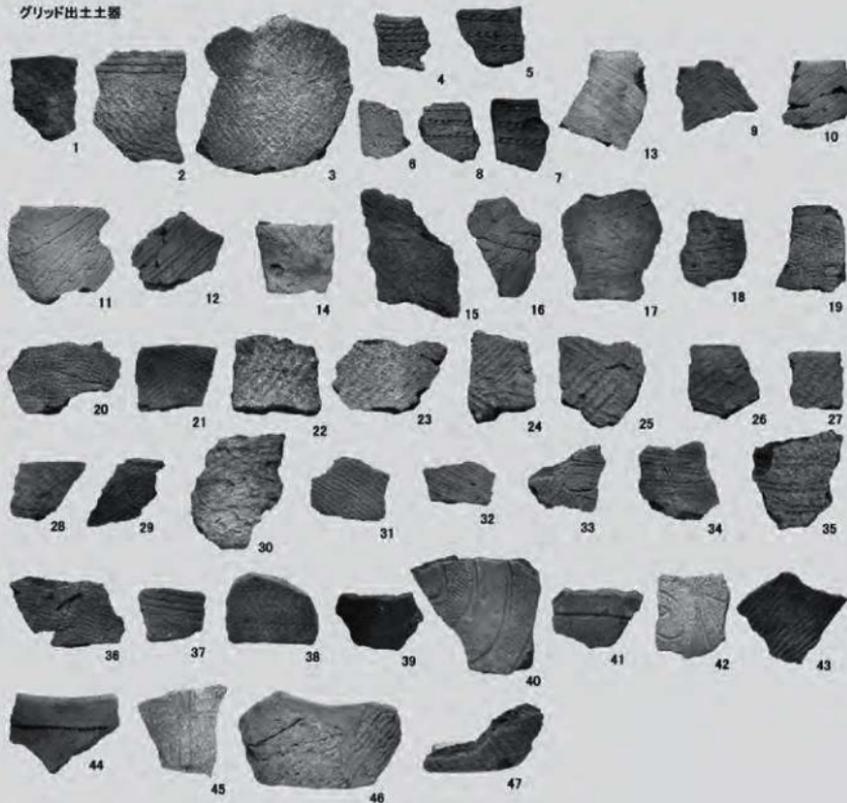
(2)SP005



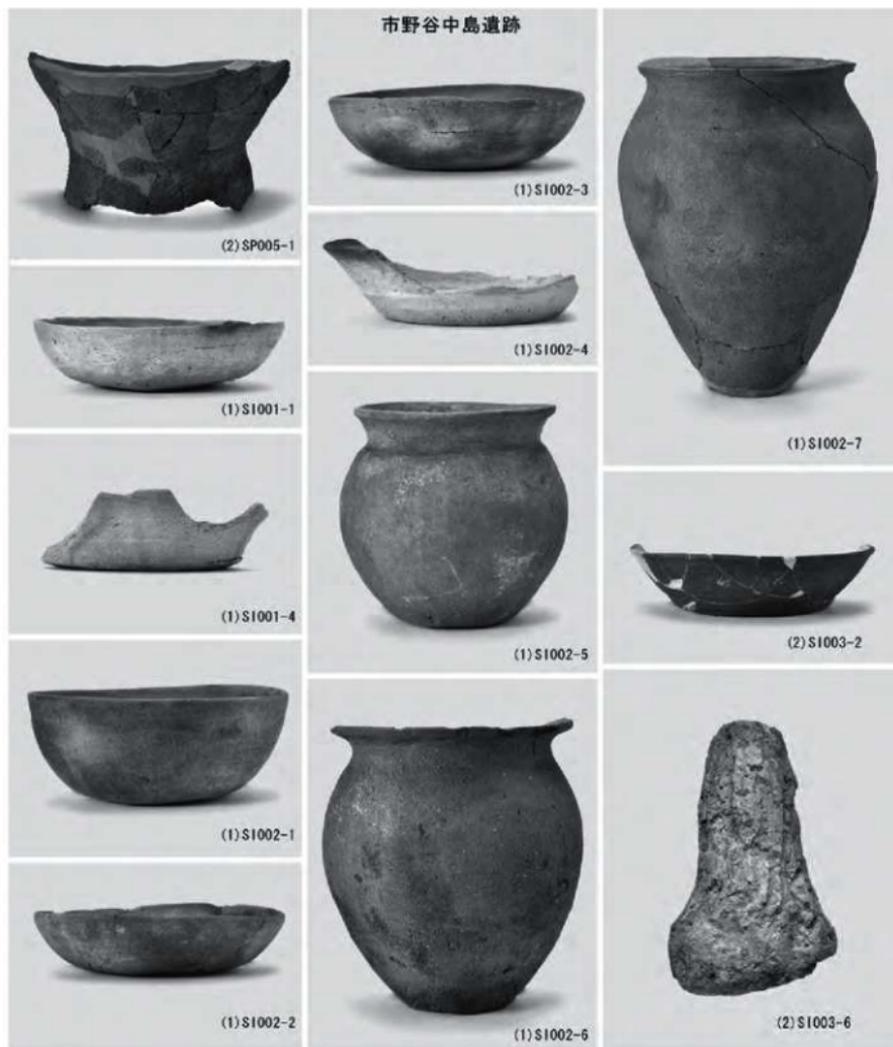
(7)SK002



グリッド出土土器



遺構・グリッド出土縄文土器



遺構出土土器



(3) SI001 東から



(4) SI002 東から



(6) SI002 南から



(5) SI002遺物出土状況 東から



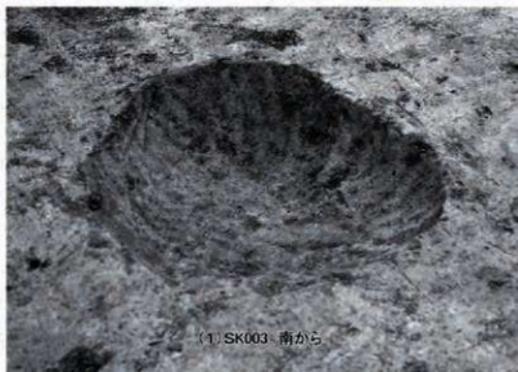
(7) SK002 北東から



(8) SK001遺物出土状況 西から



(9) SK001 西から



(1) SK003 南から



(1) SK002 西から



(2) SK003 北西から



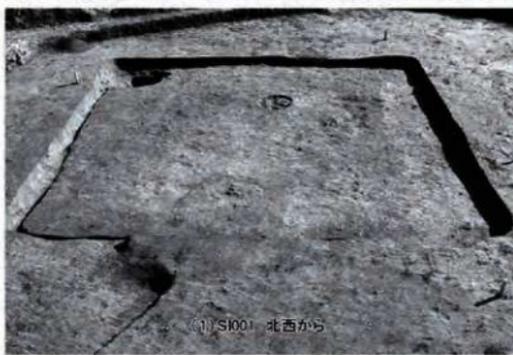
(6) SK002 南西から



(6) SK003 南東から



(7) 縄文遺物集集中地点(470-72-23-82-83)掘進状況 南から



(1) SK001 北西から



(1) SK002 南東から



(2) SK002 北西から



(5) SI001 西から



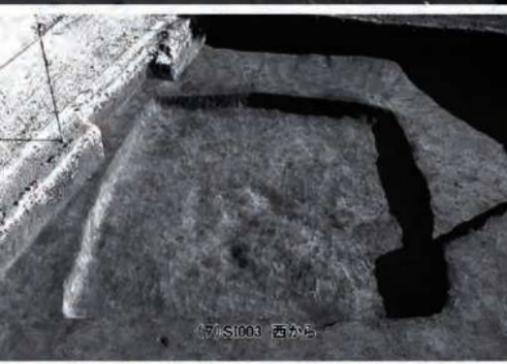
(5) SI001 北西から



(7) SI001 南南西から



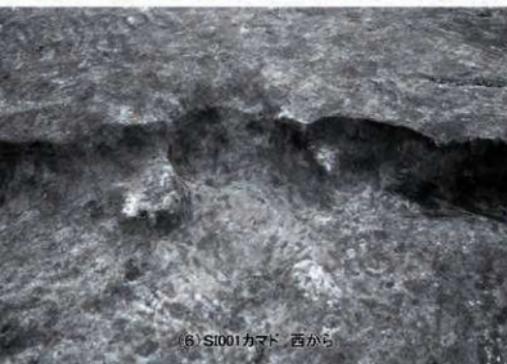
(7) SI002 西から



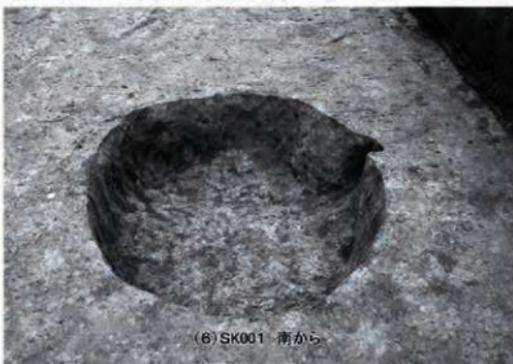
(7) SI003 西から



(6) SI001 南西から



(6) SI001カマド 西から



(6) SK001 南から



(6) SK004 南から



(1) SK004 南西から



(1) SK005 西から



(1) SK006 南から



(2) SD002 270°の地点 北西から



(2) SD002 170°の地点 南東から



(2) SD002 270°の地点 北西から



(5) SD001 北西から

旧石器時代

第3文化層 第20ブロック



23  
ナイフ形石器  
ガラス質黒色安山岩211



24  
ナイフ形石器  
黒河産地質頁岩206



25  
ナイフ形石器  
チャート226



26  
錘型  
埴質頁岩217



27  
錘型  
埴質頁岩217



28  
二次加工のある剥片  
黒河産地質頁岩206



29  
二次加工のある剥片  
玉髓292



30  
微細剥離痕のある剥片  
チャート226



31  
石核  
黒河産埴質頁岩206



32  
石核  
黒河産地質頁岩206



33  
石核  
黒河産地質頁岩206



34  
石核  
埴質頁岩217

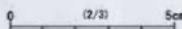


35  
剥片  
ガラス質黒色安山岩210

単独出土  
石器



1  
ナイフ形石器  
チャート



縄文時代

遺構出土石器



(5) S1002-231  
石鏃  
チャート



(5) S1002-232  
微細剥離痕のある剥片  
チャート



(5) S1002-137  
石鏃  
チャート



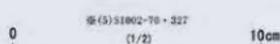
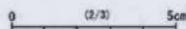
(5) S1002-69  
剥片  
埴質頁岩



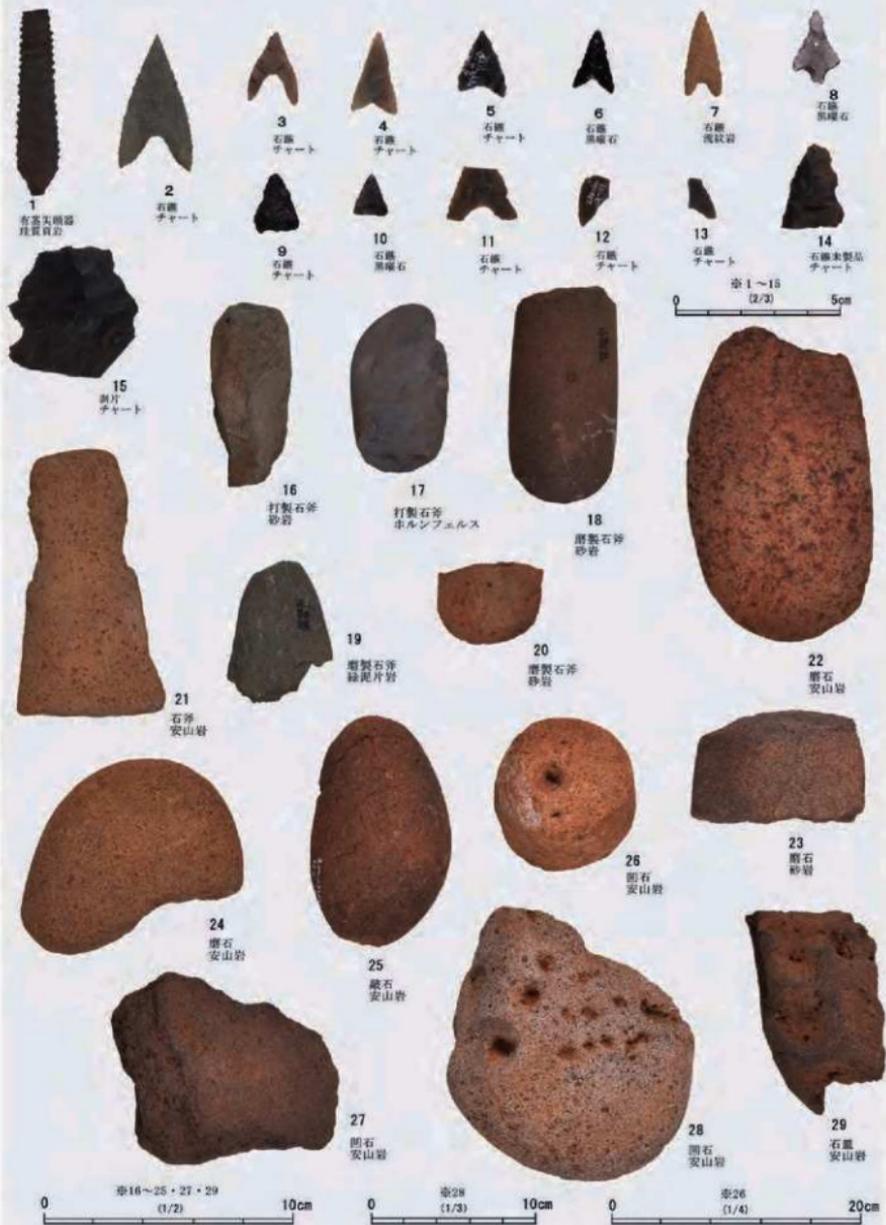
(5) S1002-70  
磨製石斧  
砂岩



(5) S1002-327  
磨石  
安山岩



## グリッド出土石器



縄文時代グリッド出土石器

古墳時代  
遺構出土石器



(1)S1001-19  
磨石  
安山岩



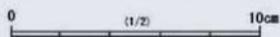
(1)S1001-11  
砥石



(1)S1001-28  
砥石

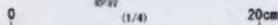


(1)S1001-35  
砥石



(1)S1001-26+6+9+(1)S1002-31

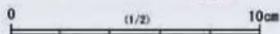
接合資料  
砂岩



(1)S1002-20  
砥石

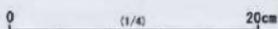


(1)S1002-3  
円礫  
玉髓



(1)S1001-10+(1)S1002-21

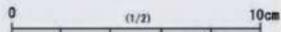
接合資料  
石英斑岩



(1)S1002-18  
台石  
安山岩



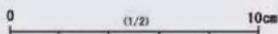
(1)S1002-3  
砥石  
安山岩



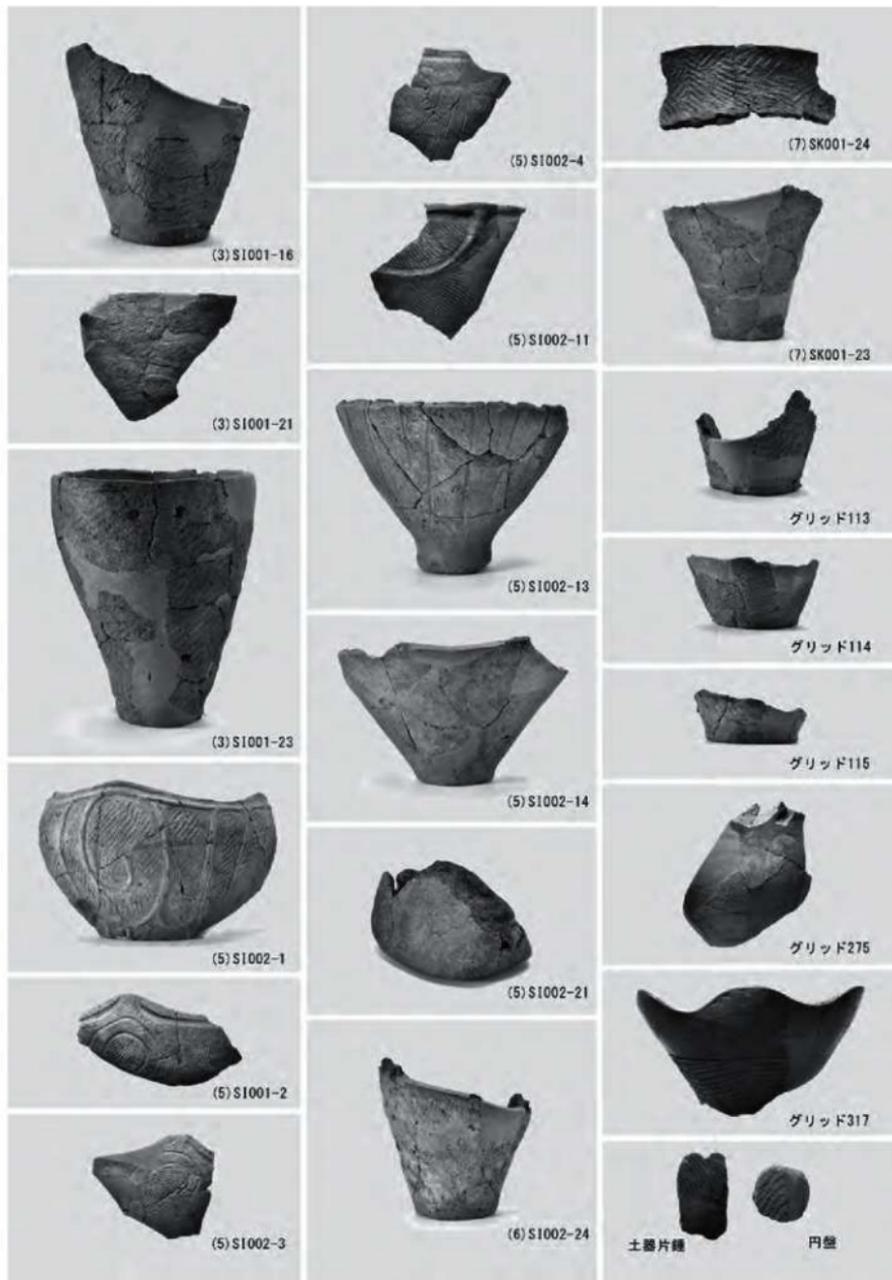
平安時代  
遺構出土石器



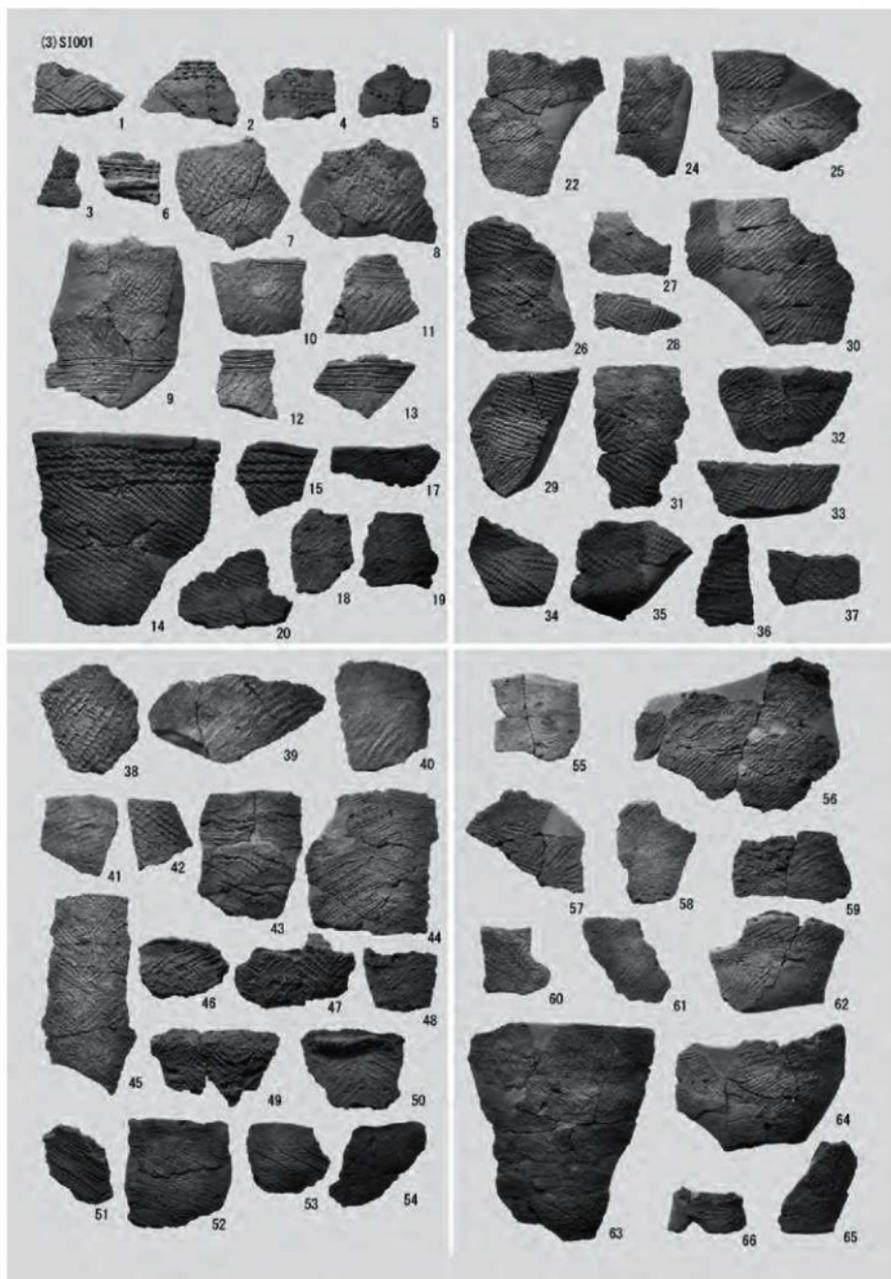
(7)S1003-102  
磨石  
流紋岩

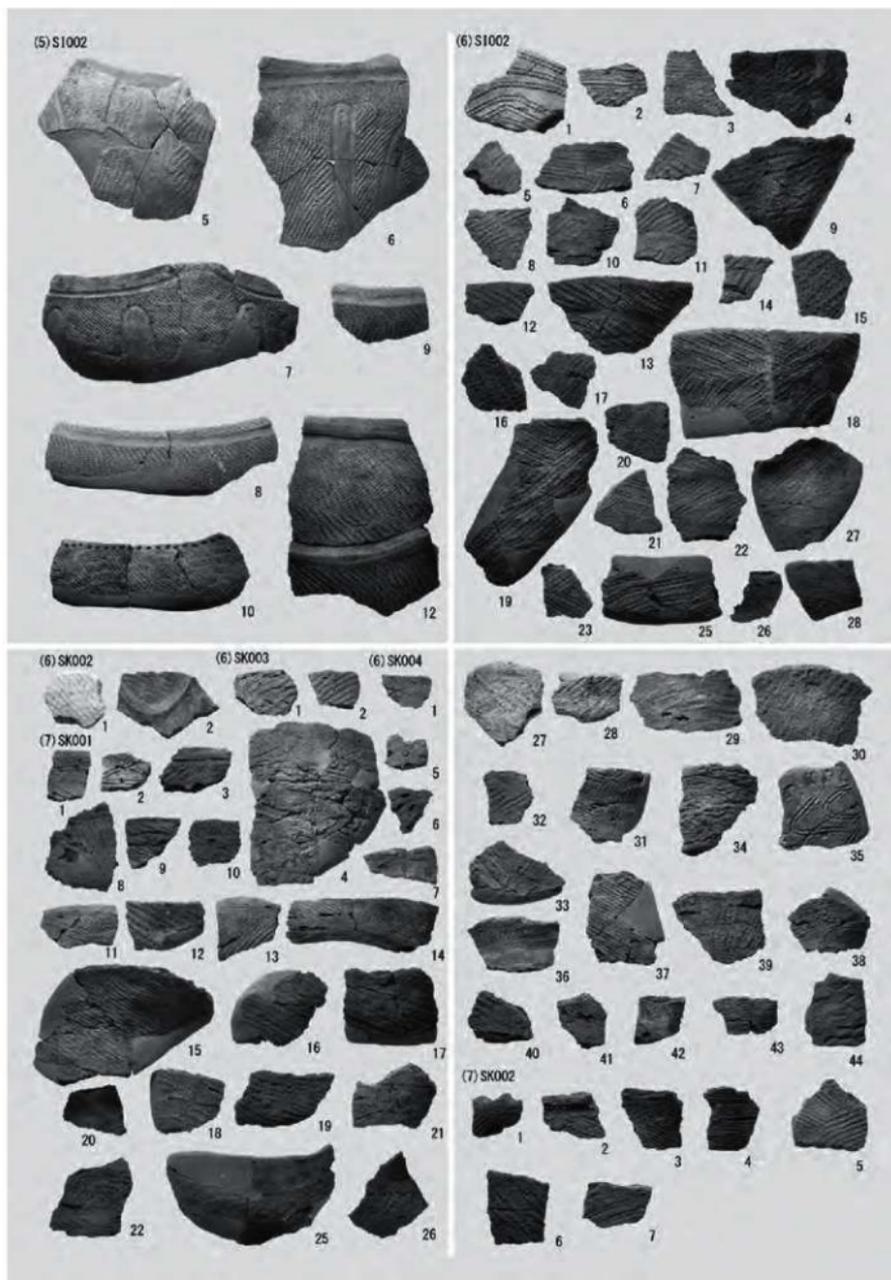


(6)S1001-11  
有孔砥石  
種實凝灰岩

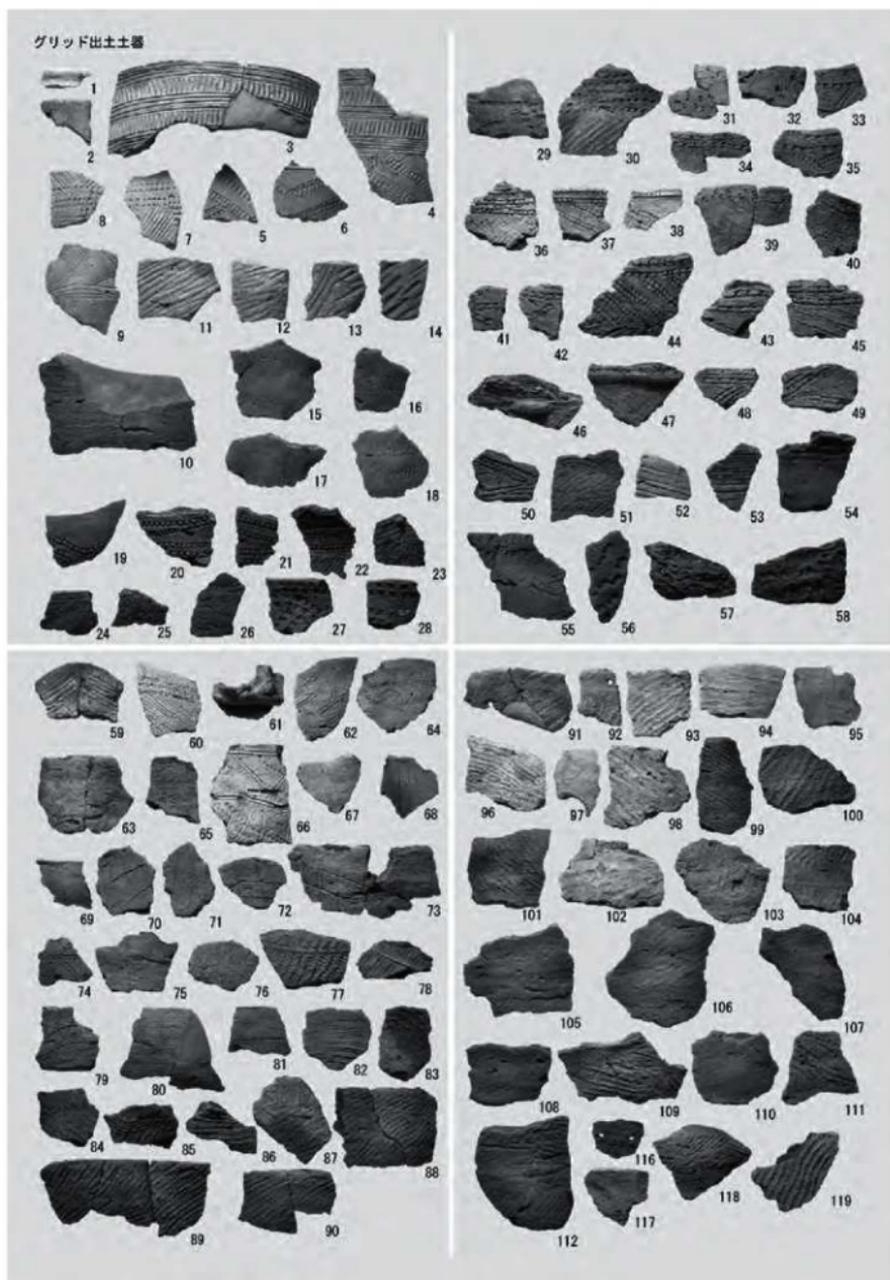


縄文土器 1・土製品

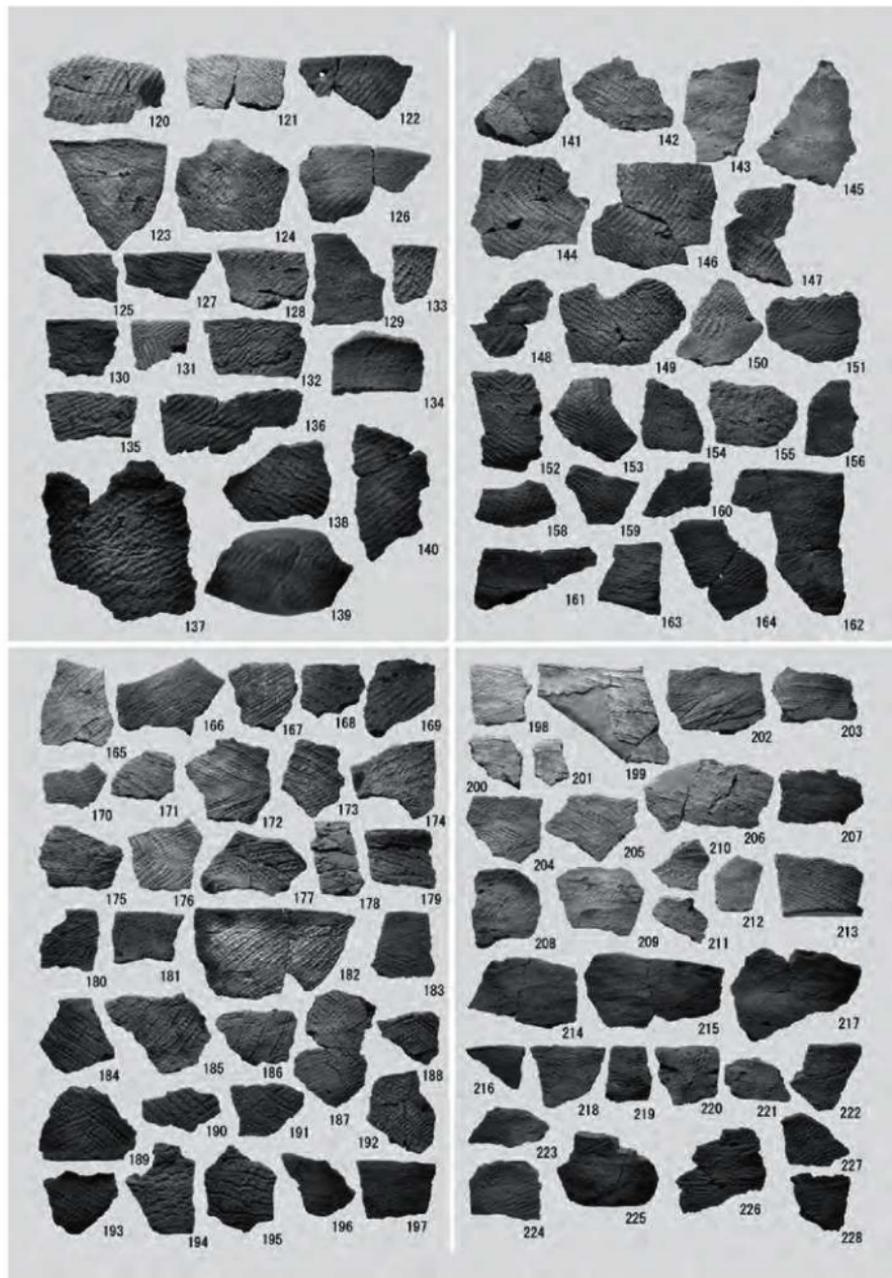




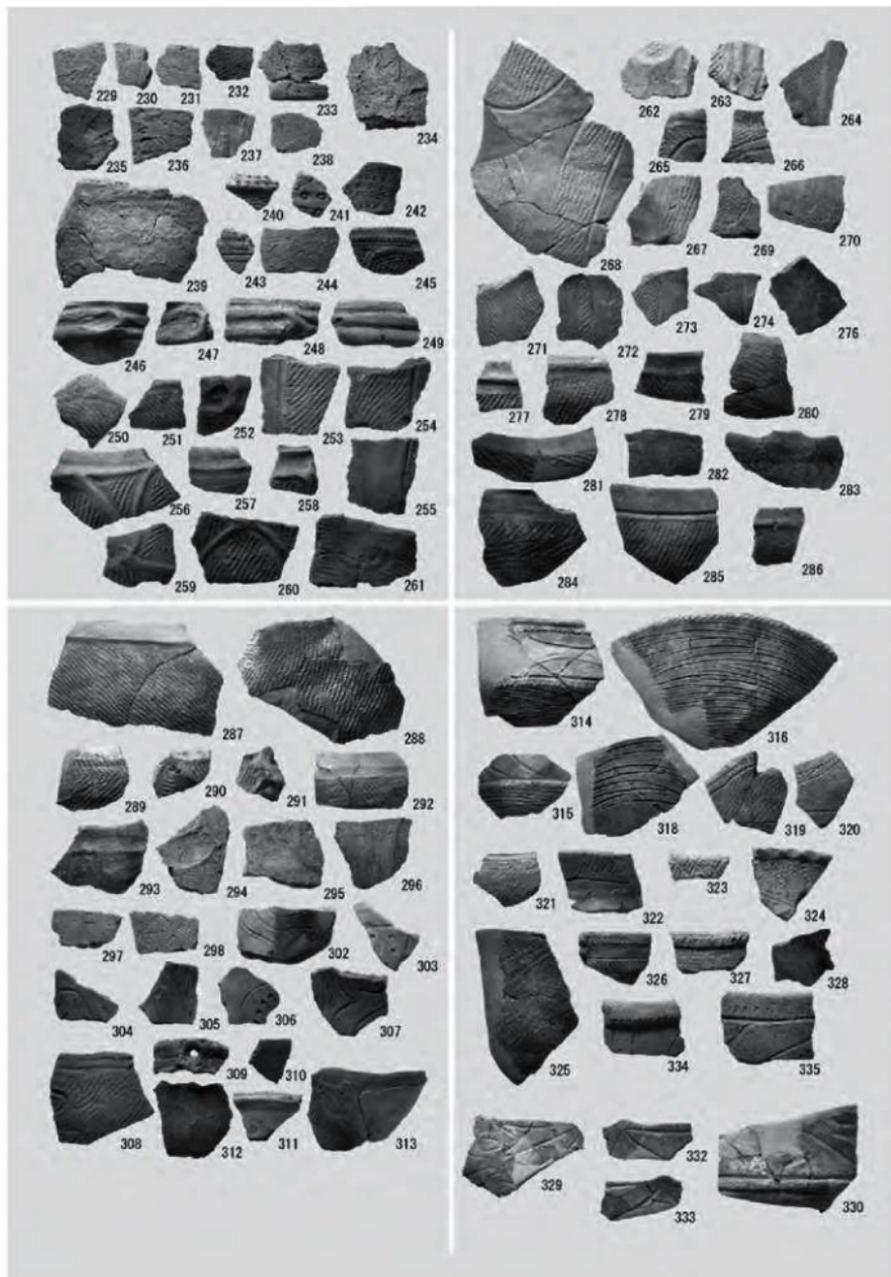
グリッド出土土器

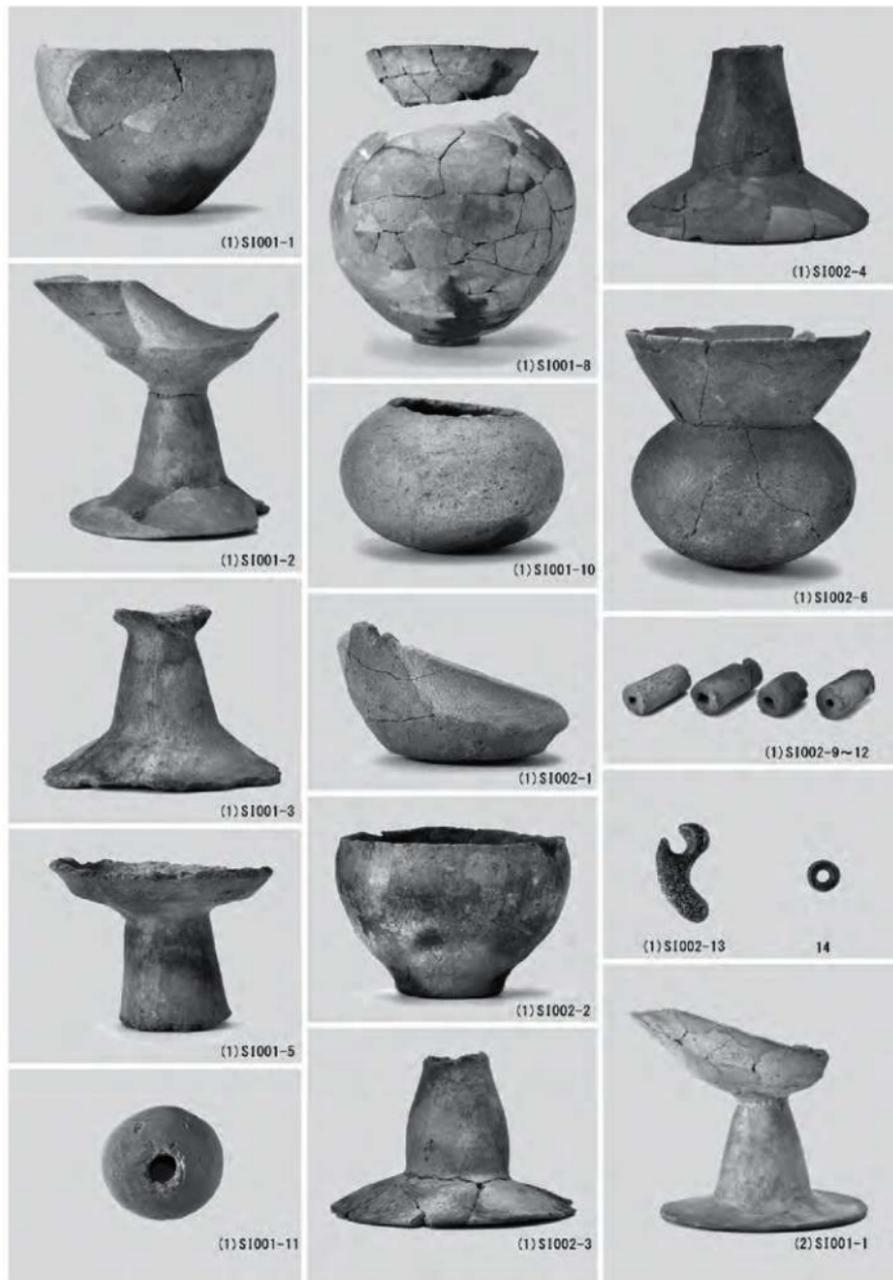


縄文土器 4

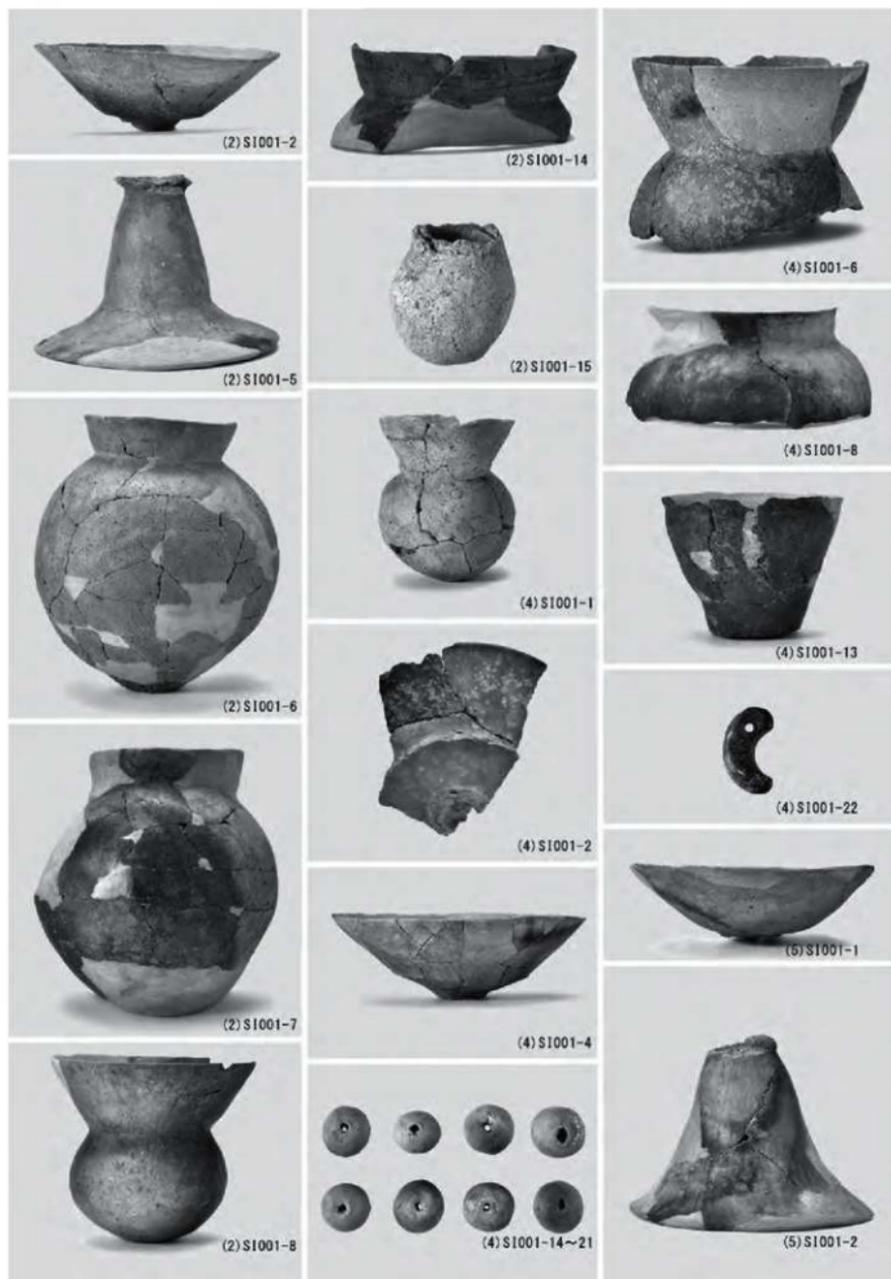


縄文土器 5

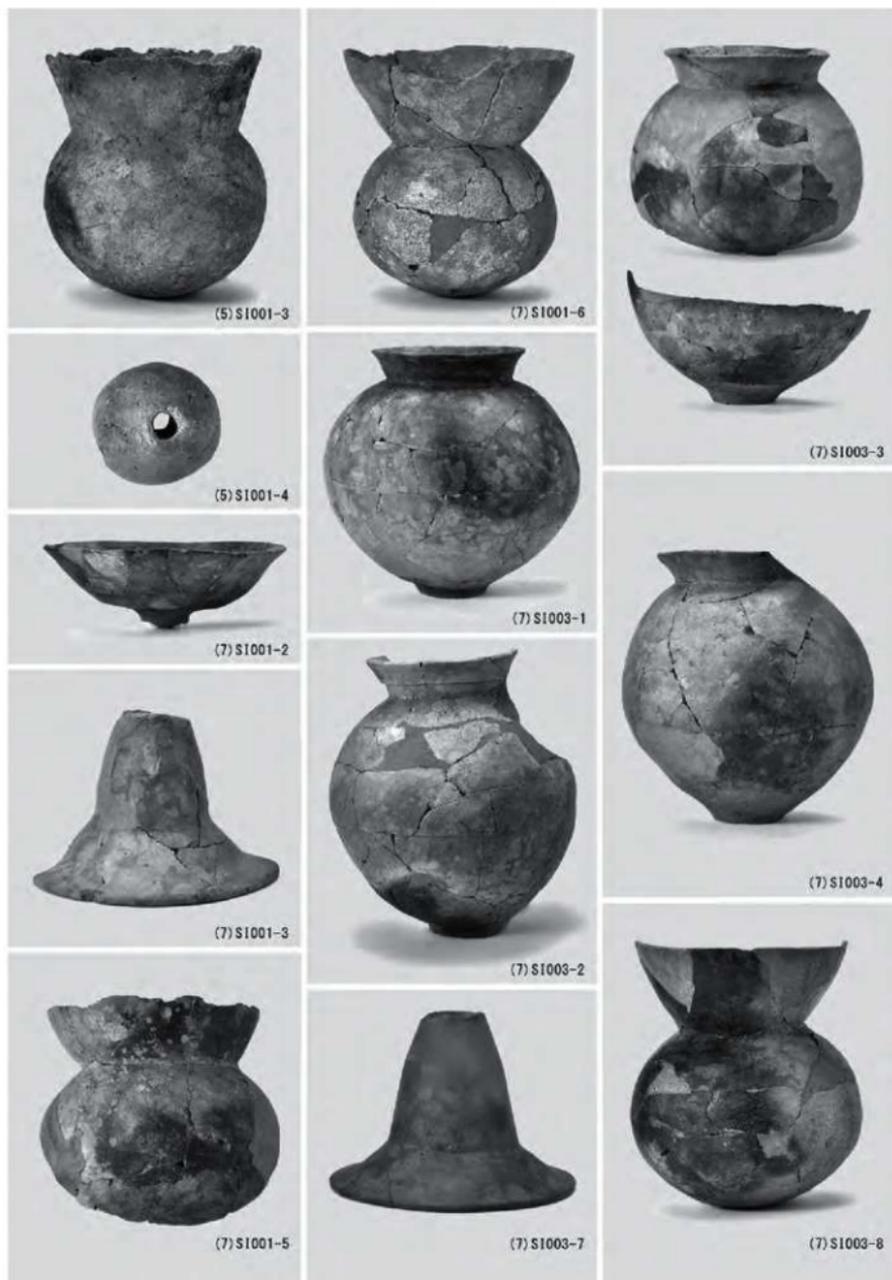




古墳時代 堅穴住居跡出土遺物 1



古墳時代 竪穴住居跡出土遺物 2



古墳時代 竪穴住居跡出土遺物 3



30BB-17 突願器出土状況 北東から



40Y-66付近 南東から



40Z-66付近 東から



44Z-54付近 南から



40Y-98付近 北西から



45BB-20付近 西から



セクション44A-80 南から



セクション45BB-200付近 西から



(4) SI011 3P012 北東から



(6) SI002 北から



(17) SI001 西から



(3) SI001 北から



(3) SI004 東から



(4) SI028-039 北から



(5) SK024焼土 西から



(4) SK036 南から



(4)SK016C 東から



(4)SK026B 東から



(4)SK026D 南から



(4)SK026A 北から



(4)SK027-SK037-SK038 西から



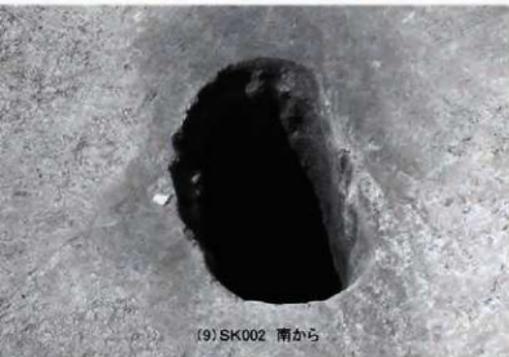
(4)SK042 西から



(15)SK001 北西から

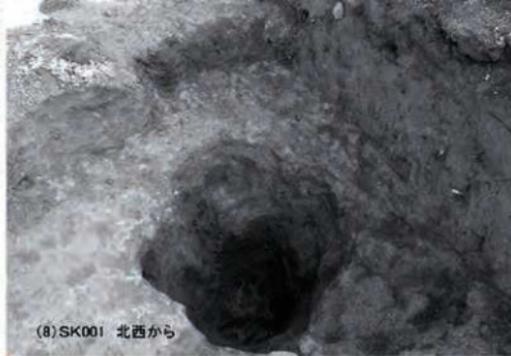


(9)SK001 東から





(15)SK002 東から



(8)SK001 北西から



(13)SK001 南から



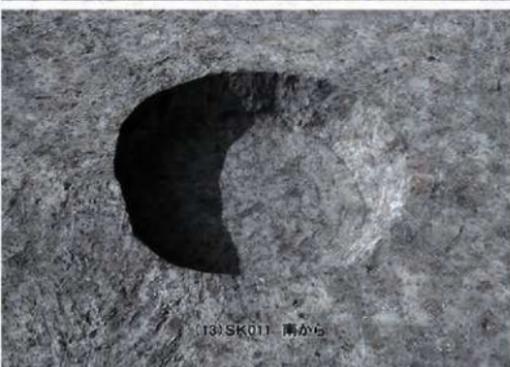
(13)SK002 西から



(13)SK004~SK006-SB002 北西から



(13)SK007 南東から



(13)SK011 南から



(13)SK008~SK010 南から





(4)SK020 南西から



(5)縄文後期 遺物集中地点 南東から



4次調査空中写真(41X・41Y付近) 鎌野 南西から



4次調査空中写真(41Y付近) 鎌野 南から



4次空中写真(41X・41Y付近) 鎌野 北西から



坂川方面から8次調査(40X・40Y付近)掘削を撮影、南西方向



坂川

8次調査(40X・40Y付近)掘削から坂川を望む、北から



坂川

8次調査(40X・40Y付近)掘削から坂川を望む、北西から



坂川

8次調査(40X・40Y付近)掘削から坂川を望む、北東から



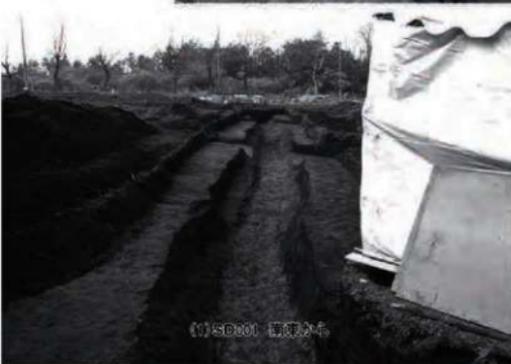
8次調査(40Y・93米中)遺構、南東から



(13) SD008 南から



(17) SD001 野馬堀境界線



(11) SD001 東から



(18) SD001 野馬堀 東から



(6) SK046 東から



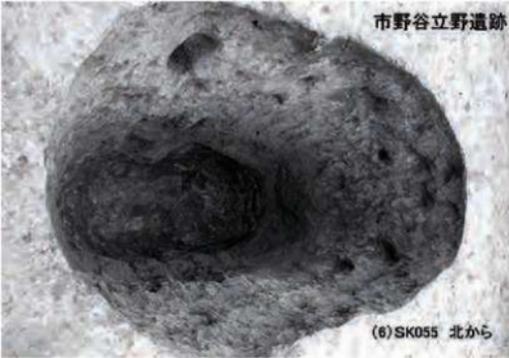
(8) SD045 ササノ川 北西から



(8) SK047 南から



(6) SK048 南東から



(6)SK055 北から



(6)SK054 北から



(6)SK050セクション(北から)



(6)SK049 東から



(6)SK051 南から



(6)SK052 北から



(6)SP053A~SP053G 東から



(6)SP009 西から

旧石器時代

単独出土石器



縄文時代

遺構出土石器



旧石器時代単独出土石器

縄文時代遺構出土石器

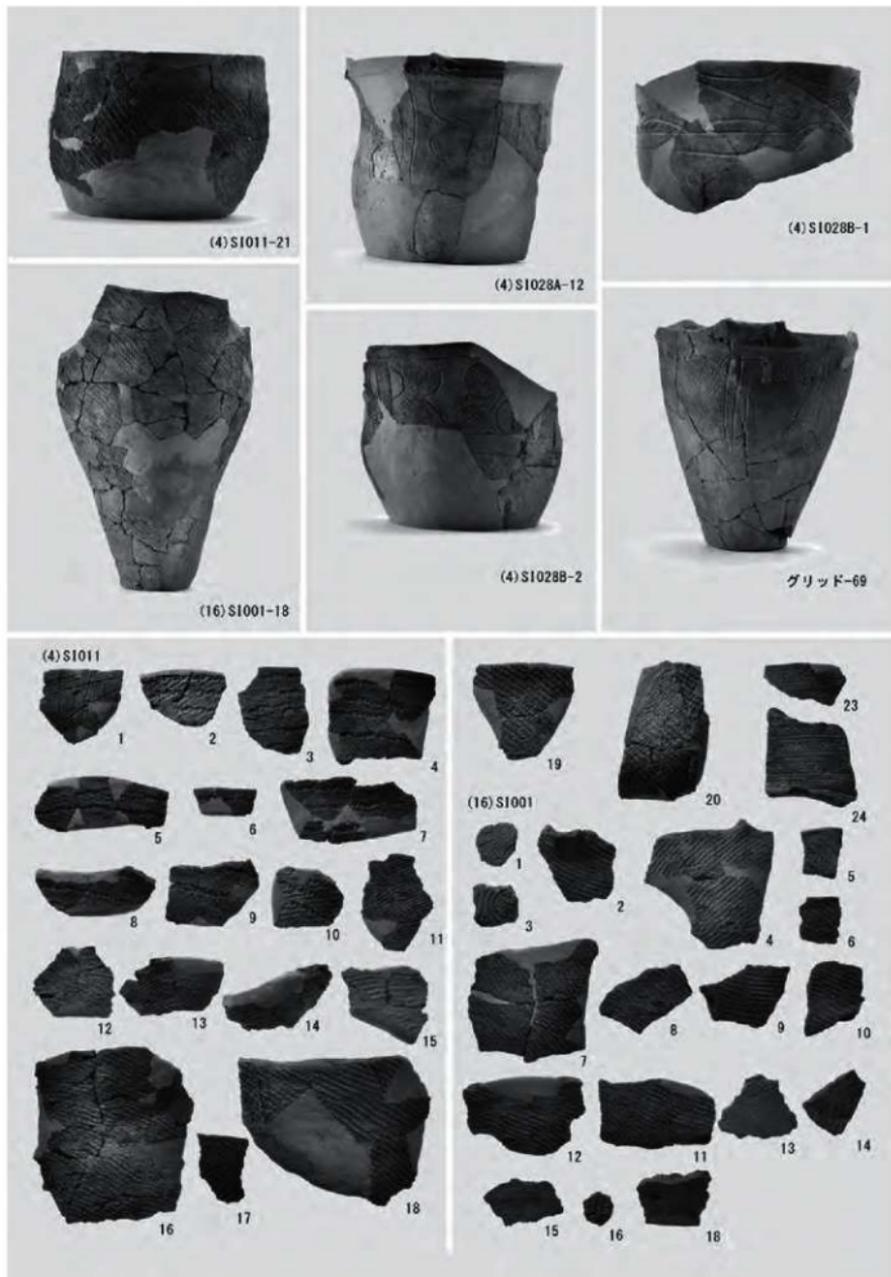
## 礫群出土石器



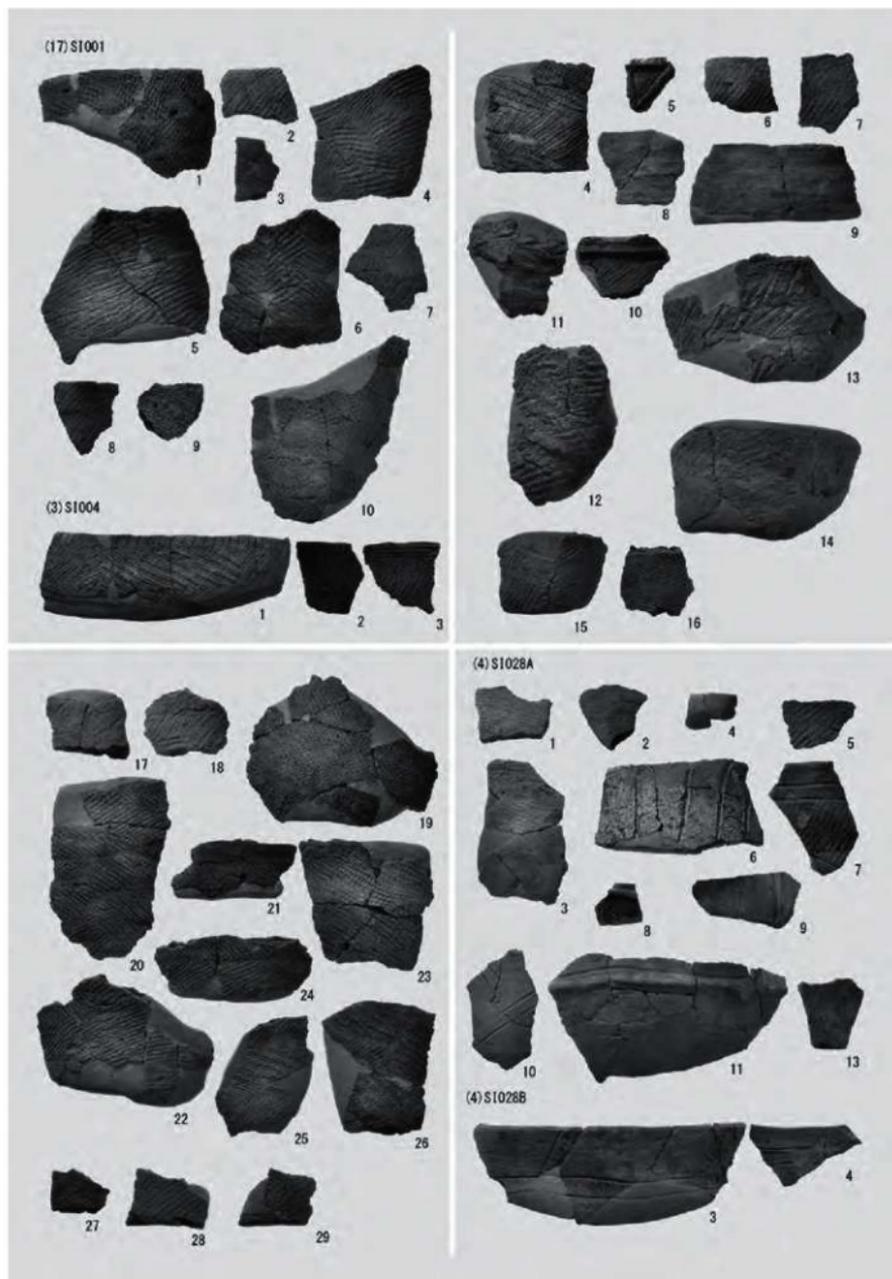
## グリッド出土石器



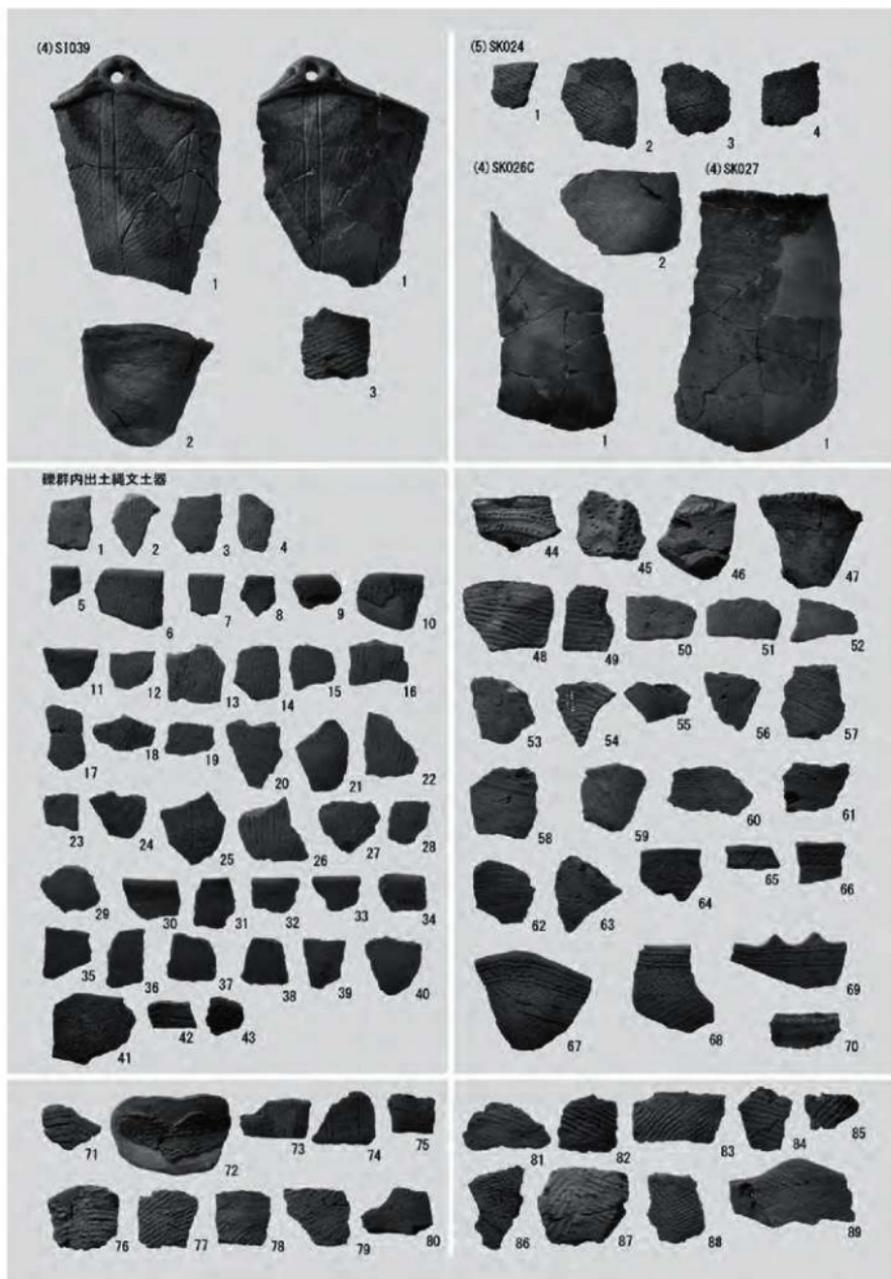
縄文時代礫群出土石器・グリッド出土石器



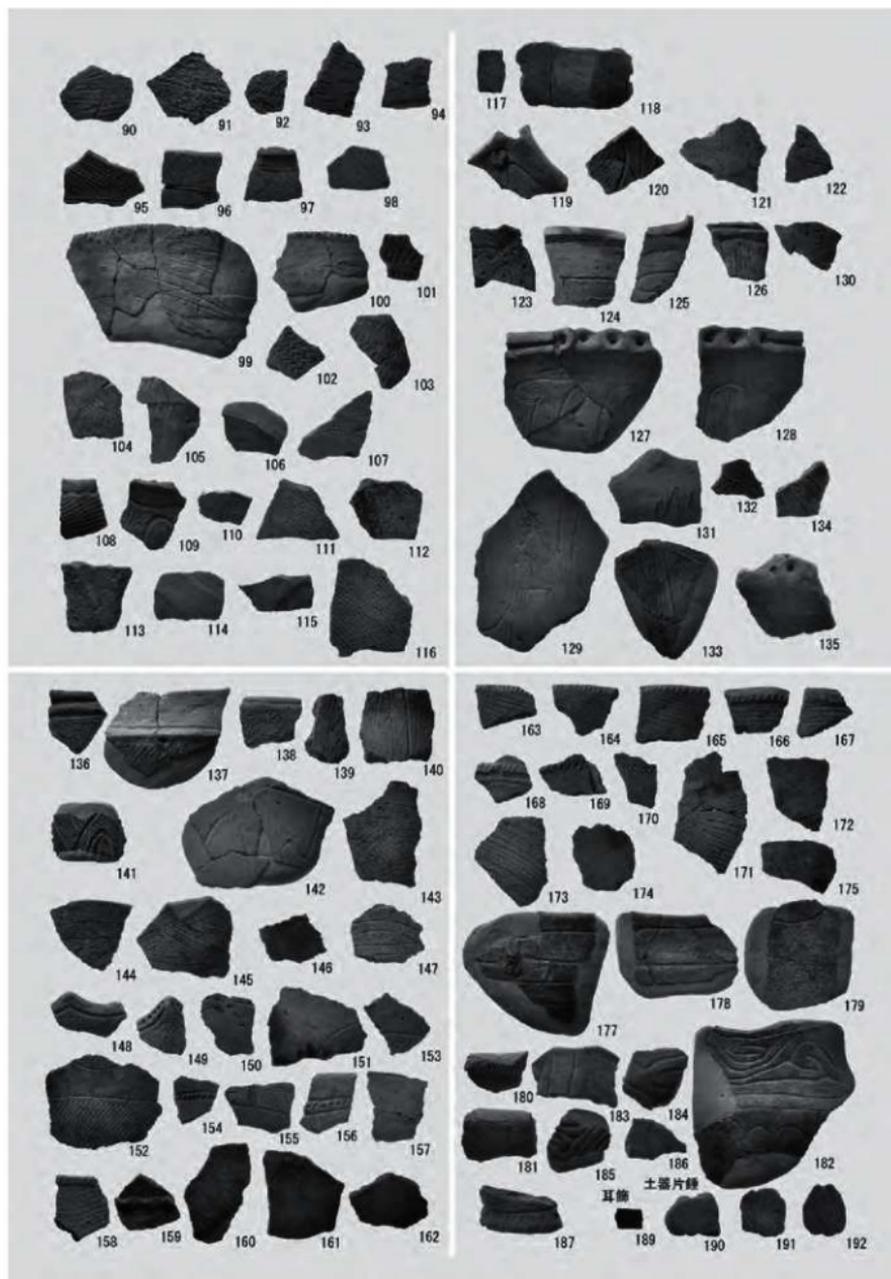
遺構出土縄文土器 1



遺構出土縄文土器 2

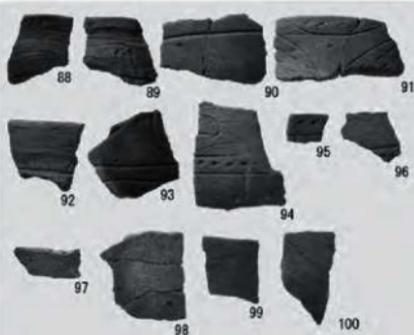
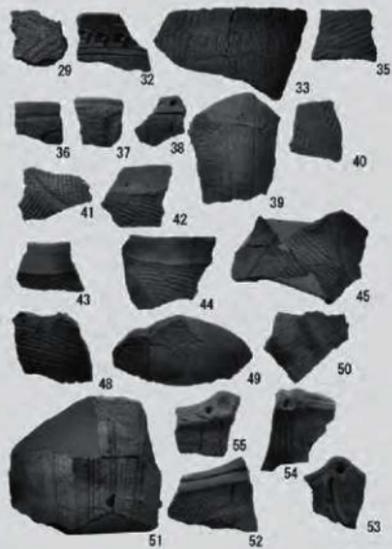
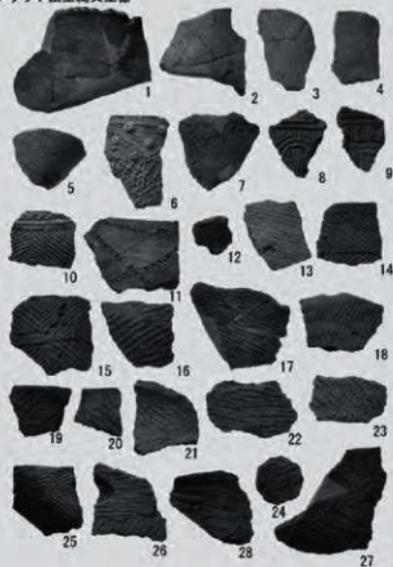


遺構出土縄文土器 3・礫群内出土縄文土器 1



濠群内出土縄文土器 2・土製品

グリッド出土縄文土器



グリッド出土縄文土器



遺跡全景



(4)S1018 北から



(2)S1013 西から



(3)S1009 南東から





(4)SK037



(4)SK036



(1)SK011



(1)SK009



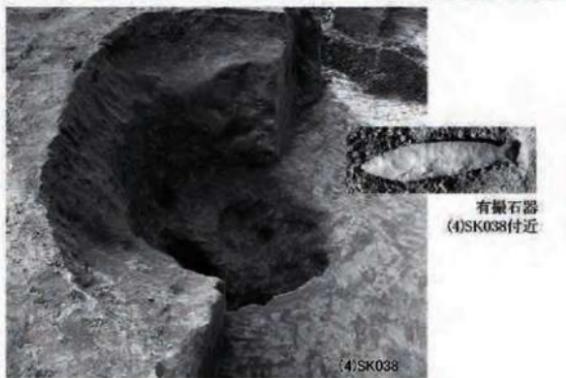
(1)SK004



(1)SK003



(6)SK001



有環石器  
(4)SK038付近

(4)SK038



大久保遺跡



4) S0015B 角部分 南から



5) S0015B 角部分 北から

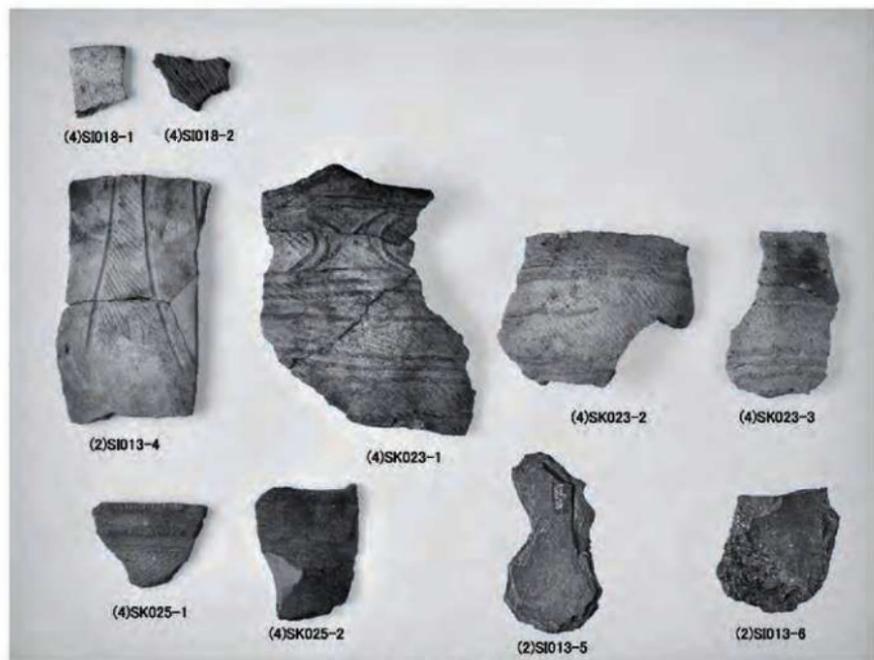


6) S0015B 角部分 北から

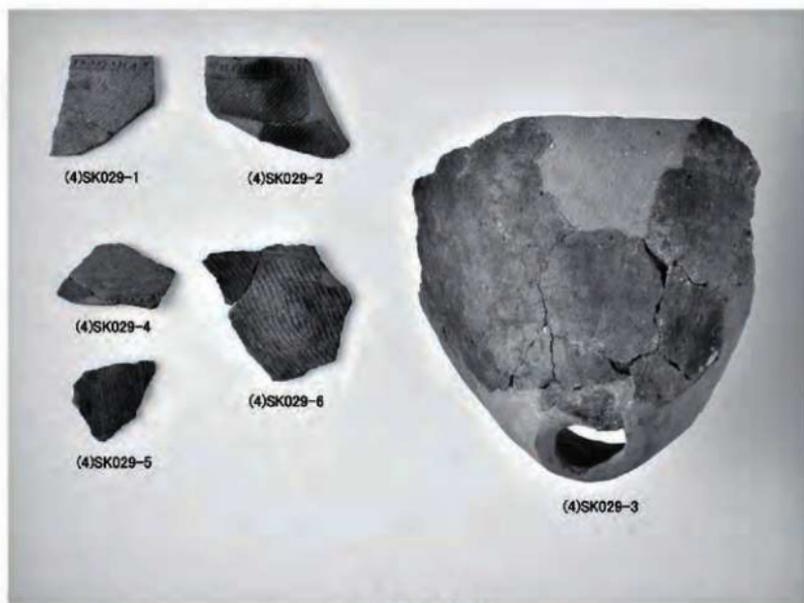


7) S0015B 角部分 北から

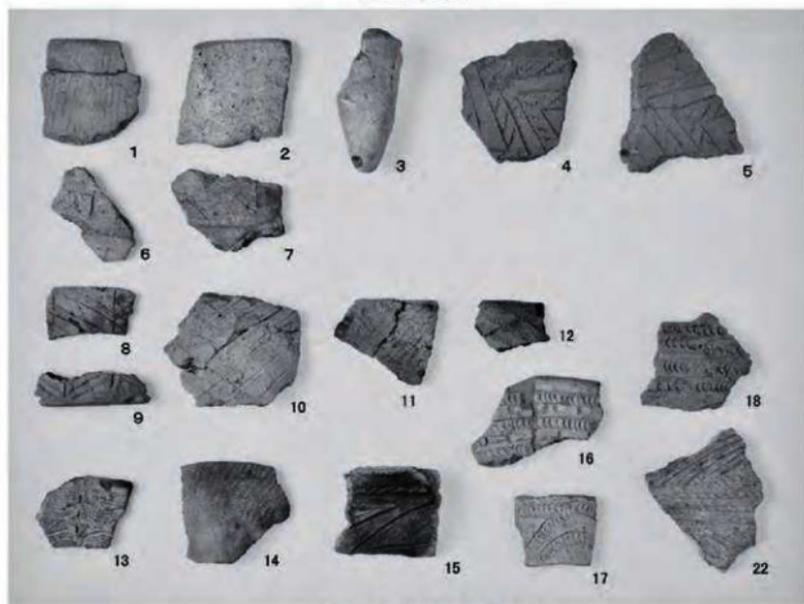




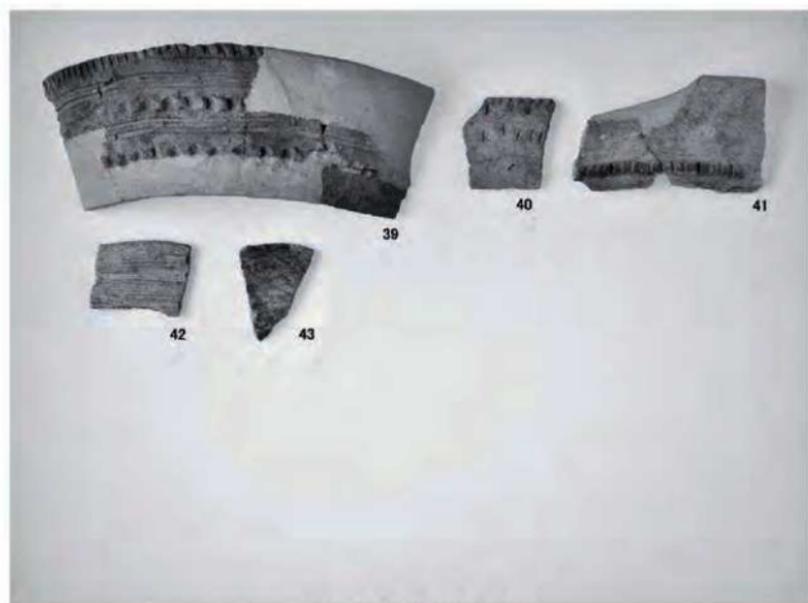
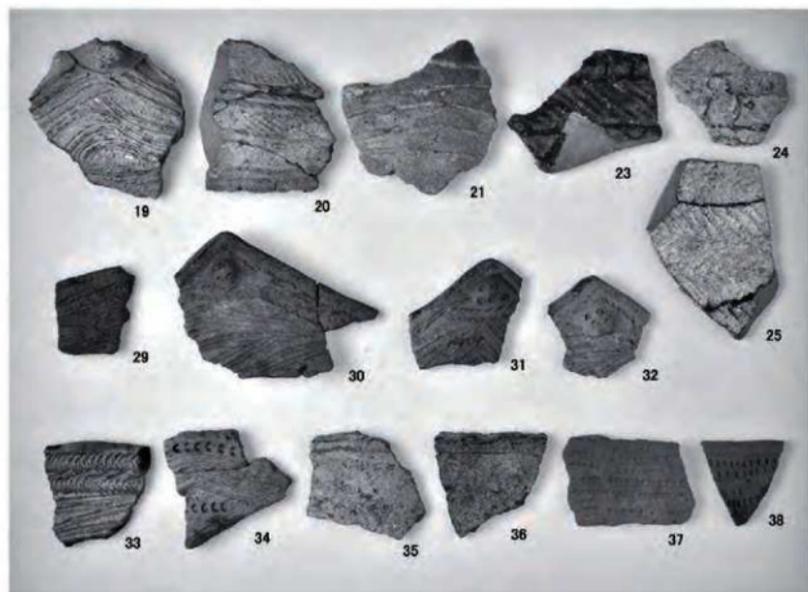
遺構出土遺物 1



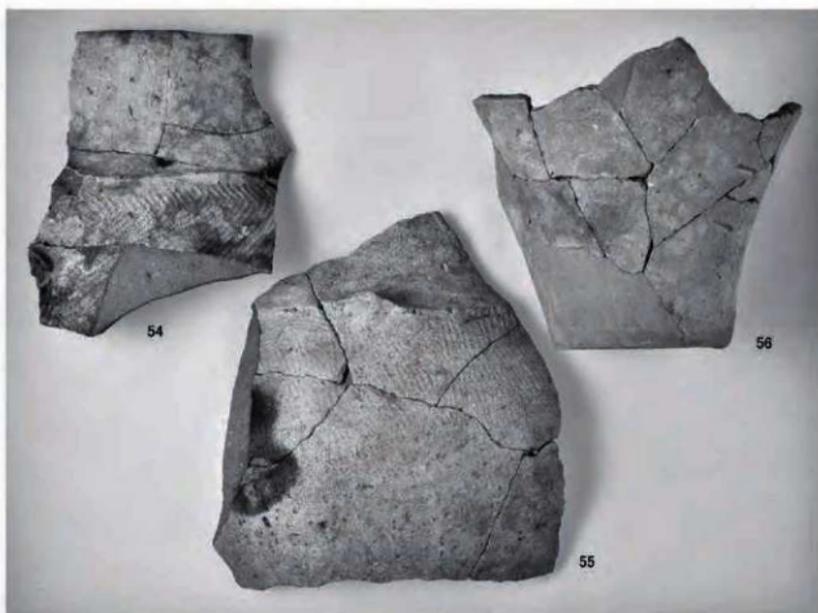
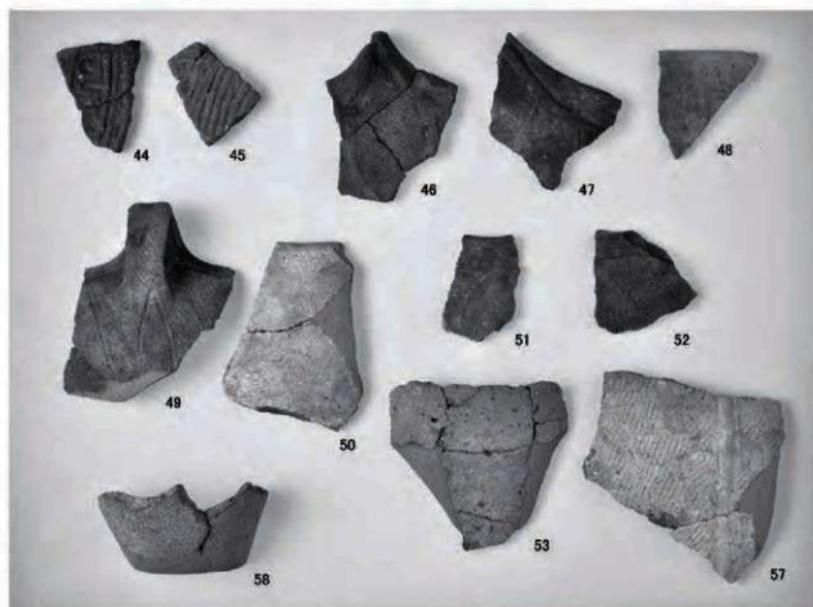
遺構出土遺物 2



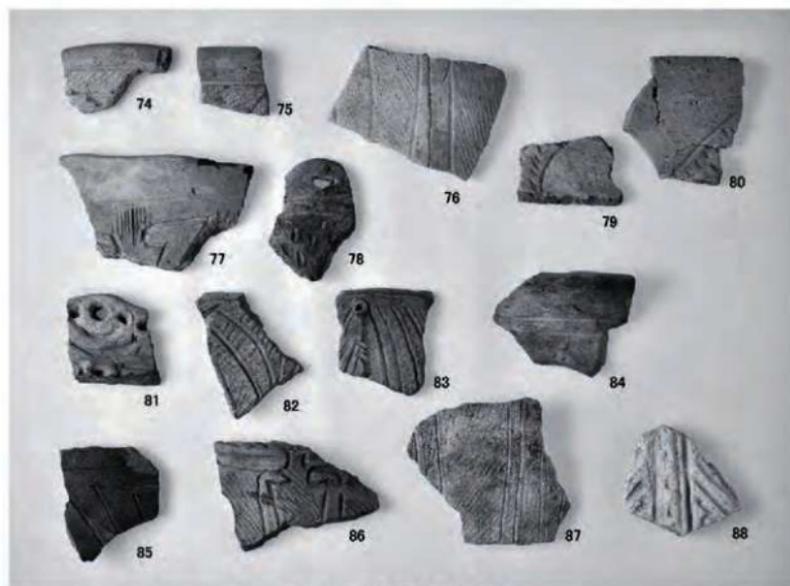
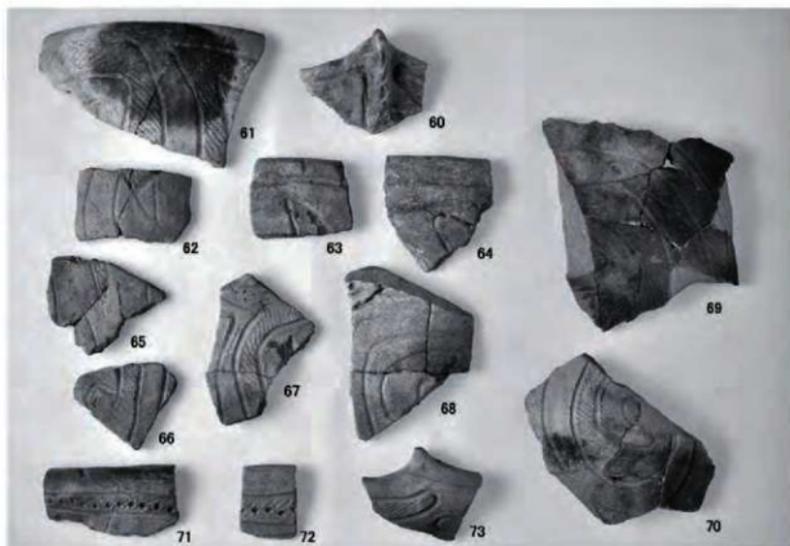
グリッド出土縄文土器 1

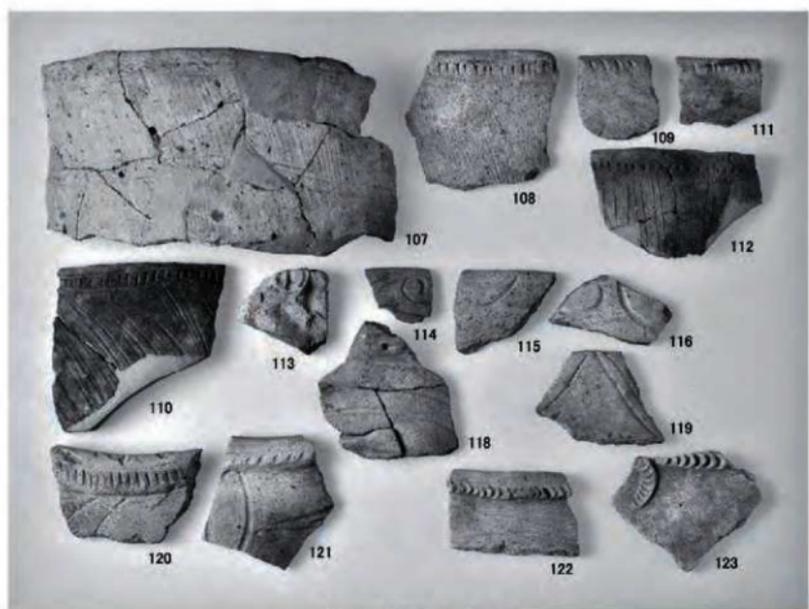
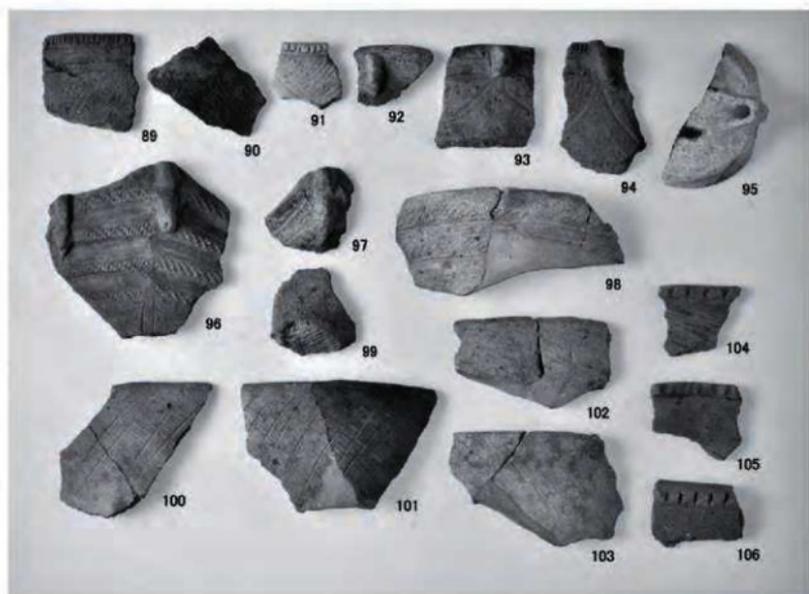


グリッド出土縄文土器 2



グリッド出土縄文土器3





グリッド出土縄文土器 5



1 ~ 16 : S=2/3  
17 ~ 35 : S=1/2







(4)SK029出土具・奈良時代・近世遺物



(20)SD001

(20)SD002

トレンチ0 (20)SD001-(20)SD002 西から



トレンチ0 (20)SD001 東から



トレンチ0 (20)SD002 東から



トレンチ0 (20)SD002 北から



宝永の火山灰

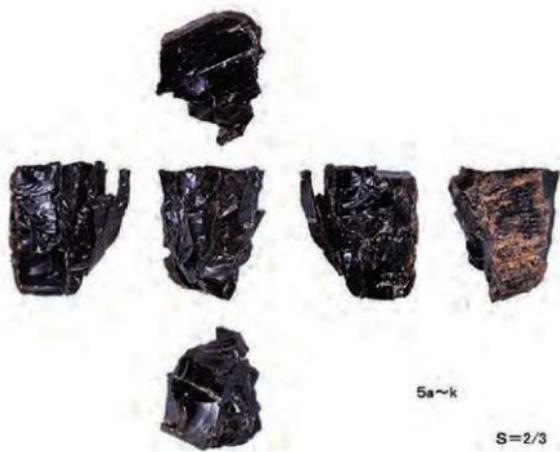
トレンチ0 (20)SD002 北西から



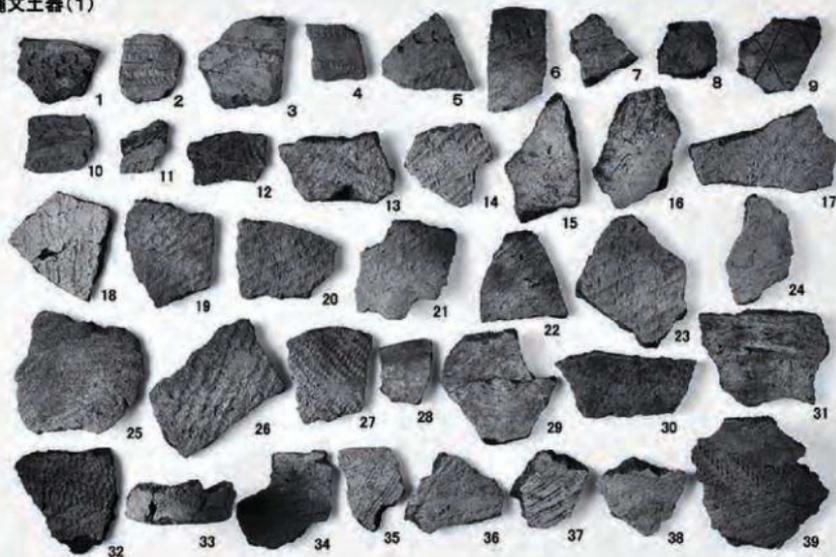
(20)SD003 北から



トレンチ0 (20)SD001 北東から



## 縄文土器(1)



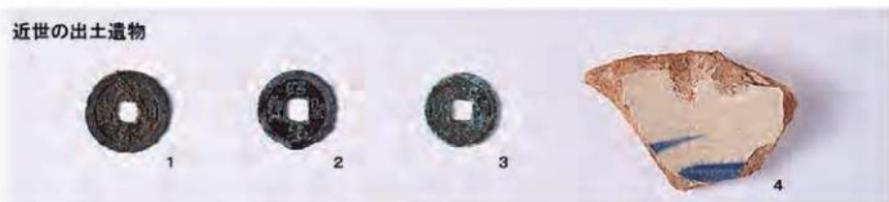
縄文土器(2)



縄文時代の石器



近世の出土遺物





(0)調査前風景



(1)Sk001 北から



(2)Sk001 北東から



(3)SD001 北東から



(4)S0001 第2地点 南東から



(5)SD001 北東から



(6)S0001 南から

東初石六丁目第 I 遺跡



十太夫第 I 遺跡



(石器類 S=2/3)

十太夫第1遺跡

図版9=1



SK001 南西から



SD001-SK002 北東から



SD001 北東から



SD002 1966グリッド 東から



SD002 20HH-00グリッド付近 南東から



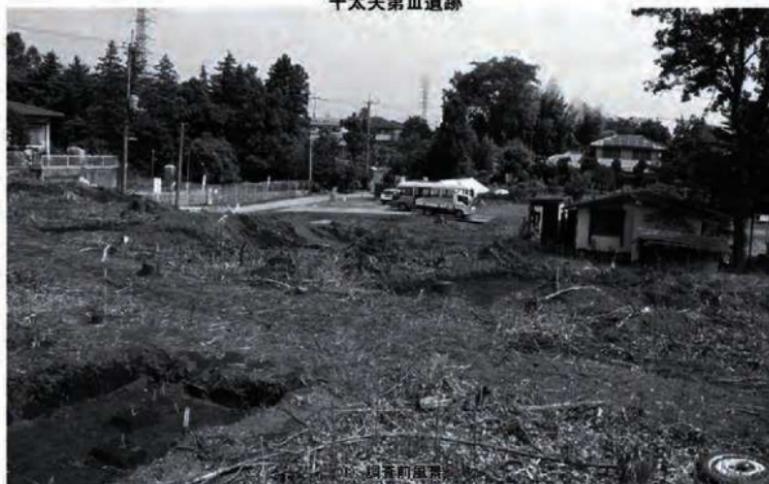
SD002 B-B' 東壁



SD002-SB001-SB004 北西から



SD002-SB004 南西から



② 調査前風景



⑦SK001 東から



⑧SK001 南西から



⑨SK001 西から



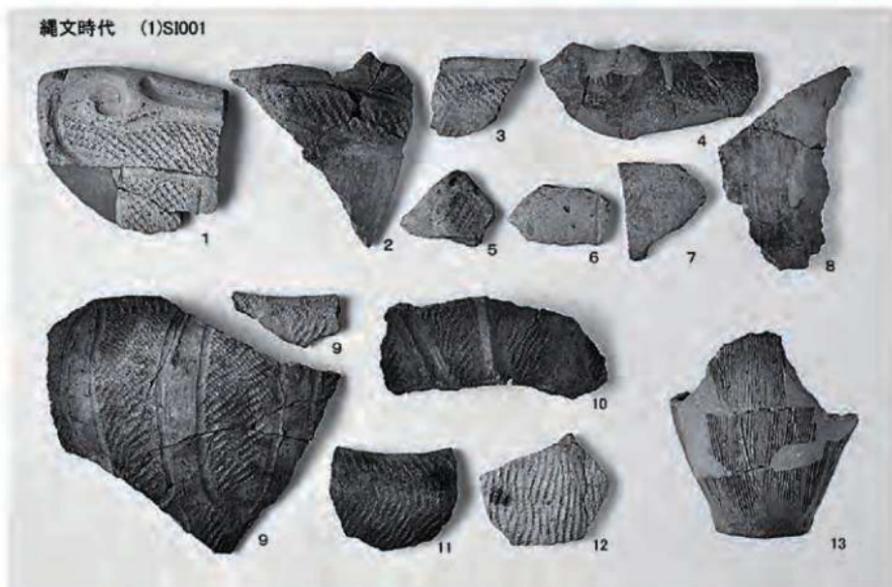
⑩SK001 北から

旧石器時代 単独出土石器



S=2/3

縄文時代 (1)SI001



(参考資料)

石器類 S=2/3

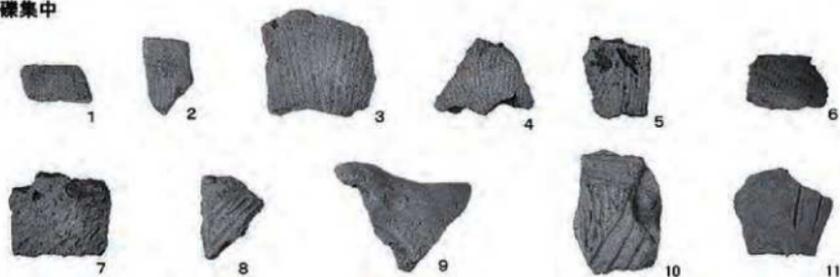
(3)SK001



(7)SK001



礫集中



礫集中出土礫

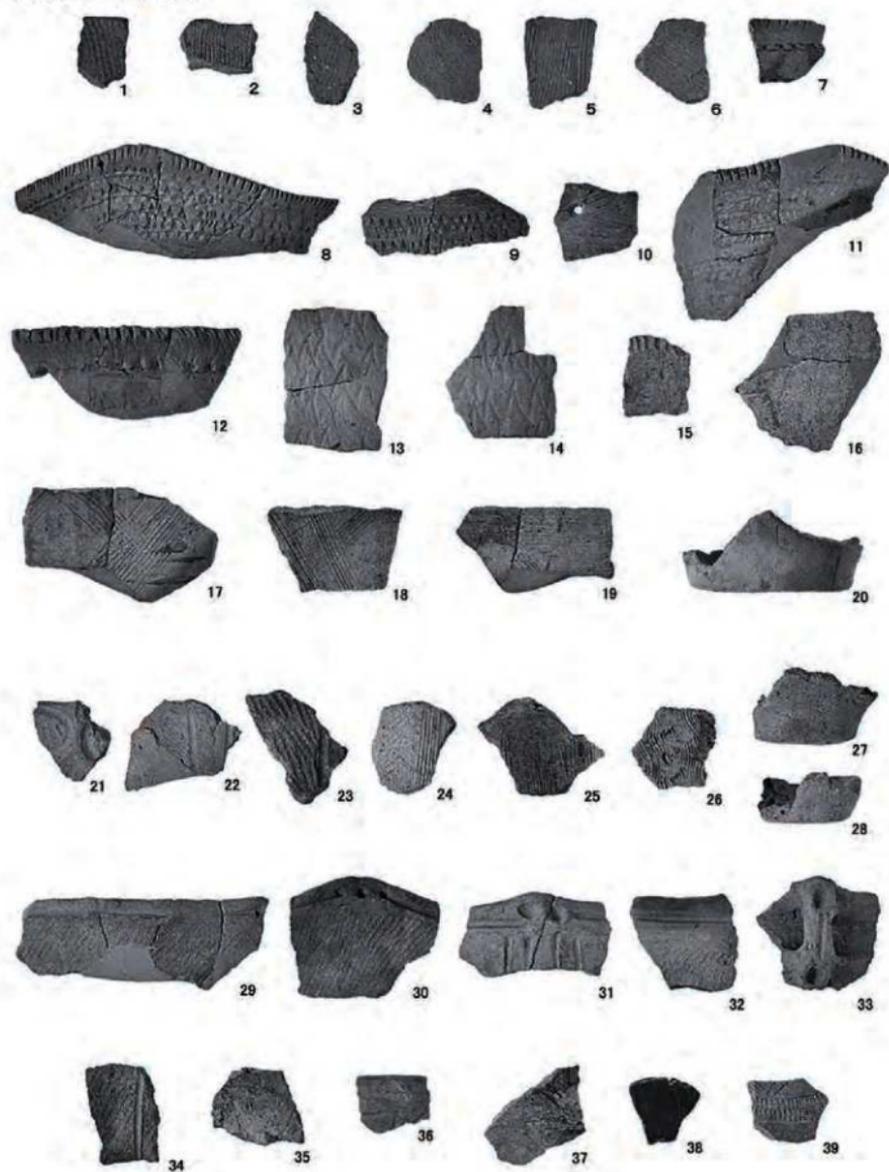


碟集中出土石器

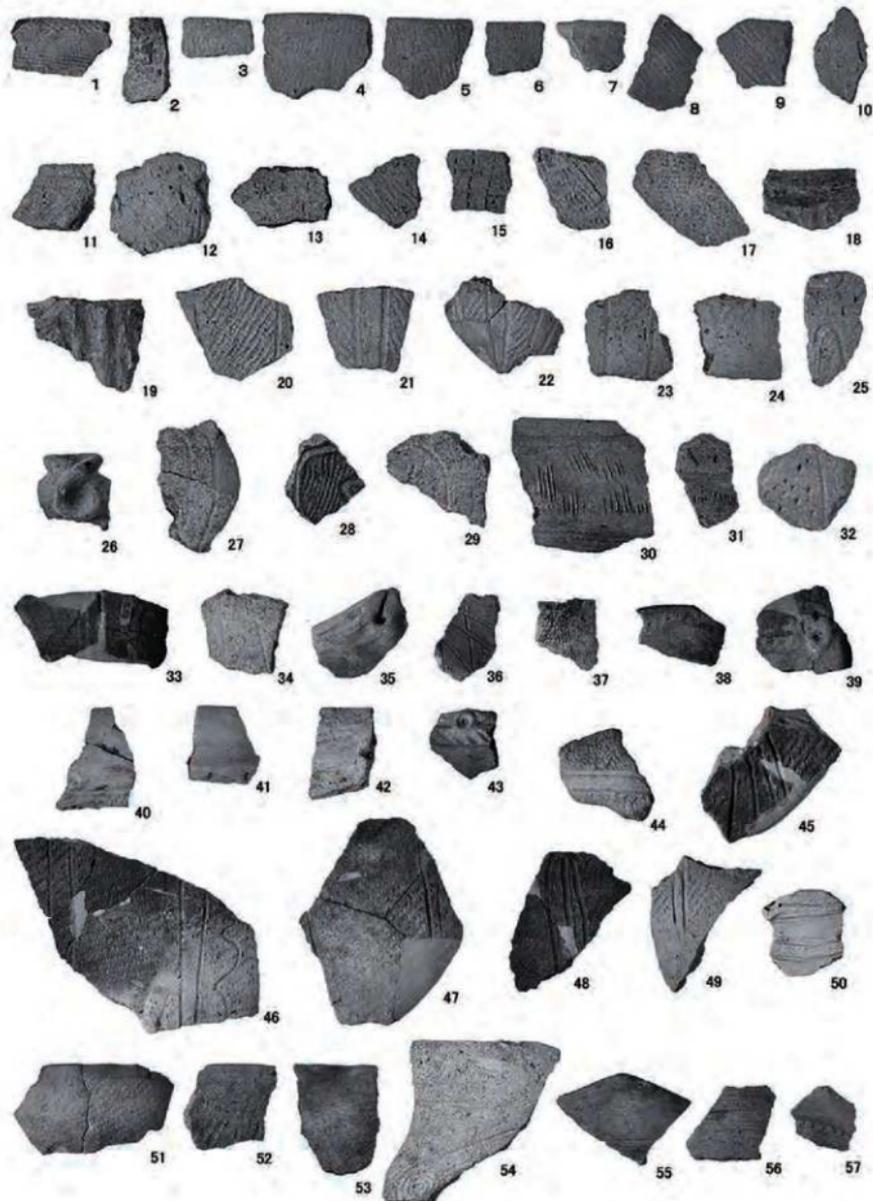
単独出土石器



グリッド出土土器 東側



グリッド出土土器 西側



## 報告書抄録

ふりがな	ながれやましんしがいちちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書							
副書名	流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡（上層）・市野谷向山遺跡（上層）・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第Ⅰ遺跡（上層）・十太夫第Ⅰ遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡							
巻次	7							
シリーズ名	公益財団法人千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第735集							
編著者名	森本和男・新田浩三・山岡磨由子・平井真紀子							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL043-424-4848							
発行年月日	西暦2015年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちのやいづくほいせき 市野谷芋久保遺跡 (1)～(13)・ (15)～(20)	ながれやましんしが 流山市市野谷 646-16ほか	12220	021	35度 51分 51秒	139度 55分 16秒	19971110 ～ 20121115	85.254	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査
いちのやなかじまいせき 市野谷中島遺跡 (1)～(8)	ながれやましんしが 流山市市野谷 693-1ほか	12220	055	35度 51分 49秒	139度 55分 23秒	200210001 ～ 20040326	15.678	
いちのやむこうやまいせき 市野谷向山遺跡 (1)～(7)	ながれやましんしが 流山市市野谷 494-2ほか	12220	036	35度 51分 40秒	139度 55分 29秒	19980825 ～ 20101216	32.215	
いちのやたてのいせき 市野谷立野遺跡 (1)～(17)	ながれやましんしが 流山市市野谷 772-2ほか	12220	022	35度 51分 45秒	139度 55分 42秒	19970316 ～ 20120705	48.204	
おおくほいせき 大久保遺跡 (1)～(10)	ながれやましんしが 流山市西初石 6丁目813-3ほか	12220	023	35度 51分 54秒	139度 55分 46秒	19980202 ～ 20050428	42.668	
にしほつしごちゆうめいせき 西初石五丁目遺跡 (18)～(20)	ながれやましんしが 流山市西初石 5丁目62-5ほか	12220	045	35度 52分 12秒	139度 55分 08秒	20060626 ～ 20110520	16,352.18	
ひがしほつしごちゆうめいせき 東初石六丁目第Ⅰ遺跡 (1)～(9)	ながれやましんしが 流山市東初石 6丁目186-13ほか	12220	057	35度 52分 10秒	139度 55分 52秒	20030128 ～ 20090213	19.094	
じゅうだうだいいちいせき 十太夫第Ⅰ遺跡 (1)～(6)	ながれやましんしが 流山市十太夫 186ほか	12220	049	35度 52分 15秒	139度 55分 50秒	20000301 ～ 20050228	9.994	
じゅうだうだうだいさんいせき 十太夫第Ⅲ遺跡 (1)～(7)	ながれやましんしが 流山市十太夫 2-2ほか	12220	062	35度 52分 04秒	139度 56分 06秒	20080616 ～ 20120531	16.992	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市野谷辛久保遺跡 (1)～(13)・ (15)～(20)	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点46か所、竊群16か所	ナイフ形石器、台形核石器、角錐状石器、局部磨製石斧、打製石斧、縄文土器・石器	旧石器時代は5枚の文化層が検出された。そのうち、X層上部～IX層最下部に生活面を持つ第1文化層は、環状ブロック群を形成している。
	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡5軒、陥穴22基、土坑33基、焼土遺構1基	縄文土器・石器	縄文時代前期黒浜式の土器を出した竪穴住居跡、近世小金牧の一部である野馬土手、馬骨を伴ったシシ穴等が確認された。
	牧	近世	溝1条、野馬堀・土手2条、シシ穴9基、火葬竈1基、土坑6基	銭貨、泥メッコ、馬骨	
市野谷中島遺跡 (1)～(8)	集落跡	縄文時代	埋裏炉1基、土坑2基	縄文土器・石器	縄文時代前期黒浜式を使用した埋裏炉、8世紀後半のくわ小規模な集落跡、中世～近世に属すると思われる多数の溝が検出された。
	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡3軒、土坑1基	土師器、須恵器、土製支脚	
	集落跡	中世～近世	溝状遺構10条	陶器片	
市野谷向山遺跡 (1)～(7)	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡3軒、土坑7基	縄文土器・石器、三角埴形土製品、土器片、土製円盤	縄文時代前期黒浜期と中期加賀川EⅡ期、古墳時代中期に集落が営まれ、特に古墳時代は近隣の同時代の遺跡との関連が窺える。
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡8軒	土師器、石製模造品、管状土錘、土玉、軽石	平安時代の竪穴住居跡が台地奥から単独で検出されたほか、浅い谷に掛かる溝が1条確認された。
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡1軒、土坑2基	土師器、磁石	
	集落跡	中世～近世	焼土遺構1基、溝状遺構1条	焙烙	
	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点1か所	ナイフ形石器	
市野谷立野遺跡 (1)～(17)	包蔵地	旧石器時代		尖頭器・ナイフ形石器・細石刃	旧石器時代の石器が単独で18点出土した。
	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡7軒、焼土遺構・炉12基、陥穴12基、土坑25基、溝1条、竊群8か所	縄文土器・石器、土製耳飾、土器片	大規模な竊群（早期～前期）が検出された。
	牧	近世	野馬堀2条、シシ穴5基	銭貨、陶磁器	近世小金牧の一部である野馬堀が、遺跡周囲を廻るものが確認された。
大久保遺跡 (1)～(10)	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡3軒、炉跡・焼土遺構3基、貯蔵穴1基、陥穴15基、土坑9基	縄文土器・石器、貝殻	称名寺式の深鉢を埋設した竪穴住居跡、貝殻を伴った土坑、押出型ポイントなどが検出された。
	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡1軒	土師器、須恵器、磁石	遺跡南端には近世の野馬土手・堀が廻る。
	牧	近世	井戸1基、野馬土手1条、野馬堀3条	陶器、内耳鍋、銭貨	
西初石五丁目遺跡 (18)～(20)	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点1か所	ナイフ形石器・石刃・石核	IX層を中心に石器群の分布がみられた。
	集落跡	縄文時代	土坑3基	縄文土器・石器	縄文時代の出土土器は黒浜式を主体とする。
	牧	近世	野馬土手・堀2条、溝1条、シシ穴3基	陶器、銭貨	近世の遺構では野馬土手の一部とシシ穴を検出した。
東初石六丁目第I遺跡 (1)～(9)	集落跡	縄文時代	陥穴1基	縄文土器・石器	縄文時代中期後半～晩期の土器や打製石斧が出土した。
	包蔵地	近世	溝1条		
十太夫第I遺跡 (1)～(6)	集落跡	縄文時代	土坑1基、陥穴1基	縄文土器・石器	縄文時代早期～後期の土器片が出土したほか、土坑跡を伴う近世の溝が検出された。
	包蔵地	近世	溝4条		
十太夫第Ⅲ遺跡 (1)～(7)	包蔵地	旧石器時代		ナイフ形石器・石核	旧石器時代の石器が単独で3点出土したほか、縄文時代中期の竪穴住居跡や近世の溝が検出された。
	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡1軒、土坑4基、竊集中1基	縄文土器・石器	
	包蔵地	近世	溝2条		
要約	<p>今回報告する9遺跡は、江戸川支流の源流域を囲むように所在している。時代ごとに調査成果を概観すると、旧石器時代では、市野谷辛久保遺跡と西初石五丁目遺跡から良好な資料が得られた。市野谷辛久保遺跡の第1文化層は、X層上部～IX層最下部に生活面を持つ環状ブロック群が形成されていた。</p> <p>縄文時代の遺構・遺物は全ての遺跡で見られる。前期黒浜式を主体として、晩期までの遺物が断片的に出土しているが、遺構の数は希薄である。その中にあって市野谷向山遺跡の三角埴形土製品や大久保遺跡の有蓋石器（押出型ポイント）などは、他地域との交流が窺える遺物として注目される。また、市野谷立野遺跡では、蛇行する坂川に近接する遺跡北西部において、大規模な竊群（早期～前期）が検出されている。</p> <p>古墳時代は市野谷向山遺跡から、市野谷宮尻遺跡や市野谷入台遺跡に続く中期の集落跡が検出されている。</p> <p>奈良・平安時代の竪穴住居跡は単独あるいはごく小規模な集落のみで、単発的である。近世、この地域は小金牧の一つである上野牧に属しており、市野谷辛久保遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡・西初石五丁目遺跡から牧に関連する野馬土手・堀やシシ穴状遺構、溝状遺構などが検出された。</p>				

千葉県教育振興財団調査報告第735集

### 流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書7

一流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡（上層）・  
市野谷向山遺跡（上層）・市野谷立野遺跡・大久保遺跡（上層）・  
西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第1遺跡（上層）・  
十太夫第1遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－  
（第2分冊）

---

平成27年3月25日発行

編 集	公益財団法人	千葉県教育振興財団
発 行	独立行政法人	都市再生機構 首都圏ニュータウン本部 東京都新宿区西新宿6-5-1
	公益財団法人	千葉県教育振興財団 千葉県四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	朝日印刷工業株式会社	群馬県前橋市元総社町67

---